明治天皇御集
昭憲皇太后御集
明倫歌集
勤王諸家詩歌集

文學博士 物集高見編

新註

皇學叢書

第九巻

廣文庫刊行會

新註皇學叢書第九卷題辭

宮內大臣　法學博士　一木喜德郎閣下

皇太后宮大夫兼御歌所々長　子爵　入江爲守閣下

國民新聞社長　德富猪一郎先生

文以顯解脈絡
貴通詳瞭密巨
細畢舉

為鶴樂先生
入住為也書

地

菅原正敬恭書

新註
皇學叢書第九卷目次

明治天皇御集に就いて……………………一
昭憲皇太后御集に就いて…………………五
明倫歌集に就いて…………………………九
勤王諸家詩歌集に就いて…………………一一

明治天皇御集……………………一—三六八
昭憲皇太后御集…………………三六九—四三二
明倫歌集…………………………四三三—六二〇
勤王諸家詩歌集…………………六二一—八六八
索引………………………………一—九九

明治天皇御集に就いて

代々木の空永へに瑞雲靉靆として、新に制定せられたる明治節の、時維れ菊花の薫り彌高きを拜しては、吾等國民は今更に　明治天皇の高大なる御懿德の下にひれ伏しつゝ、讚歎景仰の思を遏め得ないのである。あはれ申すも畏き御事ながら、允文允武不世出の英主にてましまし、わが　明治天皇は、所謂國步艱難を極めたる御治世の間に於て、終始御身を以て國家とせさせられ、只管に精勵國事に盡し給ひ、以て新日本帝國を建設し給ふ。其の御功績、其の御高德、之を仰げば愈々高く、之を鑽れば愈々堅しとや申すべきか。爾來星霜移り、世は滔々として危きに近づかんとするの秋、日月と共に吾等の上に輝き洽る大帝の御德の下に、翕然として集ふ赤子の眞情も亦、故なしとせぬことゝ思はれるのである

明治天皇は御一面又わが國風なる和歌の道に御志深く、且つ御堪能にあらせられ、畏くも其の豐かに大いなる大御心よりして、吾等國民の精神上不朽の教、永久の糧たるべき幾多の作品を遺し給つたことは、今更言ふ迄もなく世を擧げて熟知しまつる所である。

嗚呼帝王の詩人――昔紀貫之が「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛きもののふの心をも慰むるは歌なり」と強調した和歌に對する燃ゆるが如き強

い信念を、彼の米國大統領ルーズヴェルト氏を感激せしめて、躍起つて日露講和仲裁の勞をとらしめる
に至つた御製

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

に至つて、最も力強く表現せしめられたものであると申してもよいかも知れない。嗚呼一視同仁、此の御仁
慈の御心に接しては何者か感激の涙に咽ばないものが有らうか。

げに和歌は吾國の歷史と共に起り、歷史に伴つて榮え、皇室とは最も關係深く、歷代の帝王にも寔多い
歌仙がましましたが、其の拾萬首といふ量に於て、又其の御秀逸に富ませ給ふ質に於て、明治天皇は遙
かに卓絶せる地位に在たせ給ふことは、誰もにも明かなることである。

年々に思ひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり

長くも國事多端の際に於て、一面雄激なる軍國の萬機を御親裁あらせられながら、一面には斯く絢爛たる御
優しき御心の華を自在に御開き遊ばされしことは、實に奇蹟的なる事實とも申すべく、如何に雄々しくも
優にやさしき御事であらうぞ。今試みに御集を繙きまつるに

思ふことうちつけにいふ幼子の言葉はやがて歌にぞありける

天皇は眞情の流露をもつて和歌の理想となし給ひ、且つ其の仁慈大量の大御心より迸り出でゝ、或は敬神
となり、或は慈民となり、或は訓誡に修養に、其の深き御意を詠じ給ふを拜誦しては、吾等國民の心にと

つて、より大に、より價値高き經典の他に存すとだにも思はれぬ程。讚美措く能はぬ所なのである。

足びきの山の端いづる月影に大うなばらの波を見るかな

家なしと思ふ方にも煙火のかげ見えそめて日は暮れにけり

草雲雀なきもぞやむと秋の夜の月なき窓もさゝれざりけり

淺みどり澄みわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな

さしのぼる朝日の如くさわやかにもたまほしきは心なりけり

殊に戰時の御製に國民の上を思し給ひ、田園の御製に下民の生活を案じ給ふの御製を拜誦しては、平時も臣民の上を離れさせ給はざりし大御心の甚さも伺はれて、吾民われ、今更乍ら感淚の滂沱たるを禁じ得ないのである。

子等は皆いくさのにはに出ではてゝ翁やひとり山田もるらむ

夢さめてまづこそ思へいくさ人むかひし方のたよりいかにと

國を思ふ道に二つはなかりけり軍の庭に立つも立たぬも

いかならむ藥あたへて國の爲めいたでおひたる人をすくはむ

現人神明治天皇。げに神ながら神を祭らしゝすめらふことの御製には。たゞ人の伺ひまつるべからざる御心境を拜し奉るのである。

わが國は神のすゑなり神まつる昔の手ぶり忘るなよゆめ

ちはやぶる神ぞしるらむ民の爲世を安かれと祈るこゝろは

とこしへに民やすかれと祈るなるわが世を守れ伊勢の大神

今こそ千早振る神皇道の聲なしく、永へにゆるぎなきわが帝國のいしづゑとなり給ひしわが　明治天皇——謹んで御製を拜誦すれば唯々その雄々しくも高く、穩かに廣やかなる御調べに自らひき入れられて、不知不識の間に偉大なる帝王の御成德に薫化せしめられるを覺えざるを得ないのである。げにもこれ御獨自の境地、高貴博大なる御人格の發露とぞ申すべく、天皇が歌人としての御特質とぞ稱へまつるべきであらう。

あはれ永へにわが　明治天皇の御聖德を景仰し、御遺業を服膺することによつてのみ、吾等はわが日本帝國の、常磐に堅磐にゆるぎなきうまし國たるべきを信じて疑はないのである。

茲に謹んで御集を皇學叢書の中に拜載し奉り、頭註を施し併せて索引を附す、蓋し思ふ所淺きに非ず。願くば萬民拜誦の機を多からしめ、便安を計り、依つて以て國民道德の涵養に資し、聖恩の萬一に報い奉らむの微志に外ならないのである。

尙此の書一に宮内省藏版文部省發行「明治天皇御集」を底本とす。頭註及び校正等は凡て最も愼重を致

したけれども、若し尙粗漏の點の有らば、恐懼之に過ぎず、版を重ねん折を待つて愼んで改訂仕るべき所存である。

昭憲皇太后御集に就いて

みがかずば玉も鏡も何かせむまなびの道もかくこそありけれ

げに「金剛石」「水は器」等の唱歌に至る迄、吾等國民は常々に口誦みまつりて修養の糧ともなし。われ昭憲皇太后の、今更に申すも畏き御坤德の崇高さを仰ぎ奉らぬはないのである。顧ればかの明治は何といふ輝かしくも美しい大御代であつた事ぞ。上に東西の統率者を通じてひとり比儔を絶せる名君 明治天皇と共に、萬物の御母として、あはれ御仁慈の御德に富ませ給ひし、昭憲皇太后を並び戴き奉るを得たことまでも、大御代に仕へまつりし臣民は、輝かしい詩をさへ有たずには居られないのである。

謹んで按ずるに嘉永三年四月十七日、京都一條烏丸通東入一條家の桃花殿に御降誕ましまされた昭憲皇太后は、御幼少の御砌より、やがては九重の雲深きあたりに御座遊ばさるべき氣高さを拜させられ、吾々は數々の秀でし御逸事を洩れ承る事が出來るのである。げに御入內後は國事艱難の際、宸襟安らけき御間とてなかりし明治天皇を助け奉つて、その憂苦をわかたせられ、遂に大業を成させ給ひ、且つ民草の心を心とし給へる御優しき國母の君の御惠みには、吾人草誰一人として感涙を禁め得なかつたことは——否外國の

人士に至る迄、その御坤徳を景仰讃歎しまつるの聲を惜しまなかつたことは、今茲に事新しく申す迄もないのである。

その帝を想ひ給ふ厚き御至情に至つては、或は御歌に、或は御隨筆に窺ひ奉ることが出來る。茲に「萩の庭の野分」の一節を引かして載かう。

朝霧はひるまはさしもなかりしを、夕の俄かにふきしきりつゝ、いともすさまじかりけるほどに雨いたく降り出でてはほとりに近くかたりあふ人の聲だにきゝわかぬまでになりぬ。閨に入る頃はたゞ雨のおとのみ聞えしを、夜ふかくなるまゝに雷さへ鳴りはたゝきて夢見ることも思ひ絶ゆるばかりなり。稲妻のきらめきわたるもいとけうとし。明がたには雨はをやみぬれど風はなほしうふきいでゝ、宮のうちもゆるぐばかりなるにいとゞ目もあはず。上には民の爲とてかしこくも遠き境にいでましたるほどなればいかなる行宮にましましてこの風の音に御心をなやましたまふらむ——。

之は明治九年六月二日、帝東北行幸の途に上らせ給つた時、宮は千住驛迄御見送り遊ばされたが、そのいでましの中の烈しい嵐の夜、宮には夜もすがら大帝の上を案じ給うた時の御作である。又十一年の夏、帝北越に行幸遊ばされた節、堪へ難い稀なる暑さの日が續いた時にも、宮には一言も暑しと仰せられず、只管帝の御上をのみ案じ給つたのには側近の人々も只々畏れ多く思ひ奉つたといふ。

大宮のうちにありても暑き日をいかなる山か君は越ゆらむ

この御詠を拝誦しまつるとき、自づから涙ぐましくならざるを得ないのである。

帝との御仲らひはわけて御親しく御睦しく渡らせられたが、而も帝に仕へまつるには君臣の禮をとらせ給ひ、如何なる場合にもおくづし遊ばされず、御前では尊き御身ながら褥をも敷かせ給はなかつたといふ。又御晩年は御身勝れさせ給はず、多く沼津、葉山の御用邸に御靜養遊ばされたが、勅使の伺はせらるゝ事があれば、座布團よりすさられ、兩手をつかせ給ひて聖旨を御聞きになられ、何時、聖上の上に及ぶ場合も亦同じく、御寢あらせらるゝのは、宮中よりの御電話にて、帝御氣色麗はしく御寢遊ばされたと承つてからの後に在はしたといふを拜しても、皇太后の御性行の一斑を拜承する事が出來るのである。

みそのふは雪寒けれどすくよかに君ましますと聞くぞうれしき

たまものゝその品々に大君のふかきみこゝろこもるかしこさ

時ならぬ雪ときくにもたれこめてまします君をおもひやるかな

眞に畏くも昭憲皇太后には、御躬ら吾等民草の常に則るべき大典を明かに示し給つたと申すべきであらう。且つ西南の役を初め、國を賭せる兩度の大戰の砌、宮中に繃帯製作所を設けられ、尊き御身を以てして看護婦と同じ白衣を召され、朝まだきより夜更くる迄の御製作にいそしまれた慈仁の御心は、將士をして起たしむべく、皇軍激勵して如何ばかり士氣を振ひ起した事であらう。

神垣に涙たむけてをがむらしかへるをまちし親も妻子も

みいくさの道につくしゝまこともて猶ほ國まもれちよろづの神

英靈、遺族をも慰いてはくぞ。

昭憲皇太后は御幼少の御時より和歌の道に勝れたる御才能を表はされ給うたが、初め近衞忠煕、次いで三條西季知の教を受け給ひ、明治十年以後は高崎正風に就いて更にその奥秘を極めさせられた。明治天皇と並んで、げにあまたの優秀なる御詠を遺し給つた事は吾人の熟知しまつる所である。御詠み口は清き流れの如く、いかなる難題をもすら／＼と詠み遂げられた。實に御歌數明治十二年より四十五年迄で三萬六千餘首と承る。歴代の國母の中にはもとより歌に秀でた御方もおはしたけれども、わが昭憲皇太后の如く、國母の威嚴と仁慈とを備へさせ給うた優秀なる御作の數あまたあらせられた御方は、類あらぬ御事と存じ奉るのである。花鳥風月も只美しきのみに非ず自然の心に徹し給ひ、更に又深く民草の生活に御心を寄せられ、雲の上なる高貴の御身を以て下ざまの事も通じ給へるは實にさばかりにおはせられた。吾等國民は日々御作を拜誦して修養の糧ともし、御高徳を仰ぎ、御仁慈の御心を偲びまつらずには居られないのである。

曩に宮內省に於て御集の編纂をなし、刊行して廣く天下に頒布す。今茲にこれを底本とし、頭註、索引を附して皇學叢書に再び收載する所以は、蓋しこの趣旨を體し、併せて聖恩に報いまつらんと庶幾ふに外ならないのである。

明倫歌集に就いて

烈公徳川齊昭は幼名を敬三郎といひ、治紀の第三子で寛政十二年三月、江戸小石川に生れた。夙に文學和歌を好み、又鐵砲の術にも通じ英邁の譽が高かつた。文政十二年兄中納言齊脩の薨後を承けて封を襲ぎ、從三位に叙し左近衛權中將に任せられ、尋で參議に任じ權中納言に進んだ。常に心を治事に瘁し、種々改革する所があつたのみならず、又弘道館を建てゝ文武を奬勵し、經業射御書數砲術醫業までを課して人材養成の基礎を開いた。父祖を承けて勤王の志篤く、愛國の念深く、朝廷の爲め、幕府の爲め、士庶の爲めに謀れる、文武の治績は甚だ見るべきものがあり、幕末多難の際に於て尊皇攘夷の大首唱者として、如何に世に重視せられたかは、今更事新しく縷述するまでもないことであらう。

其の編纂にかゝる明倫歌集も、即ち公の國體を尊び、國教を重んじ、如何に子弟の教育に留意せられたかを覗ひ得て餘りあるのである。嘉永四年辛亥と誌されたその自序にも明かなる如く、古來論議のみ喧噪しき支那の如く、言擧げはしないけれども、

神こそは野をも山をもつくりおけ人に誠の道をふめとて

皇みかどの神ながら治しめすわが國には、青人草の末に至る迄、神の教のまに／＼皆すなほなれたる直き心を有へて、彼の五倫といひ五常といふも、其の中に籠り備つて居ればこそ、わが大御代は平かにおだしく治り

求るを得た。

而して、げに「大和歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける。世の中にある人ことわざ繁きものなれば、心に思ふ事見るもの聞くものにつけていひ出せるなり」との貫之の言葉にも著く、世々につけ時につけて、眞心を表はして歌ひと歌ひ詠みと詠みし數々の歌は、時代に聲調美しき聲すくふひをしない間に、その心のおのづからに言葉の花に匂ひ出でゝ、打ち聞く者の心を強く摶たずには措かないのである。

公はそれ等の歌をおほよそに見過されんを惜しみ、人々に命じて、上は玉座の裡より洩るゝ貴きをも憚らず、下は賤土に交る卑しきをも捨てずに、廣く拾ひ集められ、既に上して普く世に廣められたのも、頓ては次々に此の後もつゞけて、人の心の醇くしかりし古代に復し、御國の光いよ〳〵四方に照り輝き、竟には外つ國人にまでわが神國の道を論すはしともならん事を希はれたのである。

即ち明倫歌集、卷を分つこと十。――君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友、神祇、國體、文教、武歌、拾遺――歌數凡そ一千有餘首、古來神を敬ひ國を愛し、義を知り情を辨へた我等の祖先の、眞心の底より偽らず飾らず歌ひ擧げられた之等の歌は、幾歳遙かに隔たる今の世に於ても、日々として直ちに讀む者の心に迫り、踏み違ひ易き人倫におのづからなる明らけき燈光として、吾等を導かずには措かないのである。精神修養の歌集として、本邦唯一のものである。

今茲に、文久二年上梓のものを底本とし、能ふ限り原歌集と對校して、其の誤謬を正し、難解の古語、枕詞、序詞、名所等はつとめて詳細に頭註を施した。明倫歌集研究の用書ともなり、精神修養の資料ともならんことを願ふ次第である。

尚卷末に初句索引を附して、聊か披閲の便にも供することとした。

勤王諸家詩歌集に就いて

「大日本は神國なり」とは、啻に北畠親房卿の一家言ではない。茫々三千年來、わが國民の臟裏に滲み込んで、その血を湧かしその氣を昂はせた一の大なる號喚でなくて何であらう。譬へ史家の所謂史的事實に非ずとするも、我が建國の事實を初めとして、次いで起る往古の一事一物悉くこの神聖に根源しないもの丶ないのは、わが國體の構成が明かなる事實と云はなければならないであらう。

わが國はあまてる神の末なれば日の本としもいふにぞありける

諾冉二神天の浮橋に國の基を樹て給ひ、天照大神の赫々として太陽の宇宙を照す如く、天上天下を知ろしめすべき事を定め給うて以來、君位の尊嚴はこの國土創成の時に一定せりといふべきである。敬神の念はわが國體の精華を無限に維持すべき一大要素であつて、國家創成の始に復り、その本を思ふの國民精神に外ならない。即ち神聖の德業を敬節すると同時に、必然的に君位の尊嚴を會得するものである。敬神と

尊王とは二にして一なのである。

敬神尊王は吾人祖先の信念の裡に明瞭に存在する事が出來る。中世王室衰へて政權の武門に歸するや、只將軍あるを知つて天子あるを知らぬ武士も育つたかも知らぬけれども、彼等も決して祖神を疑ひはしなかつた。この敬神の武士が一度皇國に入り皇城を拜し、その神の御裔なる一天萬乘の君を拜するに及んでは、尊王の情を起さざらんとしても得べからざる所で、かく天下萬民の心は遂に敬神の念を忘れなかつたのは、わが皇基萬古に嚴として搖ぎなきの所以である。

天の下國は多けど神ろぎの生みなしませるおほやしまぐに

敬神の念は常に神國を愛するの至情を伴ふ。豐葦原千五百秋瑞穗國とか、細戈千足國とかの異稱にても著きが如く、國の精氣は高嶺と靈なる櫻花と現し、士氣は凝つて百錬の鐵となる。この衣食足る瑞穗の國は、神人共に愛さずには措けない所である。古來神后の征韓、元寇の國難の如く、國家大事の際は常に神靈加護の傳說もあつて、近世尊攘論の盛んとなるや當時の志士は神州を夷狄の穢に汚す勿れと絶叫した。

斯くして常に皇位は至嚴、名分は確定してゐる。永く汚隆なしとせざれども、正氣常に光を放ち、天に二日なく地に二王なきの實が明かにされ來つたのである。

政權武門に移つてからは、この明かなるべき筈の君臣の名實が伴はざるに至つた。近世名分論盛んとなつて、大政一途に出づべきを云ふ者の多くなつたのも自然の數であつて、天下の志士悉く尊王論を掲げて

直接幕府に迫り、斯くて王政復古は成立した。中世以來幾多の事變を經て、皇位の尊嚴は眞に古に復つた。而してその間に處して家を忘れ身を殺して勤王の誠を盡した忠臣烈士は蓋し尠なからざるものである。

道鏡を挫いた清麿の誠忠は古今の龜鑑たるは云ふ迄もなく、かの建武延元の際に於ける楠木氏新田氏名和氏菊池氏の盡忠は共に感ずるに餘りあるものである。殊に楠公は水戸の學者仰いで以て人臣の標準とした。義公湊川に建碑して「嗚呼忠臣楠子之墓」の八字を刻してからは、後の英雄烈士の此に徘徊して涕涙去る事能はなかつた者、そも幾許であつた事か。實に楠公の誠忠の後人を感動せしめたことは無限大といふべきである。幾多の小楠公の續出が遂に國民尊王の精神を永久に維持し來つたもので、殊に維新志士の間に於てその甚しきを見るのである。

祖神を敬し皇室を尊び、細戈千足の國なる祖國を愛するの念凝つてかの空前の大業王政復古を實現するに至り、神國の精華は燦として宇内に輝くに至つた。

彼等國を憂へ粉骨碎身、王事に盡瘁せる人々の遺詠を繙けば、その赤誠の發露、覺えず衿を正さしめられ、その苦衷吾知らず涙の双頬を傳ふを禁め得ない。眞に頑夫も廉に、懦夫をも立たしめずには措かないのである。

今茲に古來の勤王詩家の詩歌を集めようとす。儒教等に傳つて大義の大道を說き、彼の土の忠勇義烈の士の遺作吾が志士の心に共鳴する所多かりしにも由るか、特に漢詩は最も廣く士人間に流行して、その後

世に傳誦せられてゐるものも少くない。從つて古來勤王の士の作詩を悉く網羅するは容易ならぬ業である許りでなく、限りある紙數の許す所ではない。依つて茲には主として名聲世に隱れなき人の作に力を濺ぐ事にした爲に。維新勤王の夥しき志士等に於ては、之を割愛するを餘儀なくせられた者も多かつた。尙殊更に勤王の士ならずとも、國體を詠じ神州を讃へ、或は千古の秀峰富岳を仰いで其[illegible]を喜び。或は忠士烈婦の緒に燃ゆる赤誠を托し、或は忠臣の墳墓、興亡の遺跡に熱い涙を濺ぎし等、讀んで以て士道修養に力あるものは、敢て載錄する事とした。

和歌に於ては殊に然りで、上下三千載昔に忠節を捧げた人々——この人々の詠じた歌を悉く網羅するは殆ど不可能な事である。從つて此には主として尊王の大義を唱へ、且つ王事に盡瘁せる人々の、忠君愛國の至情を詠へるを擇り。單なる花鳥風月の吟詠は之を避けた。但し人によつてその王事國事に關する作の傳はらないものは、其れ等も蒐錄して之を補ふ事とした。

而して江戸幕府以前に於ける勤王諸家の作歌は、多く既刊歌書に集錄されてゐるので、茲には特に德川末期から維新の際に於ける勤王の歌を蒐集する事に努力した。即ち、興風集、月後集、忠魂和歌集、殉難和歌集、四英獄窓唱和集、奥津城集、風雲遺草、行餘集、殉國百人一首、彰功帖、殉難前草、同後草、同續草、同遺草、同拾遺、精神一注、維新留芳、愛國偉績、同續、愛國叢書、振氣篇、志士小傳、尊王赤衷

錄、有節錄、鳴世餘音、大日本中興先覺志、黃門之小補、風雲際會緒傳、慨士遺音、義擧錄、殉難士傳、勤王烈士傳、慷慨家列傳、維新史料、維新志士遺芳帖、俊采擇錄、氣吹乃狹霧、勤王雜記等の諸書を始め、得らるゝ限り普く當時の志士を網羅して、或はその家集に日記、記錄等に就いても之を蒐集したものである。從つて其の歌の中には、措辭成句等の整はざるものも尠くないが、本篇は歌の巧拙を論ずべきものでないから、之又已むを得ぬ事である。

近時學風輕佻、世に行はるゝ詩も國文字のみ多くして、士氣の日に軟情に流るゝの時に當り、本集亦その頭註と相俟つて、國民精神涵養の一助たるを得ば、以て足れりとするものである。

本集に收めた漢詩及び和歌の排列は、大體年代順によることとしたが、幕末短時日、烈士濟々の際の如きに於ては、必ずしも所詠順にのみよらなかつたもののある事は諒として貰ひたい。尙讀誦を容易ならしめん爲に、漢詩には凡て返點を施した許りでなく、和譯をも添へ、且つ最後に作者名及び和歌の初句索引をも附する事とした。

明治天皇御集

明治天皇御集　卷上

明治十一年以前

新年望山

新しき年を迎へてふじのねの高きすがたを仰ぎみるかな

鶯入新年語

あたらしき年のほぎごといふ人におくれぬけさの鶯のこゑ

風光日日新

日にそひてけしきやはらぐ春の風よもの草木にいよゝふかせむ

寒香亭にて梅を見て

まさかりの梅の林にさす月のかげさへかをる春のゆふぐれ

〔ほぎごと〕祝ひてのぶることば。
〔日にそひて〕日一日と。
〔いよゝ〕いよいよ。
〔寒香亭〕赤坂御所の御苑の梅林中にある亭の名、寒香の文字は、唐人の詩に屢々用ゐらる杜牧に「返照三聲角、寒香一樹梅」の句あり。
〔月のかげ云々〕月のかげは月の光。月光までも清香に満てるの意なり。

梅のもとに篝をたかせて

白妙のうめもかゞりにてらされて薄紅ににほふよはかな

をりにふれて

おみどもと駒はせゆけば大庭のうめの匂をちらすはる風

浦夏月

波のうへに見るより涼し須磨のうらの松のこのまの夏のよの月

駒をはせてゆきけるに蓮池に月のうつりて見えければ

はちすばの露にやどれる夕月の光すゞしき池のおもかな

秋夜長

秋の夜のながくなるこそたのしけれ見る卷々の數をつくして

霧中雁

秋山のふもとも見えぬ夕霧にこゑのみわたる雁のひとつら

庭菊

この秋もところ〲にきくの花うゑてたのしむ九重のには

〔かゞりに云々〕梅のもとに焚ける篝火の色によりて、白き梅も薄紅に見ゆとの意。〔にほふ〕花の美しく映ずる有様をいふ。〔おみども〕臣下等〔大庭〕家の前の廣場といふ詞。〔はちす〕蜂巣の義、蓮をいふ。〔ひとつら〕一列の義。雁は列をなして渡るより云ふ。〔九重〕禁中の義。天に九天ありといふになぞらへて、禁中に九門ありといふより起れる語なり。

ある夜侍補の輩をめしあつめて

あきのよの長きにあかずともし火をかゝげて文字をかきすさびつゝ

寒月

ふけゆけばいよ〳〵寒し淺茅生の霜にきらめく冬のよの月

國

人もわれも道を守りてかはらずばこの敷島の國はうごかじ

日本武尊

まつろはぬ熊襲たけるのたけきをもうち平げしいさを雄々しも

述懷

いにしへのふみ見るたびに思ふかなおのがをさむる國はいかにと

近きころ作りし宇都の山の洞道をすぎて

をぐるまのをす卷きあげてみわたせば朝日に匂ふ富士の白雪

京都にありて

住みなれし花のみやこの初雪をことしは見むと思ふたのしさ

〔侍補〕侍臣の義。
〔すさび〕心のすゝむこと。
〔淺茅生〕茅のまばらに生ひたる處。
〔敷島の國〕日本帝國の義。大和國の地名に磯城島(しきしま)とて都となれる處ありそれより及ぼしてしきしまのやまとの國といひ、轉じて敷島とのみいひて日本國をさす事となれり。
〔まつろはぬ〕まつろふは仕へ奉る義臣從せざる意也。
〔熊襲たける〕九州の地にありし梟賊の名。
〔をぐるま〕〔をす〕をは接頭語にしてもと小の義なれどすでに意味なきものとなれり。

嵐山の木の葉をあつめて香となしたるをたきて

ふるさとのにはの落葉のたき物を袖にとむるも嬉しかりけり

京都よりかへりける船の中にて

あづまにといそぐ船路の波の上にうれしく見ゆるふじの芝山

明治十二年

新年祝言

あらたまの年もかはりぬ今日よりは民のこゝろやいとゞひらけむ

山月

山の端をはなれもあへず久方の空にみちぬる月のかげかな

海上曉月

湊船あさびらきする波の上にうつるもうすき在明の月

馬場よりかへるさ月を見て

のる駒の手綱かいくりかへるさにかへりみすれば月ぞいでたる

〔ふるさと〕御集中にはこの語多く、いづれも嘗て住み給ひし京都の地をさして宣へる也。
〔袖にとむる〕香氣を袖にたきとむるなり。
〔芝山〕灌木、柴などの小さき植物の生ふる山の義。富士のしば山の語は萬葉集に出づ。
〔はなれもあへず〕離れきらぬにの意。
〔久方の〕天、空、月等の枕詞。
〔あさびらきする〕朝、波を分けて船を漕ぎ出づるをいふ。
〔在明の月〕夜明けてなほ殘れる月。
〔かいくり〕搔き繰りの音便。
〔かへるさ〕歸途。

またの時紅葉のひともと色づきたるが見すぐしがたくおぼえければ

常磐なる松の木のまの初紅葉いろめづらしと折りてけるかな

明治十三年

雲間月

むら雲のたえま〳〵に夕月夜さすかとみればかつかくれつゝ

月不擇處

萩の戸の露にやどれる月影にしづが垣根もへだてざるらむ

菊

うつろふな霜はおくともわが見つゝ樂む庭のしら菊の花

紅葉淺

一枝はもみぢしにけりむら時雨いそぎてそめよあとのこずゑも

庭上鶴馴

〔またの時〕前の歌の詞書に、馬場よりの歸るさとあるを受けて宣へる也。

〔夕月夜〕夕月をいふ。

〔かつ〕一つの事ありてまた他の事を兼ねるにいふ。

〔萩の戸〕淸涼殿にある御局の名。こゝにては單に禁中の御庭の義に用ゐ給へり。

〔うつろふ〕花の褪せ萎むをいふ。

〔一枝は云々〕先づ一枝色づきたる故に、あとの梢もいそぎて時雨の染めよと也。

〔むら時雨〕時雨は秋より冬にかけてふる雨。降り降らず定まらざるよりむら時雨といふ。

なれ〳〵てへだて心もなかりけりわが九重のにはにすむ鶴

明治十四年

月夜蟲

霧はれて風しづかなる秋のよの月にすみゆく蟲の聲かな

爐邊述懷

埋火をかきおこしつゝつく〴〵と世のありさまを思ふよはかな

竹有佳色

うゑおきし庭のくれ竹よゝをへてかはらぬ色のたのもしきかな

明治十五年

水邊夏草

夏草の茂れるかげも川水にうつるを見ればすゞしかりけり

夕立

〔庭上鶴馴〕歌御會始の御製也。
〔霧はれて云々〕霧晴れ風收まりて、月光と蟲聲と共に澄みまさりゆく秋の夜の光景を詠じ給へり。
〔埋火〕灰の中に埋まれたる炭火。
〔竹有佳色〕歌御會始の御製也。
〔くれ竹〕淡竹(はちく)の類
〔よゝを經て云々〕よゝは代々の義。

たかまやま空にとゞろくいかづちの聲にきほひて夕立ぞふる

〔たかまやま〕高間山。大和の國葛城山中の一峰。〔いかづちの聲〕雷鳴。〔きほひて云々〕きほひては競ひての義。雷鳴と競ひて夕立の音の高きをいふ。

嶺夕立

村雲のおほふと見しは夕立のみねより嶺にかゝるなりけり

海邊夕立

かきくもり降るゆふだちに荒磯の波もしばしは音なかりけり

〔かきくもり降る〕天も暗きまでに降るといふ。

初秋日

いつのまに秋は來にけむあまの原夕日のかげもすゞしかりけり

〔あまの原〕天の廣きを原に譬へていふ。

故郷萩

ふるさとゝなりし都は萩の戸の花のさかりもさびしかるらむ

〔沖つ波〕なるとの枕詞。

波間月

久方の空ゆく月も海原の波間にかげはうきしづみつゝ

〔なると〕鳴門。阿波と淡路との間の海峽。

海上月

沖つ波なるとの海のはやしほにやどり定めぬ月の影かな

〔やどり定めぬ云々〕月光、海峽の早潮にうつりて一處に定まらざるをいふ。

海上待月

山もなき青海原の波の上に待てどもおそし秋のよの月

〔山もなき〕山も見えざるの意。

月前松風

窓のうちにさし入る月のかげふけて軒端しづかに松風ぞ吹く

〔窓のうちに云々〕窓の中にさし入る月光、此は夜は更けて、寂寞たるうちに松風の吹きわたるを聞く、境地を詠ませ給へり。

河水久澄

昔よりながれたえせぬ五十鈴川なほ萬代もすまむとぞ思ふ

〔五十鈴川〕伊勢大神宮の境内を流るゝ川。皇統にたとへて用ゐさせ給へり。

明治十六年

鶯

このごろはかきねの柳のきの梅みな鶯のやどゝなりぬる

〔このごろは云々〕楊柳色を帶びて、至るところに鶯の鳴くのどかなる春景色となり。

折梅

さかりなる庭のうめがえたをらせて人とともにもかざす今日かな

〔かざす〕頭に挿すをいふ。

四月二十三日小金井に遊覧しける時花のもとにて

春風のふきのまに〳〵雪とちる櫻の花のおもしろきかな

〔ふきのまに〳〵〕吹くに任せての意。

首夏水

夏あさき山下水をきてみればきのふの春の花ぞながるゝ

山新樹

薄くこくみどりかさなる夏山の若葉のいろのなつかしきかな

垣卯花

てすさびにさしゝ垣根の卯花もこの夏よりぞ咲きそめにける

夏草深

夏草のしげりしげりて園のべの小松もわかずなりにけるかな

夕立晴

雲は晴れ風はのこりてゆふだちの過ぎしあとこそ涼しかりけれ

をりにふれて

庭のおもは若葉しげりてすゞかけの花さく頃となりにけるかな

ときのまに千里かけらむ駒もがな糺の森にすゞみてをこむ

萩蔭水

水の上に咲きなびきたる萩が花うつれる影も見えぬばかりに

〔夏あさき云々〕春過ぎて落花の山下の水に流れ行くを詠ませ給へり。
〔きのふの春〕今日は既に夏なるにより昨日の春と宣へる也。
〔てすさび〕手にて・なぐさみにすることをいふ。
〔園のべ〕園の上、又は傍などの意。
〔すゞかけ〕落葉喬木にて淡黄緑色の花を著く。洋名をプラタナスといふ。
〔糺の森〕京都下賀茂神社の神苑なり
〔をこむ〕をは強意の助詞。

〔くれわたる云々〕暮れわたるまゝに芝生の露にやどれる月のかげもいよいよ明らかになりゆくと也。
〔ふかゝらぬ〕草の深くも繁茂せざるをいふ。
〔朝づく日〕朝がたの日。
〔長濱〕たゞ濱の長きところをいふ。
〔まさご路〕海濱の白砂の道。
〔なきわたる云々〕月の出を待つ山の夕雲に、鳴きわたり行く雁のつばさばかゝりたるを詠ませ給へり。

月前露

くれわたる庭の芝生におく露のひかり見えゆく夕月のかげ

蟲

ふかゝらぬ庭の草にも蟲のねのきこゆる秋となりにけるかな

朝蟲

朝づく日つゆにかゞやく草村にのこりてもなく蟲のこゑかな

車中聞蟲

をぐるまのうちよりきけばなく蟲の聲をわけゆくこゝちこそすれ

雨後月

むらさめの雫もいまだおちやまぬ松のひまより月ぞさしくる

濱月

白波のよせてはかへる長濱のまさご路とほく照らす月かな

雲間雁

なきわたる雁のつばさにかゝりけり月まつ山のゆふぐれのくも

霧埋山

ふじのねも見えずなりにけりいづくまでたちのぼるらむ秋の夕ぎり

原霧

子日せし小松が原も夕霧のたなびく秋はさびしかりけり

菊契多秋

もろ人と共にかざゝむいく秋もまがきに匂へしら菊の花

庭前紅葉

松が枝にまじるもみぢの色ふかみ山べおぼゆる庭のおもかな

をりにふれて

いさみたつ駒にくらおけ飛鳥山そめはじめたる紅葉みてこむ

山路落葉

嵐ふくやまぢをゆけば松の葉も紅葉と共にみだれてぞちる

庭雪

みな人のちからあはせて庭のおもにきづきあげたる雪のしら山

〔子ねせし云々〕正月の初めの子の日に人々野に出で小松を引きて遊び千代を祝ふ行事。春には子日の遊せし小松が原も、今は秋なればさびしと也。

〔いく秋も云々〕いく秋は多くの秋。菊の枯れずして年々に咲けよと也。

〔色ふかみ〕色が深さになり。

〔山べおぼゆる〕山邊とも思はるる。

〔飛鳥山〕東京府下にありて、櫻、紅葉に名あり。

〔雪のしら山〕雪を積みて築きあげたるをいふ。

〔吹上〕宮城内吹上の御苑。
〔鴨場〕濱離宮には幕府時代よりありしと也。
〔はるふかき〕春のふけたると、山の深くあるとに懸けて詠み給へるならん。
〔今日をまちけむ〕今日の行幸をや待ちけむと也。
〔とのもり〕宮中主殿寮の下司。
〔玉だれ〕玉簾。玉などを飾にせるうるはしき簾の義。

馬上雪

いさみたつ駒にうちのり吹上のにはの雪見にいでしけさかな

鴨場

みなびとの手ごとにもたる網のめをのがれかぬらむあはれ水鳥

明治十七年

庭鶯

我庭のうめの林のひろければよそにうつらぬ鶯のこゑ

山ふかく狩しけるをりにうぐひすのなくをきゝて

はるふかき山の林にきこゆなり今日をまちけむ鶯の聲

夏草深

いつのまに生ひしげるらむとのもりが刈らぬ日もなき庭の夏草

晴夜夏月

雲はれしこよひの月は玉だれのうちよりみるも涼しかりけり

〔あまつかぜ〕天の風。
〔村雲〕あつまりむれたる雲。
〔はしゐ〕家の端ちかく出で居るをいふ。
〔浮島が原〕駿河の國、富士の麓にあり。
〔ゆふされば〕ゆふべになり來れば。
〔はなたぬむし〕放ちたるにあらで、自然と草むらに住める蟲なり。
〔千ぐさの花〕千々に咲きにほふ野邊の草花。

夏のゆふべ月をまちて

あまつかぜこの村雲をふきはらへ涼しき月のかげもみるべく

夏の夜新殿の月を見て

たかどのゝ軒にさしいる月みれば風なきよはも涼しかりけり

夏夜待風

はしゐして風をまてどもくれたけの枝もうごかぬ夏のよはかな

夏旅

旅衣あさたつ袖をふきかへす松風すゞし浮島が原

月前露

雲もなく霧もかゝらぬ月かげを芝生の露にやどしてぞみる

庭前蟲

ゆふされば庭の草葉も露おきてはなたぬむしの聲ぞきこゆる

野秋風

むさし野の千ぐさの花はちりすぎてすゝきにのこる秋の風かな

月

白川の關うちこえて見しかげもおもひぞいづるあきの夜の月

月前風

あまつ風ふきのまに／＼雲はれて照りこそまされ秋の夜のつき

瀧邊月

いはまよりおちくる瀧の音すみて山かぜ寒しあきのよいつき

海上月

ひさかたの空にありながらわたつみの底まで照らす秋の夜の月

月前遠望

秋の夜の月の光にしら雲のあはも上總もみえわたるかな

馬場にて月を見て

駒ならす庭さやかなる月影にまがきの菊の花もみえつゝ

遠山霧

朝日かげのぼるけしきはみえながらなほ霧ふかしをちの山のは

〔白川の關〕福島縣西白河郡にあり。能因法師の「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞふく白河の關」の歌にて古來人に知られたる名所。
〔わたつみ〕渡津海の義、海は人の渡る所なればかくいふ。
〔あは〕安房。
〔駒ならす庭〕馬場をいふ。
〔まがき〕竹、柴などの粗垣にて間の透いて見ゆる垣をいふ。
〔をち〕遠方。

〔河中島〕千曲川と犀川との合流の地にして、上杉謙信と我田信玄と争ひし古戰場。

〔昔の秋云々〕昔の戰の有様目前に見ゆるが如き心地せらるゝ也。

〔うつろひ〕花の色の褪するをいふ。

〔はらふ云々〕はらふは掃除すること掃へども／＼落葉の盡くることなきを宣へり。

〔すみなれて云々〕冬の月の悽愴なるさまを詠ませ給へり。

河上霧

信濃なる河中島のあさ霧に昔の秋のおもかげぞたつ

毎秋見菊

秋ごとに匂ふしら菊もろ人と共にみるこそたのしかりけれ

池邊紅葉

みる人のかげと共にも池水の底にうつれる岸のもみぢ葉

月前殘菊

おく霜にうつろひそめし白菊をもとの色にもかへす月かな

庭落葉

風ふけばおつるこのはに朝な／＼はらふ庭ともみえぬころかな

島冬月

すみなれて誰かみるらむ伊豆の海のおきの小島の冬のよの月

月照山雪

空はれて照りたる月に遠山の雪のひかりも見ゆるよはかな

晴天鶴

富士のねもはるかに見えてあしたづのたちまふ空ぞのどけかりける

明治十八年

窓前鶯

まどあけて見るとしらずや呉竹のしげみがなかに鶯のなく

花盛

春風もよきてふくかと思ふまでさかりのどけき花のかげかな

月前花

おぼろよの月も梢にさしいでてにほひくははる花櫻かな

遠山花

春霞たなびく山はとほけれど雲ともみえぬ花の色かな

夕山吹

墨染のゆふべをぐらき池水になほ影みゆる山吹のはな

〔くれ竹〕昔呉の國より渡來せしものといふ。葉細く節多し。
〔よきて〕避けての意。
〔にほひ〕花の月に映じて一層美しきをいふ。
〔花櫻〕花の美しく咲き滿てる櫻をいふ。
〔雲ともみえぬ云々〕花の色の雲とまがふをいふ。
〔墨染の〕ゆふべの枕詞。
〔なほ影みゆる云々〕山吹の花の色うるはしく、夕暗に浮きて見ゆるさまをいふ。

をりにふれて

ゆふだちのはれゆく空にたつ虹をたちいでゝ見ぬ人なかりけり

朝顔

しばがきにまとひあまりて荻の葉の末にもさけり朝顔の花

あるをりに船中見紅葉といふことを

紅葉よりあかく見ゆるはふねのうちにつらなる臣のこゝろなりけり

風後落葉

ひとしきりさそひし風はしづまりておのがまに〳〵ちる紅葉かな

庭落葉

あらしふく庭のもみぢ葉あさ霜のうへにちりたる色のさやけさ

月照氷

厚氷とぢたる池の底までもてりとほるかとみゆる月かな

禁園雪深

ゆきかひの道をぞ思ふわが園の草木もうづむけさのみゆきに

「ゆふだち」夏の夕近くなりて、俄に降り來る雨、驟雨、白雨。

「紅葉より云々」紅葉よりも赤しと臣下の忠誠を賞し給へるなり。

「ひとしきり云々」ひとさかり誘ひし風も静まれば樹々の葉の散るよと也

「厚氷」寒月凄愴の様なり。

「ゆきかひの云々」禁園の雪をみそなはして、道路往還の難澁を思ひやらせ給へり。

「みゆき」みは接頭語。

雪中早梅

ふりつもる梢の雪をはらはせて今朝こそ見つれ梅のはつ花

冬泉

冬ふかき池のなかにもほとばしる水ひとすぢはこほらざりけり

明治十九年

新年望山

年のたつあしたに見ればふじのねの雪の光もあたらしきかな

毎年見梅

わがその梅の花見むこの春もこぞにかはらぬ人をつどへて

絲櫻

けさよりもまた咲きそひて春の日のながさしらるゝ絲櫻かな

夜花

ともしびの光をかりて窓の外の花もてあそぶよはの樂しさ

「ほとばしる水」噴水をいふ。

「ひとすぢは云々」冬寒くして池の水は凍れるに、噴水のみは凍らざる趣を詠み給ひしなり

「年のたつあした」年の新しく來りたる朝のことにて元旦をいふ。

「絲櫻」絲の如く枝の細長く垂れたる櫻。春の日の長きに、絲の長きを合せよみ給へり。

「もてあそぶ云々」燈下の光に窓の外の花を照らして、花色の美しきを賞翫し給へる也。

〔さよ〕さは接頭語

〔池のこゝろ〕池心即ち池の中心のこと。また池を人格化して池の心中といふにかけて宣へり。

〔をちこち〕かなたこなた。

〔くまなき〕かくるゝ處なきをいふ。

〔まねきても云々〕まねきとは、薄の穗の人を招くが如く見ゆるをいふ。又招きに對しかへらぬと宣給ひしにて、御幼時をしのばせ給へるなり。

夜思花

さよふけて吹く松風のおとたかしこのまの櫻いまかちるらむ

池邊花

しづかなる池のこゝろも動くらむみぎはの花に風わたるなり

樓上見花

高殿にのぼりて見ればをちこちの花も今日こそ盛なりけれ

雨後殘花

春雨のはれまになりぬたちいでゝ散りのこりたる庭の花みむ

をりにふれて

はるかぜにいなゝく駒の聲すなり花の下道たれかゆくらむ

竹間夏月

若竹のしげみもりくる月かげはくまなきよりも涼しかりけり

故鄕薄

故鄕のかきねのすゝきまねきてもかへらぬものは昔なりけり

蟲聲近枕

いづくにて鳴くともしらぬ蟲のねの枕はなれぬ秋のよはかな

月出山

粟田山くもふきはらふ松風のうへにいでたるあきの夜の月

待菊盛

みな人もまちわたるらむ我園にうゑたる菊の花いさかりを

庭霜

冬がれのにはのしばふは朝霜のおくも消ゆるもわかれざりけり

松上霜

千代ふべきみぎりの松はおくしもを寒きものとも思はざるらむ

冬夜寒

したさゆる冬のよどこにねざめして衾かさねぬ人をこそおもへ

綠竹年久

九重のうてなの竹のふかみどりかはらぬかげぞ久しかりける

〔枕はなれぬ〕耳につきてはなれざるをいふ。
〔粟田山〕京都市の東にある地名なり
〔松風の云々〕松の上にいでたる月を、かゝ巧に詠ませ給へり。
〔わかれざりけり〕まぎれて分きがたしとの意。
〔みぎり〕軒下又は階下などの石疊又は雨滴を受くる敷石。
〔したさゆる〕底冷えする也。
〔うてなの竹〕順徳院の禁秘抄に「中殿東庭、竹臺二」とあり。
〔綠竹年久〕歌御會始の御題也。

〔みぎり〕こゝにては庭上の義に用ゐる。
〔あさな〳〵〕毎朝
〔たかむら〕竹叢。
〔ものゝふ〕軍人をいふ。
〔ならし野の原〕下總の國にある練兵場なり。怠らず馴らすと兩方にかけて詠ませ給へり。
〔あしひき〕山の枕詞。山の端の裾を長く引くをいふ。

庭上鶴

こゝのへのみぎりに馴れしすむたづの千代よぶ聲をきかぬ日ぞなき

明治二十年

窓前鶯

あさな〳〵なく鶯のこゑすなり窓のたかむら霜はおけども

月前梅

春のよのおぼろ月夜の影ふけて窓の内までかをる梅かな

夕蛙

つばくらめ飛ぶかげたえし小山田のゆふべさびしくなく蛙かな

野夏草

夏草も茂らざりけりものゝふの道おこたらずならし野の原

海上月

あしびきの山のはいづる月かげに大海原の波を見るかな

秋水鳥

秋風のさそふこの葉にさきだちて浮びそめたる池の水鳥

池水浪靜

池水のうへにもしるしよもの海なみしづかなる年のはじめは

明治二十一年

雪埋松

海原にみさらにはれて濱松のこずゑさやかにふれる白雪

明治二十二年

水石契久

さゞれ石の巖となちむ末までも五十鈴の川の水はにごらじ

明治二十三年

「秋風の云々」水鳥は多く渡鳥なれば木の葉の散る前に渡り來て水上に浮び居るとなり。

「池水の云々」四方の海の波しづかなること恰も池水の靜かなるが如しと宣給へる也。

「水石契久」歌御會始の御製也。

「さゞれ石の」古今集賀歌「わが君は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで」によりて詠ませ給へり。

「五十鈴の川」皇統の意に用ゐさせ給へり。

〔ふるさとの云々〕御幼少の折りのことをしのび給ひて詠ませ給へるなり
〔聽雪〕京都御所内の一部にて瀟洒なる構造の御殿なり
〔わたどの〕渡り廊下。
〔小豆島〕瀬戸内海にあり、香川縣に屬す。
〔思ひきや〕意外なるに驚く意。
〔ふりつゞく云々〕前の歌のをりをしのび給ひて、詠ませ給へるなり。
〔寄國祝〕歌御會始の御製。
〔新玉〕枕詞。

京都の花を見て

ふるさとの花のさかりをきて見ればなく鶯のこゑもなつかし

京都をいでたゝむとするころ聽雪にて

わたどのゝ下ゆく水の音きくもこよひ一夜となりにけるかな

呉軍港にゆくとて四月十八日小豆島にふねをとゞめけるにあくるあした霧のいと深くたちこめたればとて船をいださざりければ

思ひきや小豆のしまの朝霧にゆくさきみえずなりはてむとは

をりにふれて

ふりつゞく雨の音きけばあづき島霧こめし日もおもほゆるかな

寄國祝

新玉のとしを迎へて萬民ひとつごゝろに國いはふらし

明治二十四年

〔千早ぶる〕神の枕詞、いちはやぶるの義、強き勢をいふ、神人などに冠す。
〔とこしへに〕永久に。
〔いのるなる〕祈りて居るところなりといふほどの意。
〔時すぎて〕梅花の盛時を過ぎての意。
〔おみ云々〕禁中の梅を折りて臣下に賜へるなり。
〔わがために云々〕わがために殊に花の匂ひの深い枝を選ひて折りたるものなるべしとの御意。

述懷

千早ぶる神ぞ知るらむ民のため世をやすかれと祈る心は

社頭祈世

とこしへに民やすかれといのるなるわがよをまもれ伊勢のおほかみ

明治二十五年

梅薰風

時すぎて散るも殘るも風ふけばひとしくかをる梅の花ぞの

折梅

咲きそめしかきねの梅の一枝をおみのためにと手折りつるかな

朝花

いづる日の光もそひて山ざくらまばゆく見ゆる花のいろかな

折りたる花の枝を

わがために枝をえらびて手折りけむ花の匂のふかくもあるかな

吹上の庭にて

のる駒の鞍のまへわにちりかゝる匂櫻の香こそたかけれ

小金井の櫻をおもひやりて

こがねゐの里ちかけれどこの春も人傳にきく花ざかりかな

月前風

むら雲を嶺のあらしにはらはせてさしのぼる月の影のさやけさ

月前神樂

すめがみの廣前てらす月かげに神樂のこゑもすみまさりつゝ

日出山

山のはにかゝれる雲もはれそめてのぼる朝日のかげのさやけさ

〔まへわ〕前輪、鞍の前の高き所。〔匂櫻〕櫻の一種にして香氣あり。〔すめがみ〕御先祖にまします神。〔廣前〕神の御前を申す。〔神樂のこゑ〕神樂は琴、篳篥等の樂に合せて神樂歌をうたふにより、これらのものゝねをかく宣へる也。〔すみまさり〕聲の清く澄むに、月かげの澄むといふ語を兼ねたり。〔日出山〕歌御會始の御製也。〔宮のうち〕宮中。

明治二十六年

秋風寒

宮のうちもふくかぜさむくなりにけり山べはいまや時雨ふるらむ

「魚はみなそこ」一面に水上に浮べて魚は水底に沈めるさまなり。
「やま松の」云々松杉の葉を吹きおとす嵐の烈しきを宣へり。
「しづがふせや」しづは賤しき民。ふせやは家屋低くして屋根を地に伏せたる如き家。貧しき人々の家の意。
「巖上龜」は御會始の御製也。
「あきつ島」日本全國の通號。
「逢坂のせき」云々逢坂の關の址は滋賀縣滋賀郡にあり。

落葉浮水

魚はみな底にしづみてもみぢ葉のうかぶも寒し庭の池みづ

山冬月

やま松の葉ふきおとす木枯にさえこそまされ冬の夜の月

寒夜述懷

さゆる夜の嵐のおとに夢さめてしづがふせやを思ひやるかな

巖上龜

うごきなきあきつ島根のいはの上によろづよしめて龜はすむらむ

明治二十七年

關路鶯

逢坂のせきのふるみち春ゆけば杉生かすみて鶯ぞなく

故鄉梅

すみよしい春なつかしきふるさとの梅のさかりを誰かみるらむ

〔浮雲の云々〕浮雲の月にかゝれるうちは見えたる螢の光の、雲はれて月出でし後は、月の光にまぎれて見えずなりぬと也。
〔あさぼらけ〕明けがた。ほのぼのと明るくなれる頃をいふ。
〔櫻田〕宮城の傍、参謀本部の近くにあり。
〔巣だゝぬ〕雛巣にこもりて未だ飛び出でざるをいふ。
〔松樹山〕旅順の北約一里にあり。

月前螢

浮雲もはれたる空の月かげにかくるゝものは螢なりけり

蓮滿池

いけみづは蓮の浮葉にうづもれて露のみひかるあさぼらけかな

水鳥

櫻田のほりちかければ水鳥のさわぐ羽音をきかぬ夜ぞなき

梅花先春

春風もふくこゝちしてあらたまの年の初日に匂ふうめかな

松上鶴

やまゝつのしげみがなかにきこゆなりいまだ巣だゝぬひな鶴のこゑ

明治二十八年

旅順の戰のさまをきゝて

世にたかくひゞきけるかな松樹山せめおとしつるかちどきの聲

「あま雲も云々」萬葉集卷三、山部赤人富士山を詠める長歌に「白雲もいゆきはばかり云々」とあるより出づ。
「いゆき」いは接頭語。
「つれ〴〵」なすこともなく徒居のさまをいふ。
「曙」あかつきより朝迄の間の、少しくらき頃の稱なり。
「あさ清め」朝の掃除。
「青柳のいと」柳の枝は絲の如く細く垂れるによりいふ。

明治二十九年

山霞

あま雲もいゆきはばかる富士のねをおほふは春の霞なりけり

雨中鶯

つれ〴〵と雨のふる日はうぐひすも竹のはやしにこもりてぞ鳴く

曙鶯

花の色もまだみえそめぬ曙にいづくなるらむ鶯の啼く

朝鶯

あさ清めをはりにけらし窓ちかくなく鶯のこゑのきこゆる

梅花盛

むつまじく枝をかはしてさく梅もさかりあらそふ色はみえけり

故郷柳

故郷のかきねに今もなびくらむわがさしおきし青柳のいと

「こゝろして」注意して。
「はつかに」わづかに。
「をすのと」簾の外
「たちなかくしそ」なそは禁止の助詞。立ちかくすことなかれの意。
「内外云々」花は宮城の内外の隔てなければかく宣へり
「のどかなる世」明治二十七八年の戰役も終りて平和なる今年の春との意
「よものうみ云々」世の治まりて平和なることを四方の海に波のをさまれるにたとへて宣へり。

庭若草

こゝろして朝ぎよめせよ若草のはつかにもえし九重のには

山春月

夕霞たなびく空にほの〴〵と山のはみえていづる月かな

簾外春月

をすのとにいでゝ花みる人かげもおぼろにうつる春のよの月

霞中花

春がすみたちなかくしそ九重の内外へだてぬ花のさかりを

庭前花

吹く風ものどかなる世の春またでわが庭櫻さきそめにけり

靜見花

よものうみ波をさまりてこの春は心のどかに花を見るかな

對花言志

散りやすきうらみはいはじいく春もかはらでにほへ山ざくら花

落花風

たますだれかゝぐる窓の朝風にわたどのかけてちる櫻かな

田家蛙

しづのをも門田のくろをゆづる世になにかしましく蛙なくらむ

春野

蟲のねをきゝし野末にきてみれば春さく花もちぐさなりけり

をりにふれて

人みなの花をかざしてゆくみればわが世の春ものどけかりけり

梅雨欲晴

山の端の入日にかゝる雲もなしあすは晴れなむ梅雨のそら

月前螢

いけのおもは月にゆづりて蘆の葉のしげみがくれをゆく螢かな

沙上夏月

月清き庭のまさごぢふむ人のかげも涼しくうつるよはかな

〔くろをゆづる世〕くろをゆづるは、史記五帝本紀虞舜の條に「舜耕二歴山一、歴山之人皆譲レ畔」とある故事。世平和に治まりて耕す者もあぜ道をゆづりあふ義。〔なに〕何故に。〔かしましく〕やかましく。〔蟲のねを云々〕春さく花もの「も」に去年も同様なりとの意を含めり。〔いけのおもは云々〕池の上は月の照るにまかせ、蘆は蘆の葉の繁茂してうすくらき所を飛ぶよとなり。〔まさごぢ〕砂を敷きたる路。

行路夏草

夏草のしげきをみればあらたよにいまだひらけぬ道もありけり

鵜川

かゞり火の光にみれば長良川うかひ羽の色もさやけかりけり

蚊遣火

蚊遣たくしづがわらやのいぶせさも空にしられてたつけぶりかな

をりにふれて

手もたゆくならす扇にまねかれてまことの風もふくゆふべかな

田家朝顔

なかなかに色こそよけれつくろはぬしづが垣根の朝顔のはな

月前蟲

さやかなる月夜の庭のきりぎりすいづこのくまにかくれてか鳴く

終夜聞蟲

よもすがら鳴きもたゆまぬ蟲のねにわれもねぶらであかしつるかな

「あらたよ」新しき世。
「いまだひらけぬ云々」この文明の世になりても未だ人の踏み開かぬ道ありといふ意。
「鵜川」鵜をもて鮎をとるをいふ。岐阜長良川の名物なり。
「さやけかりけり」さだかに明かなりとの意。
「いぶせさ」むさくるしき意。
「空にしられて云々」蚊遣の煙空に立ちのぼるによりてその家の様子も知らるると也。
「手もたゆく」手もたるきばかりに。
「なかなかに」却つて。
「くま」かげ也。

月

とし〲に光そひてもみゆるかなやまとしまねの秋のよの月

中秋月

心にもかゝる雲なきこの秋のもなかの月のかげのさやけさ

月前風

はらふべき雲ものこらぬ大空の月にふくなりよはの秋風

深夜月

高殿のうへまで松の影みえて月はひきくもなれるよはかな

都月

このまよりさしのぼりけり山遠きみやこの空の秋のよのつき

社頭月

ちはやぶる神路の山にてる月のひかりぞ國のかゞみなりける

寄菊祝

わたつみのほかまでにほへ國の風ふきそふ秋のしらぎくの花

〔とし〲に云々〕やまとしまねは日本國の稱。年々に國威の增進する意を含めて宣へり。
〔秋のもなかの月〕八月十五夜の月也。
〔高殿の云々〕月の傾くまゝに松の影高殿の上にのぼれるさまを詠ませ給へり。
〔ひきく〕低く。
〔山遠きみやこ〕東京をさして宣へり
〔ちはやぶる〕神の枕詞。
〔神路山〕伊勢神宮の後に立てる山。
〔わたつみのほか〕海外、即ち外國のこと。

〔をぐら山〕小倉山なり。山城國嵯峨にあり。
〔いまはと〕今を限りと。
〔二荒山〕ふたら山と讀む。日光山なり。往時を追想して詠ませ給へり。
〔いくさ船〕軍艦をいふ。
〔しながは〕品川、東京市外にありて東京灣に面す。
〔寄山祝〕歌御會始の御製也。
〔西の海云々〕戰役の終りて平和の世となれるをいふ。西方にて戰ありし故に宣へり。明治二十七八年戰役をさす。
〔もゝち船〕百千船即ち多くの船の意。

紅葉映日

夕日影てらすをみればをぐら山まつよりおくも紅葉なりけり

曉冬月

霜のうへにうつる枯木の影きえていまはとしらむ在明の月

山雪

夏だにも風さむかりし二荒山いくへか雪のふりつもるらむ

海上船

戰にかちてかへりしいくさ船けふもかゝれりしながはの沖

寄山祝

天の下にぎはふ世こそたのしけれ山のおくまで道のひらけて

寄海祝

西の海なみをさまりてもゝち船ゆきかふ世こそ樂しかりけれ

明治三十年

海邊霞

松がねをあらひし波の音たえていそべのどかにたつ霞かな

山家餘寒

雪きえぬ山里人は冬よりも春の寒さやしのぎかぬらむ

梅薫風

しもがれの草木もかをるこゝちして梅さく庭に春風ぞふく

雨中春草

春雨にみどりはそひて見えながらいまだみじかし野べの若草

絲櫻

のきばふく風にみだれておばしまのうへまでかゝる絲櫻かな

松間花

こがくれて咲くとはすれど松風のふくたびにちる山ざくらかな

花似雲

たかゝらぬ松のこのまにさきながら雲かとみゆる山櫻かな

〔あらひし波云々〕冬の海と春の長閑とを比し給へるなり。
〔冬よりも云々〕冬よりも春の餘寒を堪へがたく思ふらむと也。
〔のきばふく云々〕春風駘蕩として、絲櫻の風にもまれるさま目に見るが如く拜す。
〔おばしま〕欄干。
〔こがくれて〕こゝには松の木の間に隠れての意。

「とのもり云々」とのもりは主殿寮の役人、掃除を司るより寮を掃ふと宜へり。
「さを鹿」小男鹿の義、さは接頭語、牡鹿也。
「時やきぬらむ」今や夜明けぬらむとの意。
「あまたたび云々」度々の時雨にあひて染まりし紅葉との意。
「ひと風」一度の風
「すさまじき」荒く烈しき也。

春海

釣舟も同じ處につらなりてのどかにみゆる春のうみかな

庭前蟲

とのもりの露をはらひし朝庭に猶夜をのこす蟲の聲かな

山鹿

月もいまのぼらむとする山のはにたかくきこゆるさを鹿の聲

をりにふれて

蟲の聲しづまりにけりとのもりの朝ぎよめする時やきぬらむ

落葉風

あまたたびしぐれて染めしもみぢ葉をたゞひと風のちらしけるかな

雨中落葉

山かぜの音すさまじきゆふぐれに雨もまじりてちる木の葉かな

連山雪

高殿のをすまきあけて見わたせばいづくの山も雪ぞつもれる

〔まどたたく云々〕窓をうつ夜嵐の烈しきに、埋火の上にも霜のちる心地すと也。
〔あさるとや〕やは疑問の助詞、あさるとてや也。
〔ひえ鳥〕ひよ鳥に同じ。渡り鳥にして、冬内地に來りて越年す。
〔ひむかし〕ひむかしの音便に東の事なり。東は日に向ひてあればかくいふ。
〔およばぬ云々〕雨にぬれたる草の綠の美しさには花の色も及ばずと也。

埋火

まどたたく夜嵐さむし埋火のうへにも霜のちるこゝちして

冬鳥

南天の實をあさるとやひえ鳥の寒きかきねをたちもはなれぬ

朝望山

ひむかしの海よりいでゝふじのねの雪にてりそふ朝日かげかな

明治三十一年

曙鶯

ほの〴〵とあけゆく庭にさく花のかげみえそめて鶯のなく

雨中若草

花の色もおよばぬものは春雨にぬれたる草の綠なりけり

雲雀

里の子も翅あらばと思ふらむあがる雲雀の影を仰ぎて

〔なごりの風〕春雨過ぎてのち、なほそのなごりの殘れるをいふ。
〔はなぶさながら〕櫻は花びらにて散るものなるに、雨後の風強きために花のふさのまゝ散るもありとなり。
〔濱殿〕濱離宮。
〔藤の波〕藤の花の波うつやうなるを形容し給へり。
〔色こそはえね〕色のはなやかならざるをいふ。
〔からもゝ〕唐桃にて桃の一種。
〔だに〕數多き事物の中其の一を擧げて餘を推測せしむる意なり。でさへもの意也。
〔いぶせかりけり〕鬱陶しくむさくるしきなり。

雨中落花

春雨のふる日しづけき庭の面にひとりみだれてちる櫻かな

雨後落花

はるさめのなごりの風にやへ櫻はなぶさながら散るもありけり

池杜若

かきつばたにほへる池にかけわたす橋こそ花のたえまなりけれ

橋邊藤

濱殿の入江の橋はさく藤の波をくゞりて渡るなりけり

藤懸松

棚ゆひてほかにうつさむ藤の花かゝれる松はいたく老いたり

をりにふれて

わが園の櫻のかげに咲きいでゝ色こそはえねからもゝの花

梅雨

さみだれの音のみきゝてくらす日は宮の内だにいぶせかりけり

梅雨雲

軒ちかく雲たちこめて山里にすむこゝちする梅雨のころ

河梅雨

つくばねは雲にかくれて利根川の瀬の音たかしさみだれの頃

夏月

里とほき山田の早苗うゑはてゝかへる月夜やすゞしかるらむ

夏曉月

あさがほの花の色なる大空にのこるもすゞしありあけの月

瞿麥

月に日にさきそふみえて樂しきはわがしきしまのやまとなでしこ

をりにふれて

はしゐして水雞きかむと思ふ夜にかしましきまでなく蛙かな

風前草花

露をのみはらふとおもひし夕風にちりそめにけり秋萩の花

〔つくばね〕筑波山の嶺。
〔早苗〕早は添へたる詞。苗に同じ。
〔うゑはてゝ〕植ゑ終りて。
〔あさがほの云々〕晴れたる大空の碧の色を朝顔の藍色の花にたとへ給へり。
〔しきしまの〕やまとの枕詞。
〔やまとなでしこ〕からなでしこに對していふ詞。花の名に愛兒をかけて宣給へり。
〔水雞〕水鳥の名なり。鷄に似て小さし。嘴と足と長し灰色にして、水邊に棲息し、鳴く聲恰も戸を叩くに似たり。（くひな）夏の夜に鳴く
〔かしましき〕やかましきなり。

蟲聲非一

をちこちの野山のむしもはなたれて鳴くねくらぶる園の内かな

旅中鹿

故鄕の春日の野邊にたびねして夜たゞをじかの聲をきくかな

待月

人みなの月まつ夜なり大空の雲ふきはらへ秋のやま風

河上月

宇治川の河上とほく霧はれていはまのみちも見ゆる月かな

澤月

鴫のたつおとはきこえて山澤のみぎはしづけきありあけの月

苔上月

霧はれし山のこのまをもる月にぬれたる苔の色もみえつゝ

樓上見月

たかどのゝすだれまかせて海ごしの山よりのぼる月を見るかな

〔鳴くねくらぶる〕各所の蟲を宮庭に放たれて、鳴く音を比較され給ふとなり。
〔故鄕〕こゝにては奈良の古都をいふ
〔夜たゞ〕夜唯の義終夜の意なり。
〔いはま〕岩間。
〔鴫のたつ云々〕山澤の水際のしづけさに在明の月さして鴫の群れ飛び立つ羽音のひときは目立つとなり。
〔海ごしの山〕房總の山をさして宣へるなるべし。

〔あきらけき云々〕月光朗明なに對して、御感想を述べ給へるなり。
〔大空の云々〕月光照々とて明なるために、星の光りは消されて、菊花のみ浮いて見ゆと也。
〔山里の云々〕月光清澄なるに連れて山里の月を連想し給へるなり。
〔二荒山〕ふたらやまにて日光山（男體山）。
〔ふれをうかぶるうみ〕中禪寺湖をさす。

月前言志

あきらけき月にむかへば久方の空もしたしくおもほゆるかな

鴈聲近

霧はらふ翅のおともきくばかりまぢかき空をわたるかりがね

月前菊

大空の星にかくるゝ月影に菊のはなのみ見ゆるよはかな

庭前菊

しら菊の花さきみちてあしたづの羽風もかをる園のうちかな

をりにふれて

山里の秋もかくやとおもふまでのきばしづかにすめる月かな

池龜

池水のうきもののしたにすむ龜もいでゝせをほす春ののどけさ

名所湖

岩根ふみのぼりてみれば二荒山ふねをうかぶるうみもありけり

〔さくらゐの里〕攝津の國三島郡島本村の中にて、山崎驛の南にあり。楠木正成父子訣別の地なり。
〔松風の云々〕天の橋立は松に名ある地、未だ行幸し給ひしことなきより、音のみ聞くと宣へり。
〔おぼつかな〕判然せずの意。
〔いまだみじかき〕春の日の未だ短きと、若草の短きとにかけて用ゐさせ給へり。

櫻井里

子わかれの松のしづくに袖ぬれて昔をしのぶさくらゐの里

をりにふれて

松風のおとのみきゝて年も經ぬいつかゆきみむ天のはしだて

明治三十二年

霞中鶯

わが園のうちとはきけどおぼつかな霞がくれのうぐひすの聲

杜鶯

椿ちるもりのしたみち春雨にぬれつゝゆけば鶯のなく

庭若草

蓬とも萌ともわかず春の日のいまだみじかき庭の若草

月前落花

そでのうへに散りくる花もみえぬまでかすみはてたる春のよの月

落花風

ちりやすき一重櫻の花のうへに風さへそひてそゝぐ雨かな

水上落花

池のおもにのぞめる花のうけしきはちりても水に浮ぶなりけり

池落花

池水にちりうく花のかたよりてひれふる鯉のかげも見えつゝ

春山

山はみな緑になりてふじのねのほかには雪もみえぬ春かな

花落枝緑

おそくとくさきし櫻もちりはてゝひとつ青葉となれる庭かな

庭瞿麥

からやまと色をまじへて咲きにけりひろきそのふの撫子の花

夜納涼

ともし火を軒端にかけて涼む夜は月おそしとも思はざりけり

「ちりやすき」かゝるでも散りやすきとなり。「山はみな云々」春たけて富士の頂にはなほ雪の残れるに、ほかの山には雪見えずと也。「おそくとく」遲く疾くなり。「からやまと云々」撫子に、からなでしこ、やまとなでしこの種類あるより、色交りて咲くと言へり。「ともし火云々」ともし火を軒にかゝげて月を待ちつゝ納涼のさまを詠ませ給へり。

夏蝶

咲きしよりはなれぬみれば常夏の花のあるじは胡蝶なるらむ

をりにふれて

夏さむき越の山路をさみだれにぬれてこえしも昔なりけり

沙上月

月白きまさごにうつる濱松のかげはさながら墨繪なりけり

風前雁

野分だつゆふべの空にきこゆなりみだれてわたる初雁の聲

菊薫風

九重のまがきのうちにさく菊も風のまに〳〵世にかをるらむ

をりにふれて

はまどのゝ入江のあしま汐みちておぼしまちかく月ぞうかべる

月前落葉

木枯のふきたつ庭にさす月のくまとなりても散るこのはかな

〔常夏〕撫子の一名。
〔花のあるじ云々〕蝶の撫子の花のかたはらを離れぬにより宜へり。
〔夏さむき云々〕越は、北陸道の地方の總名。明治十一年八月北陸地方を御巡幸あらせられし折を追懐せさせ給ひて詠み給へるなり。
〔さながら〕そのままの意。
〔野分だつ〕野分は秋の頃吹き荒るゝ風。野分らしき、又は野分の樣子あるの意。
〔風のまに〳〵云々〕風のまに〳〵匂ひでて世にかをるならんと也。

氷始結

もみぢ葉もいまだしづまぬ池水にむすびそめたる薄氷かな

水鳥馴

殿もりのゆきゝに馴れてわが庭の池の水鳥たゝむともせぬ

雪

いたゞきは雲にかくれてふじのねの裾野ましろにつもる雪かな

山家雪

ふきおろす嶺のあらしに山里はきのふの雪ぞけふもちりくる

夜埋火

月のさす窓をもとぢて冬の夜は埋火にのみうちむかひつゝ

田家烟

小山田のさとのけぶりもとし〴〵にたちそふ世こそ樂しかりけれ

池邊鷺

位ある身をわすれてや池のおもの鷺はあしまに魚ねらふらむ

「もみぢ葉云々」初冬の作を詠ませ給へり。

「むすび」結氷するをいふ。

「月のさす云々」常の夜ならば窓をあけて月の光を入るべきにとの意を含ませ給へり。

「位ある云々」延喜帝神泉苑に宴し給ひし時、鷺に五位を授け給ひしといふ故事によりて五位鷺といふ。

〔かへす〕耕作する
〔南の殿〕南殿にて紫宸殿の一稱なり南殿の左右に櫻樹(左近の櫻)と橘樹(右近の橘)とあり
〔をしへある庭云々〕論語の季子の篇に、孔子の其の子を敎ふること他の門人に異なることなしといふ故事より庭訓といふ語ありそを庭のをしへといへり。撫子を愛兒にたとへて宜へり。
〔秋の田の云々〕稻葉の上に照る月を思ひやり給うて、大御心を農家の上に注がせ給へるなり。

明治三十三年

田春雨

しづのをがかへす山田もうるほひてゆふべしづかに春雨ぞふる

軒橘

軒ちかき花たちばなにふる里の南の殿をおもひこそやれ

瞿麦露

をしへある庭にさきたる撫子の花は露にもみだれざりけり

夏朝

撫子の花のうへしろく露みえてあけゆく庭ぞすゞしかりける

山月

しらぬまに山のは高くなりにけり雲のうちなる秋のよの月

庭月

秋の田のいなばのうへを思ふかな庭の芝生をてらす月夜に

〔しろたへ〕白き織物、または白きことを總じていふ。〔このは猿〕體の輕く小さき猿をいふ。〔よばふ〕呼ぶ也。〔たづがね〕鶴に同じ。〔雲居のには〕宮城の御苑をいふ。〔にひ巣つくらむ云々〕にひ巣は新巣なり。鶴の雛を養育すべく巣ごもらむことを待ち給へる也この年の五月十日皇太子殿下、妃殿下を迎へさせ給ひしをもて、皇孫の御誕生を待たせ給ふ大御心をこめて詠ませ給へり。

秋眺望

秋風にはこねあしがら雲はれてはつ雪しろしふじの遠やま

寒夜衾

しろたへの衾も雪のこゝちしてうちかさぬれど寒きよはかな

月前千鳥

磯山をはなるゝ月に聲をのみきゝし千鳥のかげもみえつゝ

月照雪

冬のよのはれたるそらの月かげにきのふつもりし雪を見るかな

猿

梢よりこずゑをつたふこのは猿つばさあるかと思はるゝかな

松上鶴

風の音はしづまりはてゝ千代よばふたづがねたかしみねのまつ原

寄鶴祝

ひさかたの雲居のにはにすむ鶴のにひ巣つくらむ時ぞまたるゝ

明治三十四年

花盛

はなざかり賑ふころは玉梓の道もる人やいとなかるらむ

遲櫻

春寒き山したみちの櫻花おくれたりともしらで咲くらむ

をりにふれて

ちり殘る花まだおほし今ひと日いでゝ遊ばむ春のそのふに

芍藥

うつくしく匂ふ藥のえびす草なつかしき名をおほせてしがな

池梅雨

すむ魚もいぶせかるらむ池水の浮藻しげりてさみだれのふる

池蓮

茂れどもいぶせからぬはいけ水にうかゝる蓮のひろ葉なりけり

〔玉梓の〕玉をかざりたる鉾、又は鉾の美稱、道の枕詞

〔道もる人〕往來を守る人、卽ち警官の意。

〔いと〕暇の義。

〔えびす草〕芍藥の異名。

〔なつかしき名を云々〕うつくしき名をおはせまほしきとなり。

〔茂れども云々〕夏草の茂れるは一般にうつとしいけれども、池の上に蓮の廣葉の茂れるばかりは、然かあらじと也。

夏旅

夏しらぬやまべをさしてゆく旅も道の暑さの堪へがたきかな

をりにふれて

民のため年ある秋をいのる身はたへぬあつさも厭はざりけり

蟲

あきのよの月はこのまにかたぶきてくらき垣根に蟲のねぞする

旅宿蟲

わがためにあつめしならむ草枕たびのやどりの松むしのこゑ

水邊月

秋風に柳のかれ葉ちりうきて水の上寒くすめる月かな

月前遠情

はれわたる空にむかひて思ふかな新高山の月はいかにと

雪中竹

このうへにいくへふりそふ雪ならむたかむら高くなりまさりつゝ

〔夏しらぬやまべ〕涼しき山邊の意。

〔草枕〕古は草を枕にして野山に臥すといふより出でゝ旅の枕詞。

〔新高山の云々〕新高山の名は明治三十年に明治天皇の命名し給ひしものといふ。月夜、新領土の高山を思ひ出され給ひて詠み給へるなり。

〔このうへに〕なほこの上に也。

車中見雪

嶺たかくつらなる山に雪見えて車のうちもさゆる今日かな

埋火

埋火にうちむかひても雪をふむ人の寒さを思ふよはかな

冬眺望

笹原も小松がはらも雪ふりて枯野まばゆく朝日さすなり

故郷池

ふる里のにはの池水昔わが放ちし龜はいまもすむらむ

旅行

旅やかたところかはれどわれをまつ民の心はひとつなりけり

漁舟

はまどのゝ庭のものともみゆるかな芝のうらわにうかぶつり舟

海邊眺望

高殿に身はありながらあま小舟うかぶ波間にゆく心かな

〔埋火〕火鉢のこと。
〔笹原も云々〕山野の冬の朝の光景を詠み給へり。
〔はまどのゝ云々〕芝浦の沖に釣する舟を濱離宮の御庭より見ゆと宣へり
〔ふるさとのにはに云々〕御幼時御苑の庭に放ちし龜の今も無事なるかと、龜の齡は久しきものなるにより、かく追憶せられ給へしなり。ふる里は京都を申す
〔旅やかた云々〕陛下の行幸を待つ地方の人民は、所はかはれど何れも同じ心にて御迎へ申すと也。

神祇

ちはやぶる神のこゝろを心にてわが國民を治めてしがな

明治三十五年

車中見梅

人をして後に折らせむ小車のすぐる野道に梅のさきたる

土筆

庭のおもの芝生がなかにつくづくし植ゑたるごとくおひいでにけり

故郷花

ふるさとの軒端のさくらこの春もわれを待ちてやひとりさくらむ

思遠花

あらしやま花のさかりを人づてにきゝてことしの春もすぎにき

花のころに

旅衣こゝろかろくもたちいでゝ花にあそぶは樂しかるらむ

「ちはやぶる」千早振、いちはやぶるの義にして、强き勢ひをいふ。神人などに冠する枕詞

「てしがな」がなは然する事が成らばよからむといふ意なり。こゝは助詞しに接して「しがな」となるも意味同じ。

「待ちてや」やは疑問の助辭。

「人づてに」人づたへにの意。

「かろくも」心輕くと旅衣の輕きとを兼ねて言へり。旅中の花を思ひやらせ給ひて、詠ませ給へるなり。

〔たゝよはす〕池の水にゆらすこと。
〔ふるさと〕京都を申す。
〔花橘〕花の咲いたる時の橘。
〔千代田の宮〕宮城にましまして也
〔月のかつらのなり所〕月のかつらは酉陽雜俎に「月中有桂云々」とあるによりて、古來屢々詩歌に用ひらる。なり所は別莊の古語。京都の桂離宮をさして宣へり。
〔ふせや〕屋根低く地に伏せたる如き家、即ちいぶせき家の義。

池落花

池みづにちりてうかべる花をまたたゞよはしても春風ぞふく

故郷橘

ふるさとの花橘を夏ごとに千代田の宮におもひやるかな

夏遠情

夏の夜の月のかつらのなり所すゞしき風のいかにふくらむ

をりにふれて

たかどのゝ内もあつさにたへ難日にしづがふせやを思ひこそやれ

月を見て

世をおもふ心の雲もうちはれてこよひさやけき月をみるかな

月夜聞鶴

あしたづのなく聲すみてふけにけり千代田の宮の秋のよの月

野分

九重のにはも野分にあれにけりしづがふせやはいかにかあるらむ

〔ことしげき〕政務多端なるの意。〔千町田〕廣き田なり。〔をしね〕稻に同じ〔高雄〕京都愛宕山の東麓にあり。〔まし〕未來を現すむの轉じたるまに力を添ふる意の助詞しの熟合したるものにて、むに比すれば語勢強し。〔あがた〕田舍、その地方などの義。〔埋火に云々〕この年一月二十五日青森歩兵第五聯隊第二大隊二百餘名雪中行軍中行方不明となれり。この慘事を悼み給ひての御製と拜察せらる〔あかねさす〕枕詞茜は赤根の義、草本、莖は方形にして、葉と共に刺あり、花は淡黃色にして七、八月に開く。其の根は染料となる、日等に冠す。

秋祝

ことしげきこの秋にしも千町田のみのりよろしと聞くが嬉しさ

をりにふれて

小山田のをしねかるべくなりぬらむ庭の薄もほにいでにけり

故郷の高雄の紅葉ちかゝらば折りとらせてもみてましものを

冬神祇

ゆたかなる年の初穗をさゝげつゝしづもあがたの神祭るらむ

をりにふれて

冬がれの芝生の菫さきにけり小春の日影さしわたりつゝ

埋火にむかへど寒しふる雪のしたにうもれし人を思へば

かきくらしみゆきふるなりつはものゝ野べの屯やいかにさゆらむ

薄暮山

あかねさす夕日のかげは入りはてゝ空にのこれる富士のとほ山

旅

くにたみのつらなる道をかつみつゝ旅にいづるがたのしかりけり

國民のおくりむかへて行くところさびしさ知らぬ鄙の長みち

旅中山

心ゆく旅路なりけり大空にはれたるふじの山もみえつゝ

驛中橋

遠くとも渡りてゆかむわが爲にかけたりときく野路の川橋

風前鳥

大空に風のふきあげし木の葉かと思ふばかりにとぶ小鳥かな

山かぜにふき亂されてたつ鳥のうは毛ちりくる森のしたみち

鵯

やどるべき木立多かる森にてもねぐら爭ふむら鳥かな

馬

のる人の心をはやくしる駒はものいふよりもあはれなりけり

騎兵

〔つらなる〕奉迎して列をなせる也。
〔かつ〕こゝは添へたる詞と見るべし
〔鄙〕片田舍。
〔心ゆく〕滿足し給へる大御心なり。
〔むら鳥〕群をなす多くの鳥。
〔のる人の云々〕御する人の心を直ちに悟る駒と也、馬は畜生なれば物は言はねどなか〳〵怜悧なりと宣給へるなり。

勇みたつ駒をひかへて進めてふ聲やまつらむつはものゝとも

机

さまざまの書のつどひてけふもまた机のうへのせばくなりぬる

海上眺望

わたのはら汐ぞみつらし海の上に浮ぶ小島のひきくなりぬる

述懐

曉のねざめしづかに思ふかなわがまつりごといかゞあらむと

湊川懐古

あた波をふせぎし人はみなと川神となりてぞ世を守るらむ

社頭松風

神垣のみしめゆらぎて加茂山の松の梢にあきかぜぞ吹く

神祇

やすからむ世をこそいのれ天つ神くにつ社に幣をたむけて

ちはやぶる神のまもりによりてこそわが葦原のくにはやすけれ

〔駒をひかへて〕駒の手綱を締めて也

〔とも〕輩にて、多き人なり。

〔さまざまの書云々〕公文書の類を申す。

〔神となりて〕明治に至りて湊川に別格官幣社湊川神社をたてて楠木正成兄弟一族等の英靈を祀らる。故にかく宣へり。

〔みしめ〕注連繩。

〔賀茂山〕京都の北部なる上加茂にあり。

〔天つ神くにつ社〕天神と地祇とを祀れる神社の義。

〔幣〕神前にさゝぐる幣帛。（ぬさ）

〔葦原のくに〕日本の一名。

千萬の神もひとつにまもるらむ青人草のしげりゆく世を

寄道祝

千早ぶる神のひらきし敷島の道はさかえむ萬代までに

長雨ふりけるころ

はれまなき雨につけても思ふかなことしの秋のみのりいかにと

演習地にて

ものゝふのせめたゝかひし田原坂まつも老木となりにけるかな

をりにふれて

つはものと共に野山をわけてみむ手馴の駒にくらをおかせて

梓弓やしまのほかも波風のしづかなる世をわがいのるかな

明治三十六年

春駒

はなちたる牧の若こまいづれをかわが轅にはひかむとすらむ

〔千萬〕數の多きをいふ。
〔青人草〕人民を青草に比していふ。
〔神のひらきし云々〕敷島の道は歌の道にして、神代より傳はり來ればかく宣へり。
〔田原坂〕熊本縣にあり。明治十年西南戰爭に激戰ありし處。松も老木になるほど年經たる昔を追憶せられてかく宣給へり。
〔梓弓〕やにかゝる枕詞。
〔やしま〕八洲也。日本の一名。
〔はなちたる〕牧場に放ち飼ひしてある馬。

花始開

春每にうれしきものは咲く花にはじめてむかふあしたなりけり

旅中花

野も山も花のさかりになる時をうれしく旅にいでにけるかな

月前蛙

夕月夜にほひそめたる池水にかしましからずなく蛙かな

春島

船ならでゆきかひすべく見ゆるかな霞に浮ぶあはぢ島山

春祝

のどかなる春にあひたる國民におなじ心に花や見るらむ

をりにふれて

旅衣たちいでぬまに九重のにはのさくらよさかりみせなむ

のどかにも旗手なびきていくさ船つらなる沖のかすみはれたり

故鄕夏月

「春每に云々」春になりて始めて花に對する心情をよく現はされたる御製也。

「あした」朝、

「かしましからず云々」よきほどに鳴くと也。蛙の聲と池上の夕月とのさまが如何にも調和するさまなり。

「船ならで云々」船ならでも往來の出來得べく思はるゝと也。

「たち」着物の緣語なる裁つと、たち出づの立つとを兼ねたり。

「なむ」他の願望の助詞なり、

「旗手」軍艦旗なり。

〔ひがしやま云々〕御幼時京都にて夏の月を御覽ぜしをおぼし出てゝ詠ませ給へるなり。
〔吹上〕宮城内の御苑の名。
〔ゆあみ〕入浴。
〔しづのを〕農夫。
〔高砂島〕臺灣の一名。
〔夏よりも云々〕殘暑きびしき初秋の蟲の音をよく現はさせ給へり。

ひがしやまのぼる月みしふるさとのいすゞみ殿こそこひしかりけれ

夏日

吹上の瀧にてる日のかゞやきて水さへあつく見ゆるけふかな

夏風

文机のふみはちれどもふく風のすゞしき窓はさゝれざりけり

田家夏

ゆあみせむ時も忘れてしづのをはくれゆく畑に瓜やとるらむ

夏氷

かたはらにおける氷のきゆるにも道ゆく人のあつさをぞおもふ

をりにふれて

たへがたきこの日ざかりにおもふかな高砂島のあつさいかにと

初秋蟲

夏よりも暑き日なりと思ひしをくるれば庭に蟲ぞなくなる

雨中萩

すゑまではまださきみたぬ秋はぎの花うちみだり村雨ぞふる

　禁庭萩

昔わが折りてあそびしはぎの戸の花もこのごろさかりなるらむ

　川秋風

大堰川さくらの紅葉ちりうきてゐせきの波に秋風ぞ吹く

　秋雨

あやにくに秋のながめのはれぬかなをしねかりほす頃ぞと思ふに

　待月

のぼるべき山には雲もかゝらぬをまつほどひさし秋の夜の月

　見月

あかずして月みる窓をとざしけり寒くなりぬと人にいはれて

　秋月明

ともしびをかゝげぬ方に來てみればいよ〳〵あかし秋の夜の月

　兵營月

〔すゑまでは云々〕萩は根もとの方より次第に上へ咲きのぼりゆくにより云へり。
〔大堰川〕京都嵐山の下を流る。
〔ゐせき〕水をせきてよどませたるところ。
〔あやにく〕をりあしく。
〔のぼるべき云々〕月の出で來るをまちあぐみて詠ませ給へるなり。
〔かゝげぬ方に〕火をつけぬ所。

いくさ歌うたひかはしてつはものもたむろのにはに月やみるらむ

月前松

秋ごとにかはらぬ月ぞやどりける千代田の宮の松のこずゑに

月似古

いにしへの人のことばもうたひけりそのよに似たる月にむかひて

秋色

茸狩のかへさに見れば山がつが垣根の柚の實いろづきにけり

雪中待人

ふりつもる雪わけがたくなりぬらむまゐらむといひし人のおそきは

雪のふりける日

呉竹の夜ひとよふらばいかならむ見るまに高くつもるしら雪

折に觸れて

豐年の新嘗祭ことなくてつかふる今日ぞうれしかりける

風

〔いくさ歌〕軍歌。
〔千代田の宮〕宮城をいふ。
〔いにしへの人のことば〕古人の月を詠める歌の義。
〔かへさ〕歸途。
〔山がつ〕山に住める賤民。
〔まゐらむ〕參內せむ也。
〔呉竹の〕夜にかゝる枕詞。
〔ひとよ〕終夜。
〔豐年〕五穀のよく實れるよき年をいふ。

久方のむなしき空にふく風も物にふれてぞ聲はたてける

夕

夕月夜さやかになりてふみならす庭木のかげはくれはてにけり

山

ふく風のおともきこえぬ遠山はたゞうつしゑのこゝちこそすれ

原行人

人あまたゐてだに旅はさびしきを荒野の原をひとりゆくらむ

田

にひばりの田づら多くも見ゆるかないそしむ民のちからしられて

道

千早ふる神のひらきし道をまたひらくは人のちからなりけり

水

あらがねの土の下樋をかよひきて都にすめる多摩川のみづ

器にはしたがひながらいはかねもとほすは水のちからなりけり

「ふれて」觸れて。
「うつしゑ」繪畫をいふ。
「ゐて」ひき連れて。
「にひばり」新墾なり。
「田づら」田の面。
「いそしむ」勉勵するをいふ。
「あらがねの」土の枕詞。
「下樋」地中に埋めたる水の通路。
「すめる」住めると澄めるとの二つの意に用ひさせ給へり。
「器には云々」水は方圓の器に從ふ如く、器次第にて如何やうにもなるが、又一面にはいざとなれば、堅き岩石をも貫き通す力をもつて居るものなり。又人も水と同じであるといふことを言外に含み給ふのである。白樂天の詩に「無情水任方圓器」云々」とあり。

晴後遠水

あま雲はあらしにはれて山川の水上たかく見ゆるけさかな

故郷

年をへてかへりてみれば故郷のみやもる人もおいにけるかな

故郷井

わがために汲みつときゝし祐の井の水はいまなほなつかしきかな

故郷松

ふる里をとひてし人に問ひて見むわがうゑおきし松はいかにと

故郷情

老人のかたりしことをさらにまた思ひぞいづるふる里にきて

旅中情

草まくら旅にいでゝは思ふかな民のなりはひさまたげむかと

旅宿雞

とのゐ人いま參るらむ草まくら旅のやどりに雞のなく

〔祐の井〕京都御苑内にあり。
〔とひて〕訪ひて也
〔なりはひ云々〕生業なり。地方に行幸せらるゝにつけても、人民の生業の防げになりはせぬかとの、大御心なり。
〔いま〕やがて其のうちにの意。

旅宿夢

まぢかくもたづねし民のなりはひをこよひ旅ねの夢にみしかな

羇中馬

小車のあとさき守るますらをの駒もつかれむ鄙の長みち

山家門

杉垣をめぐりてみれば山里はおもはぬかたに門ぞありける

埋木

うもれ木をみるにつけても思ふかなしづめるまゝの人もありやと

詞

ことのはの道のおくまでふみわけむ政きくいとま〳〵に

盃

盃をけふもさづけつ位山はじめてのぼる人をいはひて

とし高き人にさづくる盃は手にとるごとにうれしかりけり

布

〔おもはぬかた〕思ひもよらぬ方面になり。
〔うもれ木〕木の水中または土中に埋もれて長き歳月を經たるものをいふ。
〔しづめる〕埋木の水底に沈みをる意と、人の世に不遇にして沈める意とを兼ねたり。
〔ことのはの道〕歌の道。
〔位山云々〕位山は飛驒にある地名にて、位階のことにたとへていへり。有爵者またはその嗣子の成年に達し、初めて五位に叙せられて盃を賜はるを宣へり。
〔とし高き人〕高齢者。

年たかき人の手づから織りいでしぬのは錦におとらざりけり

寫眞

旅にしてみし海山のけしきをもこのうつしゑに思ひいでつゝ

軍艦

すゝめてふ旗につれつゝいくさ船かろくも動く浪のうへかな

いくさぶねつらなる沖をみわたせば波のひゞきもいさましきかな

軍港

軍ぶね造る所もみてゆかむ呉の港にしばしとまりて

網引

あびきしてわれに見せむとあま小舟海もせにこそこぎつらねけれ

燈

ともし火の影まばらにもみゆるかな人すむべくもあらぬ山邊に

山眺望

波の音はきこえぬ山の高嶺より青海原をひとめにぞみる

〔年たかき云々〕老嫗などの織り出せる布也。敬老の心を詠ませ給へり。
〔うつしゑ〕寫眞のこと。
〔てふ〕といふの義
〔旗につれつゝ〕信號旗の合圖によりて也。
〔呉の港〕呉軍港也
〔あま小舟〕漁人の舟をいふ。
〔海もせに〕海も狹きまでに也。
〔あびき〕あみひきの略言。

「千早ぶる云々」皇祖諸神の我が國體を形成せしものなれば、擧國一致して、國家を保持し、我が國民をして、其の歸嚮する所を誤らしめないやうとの御意也。
「守らざらめや」やは反語。守らなければならぬとの意
「かへりみる」省察させ給ふ也。
「すてなむ」捨てよかし。
「うまご」孫なり。
「にや」やは疑問の助詞。
「おほしたてなむ」養ひ育てたしと也
「もてあそび」玩具
「うつくし」可愛らしの意。
「むつびあふ」お互に睦しくしあふ也。

述懐

千早ぶる神のかためしわが國を民と共にも守らざらめや

ひとり身をかへりみるかなまつりごとたすくる人はあまたあれども

寄風述懐

ひさかたの空吹く風よひとみなの心のちりを拂ひすてなむ

翁

うまごにやたすけられつゝいでつらむわれを迎へてたてる老人

親

老の坂こえぬる子をもをさなしと思ふやおやのこゝろなるらむ

子

すなほにもおほしたてなむいづれにもかたぶきやすき庭のわか竹

もてあそび手にとらすれば幼子がうちゑむ顔のうつくしきかな

友

もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

「わらはべ」べは群の義、こどもだち。
「ゆるし文」卒業證書。
「さづくる人」教師を云へり。
「文みれば云々」書物を披きて往事を追懐し給へしなり
「心くだきし」心を盡せし。
「伊勢のかみ垣」伊勢神宮。
「旅だちまうけ」御旅だちの準備の意
「ことしげき云々」忙しき世の職業に當りをる人もの意忙しき各自の生業に從事する人も、自己の趣味はあるものよとなり。

卒業式

わらはべがまなびの道のゆるし文さづくる人もうれしかるらむ

披書知昔

文みれば昔にあへるこゝちして涙もよほす時もありけり

思往事

をり〳〵におもひぞいづる國のため心くだきし人のむかしを

社頭

はるかにもあふがぬ日なしわが國のしづめとたてる伊勢のかみ垣

神祇

わがこゝろおよばぬ國のはてまでもよるひる神は守りますらむ

をりにふれて

つはものゝ駒の足音ぞきこゆなる旅だちまうけとゝのひぬらし

勇みたつこまをひかへてますらをはわが小車のいづるまちけむ

ことしげき世にふる人もわがこのむ道にわけいるひまはありけり

〔天てらす神〕天照大神。
〔みいつ〕御威徳なり。
〔月の輪のみさゝぎ〕京都泉涌寺後山にあり。

民のため心のやすむ時ぞなき身は九重の内にありても

天てらす神のみいつを仰ぐかなひらけゆく世にあふにつけても

月の輪のみさゝぎまうでする袖に松の古葉もちりかゝりつゝ

明治天皇御集　卷中

明治三十七年

新年

神風の伊勢の宮居の事をまづ今年も物の始にぞきく

新年祝

あしはらの國のさかえを祈るかな神代ながらのとしをむかへて

早春夕

ながしとはいまだ思はぬ春の日もくれがた遲くなりにけるかな

待鶯

思ふこと多きことしも鶯の聲はさすがにまたれぬるかな

〔神風の〕神の威力によりて起るといふ風、伊勢の枕詞。〔物の始〕每年一月四日に行はせらるゝ政始を言へり。〔神代ながらの〕神代のまゝにして變ることなきの意。〔思ふこと多きこ〕露國と事端を開かせ給ひしなど國事多端なるによりかく詠ませ給へり。

「なしとや」なかるべしとの意。
「おりたちて云々」國家多事にて繁忙をきはめさせ給へばかく宣へり。
「春としも」しは強意の助詞。
「ついぢ」土塀をいふ。
「さゞれ石」こまかき石。
「たゝかひのには」戰場なり。
「子を思ふきゞす」燒野のきゞす夜の鶴など文にもありて、雉子は殊に子を思ふよりいひ宣給へるなり。

雨中鶯

春雨にぬれたる花を見る人もなしとやひとり鶯のなく

梅花

おりたちて見るいとまなき春としもしらでぞ梅のさき匂ふらむ

梅風

吹上の園生の梅や咲きぬらむついぢふきこす風かをるなり

春草

さゞれ石敷きたる庭も若草のみどりになりぬ春たけぬらし

春雨

春雨のふるにつけても民草のうるほはむ世をまづ思ふかな

春駒

たゝかひのにはまだしらぬ若駒も勇みまさりてみゆる春かな

雉思子

子を思ふきゞすの聲をあはれとは狩をたのしむ人もきくらむ

〔月もさすべき云々〕花の上に月も照り添ふべきに雨の降り出でしかば月もさゝずと也。

〔こがくれ云々〕樹間の櫻花は人知れず散り果てぬべしと也。

〔うたげのには云々〕觀櫻御宴を宣へり。故人をしのばせて詠ませ給へるなり。

〔ゑみさかえつゝ〕にぎやかに笑みつゝなり。

雨夜思花

春雨のふりいでざらば花の上に月もさすべきよはならましを

樹間花

こずゑのみ人に知られて櫻花こがくれながら散りやはつらむ

見花

戰のにはに立つ身をいかにぞと思へば花もみるこゝちせず

對花思昔

春毎にうたげのにはにつらなりし人をぞおもふ花陰にして

花慰老

老人もゑみさかえつゝ咲きにほふ花の木陰に遊ぶ春かな

雨後落花

雨晴れし庭の木陰にたゝずめばぬれたる花の袖にちりくる

河上落花

大堰川いかだの過ぎし跡見えてちりうく花のたちわかれたる

暮春

吹上のそのふの花をいかにぞと問ふ日もなくて春のくれゆく

春日

こと繁き世のまつりごと聽くほどに春の日影も傾きにけり

春夜

ともしびもさしかへぬまに春の夜はよひすぎたりと人のいふなり

をりにふれて

月影はかつみえながら春雨のしづくぞおつる花のしたみち

世の爲にもの思ふ時は庭にさく花も心にとまらざりけり

花鳥のいろねは常にかはらねどこゝろにとむる人なかりけり

はなとりの上も思はでよろづ民くにゝ心をつくす春かな

山ざくら見つゝぞおもふもの〻ふの心の花もさかりなる世を

思ふ事たえぬ今年は春の夜もねざめがちにてあかしけるかな

新樹露

「ともしび」燈燭を用ゐさせ給へり。「世の爲に云々」こゝは三十七八年戰役にて大御心を惱まさせ給ふを申す。斯樣な時は庭花の色に心をとめ給ふ暇なしとなり「ねざめがち」寢覺がちにて、寢つかぬ事也。「花鳥のいろね」花の色と鳥の音と也。

この朝けひとむらさめや降りつらむ樅のわかばに露のたまれる

時鳥

時鳥おほかる里にあらねどもきかで過しゝ夏なかりけり

夜時鳥

こがひするしづや聞くらむ短夜のふけゆく空になく時鳥

山時鳥

時鳥きく人もなき山にしもかへりて聲を惜まざりけり

故宮橘

たらちねのみおやの御代をしのぶかな花橘の蔭をふみつゝ

紫陽花

うるはしき色に匂へど何となくさびしく見ゆるあぢさゐのはな

海邊夏月

濱殿の庭の眞砂路ふみならし波間すゞしき月をみるかな

高樓夏月

〔朝け〕夜明けて程なき間をいふ。
〔おほかる里〕時鳥の澤山鳴く所ではないといふこと。
〔こがひ〕養蠶。
〔短夜〕夏の夜。
〔しも〕却つて。
〔かへりて聲を云々〕誰も聞かざる山中こそかへりて時鳥は鳴くとなり
〔たらちねの〕親の枕詞。
〔みおやの御代〕御父孝明天皇の御代
〔しのぶ云々〕古今集に「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」とあり。橘の花の香に古へをしのぶこと屢々歌に用ゐらる。

おばしまは夜露にぬれて高殿の軒にさし入る月のすゞしさ

瞿麥

色々に咲きかはりけりおなじ種まきて育てし撫子の花

夏菊

おく霜の寒さを知らぬ夏菊の花もうつろふ時はのがれず

夏草

事繁き世にも似たるか夏草は拂ふあとよりおひ茂りつゝ

庭泉

庭の面に清水の音はきこゆれどむすぶいとまもなき今年かな

夏星

おほぞらの星をかぞへて夏の夜は月なき宵もはしゐをぞする

夏山水

年々におもひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり

夏住居

「おばしま」欄干。
「色々に云々」同じ教育を受けつゝも様々に變りゆく兒童を撫子にたとへさせ給へり。
「むすぶ」手にすくひあぐるの意。
「おく霜の云々」冬の寒さを知らぬ夏菊も、遂に褪色することは免れずとなり。總て物はかくあるべしとの寓意をこめ給へり。
「年々に云々」萬機政務御多端に渉らせ給へば、年々避暑の事思召されながらも其の暇なしとの御意なり。

〔かげろふ〕日のかげるをいふ。
〔百日さく花〕百日紅。夏時赤き花むらがりて久しく咲きをれば斯く申させ給へり。
〔てしがな〕希望の助詞がなに、助詞しの接し一層強くなりたるなり。
〔わせおくて〕早稲と晩稲と也。
〔手ぶり〕風習をいふ。
〔にえかへる〕夏の日に暑さをうけて田の水が熱く沸きかへるなり。

たちつゞく市の家居は暑からむ風の吹入る窓せばくして

吹く風もたえず通ひて夏はたゞ高き所ぞすみよかりけり

夏駒

ゆふ日影かげろふ待ちて鞍おかむ駒もあつさに弱りもぞする

夏花

百日さく花まばゆくもみゆるかな今や暑さのさかりなるらむ

夏氷

夏しらぬこほり水をばいくさ人つどへるにはにわかちてしがな

夏神祇

わせおくて殘るかたなくうゑはてゝしづは田中の神まつるらし

をりにふれて

早苗とるしづが菅笠いにしへの手ぶりおぼえてなつかしきかな

暑しともいはれざりけりにえかへる水田にたてるしづを思へば

たへがたき暑さにつけていたでおふ人のうへこそ思ひやらるれ

〔あた〕敵軍なり。
〔野邊のたむろ〕野營をいふ也。
〔ともし〕乏し也。
〔夕月の云々〕宵に月明の時蕾を數へ、朝顏は今朝見れば、昨夜の蕾よりも花の多いと宣給へるなり。
〔ちぐさの花云々〕人工の自然の力に及ばざることを宣へり。

千萬のあたをおそれぬますらをもこの暑さには堪へずやあるらむ

ときのまに硯の水のかわくにもけふのあつさのしられけるかな

ものゝふの野邊のたむろやあつからむ宮の内にも風をまつ日は

いくさ人いかなるのべにあかすらむ蚊の聲しげくなれる夜ごろを

つはものはいかに暑さを凌ぐらむ水にともしといふところにて

朝顏

夕月の影にかぞへし蕾より多く咲きけり朝がほの花

霧中朝顏

薄霧のなびくかきねに朝顏の花見えそめて夜はあけにけり

行路萩

ゆく人を妨げざらばたちとまり見てましものを野邊の秋萩

草花

秋の野のちぐさの花にくらぶれば染めなす色は限ありけり

故郷草花

園守やひとりみるらむ昔わが集めし庭の秋草の花

蟲聲非一

あきの野のちぐさの花の色々を聲にうつして蟲ぞなくなる

秋風寒

ふじの嶺に初雪みえてうちひさす都も寒き秋風ぞ吹く

秋夕雨

深からぬあきだに物のさびしきは雨に暮行くゆふべなりけり

故郷秋夕

守る人の住むばかりなる故郷のあきのゆふべやさびしかるらむ

秋夜閑談

いにしへの人の功を語りいでぬもの靜かなる秋の長夜に

秋田

八束穗のたりほのはつほ新嘗にさゝげまつると刈りはじむらむ

秋夜對月

〔園守やひとり云々〕京都御苑の秋色を思ひ出でさせ給ひて、詠み給へるなり。
〔聲にうつして云々〕蟲もまた千々に鳴くと也。
〔うちひさす〕打日は美しき日をいふ。宮又は都に冠していふ。
〔深からぬあき〕初秋なり。
〔守る人〕宮を守る人。
〔八束穗〕手の一握を一束といふ。八束は穗の秀でて極めて長きをいふ。
〔たりほ〕足穗。十分にみのれる穗。
〔新嘗〕十一月にての年の新穀を諸神に捧ぐる祭。

〔むかひふかしつ〕夜更くるまで月に向はせておぼしつゞけ給ふと也。
〔さき〕咲きなし。
〔遣水〕やりみづ。流水を導きて庭などに流し入れたるものをいふ。
〔殿守〕蘆の湖畔なる離宮の番人を宣へり。
〔玉くしげ〕玉櫛笥の義にして、箱の枕詞。
〔箱根の海〕蘆の湖
〔荒野の末云々〕荒涼たる野原に野營する將士の上を思ひやらせ給へるなり。
〔あがた〕地方の義に用ゐさせ給へり。

たゝかひのにはに心をやりながらむかひふかしつ秋のよの月

月照流水

秋はぎのさきかくしたる遣水の末こそみゆれ月の光に

湖月

殿守やひとり見るらむ玉くしげ箱根の海の秋の夜のつき

海上月

あたの船うちしりぞけていくさびと大海原の月やみるらむ

田家月

綿の實も露にしめりて山畑のあぜ道寒し秋のよの月

月前遠情

もろこしの荒野の末のありさまを思ひやりても月をみるかな

旅宿月

都にておもひしよりもおもしろしあがたの里の秋の夜の月

たびねする宿の軒端のあきければ枕の上に月のさし來る

〔おもわ〕面輪。顔なり。
〔九重の庭の云々〕觀菊の御宴などにもれ給ひし臣下を思ひやらせての御詠と拜す。
〔そめはてぬ〕染めつくさざる也。
〔うつろひて〕水に映じて也。
〔西山〕京都の西方の連山をいふ。
〔桂川〕大堰川の下流。
〔てる月の〕桂の枕詞。
〔桂の里のなり所〕なり所は別莊。桂川に臨める桂離宮を宣へり。

行路霧

霧たちてさだかに見えず道のべにわれを迎ふる人のおもわも

折菊

九重の庭の白菊たをらせて宴にもれし人におくらむ

紅葉淺深

こき薄き色をまじへてもみぢ葉はそめはてぬ間ぞ盛なりける

河紅葉

大堰川ゐせきの波にうつろひてちらぬ紅葉の影ぞたゞよふ

秋河

西山は緑に晴れて桂川すみたる水に秋風ぞ吹く

秋別業

てる月の桂の里のなり所秋こそゆきて見まくほしけれ

秋遠情

園のうちにうゑたる稲も色づきぬ里人いまか山田刈るらむ

〔あがたもる人〕地方長官なり。
〔民くさ〕人民をいへる古語。
〔神垣〕もとは神社の周圍の玉垣をいひ、轉じて神社の義となれり。
〔めす神〕皇祖の神
〔はつほ〕初穗にて、其の年の初めての新穀也。
〔年ある秋〕豐年の秋なり。
〔野邊のかりぶし〕野營をいふ。

寄露述懷

あがたもる人に問ひみむ民くさにかゝる惠の露はいかにと

秋神祇

神垣に使をたてゝ豐年の秋の初穗を捧げつるかな

秋祝

すめ神にはつほさゝげて國民と共に年ある秋を祝はむ

をりにふれて

はりまがた舞子の濱に旅寢して見し夜こひしき月の影かな

霜

ものゝふの野邊のかりぶしいかにぞと思ひやらるゝよはの霜かな

水鳥

朝日さす堤にいでゝ水鳥は霜にぬれたる翅ほすらし

雨中水鳥

ふる雨は霙になりて暮渡る入江に寒き水鳥の聲

雪朝

ふりつもる雪のあしたも司人まゐ來る時はたがへざりけり

年欲暮

まつり事いよ〳〵しげくなりにけり年の終の近づきしより

煤拂

ちはやぶる神のおましをはじめにて今年の塵を拂はせてけり

をりにふれて

いたでおふ人のみとりに心せよにはかに風のさむくなりぬる

時雨ふる頃ともなりぬいくさ人暑さいかにと思ひやるまに

しぐれして寒き朝かな軍人すゝむ山路は雪やふるらむ

寐覺してまづこそ思へつはものゝたむろの寒さいかゞあらむと

天

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

久方のあまつ空にも浮雲のまよはぬ日こそすくなかりけれ

〔司人〕侍臣。
〔まゐ來る〕參り來るの略。
〔神のおまし〕神の御まします所。
〔いたでおふ〕負傷せる也。
〔みとり〕看護。
〔時雨ふる云々〕も早時雨のふりそゝぐ初冬になりぬと也。
〔たむろ〕營所。
〔かな〕希望の意を表はす助詞。
〔あまつ空にも云々〕世上に何の障もなき日は少しといふ寓意を詠み給へるなり。

星

ゆふやけの雲うすらぎてたゞひとつあらはれそめし星の影かな

民の煙

事有るにつけていよ／＼思ふかな民のかまどの煙いかにと

塵

つもりなば拂ふ方なくなりぬべし塵ばかりなる事とおもへど

曉

ねざめせしこの曉のこゝろもてしづかにものを思ひ定めむ

朝

起き出で、思ふ事なきあしたこそをさな心にひとしかりけれ

地

産みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける

峯

おほぞらにそびえて見ゆるたかねにも登ればのぼる道はありけり

「ゆふやけ」日の入り際に日光の反射によりて、西の空の赤く見るもの也。

「塵ばかりなる」少しばかりの意。

「産みなさぬ云々」萬物みな地より生ぜざるものなしといふ心を詠み給へり。

「あらがねの」土の枕詞。

「おほぞらに云々」何事も心の持ちやうにて成就すべしとの意なり。朱子の「精神一到何事不レ成」などゝ同じ意也。

「遊び處」遊園地。「ひらくれば云々」文化の開け行けば開けゆくにつけて也。「あらぬ道」正しからぬ道に「こゞしき」險しきなり。「なしのまゝなる」成し作られたるまゝの也。「せかれ云々」せかれは堰かれ即ちさへぎられの義。難儀が却つて名を成すべきを、諭させ給へるなり。「さゞれ」さゞれ石の略。小石なり。

野

花紅葉なほうゑそへよ里人の遊び處と野はなりにけり

道

遠くとも人のゆくべき道ゆかば危き事はあらじとぞ思ふ

ひらくれば開くるまゝに思ふかなあらぬ道にや人のいらむと

山路

いはがねのこゞしき山をてる日にもたゆまずこゆるわが軍人

今もなほふみわけがたき深山路を開きし人の昔をぞ思ふ

岩

天地のなしのまゝなるいはがねの姿にことにおもしろきかな

瀧

岩がねにせかれざりせば瀧つ瀬の水のひゞきも世にはきこえじ

瀬

さゞれさへゆくこゝちして山川のあさせの水の早くもあるかな

〔仇波〕あたし波にて敵を波に比したるなり。
〔たかさご島〕臺灣の一名。
〔しぶき〕飛沫。
〔やは〕反語なり。
〔山城のみやこ〕京都を宣へり。
〔みよし野の〕吉野と言はむがための序なり。
〔吉野の宮の昔〕延元元年十二月後醍醐天皇ひそかに吉野に遷幸ありしより以下數代、吉野の行宮にて帝位を保たせ給ひしをいふ。
〔みおやの御代〕御父孝明天皇の御治世を宣へり。

海

仇波のしづまりはてゝ四方のうみのどかにならむ世をいのるかな

島

つかさどる人の力によりてこそたかさご島もひらけゆきけれ

磯波

岩が根によせて碎くる荒波のしぶきにくもるいそのまつ原

國

ちはやぶる神の御代よりうけつげる國をおろそかに守るべしやは

都

山城のみやこいかにと春秋の花に紅葉におもひやりつゝ

思古宮

さくらさく春なほ寒しみよし野の吉野の宮の昔おもへば

故郷松

故郷の庭の老松たらちねのみおやの御代の昔かたらへ

「ましゝ云々」居給ひしなり先考を慕はせ給へる大御心を詠ませ給へり。
「しづがすむ云々」農民の住む藁ぶきの家を思召されたる大御心を詠ませ給へり。
「なか／＼に」却つて。
「みやび」雅致なり
「おほしたつ」育つなり。
「かへりて」却つての義。
「あとさきに云々」前後に多くの供奉員を従へる旅なればとの事なり。

思故郷

たらちねのみおやのましゝ故郷の都はことにこひしかりけり

をさなくて住みし昔のありさまを折にふれては思ひいでつゝ

農家

しづがすむわらやのさまを見てぞ思ふ雨風あらき時はいかにと

庭

なか／＼にみやびすくなしあまりにも作りすぎたる庭のけしきは

植物苑

我園にしげりあひけり外國の草木い苗もおほしたつれば

古井

くむ人もたえし野中のふるゐにはかへりて清き水やわくなむ

旅夕

あとさきに人をともなふ旅ながらくれゆく道はさびしかりけり

旅行友

「故郷を云々」友人と共に旅行する人の上を思して詠ませ給へり。
「しづのを」農夫なり。
「あがた人云々」地方人なり。行在所へ伺候する地方の官吏などを申させ給へり。
「つれ／＼」なす事もなくものさびしきこと。
「かはぬ小鳥」山野に居る小鳥も庭に馴れ來るとなり。山家の實況目に見るが如く拜し奉る。

故郷を遠くはなれてゆく人はともなふひとや力なるらむ

野外旅宿

しづのをが聲をまぢかくきゝてけり畑つゞきなる野べにやどりて

旅宿人來

あがた人かはる／＼もつどひ來て旅いやかたは賑ひにけり

旅宿興

里人も花火うちあげて旅寢するわがつれ／＼を慰めにけり

山家鳥

あしひきの山下庵はしづかにてかはぬ小鳥も庭になれつゝ

田家竹

おのづからおひたる竹をへだてにて垣根もゆはぬ小山田のさと

田家翁

こらは皆軍のにはにいではてゝ翁やひとり山田もるらむ

草

〔いぶせし〕むさくるしい事。
〔むらぎもの〕心の枕詞。
〔心むなしき云々〕知らず／＼のうちに長壽なるべきことを詠ませ給へり
〔巖上松〕歌御會始の御製也。
〔むせる〕生ぜる。
〔もる〕護る也。

いぶせしと思ふなかにもえらびなばくすりとならむ草もあるべし

竹

むらぎもの心むなしき呉竹はしらず／＼や千年へぬらむ

老松

やしなひてなほも齢をたもたせむ庭にちよふる松のひともと

巖上松

苔むせるいはねの松の萬代もうごきなき世は神ぞもるらむ

松年久

ふる里の老木の松はをさなくてみし世ながらの緑なりけり

籠中鳥

籠のうちにさへづる鳥の聲きけば放たまほしく思ひなりぬる

鶴

ひなづるは親とひとしくなりにけり巣だちし年は遠からねども

馬

〔なはて道〕田の間畔道をいふ。
〔かて〕糧食なり。
〔わたなか〕海洋の中の義。
〔たつ〕田鶴。鶴に同じ。
〔ながゝれ〕壽命長くあれ也。
〔しなぬ藥〕不死の藥をいふ。
〔いかならむ云々〕戰場などにて負傷せし人の上を深く思はせ給へり。大御心のほど誰か感激せざるべき。
〔水莖のあと〕水莖は筆の義、筆跡なり。

足なみのかはるをみればのる人のこゝろを早くこまはしるらむ

牛

あしひきの山田のすゑのなはて道ひきつゞきても牛のゆくみゆ

身にあまる重荷車をひきながらいそがぬ牛はつまづかずして

つはもののかてもまぐさも運ぶらむ牛も軍の道につかへて

龍

わたなかに潛めるたつもたつ空の雲をおこさむ時はあるものを

藥

國のためながゝれと思ふ老人にしなぬ藥をさづけてしがな

いかならむ藥あたへて國のためいたでおひたる人をすくはむ

心ある人のいさめのことのははは病なき身の藥なりけり

書

筆とりてをしへし人の昔まで思ひうかぶる水莖のあと

讀書

文字をのみよみならひつゝ讀む書の心をえたる人ぞすくなき

いまの世におもひくらべて石上ふりにしふみを讀むぞたのしき

わがためにいひしことさへ思ひいでぬ昔の人のふみをよみつゝ

歌

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな

思ふことありのまに〳〵つらぬるがいとまなき世のなぐさめにして

ときにつけ折にふれつゝ思ふことのぶればやがて歌とこそなれ

世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり

軍歌

武士のいさむ心はいくさうたうたふ聲にもきゝしられけり

軍旗

ますらをに旗をさづけていのるかな日の本の名をかゞやかすべく

圖

ひとひらの地圖ひらきみてつはものゝすゝむ山路を思ひやるかな

〔心をえたる云々〕書物の心を味ひ得る者は少しと也。
〔石上〕いそのかみと訓む。大和國に石上の布留といふ地あり、古の枕詞となり、更に古り、降りなどにも用ゐらる。
〔わがために云々〕學者また老臣などが申し奏りし詞を思ひ出でさへ給へるなり。
〔天地もうごかす云々〕貫之の古今集の序に「力をも入れずして天地をうごかし云々」とあり、歌道の極致に對する大御心を述べさせ給へり。
〔[illegible]〕すなはちなどの意。

「打ちさして」うちかけて也。
「まもり」見つめをる也。
「てぶり」風俗をいふ。
「青人草」蒼生に同じ。國民をいふ。
「つたへきて云々」歴朝の詔勅を重んぜさせ給へる大御心なり。
「國といふくに」地上にあまたある國をいふ。
「かゞみ」手本といふ義に通じ、

劍

しきしまの大和心をみがゝずば劍おぶともかひなからまし

あらはさむときはきにけりますらをがとぎし劍の清き光を

碁

打ちさしてまもりながらにほどふるはいかなる手をか思ひめぐらす

琴

石上ふるきてぶりぞなつかしきしらぶる琴のこゑをきくにも

寶

あしはらの國とまさむとおもふにも青人草ぞたからなりける

つたへきて國のたからとなりにけり聖のみよのみことのりぶみ

鏡

國といふくにのかゞみとなるばかりみがけますらを大和だましひ

くもりなく世をたもてとて千早ぶる神のさづけし鏡なるらむ

榊葉にかくる鏡をかゞみにて人もこゝろをみがけとぞ思ふ

〔しづかにも云々〕日露戰役平和克復を待たせ給ふ大御心也。
〔末とほく云々〕永久になり。戰死せし軍人の寫眞は宮中の別殿に永久に揭げさせむとの御意也。
〔はりがねのたより〕電信なり。
〔なみ遠く云々〕なみ遠くてらすともし火は探照燈なりわが艦隊旅順口を封鎖して敵艦の外洋に出づるを防ぎ居れば、かく宣へるなるべし。
〔里人の云々〕田園の夏景、さながら一幅の風景繪を見るやうに拜す。

盃

しづかにも世のをさまりてよろこびの盃あげむ時ぞまたるゝ

寫眞

末とほくかゝげさせてむ國のため命をすてし人のすがたは

電信

はりがねのたよりのみこそまたれけれ軍のにはを思ひやるにも

軍艦

荒波をけたてゝはしるいくさぶねいかなる仇かくだかざるべき

なみ遠くてらすともし火かゝげつゝ仇まもるらむわがいくさぶね

渡舟

里人のかへる野川のわたし船こまをものせて漕ぎいでにけり

釣舟

浦ちかくこぎかへりきぬ鳥よりもちひさくみえし沖いつりふね

眺望

品川の沖にむかひていくさぶね進む波路を思ひやるかな

薄暮眺望

家なしと思ふかたにもともし火の影みえそめて日はくれにけり

正述心緒

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

述懷

かみつよの聖のみよのあとゝめてわが葦原の國はをさめむ

まつりごとたゞしき國といはれなむものつかさよちから盡して

山のおく島のはてまで尋ねみむ世にしられざる人もありやと

照るにつけくもるにつけて思ふかなわが民草のうへはいかにと

民草のうへやすかれといのる世に思はぬことのおこりけるかな

よの中はたかきいやしきほど〳〵に身を盡すこそつとめなりけれ

たゝかひの道にはたゝぬ國民もちゞに心をくだくころかな

國をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にたつもたゝぬも

「正述心緒」思ふことを直に述べいづる義。萬葉集にみゆる語。
「よもの海云々」四海皆同胞と思ふ世に、何故いまはしき戰爭などの起るのであらうか。と平和克復を待たれ給ふ有難き尊き大御心也。
「聖のみよ」かしこき天皇の大御代。
「あとゝめて」とめこは尋ね求めこの意。御治蹟を慕ひまつりて也。
「世にしられざる云々」かくれたる賢良を求めむとの大御心なり。
「思はぬこと」日露戰爭を宣へり。
「ほど〳〵に」分相應にの義。
「ちゞに」さまざまにて
「心をくだく」心を苦しむる也。

「おほづゝ」大砲をいふ。
「いつかきこえむ」砲聲やみて歡呼の聞ゆるは何時なるかといたく宸襟を惱まし給ふ御製也。
「白雲の云々」白雲のはよそにの枕詞。遠きところに道を求めさがさずとも、世の人々のまことの道は敷島の道なりとなり。
「言の葉草」詞也。
「根ざし」根元または原因の意。
「きずなきは云々」いかなる人にも缺點はあるものなりと宣へり。
「かくばかり云々」多端なる政務にあたるべき良臣を得たるを悦ばせ給へり。

おほづゝの響はたえて四方のうみよろこびの聲いつかきこえむ

雨夜述懷

民草のうへに心をそゝぐかな雨しづかなるよはの寢覺に

寄道述懷

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道

なにごとに思ひ入るとも人はたゞまことの道をふむべかりけり

寄草述懷

かりそめの言の葉草もともすればものの根ざしとなる世なりけり

寄玉述懷

きずなきはすくなかりけり世の中にもてはやさるゝ玉といへども

人

かくばかりことしげき世にたへぬべき人をえたるがうれしかりけり

老人

世の中の事ある時におひてこそひとの力はあらはれにけれ

「身をなかこちそ」なそは中に動詞をはさみて禁止の助詞。かこつは思ひわびてなげく也。
「つとめをさくる」隱居するをいふ。
「おほしたてし」養育して也。
「わすれざらなむ」忘れずあれよと諭し給へり。
「惜むにも」惜しむにつけてもの意。
「家の風」云々「家風」の義。
「つらなる枝」連枝なり。兄弟は木の枝を連ねて本を同じくするが如し故に謂ふ。文選に「斷腸憶連枝」とあり。
「おろす」蒔く也。

ほど／＼にたつべき道もあるものを老いにけりとて身をなかこちそ

世の中のつとめをさくる老人も國のためにはもの思ふらむ

くりかへす昔がたりにおのづからいさめことばのまじる老人

親

ひとりたつ身になりぬともおほしたてし親の恩をわすれざらなむ

國の爲たふれし人を惜むにも思ふはおやのこゝろなりけり

兄弟

家の風ふきそはむ世もみゆるかなつらなる枝の茂りあひつゝ

友

戰のいとまある日はますらをも都の友のうへやいふらむ

民

ほど／＼にこゝろをつくす國民のちからぞやがてわが力なる

農夫

山田もるしづが心はやすからじ種おろすより刈りあぐるまで

「むらぎもの」心の枕詞。「心をたねの」眞心を種として萌えいでし也。「事しげき云々」繁雜なる世の中に立ちいらざる少年の内に也。「今はとて」卒業したりとて也。「ゆるしの文」卒業證書。「ことしあらば」國家有事の日はなりしは強意の助詞。「しをり」語源は山路などにて木の枝を折りて路のしるべとなすを、いふ。それより階梯、又は案内などの意に用ゐらる。「こむ」未來に關して願ふ意を表はす語。「しきしまの云々」日淸戰爭にあたりて上下一致の國民の愛國心を愛でられ、頼もしく思召されて、御滿足ゝ御[illegible]し給る、

教

むらぎもの心をたねのをしへ草おひしげらせよ大和しまねに

學問

事しげき世にたゝぬまに人は皆まなびの道に勵めとぞ思ふ

卒業生

ものまなぶ窓をはなれていまよりは國のつとめにたゝむとすらむ

今はとて學のみちにおこたるなゆるしの文をえたるわらはべ

乘馬

いさみたつ心のこまもひかへけりあとよりつゞく老人のため

運動

ことしあらば軍のみちにたゝむ身は野をも山をもふみならさなむ

心

ちかひたるおのが心をしをりにて誠の道をわけつくしてむ

しきしまの大和心のをゝしさはことある時ぞあらはれにける

山をぬく人のちからも敷島の大和心ぞもとゐなるべき

かぎらむと思はざりせばなか〳〵にうるはしからむ人のこゝろは

夢

わがこゝろ千里の道をいつこえて軍の場をゆめにみつらむ

軍人すゝむ山路をまのあたり見しは假寐のゆめにぞありける

おもふこと多かる頃のならひとて常にはみざる夢をみしかな

今も世にあらばと思ふ人をしもこの曉の夢に見しかな

披書思昔

のこしおく書をしみればいにしへの人の聲をきくこゝちして

思往事

たらちねのみおやの御代の昔をもことある每に語りいでつゝ

あらたまる世をいかにぞと思ひしはをさなかりつる昔なりけり

いにしへの人のいひてしかねごとをおもひぞいづるをりにふれては

たらちねのみおやの御代につかへにし人も大かたなくなりにけり

「なか〳〵に」却つて。
「軍の場」いくさのにはと讀む。戰爭して居る所也。
「まのあたり」眼の前にの意。
「假寐」かりそめに眠ること。
「しも」強くさしていふ助詞。
「のこしおく書」古人の書を云へり。
「たらちねの」親の枕詞。
「たらちねのみおやの御代」御父孝明天皇の御代。
「あらたまる世」明治維新前後の改まりゆく世を也。
「かねごと」豫言なり。
「大かたなく」あらかた無くの意。

光陰如矢

思ふことつらぬかむ世はいつならむ射る矢のごとくすぐる月日に

神祇

神垣に朝まゐりしていのるかな國と民とのやすからむ世を

寄神祝

國民はひとつ心にまもりけり遠つみおやの神のをしへを

寄道祝

かみかぜの伊勢の内外のみやばしら動かぬ國のしづめにぞたつ

ちはやぶる神の御代よりひとすぢの道をふむこそうれしかりけれ

寄國祝

かしの實のひとつ心に萬民まもるがうれし橿原のくに

橿原の宮のおきてにもとづきてわが日本の國をたもたむ

仁

國のためあたなす仇はくだくともいつくしむべき事な忘れそ

〔神垣に〕神前に也

〔遠つみおやの云々〕皇祖皇宗の御遺訓を也。

〔かみかぜの〕伊勢の枕詞。

〔内外のみやばしら云々〕内外のみやは内宮と外宮とをいふ。内宮は天照大神を外宮は豐受大神を祀る。

〔かしの實の〕ひとつの枕詞。かしの實はたゞ一つづつなるものなればかく用ゐらる。

〔橿原の云々〕神武天皇大和の國橿原の地に都を奠め給ひて國の基を定め給ひしにもとづきてと也。

〔ことのはにあまる誠〕言葉につくし得ざる誠なり。
〔人の司〕人の上に立つ人。
〔うつせみの〕世の枕詞。
〔世のため〕世界人道のための也。
〔やは〕反語なり。
〔沈みし人云々〕明治三十七年六月十五日敵の艦隊わが運送船常陸丸佐渡丸を砲撃し、常陸丸乘組の勇士のこれに死するもの多し。故に宜へるならむと拜せらる。
〔この時にしも〕この時に當りて也。

誠

ことのはにあまる誠はおのづから人のおもわにあらはれにけり

行

世の中の人の司となる人の身のおこなひよたゞしからなむ

折にふれて

思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は長きものにぞありける

すゝむべき時をはかりて進まばず危き道にいりもこそすれ

うつせみの世のためすゝむ軍には神も力をそへざらめやは

いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ

戰いにはにもたゝであた波に沈みし人の惜くもあるかな

くにの爲身をかへりみぬますらをゝあまたえにけりこの時にしも

夢さめてまづこそ思へ軍人むかひしかたのたよりいかにと

軍人つくす力のあらはれてけふもすゝみしたよりをぞきく

おのが身にいたでおへるもしらずしてすゝみも行くかわが軍びと

たゝかひの場はいかにと思ふかないなゝく駒の聲をきくにも

仇まもる船をいかにとおもふかな青海原を見るにつけても

戰のにはのおとづれいかにぞとねやにも入らずまちにこそまて

つばらにもしらするふみにつはものゝ勇む姿も見るこゝちして

とる筆はかぎりありけり使してとはせてを見むたゝかひの場

つかひせし人のかへるをまちつけて軍のにはのことをこそ問へ

軍人ちからつくしゝかひありて仇もなかばゝまつろひにけり

石だゝみかたきとりでも軍人みをすてゝこそうち碎きけれ

ひさしくもいくさのにはにたつひとは家なる親をさぞ思ふらむ

國の爲いくさのにはにたつ人に仇なすやまひふせぎてしがな

年へなば國のちからとなりぬべき人をおほくも失ひにけり

たゝかひに身をすつる人多きかなおいたる親を家にのこして

はからずも夜をふかしけりくにのため命をすてし人をかぞへて

港江に萬代よばふ聲すなりいさをゝつみし船やいりくる

〔きくにも〕聞くにつけてもの意。
〔まちにこそまて〕ひたすらに待ち給ふと也。
〔つばらに〕つまびらかに也。
〔とはせてを見む〕をは強意の助詞。
〔まちつけて〕待ちはたしての義。
〔まつろひにけり〕服從せりと也。
〔石だゝみ云々〕如何なる固き敵壘も我が軍人の忠勇によりて、遂に陷落したりとの御意也
〔仇なすやまひ〕疫病を宣へりこ
〔いさを〕功績。
〔港江に云々〕我が軍艦の凱旋を詠ませ給ひしにて、萬代云々は萬歲の聲也。四の句言ひ掛け面白く拜し奉る。

〔ますらを〕丈夫、雄々しき男子の義
〔思ふことゝ云々〕正義のため宣戰も目的を達し、平和克復を待たれ給ふ御意也、
〔年にし〕しは强意の助詞。
〔なりはひ〕生業、職業の義。
〔よし〕たとひ。
〔位山云々〕位階に高下の別はあれどなり。
〔ぬけいでし云々〕ふし、しげりは竹といふよりの緣語竹のそのふは皇族の義。
〔あらたまる云々〕維新の機運に際し給ひしときに也。
〔いちはやく〕いきほひ烈しく也。

かぎりなき世にのこさむと國の爲たふれし人の名をぞとゞむる

戰のにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ

よとゝもに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさをを

くにのため心も身をもくだきつる人のいさををたづねもらすな

思ふことつらぬきはてゝ國民の心やすめむときぞまたるゝ

いかにぞとおもひしことはさもあらで思はぬことをきく世なりけり

野も山もさびしかるらむ花紅葉みつゝ遊ばむ年にしあらねば

ちはやぶる神の心にかなふらむわが國民のつくすまことは

なりはひはよしかはるとも國民の同じこゝろに世を守らなむ

國民のひとつごゝろにつかふるもみおやの神のみめぐみにして

身をまもる道はひとすぢ位山たかきいやしきしなはあれども

ぬけいでしふしを見せなむいやましに竹のそのふのしげりあひつゝ

あらたまる事の始にあひえし、みおやのみよを思ひやるかな

いちはやく進まむよりも怠るなまなびの道にたてるわらはべ

家富みてあかぬことなき身なりとも人のつとめにおこたるなゆめ

いそのかみ古きためしをたづねつゝ新しき世のこともさだめむ

いにしへの御代の教にもとづきてひらけゆく世にたゝむとぞ思ふ

さわがしき風につけても外國にいでゝ世渡る民をこそおもへ

あがたみにやりてし人のものがたり今日こそきかめ暇えたれば

をちこちの縣守るひとつどひけり民のなりはひとはせてを見む

さま〴〵のうきふしをへて呉竹のよにすぐれたる人とこそなれ

ことしげき世にはあれども國民を教ふる道に心たゆむな

使してとはせてをみむ山里にすめる老人さびしからむを

わけばやと思ひ入りぬる道にしも高きしをりのみえそめにけり

しほどきになりにけらしも濱どのゝかきね近くも波のおとする

明治三十八年

新年山

〔家富みて云々〕富み足れる身なりとも也。
〔ゆめ〕決して。
〔いそのかみ〕枕詞
〔ためし〕先例。
〔さわがしき云々〕世のさわがしきにつけても也。
〔あがたみに云々〕地方視察にと遣はされし人の也。
〔縣守るひと〕地方官會議に上京せる知事を宣へり。
〔うきふし〕ふしは竹の縁語。
〔呉竹の〕よの枕詞竹の節を古くよといふよりかく用ゐらる。
〔とはせてを〕をは強意の助詞。
〔しをり〕しるべ。
〔しほどき〕滿潮の時なり。
〔新年山〕歌御會始の御製也。

「ほぎごと」祝賀の詞。
「敷島の道云々」歌道をいふ。新年の詠進歌によりて、人民も歌によりて新年の賀詞を申上げたるを嘉みし給へる也。
「仇の城云々」旅順開城を云へり。
「あらたまの」年の枕詞。
「しる」知る也。
「こもるべしやは」やはは反語。籠るべきにあらずと也。
「時の來ぬれば」その時機來らばの意。

富士のねに匂ふ朝日も霞むまで年たつ空ののどかなるかな

新年祝道

たちかへる年のほぎごと敷島の道によりてぞ民もいひける

をりにふれて

あたらしき年のたよりに仇の城ひらきにけりときくぞ嬉しき
あらたまのとしたつ山をみる人のこゝろ〳〵を歌にしるかな

初春風

梅にふれ柳にふれてきのふけふ風のこゝろも春になるらし

谷鶯

都にはいづる心やなかるらむ谷かげにのみ鶯の鳴く

老梅

さむしとてこもるべしやは枝くちし老木のうめも花さきにけり

山家梅

風さえて雪のみふりし山里も梅さきにけり時の來ぬれば

旅宿梅

旅衣ぬぎかへずして見つるかなあるじがいけし梅のひと枝

折梅贈人

うめの花をりてを見せむ老人は春さむしとてとはじと思へば

梅花散

まつりごといとまなきまに過ぎにけり久しと思ひし梅のさかりも

野春風

うら〳〵とかすむ春野も菜の花のかをるばかりの風はありけり

朝春雨

花どきの朝ぐもりかとおもひしを音せぬ雨のふりいでにけり

夕春雨

燕とぶしだり柳に夕日かげかつさしながらはるさめぞ降る

待花

木のもとにいづればまづぞ待たれける花みて遊ぶ春ならねども

「あるじ」旅宿の主人を宣へり。
「折りてを」をは強意の助詞。語勢の關係にて無意味に用ゐらる場合もあり。
「うら〳〵と」のどかに。ほがらかに。
「かをるばかりの」かをりを誘ふほどの也。
「しだり柳」枝の長く垂れたる柳。
「かつ」一つの事ありてまた他の事の兼ねてあるにいふ
「春ならねども」戰役中にて、長閑なるべき春にあらねども也。

〔さかばかつ〕咲くと共に也。
〔にほひにて〕映えて美しきをいへり
〔うつせみの〕代の枕詞。
〔なりどころ〕別莊をいふ。
〔窓のと〕窓の外をいふ。
〔わらは〕兒童。
〔このもと〕樹の下
〔花のうたげ〕觀櫻御宴なり。

さかばかつ散りなむ花をまちどほに思ふぞ人のこゝろなりける

雨後花

春雨のなごりの露をにほひにてたわめる花のうるはしきかな

別業花

うつせみの代々木の里のなりどころ花の梢も苔むしにけり

窓前花

窓のとの花はさかりに匂ふとも書よむわらはに心ちらすな

庭前花

宴せむいとまなしともしらずしてわが庭櫻さきそめぬらむ

老人見花

このもとにいでゝぞ遊ぶ老人も花のときには家にこもらで

花下客

はまどのゝ花のうたげを年毎に外國人も待つといふなり

花下言志

〔北支那のたむろ〕満洲の戦地をさしていへり。
〔たゝかひのには〕戦場。
〔しづごゝろ〕静かにおちつきたる心
〔がな〕語尾につけて希望を表はす語
〔なか〳〵に〕却つて也。
〔山ぶみ〕山の渉猟の義。
〔遠乗〕馬に乗りて遠く行くをいふ。
〔いくか〕幾日。
〔かへしはつべき〕耕し終るべきの意。

ちかゝらばわが庭ざくら北支那のたむろに折りてやらましものを

たゝかひのにはのみ思ふこの春は花の木かげもしづごゝろなし

あらたまの年にひとたびさく花を心しづかにみむ春もがな

花時風雨多

雨風のおほき年かな櫻花まちつるほどはのどかなりしを

落花

なか〳〵にたづねおくれて散る花のさかりにあひぬ嵯峨の山ぶみ

雨中落花

ふく風をふりしづめたる春雨になほとゞまらでちる櫻かな

遲日

まつりごといとまなき身も春雨のふる日は長くおもほゆるかな

遠乗にいでにし人はかへれども春の日かげはなほたかくして

春田

いくか經てかへしはつべき小山田にたてるをのこの數のすくなき

〔柳のいとの〕ながきの序に用ゐさせ給へり。
〔曉をしらず云々〕孟浩然の詩に「春眠不覺曉、處處聞啼鳥」とあるより宣へり。
〔ひむかし〕東の古語。
〔さえかへる〕つよく凍ゆる也。
〔春のたつ〕立春也
〔ことある〕事件のあるにて、戰役をさして宣へり。
〔山川〕山間をながるゝ川。
〔せ〕河流の水淺くして流れの急なるところをいふ。
〔うつぎ〕灌木にて初夏に白色の花を開く。

春夕

くれぬべく見えての後もくれぬかな柳のいとのながきはる日は

春夢

曉をしらずといへる春ながらことしは夢もやすくむすばず

春遠情

ひむかしの都の空も春寒しさえかへるらむ北支那の山

故郷を遠くはなれていくさ人花のさかりもしらずやあるらむ

をりにふれて

春のたつ空にむかひて世の中ののどかにならむ時をこそまて

あつ氷とくるを待ちて北の海にすゝみゆくらむわが軍ぶね

さくら花霞みてにほふ山みれば世にはことある春としもなし

水邊卯花

鮎はしる山川のせにかげ見えてひとむらうつぎ花さきにけり

尋時鳥

〔けらし〕けるらしの略。過去を推測する意を表はす語
〔わたどの〕渡殿の儀、廻廊也。
〔いまめかぬ〕昔風の也。
〔手ぶり〕風俗、ならはし。
〔たむろ〕出征軍人の假の軍營也。
〔おふ〕追ふ也。
〔螢のかげ〕螢の光の義。

時鳥いでにしあとに來にけらしたづぬる山も聲のすくなき

橘遠薰

九重の庭のたちばな吹く風にわたどのこえてかをりきにけり

なか〱に遠ざかりてぞまさりける花橘のたかきかをりは

茶摘

このめつむ宇治のをとめごいまめかぬその手ぶりこそゆかしかりけれ

梅雨

梅雨にたゝみのうへもしめれるをたむろのうちぞ思ひやらるゝ

梅雨寒

さみだれの雨のさむさにおもふかな夏は暑きがこゝちよしとは

風前螢

おふ人もあらぬ中洲の蘆原を風にふかれてゆくほたるかな

海邊夏月

あしはらの螢のかげは消えはてゝみちたる汐に月ぞ浮べる

沙月涼

白波のよせてあらひしあとみえてまさご清し夏のよの月

夜納涼

ともしびも吹きけつばかり風たちてはしゐ涼しき夏のよはかな

夏雲

雲ばかり空にまよひて夕立のふりいでぬまの暑くもあるかな

夏山水

たらぬこととなしとや夏は思ふらむ水にとみたる鹽原のさと

故鄕夏

山水を池にひきたるふるさとの庭こそ夏はこひしかりけれ

夏木

一木にて庭をおほへるくすのきの陰こそ夏はすみよかりけれ

夏花

生垣のかなめのうへにさきながらねざしはみえぬ晝顏のはな

〔白波の云々〕海濱の夏の夜の月、さながら目覩とするやうに拜す。
〔吹きけつ〕吹き消す也。
〔たらぬ――云々〕鹽原は清流にのぞみてよき水の多きところなれば、夏は足らぬことなしと人々の思ふならむと也。鹽原は下野國鹽谷郡にあり。

煽風器

かざぐるまいざかけさせよ日ざかりの暑さいとはず人のまゐくる

夏述懐

まつりごといでゝきくまにかくばかりあつき日としも思はざりしを

寄夏草述懐

國のため民の爲には夏草のことしげくともつとめざらめや

をりにふれて

つはものゝ毛織の衣ぬらすらむ樺太じまのなつぐさのつゆ

いつかわが心にかゝる雲はれてすゞしき月のかげにむかはむ

暑しともいはれざりけり戰の場にあけくれたつ人おもへば

朝顔

水瓶にうかべおきつる朝顔もしぼまむ時のくればしぼみぬ

野亭萩

やちくさの花野を庭と見る庵もなほ秋萩をうゑてけるかな

「かざぐるま」煽風機をいへり。
「まゐくる」參り來るにて、參內する也。
「夏草の」しげくの枕詞。
「つとめざらめや」やは反語。つとめずしてやはあるべきの義。
「樺太じま云々」樺太にある將卒を思ひやらせ給へるなり。
「いつかわが云々」平和克復を待たれ給ひて詠ませ給へり。
「あけくれ」朝暮、あさゆふの義。
「やちくさ」草の種類多きをいふ。
「花野」草花の咲ける野邊をいふ。

「さやかなる」明らかなるの意。
「波風の云々」戰役一掃せられて平和になりし世のと也。
「たらちねの云々」月に對して昔御父帝の御陛下にましましし幼時を追憶せられて、月下懷古の情を述べさせ給へり。
「野邊のたむろ」戰地に於ける軍營を宜へり。
「さぎり」さは接頭語、霧なり。

薄隨風

秋風や吹きかはりけむしの薄そむきし方にうち靡くなり

待月

海原もひと目にみゆるたかどのに登りてまたむ秋の夜の月

對月

さまぐ\にもの思ふ夜もさやかなる月にむかへばなぐさまれけり

港月

いくさ船みなとにいりて波風のしづまれるよの月やみるらむ

月似昔

たらちねのみおやの宮にをさなくて見しよこひしき月のかげかな

月夜遠情

外國の野邊のたむろにこの秋は月やみるらむわがいくさびと

月前霧

大空はさやかに見えてさぎりたつ水のうへくらし秋のよの月

「千町田」田の區劃をいふ。多くの田なり。
「あがたの人」地方に居る人にして、地方官の義。
「九重のうち云々」宮城にありても寒風の吹きすさぶ夜は寢られぬほどなるにまして貧しき人民如何ならむとの御意のこもらせ給へる御意なり。
「窓のと」窓の戸なり。
「わたどの」渡り廊下。
「板じき」板のままにて疊のなき所也
「つはもの」軍人をいふ。
「たむろ」軍營。

秋水聲

なく蟲のこゑもまじりてふくる夜の枕に寒き水の音かな

をりにふれて

千町田のことしのみのりいかにぞとあがたの人にとはせてをみむ

霜夜聞鐘

霜ふみて撞くらむ人の寒ささへ思ひやらるゝ鐘のおとかな

木枯

九重のうちにありても木枯のふきあるゝ夜はねられざりけり

寒月入窓

窓のとやさしわすれけむわたどのに冴えたる月のかげはみゆるは

雪

たゞしばしあけてみるまに板じきのうへまでつもるけさの雪かな

雪滿群山

ふる雪もまたれざりけりつはものゝたむろの寒さおもふ今年は

大空はみどりにはれて山といふ山みなしろく雪ふりにけり

湖邊雪

うちよする波はなみともみゆるかな渚の松にゆきはつもれど

禁庭雪

吹上のふつのあらしもうづもれて雪しづかなりここのへのには

雪中人來

埋火のもとにいざなへふる雪のはれまもまたできたる老人

待春

戰のにはの寒さをおもふにもまづ待たるゝは春にぞありける

歳暮

人みなのおどろきがほに惜むかなにはかにくるゝ年ならなくに

冬夢

窓をうつ霰のおとにさめにけりいくさの場にたつとみし夢

折にふれて

「山といふ山」あらゆる山の意。
「うちよする浪は」うちよする波は白く砕けて、渚の雪とは自然と異りて見ゆるとなり。
「吹上」宮城内にある御苑。
「はれまもまたで」なさ、時刻に遅れじと雨を犯して參内せる老人なり。
「年ならなくに」年にあらぬの意、譯しも來る事は前から知りて居る年の暮なれど、急にあはてさわぐ事なりと也。

たかきびの畑にこほれる霜ふみて仇さぐるらむつはもの丶とも

天

すめるもの昇りてなりし大空にむかふ心も清くぞありける

嶺上雲

とほければ風のひゞきはきこえねどたかねの雲の動きそめたる

長雨

はれまなく降る長雨に川水のあふれむことをまづおもふかな

行路雨

道のべにわれを迎へて立つ人のぬれもやすらむ雨のふりくる

曉

曉のねざめのとこにおもふこと國と民とのうへのみにして

原

山よりもさびしきものは限なき荒野の原をゆく日なりけり

道

「たかきび」高粱なり。
「仇さぐる」敵の狀況を搜索する也。
「つはもの丶とも」兵士たち也。
「すめるもの云々」清澄なる氣の上りて天と成りたると也。日本書紀卷一に「古天地未レ剖、陰陽不レ分、混沌如二鷄子一、溟涬而含レ牙、及下其清陽者薄靡而爲レ天、重濁者淹滯而爲上レ地」とあり。
「ぬれもや」やは疑問の語。
「山よりも」山路を行くよりも也。

しるべする人をたよりにわけいらばいかなる道かふみ迷ふべき

蹈み分くるひとなかりせば末つひにわかずやならむちよのふる道

波

あるゝかと見ればなぎゆく海原のなみこそ人の世に似たりけれ

海

秋つしま四方にめぐれるうなばらの波こそ國のかきねなりけれ

四海清

よものうみ波しづまりてちはやぶる神のみいつぞかゞやきにける

島

しまといふしまのはてまで司人めぐみの波もかけなもらしそ

故郷池

舟うけてをさなあそびをせし時を思ひうかぶる庭のいけ水

家

ことそぎし昔の手ぶりわするなよ身のほど〳〵に家づくりして

「しるべする人」案内する人の義。

「わかずやならむ」分けがたくなるべしと也。

「ちよのふる道」古より習はしきたれる道の義。

「なぎゆく」風やみて波のしづまるをいふ。

「秋つしま」日本の一名。

「みいづ」御威徳。

「司人」官吏をいふ

「めぐみの波云々」恵みをかけもらすなかれと也。

「うけて」うかべての意。

「ことそぎし」ことはぶきし也。よろづ倹約すべき旨を示させ給へり。

「手ぶり」風俗の義。

「旅ゆく人」外國へ行く使臣の事也。
「つゝがなかれ」わづらひなかれの義
「なりはひ」生業、職業なり。
「家づと」家へもちかへる土産なり。
「はぐくみ」親鳥の雛を羽の間に抱きて育つるより養育の義に用ひらる。
「いそしむ」つとめはげむの意。
「縣守」地方の長官をいふ。
「こゝろにかけよ云々」心にかけてよく治めよと戒め給へるなり。かまどの烟は仁徳天皇の故事より出づ。

餞別

盃をあげてぞ祝ふとつくに、旅ゆく人のつゝがなかれと

旅思

ゆく所わが國ながら旅にあれば都おもはぬときなかりけり

旅中述懷

なりはひの暇なき世を思ふかなしづが手ぶりをまのあたりみて

旅宿人來

うれしくも旅のやどりをとひきけり都にありとおもひつる人

羈中眺望

たびねする山邊のけしきおもしろし繪にうつさせて家づとにせむ

田家

をさな子をはぐゝみながら田に畑にいそしむしづの暇なげなる

田家煙

縣守こゝろにかけよしづがやのかまどの烟たつやたゝずや

〔葎〕むぐら。いぶせく茂る蔓草也。〔植ゑてし〕植ゑたりし也。〔山深く云々〕明治三十八年四月、軍艦淺間へ、一羽の鷹飛び來りて哨兵勤務の兵士が生捕りたり、日清の役の際に高千穂艦上に靈鷹を捕へたることあり、此等を聞召して詠み給へるなるべし。〔かしましく〕やかましくの意。

草

うとましと思ふ葎はひろごりて植ゑてし草の根はたえにけり

竹

ますらをの心に似たりいさゝかもまがるふしなき窓のくれ竹

鷹

山深くこもりしたかもいでぬらし軍のかちを世につげむとて

鷄

園守におはれやすらむかしましく鷄なくなり庭のはやしに

馬

うちのりて雪の中道はしらせし手馴のこまも老いにけるかな

軍馬

たゝかひの場にすゝみて乘る人と共にたふれし駒はいくらぞ

酒

冬の夜の寒さをしのぐ酒だにもえがたかるらむつはものゝとも

〔うるはしく云々〕上手に書くも下手なるもと也。
〔のり〕をしへ、又は教書の意。
〔がな〕語尾につけて希望の意を表はす語。
〔この時にして〕日露の役に際して國運の轉機に會せる重大なる時なればかく宣給へり。
〔生ひたちし縣〕生れたる地方の義。
〔やまと〕日本。
〔言葉の花をつむ〕歌を詠むことを宣へり。
〔まし〕未來の意を表はす語。
〔なむ〕願望の意を表はす語。
〔のこしおきてむ〕殘し置きたしと也。

書

うるはしくかきもかゝずも文字はたゞ讀みやすくこそあらまほしけれ

よろづよの國ののりともなる書をのこしてしがなこの時にして

詞

生ひたちし縣によりてかはりけり同じやまとの人のことばも

歌

戰のいとまある日はものゝふも言葉の花をつむとこそきけ

ひとりつむ言の葉草のなかりせばなにゝ心をなぐさめてまし

新しきふしはなくとも呉竹のすなほならなむ大和ことの葉

むらぎもの心のうちに思ふことといひおほせたる時ぞうれしき

手習

手ならひをものうきことに思ひつるをさな心をいまくゆるかな

畫

とき〴〵にうつりゆく世のありさまを畫にかゝせてものこしおきてむ

山水畫

きよき瀬に人の心をみちびくはこの山水のうつし繪にして

〔きよき瀬に云々〕人の心を淨き方に導くは也。〔うつし繪〕繪畫の義。

圖

ひとひらのかたをしるべに軍人しらぬ野山にせめかいるらむ

〔ひとひら〕一枚也〔かた〕畫圖をいふ〔せめかいるらむ〕攻めいることならむか也。

硯

ものかゝむ暇なければすらせたる硯の墨もそのまゝにして

旗

くもりなき朝日のはたにあまてらす神のみいつをあふげ國民

〔朝日のはた〕旭日旗をいふ。

笠

しづはけふ家にこもりてくらすらむ菅のをがさの軒にかゝれる

玉

さま〴〵の玉をあつめてきずなきはえがたきものとさらにしりぬる

盃

いさをある人をつどへて盃をあたへむ時をまたぬ日もなし

〔いさを〕功績。〔つどへて〕集めての意。

〔小瓶〕小は接頭語
〔にひぶみ〕新聞紙
〔あとなしごと〕無根の事實。
〔時はかるうつは〕時計を言へり。
〔まち〳〵〕さまざまの義。
〔國にして〕わが國にて也。
〔いそしみて〕つとめはげみての意。
〔あた波〕敵を波に比していふ。
〔くれの湊〕年の暮と呉の軍港とにかけて用ゐさせ給へり。
〔とる棹の云々〕手にとる棹の長き如く心を長くもち、成功を急がずしこと也。

花瓶

うるはしき花をゐがける小瓶には松の枝をや折りてさしてむ

新聞紙

みな人の見るにひぶみに世の中のあとなしごとは書かずもあらなむ

時計

進むありおくるゝもあり時はかるうつはの針もまち〳〵にして

船

數あまたあるが中にも國にしてつくりし船をみるぞうれしき

いそしみてます〳〵船はつくらなむ海をめぐらす國のかために

港船

あた波をしづめつくして年もいまくれの湊にかへる船かな

蘆間舟

とる棹のこゝろ長くもこぎよせむ蘆間の小舟さはりありとも

遠帆連波

遠けれどまがはぬものは波のうへにつらなる船の帆かげなりけり

晩鐘

入しげき都の市にきゝてだにさびしきものを入相のかね

花火

かちいくさ祝ふなるらむ市人が花火うちあぐる音きこゆなり

述懐

思ふことおほかる中にをりをりはなぐさむこともあるよなりけり

たゝかひのうへに心をつくしつゝ年のふたとせすごしけるかな

末つひにならざらめやは國のため世のためにとわがおもふこと

寢覺述懐

ゆくすゑはいかになるかと曉のねざめねざめに世をおもふかな

男

弓矢とる國にうまれしますらをの名をあらはさむ時はこの時

女

「まがはぬ」他のものとまぎらはしからざるをいふ。
「入相」くれがた也
「末つひにならざらめや」は反語、たとへ一時成らずとも、將來その目的は必ず成るべしと也。
「ねざめねざめに」目ざめる毎にの意。
「弓矢とる國」尚武の國の義。

なよたけはすなほならなむうつせみの世にぬけいでむ力ありとも

老人

いさみても弓矢のことをかたりてしますらをもいたく老いにけるかな

年高き老木の松はいにしへのあとゝふ道のしをりなりけり

子

世の中のことまだしらぬうなゐ子も時に合ひたる遊をぞする

友

わたつみの波のよそにもへだてなく親しむ友はある世なりけり

民

國の爲いよ〳〵はげめちよろづの民もこゝろをひとつにはして

海人

いさりする親をたすけてあまの子はいとけなきより小舟こぐなり

樵夫

柴かりにいとけなきよりいづる子はまなびの道に入るひまやなき

「なよたけ」柔軟なる竹、女徳に比喩し給へり。
「なむ」願望の意を表はす語。
「うつせみの」世の枕詞。
「世に」世間の義と竹の節よとを兼ねて用ゐさせ給へり。
「いさみても」威勢よく武勇談を語つた人。
「弓矢のこと」いくさのことの意。
「年高き云々」老人を老松に比して宣へり。
「しをり」道しるべ
「うなゐ子」幼兒也
「時に合ひたる遊」今の時に合ひたる遊び、卽ちいくさ遊びなり。
「いさり」漁の事也。
「あま」漁夫をいふ
「いとけなき」をさなき也。

教

ちはやぶる神のをしへをうけつぎて人のこゝろぞたゞしかりける

學生

世の中の風にこゝろをさわがすなまなびの窓にこもるわらはべ

おこたらず學びおほせていにしへの人にはぢざる人とならなむ

心

すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな

しのびてもあるべき時にともすればあやまつものは心なりけり

夢

まどろめば夢にぞみゆるむらぎもの心にかけて思ふひとこと

思往事

さま〴〵のことにあたりて思ふかな國ひらかしゝ御代のみいつを

社頭

神路山みねのまさかきこの秋は手づからをりて捧げまつらむ

〔世の中の風〕世の風潮の義。〔學びおほせて〕學びを卒へし也。〔しのびても〕耐へ忍びても也。〔すなほなる〕從順なる意。〔むらぎもの〕心の枕詞。〔國ひらかしゝ御代〕神武天皇の御世を申すに。〔神路山〕伊勢內宮の背後に立てる山〔まさかき〕まは添へたる詞、榊なり。〔この秋云々〕日嗣の役めでたく終りを告げたれば、伊勢神宮に御親祭あらせられむとする思召を宣へり。〔まつらむ〕奉らむなり。

〔ひろまへ〕神殿の御前をいふ。
〔おろかならぬは〕疎略ならざる事はなり。
〔うらやすの國〕泰平なる國の義、日本國の古稱。
〔しげりそふ〕增殖する意。
〔葦原〕日本の一名
〔しづ〕人民をいふ
〔縣もり〕地方長官なり。
〔たづき〕よるべ也
〔なむ〕願望の意を表はす語。
〔とき〕疾き也。
〔ちよろづ〕數の多きをいふ。

社頭杉

しげりあふ杉の林をかこひにてちりにけがれぬ神のひろまへ

神祇

世の中にことあるときぞしられける神のまもりのおろかならぬは

寄國祝

うけつぎて守るもうれし千早ぶる神のさだめしうらやすの國

寄民祝

民草のしげりそふこそ葦原の國のさかゆくもとゐなりけれ

仁

しづがうへに心をとめて縣もりたづきなき身をいつくしまなむ

誠

とき遲きたがひはあれどつらぬかぬことなきものは誠なりけり

勇

ちよろづの仇にむかひてたわまぬぞ大和をのこの心なりける

「國民の云々」常に國民の上に大御心をかけさせ給ふことを宣給へるなり
「沖つ浪」沖にたつ波浪、歸るの枕詞に用ゐらる。
「ともしび」常に蠟燭を用ひさせ給へるよしに洩れ承る
「おこせし」送り來し也。
「ねぎらはむ」勞を慰めむとて也
「あた船を云々」バルチック艦隊を日本海にて邀へ討ちしことを宣へる御製と拜せらる。

思

國民のうへやすかれとおもふのみわが世にたえぬ思なりけり

凱旋の時

外國にかばねさらしゝますらをの魂も都にけふかへるらむ

凱旋觀兵式にのぞみて

戰にかちてかへりしつはもの丶勇ましくこそたちならびけれ

凱旋觀艦式に臨みて

いさましくかちどきあげて沖つ浪かへりし船を見るぞうれしき

をりにふれて

おのづから仇のこゝろも靡くまで誠の道をふめや國民

老人を家にのこしていくさびと國のためにといづるをゝしさ

ともしびをさしかふるまで軍人おこせしふみをよみ見つるかな

いつの日か歸り來ぬべきいくさ人ねぎらはむとてやりし使は

をゝしくも連りきつるあた船をうち碎きけりわがいくさびと

〔鏡に〕神座として据ゑし鏡に也。
〔むかしより云々〕未曾有の大戰に也
〔いすゞの宮〕伊勢神宮をいふ。
〔さくすゞの〕枕詞
〔おほ幣〕大いなる幣帛の義にして、尊敬の意を表はす
〔えぞのおく〕蝦夷は昔東北及び北海道に住みし人の稱日本の北のはての義。
〔をしへ草〕教育を草に譬へて宣へり
〔いさみたつ云々〕人の心のともすればはやりたつを若駒に譬へ給へり。

思ふことつらぬかずしてやまぬこそ大和をのこのこゝろなりけれ

國の爲いのちをすてしものゝふの魂や鏡にいまうつるらむ

むかしよりためしまれなる戰におほくの人をうしなひしかな

身をすてし人をぞ思ふまのあたり軍のにはのことをきくにも

萬代もふみのうへにぞのこさせむ國につくしゝ臣の子の名は

とつくにの人もよりきてかちいくさことほぐ世こそうれしかりけれ

天地の神にぞいのる民のため雨風ときにしたがひぬべく

久方のあめにのぼれるこゝちしていすゞの宮にまゐるけふかな

さくすゞの五十鈴の宮の廣前にけふおほ幣をさゝげつるかな

くもりなきあしたの空に神路山かう〴〵しくも見えわたるかな

えぞのおく南の島のはてまでもおひしげらせよわがをしへ草

つく〴〵と思ふにつけて尊きはとほつみおやの御稜威なりけり

いさみたつ人の心の若駒よあやふき道にすゝまざらなむ

手綱にもまかせぬものは勇みたつ人の心のあらごまにして

世に廣くしらるゝまゝに人みなのつゝしむべきはおのが身にして

こころざす方こそかはれ國を思ふ民の誠はひとつなるらむ

世の中の事ある時にあひぬともおのがつとめむわざな忘れそ

物學ぶ道にたつ子よおこたりにまされる仇はなしとしらなむ

ひらけゆく世のさま見ればなかなかに昔にかへることもありけり

さまざまにもの思ひこしふたとせはあまたの年を經しこゝちする

けなげにも生立ちぬべきさまみえて乳子のまなじりたけくもあるかな

こゝろみし言の葉くさに道の師の露のひかりやそひてかへらむ

明治三十九年

新年宴會

新しき年のうたげにうれしくもかはらぬ人のつどひけるかな

初春祝

軍人みなひきあげてひとごゝろのどかなる世の春たちにけり

[illegible]也 [illegible]學ぶ道」學問の道をいふ。「[illegible]」[illegible]てなり。「ふたとせ」[illegible]書中の二年間を[illegible]御製を拜して、如何に宸襟を悩ませ給ひしか、何人も感泣せざるものあらむや。「けなげ」いさましきこと。「乳子」[illegible]「まなじり」[illegible]に同じ。「道の師」歌道の御師御歌所長高崎正風男を指へり。「うたげ」宴會をいふ。「かはらぬ人」年々同じ人と言ふ義也「みなひきあげて」軍人の皆凱旋したまへるを指へり。

「のぼりきて云々」樓上にのぼりて窓を開けさせ給へば鶯もまた高き梢にうつりて鳴くと也。「おほかた」世間一般の義。「春の匂」春のけはひ、氣分などの義。「まさごぢ」海邊の白砂の路。「なぐさめ草」慰めのために。「白川の里」京都の北に當りてある山村。この地より石材を伐り出すこと多し。

樓上聞鶯

のぼりきて窓をあくれば鶯もたかきにうつる聲きこゆなり

見梅

まつりごと暇ある日にたちいでゝはじめて梅の花をみるかな

梅花散

梅の花ちる頃よりぞおほかたの春の匂は深くなりぬる

海邊若草

白波のよせてはかへるまさごぢにいつ若草の生ひいでにけむ

蕨

老人のなぐさめ草におくりてむ庭の蕨はすくなけれども

春月寒

さかりなる花の梢に匂へどもふくれば寒し春のよの月

里春雨

いはほきる音もしめりて春雨のふる日しづけき白川の里

春駒

友をおひともにおくれて若駒のおもしろげにも遊ぶのべかな

花滿開

濱殿の宴のまうけはやゝもよおしたゆふべに花のさきそふ

風靜花盛

櫻花かをるばかりの春風はふかぬ日よりものどけかりけり

月前花

ながゝらぬ花のさかりのうれしくも月の夜ごろにあひにけるかな

花滿山

いまよりは櫻山とや名づけてむ向ひの高嶺花さかりなり

山家花

垣根にはうゑぬ宿かなうちわたすたかねの花を庭木にはして

觀櫻會

のどかなる春をぞいはふ濱殿の花のうたげに人をつどへて

「濱殿」濱離宮。
「まうけ」準備なり
「花のさきそふ」櫻花の滿開になるべしと宜へり。
「かをるばかりの」花の香を誘ひくるほどの弱き風也。
「ながゝらぬ云々」花の盛は極めて短きものなるに幸にも月ある頃にあへりと也。
「てむ」未來に關して願ふ意を表はす詞。
「うちわたす」見渡す。
「つどへて」集めてなり。

翫花

さかりのみなにかはいはむ櫻花ふゝむも散るもにるものぞなき

夕落花

あすもまた人に見せむと思ひしをこの夕風にちる櫻かな

池落花

はまどのゝ庭のいけ水あさしほのみちたるうへにちる櫻かな

蝶

咲きつゞく花より花にあくがれて蝶も夢みるひまやなからむ

藤花盛

春の日の長きさかりをさかりにて藤の花さく紫のには

春旅

とほからぬ旅にいでゝもみてしがな鶯なきてさくらちるころ

をりにふれて

親も子もうちつどひてやいくさ人ことしは家の花を見るらむ

〔さかりのみ云々〕何とて花の盛のみを賞せんやと也。〔ふゝむ〕ふくむ。花のいまだ開かざる蕾をいふ。〔にるものぞなき〕類なく美しき意。〔あさしほ〕朝潮也〔あくがれて〕浮かれて也。〔長きさかり〕春の日の永きを言へり〔さかりにて〕藤の花の盛なるをいふ〔紫のには〕禁中を紫微宮といふよりして禁苑をいふ。〔とほからぬ云々〕近き所へ行幸にも出でみまほしと也

殘鶯

たけのこの竹になりたる庭にまだ春をのこして鶯のなく

新樹風

みづえさす樫の下みち露ちりて夏なほ寒き朝かぜぞふく

都時鳥

きゝしらぬ人もありけりほとゝぎす都になくはたまさかにして

早苗

早苗とるころぞ賑ふたゝかひにいでにし民も里にかへりて

橘

去年の實の殘るかたへに橘のことしの花もさき匂ひけり

梅雨久

さみだれの雨の久しきいつはあれど今年に似たる年なかりけり

蘆間螢

川岸のあしはらなびき吹く風にとばぬ螢のかげうごくなり

〔春をのこして〕鶯は春鳴くものなれば、かく云へり。
〔みづえさす〕みづみづしく若葉の生ひ出でたるをいふ
〔たまさか〕稀なるをいふ。
〔早苗〕早は添へたる詞、苗なり。
〔いつはあれど〕いつもあれどの意。
〔ことしに似たる〕云々、五月雨は毎年のことなれど、今年のごとく、長く降るはなしとなり。
〔とばぬ螢〕蘆の葉にすがれる螢也。

［しきしまの］やまとの枕詞。
［やまと撫子］日本産の撫子。小兒のことにかけて常に用ゐらる。
［いつくし］うつくし、かはゆらしの意。
［かげやまばゆき］日影のまばゆきにやあらむと也。
［はたゝがみ］烈しき雷をいふ。
［蔀］しとみと讀む日除けに又は風雨を防ぐに用ゐる戸にて、上に釣りあげたるもの。
［いふまで］いふほど也。

瞿麥

しきしまのやまと撫子もゝ草の花にまさりていつくしきかな

百合

傾きてさけるを見ればてらす日のかげやまばゆき姫百合の花

萍花

風わたる山下水にたゞよひてすゞしくみゆる浮草のはな

夕立

はたゝがみ光きらめく夕立に蔀おろせといひさわぐなり

野夕立

かゞやきし入日のかげもきえはてゝふじの裾野に夕立のふる

樹陰納涼

わが庭の大木のかげは風すゞし山にひとしと人のいふまで

夏杉

さしかはる杉のわか葉に山里の垣あたらしく見ゆるころかな

殘暑

かざぐるまかけぬ日もなし秋くれど西日のあつさ堪へがたくして

行路薄

いづくをかわけてきつらむかへりみる野みちはすべて薄なりけり

淺茅

いなごとぶかげのみ見えて露しげき淺茅が原はゆく人もなし

秋風

あしひきの山さやかにもうちはれてすみたる空に秋風ぞふく

秋霜

ながつきの在明の月の影さえて紅葉のうへにみゆるはつ霜

霧中月

雲ならばひまもる影もまたましを霧にこもれる秋の夜の月

旅中月

あかざりし花野の月よ旅やかたいでゝふたゝび見まほしきかな

〔かざゞるま〕扇風機を言へり。
〔淺茅が原〕茅のまばらに生ひたる原也。
〔うちはれて〕うちは動詞に冠して其意を強むる語。
〔ながつき〕陰暦九月をいふ。
〔在明の月〕朝まで殘れる月をいふ。
〔ひまもる〕隙間より漏るの意。
〔またまし〕ましは其の推量又は願望の意を表はす語待ち居らむものなるを也。
〔花野〕草花の咲き亂れたる野をいふ
〔旅やかた〕旅舍、行在所を言へり。

〔初時雨〕時雨は秋より冬にかけて降る雨。はじめて降る時雨をいふ。
〔山田もる〕もるは守る也。耕作する也。
〔しづ〕農民。
〔秋のよの〕月毛の枕詞に用ゐさせ給へり。
〔月毛の駒〕葦毛の少しく赤ばみたる毛色の馬をいふ。
〔花野のかぎり〕花野のある限り、總てを見そなはしたしと也。
〔えびかづら〕葡萄の古名。
〔山梨〕山梨縣なり
〔あとたえし〕昔ありて今は無くなりしの意。

霧未晴

水のうへに薄き日かげはさしながらまだはれやらぬうぢの川霧

菊花盛久

ふたゝびの宴をやせむ菊の花ひかずふれどもなほさかりなり

初紅葉

たゞ一木色づきたるは初時雨そめこゝろみし梢なるらむ

雨後紅葉

山のはにぬれて見ゆるは村時雨いまそめあげし紅葉なるらむ

秋田家

山田もるしづを思へばかばかりの秋の夜寒をなにかいとはむ

をりにふれて

秋のよの月毛の駒にむちうちて花野のかぎりわけみてしがな

えびかづら色づきそめぬ山梨の里の秋かぜ寒くなるらし

あとたえしこともさま〴〵きゝてけり秋の長夜のむかしがたりに

いさましく語りかはしていくさ人かへる船路に月やみるらむ

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

夕落葉

夕づくひかげろひはてゝ風寒くふきたつ庭にちるこのはかな

落葉有聲

なかなか〳〵に風のたえたるよはにこそおつるこのはの音はきこゆれ

湊千鳥

湊江に夜ふけていりし船人のこゑしづまりて千鳥なくなり

山皆雪

北支那にとゞまる人を思ふかなよもの山邊の雪を見るにも

野亭雪

ふりつもる雪のひろ野にたゞひとつ見ゆるいほりの寒げなるかな

田家雪

しづがすむ藁屋あやふくみゆるまでふりつもりたるけさの雪かな

〔夕づくひ〕夕日をいふ。
〔かげろひ〕かげになるをいふ。
〔なか〳〵に〕却つて也。
〔湊江〕港灣をいふ
〔北支那〕支那の北方の地にして、三十七八年の戰役に占領せし地方を宜へり。
〔藁屋〕藁にて葺ける粗末なる家。

〔がな〕語尾につけて希望の意を表はす助詞。
〔榊葉のこゑ〕神樂に榊といふ曲ありそを奏する聲をいふ。
〔しづれし〕木の枝などより雪の落つるをしづるといふ
〔ひゝらぎ〕冬に白色の小花を著く。
〔つちなる國云々〕地上には國境ありて相隔つれど天には何等の區劃も無しと也。

雪中情

いさみたつ駒に鞍おきてふりつもる雪いなかみちわけみてしがな

夜神樂

ふけゆけばさえこそまされ榊葉のこゑにも霜のおくこゝちして

歳暮祝

いくさ人かへるむかへてつねよりも賑ひまさる年のくれかな

冬日

ふじかしと思ふ心に冬の日はなか／＼ものゝはかどりにけり

冬海

波風のふきあれぬ日ぞなかりけるあたゝかなりと聞きし海べも

冬花

雪はみなしづれし枝にまばらにもさけるは寒しひゝらぎの花

天

ひさかたの空はへだてもなかりけりつちなる國にさかひあれども

朝ゆふにむかひなれたる久方の空にはるけきものとしもなし

野

にひばりの小田もひと町みゆるかな小松たかゞや茂るひろのに

畑

園のうちを畑になしてもみつるかなしづが營むさまをしらむと

道

ひろくなり狹くなりつゝ神代よりたえせぬものは敷島の道

近きよりゆかむとしてはなかなかに遠くぞまよふ世の中のみち

こゝろざす方を定めて皆人の世にたつ道にまどはざらなむ

細徑

小山田の畔のほそ道細けれどゆづりあひてぞしづは通へる

岩

わたつみの波のそこなるかくれ岩あらはるゝまで汐のおちたる

橋

〔ものとしもなし〕ものとしのしは强意の助詞。ものとも思ほえずと也。〔にひばりの〕新に開墾したるの義。〔小田〕小は接頭語〔ひと町〕田の一區劃なり。〔たかゞや〕萱の背の高きをいふ。〔ひろくなり云々〕時に盛衰のありけるを宣へり。〔敷島の道〕歌道をいふ。〔ゆづりあひて云々〕聖代にあひて農夫の間にも禮讓の心あるを宣へり〔わたつみ〕海洋。〔かくれ岩〕暗礁。

「ありなれ川」鴨緑江なりと。
「葦原のくに」日本の古名。
「とほつおや」遠き御祖先の義。
「たひらの都」平安の都、即ち京都也。桓武天皇はじめて都となし給へり。
「とはにあらすな」永久に荒れしむることなかれと也。
「うつせみの」枕詞
「代々木の里」代々木御料地を宣へり
「すみし世」京都に住み給ひし頃をいふ。
「いくら」幾何なり
「假庵」かりほと讀むと。假につくりたるいほりと。

さきにゆく人ちひさくもみゆるかなこの川橋の長さしられて

つはものゝ渡しゝ橋やのこるらむありなれ川のひろきながれに

國

ちはやぶる神の心にかなふべくをさめてしがな葦原のくに

都

とほつおやの定めましつる山城のたひらの都とはにあらすな

里

うつせみの代々木の里はしづかにて都のほかのこゝちこそすれ

故郷木

すみし世にかはらぬものは昔より老いたりと見し松ばかりにて

故郷柱

故郷のふるき柱によりそひてすみし昔をおもひいでつゝ

農家

ひとりしていくらの小田をまもるらむしづが假庵のかずぞすくなき

〔さしなみの〕隣の枕詞。〔籬〕竹、柴などを荒く組みたる垣。〔ひま〕すきま也。〔のきばにあふぐ〕軒端まぢかく仰ぐの意。〔車のおと〕道路の車馬の音なり。〔わすれぐさ〕萱草の古名。〔萬代を云々〕松は久しく榮ゆれば、其の松の下の家は朽ち果てゝ、幾度か新築したる事かなと也。けむは過去を想像する助動詞。白氏文集に「松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮」とあり。

鄰

さしなみのとなりにかよふ道ならむ籬の竹のひまのみゆるは

さしなみのとなりの人をたのみにてひとりや老が庵にすむらむ

旅中山

はるかなるもいと思ひしふじのねをのきばにあふぐ靜岡のさと

旅中情

國民のむかふる見れば遠くこし旅のつかれも忘られにけり

いとまなきなりはひやめて國民のわが馬車いで迎ふらむ

旅宿

草まくら旅のやどりのせばければ車のおとを枕にぞ聞く

忘草

たねなくて茂りもゆくか世の中の人のこゝろのものわすれぐさ

庭松

萬代をしめたる庭の松かげにいくたび家はつくりかへけむ

林鳥

かくばかりひろき林をいかなればひとつ木にのみ鳥のとまれる

小鳥馴

餌をまきていざあさらせむわが庭にけふも小鳥のなれて遊べる

鶴

かぎりなき天つみそらはあしたづの翅をのぶるところなりけり

晴天鶴

いたゞきに朝日をうけて久方のくもゐはるかに鶴なき渡る

鶴宿松

あしたづのやどりとなれる老松はいくらのひなかおほしたてけむ

馬

難なきはえがたかりけり牧場よりすゝめし駒のかずはあれども

薬

いく薬もとめむよりも常に身のやしなひ草をつめよとぞおもふ

〔あさらせむ〕餌をさがし求めさせむの意。
〔天つみそら〕おほ空なり。
〔あしたづ〕鶴に同じ。
〔いたゞき〕頭上。
〔やどり〕やどるところ、即ち巣をいふ。
〔いくらの〕いくばくの也。
〔おほしたつ〕養育するをいふ。
〔すゝめし駒〕御料のために牧場よりたてまつれる駒の義。
〔いく薬〕靈薬をいふ。不死の薬なり。
〔やしなひ草〕養生を草に比して宣へり。病氣にかゝりて靈薬をもとむるよりも、平生養生を怠る勿れとの御意也。

讀書

外國の昔がたりもきゝてけりときあきらめし書をよませて

古典

石上ふるごとぶみをひもときて聖の御代のあとを見るかな

筆

をさなくも選びけるかなとる筆の力はわれにあるべきものを

思ふことつらねかねてはつくづくとふでのさきのみうちまもるかな

射

梓弓ひきしぼりても放つ矢の的を貫く音のをゝしさ

弓矢

ゆみやもて神のをさめしわが國にうまれしをのこ心ゆるぶな

玉

いさゝかのきずなき玉もともすればちりに光を失ひにけり

鏡

「ときあきらめし」研究して明らかにせしの義。
「石上」いそのかみと讀む。古の枕詞。
「ふるごとぶみ」古事記をいふ。
「をさなくも云々」筆の力はその人に備はるところなるに、筆の良否を選びしは幼きわざなりしよと也。
「つらねかねては」御製を考へ給ひて成りがたかりし折を宣へるなるべく拜せらる。
「うちまもる」見つむる意。
「梓弓」あづさの木にて造りたる弓の義なれど、後にはたゞ弓のことをいへり。
「ゆるぶ」ゆるむに同じ。

〔靖國のやしろ〕靖國神社をいふ。
〔いつく〕奉祀すること。
〔いさを〕功績なり
〔しらなみの〕歸る又は寄るの枕詞。
〔いさり火〕漁夫のともす火なり。
〔あかき〕あかるき
〔石のともし火〕石燈籠を宣へり。

靖國のやしろにいつくかゞみこそやまと心のひかりなりけれ

盃

いさをたてし人をつどへて盃をさづけむ時になりにけるかな

寫眞

國のため命をすてしますらをの姿をつねにかゝげてぞみる

船

戰ひしときをぞ思ふしらなみのかへりし船をみるにつけても

漁火

沖遠くみえし小島はくれはてゝいさり火あかき波のうへかな

鐘聲何方

ふきまよふ風にまぎれて東とも西ともわかぬかねのおとかな

燈籠

松かげの石のともし火ともさせてよるしづかなる庭を見るかな

述懐

わが身よにたつかひありてちよろづの民の心をやすめてしがな

よもの海なみしづかなる時にだになほ思ふことある世なりけり

寄船述懷

川舟のくだるはやすき世なりとて棹に心をゆるさゞらなむ

老人

老の坂こえたる人はたかく〳〵につかふる道にたゆまざりけり

子

同じこと問ひかへしつゝをさな子があそぶうちにもものまなぶらむ

ものをだにまだいはぬ子も萬代とよばへばやがて手をあげにけり

教育

年々にひらけゆく世のをしへ草身のほど〳〵に摘ませてしがな

いかならむときにあふとも人はみな誠の道をふめとをしへよ

幼稚園

うちつれて園生にあそぶうなゐ子は學ぶとなしにもの學ぶらむ

「つかひありて」き、[illegible]ありての意。「よもの海云々」四海平和なる時ですら、なほ常に人民のため、大御心を惱ませ給ふ事也。「なむ」願望の意を表はす助動詞。「老の坂」年の老いゆくを坂を越ゆるにたとへいふ語。「萬代と」萬歳と也「をしへ草」教育を草に比していふ。「うなゐ子」幼童をいふ。

「うみの子」おのれが生みたる子。
「かなし」かはゆしの意。
「つくろはむこと」なほしかざること
「しづかなる云々」心のゆるやかなるものの命長きことを宣へる也。
「千年の山」長命を山に比して宣へり
「ものゝ司」多くの官吏の義。

教師

朝夕にまもり育つるをしへ子はうみの子のごとかなしかるらむ

心

つくろはむことまだしらぬうなゐ子のもとの心のうせずもあらなむ

世の人にまさる力はあらずとも心にはづることなからなむ

心靜延壽

しづかなる心のおくにこえぬべき千年の山はありとこそきけ

宴

よろこびのうたげするこそ嬉しけれものゝ司をうちつどへつゝ

夢

しばらくの眠のうちにいかにして遠きむかしを夢にみつらむ

披書思昔

諫めてし人のことばもおもひいでぬかきのこしたる書をひらきて

社頭曉

曉の露にぬれたる玉串をいまさゝぐらむ神のみまへに

社頭祝

さくすゞの五十鈴のみやの神風のふきそはる世ぞうれしかりける

神祇

日の本の國の光のそひゆくも神の御稜威によりてなりけり

國民のうへやすかれと思ふにもいのるは神のまもりなりけり

かみかぜの伊勢の宮居を拜みての後こそきかめ朝まつりごと

寓言

をぐるまのめぐるまに／＼響くなりわが國民のよろこびのこゑ

勇

いくさ人身をかへりみず進みけるあとこそ見ゆれぬきし砦に

聲

目に見えぬ人の心のよろこびも聲によりてぞ聞きしられける

をりふれて

〔玉串〕榊の枝に紙帛をつけたるもの

〔さくすゞの〕枕詞

〔五十鈴のみや〕伊勢神宮をいふ。

〔神風〕神の威力によりて起るといふ風。

〔御稜威〕御威光の義。

〔かみかぜの〕伊勢の枕詞。

〔をぐるま〕汽車もしくは馬車を宣へり。

〔身をかへりみず〕わが身の生死をかへり見ずの意。

〔ぬきし〕攻め落せし也。

國の爲いのちをすてしますらをのたま祭るべき時ちかづきぬ

いさみたつ駒をつらねて軍人かへりこむ日もちかづきにけり

軍人ちかくつどへて海山のものがたりきくときは來にけり

かちどきをあげてかへれる軍人まぢかく見るがうれしかりけり

たひらかに世はなりぬとて敷島の大和心よ撓まざらなむ

いかにぞと思ひやるかな戰をはりしのちのたつきのなりはひ

國のためたゝれずなりし民草に惠の露をかけなもらしそ

ますらをも涙をのみて國のためたふれし人のうへをかたりつ

波風はしづまりはてゝよもの海にてりこそわたれ天つ日のかげ

むらぎもの心たゆまず進みなばさかしき山も越えざらめやは

うたはせてきくぞたのしき國民の言の葉ひろくめしあつめつゝ

いつくしとめづるあまりに撫子の庭のをしへをおろそかにすな

年をへてすたれしこともおこさばや聖の御代のあとをたづねて

歳月は射る矢のごとしもいはみなすみやかにこそなすべかりけれ

「たひらかに」平和に也。
「なりぬとて」なりたりとて也。
「なりはひ」生業、生活などの意。
「たゝれずなりし」立つことの出來ずなりしの意。廢兵となりしと也。
「むらぎもの」心の枕詞。
「さかしき」險しきなり。
「越えざらめやは」やはは反語。越えずにあらんや、と也。
「うたはせて」披講させて。
「言の葉」歌をいふ。
「いつくし」かはゆらしの意。
「庭のをしへ」家庭に於ける幼子の教育の義。
「ばや」希望の意を表はす語。

みちのべにわれを迎ふるくにたみのたゞしきすがた見るぞうれしき

〔みちのべ〕道路のほとり也。

明治天皇御集　卷下

明治四十年

新年松

あたらしき年のほぎごときくにはに萬代よばふ軒のまつかせ

早春月

すさまじとおもふ光はうせながらまだ風寒し春のよの月

曉鶯

月もまださしのこりたる曉の庭のさゝふにうぐひすのなく

松上鶯

うぐひすの鳴くこゑすなり櫻田の堤の松の霞がくれに

〔新年松〕歌御會始の御製也。
〔ほぎごと〕祝賀のことば。
〔萬代よばふ〕萬歳をとなへること。
〔すさまじ〕ものすごし也。
〔さゝふ〕笹の生ひしげれる場所。
〔櫻田〕宮城に近き地。

〔泡雪〕春に降る雪なり、泡の如く消え易き故にいふ。
〔庭にざりける〕庭にぞありけるの略
〔うなゐこ〕幼童也
〔かげふむ道〕青柳のかげになりをる道也。
〔にほひ〕月のあかるくさし入りたる也。

春雪

ひとたびは花もさくべくあたゝかになりにしものを泡雪のふる

旅宿梅

さかりなる梅の林はうれしくもこよひのやどの庭にざりける

菫

をさな子につませまほしと思ふかな菫花さく庭をめぐりて
母が手にひかれてあゆむうなゐこいたちとまりては菫つむなり

春曉月

さく花のいろまだ見えぬ曉の山しづかなり春のよの月

春夕月

青柳のかげふむ道にいつよりかにほひそめけむ夕月のかげ

行路春月

おぼろ夜の月のよみちのくらければ車の影もうつらざりけり

故鄕春月

花のかげふむ人もなきふる里のおぼろ月夜やさびしかるらむ

春雨静

蝶もまだ枝に眠りて花園のあめしづかなる朝ぼらけかな

春雨夜静

をちかたに鳴くやかはづの聲はして春の雨夜はしづかなるかな

老人がむかしがたりもきゝてけりもいしづかなる春の雨夜に

春駒

はてもなき野に放てども春駒のひとりは遠くあそばざりけり

親のあとしたひて遊ぶ若ごまのをさな心は人にかはらず

はるの野にむれてあそべるわか駒を庭に放ちてみまほしきかな

風前花

山かぜにたわむ櫻の枝みれば人のこゝろもやすからぬかな

雨中花

さくら花さかりになりぬ雨かすむあしたの庭もくらからぬまで

「朝ぼらけ」夜明けてまた闇の無きをいふ。
「をちかた」遠きところ也。
「春駒」春の野に放ちかへる馬をいふ
「人にかはらず」幼童の如しと也。
「みまほし」見たしの義。
「雨かすむ云々」雨中ながら霞みわたれるをいふ。櫻花のまばゆく照り映ゆるために雨中の庭もためにくらからぬと也。

社頭花

都人そでをつらねてかみぞのゝ花のさかりに遊ぶ春かな

見花

つかさ人さゝぐるふみは多かれど花みるほどのひまはありけり

對花思昔

をさな〱て見し世の春をしのぶかなふるき都の花のさかりに

落花

ときのまに散りゆくものか櫻花こゝらの日數人にまたせて

人みなの惜む心はしりながらかぎりある世と花のちるらむ

寄花祝

治まれる世の春風をうけてこそ花ものどかに咲き匂ひけれ

暮春雨

さくらばな散るまで春はたけたれど雨なほ寒き朝ぼらけかな

をりにふれて

「かみぞの」京都の祇園神社をいふ。
「ふるき都」京都を言へり。
「ときのま」またゝくひまの意。
「ものか」感歎の詞
「こゝら」あまた也
「人みなの云々」花を人格化して詠ませ給へり。
「治まれる云々」泰平の御世をしのばせ給へる御製也。
「たけたれど」深くなりたれど也。

花見つゝ遊ぶ春日におもふかなたがへす民のいとまなき世を

おのがじゝつとめを終へし後にこそ花の陰にはたつべかりけれ

平かに世はをさまりて國民と共に樂しむ春ぞ嬉しき

始聞時鳥

めづらしきこの初聲を時鳥おほくの人にきかせてしがな

時鳥一聲

あしひきの山時鳥ふた聲となのらぬ心たかくもあるかな

夏月

まさごぢにうかれ鳥のかげみえてすゞみのにはの月ふけにけり

日にやけしいさごのうへも露みえて月夜すゞしくなれる庭かな

夏草

かたはらに眠るうなゐは夏草をかるしづのめがうまごなるらむ

夕立

俄にも照る日のひかりかきくらしいらかをたゝく夕立のあめ

〔たがへす〕田を返す義、たがやすに同じ。
〔いとまなき世〕いとまなき生活の義
〔おのがじゝ〕めいめいにの意。
〔きかせてしがな〕聞かせたきことよの意。
〔あしひきの〕山、峯の枕詞。
〔心たかく〕心の優れたること。
〔うかれ鳥〕月夜にうかれて鳴く鳥をいふ。
〔いさご〕砂なり。
〔しづのめ〕身分いやしき女をいふ。
〔うまご〕孫に同じ
〔かきくらし〕かきは接頭語。暗くなるの意。
〔いらか〕屋根に葺きたる瓦をいふ。

〔ゆふべ〳〵〕夕方ごとに也。
〔事なき時〕戰役終りて太平なる世を申させ給へり。
〔端居〕家の端に居ること。
〔天の河原〕銀河をいふ。
〔月のしづく〕蓮葉の上の露を美しく詠ませ給へり。
〔藻刈舟〕藻をかりとる舟。
〔こゝろしてさせ〕注意して棹させなり。
〔つばめと〕云々田家初夏の實況をうつさせ給へり。

夕立過

夕立の雨は高嶺をこえにけり並木の松に風をのこして

納涼

ゆふべ〳〵すゞみのにはにたつことも事なき時に逢へばなりけり

夜納涼

端居せぬよはこそなけれ大空に天の河原のみえそめしより

夏朝

ありあけの月のしづくを蓮葉の上に殘して夜は明けにけり

夏池

藻刈舟こゝろしてさせ池水にはすのわか葉の浮びそめたる

夏田家

つばめとぶ影のみ見えて田うゑ時家に人なき小山田の里

夏竹

しら露の風にこぼるゝ數見えて朝日すゞしき竹の下庵

「かゝぐ」ともす、掻きたつなどの意
「淺茅生」茅の生ひたるところをいふ
「くさひばり」夏秋の頃美しき聲を發して鳴く虫、
「鳴きもぞやむと云々」鳴きやみはせぬかと思ふ爲にの意。鬼貫の「行水の捨て所なし蟲の聲」と同じ意なりと拝す。
「ちはら」ちがやの多く生ふる原。
「かやはら」すゝきの類の生ふる原。
「ふきなあらびそ」吹き荒ぶ勿れの意
「をしね」稻をいふ。

夏燈

文机のもとにかゝぐるともし火の影さへ暑くおもふよはかな

夏人事

窓のうちに扇とれどもあつき日にてるひをうけてしづの草かる

月前薄

はるゞゝと風のゆくへの見ゆるかなすゝきが原の秋の夜の月

蟲聲滋

月のかげふまむとおもふ淺茅生にみちてきこゆるむしの聲かな

窓前蟲

くさひばり鳴きもぞやむと秋の夜の月なき窓もさゝれざりけり

秋風滿野

遠山の雲も動きて秋の野のちはらかやはら風わたるなり

田秋風

秋風はふきなあらびそ足曳の山田のをしねかりあぐるまで

秋夕

ゆふづく日かげろふ森のこがくれにひぐらしなきて秋風ぞふく

秋夜長

老人が昔がたりもつきぬべしあまりに秋の夜のながくして

月

あきのよの月は昔にかはらねど世になき人の多くなりぬる

松陰の石のともしびけちてみよひるよりあかし秋の夜の月

對月

むかしいま思ひあつめてつく〴〵とふけゆく月をながめつるかな

雲間月

野分だつ雲のひまよりあらはるゝ月の光のすごくもあるかな

月前遠情

たむろしてよな〳〵見てし廣島の月はそのよにかはらざるらむ

鴈行映水

〔かげろふ〕光かくれてかげになりゆくをいふ。
〔石のともしび〕石燈籠の火。
〔けちて〕消して也
〔むかしいま〕昔のことゝ今のことの意
〔つく〴〵と〕じつと。
〔野分だつ〕野分の吹き立つけはひ。
〔ひま〕すきま也。
〔たむろして云々〕たむろは駐屯の義よな〳〵は毎夜なり。明治二十七八年の戰役に大本營を廣島に進め給ひしことを思ひ起させて詠ませ給へる也。

〔雲居〕雲の在る場所、即ち空をいふ
〔おきて〕見もせずして也。
〔すみぞめの〕夕の枕詞。
〔寺島の里〕隅田川のほとり也。
〔青山のそのふ〕赤坂離宮の御苑。
〔をりなやつしそ〕折りて姿をくつすこと勿れと也。
〔をりてを〕をは強意の助詞。折りてなり。
〔旅やかた〕旅館の義。行幸中の行在所をいふ。
〔さすやかきね〕光のさす垣根の義。
〔かれふ〕冬枯の義。

鳴きわたる雲居はおきて水底にうつろふ雁のかげをみるかな

夕霧

堤ゆく人かげ絶えてすみぞめの夕霧くらし寺島の里

待菊盛

みせつべき人をかぞへて青山のそのふの菊のさかりをぞまつ

折菊

いたづらにをりなやつしそ見ぬ人もまだ多からむ庭の白菊

宴にはつらなりがたき老人にをりてをやらむ庭のしらぎく

旅宿菊

一枝はをりてかへらむ旅やかたわがためうゑし白菊のはな

折紅葉

夕日影さすやかきねの初紅葉うすしとしらでをらせつるかな

暮秋眺望

うちわたす野末の山に雪みえてかれふのすゝき秋風ぞふく

「あかねさす日」、日、きみ、紫の枕詞。こゝは茜色の添へるの意にて、夕日の形容に用ゐさせ給へり。
「山ぶみ」山あるきの義。
「さやか」はつきり
「かゞみなす」鏡の如く澄みたるの義
「水のあふれし」明治四十年の各地の大洪水を宣へり。
「春日野」奈良の地名にて、いま春日神社の神苑となれり。
「とぶひの野」春日野のうちの一地名
「いまはとたゝむ」夜の更けたれば讀書も今はこれまでなりと書を閉づると也。
「しどけなく」とり亂して、無雜作になどの義。

秋雲

あかねさす夕日の色に匂へども秋のみそらの雲ぞさびしき

山路秋行

たのしみは果なきものを夕日影かたぶきにけり秋の山ぶみ

秋水

庭にひく流れも秋はにごらぬを山水いかにすみまさるらむ

秋海

しま〴〵もさやかに見えてかゞみなす青海原に秋の風ふく

をりにふれて

風寒き秋のゆふべにおもふかな水のあふれし里はいかにと

都にて今年もきゝつ春日野のとぶひの野べのまつ蟲の聲

よむ書もいまはとたゝむ文机のうへにさしくる月のかげかな

さま〴〵の野菊の花をしどけなくうゑたる庭のおもしろきかな

山落葉

ふきおろす嶺のあらしにさま〳〵の紅葉ちりしく山のした道

朝霜

霜ふりてさむき朝かな園もりが箒とる手もさぞこゞゆらむ

篠上霜

朝霜のふかさしられて山かげの庭のくま笹青き色なし

林木枯

むら鳥もやどらむかたやなかるらむ林ゆすりてこがらしのふく

寒松

こがらしの風にすまひてひとつ松いくらの冬をしのぎきぬらむ

寒松風

我山の松の林にかへりけり空にきこえし木枯のかぜ

氷

くみあげし水のけぶりも消えぬまにつるべの雫はやこほりけり

窓寒月

「園もり」御苑の番人を宣へり。
「さぞ」さだめて也
「くま笹」笹の一種細き莖と廣き葉とを有す。
「むら鳥」群鳥。
「かたや」やは疑問の助詞。
「寒松」冬の松をいふ。
「風にすまひて」風と爭ひて也。
「我山」宮城を宣へり。

〔わたどの〕渡り廊下をいふ。
〔大宮〕宮城を宜へり。
〔鴨のつく〕鴨の渡り來て下り著く也
〔をしのつがひ〕鴛鴦の番にて雌雄をいふ。
〔あるじにて〕主人としての義。
〔朝づく日〕朝さしのぼる日影。
〔ねぶる〕眠るに同じ。
〔夜たゞ〕終夜の義
〔思ひもあへず〕思ふひまもなくの意。

わたどの、窓に枯木の影見えて宮のうちまでさゆる月かな

水鳥

大宮のめぐりの堀を冬ごとにかはらぬやど、鴨のつくらむ
つねに住むをしのつがひをあるじにて今年も池にかものつくらむ

朝水鳥

朝づく日にほふ堤にねぶりけり夜たゞさわぎしいけの水鳥

初雪

めづらしと思ひもあへずとけにけり霜よりうすきけさの初雪

夜雪

庭白くみゆるは月の光にて雪は早くも降りやみにけり

峯雪

こがらしのふきはらしたる空遠く甲斐のたかねの雪ぞ見えける

車上雪

しづのをが一人ひきゆくをぐるまの重荷の上につもる雪かな

舟中雪

乘る人はありともみえず苫の上に雪をつみてもくだる川舟

雪中遠情

築山のゆきを見つゝもおもふかな樺太島の寒さいかにと

爐邊閑談

埋火のもとのまとゐに老人が語ることみな昔なりけり

歳暮近

あらたまの年のをはりもちかづきぬ暑し寒しといひくらすまに

をりにふれて

高殿のまどおしひらけ櫻田のつゝみの松につもる雪みむ

煙

あさみどり晴れたる空になびけども烟の末はさびしかりけり

曙

大空もくもるばかりに靡きけりいとなみひろき里のけぶりは

〔苫〕菅又は茅などにて編み、船などの屋根をおほふ物

〔まとゐ〕一座に集りて圓く居ならぶこと、即ち團欒をいふ。

〔語ること云々〕昔のことのみ語るとなり。

〔櫻田〕宮城に近き、櫻田門のあるところ也。

〔あさみどり〕うすきみどり色、即ち晴れたる空の色をいふ。

〔いとなみひろき〕規摸の大いなる工場の義なり。

ひむかしのみそらしらむと思ふまに山の姿ぞあらはれにける

朝

しづかにも眠さめたるあしたかな心にかゝる夢も見ずして

夕

司人まかでし後のゆふまぐれしづかに書をみるかな

鑛山

ひらかずばいかで光のあらはれむこがね花さく山はありとも

窟

いかならむ神かまつれる山かげの窟のうへにしめはへてけり

畑

うるはしくうねづくりせる山畑になにの種をかしづはまくらむ

道

いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道

絶えたりとおもふ道にもいつしかとしをりする人あらはれにけり

「しらむ」明るくなるの義。
「まかでし」退(まか)り出し也。
「ゆふまぐれ」ゆふぐれに同じ。
「こがね花さく山」黄金の出る山の義にして、天然の富をさして宣へり。
「しめはへてけり」注連縄を張り渡してありと也。
「うねづくりせる」畝を起して種を播く準備をなししの意。
「神代ながらの」神代のまゝに傳はれるの意。
「しをりする」さきだち導く也。

おのが身を修むる道は學ばなむしづがなりはひ暇なくとも

なかばにてやすらふことのなくもがな學の道のわけがたしとて

ゆるされてまなびの窓をいづる子よ思はぬ道にふみな迷ひそ

橋

山川の早瀬の波のたちまちに橋うちわたすいくさ人かな

水

山川のながれは末になりぬれどにごらぬ水は濁らざりけり

水聲

九重のうちもみやまのこゝちして枕にひゞく水の音かな

海上朝

彼の方や東なるらむあさづく日にほひそめたり沖の波間に

磯岩

いそざきはかくれ岩こそ多からめよせくる浪のくだけてはちる

里

〔やすらふ〕逡巡するをいふ。
〔がな〕語尾につけて希望の意を表はす語。
〔山川〕山間を流るる川。
〔たちまちに〕波の立つと、忽ちと言ひ懸給へり。
〔みやま〕みは接頭語。
〔いそざき〕磯崎、石の多き海岸をいふ。
〔かくれ岩〕水にかくれて見えざる岩石。

にぎはへるさととはなりぬいにし年あらのの末とみてし所も

故郷

春秋の花に紅葉にこひしきは昔すみにし都なりけり

鄰

へだてなく親しむ世こそ嬉しけれとなりの國も事あらずして

旅宿

事そぎてあればある世と思ひけり旅のやかたに日數かさねて

山家

かきねゆく水にひゞきて松風の音もながるゝやまのした庵

田家燈

ともしびの細き光をたのみにて山田のしづは繩やなふらむ

行路松

うまやぢの並木の松のかげみれば昔の旅のしのばるゝかな

濱松

〔春秋の云々〕春の花、秋の紅葉につけても戀しきはとなり。春秋の花紅葉につけても、昔住み給ひし京都が戀しと宣給へるなり。

〔事そぎて云々〕そぎては省略しての義。諸事簡略にしてもあり得るものと也。

〔たのみにて〕たよりとしての意。

〔うまやぢ〕昔の驛路をいふ。

はりまがた舞子のはまの濱松のかげに遊びし春をしぞ思ふ

磯松

波風をしのぎ〳〵て荒磯の松はちとせの根をかためけむ

庭松

むさしのといひし世よりや榮ゆらむ千代田の宮のにはの老松

松經年

おほぞらの雲より外に千代へたる松の上にはたつものぞなき

鳥

大空につばさをのべてとぶ鳥もねぐらに迷ふときはありけり

朝鳥

朝まだきねぐら離れてたつみれば鳥もつとめはある世なりけり

鷄

にはつとり鳴く聲すなり竹村のあなたやしづがすみかなるらむ

馬

〔春をしぞ思ふ〕しは強意の助詞。曾遊の地をなつかしくおぼされての御製也。

〔しのぎ〕たへしのび也。

〔千代田の宮〕宮城をいふ。

〔朝まだき〕早朝。

〔つとめ〕鳥も定業あるよと也。

〔竹村の云々〕竹藪をへだてゝ鷄鳴をきゝ給へる即興と拜し奉る。

〔にはつとり〕にはとりの古稱。

ひさしくもわが飼ふ馬の老いゆくがをしきは人にかはらざりけり

人ならばほまれのしるし授けまし軍のにはにたちし荒駒

書

かみつ代のことをつばらにしるしたる書をしるべに世を治めてむ

いにしへの文の林をわけてこそあらたなるよの道もしらるれ

歌

おもふことうちつけにいふ幼兒の言葉はやがて歌にぞありける

天地もうごかすといふことのはのまことの道は誰かしるらむ

ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとは思はざらなむ

手習

おのが名もかくべくなりぬうなゐ子が手習ふ道に入るとみしまに

机

よりそはむひまはなくとも文机のうへには塵をすゑずもあらなむ

太刀

〔ほまれのしるし〕勳章をいふ。
〔軍のには〕戰場也
〔かみつ代〕上代也
〔つばら〕つまびらかの意。
〔しるべ〕たより。
〔てむ〕未來に關して願望の意を表はす語。
〔文の林〕書籍の數の多きを林に譬ふ
〔うちつけに〕そのまゝに也。
〔やがて〕とりもなほさず、などの意。
〔天地も云々〕古今集の序に「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」とあり
〔なむ〕願望の意を表はす語。
〔うなゐ子〕幼童也。

國の仇はらはむためときたひてし太刀の光は世にかゞやきぬ

寶

神代よりうけし寶をまもりにて治め來にけり日のもとつ國

蓄音器

末までもきかまほしきをたくはへし聲のたゆるが惜しくもあるかな

船

棹とりて過ぎ行く人はありながら小舟はみえず蘆にかくれて

わが國にありとあらゆる山の名をふねてふ船におほせてしがな

よろづよの聲をのせてもいくさぶねふなおろしする横須賀のうみ

大八洲まもらむ船のとし／＼にかずそふ世こそうれしかりけれ

海上舟

いづこより漕ぎいでぬらむたゞひとつ沖にうかべる海士のつり舟

渡舟

こぎわたりこぎかへりつゝわたし舟さををやすむるひまやなからむ

〔きたひてし〕鍛錬也。
〔神代より受けし寶〕三種の神器を宣へり。
〔日のもとつ國〕日のもとの國。
〔山の名を云々〕軍艦の名に山の名をつけさせ給へるを申す。
〔よろづよの聲〕萬歳の聲なり。
〔大八洲〕大日本國の一名、即ち本土・四國・九州・隱岐・佐渡・淡路・壹岐・對馬の島々の總稱也。
〔かずそふ〕數の加はる也。

ひとりして早瀨をくだす筏にはかへりて波もかゝらざりけり

漁火

こぎ歸る小舟もあまたみえしかど沖にみちたり漁火のかげ

海畔望

なぎさゆく船のありともしらざりきおきべ遙にうちまもるまは

述懷

事しあらば火にも水にもいりなむと思ふがやがてやまとだましひ

うつせみの世はやすらかにをさまりぬ我をたすくる臣のちからに

世の中をおもふたびにも思ふかなわがあやまちいあらやいかにと

寄道述懷

よこさまにおもひないりそ世の中にすゝまむ道ははかどらずとも

老人

世の爲にいきをゝたてし老人は千年の山もこえよとぞ思ふ

〔かへりて〕却つてに同じ。〔こぎ歸る云々〕夕方漕ぎ歸り來る小舟も多かれど、夜に入ればなほ漁火沖に盛りなりと也〔うちまもる〕うちは接頭語。見まもる也。〔事しあらば〕一度事起らば水火の中も辭せざるが日本魂ぞと也。〔やがて〕即ち也。〔うつせみの〕世の枕詞。〔よこさま〕よこしまに同じ。〔千年の山〕高齡ならむ事を望ませ給へる也。

〔ゆるしたる杖〕老人の宮中出仕には杖を用ゐることを許さる。その杖を宣へり。
〔けしき聞かむと〕天機奉伺に也。
〔たらちねの〕親の枕詞。
〔みおや〕御父孝明天皇を宣へり。
〔みなし子〕國のために命をすてし人の遺子を宣へり。
〔うなゐ〕幼童也。

老人をつどへてけふもきゝてけり弓矢とりにし昔がたりを

ゆるしたる杖をちからに老人がけしき聞かむと今日もきにけり

親

たらちねの親の心をなぐさめよ國につとむる暇ある日に

たらちねのみおやの教あらたまの年ふるまゝに身にぞしみける

子

思ふ事おもふがまゝに言ひいづるをさな心やまことなるらむ

みなし子にかたりきかせよ國のため命すてにし親のいさをを

すゝみゆく世に生れたるうなゐにも昔のことは教へおかなむ

幼子のおひたつみれば老人はおもひのほかにかはらざりけり

たらちねのおやの教をまもる子にまなびの道もまどはざるらむ

民

すゝむ世を見るにつけても思ふかなわが國民のうへはいかにと

隱士

山深くかくるゝ人をむかへても世を治むべき道をとはばや

農

にひばりの田にも畑にもみゆるかな廣くなりゆくしづがなりはひ

漁翁

すなどりは子等にゆづりて蘆の屋に網すく翁あはれおいたり

教育

いさをある人を教のおやにしておほしたてなむやまとなでしこ

庭訓

たらちねのにはの教はせばければひろき世にたつもとゐとぞなる

師

わけのぼる道のしをりとなる松は位なくてもうやまはれけり

心

國のため身のほど〴〵に盡さなむ心のすゝむ道を學びて

夢

〔ばや〕希望の意を表はす語。
〔にひばり〕新に開墾する義なれど、單に田又は畑の意に用ひらる。
〔すなどり〕漁をいふ。
〔蘆の屋〕蘆を葺きて屋根とせる家。
〔いさをある人云々〕この年乃木大將學習院長に任ぜられたり、右を申し給ふにや。
〔おほしたつ〕養育す也。
〔やまとなでしこ〕兒童を宣へり。
〔道のしをり云々〕しをりはしるべの義。人の師表たるべき人は、地位の如何にかゝはらず尊敬すべきことを諭させ給へり。
〔心のすゝむ〕おのれの心に適へる也

かけてだに思はぬことも見つるかなあやしき物は夢にぞありける

〔かけて云々〕大御心にかけて思ひもよらぬ事也。〔あやしき〕不思議なるの義。

思往事

慕はしとおもふ心やかよひけむ昔の人ぞゆめに見えける

たむろせし時をぞおもふ廣島の里のうつし畫見るにつけても

〔たむろせし時〕明治二十七八年戰役、廣島に大本營を定め給ひたるをいふ。〔うつし畫〕寫眞也

神祇

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり

めにみえぬかみの心に通ふこそひとの心のまことなりけれ

〔かみの心に云々〕至誠神明に感應するこころを宣へり

寄道祝

しるべする人を嬉しく見いでけりわがことのはの道のゆくてに

〔道てふみち〕あらゆる道の義。

寄世祝

國民のわくるちからのあらはれて道てふみちのひらけゆくかな

しづかにも世は治まりて月花にあそぶ今年ぞうれしかりける

孝

たらちねの親につかへてまめなるが人のまことの始なりけり

〔まめなる〕忠實なるの義。

〔やすくして〕たやすきやうにて也。
〔人のひとたる〕人として恥かしからぬの意。
〔言の葉のかずよみ〕五十首とか百首とかに數を定めて多く歌を詠むことをいふ。
〔導くまでは〕教導するまでの事は也
〔石上〕いそのかみと讀む、ふるきの枕詞。
〔手ぶり〕風習也。
〔縣の里〕地方の義
〔かみつよ〕上代也
〔おきて〕皇祖皇宗の御遺訓の意。
〔手ぶり〕ここは手なみの義。
〔ならしの原〕習志野練兵場なり。千葉縣にあり。

行

やすくしてなし得がたきは世の中の人のひとたるおこなひにして

をりにふれて

世の中にしられていよゝみがゝなむわが敷島のやまとだましひ
おもふこと思ふがまゝになれりとも身を愼まむことな忘れそ
萬代にうごかぬものはいにしへの聖のみよのおきてなりけり
言の葉のかずよみしてもみつるかなわがまつりごと暇ある日に
世の中の人におくれをとりぬべしすゝまむときに進まざりせば
よの人を導くまではあらずとも進まむ時におくれざらなむ
石上ふるき手ぶりもとひてみむ物しる人を尋ねいでつゝ
いさをある人のあとをもたづねけり縣の里の旅にいでつゝ
暇あればまづこそ思へ戰にたゝれずなりし人はいかにと
かみつよの御代のおきてをたがへじと思ふぞおのがねがひなりける
拔き難き山をもぬきしますらをが手ぶりをみするならしのの原

〔いたで〕負傷。
〔開けゆく云々〕世のひらけゆくと共に古聖の教訓の愈々光を放ちゆく意を宣へり。
〔春さむみ〕みは形容詞の語根に添へて其程度又は狀態を表はし。これを名詞となす語。
〔あけても〕戸を開くと夜の明くとに兼ねて用ゐさせ給へり。
〔內外〕うちとと讀む。

身にうけしいたでもいえてつはものの世わたる道にいまはたつらむ

開けゆくときにいよいよ仰がれぬ聖の御代のかたきをしへは

明治四十一年

鶯

まつりごといとまある日にうれしくも窓のと近く鶯のなく

朝鶯

あしたのみ來てはなくなり鶯もとはむ所の多くやあるらむ

梅

春さむみ雪にしばしばかゝれども咲くべき時と梅はさきけり

朝春雨

閨の戸をあけてもくらき春雨に夢のなごりのさめがたきかな

栽花

濱殿の園にさくらをうゑそへつ內外あまたの人にみすべく

待花

をさなくゝもまたぬ春なし櫻花さかでやむべきものならなくに

田家花

咲く花をやどにのこしてしづのをは長き日ぐらし小田にたつらむ

車中見花

をぐるまのすぐるまに〳〵花をみて今日行く道は遠しと思はず

落花

春風の吹かぬあしたに散る花もこかげにのみはとまらざりけり

春旅

櫻さく野みち山みちゆく旅はあそびにいでしこゝちこそすれ

をりにふれて

ひとたびは見むよしもがな名ぐはしき吉野の山の花のさかりを

新竹

千年までおいせざるべき呉竹も生ひたつほどは時のまにして

「をさなくゝも」心幼くもの意。
「ならなく」ならず
「日ぐらし」終日也
「をぐるま」をは接頭語。御車をいふ
「こかげにのみは云々」風は無くも、落花は其の木の下のみでなく、遠方ゝ散りゆくと也。
「名ぐはしき」名うるはしきの義。
「時のま」またゝくひまの意。

［とのゐびと］宿直の侍臣なり。
［露のまに］若竹の葉先に宿れる露と暫くの間にの意とに用ゐさせ給へり
［たかゞや］丈高き萱をいふ。
［身のたけにおよぶ］夏草の子供のたけほど茂れるをいふ。
［うみはてぬべし］倦怠すべしと也。
［わがよの夏］政務御多端にして、暑をも避け給はざる御日常を宣へり。

時鳥

ほとゝぎすおもひもかけぬ一聲に月なきよはの空を見しかな

水鶏

とのゐびとかたらふ聲もたえはてゝふけゆくよはに水鶏なくなり

竹間夏月

若竹の葉末にすがる露のまにすゞしき月の影ふけにけり

水邊夏草

たかゞやの風にかたよるひま〳〵にひとすぢみゆる水のすゞしさ

いちご

身のたけにおよぶ夏草かきわけていちごとるなり里のうなゐこ

夏日對泉

清水わくこかげにいでゝすゞむこそわがよの夏のいとまなりけれ

夏朝

朝のまにもの學びせよをさな子もひるは暑さにうみはてぬべし

「あむ」あふに同じ
「あぶみ」鐙、鞍より馬の胸腹の左右にさげ、乘者の足を踏みかくるもの
「さよ」さは接頭語夜に同じ。
「千町田」田の多きをいふ。
「浪のおと云々」海邊の即興をうつさせ給へり。
「八束」束は人の手の一握りほどの長さ。たけの長きこと。
「たり穗」充足せる穗の義。

夏夕

あかねさす夕日のかげはきえはてぬすゞみの殿にいざうつりなむ

夏海邊

江の島にやどりさだめてわらはべも相模の海のしほやあむらむ

夏車

重荷ひく車のおとぞきこゆなるてる日の暑さたへがたき日に

野徑露

乘る駒のあぶみまでこそぬれにけれあさ露ふかき野路のかや原

聞蟲

さよふかく心しづめてきく時ぞむしの鳴くねはあはれなりける

海邊蟲

浪のおと遠ざかり行くひきしほにむしのねたかし濱の松原

秋田

かりあげむ日をかぞへつゝ千町田の八束たり穗をしづはもるらむ

待月

はやくより出でゝこそ待て宵々におそくなりゆく月を忘れて

月前風

をちこちに尾花なみよる影みえて月すむ野邊に秋風ぞふく

故郷月

舟うけて昔あそびしふるさとの池にや月のひとりすむらむ

馬上紅葉

むちうたば紅葉の枝にふれぬべし駒をひかへむ岡ごえの道

雪中行人

老人があゆみゆくこそ哀なれいまだ拂はぬ雪のなかみち

歳暮祝

つかさ人あまたつどへて賑しく暮れゆく年のうたげをぞする

星

見るまゝに數そふものは大空につらなる星の影にぞありける

〔はやくより云々〕月は一日毎におそくなるものを、其を忘れて早く出御あらせられて、待ち給ふとなり。

〔尾花なみよる〕薄の穗の風に亂れてさながら浪の寄る如く見ゆるを宣へり。

〔うけて〕浮べて也

〔雪のなかみち〕雪の積れる道の義。

〔暮れゆく年のうたげ〕忘年會などなり。

〔見るまゝに〕見てゐるうちにの義。

塵

ともすればうきたちやすき世の人の心の塵をいかでしづめむ

朝

世を守る神のみたまをあふぐかな朝ぎよめせし殿にいでつゝ

夕

今日もまたゆふべになりぬ司人すゝめし書もよみはてぬまに

夜

ぬばたまのよるこそ書はよむべけれあだし事には心うつさで

富士山

萬代の國のしづめと大空にあふぐは富士のたかねなりけり

名所橋

かなぢゆく車のうちに見つるかな昔わたりし瀨田の長橋

野外旅宿

もいゝふの野邊のたむろを思ふかな草のかりほに一夜やどりて

「ともすれば」やゝもすればの義。
「いかで」どうぞしての義。
「朝ぎよめせし殿」朝の掃除を終へたる御殿なり。
「ぬばたまの」夜の枕詞。
「あだし事」餘事也
「國のしづめ云々」萬葉集卷三、不盡山を詠める長歌の中に「日のもとのやまとの國の、しづめともいます神かも、寶とも成れる山かも、駿河なる富士の高嶺は、見れどあかぬかも」とあり。
「かなぢ」鐵道也。
「草のかりほ」草にて葺ける假造りの家。

〔羇中〕旅中に同じ〔松の葉は云々〕松の葉のいつのまにか新しきと生ひかはるを詠み給へり〔杉村〕杉の多く生えたるところ。〔たづ〕鶴に同じ。

羇中情

まうでむとおもふ社をよそに見てすぐる旅路のをしくもあるかな

山家鄰

谷川のおなじ流の水くみて鄰へだてぬみやまべのさと

山家燈

ともしびのたかき處にみゆるかなかの山邊にも人はすむらむ

松葉

松の葉はいつのひまにかかはるらむ今ちるといふ時はあらぬを

山路杉

家すこしあるかと見れば山道はまた杉村になりにけるかな

鶴

我園にやしなふ鶴のひとつがひ年はふれどもおいせざりけり

鶴思子

まへになりうしろになりて雛まもるたづの心のあはれなるかな

「ふぐら」文庫、即ち書物の庫をいふ。
「民のことば」臣民よりの詠進歌を言へり。
「とぎな忘れそ」とぐことを忘るゝ勿れと也。
「かゞみにはして」模範としての意。

蝸牛

世のさまはいかゞあらむとかたつぶりをり／＼家をいでゝ見るらむ

書

家々にひめしふぐらも開くらむまなびの道をひろくせむとて

歌

千萬の民のことばを年毎にすゝめさせても見るぞたのしき

まごゝろをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

唱歌

幼兒にうたはれてこそ言の葉のしらべいよ／＼たかくきこゆれ

太刀

身にはよしはかずなるとも劍太刀とぎな忘れそ大和心を

鏡

われもまたさらにみがゝむ曇なき人の心をかゞみにはして

述懷

〔がな〕語尾につけて希望の意を表はす語。
〔さま〳〵の云々〕多年國家につくしたる老臣の上をおぼしやらせ給へり
〔いはけなく〕あどけなくの意。
〔たゆむ〕おこたらしむ也。
〔まなびや〕學校をいふ。

千萬の民の力をあつめなばいかなる業も成らむとぞ思ふ

國のため高きほまれを得し人の身をあやまたむことなくもがな

たゝかひの爲に力をつくしつるたみの心をやすめてしがな

老人

さま〳〵のことにあひにし老人の昔がたりぞ身にはしみける

子

いはけなく遊ぶ子どものさま見ればわれもをさなくなるこゝちして

國交

したしみのかさなるまゝに外國の人もこゝろをへだてざりけり

教育

國のため力つくさむわらはべを教ふる道にこゝろたゆむな

學校

まなびやに入りにし日よりうなゐ子がものいひさへもかはりけるかな

師

〔はかせ〕博士。〔をしへのおや〕舊師をいふ。

〔あらぬものから〕あらざれどもの義〔世の中の風〕世の風潮の義。

〔なほざり〕うちすてゝ心にかけざること。

〔葦原の云々〕日本書紀神代紀に「葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可レ王之地也、宜二爾皇孫就而治一焉、行矣、寶祚之隆當下與二天壤一無レ窮者上矣」とあり。

學びえて道のはかせとなる人もをしへのおやの恩わするな

心

すなほなる人のこゝろにくれたけのまがれる癖はいつかつくらむ

村雲にあらぬものから世の中の風にうきたつひと心かな

思往事

のこしおきしふみとりいでゝいさをある人の昔をしのぶ今日かな

なほざりに思ひしことも年をへておもひかへせばこひしかりけり

思ひいづることぞ多かるさま〴〵にかはりゆく世をへにし身なれば

寄道祝

葦原のみづほの國の萬代もみだれぬ道は神ぞひらきし

大演習のをりに

つはものゝ戰ふさまを見るほどは風の寒さもおぼえざりけり

觀艦式のをりに

はる〴〵と見わたす沖の波路までつらなりけりなわがいくさ船

「くろがねの的云々」仁德紀十二年に、的戸田宿禰が高麗より獻ぜし鐵の盾鐵を高麗人等の前にて射通せる故事を宣へり。
「ちはやぶる」神、人の枕詞。
「神路の山」伊勢神宮のうしろの山。
「こづたふこゑ」樹より樹に枝うつりして鳴く聲なり。

をりにふれて

ものごとにうつればかはる世の中を心せばくはおもはざらなむ

わが心われとをり／＼かへりみよしらず／＼も迷ふことあり

事しあらばわが力ともたのむべき人のをしくも老いにけるかな

くろがねの的いし人もあるものをつらぬきとほせ大和だましひ

國の爲つくさむ力ありながらたゝれずなりし人をしぞおもふ

明治四十二年

新年雪

新しき年のほぎごときゝながら花とちりくる雪をみるかな

立春日

ちはやぶる神路の山をいづる日の光のどけく春たちにけり

雨中鶯

鶯のこづたふこゑもしづかにて花のはやしにはるさめぞふる

春夜雨

ともし火の花さへ霞むこゝちして夜深きまどに春雨ぞふる

朝花

おきいでゝまづ見る花の下枝よりこてふも夢をさましてぞとぶ

池邊花

さく花の影うごくなり濱殿のにはの池水しほやさすらむ

閑居花

老人はおいの垣根の花を見て世には心もちらさゞるらむ

落花

世の人にめでらるゝまを時として風をもまたず花のちるらむ

夜落花

あかずして庭にたかする篝火のうへともいはずちる櫻かな

寄花祝

わが園の花のうたげにつどふ人としぐ\おほくなるぞうれしき

「ともし火の花」燈火を花に比し給へり。
「世には心もちらさゞ」世間のことには心を動かさずしてあるならむと也。
「時として」よきをりとしての義。
「うへともいはず」上にもかゝはらずといふ意。

をりにふれて

春もやゝなかばになるを青森のあがたのふゞきはげしときく

首夏雨

松の花ちりたる庭につゆみえてことさめ涼しくふるあしたかな

新樹

生垣のかなめの若葉あさつゆにぬれたる色は花におとらず

薔薇

村雨の露をふくみて花うばら匂ふかきねに朝風ぞふく

遠時鳥

ほとゝぎす雲のよそなる一聲はをちかた人や聞き定むらむ

深夜時鳥

しづかにも聞きさだめよとほとゝぎす夜深き空に鳴きわたるらむ

梅雨晴

めづらしといでゝ仰がぬ人もなし梅雨はれてのぼる朝日を

〔青森のあがた〕青森縣なり。
〔かなめ〕扇骨木也生垣としてあまねく用ゐらる。
〔むら雨〕一としきり降る雨、夕立、白雨。
〔うばら〕いばらに同じ。
〔雲のよそなる一聲〕遠く雲のかなたにて鳴く一聲也
〔をちかた人〕ほど遠きところにある人の義。

〔おばしま〕欄干をいふ。
〔ちりひぢ〕塵埃也
〔とこふせき〕場所せまき、窮屈なるの義。
〔ふせご〕ここは蟲籠を言へり。
〔えらばれたるや〕選び出されたることが也。
〔かこつ〕思ひわびて歎くの意。

夕顔

しづがやのさまをうつして宮人がうゑて見せけり夕顔のはな

晩涼

おばしまの下ゆく水の音すみてすゞしき風のふくゆふべかな

露

ちりひぢのかゝる草葉にやどれども露の光はくもらざりけり

蟲

ひとりして靜かにきけば聞くまゝにしげくなりゆくむしの聲かな

籠中蟲

とこふせきふせごの内に鳴くむしはえらばれたるや恨なるらむ

秋夜

秋の夜の長きを何にかこつらむなすべき事の多くある世に

對月

あきごとにむかふ心ぞかはりける月はむかしのひかりなれども

〔おほくらの入江〕山城の國に在り。今は巨椋(をぐら)の池となりて殘れり。
〔神宮造營〕伊勢神宮は二十年毎に新營あらせる。
〔內外の宮〕伊勢神宮を宣へり。
〔千代ふべききく〕菊花は盛の久しきものなればいふ。
〔旅寐して〕地方に行幸ありて行在所に宿らせ給へるを宣へり。

江上月

おほくらの入江のはちすかれはてゝ小波ひろくてる月夜かな

海上月

漁火のうすくなりぬとおもふまに波間はなるゝ月のかげかな

月前言志

わが心いたらぬくまのなくもがなこのよをてらす月のごとくに

神宮造營ありけるころ社頭月といふことを

この秋は內外の宮にてる月のかげいかばかりさやけかるらむ

菊

千代ふべききくの籬におりたちて宴する日は物思ひもなし

社頭紅葉

もみぢばの赤き心を靖國の神いみたまもめでゝみるらむ

をりにふれて

月みればまづこそ思へ旅寐して近くむかひし山のけしきを

〔いくさならし〕演習をいふ。
〔ゑみそめて〕實の熟し裂けて中なる綿のあらはれしを宣へり。
〔おほね〕大根の古名。
〔風の行くへを云々〕風の行く方をおのが行く方としての意。
〔山松の云々〕松間の古林はかの美しかりし楓の木なるべしと宣へり。
〔けたむとす〕消さむとす也。
〔雪中松〕歌御會始の御製也。

菊のはな机のうへにさしてみむそのふに遊ぶいとまなければ

この秋はいかなる野べに旅寐していくさならしのわざをみるべき

綿の實もやゝゑみそめて畑中のくぬぎの林色づきにけり

田家時雨

おほねほすしづが垣根の夕日影にはかにきえて時雨ふるなり

落葉

さしわたる日影にとくる朝霜のしづくと共にちる紅葉かな

落葉隨風

ふきさそふ風のゆくへをゆくへにて思はぬ方にちるもみぢかな

寒樹交松

山松のこのまに見ゆるかれ枝やうつくしかりし紅葉なるらむ

雪後雨

晴れて後みむと思ひし白雪ををしくも雨のふりけたむとす

雪中松

〔みさを〕操、道を守りてかへぬこと
〔桐火鉢〕桐にて作りたる火鉢をいふ
〔神楽のこゑ〕宮中の神楽は必ず夜間に行はれ、琴篳篥などに合奏して神楽歌を歌ふ。
〔かついふばかり〕言ふほどに也。
〔小春〕陰暦十月の頃をいふ。
〔ひとしめり〕一度の降雨をいふ。

としどしに雪をかさねて老松のみさを高くもなりまさりけり

雪中人来

盃をはやくとらせよふりつもる雪ふみわけて人のまゐきぬ

雪中遊興

わらはべがつくりあげたる雪の山高き功を誰と定めむ

爐火

桐火桶かきなでながら思ふかなすきま多かるしづがふせやを

神楽

神ならぬ人の心もすむものは神楽のこゑをきく夜なりけり

冬天象

冬晴

暑しともかついふばかりのどけきは小春のころの日和なりけり

冬田

ひとしめりあらばといはぬ人ぞなき冬のひよりに物のかはきて

〔霜くづれ〕霜のために道の崩るゝをいふ。
〔たづがね〕鶴の鳴く聲なり。
〔あつまると云々〕人心の移り易く動き易きを大空の雲に比して宣へり。
〔わたの原〕海原也。
〔みもすそ川〕伊勢神宮の神域を流るる川。

あせみちは霜くづれして小山田にたつ人かげも見えぬ頃かな

冬鶴

霜をふむたづがねすなり九重の松ばら白く月さゆる夜に

日

さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり

雲

あつまると見ればはなるゝ大ぞらの雲にも似たるひと心かな

山

旅にいでゝまづうれしきは都にて見なれぬ山にむかふなりけり

波

しづかなるあしたに見ればわたの原渚にのみぞ波はよせける

河

國民もつねに心をあらはなむみもすそ川の清き流に

國

よきをとりあしきをすてゝ外國におとらぬ國となすよしもがな

家

ふりにきと人はいへどもはやくよりすめる家こそすみよかりけれ

別業

花紅葉うゑわたしたるなり所常にすまぬが惜しくもあるかな

柱

橿原のとほつみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず

旅行

海くぬが軍のてぶりみるがうちに旅の日數はかさなりにけり

旅宿

せばしとも思はざりけり縣人こゝろづくしの旅のやどりは

羇中海

船にして昨日わたりし海原を山の上よりかへりみるかな

山家

〔よきをとり云々〕長をとり短をすてゝ、外國にも劣らぬ國となしたしとの御意なり。
〔ふり〕古り也。
〔はやくより〕以前よりの意。
〔なり所〕別莊。
〔橿原の云々〕神武天皇大和の橿原宮に即位し給ふを申す。
〔くぬが〕くがに同じ陸なり。
〔てぶり〕有樣。
〔縣人〕地方の臣民の義。

「おのづから云々」天然の巖石を庭としたる様を言へり「處ゆづりて」田畑を廣くとるために場所をゆづりて、おのれが住む場所を狭くなしをる様也。「とまや」苫にて葺きたる小屋をいふ「多からましを」多くあらむを也。「庭にして」庭にて。

おのづからたてるいはほを垣根にて庭おもしろき山のした庵

田家

田に畑に處ゆづりてしづがすむいほりちひさく見えわたるかな

和布

このわたり海士がとまやゝ近からむ眞砂の上にわかめほしたり

巖上松

あらし吹く世にも動くな人ごゝろいはほに根ざす松のごとくに

松經年

ちよへたる峯のたか松人ならばつめるいさをも多からましを

鳥

大空を心のまゝにとぶ鳥もやどるねぐらは忘れざるらむ

庭上鶴

うちつれて遊ぶあしたづ庭にしてすだちし雛はいづれなるらむ

書

吳竹のよゝのすがたをかきのこす書こそ國の寶なりけれ

手習

幼子がものかく跡をみてもしれ習へばならふしるしある世を

筆

をさな子が手にもあまれる筆とりてものかくさまのいつくしきかな

太刀

おのが身のまもり刀は天にますみおやの神のみたまなりけり

寶

世の中にひとりたつまでをさめえし業こそ人のたからなりけれ

船

あまの子が漕ぐや小舟の輕ければかへりて波もしづめざるらむ

沈むかとみれば浮びぬ波あらき磯こぎめぐる海士の釣舟

述懐

やき太刀のとつくに人にはぢぬまで大和心をみがきそへなむ

〔吳竹の〕枕詞。〔よゝのすがた〕歴代の變遷を書きたる史書也。〔しるし〕効驗也。〔手にもあまれる〕手に持ちあまるほどの也。〔いつくし〕かはゆらしの意。〔みおやの神のみたま〕皇祖の神靈を宜へり。〔やき太刀の〕やき太刀は鋭利なる刀劍の義。とに冠する詞。

〔ひろき世に云々〕大事の前には小事にかゝはらぬものぞと也。
〔かたしとて〕爲すにたやすからずとて也。
〔むらぎもの〕枕詞
〔ゆるぶ〕ゆるむに同じ。
〔ふむことの云々〕神のひらきし和歌道なれば分け入ることはさまでむづかしくなしと也
〔敷島の道〕歌道をいふ。
〔教草〕教育の義。

ひろき世にたつべき人は數ならぬことに心をくだかざらなむ

かたしとて思ひたゆまばなにごともなることあらじ人のよの中

戰のかちにほこりてむらぎもの心ゆるぶなわがいくさびと

寄道述懷

ふむことのなどかたからむ早くより神のひらきし敷島の道

寄草述懷

野末まで種をまかなむ教草いまだしげらぬ方もこそあれ

寄書述懷

すゝみゆく世におくれなばかひあらじ文の林はわけつくすとも

述懷多

ひらくれば開くるまゝにいにしへにかはるおもひもある世なりけり

老人

ものわすれするを常なる老人も昔がたりはたがへざりけり

子

いつはりの世をまだしらぬ幼子が心や清きかぎりなるらむ

教育

たゞしくも生ひしげらせよ教草をとこをみなの道を別ちて

呉竹のなほき心をためずしてふしある人におほしたてなむ

心

ことなしとゆるぶ心はなかなかに仇あるよりもあやふかりけり

ともすれば思はぬ方にうつるかなこゝろすべきは心なりけり

遠情

樺太にうつりし民も年を經て今はすみうく思はざるらむ

遊戯

世わたりの道のつとめに怠るな心にかなふあそびありとも

宴

たまだれの內外の臣をつどへつゝうたげする日ぞ樂しかりける

祝言

〔をとこをみな〕男女なり。
〔呉竹の〕枕詞也。
〔ふしある人〕優れたるところのある人の義。
〔ことなしと〕天下泰平なればとて油斷すまじと也。
〔ともすれば〕やゝもすれば。
〔こゝろすべきは〕注意すべきはの義
〔すみうく〕住み憂く也。
〔世わたり〕生活。
〔たまだれの〕玉簾のにて、內の枕詞。

なりはひをたのしむ民のよろこびはやがてもおのがよろこびにして

まじはりをむすぶ國々よろこびをいひかはす世ぞ嬉しかりける

寄道祝

かみつよのあとにならひて敷島の道をぞ祝ふ年のはじめに

社頭松

かみぢ山松の梢にかゝりけり天つみそらの雲のしらゆふ

神祇

神風のいせの宮居のみや柱たてあらためむ年はきにけり

仁

いつくしみあまねかりせばもろこしの野にふす虎もなつかざらめや

義

身にあまるおも荷なりとも國の爲人のためにはいとはざらなむ

おのが身はかへりみずして人のため盡すぞひとの務なりける

誠

〔なりはひ〕職業。

大事の前には小事にかゝはぬものぞと也。

〔やがても〕とりもなほさずの義。

〔かみつよの云々〕上代の風習にならひて也。

〔かみぢ山〕神路山伊勢神宮のうしろにあり。

〔しらゆふ〕白木綿神を祀る料とせらる。

〔たてあらためむ云々〕伊勢神宮は二十年毎に新宮を造替し奉る。その造營の年の來れるを詠ませ給へり。

〔もろこし〕昔時我國にて支那を呼びし稱。

「人のまこと」至誠を以て人心の根本義とせさせ給へり。「新高の云々」臺灣の臣民の上を思ほしやらせ給へる也「時を移して」時を過して也。「ことし」しは強意の助詞。「すくよか」すこやかに同じ。「新年雪」歌御會始の御製也。「にはもせに」庭も狭きほどに也。

鬼神もなかするものは世の中の人のこゝろのまことなりけり

をりにふれて

新高の山のふもとの民草も茂りまさるときくぞ嬉しき

天をうらみ人をとがむることもあらじわがあやまちを思ひかへさば

いたづらに時を移してことしあればあわたゞしくもたちさわぐかな

おいぬれど國の力とならむ人すくよかにこそあらまほしけれ

明治四十三年

新年雪

田に畑に雪ぞつもれる民の爲ゆたかにと思ふ年の始に

新年宴會

新しき年のうたげのにはもせにつどへる人を見るがうれしさ

萬物感陽和

草も木も萌ゆるをみれば春風に動かぬものはなき世なりけり

摘若菜

しづのめをしるべにはして宮人も田中のあぜの若菜をぞつむ

雨中梅

しめやかにのきばの梅のかをりきて雨さむからずなれる春かな

海邊春草

若草も浦のなぎさにおひにけり波のうちあげしいりにまじりて

朝春雨

あさがらす鳴きたつこゑも靜かにて春雨くらし松のした庵

月前花

春の夜の月はまどかになりぬるを惜しくも花のさかりすぎたる

折花

一枝を折りてかへりぬ山櫻ともなはざりしひとに見せむと

月前卯花

卯花にくらべて見ればタ月の光はくらし木がくれのには

〔しづのめ〕農家の女の義。
〔しるべ〕案內也。
〔浦〕海邊をいふ。
〔まどか〕まるきさま。
〔ともなはざりし人〕供奉せざる人也。
〔卯花に云々〕夕月の光にもまさりて卯の花の白しと也。

〔たちばなの云々〕まきもくの珠城の宮は垂仁天皇の帝都にして大和磯城郡纏向村にあり。
〔さるかたに〕それ相應に也。
〔むすぶ〕掌にすくひあぐの意。
〔山城のみやこ〕京都を言へり。
〔よな〳〵〕夜毎にの意。

橘

たちばなの花をし見ればまきもくの珠城の宮ぞしのばれにける

桐花

さるかたにおもしろきかな山里の桐のはやしの花のさかりも

夏庭

鳴く蟬の聲ばかりしてひざかりは庭木のうへをとぶ鳥もなし

夏蟲

いづかたにこゝろざしてか日盛のやけたる道を蟻のゆくらむ

夏夢

山かげの清水むすぶとみし夢はさめての後も涼しかりけり

秋夜思鄕

山城のみやこの空にてる月をおもひぞいづる秋のよな〳〵

月前雲

てる月にかゝらむばかり近づきぬはるかにみえし雲のひとむら

〔ひがひ〕諸子(もろこ)に近き魚にて琵琶湖に産す。
〔さゝ波の〕志賀、大津の枕詞。
〔志賀のうらわ〕琵琶湖なり。
〔みなせる〕見てそれと假定せるの意
〔水こえし里〕大洪水のありし地方也
〔をしね〕稻に同じ
〔水にひたりし里〕此の年の九月各地に大洪水あり、其の困苦を思ひやらせ給へるなり。

湖上月

ひがひとる船もみえけりさゝ波の志賀のうらわの秋のよの月

高樓觀月

海山をにはとみなせる高殿の窓にさし入る秋のよのつき

月前遠情

あた波をうちしりぞけしいくさ人南の島の月やみるらむ

待紅葉

菊の花人に見すべくなりぬるをまだ色うすし庭のもみぢ葉

秋晴

水こえし里のしめりけかわくべく秋のみそらよ晴れつゞかなむ

秋旅

をしねほすしづが垣根をみつゝゆく秋の旅路のこゝちよきかな

をりにふれて

つくづくと月にむかひて思ふかな水にひたりし里のよさむを

〔庭火〕庭上にて焚く火。
〔廣前〕神前をいふ
〔ゆふづゝ〕金星の古稱。
〔かひ〕峽、山と山との間をいふ。
〔呉竹の〕葉にかゝる枕詞。
〔ひとより〕一度也
〔きほふ〕勇みたちて競ふの意。

社頭冬月

御神樂の庭火のかゞり影ふけて廣前しろく月のてりたる

遠千鳥

波のうへにむれたつかげはみえながら沖の千鳥の聲はきこえず

暮山雪

ゆふづゝのかげこそみゆれ雪の色はまだくれはてぬ山のかひより

海邊雪

波のうへに富士のね見えて呉竹のはやまの浦の雪はれにけり

雪中松

おりたちてとくうちはらへ枝よわき小松のうへに雪のつもれる

狩場風

かり人がいまひとよりときほふ野に木立ゆすりて嵐ふくなり

冬夜

文机にかざれる玉の光まで寒くぞ見ゆる霜さゆる夜は

風

なにとなく人の心もさわぐかな空ふく風のしづまらぬまは

雲

山かぜにふきたてられて谷底にしづみし雲もまたおこりけり

朝

世の中のことまだ聞かぬあしたこそ人のこゝろはしづけかりけれ

夕

暮れぬべくなりていよ〱惜むかななすことなくて過ぎし一日を

野

にひばりの畑も田のもゝおほけれどひなは荒野のなほひろくして

道

あまた度通ひなるれば遙かなる道も遠しと思はざりけり

いとまなき身も朝夕にいそしみぬ思ひいりたる道の爲には

國民がこゝろ〲に進みゆく道にはさはるものなくもがな

〔にひばり〕新たに開墾せるをいふ。「よも」四方の義。「いそしみぬ」つとめはげみし也。「國民が云々」國民が其の道によつて、世に立つべきことを宣へり。

〔ならび行く云々〕共に進み行く人には後るゝとも、正しき道を進むべしや。
〔たもたざらめや〕保たずしてあらむやの意。
〔うらやすの國〕日本國の古稱。
〔したしみを云々〕皇族もしくは大官の海外に旅行するを送り給ふ大御心なり。

ならび行く人にはよしやおくるともたゞしき道をふみなたがへそ

石

みがゝれて光そひゆく石をしも昔の人は見しらざりけむ

水

みなもとは淸くすめるを濁江におちいる水のをしくもあるかな

水聲

近からぬ水のひゞきもきこえけりふけしづまれるよはの寢覺に

島

ちかづけば家もありけり波の上に浮ぶとみえし沖の小島も

國

おごそかにたもたざらめや神代よりうけつぎ來たるうらやすの國

餞別

したしみをよもに結びて旅衣かへりこむ日をいまよりぞ待つ

旅宿雨

草枕たびのやどりに香きゝし後うれしく雨はふりいでにけり

旅宿朝

このゑ人こまひきいづる音すなり朝だちすべき時やきぬらむ

旅宿夢

あすもとく軍ならしのさまみむと思へば夢のさめがちにして

驛中思都

旅寐するうまやにつきて待つものは都の今日のたよりなりけり

半夜旅泊

あけわたる湊の山も見るべきを夜深くとくか船のともづな

山家人稀

山みちはゆきあふひともなかりけりところどころに家はみゆれど

深山木

しら雲のはれま稀なるおく山は老木ならぬも苔むしにけり

書

〔草枕〕旅の枕詞。
〔このゑ人〕近衛兵をいふ。
〔朝だち〕朝の御出立を宣へり。
〔とく〕早く也。
〔軍ならし〕ここは大演習を宣へり。
〔うまや〕驛舍の義
〔半夜〕夜なかの義
〔夜深くとくか〕夜深きに解くことかなと也。
〔山道は云々〕山道のさまをさながらうつさせ給へり。

思ふことしげからざりしそのかみによみつる書は忘れざりけり

いそのかみふるごとぶみは萬代もさかゆく國のたからなりけり

呉竹の世々につたへて仰ぐかな遠つ御祖のみことのりぶみ

文

みじかくてことの心のとほりたる人のふみこそ讀みよかりけれ

詞

きゝしるはいつの世ならむ敷島のやまと詞の高きしらべを

筆

千年まで殘らむ筆の跡なるを走りがきのみせられけるかな

寶

あまてらす神のさづけしたからこそ動かぬ國のしづめなりけれ

玉

人みなのえらびしうへにえらびたる玉にもきずのある世なりけり

寶ともいふべき玉はなくならむこまかに瑕をもとめいでなば

「そのかみ」昔をさして其の當時といふに當れり。少年の折讀みし書は、今も記憶に殘れりと也。
「いそのかみ」なるの枕詞。
「ふるごとぶみ」古事記をいふ。
「さかゆく」榮えゆくの義。
「みことのりぶみ」詔勅の文。
「敷島のやまと詞」歌をさしていへり
「走りがき」筆を走らせ文字をみたりがはしく書くこと
「たから」三種の神器を申す。

しら玉を光なしともおもふかな磨きたらざることを忘れて

鏡

世の中の人のかゞみとなる人のおほくいでなむわが日の本に

車

くつがへることもこそあれ小車の進むにのみはまかせざらなむ

船

ふなづくりたくみになりて波の底かよふ道をもひらきつるかな

燈

軒ごとにかけつらねたるともしびやにぎはふ市の光なるらむ

述懷

をさめしる國のはてまでしらせばや民安かれと思ふこゝろを

むらぎもの心にたえずおもふことなしとげし日ぞうれしかりける

おのが身はかへりみずしてともすれば人のうへのみいふ世なりけり

曉述懷

〔なむ〕願望の意を表はす助動詞。
〔ふなづくり〕造船の技術なり。
〔波の底云々〕潜航艇のことを言へり
〔をさめしる國〕統治し給ふ國の義。
〔ばや〕希望の意を表はす語。
〔むらぎもの〕心の枕詞。

あかつきのねざめ〳〵に思ふかな國に盡しゝ人のいさををを

人

をちこちにわかれすみても國を思ふ人の心ぞひとつなりける

老人

をさな子にひとしくなれる老人をいたはることをゆるがせにすな

おとろへしさまは見えねどおいびとの淚もろくもなりまさりぬる

子

からくして歩みはじめし人の子のひとりだつ身といつかなりなむ

兄弟

ならびたつたけはひとしく見えながらこのかみは猶このかみにして

工

外國におとらぬものを造るまでたくみの業にはげめもろ人

海人

あびきする親に力をそふるかな海士が子どもは幼けれども

「ねざめ〳〵に」ねざめの度毎に也。後村上天皇の御製に「鳥の音におどろかされてあかつきの寢覺めしづかに世を思ふかな」とあり。

「からくして」漸くにしての義。

「このかみは猶云々」このかみは兄の古語。子の上の義、兄はなほ兄らしく見ゆと也。

「たくみの業」工業を宜へり。

「あびき」網を引くこと。

外客

海こえてはる〴〵来つる客人にわが山水のけしき見せばや

教育

わがしれる野にも山にもしげらせよ神ながらなる道をしへぐさ

心

ひろき世にまじはりながらともすればなりゆく人ごゝろかな

夢

夢與故人逢

たらちねの親のみまへにありとみし夢のをしくも覺めにけるかな

披書思昔

面影のなほこそのこれいにしへの人とかたりし夢はさめても

かきいれし昔の人の筆のあとのこれる書のなつかしきかな

思往事

いにしへは夢とすぐれどまことある臣のことばゝ耳にのこれり

〔外客〕外國よりの客なり。
〔しれる〕統治せるの義。
〔神ながらなる云々〕神道のをしへの意。
〔面影〕おもざし也
〔かきいれし云々〕先覺者の書入れたるを御覧じて、なつかしくおぼされたる也。

〔老人〕侍講の老臣を宜へり。
〔手ぶり〕ならはしの義。
〔ゆめ〕決して也。
〔まもります〕守護し給ふの意。
〔あまてらす神〕天照皇大神をいふ。
〔萬民云々〕臣民一致して守れる我が國に人君として立たせ給ふを喜ばせ給へるなり。
〔まめやかに〕忠實に也。

わが爲に心つくして老人がをしへしことは今もわすれず

神祇

わが國は神のすゑなり神祭る昔の手ぶり忘るなよゆめ

とこしへに國まもります天地の神の祭をおろそかにすな

寄神祝

あまてらす神の御光ありてこそわが日のもとはくもらざりけれ

寄國祝

萬民こゝろあはせて守るなる國にたつ身ぞ嬉しかりける

仁

ちよろづの民の心ををさむるもいつくしみこそ基なりけれ

忠

まめやかにつかふる臣のあればこそわが政みだれざりけれ

樂

千萬の民と共にもたのしむにます樂はあらじとぞおもふ

をりにふれて

さだめたる國のおきてはいにしへの聖の君のみことなりけり

さまざまの世のたのしみも言のはの道のうへにはたゝものぞなき

ものごとに進まずとのみ思ふかな身のおこたりはかへりみずして

空蟬の世のことわざはしげくとも物學ぶみのなかるべしやは

きくたびにゆかしきものはまつりごと正しき國の姿なりけり

新高の山よりおくにいつの日かうつしうゝべきわがをしへぐさ

敷島のやまとしまねのをしへぐさ神代のたねの殘るなりけり

思ふことなるにつけてもしのぶかなもとゐ定めし人のいさをを

みちみちにつとめいそしむ國民の身をすくよかにあらせてしがな

ひと筋をふみて思へばちはやぶる神代の道もとほからぬかな

おもふこと思ひ定めて後にこそ人にはかくといふべかりけれ

明治四十四年

〔聖の君〕御祖先の天皇を宣へり。
〔言のはの云々〕歌道にまさる樂しみなしと也。
〔空蟬の〕世、人などの枕詞。
〔ことわざ〕事業也
〔をしへぐさ〕教育をいふ。
〔神代のたね云々〕皇祖の遠く神代に存する御旨を宣へり。
〔もとゐ〕國家の基礎なり。
〔すくよか〕すこやかに同じ。

月前霞

つねよりも大空とほきこゝちして霞のおくに見ゆる月かな

旅宿鶯

鶯のおどろかすこそ嬉しけれ旅につかれし春のねぶりを

雲雀

つぎ／＼にあがるをみれば雲の上に入りしひばりや友をよぶらむ

待花

たゞひと日あたゝかなれば櫻花さきもやするとまもらるゝかな

花便

うたげせむ日を定めよと濱殿の花のたよりのたえぬ頃かな

月前花

朧夜の月はさすともみえなくに窓にうつれる花のかげかな

田家花

みる人はなきものにしてしづがやの籬の花は咲きにほひけむ

「ねぶり」ねむり也
「まもらるゝ」見守らるゝの義、
「うたげせむ日」濱離宮にて觀櫻會を催さる日也。
「みえなくに」見えぬことなるにの意
「なきものにして」なきものと定めてなり。
「しづがや」農家をいふ。
「みる人は云々」農家に咲ける花は、觀賞する人なきをあきらめて咲くと也、

見花

もゝちゞの人をつどへて濱殿の花みてあそぶ春ぞ樂しき

月前落花

なつかしき朧月夜のかげふみてたゞずむ袖にちる櫻かな

舟中落花

ちる花をのせてかへりぬ渡舟むかひの岸に人はおろして

春日

すがのねのながき春日はなか／＼にものに怠る人ぞおほかる

春故郷

あをによし奈良の都の跡とへば若草山にかすみたなびく

待時鳥

都にはまつ人おほしほとゝぎすひとたび山をいでゝなかなむ

月前時鳥

梅雨の雲間の月をめづらしと仰ぐみそらになく時鳥

「もゝちゞ」百千々にて、數の多きをいふ。
「すがのねの」すがは菅なり。ながきの枕詞。
「なか／＼に」却つて也。
「あをによし」奈良の枕詞。
「若草山」大佛殿の東にあり。三笠山のこと也。

をりにふれて

たづねても尋ねえざりし早蕨の廣葉しげくもみゆるのべかな

早涼

小山田はまだみのらずときくものを早くも涼しくなれる秋かな

蟲聲非一

さまざまの蟲のこゑにもしられけりいきとしいける物のおもひは

蟲聲欲梏

かれがれになりぬる庭の蟲のねはなかぬ夜よりもさびしかりけり

月夜燈

よひやみをてらしゝ庭のともしびの影もうすれぬ月の光に

遠見鴈

このわたり聲をのみてやすぎつらむはるかにみゆる鴈のひとつら

紅葉

うつろひて散らむとすなるもみぢ葉をうつくしとのみ思ひけるかな

〔早蕨〕芽を出したるばかりの蕨。
〔小山田〕小は接頭語。山田なり。
〔いきとしいける物〕あらゆる生けるものの意。
〔よひやみ〕月出でぬ前の闇をいふ。
〔このわたり〕このあたりに同じ。
〔聲をのみて〕聲をいださずして也。
〔うつろひて〕衰へて也。

「ゆく〳〵」行きつゝ也。「星のはやし」星の多くあつまりたるを林にたとへいふ「なぎぬらし」しづまれりし凪の意「しのぎて」堪へ忍びて也。「寒月照梅花」歌御會始の御製也

山紅葉

山みちをゆく〳〵みれば都よりまされるものは紅葉なりけり

夜木枯

大空の星のはやしも動くかと思ふばかりにこがらしの吹く

社頭冬月

さしわたる霜夜の月に冬がれぬ榊もしろし神のひろまへ

千鳥

川ぞひのもりの夜嵐なぎぬらし遠き千鳥のこゑのきこゆる

行路雪

重荷おひてゆく人いかになやむらむふゞきになりぬのべの通ひ路

雪中早梅

ふりつもる雪をしのぎて咲く梅の花はいかなるちからあるらむ

寒月照梅花

てる月の光はいまだ寒けれど春にかはらぬ梅が香ぞする

〔岩がねを云々〕精神一到何事か成らざらむの意を歌ひ給へり。
〔わたつみの神〕海神をいふ。
〔天つ神云々〕天神相はかり國土を鎮め給ひし國なれば也。
〔國のおきて〕立國の大本を宣へり。
〔しぶく〕飛沫のとび散るをいふ。

河

岩がねをきりとほしても川水は思ふところに流れゆくらむ

海邊興

わたつみの神祭るらし海士の子がふなばた敲きうたふ聲する

國

天の神定めたまひし國なればわがくになからたふとかりけり

世はいかに開けゆくともいにしへの國のおきてはたがへざらなむ

故郷木

思ひいづることのみ多し故郷のこだちももとの木立ならねど

羇中情

ゆくところ野にも山にも國民のむかふる見ればうれしかりけり

田家雨

軒あさきしづがふせやは降る雨もたゝみのうへにうちしぶくらむ

庭上松

〔もとづきて〕一本の松を庭のたよりとしての義。
〔みづからかひて〕人に任せずして自ら馬に水を與へ飲ましめて也。
〔いつくしむ〕愛撫すること。
〔ともすれば〕やゝもすれば也。
〔月夜なりけり〕電光によりて庭の明るきを月夜の如しとたとへ給へり。

榮えたる一木の松にもとづきてつくれる庭のおもしろきかな

鳥

うちつれて渡るをみればとぶ鳥もおもひ〳〵の友ぞあるらし

馬

水をさへみづからかひてものゝふは手馴の駒をいつくしむらむ

筆

ともすれば走りがきしてわがとりし筆の跡さへ見わけかねつゝ

太刀

眞心をこめて錬ひしたちこそは亂れぬくにのまもりなりけれ

漁火

漁火のかげぞつらなる暮れぬまにまばらに舟の見えし波間に

電燈

あきらけき火影ひきたる庭みれば雨はふりながら月夜なりけり

雨後眺望

〔雨雲〕雨氣を含める雲也。
〔さやかに〕明瞭になり。
〔水莖のあと〕水莖は筆をいふ。筆跡なり。
〔縣守〕地方長官也
〔あをひと草〕人民をいふ。
〔おほしたてなむ〕愛撫し發達せしめよとの意。

雨雲の風にきえゆく山のはにあらはれそめぬ松のむらだち

民

千萬のたみのちからを集めてぞ國はゆたかになすべかりける

筆寫人心

鏡にはうつらぬひとのまごゝろもさやかに見ゆる水莖のあと

披書知昔

よむふみのうへに涙をおとしけり昔の御代のあとをしのびて

神祇

いつはらぬ神のこゝろをうつせみの世の人みなにうつしてしがな

千早ぶるかみの力によりてこそわれをたすくる人もいでけれ

をりにふれて

むらぎもの心つくして縣守あをひと草をおほしたてなむ

きくにまづ身にぞしみける誠よりいふことのはゝ長からねども

思ふこといふべき時にいひてこそ人のこゝろもつらぬきにけれ

たらちねの親のをしへは誰もみな世にあるかぎり忘れざらなむ

まごゝろをこめてならひし業のみは年を經れどもわすれざりけり

教草しげりゆく世にたれしかもあらぬ心の種をまきけむ

いそのかみ古きてぶりをのこさなむ改めぬべきこと多くとも

むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも

明治四十五年

始聞鶯

ひとりしてうちゑまるゝは鶯のはつねきゝつるあしたなりけり

山鶯

しづかなる所えたりとうぐひすもみやまがくれに花になくらむ

折梅

わがめづるうめを折らせつたれこめてありといふなる人に見せむと

春曉月

「世にあるかぎり」生涯なり。「教草」教育をいふ「たれしかも」しは強意の助詞、かもは疑問と感歎の意を表はす語。「あらぬ心」道にかなはざる心の義。「いそのかみ」なるの枕詞。「てぶり」風習也。「こむ」願望の意を表はす語。「なりもならずも」成るも成らざるもの意。「みやまがくれ」奥山の深くひそまりたるところ也「めづる」いつくしむ、愛すなどの意「たれこめて」病に籠りて也。

あけがたの霞のうちにいつとなく消えゆく月の影のしづけさ

故郷春雨

蕪だにとはずなりぬる故郷のかやがのきばに春雨ぞふる

花

ありとある人をつどへて春ごとに花のうたげをひらきてしがな

遠尋花

荒駒をならしがてらに野邊とほく櫻狩するますらをのとも

雨後花

しづかにもそそぎし雨はうちはれてたわめる花に夕日さすなり

夜思花

ふく風の音をきくにもおもふかなあすうたげせむ花はいかにと

庭花

九重の庭木のさくらさきにけり野山の春もさかりなるらむ

花似雲

〔蕪だに云々〕荒れはてゝ寂しくなれるさまを言へり。〔かやがのきば〕萱にて葺ける軒端也〔ありとある人〕ありとあらゆる人の義。〔がてら〕それと共に、其ついでになどの意を表はす語〔櫻狩〕櫻花をたづね歩きて遊び暮らすこと。〔ますらをのとも〕ますらをはをゝしき男子。ますらをの人々の義なり。

枝ながら風にゆらるゝ櫻花たゞよふ雲にかゝらざりけり

見花

司人さゝぐるふみも讀みはてゝゆふべしづかに花を見るかな

まつりごときゝをはりたるゆふべこそおのが花みる時にはありけれ

折花

高殿の窓てふまどをあけさせてよもの櫻のさかりをぞみる

人ごとにをりて來つれば櫻花さしたる瓶ぞおほくなりぬる

依花待人

あがたよりいでこむ人をまちてのち花の宴の日をばさだめむ

花未飽

うつろへばうつろふまゝになつかしと思ふは花のいろ香なりけり

行路落花

乘る駒に小草はませてやすらへば鞍のうへ白く花ちりかゝる

菜花

〔枝ながら〕枝ぐるみ也。
〔司人〕官吏。
〔さゝぐるふみ〕政務に關する書類を言へり。
〔窓てふまど〕悉くの窓の意。
〔あがた〕地方の義
〔うつろふまゝに〕衰ふるにつけて也
〔乘る駒に云々〕馬上ゆたかに櫻の下にて、馬に小草を喫ませて休み居れば、馬の鞍の上に、白く落花せるを詠ませ給へり。

「首夏」夏の始めをいふ。
「ふぢなみの花」藤の花は浪の如くなればいふ。
「いかならむ」いかなるに同じ。
「たまさか」事の稀なるにいふ。
「世にはいづらむ」鳴き聲によりて、所在知れたれば、かく申され給ひし也。

花瓶にさしてぞ人のすゝめける鈴菜もいまだめづらしければ

水邊首夏

燕とぶ山澤水にふぢなみの花ちりうきて夏はきにけり

新竹

みるたびに高くなりぬる若竹はいまぞ生ひたつさかりなるらむ

時鳥一聲

二聲となかぬぞをしき時鳥きかせまほしき人のおほきを

時鳥稀

いかならむ山にかくれて時鳥たまさかにのみ世にはいづらむ

杜時鳥

小麥かる人やきくらむほとゝぎす野中の森をいづるひとこゑ

樹陰夏月

風ふけば露もおちくる松かげに月をみる夜ぞ涼しかりける

夏風

「山近くすみし都」京都をさして宣へり。
「さらにぞ」殊更にの意。
「あまつみそら」おほ空なり。
「かぎりにて」一度あひとして也。
「あらなむ」あれかしの意。
「虎のすむてふ云々」いまだ開けざる國のはてまでの意。

をり／＼に庭の草木はうごけども涼しき風の窓に入りこぬ

夏山

山近くすみし都をなつかしとさらにぞ思ふ夏の來ぬれば

夏瀧

いはまより瀧のおちくるこの庭は山ならねども涼しかりけり

雲

一村と思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけむ

雨

田も畑もうるほふほどをかぎりにて晴れにし雨はうれしかりけり

道

すゝむにはよし早くともあやふしと思ふ道には入らずもあらなむ

ともすれば・さまたげられて一筋にゆかれぬものは道にぞありける

人の世のたゞしき道をひらかなむ虎のすむてふのべのはてまで

きゝしより遠しと思ふはゆくさきに心のいそぐ道にぞありける

「とみに」にはかに
「なぎぬれば云々」凪ぎぬれば又かくの如く静かなると也。
「沖つしらなみ」沖の白浪なり。
「よこしまならぬ」正しきをいふ。
「さかしき」賢き也
「かなし子」愛子の義。
「あまざかる」鄙の枕詞。
「ひなの手振」地方の風俗の義。

河

あさしとて心ゆるすな雨ふればとみにあふるゝ山川のみづ

さま／＼の舟のかよひて隅田川みづのうへさへ賑しきかな

海

なぎぬればかくもなぎけり島山もこゆべくみえし沖つしらなみ

國

まつりごとよこしまならぬ國にこそさかしき人も多くいでけれ

柱

かりそめの事に心をうごかすな家の柱とたてらるゝ身は

旅

百年を經たる人をも見つるかな車とゞむるところ／＼に

かなし子をたびにぞいだすあまざかるひなの手振をしらしめむとて

山家雲

白雲の軒端にまよふ山里は雨ふらぬ日もうちしめるらむ

「あしたづの」舞子の枕詞に用ゐさせ給へり。
「村鳥」群鳥に同じ
「おほしたてけり」養育したりの意。
「庭のをしへ」家庭に於ける教育をいふ。
「松上鶴」歌御會始の御製也。
「とよさかのぼる」豐かに榮え登る也
「梢をしめて」梢をわが場所として也。

濱松

あしたづの舞子のはまの松原は千代をやしなふ處なりけり

林鳥

村鳥のねぐらあらそふ夕暮は林のかげもさわがしきかな

鶴

ひなをさへおほしたてけり早くよりかひならしたる庭のあしたづ

親のゆくあとをしたひてひな鶴も庭のをしへやふみはじむらむ

松上鶴

朝づく日とよさかのぼる山松の梢をしめてたづぞ鳴くなる

鷄

人はみな野にいではてししづが屋にひとりのこりてには鳥のなく

馬

鞭うつもいたましきまで早くよりならしゝ駒の老いにけるかな

書

〔絲竹〕音樂をいふ
〔たへなる〕極めて巧みなるの意。
〔しきしまの〕大和の枕詞。
〔大和錦〕國產の錦の織物。外國に誇るべきわが國の文物の意に宜へり。
〔はたつもの〕畑に產するもの、卽ち野菜の類をいふ。
〔眞柴〕眞は接頭語柴に同じ。
〔うつせみの〕枕詞
〔ゆたかならなむ〕ゆたかにあれよかしと也。

ひもとかむ暇なき日のおほきかな讀むべき書はあまたあれども

管絃

絲竹のしらべたへなる聲にこそ人の心もやはらぎにけれ

錦

とつくにの人に見すべきしきしまの大和錦をおりいださなむ

河舟

はたつもののつみいだすらむ里川につなぐ小舟のおほく見ゆるは

樵夫

老い坂こえにけりとも見えぬかな眞柴になひてくだるきこりは

教育

よきたねをえらびえらびて教草うゑひろめなむのにもやまにも

心

いかならむことあるときもうつせみの人の心よゆたかならなむ

讀故人書

「道な忘れそ」孝道を忘るゝこと勿れの意。
「かたみ」死にし人又は別れたる人の生存中又は身近中の事を思ひ出さるゝ種となる遺物。
「心から」おのが心よりして也。
「鄰のくにの云々」この年二月支那革命のことあり、それにつきての御感懐と拝察せらる。
「いさを」功績なり

わがためにかきのこしたるひと巻の書こそ人のかたみなりけれ

思往事

雪なれば駒にくらおき野に山に遊びし昔おもひいでつゝ

神社

いにしへの姿のまゝにあらためぬ神のやしろぞたふとかりける

孝

いとまなき世にはたつともたらちねの親につかふる道な忘れそ

身

心からそこなふこともなくもがな親のかたみと思ふべき身を

をりにふれて

敷島のやまと心をみがけ人いま世の中に事はなくとも
おのづからわが心さへやすからず鄰のくにのさわがしき世は
思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり
身をすてゝいさをゝたてし人の名は國のほまれと共にのこさむ

「しる人の世にあるほどに」よく知れる人の存生せるうちに也。
「てむ」願望の意を表はす語。
「宮のおきて」帝室制度をさして宣へるものと拜察せらる。
「天地の」天地の如く也。

國民の業にいそしむ世の中を見るにまされる樂はなし

あやまたむこともこそあれ世の中はあまりにものを思ひすぐさば

開くべき道はひらきてかみつ代の國のすがたを忘れざらなむ

くにを思ふ臣のまことは言のはのうへにあふれてきこえけるかな

しる人の世にあるほどに定めてむふるきにならふ宮のおきてを

敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきことのはもがな

おもふこと思ふがまゝにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ

附載

祝

世を治め人をめぐまば天地いともに久しくあるべかりけり

右明治二年八月三日右大臣三條實美を以て英國皇子に贈りたまへる

冬眺望

「波の花よる」川風に波の立つを言へり。
「冬もさきつゝ」春のみならず冬さへも咲くと也。
「花ぐはし」櫻の枕詞。
「代々のこゝろ」水戸家代々の勤王の志を言へり。

見わたせば波の花よる隅田川ふゆのけしきもこゝろありけり

右明治六年十二月十九日隅田川前行幸のをりに正二位松平慶永の邸に立寄らせたまひておくる年二月十三日に下し賜へる

冬眺望

いつみてもあかぬけしきは隅田川なみちの花は冬もさきつゝ

右おなじ折に從二位伊達宗城の邸に立寄らせたまひておくる年二月十三日に下し賜へる

櫻

花ぐはしさくらもあれどこの宿の代々のこゝろをわれはとひけり

右明治八年四月四日從四位徳川昭武の邸に行幸ありて五月五日に下し賜へる

見花

みわたせばつらなる櫻さきみちて朝日に匂ふ春のたのしさ

右おなじ日に從一位徳川慶勝の邸に行幸ありて五月七日に下し賜

へる

水邊藤

池水にかげをうつせる藤波の花の盛りのおもしろきかな

ゆきかふ舟を見て

うちかすむ梢がくれをかよふなりこの船いかにのどけかるらむ

右二首明治八年五月四日熾仁親王の芝離宮にいましけるころ行幸ありて當座によませたまへる

夏草露

言の葉もともにしげりし夏草の露と消えても名はのこりけり

右八田知紀三年祭歌會兼題をきこしめして明治八年八月九日侍從番長高崎正風に下し賜へる

壇浦懷古

豐浦がた千船もゝふねいりみだれ波にしづみし昔をぞ思ふ

右長門國赤間宮の歌會のことをきこしめされて明治九年九月廿一

「藤波」藤の花の動くさまを波に見立てゝいふ。

「うちかすむ云々」御苑の木立の間より、船の見えたるを詠ませ給へるなり。

「言の葉」和歌の道をかけて宣へり。

「八田知紀」鹿兒島藩士にして、和歌の大家也。

「豐浦」とよらと讀む。下之關海峽口の北岸をいふ。

「心あるかな」天皇中山家とは御緣故深きものから、かく申させ給へり。
「ふみ見ざりせば」書見に道の緣語なる踏みを兼ねて詠ませ給へり。
「をやみなく」をは接頭語也。
「ながめ」ながあめの略。

日從三位毛利元德に下し賜へる

園深菊香

けふこゝにわが來て見れば園のうちの菊のかをりも心あるかな

右明治九年十月十三日從一位中山忠能の邸に行幸ありて當座によませたまへる

書

くりかへしふみ見ざりせば天の下をさむる道もいかでしらまし

右墺地利公使のこひによりて明治十年一月廿日宮內卿德大寺實則をもて下し賜へる

梅雨欲晴

をやみなく降りつゞきたる梅雨のながあめもけふは晴れむとすらむ

右明治十年京都に行幸ありけるほど六月十八日修學院離宮鄰雲亭にて當座によませたまへるを同地在住の華族に下し賜へる

太政大臣三條實美のたてまつりしたきものをめでゝ

〔たきもの〕薫香也
〔犬追物〕騎射の一にて、犬を追ひて射ること也。
〔由井のはまての跡おひて〕鎌倉時代の舊き風習にならひての義。
〔うてなの竹〕禁秘抄に「中殿東庭、竹臺二」とみゆ。今も清涼殿の御庭にあり。

九重の雲ゐに匂ふたきものゝかをりにきみが心をぞしる

右明治十一年一月十日下し賜へる

庭の木々にともしびをかけたるを見て

かぎりなくかけつらねたる燈火のうつるもすゞし庭のいけみづ

右明治十二年八月十八日右大臣岩倉具視の邸に行幸ありてよませたまへる

犬追物を見て

いにしへの由井のはまての跡おひて弓矢とる身の勇ましきかな

右明治十二年十一月廿七日吹上御苑にて犬追物をみそなはしてよませたまへるを従三位島津忠義に下したまへる

寄竹祝

こゝのへのうてなの竹の千代かけてさかえむ世こそたのしかりけれ

右明治十八年二月二十四日晃親王七十の賀に下し賜へる

侍衛鍋島直大の邸に行きけるをり二階より海のけしきをみて

高殿にのぼればすゞし品川のおきもまぢかく月に見えつゝ

右明治二十五年七月九日よませたまへる

京都の内庭の稚松をいにし年山縣有朋につかはしけるにかく生ひしげりたりとてその寫眞を見せければ

おくりにし若木のまつのしげりあひて老いの千歲の友とならなむ

右明治三十四年十一月元帥侯爵山縣有朋にくだし賜へる

「まぢかく」いと近く也。「なむ」願望の意を表はす語。

明治天皇御集　終

昭憲皇太后御集

昭憲皇太后御集　卷上

〔迎年言志〕歌御會始の御詠也。
〔みちのくに云々〕聖上東北御巡幸に際し、時鳥まで御あとを慕ひしにや都にはなく聲の少くなりしとの御意なり。
〔青人草〕人民を指す。夏・青人草・しける皆緣語也。

明治七年

迎年言志

はつくにをしらしゝ御代の姿にもたちかへりゆく年のゆたけき

明治九年

東北御巡幸のほど郭公といふことを

みちのくに鳴きてやゆきし時鳥ことしは聲のすくなかりけり

みちのくへ行幸ましましけるころ夏遠情といふことを

國のためいでます御代の夏にあひて青人草もいやしげるらむ

節制

花は春もみぢは秋のさかづきもほど〳〵にこそくまゝほしけれ

清潔

しろたへの衣のちりは拂へどもうきは心のくもりなりけり

勤勞

みがゝずば玉の光はいでざらむ人のこゝろもかくこそあるらし

沈默

すぎたるは及ばざりけりかりそめの言葉もあだにちらさゞらなむ

確志

人ごゝろかゝらましかば白玉のまたまは火にもやかれざりけり

誠實

とり〴〵につくるかざしの花もあれど匂ふこゝろのうるはしきかな

溫和

みだるべきをりをばおきて花櫻まづゑむほどをならひてしがな

〔ほど〳〵に〕身分相應と言ふことにて、萬事節約すべしとの御意。
〔しろたへの〕衣・袖・たすき・雲・雪にかかる枕詞。
〔すぎたるは云々〕論語先進篇に見ゆ、孔子の語（過猶不及）より出づ。
〔人心かゝらまし〕いはば各自の心がしつかりして居ればとの御意。
〔匂ふこゝろ〕人心の誠實といふことを、花に譬へていへる也。
〔ゑむほど〕花の先づ綻びて咲きそめた時をいふ。
〔しがな〕これは希望する事が成らば良からむといふ意。しとがなとの助詞が熟合せし也。

〔高山のかげ〕高山の裾を流るゝ水に其の影がうつりたる御意。
〔ひききにつく〕水の低く流るゝが如く、皆人も謙遜すべしとの御意。
〔本末をだに〕總に物事には順序があるから、其を注意せらるべしとの御意。だには其に數多き事物の中、其の一を擧げて餘を推測せしむる助詞也。
〔呉竹の〕よ、ふしに冠する枕詞。
〔むらぎもの〕心に冠する枕詞。
〔ゆたに〕ゆたかにゆるやかに。
〔松不改色〕歌御會始の御題也。

謙遜

高山のかげをうつしてゆく水のひきゝにつくを心ともがな

順序

おくふかき道もきはめむものごとの本末をだにたがへざりせば

節儉

呉竹のほどよきふしをたがへずば末葉の露もみだれざらまし

寧靜

いかさまに身はくだくともむらぎもの心はゆたにあるべかりけり

公義

國民をすくはむ道も近きよりおし及ぼさむ遠きさかひに

右十二首弗蘭克林の十二德をよませたまへる

明治十年

松不改色

君と臣の心のいろにうつさばやいつもかはらぬ松のみどりを

周姜后

身をつみてかざしゝ花をちらさずば朝日のかげも匂はざらまし

治民如治水

あさしとてせけばあふるゝ川水のこゝろや民の心なるらむ

鳥羽の港に御船とゞめさせたまへりときゝて

鳥羽の海の波風いかでさわぐらむなみ／＼ならぬみゆきとおもふに

明治十一年

こしぢへみゆきまし／＼けるころ

大宮のうちにありてもあつき日をいかなる山か君はこゆらむ

秋の日のてるにつけても思ふかな大御車のうちはいかにと

はつかりをまつとはなしにこの秋はこしぢの空のながめられつゝ

おなじころ侍菊盛といふことを

〔周姜后〕周の宣王の妃、賢にして徳あり、一日簪を脱して王を諫めし事あり、宣王の治蹟大に擧り、中興の名を爲すに至る。
〔身をつみて〕身をつゝしみて也。
〔鳥羽の港に云々〕明治十年七月二十八日、聖上廣島丸に御乘船神戸出帆鳥羽を經て同三十日横濱御着船、此の時の事也。
〔大宮のうち〕皇居の内にありても也
〔大御車〕聖上の御乘車あらせらる御車也。
〔はつかり〕春立去りし雁は、初秋にまた立歸り來るものなれば、斯く御詠みになりたる也。

「君のますあたりやいづこ」聖上越路の行幸を、遥に眺められてなり。「たなびく」たは接頭語、煙又は雲などの横に長く引くをいふ。「いたづき」なやみ又は病氣の事。「八重垣」霞が深いために、梅も見えぬ事を形容したる詞。「春のこゝろ」春の景色なり。「みそなはす」御覽になることを敬語にて述べたるもの也。

年ごとにまちしさかりもこの秋はおそきをたのむ庭の白菊

おなじころ濱殿にて

君のますあたりやいづこ白雲のたなびく方にみゆる山の端

日比谷練兵場行幸のをり擬兵を見て

いたづきも忘れてこゝにつどふらむ大御心の杖にすがりて

明治十二年

霞間鶯

梅が香をつゝむ霞の八重垣にこもりかねたる鶯のこゑ

岡殘雪

わかなつむ袖こそぬるれ朝日さす岡べの松の雪のしづくに

瓶梅

梅のはなかめにさゝせて大かたの春のこゝろをみそなはすらむ

柳

「をす」をは添簾、簾の事。
「かゝげてましを」まいてかゝげること。
「月のくま」月の影をさへぎりて、陰りをなすこと。
「もえにけり」萠出づること、卽ち芽生えいでし事。
「つく〴〵し」土筆のことにて、杉菜の地下莖より生ずる子、其の形筆に似て人目を[illegible]し、
「さわらび」芽を出したるばかりのわらび。
「つと」いへづと、みやげ。
「ちらばとおもふ」花びらが盃の中へ散つてくれゝばよいと望んで居ること。

青柳のなびくすがたや大御代にしたがふ民の心なるらむ

柳臨池水

春風になびき〳〵て青柳のかげさだまらぬ池のおもかな

窓前柳

をすならばかゝげてましをわが窓の月のくまなす青柳のいと

若草

老松の古葉のしたにもえにけりふむ人もなき庭のわかくさ

土筆

つく〴〵しつみて春野にくらす日はをさなあそびも思ひいでつゝ

山路蕨

上もまだはなれかねたるさわらびを山路のつとにをりてけるかな

花前宴

ふく風をいとひながらも盃にちらばとおもふ花の下かげ

御苑の花御らんぜさせしをり

雲の上に星をつらねてみそなはす花はゆふべもさやけかりけり

椿

あめそゝぐかきねの椿うつろひておのれとおつる音のしづけさ

更衣

夏衣たちゐもかろき宮人のすゞしの袖に朝風ぞふく

社頭新樹

なきそむるせみの小川にかげみえて若葉さしそふ加茂の神垣

梅雨久

かぎりありて終にはれなむ梅雨の空ともみえぬ昨日今日かな

池蓮

みそのふの池の蓮葉けふみれば橋より高くなりにけるかな

朝顔露

ゆふぐれのあはれはしらぬ朝顔の花しもなどか露けかるらむ

草花盛

〔雲の上に〕御苑を指す。
〔星をつらねて〕群臣を召して也。
〔さやけ〕判然と目にうつること。
〔うつろひて〕色のあせること。
〔おのれとおつる〕自然と落つること。
〔たちゐ〕着物を裁つ〔縫ふこと〕、起居のたつとに言ひ掛けたる也。
〔かぎりありて〕限りある雨期なればいつかはやむなるべしとの意。
〔橋より高く〕蓮のたけの橋より高く、のびたる事。
〔ゆふぐれの云々〕朝顔の花は朝咲きて夕には凋むものなるが、其の運命も知らずに、など露しげく哀に見ゆると也。

御馬には何をかふらむ秋の野の草はみながら花さきにけり

秋野

しるしらぬ招くを見れば尾花こそ秋の花野のあるじなりけれ

秋風

わが袖の上にしられぬ秋かぜもしづのはだへやふきとほすらむ

山家鹿

わびしとていかゞはすべきわが山にもとよりすめるさをしかのこゑ

菊のさかりなるころ青山の御苑にわたらせ給ひて

とく參るべう宣はせければ

さきみてるみそのゝ菊の花よりも大御詞の露ぞうれしき

かへるさ雨いたう降りければ

ふりしきる雨もいとゞかへりけりめぐみの露のあまりと思へば

紅葉

かりみやの軒端をあさみ玉だれのをすの內まで照る紅葉かな

〔御馬には云々〕秋の野の草は、皆一面に美しい花が咲いて居る。馬の飼料に供する草は一つもない、美しい花は飼料には出來ぬとの御意也。

〔しるしらぬ云々〕知つて居るも知らぬをも、さしまねくを見れば、實際の秋の野の主人は尾花也との意にて尾花を人格化した御歌也。

〔しられぬ〕我が袖には感じないとの御意。

〔しづのはた〕賤しき人の肌なり。

〔わびし〕つらいこと。

〔さをしか〕さは接頭語、牡鹿。

〔あさみ〕淺さにとの事。

〔梢〕木末の義にて木の上方を言ふ。
〔拂はぬ庭〕拂はぬ庭とたのんで落葉が散り來ると也。落葉を擬人したる也。
〔うすき氷をふむ〕詩經小雅小旻に「戰戰兢兢如レ臨ニ深淵一如レ履ニ薄氷一」とあり。陷らむ事を恐るゝにて、極めてき危に喩ふ。
〔よしの川云々〕よしの川の岩は皆ひくいので波に洗はれてしまふ。岩が高く波が何かなければ、多少の雪は岩上に殘つて居た事なるべしとの御意也。

かきくらす時雨の雲にちかければ峰の梢ぞいろづきにける

深山秋

もみぢ葉の林をいでゝいる山の檜原はよるのこゝちこそすれ

時雨

ふし柴のかりの宮居におとづれていちがや遠くゆく時雨かな

閑庭落葉

ふく風によそのもみぢもちりくるは拂はぬ庭をたのむなるらむ

朝霜

瓦屋の北おもてのみ殘りけり日かげにとけしけさの朝霜

水鳥

山川のうすき氷をふむ鴨のこゝろをつねのこゝろともがな

河初雪

よしの川波のおよばぬ岩なくばしるしばかりの雪をみましや

雪後雨

雨そゝぐ軒の玉水おとたかし雪のしづくもおちやそふらむ

　雪中駒

のるこまのひづめの音はうづもれてあとのみ殘る雪の中みち

　　みかぐらの夜すこしふけゆくほどに月いでたりやと
　　問はせ給ひければ

かゞり火の煙や空にみちぬらむ霜のみしろしみかぐらの庭

　禁中歳暮

なすこともなくてことしもくれ竹のよをりの今日になりにけるかな

　道

かへりみて心にとはゞ見ゆべきをたゞしき道に何まよふらむ

　桃山城趾

桃山のむかしの春のひとさかり思ひやらるゝ花の色かな

　萬里長城

ながき世の末までのこる石がきにかけゝむ民の力をぞおもふ

〔ひづめ〕蹄にて趾端にある厚き爪。
〔あと〕跡のあと也
〔かゝり火の云々〕月の出でざることを、かゝり火の煙の空に滿てるためなるべしと諧謔にの宣へる也。
〔くれ竹〕年の暮れることを、下にいふよをりの竹に言ひ掛けたる也、
〔よをり〕節折の義六月と十二月との大祓の時ある事にて、竹を以て主上の御長(オンタケ)などの寸法をとるをいふ
〔かへりみて〕自己を省察する事、
〔桃山〕豐臣秀吉が伏見桃山の城趾なり、
〔ひとさかり〕秀吉の榮華の極めて短きをいふ。
〔萬里の長城〕支那秦の始皇の增築したる臨洮より遼東に至る長き長城。

故郷松

いにしへのあとをのこせる石ずゑも松の落葉にうづもれにけり

貧家

朝夕のしばのけぶりもたてかねてなげきこるらむ宿をこそおもへ

詩

國の風ふき傳へたるもろこしのことばの花のかぐはしきかな

五十音韻

しきしまのやまと詞をたてぬきにおるしづはたの音いさやけさ

洋學

外國のふみのはやしの下風になびきなはてそやまとなでしこ

鏡

思ふことあればありげに見するかな心うつさぬ鏡なれども

絲

しづのめが手にまかせぬるうみ絲もうめばみだるゝ世にこそありけれ

〔石ずゑ〕建築の時の土臺の石(礎)。
〔しばのけぶり〕朝夕の炊事の煙り、
〔國の風〕こゝでは支那の漢詩を指す
〔なびきなはこそ〕な—そは中に動詞をはさみて禁止の意味を現す、
〔思ふことあれば云々〕鏡は其の人の外形をうつして心まではうつさぬけれども、其の人に何か思案すれば其の通りうつるとなり。
〔うみ絲〕眞綿などを細くつむぎて長くのばす事。

鞠

いにしへの大宮人はいとまありてまりばの花に春やくらしし

淺間嶽

山の名のあさまのけぶり海原のふなぢにさへもなびく御代かな

士族

小山田のかゝしに弓はゆづるとも君につかふる道なわすれそ

詠史

君臣のたゞしき道もかし原の宮の昔やはじめなるらむ

弟橘媛

船の上に君をとゞめてたちばなのいまはとちりし心をぞおもふ

紀夏井

うちそゝぐ夏井の水のめぐみより民の草葉もいきかへりけむ

小野道風

秋萩の花のかげにもかくれなきあとこそ見ゆれをののふる道

〔いにしへの云々〕宮中に仕へる人、萬葉集卷十に「もゝしきの大宮人はいとまあれやうめをかざしてこゝにつどへり」

〔淺間山〕上野國にある活火山なり。

〔かし原〕神武天皇の即位し給ひし大和の橿原の宮也。

〔弟橘媛〕日本武尊の妃なり。景行天皇の四十年尊東征して、相模より上總に渡らむとするや、海上暴風起り船轉覆せむとす。媛は之を海神の祟りなりとし、身を以て尊に代り、忽ち海中に飛込まれぬ。

〔紀夏井〕文德清和兩朝の人なり。地方官として令名あり。

〔平敦盛〕經盛の子なり。一谷の合戰に熊谷直實と組み遂に討死す年十六

〔まし〕未來を現はす助詞むにしの熟合したるもの也。

〔扇の風〕一谷の戰に平氏船に乘じて遁る。敦盛單騎にして一町程進みしが、熊谷直實扇を擧げてさしまねぎしといふ事より出づ。

〔巴〕中原兼遠の女今井兼平の妹源義仲之を寵す。美にして勇、合戰毎に一部の將として戰ひしといふ。

〔日野資朝〕大納言俊光の子、後醍醐天皇の寵臣なり。北條氏の爲めに佐渡に害せらる。

平敦盛

人しれず浪の花ともちりなまし扇の風のさそはざりせば

巴

松をこじゝその力のみあらはれてみさをの色はしる人もなし

日野資朝

時來ぬと君につげゝむしのびねやくもまをもれし山ほとゝぎす

木村重成

緒をたちしかぶとのうちの空だきはきえての後の世にかをりつゝ

大石良雄

梅の花雪にうもれて人しれずはるをやまちし山科のさと

僧月照

さつまがた沖の浪間にかげきえし月は今こそあらはれにけれ

禹

末つひにみだれむふしをはかりてもをざゝの露はうちはらひけむ

〔子路〕孔子の弟子親に仕へて至孝、勇力を好み志氣抗直なり。衞に仕へて其の難に死す、

〔藺相如〕支那周時代趙の名臣也。

〔項羽〕支那漢時代楚の名將なり。

〔わかれぢ〕項羽虞美人との別に涙をそそぎしをいふ。

〔趙匡胤〕宋の第一世太祖皇帝也、

〔櫻兒〕昔櫻兒といふ女子あり、同時に二人の男子より慕はれ、困じ果てゝ縊死したりといふ事。萬葉集卷第十六に見えたり。

子路

ひとすぢにすゝむ心のにしきにはたが皮ぎぬもおよばざるらむ

藺相如

位山こえあらそひし小車もきしらぬ道にかへしつるかな

項羽

山をぬく力もつきてわかれぢの涙や袖の雨とふりけむ

趙匡胤

ふりつもる雪のとざしを天つ風たゝきしよはの音ぞ身にしむ

萬葉集なる櫻兒を

一方になびかしつべき風ならば花ももろくはちらざらましを

班女辭輦

みだれけむためしをひきしてぐるまに匂ふ心の花ざくらかな

雪中求賢

雪わけしふかき心に臥す龍もいまはと空におもひたちけむ

焚裘示儉

やきすてし雉の毛衣うらうへにもとむる世ともなりにけるかな

孝感動天

おやのためかへす山田は久方のそらとぶ鳥もよそにやは見る

剪綵爲花

にほひなき花をつくりて冬木にもかけし榮は時のまにして

夫婦有別

むつまじき中洲にあそぶみさごすらおのづからなる道はありけり

男女同權といふことを

松が枝にたちならびてもさく花のよわき心は見ゆべきものを

支那窮民を救ふといふことを

日の本の惠の露にもろこしの青人草もいきかへるらむ

愼獨

人しれず思ふこゝろのよしあしも照し分くらむ天地のかみ

〔かへす〕耕作する事。
〔よそにやは見る〕鳥ですら他事とは見ずして感動すべしとなり。
〔おのづからなる道〕自然の區別はあると也。
〔よわき心〕女にたとへたるなり。
〔青人草〕總じて人民をいふ。
〔愼獨〕中庸に「莫レ見ニ乎隱一莫レ顯ニ乎微一故君子愼ニ其獨一也」とあり。

「西の海のはて」云々。西郷隆盛等の西南戰爭を指し給へるなるべし。
「學ばざらめや」學ばなければならぬといふこと、めやは反語なり。
「枝ゆづる」鳩に三枝の禮ありなどの事を申す。
「道にあたる」道理にかなふ事。
「寒さおほはむ」寒さを覆ふことにて着る衣類の事。
「皇子のうまれさせ給ひし」明治十二年八月大正天皇の御降誕を申す。

讀書言志

夜ひかる玉も何せむ身をてらすふみこそ人の寶なりけれ

往事如夢

西の海のはてにさわぎし浪の音もことしはゆめとなりにけるかな

寄民祝世

すゝみゆく萬の民の手わざにも見ゆるは國のさかえなりけり

禮

人として學ばざらめや鳥すらも枝ゆづるてふ道はあるものを

智

おこたりて磨かざりせば光ある玉も瓦にひとしからまし

をりにふれて

思ふ事いふこと道にあたりなば神のこゝろも動かざらめや

あやにしきとりかさねてもおもふかな寒さおほはむ袖もなき身を

皇子のうまれさせ給ひしころ鶴契千年といふことを

大君のみそののたづもけふよりは二葉の松の千世にともなへ

吹上御苑にて犬追物を御覽じけるとき

みそなはす弓矢のわざぞ世の人のたけき心を引起すらむ

船にて調練するさまのいさましきを見て

なみかぜに身をまかせても君が爲船ならすらし御軍のとも

大磯にて浦人の網引するを見て

たちいでゝあまのひくてもおほみいのめなれぬわざを近くみるかな

或人の奉りたる御劍のめでたきをたゝへて

御劍のてらす光にいはとあけし神代もさらにおぼしいづらむ

おそろしき病の難波あたりに多かりしは淸からぬ川水を
日ごとに飲みしによりてなど新聞紙にしるしたるを見て

安治川のにごれる水いかゝらすば靑人草もかれざらましを

明治十三年

〔犬追物〕昔行はれし射術の演習、竹垣にて馬場をかこひ中に犬を放ち、これを逐ひ射て勝敗を定むること。

〔なみかぜに云々〕海軍々人なればかく申されたるなり

〔あま〕海士にて漁人を指す。

〔いはとあけし〕上古天照大神が岩戸を明けて出でましたる事をいふ。

〔安治川〕大阪の市中を流るゝ川。

寒香亭の梅やゝさかりなりけるに

のどかなる心のみえて梅の花さかりいそがぬ枝もありけり

みはしの花御覽ぜさせしをり

政事しげきあしたの庭櫻けふはのどかにみそなはすらむ

洗心亭にて

おくれたる梢も見えてみそのふの花のさかりは久しかりけり

小金井にて

大君の深きめぐみにこがねゐの花のさかりもけふみつるかな

落花

君がためをらむとすれば黒髪のうへにみだれてちる櫻かな

菫

小山田のあぜにやすらふしづのめの花のむしろは菫なりけり

殘鶯

鶯の青葉にまよふ聲すなりみ山櫻もちりやはてけむ

〔寒香亭〕赤坂御所なる梅林の中なる亭の名。
〔さかりいそがぬ〕咲き後れたる花なり。
〔政事しげき〕政務御繁忙の事。
〔おくれたる〕花の他の花より咲き後れたるが咲き出でたるなり。
〔黒髪の〕髪の亂るゝより、亂るに冠する詞。
〔あぜ〕田と田との間の小徑。
〔花のむしろ〕一面に咲きたる菫の上に、むしろを敷きて休める如く、休み居るとの意。

「しろきや」やは疑問のやにて、白く見ゆるのは、樫の若葉なるべしとなり。

「すだく」虫など多く集つて、かまびすしく鳴く聲。

「いぶせし」むさくるしく。おぼつかない事。

「をぐらき」をは接頭語にこゝにては意味なし、單に闇い事。

「かりの宮居」假の皇居にて、行在所などを申す。

「みいたつき」御勤勞なり。

「さゝげたる」人民の獻上したる義。

「おくての」露を置くと、稲の晩稲とを言ひ掛けたるなり。

新樹

うすくこく緑かさなる山かげにしろきや樫のわか葉なるらむ

折にふれて

すだく蚊の聲いぶせしとおばすらむ軒端をぐらきかりの宮居に

みいたづきやすめたまへるかりみやもいかにいぶせき處なるらむ

民のさゝげたる螢とて八王子の行在所よりたまひければ

さびしさもしばし忘れてみるものはみまへになれし螢なりけり

秋のはじめつかた御田のほとりにて

夕露のおくての稲葉そよぐなりほにこそいでね秋やしるらむ

秋夕

下ぐさ咲くみかきのうちも夕暮の秋のあはれはへだてざりけり

市月

かりそめの露の上にもやどるらむ植木の市の秋の夜のつき

月前島

〔寒香亭〕赤坂御所なる梅林の中なる亭の名。
〔さかりいそがぬ〕咲き後れたる花なり。
〔政事しげき〕政務御繁忙の事。
〔おくれたる〕花の他の花より咲き後れたるが咲き出でたるなり。
〔黒髪の〕髪の亂るゝより、亂るに冠する詞。
〔あぜ〕田と田との間の小道。
〔花のむしろ〕一面に咲きたる菫の上に、むしろを敷きて休める如く、休み居るとの意。

寒香亭の梅や、さかりなりけるに

のどかなる心のみえて梅の花さかりいそがぬ枝もありけり

みはしの花御覽ぜさせしをり

政事しげきあしたの庭櫻けふはのどかにみそなはすらむ

洗心亭にて

おくれたる梢も見えてみそのふの花のさかりは久しかりけり

小金井にて

大君の深きめぐみにこがねゐの花のさかりもけふみつるかな

落花

君がためをらむとすれば黑髪のうへにみだれてちる櫻かな

菫

小山田のあぜにやすらふしづのめの花のむしろは菫なりけり

殘鶯

鶯の青葉にまよふ聲すなりみ山櫻もちりやはてけむ

〔しろきや〕やは疑問のやにて、白く見ゆるのは、樫の若葉なるべしとなり。
〔すだく〕虫など多く集つて、かまびすしく鳴く聲。
〔いぶせし〕むさくるしく。おぼつかない事。
〔をぐらき〕をは接頭語にてこゝにては意味なし、單に闇い事。
〔かりの宮居〕假の皇居にて、行在所などを申す。
〔みいたつき〕御勤勞なり。
〔さゝげたる〕人民の獻上したる義。
〔おくての〕露を置くと、晩稲とを言ひ掛けたるなり。

新樹

うすくこく緑かさなる山かげにしろきや樫のわか葉なるらむ

折にふれて

すだく蚊の聲いぶせしとおばすらむ軒端をぐらきかりの宮居に

みいたづきやすめたまへるかりみやもいかにいぶせき處なるらむ

民のさゝげたる螢とて八王子の行在所よりたまひければ

さびしさもしばし忘れてみるものはみまへになれし螢なりけり

秋のはじめつかた御田のほとりにて

夕露のおくての稲葉そよぐなりほにこそいでね秋やしるらむ

秋夕

千ぐさ咲くみかきのうちも夕暮の秋のあはれはへだてざりけり

市月

かりそめの露の上にもやどるらむ植木の市の秋の夜のつき

月前島

てる月のそれとさしてはみすれどもなほほのかなり伊豆の大島

新殿の月御覽ぜさせしゆふべ

おばしまのかげもうつりてすゞしみしくまいもなき雲の上の月

大前にはべりけるゆふつかた木のまより月のさしいでければ

さしのぼる月の光はきよけれど松より外のかげのわかれぬ

月あきらかなりける夜仰ごとにて

さやかなる雲居の月に山城のみやこの空もおぼしいづらむ

小笠原島の西瓜とて人のおこせければ

御車のかへります日のちかゝらばまちても君にさゝげむものを

月前千鳥

風寒きあらいそ崎の月影はちどりばかりやなれてみるらむ

海外旅

日の本のさかひはなれてゆく船に國の光ものせてやらまし

庭上鶴馴

「てる月の云々」月明にて大分は分るけれども、なほぼんやりと伊豆の大島は彼方に見えて居るとなり。
「おばしま」欄干なり。
「さやかなる」はつきりと分明なる事
「雲居の月」雲の居る空と禁裏とをかけたるなり。
「山城のみやこ」京都を指す。
「御車のかへります日」還幸の日を申す。
「ちどりばかりや」千鳥は寒きになれたる鳥なれば、かゝる寒夜も面白く飛廻すべしと御意
「國の光」日本の國體風光などの事を申されたるなり。

〔庭上鶴馴〕歌御會始の御詠。
〔もとの澤邊〕以前にすみし水邊なり
〔大宮のとばり〕宮中の室内に垂れ下げたる布の事。
〔つゝゐづゝ云々〕筒の如く圓く堀りたる井戸。伊勢物語に「筒井筒井筒に掛けしまろがたけ生ひにけらしな相見ざる間に」とあり。
〔ふりわけがみ〕童女の髪の元を結ばずして左右に振分けて垂れたるをいふ。同書に「くらべこし振分髪も肩すぎぬ」とあり。
〔足引の〕山の裾の長く引くをいふ。山に冠する枕詞。
〔濱殿〕芝なる濱離宮なり。

いつくしみひろき御苑にすむたづはもとの澤邊も思はざるらむ

木曾路に行幸ましましけるころ朝霧のたてるを見て

大宮のとばりもしめる朝霧に昔がこゆらむ山路をぞ思ふ

明治十四年

風來楊柳邊

つゝゐづゝ井筒にかゝる青柳のふりわけがみに春風ぞ吹く

曉天春月

月かげの殘るやいづこ足引の山さへ見えずかすみこめたる

濱殿にものしけるをり雨いさゝかふりければ

春雨のふる葉まじりの芝草をかきわけてつむつくづくしかな

苅萱

あげまきのとがまのがれしかるかやも秋の霜にはかれむとすらむ

雲間月

〔渡るかりがね〕雁が船の上をひくゝ鳴きて渡るなり。雁を擬人したる也

〔ひかりをゆづる〕他の色は月夜のために見えずして、白菊のみひとりいちじるしく目出つとなり。

〔山姫〕山を守る神女。

〔花の衣〕秋の紅葉に比較せば春の花は見劣りするとなり。

〔嵯峨野の秋〕仲國が小督局を尋ねたる故事なり。

〔手綱〕馬のくつわに附けたる綱。

〔つぼ菫〕花の形の壺に似たるすみれ。

浮雲のたえ〴〵をもる月のかげみるほどに夜はふけにけり

雁過湊

碇おろすみなとの渡に月ふけて船の上ちかく渡るかりがね

月前菊

くれなゐも薄紫も白菊にひかりをゆづる月のよはかな

紅葉勝花

山姫の秋のにしきにくらぶれば花の衣は下がさねなる

秋笛

月にふく笛のねきけばいにしへの嵯峨野の秋もおもほゆるかな

をりにふれて

手綱とる御手も寒くやおぼすらむ紅葉みだるゝ庭の嵐に

冬のはじめみそのにて

初霜のむすぶかきねにつぼ菫一もとさくがめづらしきかな

木枯

〔あさまだき〕朝未の義、夜の明けぬ前、
〔松葉かく〕松葉を搔き集めて、農家などにてたきものとするなり。
〔埋火のもと〕埋火とは火鉢の火を灰にて埋めたる義なれど、單に火鉢の事に用ゐらる、
〔長鳴鳥〕鷄の異稱
〔星のかげ〕星の光
〔みこしぢ〕越路なり、みは添へたる語なり。
〔や〕疑問のや也。
〔ちとせ〕千歲にて歲久しくにいふ。
〔よは〕夜半なり、
〔はゝその森〕柞の古稱、母にかけたるなり。

あさまだき松葉かく子が袖の上に霜ふきおとす木枯のかぜ

爐邊述懷

寒き夜にかさねむ袖もなき人の身をこそおもへ埋火のもと

曉神樂

榊葉の末をりかへす聲のうちに長鳴鳥もうたひそめけり

冬星

あかつきのくもふき拂ふ木枯にかゞやく星のかげのさやけさ

冬人事

みこしぢの雪にこもりて處女等は夏の衣やおりいだすらむ

山家松風

ひとりきくわがやまざとは松風のちとせのこゑもさびしかりけり

雨夜思人

しぐれするよはの寒さに思ふかなはゝその森の陰はいかにと

獨對孤燈

〔くらからぬ道〕學問の道也。
〔天の下をさむる君〕至尊を申す。
〔葵の上〕源氏物語より取材せるもの也。
〔みやぎ野〕陸前の萩の名所なり。
〔宮の内〕皇宮を申す。
〔あした〕朝の事也
〔かへりますと云ふ〕聖上の都へ還幸の日も近いといふこと、きくは聞くと菊とを言ひ掛けたる也。
〔濱殿〕度々出づ、芝の濱離宮也。

くらからぬ道をたづねて窓のうちに獨かゝぐるよはのともし火

一人有慶

天の下をさむる君がよろこびは青人草のさかえなるらむ

謠曲の葵上を

小車のをすの葵におもひきやうらみの露のかゝるべしとは

北海道へゆきまし〳〵けるころ

みやぎ野の萩のさかりを見ましても御苑の秋をおぼしいづらむ

近衛のつはものどもが朝ごとにふきたつる喇叭の音をきゝて

宮の内をいでましゝ日のしのばれてあした身にしむ笛の聲かな

北海道にわたらせたまふをおもひやりたてまつりて

民のためいでます道ぞ北の海の霧も御船をよきてたゝなむ

おなじころ栽菊といふことを

かへりますほどもちかしときくの花うゑてまつこそ樂しかりけれ

濱殿にゆく道にてさいつころの火にやけし民家のあとを見て

ときのまに煙となりしあとみれば人のなげきぞおもひやらるゝ

明治十五年

春風

うちなびく柳のいとのかたよりに吹くかたしるきはるの夕風

夢梅花

うめの花たをるとみしは夢なれや薫も袖にのこらざりけり

春月入簾

玉だれのをすのうちにもさしながら霞をいでぬ春のよの月

春雨

山吹のいはぬ色なる花のうへに音なき雨の露を見るかな

馬上看花

したかげにもゆる小草をはませつゝ駒の上ながら花を見るかな

心静見花

〔ときのまに〕一時の間に也。
〔かたより〕片々にもつれ寄る事。
〔夢なれや〕夢であつたらうかと也。
〔玉だれの〕緒に冠する枕詞なれど、轉じて普通のをにかゝりたり。
〔山吹のいはぬ色〕古今集誹諧歌に「山吹の花色衣ぬしやたれ問へど答へずくちなしにして」とあり。
〔はませつゝ〕食はせながらなり。
〔したかげ〕下蔭にて木や何かの下のかげなり。

ちるうさも思はでけふは見つるかな蕾まじりの花のさかりを

みそのゝ花御覽ぜさせしゆふべ

庭ざくらみそなはす夜はともし火の花にも風のいとはるゝかな

御苑の花を見るほどに夕暮近くなりにければ

こゝろのみいそぐとすれどかへるさの道はかどらぬ花のかげかな

雨中落花

春雨の露ふきはらふ朝風にみだれあひてもちるさくらかな

暮春

なにごともなごりある世を櫻花さそひ盡してくるゝ春かな

濱殿より海を見わたして

しづかなる春の海原ゆく船は波の上ともおもはざるらむ

おなじをり人々のつみためたる草のいとおほかりけるを見て

皆人のひとつごゝろにつむ時は小草も山となる世なりけり

朝顏

〔ちるうさ〕花の散る心配もなくして也。
〔みそなはす〕聖上の御上覽になりし事。
〔かへるさ〕歸途也
〔はかどらぬ〕進まぬ事也、
〔みだれあふ〕花と花とお互に風のために亂るゝさま。
〔さそひ盡して〕上句のなごりに對するものにして、少しの形跡も留めずに散りはつるをいふ。
〔海原〕原は平かにして廣き所なれば大洋を申す。
〔ひとつごゝろ〕一所に。

はれわたる空の色にもまさりけり雲居の庭の朝顔のはな

海上月

夕しほのみちたる月にわたの原ふたゝびみゆる沖のつり舟

初紅葉

むらさめに常磐木ならぬしるしのみ先染出でし山本のもり

河水久澄

天つ日のてらさむかぎり神風やみもすそ川の末はにごらじ

人

人はたゞすなほならなむ呉竹の世にたちこえむふしはなくとも

司馬相如

よつの馬車にかけてふるさとの橋をわたりし音ぞとゞろく

千葉縣より還幸ましましける夜風はげしう吹きければ

いでましのほどにしあらばいかばかりこよひの風にものおもはまし

〔わたの原〕わたは海なり、原は例の廣き所をいふ。
〔常磐木ならぬ云々〕常綠樹でない證據に、先づ森を少しばかり紅葉にそめしと也。
〔河水久澄〕歌御會始の御詠。
〔天つ日〕皇統を申す。
〔神風〕神の吹かせ給ふ風の義也。
〔みもすそ川〕伊勢神宮の邊にある川なり。五十鈴川とは異なり。
〔人はたゞ云々〕秀れたる才智は無くとも、正直にあれかしとの御意。
〔司馬相如〕字長卿蜀郡成都の人。

明治十六年

鶯

鶯の友をもとむる聲すなり花のねぐらもさびしかるらむ

車中聞鶯

小車のうちもわすれて鶯のこゑするかたをかへりみしかな

鶯聲和琴

鶯のこゑあはすともしらずして琴のしらべをとゞめけるかな

雨中梅

かきくもりふる春雨に梅の花いよ〳〵しろくみゆる今日かな

夕春雨

夕月のかげはさしながらをすのとの花のこずゑに春雨ぞふる

おほせごとによりて

大宮の軒端の雪も春雨のしづくと共におつるよはかな

〔ねぐら〕鳥の寢る鳥屋。

〔小車の云々〕人力車に召されての事なるべし。御心をやさしき鶯に止められたる春日の卽興一幅の繪のやうに拜す。

〔こゑあはす〕聲を琴に合すこと。

〔いよ〳〵しろく〕梅の花が雨にみだれて白く見ゆるなり。

〔夕月の云々〕月夜春雨の降るを詠ませ給へるなり。

〔しづく〕水のしたゝり、春の雪の俤けて、雨の點滴と共に軒端におつるを詠ませられたるなり。

御巡幸ましゝし年の又の秋萩のさかりなるを見て

うれしくもともにみそのゝ萩が花こそはさびしき盛なりしを

苅萱

色も香もなきものながら七草のかずにはもれぬ野べのかるかや

月照瀧水

箱根山このまの月のかげふけていよいよ白しらいとの瀧

月照海上

うみごしの山のはつかにみえそめて波間に匂ふ月のかげかな

鄰家月

わが庭もやみならなくに月見むと鄰のやどをとひてけるかな

菊花帶霜

霜むすぶ庭の白菊花よりも下葉の色ぞまづかはりける

仰ごとによりて月前霧を

さぎりたつこよひも月のさやけきは君がみかげのそへばなりけり

〔又の秋〕次ぎの年の秋也。

〔ともに〕聖上と共に御苑の萩を御上覧にならせらるゝをいふ。

〔苅萱〕宿根より生ゆる草にて、莖葉總て薹に似て小さし、又葉の面に青く白ばみたる縱條あり、小さき穗あり。秋の野に茂りて、風情あり。

〔このまの月〕木の間よりもれ來る月

〔はつかに〕わづかになり。

〔匂ふ〕照りかゞやく事。

〔霜むすぶ〕霜を帶びたる事。

〔君がみかげ〕君が稜威のためといふこと。

〔みこゝろ〕聖上の御心なり。
〔ちりつもる云々〕散り積る垣根の落葉を掻き別くれば、また冬枯れせぬ青々しき草もありたりとの御意。
〔よればより來る〕飼主が池の欄干により來れば、水鳥も亦慕ひて來ると也。
〔四海清〕該御會始の御題也。
〔みうつくしみ〕皇恩四海に及ぼし給へる事を申す。
〔道ならす〕練習、
〔さゞれ〕さゞれ石の略、小石也。
〔夕やみ〕夕闇にて、とへハみやみの事、

くもりがちなりける夜おほせごとによりて空を仰ぎて

みこゝろにかゝらざりせば浮雲のひまゆく月の影も見ましや

寒草

ちりつもる垣根の木の葉かきやればまだ冬がれぬ草もありけり

水鳥

飼ひならすぬしやしるらむおばしまによればよりくる池の水鳥

四海清

大八洲みうつくしみの廣き世はなみの千里も鄰なりけり

艦隊操練

國のため事しあらばといくさ船あたをふせがむ道ならすらし

寄池述懷

底にしくさゞれもみゆる池水のきよき心にならひてしがな

向が岡にみゆきましゝける夜雨いみじうふりいでければ

御車をまつま久しき夕やみにむねとゞろかす雨の音かな

いづこまでかへりますらむ夕やみの空かきくらし雨のふりくる

明治十七年

柳上鶯

花ちらすとがをおはじと鶯は柳のえだにうつりてやなく

菫

朝露のひるげをはこぶ里の子も菫つむなり野邊の細道

春雨

おりたちて梅の枝をる宮人のたもとにかゝる春の雨かな

見花

咲く花のかげにうかれて園守に見られむことも忘れつるかな

深山花

だづね入る道ひらけたる君が代はみやま櫻もうれしかるらむ

橋邊見花

〔空かきくらし〕空のかきくもる事。
〔とが〕罪といふに同じ。
〔ひるげ〕晝食にて中食の事、露のひるに言ひ掛けたる也。
〔おりたちて〕下へ行くこと。
〔咲く花の云々〕花見の即興を詠じ給ひしもの也。
〔たづね入る〕探勝の道の開けたる聖代を申す。
〔うれしかるらむ〕櫻を人格化して宣給へる也。

大堰川はしをこえてもさらにまたかへりみらるゝ山ざくらかな

花散風

うつろひし色をみせじと春風にちるや櫻のこゝろなるらむ

風拂落花

春風の吹上の庭のさくら花このもとにだにとまらざりけり

落花浮水

池水にちりかさなりて櫻花のこる片枝のかげもうつらぬ

寄花述懷

たらちねの今もいまさば大御代のさかりの花も見せましものを

海上春望

大ふねのゆくあとみえて海原のかすみのうちにたつ煙かな

藤花隨風

みる人のそでもひとつに春風のふきひるがへす藤なみの花

藤花散

〔かへりみらるゝ〕あかぬ眺めに花を惜しみ給へる也。
〔うつろひし云々〕褪れた色を見せじとて春風にあわたゝしく散るはやはり櫻の本心なるべしとなり。花は櫻に人は武士などゝ同じ見樣に拜す。
〔吹上〕春風の吹くと、宮中御苑の吹上とを言し掛けたるなり。
〔たらちねの〕垂乳根の義、母又は親に冠する枕詞なれど、單に親の意にも用ゐらる。
〔そでもひとつ〕藤の花も見物の人の袖も一所に、春風に吹きかへさるゝと也。

〔山ずみの云々〕探梅の人のために、山家の人も席を掃除して相待つなるべしと也。
〔遠くゆく云々〕遠く外出する煩雑もなしに也。
〔ゆきてみむ云々〕嵐山の花は行いて見ることは出來ぬけれどもとの御意
〔みけし〕御衣の事
〔春もまた云々〕深山鶯といへる題を聖上の行幸にむすびて、巧みに詠ませ給へり。
〔大きさいの宮〕英照皇太后（明治三十年一月崩御）を申す。
〔杉田の梅〕神奈川縣久良岐郡にあり。

春風になびく〳〵とみしほどに庭にちりしく藤なみの花

春山家

梅の花とふ人のため山ずみのむしろの塵もうちはらふらむ

園中春遊

遠くゆくわづらひなしに御園生のわかなつむこそ樂しかりけれ

をりにふれて

ゆきてみむものならなくに嵐山花のたよりのまたれぬるかな

八王子の御獵場よりかへらせたまひける日狩場雪といふことをよませたまひけるに

兎とる網にも雪のかゝる日にぬれしみけしを思ひこそやれ

おなじをり深山鶯といふことを

春もまだ寒きみやまの鶯はみゆきまちてぞ鳴きはじめけむ

三月ばかり大きさいの宮にしたがひまつりて杉田の梅みむとていでたちけるに雨いみじうふりければ

「御めぐみの雨」皇太后との御同伴なればかく申させ給へり。
「しぶく」頻に強く降る事。
「とざしこめたる」ふさ〲戸を閉ぢたる家の如何にもむさくるしいとの御意なり。
「かちびと」と云ふは道路のぬかるみを徒歩にて行く人の也。
「みさき」前驅なり。
「あさる」さがし求むるなり。
「まつもわりなし」待つもせん方なし又は仕様なし。
「ちりにし花云々」もはや花の事は忘れはてゝ、大方の人々は夏の氣分になりしとの御意。

御めぐみの雨とはしれど小車のすゝみかねたる今日の道かな

　　笹下村といふところにやすらひて

笹の葉に雨うちしぶく音寒みとざしこめたるやどのいぶせさ

　　風さへそひて汽車の内もいとさむうおぼえけるに

かちびとの道のぬかりをふむみればしづごゝろなき今日の雨かな

　　騎兵のいさましげなるを見て

ふりしきる雨にたゆまず駒はせてみさきつかふるますらをのとも

　　首夏鳥

いろづける櫻の實をやあさるらむ若葉がくれに鳥なくなり

　　待時鳥

時鳥まつもわりなし鶯のこゑまだのこる山かげにして

　　夏心

おほかたは夏のこゝろになりぬらむちりにし花をいふ人のなき

　　月前蟲

「鈴蟲のこゑ」鳴く聲鈴の音に似たるよりかくいふ。鈴音の鳴く聲あまりにほがらかなるため、斯くよませ給へるなり。

「秋をへて」秋を過ぎてなり。

「しろしめす」聖上の統治し給ふ國土

國を思ふ御仁慈、さすがに國母陛下の御歌と拜す。

「晴天鶴」歌御會始の御詠なり。

「あしたづ」葦田鶴なり、普通の鶴の稱其の多く葦の生じたる水邊に居るよりいふ。

「ほどやなからむ」衣服に織るも程ない事なるべしとの御意なり。

「湯谷」普通は熊野と書く。平家物語卷十、「海道下の事」を參照。

籠のうちをいでゝなくとや思ふらむ月すむよはの鈴蟲のこえ

對月述懷

秋をへてかはらぬ月の鏡にもむかふ姿のはづかしきかな

歳暮

しろしめす大御國内に事なくてくるゝ年こそのどけかりけれ

晴天鶴

あしたづの翅ゆたかに見ゆるかなはらふ雲なき天つみそらに

松上鶴

みそのふのたづの風きりのびつらむ木高き松にけさやどりたる

羊

としどしに牧のひつじのかづそひぬみけし織らむもほどやなからむ

窓燈

いづこより風のいるらむとざしたる窓のともし火かげなびくなり

謠曲の湯谷を

ふるさとの春にこゝろのひかれずば花見車そのどけからまし

明治十八年

老人折花

老が身をしたふうまごにみせむとて折りもてゆくか花の一枝

山家落花

友と見るわが山ざくら春風に散るこそあかぬわかれなりけれ

旅宿落花

一夜のみかりのやどりにちる花もをしむや人のこゝろなるらむ

みそのゝ菜花を

さきつゞく畑のすゞなの花みればみそのゝ内のこゝちこそせね

江上春興

花のもと柳のかげに船よせて遊ぶ入江の春ののどけさ

雨中躑躅

〔ふるさとの云々〕故郷の老母の病の心に懸らずば、今日の花見は長閑ならむ物をとの意也。三句は車の縁語也。

〔うまご〕は發語なり、單に孫と云ふに同じ。

〔わが山櫻〕我が住む山里の櫻の意。

〔あかぬ別れ〕飽きもせぬに離別する事、即ち名殘惜しさの切なる別れを云ふ。

〔かりの宿り〕假りに宿りし家の意と借り宿の意とに掛け給へる也。

〔みその〕禁苑なり

〔咲きつゞく云々〕禁苑の中に廣々と咲き續ける菜の花の畑を見れば、田家の如き感ありて雲居の御庭の心地せずと也。

ふる雨にぬれて色こきつゝじ原おちたる花も下に見えつゝ

藤花映水

波たゝぬ池のそこにも藤の花うつろふ影はうちゆらぎつゝ

春動物

大君のいでましまつと花かげにいなゝく駒の聲ののどけさ

梅雨晴

かぎりなくたちかさなりし雨雲もはるれば晴るゝみなつきの空

野夏月

露むすぶ夏野の原の月ふけてしのび〳〵にむしもなくなり

野徑夏草

草ふかき夏野の原も人いゆく道ひとすぢはうづもれずして

里夕立

つみのこす桑の林に風たちて夕立すなり富岡のさと

夏蟲

〔降る雨に云々〕結句の下に見えつゝとは、地までも紅深く染まれる狀に美しく詠ませ給へる也。

〔波立たぬ云々〕うつろふは、映るの延語也。結句は、風の事を云はずして、吹く風を描寫し給へるなり。

〔いでまし〕行幸なり。御幸（みゆき）と云ふに同じ。

〔はるれば晴るゝ〕雨雲の晴れて散り行けば、空も晴れ渡り行くと也。みな月は七月にて、五月雨の期間の過ぎ去れる趣を現はし給へり。

〔しのび〳〵に〕幽かなる聲立てゝ鳴き出でし意を、斯くは綾なして宣へるなり。

〔夏草云々〕燈火に寄り來る虫の夥しきに據りて、宿所の外面に夏草の繁茂せる狀を察し給ひし也。

〔ぬる身〕寢る身なり。

〔照る月に云々〕月夜に高き場所より村里を瞰下し給へるにて、其の景色繪を見るが如き心地す。

〔隣にて云々〕我庭にては見馴れし松の姿も、所を變じて隣家より見れば又趣き變りて珍らしと也。

〔たらちね〕垂乳根の義、親を云ふ。

〔見し影〕子供の時分に見し月の影を云ふ。

「折り散らしてし」何の觀念も無く頑是なかりしを云ふ

夏草のふかきしられてともし火によりくる蟲も多き宿かな

秋夜長

思ふことなくてぬる身は秋の夜を長きものともしらずやあるらむ

月前里

てる月に白くみゆるや里人のふきあらためし藁屋なるらむ

鄰家月

となりにて月見るよはゝわが庭の松のすがたもめづらしきかな

月前松

枝しげき影のうつりて月の夜も木のもとくらし庭の老松

對月思昔

たらちねの袖にすがりて見しかげも思ひぞいづる秋の夜の月

對菊思昔

白菊のまがきにたちて戀しきはをりちらしてし昔なりけり

秋湖

蜆とるおもの丶はまの霧はれてあまの小舟のかずも見えつ丶

行路松

ひともとの野中の松も里人の雨にたちよるかげとなりつ丶

山家翁

山松のかはらぬかげにむかひつ丶ひとりおいぬと身を歎くらむ

訓盲院

みるめなき浦わのあまも藻汐草かきならふ世となりにけるかな

釣舟

かへるともゆくともなくて浮べるは釣するあまの小舟なるらし

漁舟暮歸

入日さすいそ山かげをかへるなりけさこぎいでしあまのつり舟

懷舊

たらちねはしらですぎけむ國の風海の外までふき渡る世を

西の海へみゆきまし／＼けるころ船中月明といふことを

「おもの丶濱」近江の湖を云ふ。拾遺集に「滯る時もあらじな近江なる御膳の濱の天の日つぎは」とあり。

「みるめなき云々」海松布(ミルメ)無きと云ひて、見る目の無き意、即ち盲人の義に詠み給へる也、藻鹽草を搔く、と云ふ緣より、書き習ふと續けて綾なし給へり。

「歸るとも云々」磯邊の方へ歸り來るにも非ず、沖の方へ往くにもあらず一つ所に停止し居るは釣舟ならむと也。

「入日さす」さすは棹の緣語を含めたる也。

「國の風」皇國の威力を云ふ。

波風もはばかる船のうちにしてさやけき月やみそなはすらむ

おほきみはみふねすゝしく照すらむあかしのうらの夏のよの月

明治十九年

市霞

あき人の聲かしましき市中ものどかにたつは霞なりけり

柳上鶯

鶯のつばさの色もわかぬまでみどりになりぬしだり柳は

花間鶯

うぐひすのしめたる枝はみえねども花の林に聲きこゆなり

雨中梅

大宮のみはしの梅もさきそひてつれ〴〵ならぬ春の雨かな

政事いとまある日とみそなはす梅には雨も心してふれ

蘇

〔波風も云々〕波風も天皇の大前には恐懼して立ち騒ぐまじければ、海上風ぎ渡りて靜かなる御船の中に、光清き月を御覽じ給ふらむと也。

〔かしまし〕物賣る聲などの喧(かま)しきを云ふ。

〔つばさの色〕鶯色すなはち若緑色を云ふ。

〔しめたる枝〕占めたる枝の義也。鶯の宿りをる櫻の枝なり。

〔大宮の云々〕みはしは御階也。御庭より御殿へ昇るきだ橋を云ふ。つれづれならぬとは無聊に苦しまぬ意なり。

〔心して降れ〕能く物事を考へ、氣を着けて降れと也。

いたゞきのましばおろしてしづのめも山松かげのわらびをるなり

庭菫

里の子につませてしがなわが庭の芝生もみえずさけるすみれを

春月朧

光あるものとも見えず大空にかすみはてたる春のよの月

遠島春月

雪深き蝦夷が千島にすむ人は春もかすまぬ月やみるらむ

水郷春曙

波の上に月はしらみてほの〴〵と柳みえゆく川づらのさと

深夜歸雁

おぼろよの月夜ふかしてをすのうちに入らむとすれば雁なきわたる

花始開

みうたげのほどちかゝらし濱殿のみそのゝ櫻さきそめにけり

夕見花

〔いたゞきの云々〕束ねたる焚木を頭の上に乘せて運び歩く大原女などの狀を詠み給へるなり。

〔里の子に云々〕摘ませてしがなとは摘ませて遣り度く思ふとの意也。

〔雪深き云々〕蝦夷が千島の春は內地の冬なれば、春も霞まぬ月と詠み給へる也。

〔波の上に云々〕月はしらみてとは、夜の明け離れ行くまゝに、月影の光うすれて、ほの白く見ゆるを云ふ。

〔おぼろ夜の云々〕朧夜の月夜とは故らに重ねて調べ給へる也。此の例古歌に多し。

〔みうたげ〕茲にては觀櫻御宴を云ふ

ともしびの影まどふかくにほふなりくるゝもしらで花みせしまに

禁庭落花

大君にまたれしさきし御園生の花も嵐はのがれざりけり

落花滿庭

敷き渡すさゞれもけさは見えぬまで花散りつもる九重の庭

海棠帶雨

よるの雨にうちしをれつゝ海棠の花のうらのみ見ゆる今朝かな

蝶

ふかみぐさかをるまがきのあさ風に眠れる蝶もゆめさますらむ

月前蛙

夕月夜かすかに聲のきこゆるはいづこの小田のかはづなるなむ

雨夜蛙

山吹の見えしあたりかいさゝ川くらき雨夜に蛙なくなる

苗代

〔ともし火の云々〕花かげの明るさに日の暮るゝをも知らで眺め居りしが不圖殿内を見遣りしに燈火の影窓の裏に輝きてありと也。匂ふとは光艶の映(うつ)るに云ふ語なり。

〔敷き渡す云々〕さゞれは小さな石、九重は禁裏の稱也

〔夜の雨に云々〕海棠の雨に頭垂れて其花の外側のみ見ゆと詠み給へる、清新の趣きに拜せらる。

〔ふかみ草〕牡丹の和名也。また二十日草とも云ふ。

〔いささ川〕いささは聊かなどの語系に同じ、細小の意なり。

種まきていくかへにけむ道の心の苗代水のそこ青みたる

庭躑躅

何となく山里めきぬわが庭の岩根のつゝじ花さきしより

枕上山吹

ぬるがうちにまくらの塵となりにけりかけ花いけの山ぶきの花

春夜

花見つゝみうまや近く來にけらしおぼろ月夜に駒のいばゆる

甁槿

時のまにしぼみを惜しと水甁にうかべてぞ見る朝顔の花

故郷萩

ちかゝらばゆきてみましを故郷のかきねのまはぎ咲くといふなり

故郷秋草

むかしわが野をうらやみて植ゑおきし苅萱いかに茂りあふらむ

鄰家蟲

〔種まきて云々〕水底にて稻種の發芽せし狀を、苗代水の底青みたると面白く詠せ給へる也

〔ぬるが中に云々〕初句は寢てゐる間にの意、枕の塵云々は枕邊に散り敷けるを云ふ。かけ花いけは、柱にかけ置く花活け也。

〔花見つゝ云々〕御厩近く來にけらしとは、花に憧憬れて禁苑をさまよひつゝ、御料の御厩近くまでも步みを運ばせ給ひし趣なり。

〔行きて見ましを〕故郷までの道程の近くあらば行きて見む物をとの意也

〔垣根の眞萩〕故郷の庭の垣根の萩なり。眞は美稱、單に萩と云ふに同じ

〔月を見し云々〕先刻まで隣の家にて月を眺め居りし人も、夜の更け行きしまゝに最早臥處に入りたるならむ話し聲も物音も絕え果てゝ、鳴く虫の聲のみ淋しく聞ゆと也。

〔ふせご〕伏せ籠の義、此の御歌にては虫籠の事に詠ませ給へり。

〔玉敷の庭〕玉を敷き列ねたる庭の意にて、美しき庭園を云ふ。

〔せぎりの水〕瀬を押し切りて流れ行く水を云ふ。底清み流れ絕えせぬ佐保川の、せぎりの淺や萬代の數〔飛鳥川せぎりに結ぶ水の泡の云々など古歌に多く見えたり。

月を見し人もふしどに入りぬらむ鄰はむしのこゑのみぞする

松蟲

ふせごよりのがれいでけむ玉敷の庭にもこよひ松むしのなく

月前車

大宮のみはしの月にきこゆなり四谷あたりのをぐるまの音

明月契久

わが君のちとせの秋をちぎるかなくもりなきよの月に向ひて

曉霧

きりこめて曉くらし玉川のせぎりの水のおとばかりして

夕鶉

山畑の粟のたり穗の露ちりて夕暮寒く鶉なくなり

菊有新花

あたらしき色こそ見ゆれ菊の花ひらけゆく世にならひてやさく

瓶菊

露はらふ風だにしらぬ大宮のをがめの菊の香こそ深けれ

觀菊會

秋ごとにつらなる人の數そひてうたげにぎはふ菊の花園

秋鳥

あしがちる難波の浦の秋たけて寒き夜風に鶴ぞなくなる

行路寒月

老人の寒さをとひしかへるさの夜道にさゆる月の影かな

禁中雪

大宮のをすのと清き初雪にあとつけそめて鶴ぞ遊べる

窓前雪

いかばかりつもりにけむと窓の戸をあくる袖にも雪のちりくる

雪中竹

夜のほどは何の音かとおもひしを雪折したりまどのくれ竹

寄雪祝

〔秋ごとに云々〕つらなるとは、列席するを云ふ。うたげは宴會なり。

〔あしがちる〕萬葉集卷廿、家持の歌に、安之我知流、難波能美津爾云々とあり、此の外にも尙ほ多し、難波は葦の名所なれば、浦風に葦の穗花の散る狀を見て難波に冠する枕詞となせる也。

〔秋たけて〕秋も暮になりての意也。

〔歸るさ〕さは方(サマ)の略也、逢ふさ、きるさ等の「さ」に同じ。

〔をすのと〕小簾の外の義なり。

〔雪折したり云々〕夜の程に音のせしは、吳竹の雪に折れし音なりきと今朝知れりと也。

こむとしもゆたけかるべし新嘗のまつりのにはにつもる白雪

埋火

埋火のあたりのどけきまとゐにはしたしからざる人なかりけり

冬竹

霜ふかきみはしのもとのくれ竹はかへぬ操を君にみゆらむ

池水浪靜

池の面になみなき見ればいでましの大御船路もしづけかるらむ

遠村笛

新しぼりくみかはすらむ霧ふかき田づらの里に笛のねぞする

山家雨

山ざとのゆふべさびしきむらさめに垣根のむかごこぼれそめたる

庭前松

枝たれて杖つく庭の老松の二葉はいつのむかしなりけむ

猫

〔來む年も云々〕ゆたけかるべしとは豐年ならむと也。新嘗祭は其年の新穀を神に奉らせ給ひ、天皇御自らも食し召す神事也。陰曆十一月、中の卯の日、(陽曆十一月廿三日)に行はる。

〔埋火〕爐などの灰に埋めたる炭火を云ふ。

〔かへぬ操〕霜にも綠の色を變へざるを云ふ。

〔浪無き見れば〕風の凪ぎ渡れる日和を現はせる也。

〔新しぼり〕新しく釀造せし酒。

〔枝垂れて云々〕二葉は何時のとは、種より發芽せしは何時の昔の事ならむかとの意なり。

里の子が小笠おむなる麥がらのなかにまじりて遊ぶ猫かな

衣通姫

大君のみやゐは遠くはなれてもかけぬゑそなきさゝがにのいと

白居易

四の緒のことにかなしくきこえしも身のうきふしにあへばなりけむ

夢

おもふこと思はぬ事もみするこそはかなき夢の心なりけれ

横須賀にて

君が爲身はたなしらず帆柱の上をもつたふますらをのとも

水雷火を

事しあらばみくにのために仇波のよせくる船もかくやくだかも

浪速艦に乗らむとする時雨いたくふりければたはぶれに

船の名のなにはおもはず雨風にあしもとをいみうちまもりつゝ

〔麥がら〕麥幹の義即ち麥の莖也。俗に麥藁と云ふに同じ。

〔衣通姫〕允恭天皇の妃也。名は弟姫、忍坂大中姫皇后の妹なり。

〔大君の云々〕衣通姫の歌に「我が背子が來べき宵也さゝ蟹の蜘蛛の行ひかねてしるしも」とあるに據りて詠ませ給へる也。

〔白居易〕居易、字は樂天、唐の詩聖なり。

〔四の緒の云々〕樂天の琵琶行の詩につきて詠ませ給ひし也。

〔たなしらず〕顧慮せざる意、萬葉の古語なり。

〔あしもと〕難波は葦の名所なるよりの縁語なり。

「山里の云々」山里の閑靜なる花かげに囀り馴れし鶯は物騒がしき都會に交りて美聲を世人に聞かせむとは思はざるならむとの意にて、遺賢在野の義を含め給へるなり。

「君がため云々」―君が爲め春の野に出でて若菜摘む我が衣手に雪は降りつつ」とあるに據り給へる也。

「松の葉も」散り敷ける松の落葉を云ふ。

「なれにけり云々」挨拶もせずして、中垣の枝折戸を開きて、隣家の花を見に行く迄に、隣の家人と懇意になりぬと也。

明治二十年

山家鶯

山里の花にさへづる鶯は世にいでむとも思はざるらむ

春草

君がためつまむと野にはいでたれどいまだ短し暮のわか草

閑庭春草

時しりてもゆるかあはれ松の葉もはらはぬ庭の春のわか草

湊春月

みなと江はかすみわたりて大船の數だにわかぬ春の夜の月

鄰家花

なれにけりおとなひもせず中垣のしをり戸あけて花をみるまで

庭落花

ちりそめし花ひともとに山かげの庭の苔路はうづもれにけり

時鳥遍

山遠き都の空をほとゝぎす今日も幾度なき渡るらむ

梅雨久

ながゝらむものとしりつゝ梅雨の今日もふるよといはぬ日ぞなき

撫子

まくらべのかめにさしたる撫子や夢のこてふのやどりなるらむ

故郷撫子

ふるさとの友のかきねにさきにけり昔みざりしなでしこの花

百合

夏草のしげみがなかにまじれどもなほしなたかし姫百合のはな

蟬

たえまなく梢にせみのこゑすなりかはるぐゝや來つゝなくらむ

山路蟬

日ざかりは木こりも夢やむすぶらむ山路は蟬の聲のみぞする

〔時鳥遍〕遍は稀の反對にて、何處の里にも遍く鳴き渡るを云ふ。
〔山遠き云々、今日も幾度とは、昨日も屢々鳴きしが、今日も云々の意を含める也。
〔ながゝらむものゝ〕梅雨は長く降り續くもの也と知りつゝの意なり。
〔まくらべの云々〕夢の胡蝶とは、莊子が夢に胡蝶に身を變へし故事を詠ませ給へる也。
〔ふるさとの云々〕昔見ざりし撫子とは、友に子供の無かりし趣なり。
〔しなたかし〕上品の意なり。

露底槿

あすさかむ花のつぼみは葉がくれて露のみ見ゆる庭の朝顔

山居秋夕

言の葉の道しる人にわが山の秋のゆふべをとはせてしがな

月夜菊

霧はれて月影きよくなりにけりいざおりたゝむ菊のはな園

旅泊時雨

うら波に月は照りながら泊舟とまおほふまでふる時雨かな

落葉埋路

里の子が拾ひのこしゝ落椎も紅葉のうづむ山のしたみち

寒草

しづが洗ふ大根の葉のみ綠にて川邊の草は霜がれにけり

簾外寒月

大宮の玉のすだれのうちにしてみれども寒し冬のよの月

〔言の葉の云々〕我が住む山里の秋の夕暮は、頗る詩趣に富めるを以て、歌道に達せる人に訪はせ度き物よとの意なり。

〔いざおりたゝむ〕いざ殿上より菊の花園へ降り立たむと也。

〔とまおほふまで〕泊り船苫掩ふと打重ねて調を續なし給へるにて、時雨の烈しく降り出でし狀、此の一句に籠れり。

〔紅葉のうづむ〕もみぢの落葉に埋もれたるを云ふ。

〔玉のすだれ〕玉は麗しき意を現はす美稱、玉かづら、玉の小櫛など云ふに同じ。玉の飾ある簾と云ふ意にはあらず。

香水

おほきみのみけしにそゝぐ水の香にわが袂までかをりぬるかな

老人夢

ものごとのかはりゆく世もおいびとはひとり昔の夢や見るらむ

社頭述懐

眞心をぬさとたむけて神垣にいのるは國の榮なりけり

あるひとのくらべうまにかちしよろこびに

たぐひなくうれしきものはくらべ馬わがひくかたのかちしなりけり

明治二十一年

梅香夜芳

月ふけて今はとおろすをすのうちになほ梅が香のかをるよはかな

ことゝち例ならずましましけるころ梅花盛といふことを

うめの花さかりもすぎぬ君が爲風をいとひてたれこめしまに

〔おほ君のみけし〕天皇の御衣なり。

〔眞心を云々〕ぬさは神に奉る物、また祓に出す物を云ふ。麻、木綿、帛などを以て作る、卽ち幣束也。祈るは國の榮なりけりとは、國の榮を祈るとの意也。

〔わがひくかた〕ひく方とは贔負する方の意なり。馬は曳くものなるを以て、其の緣語もて斯くは言ひ列ね給へる也。

〔月ふけて云々〕今はとおろすとは、夜も深更に及びたれば、今は寢なむとて小簾を引きおろせる也。

〔たれこめしまに〕戸を鎖して室内に籠りてのみ日を送りし間にの意也。

月前花

ともしびをそむけてぞ見るさく花の梢の月はさやかならねど

故鄕花

まがねしく道ひらけなばゆきてみむわがふるさとの花のさかりを

折花

舍人らに折らせてを見む手の及ぶ枝には花のすくなかりけり

落花

この春もうたげすぎぬと庭櫻こゝろやすくや散りはじむらむ

曉落花

あり明の月しづかなる庭のおもにひとりみだれてちる櫻かな

蛙

せきいれし苗代水のたることもしらで蛙の雨を乞ふらむ

春天象

かきねよりあがる雲雀も見えぬまで日影のどかに霞む空かな

〔ともし火を云々〕花の梢にさし出でし月影は、朧ろに霞みて明かならねば、室内に影の差し入る筈も無けれど、燈火を奥の方へ退け遣りて眺めて見つと也。

〔まがねしく道〕鐵道を云ふ。

〔舍人〕殿人の約言と云ふ、禁中にての近侍雜使の官なり。

〔此の春も云々〕うたげは宴也。此の御歌にては觀櫻の御宴を云ふ。心安くとは、花の勤務を果たして安堵せる趣き也。

〔あり明の月〕月は空に殘り乍ら夜の明くるを云ふ。十六夜以後の月也。

〔草取りし云々〕初句は田草を取り除きし也。鎌を用ゐざる故に、取ると云ひて刈ると云はざる也。
〔とざしたる窓〕夕立の遙かに降り出でしより、未だ暮れ果てねども閉せる趣を含め給へるなり。
〔うすもの〕紗、羅など薄き織物の總稱なり。
〔とばり〕戸張の義にて、戸の代用に張り垂るゝ意に出づ、帷幔也。
〔扇ならさぬ〕扇を鳴らすとは扇をつかひて、はたはたと音を立つる也。
〔あつゝ聞えし〕蒸し暑く聞えし也。
〔こがひ〕蠶飼ひの義、養蠶なり、

田家夏月

草とりし晝のあつさもわするらむ門田の月にすゞむさと人

夕立晴

夕立ははれにけらしもとざしたる窓のひまより日かげさすなり

行路夕立

人ごゑも聞えぬほどの夕立に大路も川となりにけるかな

扇

うすものゝとばりのうちもあつければ扇ならさぬ夜はなかりけり

樹陰納涼

蟬のこゑあつゝきこえし松かげもすゞみ處となるゆふべかな

夏田家

こがひする家としられてふくるまで火かげぞみゆる小山田の里

夏花

さみだれのはれし梢をふく風にけさもこぼるゝ山梔のはな

垣朝顔

袖垣にさく朝顔の花をみて髮くしけづるときのおくれぬ

萩如錦

大宮のおりどの近くさきいでゝ錦にまがふあきはぎのはな

秋風入簾

玉すだれおろしこめたる大宮のうちまで寒き秋風ぞ吹く

稻花

咲きにほふちぐさをおきてしづのをは門田の稻の花やめづらむ

對月

雲もなくはれたる月にむかひては面伏すべきこゝちこそすれ

浦月

秋の夜のなが浦とほくてる月に今日おろしつる船も見えつゝ

谷菊

仙人もいほよりいでゝ谷川のいはねの菊の花や見るらむ

「袖垣に云々」袖垣は、物に添へて袖の如く取り付けたる垣を云ふ。朝顔の花に眺め入りて思はず時を過ぐし給へる趣き也。

「大宮の云々」おりどは織殿に同じ。御衣を織らしめ給ふ殿舍を云ふ。錦にまがふとは機の樣にて形容し給へる也。

「咲きにほふ云々」千草を置きてとは、千草の花を賞翫すべきを、それを差置きて農夫は稻の花を愛づるならむと也。

「面伏す」月の耀しきに對して尊敬の念の生ずるを云ふ。

「今日おろしつる」新造せし船の浮べるを云ふ。

木枯

里の子が椋の實ひろふ山かげの夕暮寒しこがらしのかぜ

風前千鳥

浦風にふき送られて友千鳥わがのる船の上になくなり

屋上霰

さよふけてふりし霰か今朝も猶わらやの軒にきえのこりたる

都初雪

足引の山べはしらず都にはまだめづらしきけさのゆきかな

埋火

大みけしぬがしゝよはのふるごとをかつしりながらむかふうづみ火

年欲暮

うつばりの塵も拂ひて玉すだれかけあらたむる年のくれかな

冬櫛

霜ふりて寒き朝かなあさねがみけづる小櫛もとりおとすまで

〔里の子が云々〕椋は欅に似て微白なる木也、實は圓く、して黒く、龍眼肉の皮を去れるが如し、食用とす。
〔浦風に云々〕烈しき浦風に遠くと吹き追はれて、人の乘れる船とも知らで千鳥の群れてこゝにとまりし趣なり。
〔足引の云々〕足引は山の枕詞なり。山邊にては最早幾度か降りて、珍らしくも無きか知らねど、都にては今朝降れるが初雪なりと也。
〔大みけし〕天皇の御衣を云ふ。
〔うつばりの云々〕棟梁は柱の上に、棟と打違ひに亘したる材也、塵も拂ひてとは煤掃きをしたる也。

〔雨晴れて云々〕晴後山水と云ふ題につきて、天地を對照して珍らかに詠ませ給へり。日本紀に、其清陽者薄靡而爲レ天、重濁者淹滯而爲レ地、云々とあるに據らせ給へるなるべし。
〔松の葉の云々〕此の松の葉は、高嶺の松の葉の山颪に散り來るを云ふ。
〔心して云々〕さゝの露とは酒の異名なり、亂るゝとは亂醉するを云ふ。露の縁にて亂ると綾なし、笹の縁にて節と詠ませ玉へる也。
〔もつ人の云々〕あたとは仇敵の意なり。金錢に因りて身を亡ぼす意を詠ませ玉へる也。

晴後山水

雨はれて空はみどりになりぬれどいまだ濁れり山川のみづ

山家

たかねよりおろす嵐に松の葉のちらぬ日もなき山かげの庭

山家鄰

たちならぶ軒しなければ谷ひとつへだゝるやども鄰なりけり

酒

心してくみかはさずばさゝの露みだるゝふしとなりぬべきかな

油畫

しる人の面影うつすあぶらゑにむかへばわれもうちゑまれつゝ

琴

少女子がおなじことのみくりかへす絲のしらべぞをかしかりける

金

もつひとのこゝろによりてたからともあたともなるはこがねなりけり

玉

みがゝれて光いでたる玉みれば人のこゝろにひとしかりけり

寫眞

たらちねのおやのみかげものこらましこのうつしゑのある世なりせば

車

司人いまかみかどにまうづらむ車のおとのたえずきこゆる

述懷

外國のまじらひ廣くなるまゝにおくれじとおもふことぞそひゆく

寄雲述懷

をさな子の學ぶを見てもいたづらにおひたちし身ぞ悔しかりける

老人

大空もはかりしる世を浮雲のまよひがちなるわがこゝろかな

背面美人

開けゆく御代にあひてもおいびとは昔のことを猶したふらむ

〔みがかれて云々〕金剛石の唱歌の御詠に「金剛石も磨かずば、玉の光は添はざらむ。人も學びて後にこそ、誠の德は現るれ。」と詠ませ給へる心を、短歌の中に云ひ含め給へる也。
「たらちねの云々」古へより此の寫眞の術ありせば、親の御親影も定かに殘らむ物をと也。
〔司人云々〕つかさびととは官吏を云ふ。詣づらむは、出勤し來るならむとの意也。
〔おくれじと思ふ〕人後に落ちまじと思ふ意なり。
〔大空も云々〕計り知る世とは天文の學びの進歩せしを云ふ。

ゆく人をかへりみもせず花陰にたてる少女は誰が子なるらむ

楠正行

櫻井のさとし忘れず昔が爲さかりもまたで花いちりけむ

呂后

たちのぼる雲をしるべにもとめけりいまだひそめる龍のありかを

心

ものごとにこゝろうつりてわれながらいつがつねともおもほえぬかな

むらぎものこゝろにとひてはぢざらばよい人言はいかにありとも

思往事

たらちねの庭の教をよそにして遊びしも昔なりけり

寄石祝

水清きみいけの底のさゞれ石さやかにみゆる千代のかずかな

をりにふれて

からころもたちゐになれずともすればかざりの玉のこぼれけるかな

[櫻井の云々]櫻井の里にての父正成の教訓を、櫻井のさとしと打掛けて連れ給ひし也、結句なる花の散りけむは、正行の戰死を初句の緣語にこ詠みなし給へるなり。

[むらぎもの云々]肝は七葉肝ありてと云ふより、群肝のと云ひ、心に冠する枕詞となる、結句なる如何にありともの下に、顧慮すべきにあらじ、と云ふ程の意を含めて見るべし。

[庭の教へ]家庭の教訓を云ふ。學び勵めとの御訓に背きて遊び歩きしも昔になりぬと也。

[から衣]裁つと云はむ爲の序也、

観兵式の日に

青山の廣野せばしとつはものゝならぶを今やみそなはすらむ

明治二十二年

閑庭鶯

うぐひすの聲ばかりしてかくれがは花の盛もしづけかりけり

田家若草

わかくさのもゆる田中のなはて道都處女が袖も見えつゝ

歸雁

春風もいまだ寒きを北山の峯うちこえて雁のゆくらむ

夕花

夕日さすわが庭ざくら朝戸あけてみしは昨日のこゝちこそすれ

若鮎

おほみけにまづそなへむとこの春もわかゆくむらむ玉川のさと

〔青山の廣野〕今の明治神宮外苑の地なり。明治の御代は此の青山の原にて観兵式を擧げ給ひし也。
〔うぐひすの云々〕三の句は、「隱れ家は、」なり。
〔わか草の云々〕もゆるとは芽を吹くを云ふ。なはて道とは細く長き道を繩によそへし稱にて、田中の大通りを云ふ。
〔夕日さす云々〕夕日の傾く頃庭の櫻を眺めつゝ、今朝戸を開けて此花に見とれしが、それは今朝の事にはあらで、昨日の朝のやうに考へられたりと也。
〔おほみけ〕天皇の御食膳を云ふ。

杜若

かきつばた橋の上より折るばかり花さき滿てる池のおもかな

春天象

うら〳〵とかすみわたりて天つ日のかげもまばゆく見えぬ空かな

時鳥

おもはずも琴ひきさして時鳥聲するかたの月を見しかな

初時鳥

時鳥はつこゑきゝし嬉しさに思はず人もよびてけるかな

夏草滋

夏ふかみ茂り〳〵てしづ枝にもたちおよびけり松の下草

納涼

夕月夜やなぎのかげに床おきて門すゞみする人もありけり

七夕

天の川ほしのあふせをそらごとゝ子らもいふまで世は開けゝり

「折るばかり」折り取る事を得べき程に、との意にて、杜若の丈高く生ひ立てる狀なり。
「うら〳〵と」うらら、を重ねて約めたる語にて、長閑に、又は麗らかになど云ふに同じ。
「おもはずも」此の初句は、二句なる琴ひきさしての次に移して心得べし。
「時鳥云々」思はず人もとは、何の考へも無く、只嬉しさの餘りに人を呼び立てたり、と幼なく詠み給へるにていとめでたし。
「床おきて」涼み臺を置きて也。
「星の逢ふ瀨」七夕の夜は織女と牽牛との二星の天の河にて相會すと云ふ故事あり。

〔朝ごとに云々〕うつろふは、移るの延語にて物の變遷する意に云ふ。此御歌にては青葉の黄色に變じて枯れ行くを云ふ。
〔咲くも同じき〕我が庭に咲けるも野邊に咲けるも異なる所なけれど、との意也。
〔ほに現はれて〕穗先きに現はれての意、隱れなく見ゆるを云ふ。
〔梓弓云々〕梓弓は矢と云はむ爲めの枕詞也。やしまは大八洲、即ち皇國の古稱なり。
〔おまへのみす〕陛下の御前に下げたる御簾なり。

朝顔

朝ごとに花さきながら朝がほの下葉は早くうつろひにけり

折萩

わが庭にさくも同じき色ながらをりてぞかへる野べの秋萩

盆栽の薄にそへて小池道子よりいでましのまれなる秋にあひてこそなどきこえければ

わがために移しうゑたる眞心のほにあらはれて見ゆる秋かな

海上月

梓弓やしまの外もみゆばかり波路さやかにてらす月かな

雁初來

めづらしとおまへのみすをあぐるまに遠ざかりけり初雁の聲

風前雁

山ばたのそばの花ふく秋風にみだれておつる雁も見えつゝ

菊契千秋

今年より千年をかけて世に廣くかをるもうれし白菊の花

秋述懷

秋の野のちぐさの花の色々にうつるぞ人のこゝろなりける

椎柴霜

椎柴の枝ふきしをる朝北にちる霜寒し山のした道

水鳥多

あさごとに數こそまされふせ網のうきめをしらぬ池の水鳥

雪埋松

あたらしく宮づくりせし九重のみかきの松につもる雪かな

水石契久

萬代のかめ石にこそかゝりけれながれたえせぬ宇治のかは波

谷水

杉むらのみどりも深き谷かげにながるゝ水の音のさびしさ

夕川

〔秋の野の云々〕秋の野の千草の花は一つの花が散れば又他の花が咲き出づる事たえず、人の心も亦その如く夫から夫へと移り行くが世の習ひぞと也。

〔椎柴の云々〕椎柴とは椎の木の繁茂せるを云ふ。朝北は朝吹く北風なり

〔朝ごとに云々〕數こそまされとは水鳥の數の多く成るを云ふ。ふせ網とは水鳥の上に伏せて捕獲する網也。憂きめの目は網の緣語なり。

〔水石契久〕歌御會始の御詠也。

〔かめ石〕宇治川の瀬に在る岩の名なり。

里川の柳をわたる夕風につりのいとさへうちなびきつゝ

島

わたつみの沖繩島のはてまでも惠の波をかづく御代かな

水郷鳥

たかせ船ひきゆく岸にうちむれて浮ぶをみれば家鴨なりけり

山家客來

とひ來たる人と共にも拾ふかなわがやまざとのにはのおち栗

田家鳥

花すぎし鈴菜のたねやこぼるらむ垣根の畑に鳥のむれたる

病院

やむ人を來て見るたびに思ふかなみないえはてゝ家にかへれと

小松

おなじころおひいでぬらむ岡のへにたてる小松のたけのひとしき

象

「わたつみの云々」海の沖、と云ふより沖繩と續けて宣へり。かづくは潛きする海士など云ひて、水をくゞる意の詞なるを、蒙る意に掛け給へるなり。

「たかせ船」流れの淺き川に浮ぶる船にて、底を平らに作れる船の稱也。

「とひ來たる云々」訪問せし客と共に興ずる山家の心靜けさを詠み給へるなり。

「花すぎし云々」初句は花盛の頃の過ぎ去りし意なり。鈴菜は「たら菜」に同じ。

「みないえはてゝ」入院患者の皆全快しての意也。

〔昔にのみ云々〕初句は世の物語にのみ聞きをりし、との意なり。佛の乘物とは、普賢菩薩の白象に乘るを云ふ。

〔大昔の云々〕嘶く聲も高くぞありけるとは、駿馬は嘶く聲高しと云ひ傳ふるを以て也。

〔ともすれば〕やゝもすればの意也。

〔もゆる火の云々〕ほなかは火中也。神の劒とは草薙之劒を云ふ。即ち日本武尊の燒津の原にこの故事を詠ませ給へる也。

〔影ぞやさしき〕やさしきは、耻かしきと云ふに同じ。

〔かゞみや川云々〕紙上に記載して是非を論ずると云ふ。

昔にのみきゝし佛の乘物のけものも庭にひく世なりけり

駒

大昔のみくらおくべき若駒は嘶く聲もたかくぞありける

書

ともすれば假字たがへして思ふかな文かく道の迷ひやすきを

劒

もゆる火のほなかにたちて草なぎし神の劒ぞたふとかりける

玉

すゑおきてめづる玉にもともすれば思はぬ瑕のつく世なりけり

寫眞

新衣いまだ着なれぬわがすがた寫しとゞむる影ぞやさしき

新聞紙

すゑにごる人の心をかゞみや川うつしわけたるあとのさやけさ

車

牛のひく絲毛の車うつしゑの上にのみ見る世となりにけり

寄道述懐

人なみにふむとはすれど敷島の道の廣さにまどひぬるかな

翁

をり〳〵は畑うつくはを杖にしていこふ翁のあはれなるかな

親

なほざりにきゝてすぎにしたらちねの親のいさめぞ今はこひしき

紀貫之

昔今えらびし歌のはしがきにみゆるは人のちからなりけり

源爲朝

いくさ船いつらぬきけむものゝふのゆづるのひゞき高くもあるかな

名和長年

ふなのへの山まつかぜに雲はれてのぼる朝日のかげのさやけき

孔子

「牛の曳く云々」絲毛の車とは、古へに、院、中宮、内親王、攝關などの用ゐたる牛車の稱也。車蓋に搓りたる絲を簑の如く垂れたるを以て名とす。

「敷島の道」和歌の道なり。斯の道を極むる事は、なみなみの業ならねば道の廣さにとは宣へる也。

「なほざりに云々」初句は等閑の意、いさめとは訓誡を云ふ。

「昔今」古今集を云ふ。

「いつらぬきけむ」射貫きけむ也。

「ふなのへの云々」初句は船上山を云ふ。昇る朝日とは後醍醐天皇を申す

〔いのりし山〕勉勵して出世せよと親の祈りし心と云ふ程の意なり。
〔むかはむ方〕方針の意、即ち志を云ふ。
〔をさめます道〕天皇の治しめし給ふ道、即ち政道を云ふ也。
〔日の本の云々〕いつくしみは仁慈を云ふ。とつ國は海外の諸國也、日本赤十字社に給ひる御詠也。
〔うばらからたち〕茨、枳殼の類は、とげとげしきものなれば、是を不義の心に喩へ給へしなり。
〔つくろひて云々〕一二の句は、僞り飾らぬ意なり。
〔五つの國〕亞細亞、亞弗利加、歐羅巴、及び南北亞米利加の五大洲を云ふ。

世にたかきいさを思へばたらちねのいのりし山も麓なりけり

心

月に日にひらけゆく世の人ごゝろむかはむ方をまづ定めてよ

寄日祝

をさめます道明らかにてらすらむくもらぬみよの天つ日のかげ

仁

日の本のうちにあまりていつくしみとつ國までもおよぶみよかな

義

茂りたるうばらからたち拂ひてもふむべき道はゆくべかりけり

智

ものまなぶ道のひらけて天地もはかりしるよとなりにけるかな

信

つくろひて花をさかせぬことのはに人のまことは見ゆるなりけり

へだてなく五つの國にまじはるも心のまことひとつなりけり

〔はづる心云々〕人に後るゝは勇者の耻づる所也との心を心とするならむとの意也。
〔ひえどり〕稗を好むが故に名づくと云ふ、「ひよ鳥」に同じ。
〔いつきまつる〕常付き奉るの義、穢れ無きやうにして謹しみ祀る意也。
〔皇神のみ稜威〕皇神とは天照大神を申す。御稜威は御威光なり。
〔明宮〕大正天皇のいまだ皇子にましまし給ひける程の御名なり。
〔こまつが上〕小松を御子の義に通はして詠ませ給へるなり。

勇

人よりもすゝみて道をふむひとははづる心やしをりなるらむ

赤

ひえどりのあさる木の實もてりそひて窓のとあかく夕日さすなり

をりにふれて

新宮にいつきまつりて皇神のみいつもさらにあらたまるらむ

めづらしき花を見るにもたらちねのよにしあらばと思はるゝかな

明宮清見潟にましまし〳〵けるころ

雨につけ嵐につけてみほの浦のこまつが上を思ひこそやれ

昭憲皇太后御集　卷中

明治二十二年

名古屋にて大演習行はせたまはむとするころ海上霞といふことを

大みふねうかべむ春と風なぎてうちかすむらむ鳥羽の海原

春月

玉すだれなかばかゝげてみそなはす朧月夜ののどけさ

社頭落花

春深きもりの神垣かせたちてぬかづく袖にちる櫻かな

春車

〔大みふね〕天皇の召し給ふ御船を云ふ。
〔うかべむ春〕此の春は天皇の御船を此の海上に浮べ奉るべき春なればとかねて心がまへしてとの意也。
〔なかばかゝげて〕かゝげては掻き上げての義、簾を半分巻き上げての意なり。
〔ぬかづく袖〕禮拜する我が袖の上にはら〳〵と花の散るよと也。

〔くるまひく云々〕花を尋ぬるに中々に花の見當らずして、此處彼處と求め行く道の遠く成りまされる儘に、花を見出ださむとする辛苦よりも、我を乘せつゝ車を引き行く賤の辛苦を察せりと也。

〔みはし〕御階は御庭より殿上に昇るきだ階なり。

〔內豎〕禁中に伺候して雜役を辨ずる小童、給事。

〔おちくる蟬の聲〕高き梢より聞え來るを云ふ。山風に落ち來る鹿の聲す也など古歌に詠めり。

〔かげもなき〕木蔭無くして日光の直射する意なり。

くるまひく人のつかれを思ふかな花をたづぬる道のとほさに

郭公一聲

わが君はきこしめさずや時鳥みはしに近き今のひとこゑ

御苑にて人々梅の實を拾ひきほふを見てたはぶれに

新衣袖せばければ青梅の實のひとつだにつゝみかねつゝ

吹上のみそのにて內豎のほたるがりするを見て

君がためしぶきにぬれて宮人もたきつ岩根の螢おふなり

雨後蟬

夕立の露ふきはらふ松風におちくるせみのこゑのすゞしさ

夏車

かげもなき夏野の道を日ざかりに車ひきゆく人もありけり

初秋月

蚊遣火のけぶりにきえぬ軒端にも秋のひかりを見する月かな

女郎花

〔手すさび〕手にてする慰み、俗に手遊びと云ふに同じ〔ゆきゝの岡〕大和國吉野郡に在り、風雅集に「旅人の行來の岡は名のみして花に止まる春の木の下」など詠めり。〔袿〕内着の義と云ふ、衣の上、裝束の下に着る廣袖の服なり。〔ちよのかざし〕千歳をも〜給ふべく祝ひ奉る挿頭の意なり。〔こがらしの云々〕庭の面に、かねてより散り敷ける紅葉を、風の片寄せて吹く音すと也。〔まだ一度も云々〕雪は豐年の兆也と云ふに據りて詠ませ給へる也。

手すさびに折られざらなむ女郎花人のゆきゝの岡にさくとも

翫菊

玉だれのをがめのきくの花の香に袿の袖もうちがをりつゝ

菊花第一

みそのふの菊をおきては大宮のちよのかざしと見む花ぞなき

初冬風

わが庭の紅葉見にだにいでかねつまだ身になれぬ風の寒さに

落葉有聲

こがらしの風にかたよる音すなりかねてちりたる庭のもみぢ葉

待雪

こむとしの秋のみのりやいかならむまだひとたびも雪のつもらぬ

朝

ねぬる夜の夢のうきはしあしたまで心にかゝるをりもありけり

富士山

みそのふの松より上にいたゞきの雪こそ見ゆれふじの遠山

新室

新室にすみなれぬまは文机のおきどころだに定めかねつゝ

草庵燈

ともしびのかげかすかなる草の庵は光をつゝむ人やすむらむ

幼稚園

をり鶴の千代をまづしる姫小松ふみの林の山口やこれ

煙草

けぶり草くゆらしながらかたるまに消えゆく時もおぼえざりけり

弓矢

手すさびの弓矢とるにも思ふかな心のまとのさだめがたさを

漁舟

いさりぶねなみのよるさへやすらはで世わたる道はくるしかるらむ

述懷

「みそのふの云々」御園生の松林の上に、富士の遠山の頂上の雪の見渡さると也。

「新室」にひむろとは新築せし家を云ふ。

「光をつゝむ人」虚名を貪る事を欲せずして、隱に籠れる聖賢を云ふ。

「山口」山路に登り初むる入口を云ふ此の御歌にては、學びの道に踏入る第一歩の意也。

「消え行く時」消費する時間の意也。烟と云へるに因りての縁語也。

「心の的」心を定むる目的を云ふ。

「浪のよるさへ」浪の寄ると云ふに、夜の意を綾なし給へる也。

おくれたるわが心より大かたのまなびの道もすゝみかねつゝ

翁

うまくるましげき大路を老人の杖にすがりてゆくがあやふさ

紫式部

露ふかきみかきの内にさきながら操たわまぬ女郎花かな

靜

舞の袖かへすもあはれこゝろなき鶴が岡べのまつのあらしに

北條時宗

あだ波はふたゝびよせずなりにけりかまくら山の松の嵐に

筆寫人心

一くだりかきたる筆のあとにさへみゆるは人のこゝろなりけり

社頭祈世

わが君の御代長かれとみしめ繩かけてぞいのる神のひろ前

寄國祝

「おくれたる云々」世人の、互ひに已が心に人よりも上に押出でむと思ふ意志なくしては、總ての學問の道も進む事あらじとの意なり。

「露深き云々」當時言ひ寄る人の多き禁中に宮仕へしながら珍らしくも節操を保ちし女なるかなと也。

「舞の袖云々」靜が鎌倉なる鶴が岡にて今様を詠じ舞ひ奏でし故事を詠み給へる也。松の嵐にとは、剛々しき賴朝の前にして、と云ふ程の意也。

「我が君の云々」御注連繩は長き物なれば長かれと云ひ掛けてぞと緣語にて綴なし給へるなり。

〔寄國祝〕歌御會始の御詠也。
〔神代より云々〕根ざしとは、根底の義にて、萬世不易の國體を云ふ。葦原の國の葦の縁語なり。
〔みさゝぎ〕後醍醐天皇の御陵也。大和國吉野郡吉野山の奥、塔尾なる如意輪寺の後に在り。
〔三輪〕大和國磯城郡三輪町なる官幣大社大神(みわ)神社なり。
〔畝傍山東北御陵〕神武天皇の御陵なり。大和國高市郡畝傍山の東北方に在り。
〔東宮〕大正天皇いまだ皇太子にてましましける御時を申す。

神代よりねざしかはらぬ葦原のくにのさかえぞかぎりしられぬ

よし野にて

よし野山しげるわか葉のかげに來て花の盛をおもひやるかな

のり物のうちに櫻のちりくるに

吉野山みさゝぎ近くなりぬらむちりくる花もうちしめりたる

三輪のやしろにて

かげたかき杉のみどりのとこしへに世をまもるらむ三輪の大神

畝傍山東北御陵にまうで、

廣前に玉串とりてうねび山たかきみいつをあふぐ今日かな

御船路をおもひやり奉りて

夢さめてみふねの上を思ふかな舞子の濱の波のさわぎに

日和まつみふねのうちやいかならむ霧たちわたる荒波の上に

東宮の熱海にまし〳〵しころ温泉といふことを

ゆあみするあたみの里をあたゝけみ小松も千代の色やそふらむ

あるゆふべ仰ごとによりて二重やぐらにのぼりしに博覽會に出品せる花火をうちこゝろみるが見えければ

高どのにのぼらざりせばめづらしきこの花火をも見ずやみなむ

明治二十四年

春月

ほそどのにたちいでゝみるわが影もうつらぬばかり霞む月かな

駒迎

君が爲こまむかへむと司人こととしもゆくか千葉のみまきに

禁中月

大宮の軒ふかけれどおましまでさしわたりたる月のかげかな

大前の玉のすだれもおろさせむ月の夜風の寒くなりぬる

月の明かなりける夜

むらぎもの心にかゝる雲もなきこよひぞ月はみるべかりける

「高どの」に云ふ、高殿とは二重櫓を云ふ、櫓は城郭に築きたる高樓にて、古へ遠きを望み又は矢石を發して敵を防ぐ爲に立てたるなり。見ずや止みなむは、見もせで知らずに有りしならむと也。

「ほそどの」宮殿の周りに、人の通路に設けたる細長き屋の稱なり、俗にて廊下にも云ふ、

「わが影」影は俗に云ふ影法師なり、

「駒迎」御料の駒を迎へに行く意にて古への所謂駒迎とは異なり、みまきは御牧場を云ふ、

「おまし」天皇のおはし給ふ玉座也。

「むらぎもの」心に冠する枕詞なり。

いざよひの月のぼらむとするほどおほせごとによりてみそ
のにものして

東屋の軒たかければいざよひの月もまだきにさしわたりけり

夕霧

のきにほす新綿はやくとりいれよ夕ぎりたちぬ山もとのさと

竹上霜

かたつぶりこもれる家も寒からむ朝霜しろしまどの竹むら

氷留水聲

樋をあけて落葉ながしゝ池水もこほるか今朝は音のきこえぬ

冬月

わたどのゝ瓦の上に霜見えて照る月寒き冬のよはかな

行路雪

大路ゆく人のためにと朝まだき雪かくしづの寒げなるかな

歳暮近

〔いざよひの月〕十六夜の月を云ふ。十五夜よりも少し後れ、猶豫(イザヨイ)ひて出づる月の義なり。

〔まだきに〕未だ其の時刻の來らざるにとの意なり。

〔夕ぎりだちぬ〕夕霧の湧き起る空模様になれりとの意なり。

〔かたつぶり〕堅螺の義にて蝸牛を云ふ。

〔樋をあけて〕竹木等の方圓の長き管の稱、水を導き遣るに用ゐるもの也されば落葉は悉く流し捨てたるに係らず今朝水音の聞えざるは、定めて氷鎖せるならむと也。

〔わたどの〕廻廊也又細殿をも云ふ。

ことなくてくれゆくとしのほぎごとに來る人おほし大みやのうち

惜歳暮

はね手鞠もてあそぶ子はくれてゆくとしを惜しとも思はざるらむ

冬蠅

ちかづけど飛ばむともせで冬の日のかげさす窓に蠅のはふみゆ

山家客來

都人たきのほとりにいざなはむわが山ざとは見るものもなし

社頭祈世

神風の伊勢の内外の宮柱ゆるぎなき世をなほ祈るかな

寄國祝

君臣の道明らけき日本の國はうごかじよろづ世までに

岐阜愛知のわたりに震災ありし頃あまたの民の木のかげなどにおきふしするよしきゝて

民草の上をおもへばもみぢ葉をそめむ時雨もまたれざりけり

〔ことなくて云々〕初句は世の中の靜かに治まりて、無事なりなどと云ふ[illegible]なり。

〔社頭祈世〕[illegible]歌御會始の御題也。

〔神風の〕日本書紀神代紀に、乃ち吹撥ふ氣（キイ）に化りませる神云々、是れ風の神也とありて、風は天津神の御息なれば、神風との云ひて息（イ）に云ひ掛け、やがて伊勢の枕詞とは爲せる也。

〔内外の宮〕内宮及び外宮を云ふ。

〔民草の云々〕人民の苦しみ居る事どもを思へば、秋の紅葉を待つ心などは起らずなりぬとの意也。

「御園生の云々」今日は春立つ日なるに、御園生の松の葉の上に雪の白く降り積りて、更に春とも覺えず、只從來の冬の心地ぞするとの也。
「みそなはす云々」御園の梅の盛を御覽じ給ふ御暇さへおはしまさず、政務に忙殺せられ給ふ大君の御上を歎かせ給へる也。
「昨日まで云々」山陰の庭の岩根とは殿上の御庭の景色を云ふ。
「うつほとなれる」老松の幹の朽ちて空洞となれるを云ふ。
「蔀」しとみは檐の日除、日避けに用ゐる戸なり。

明治二十五年

立春の日雪のふりければ

御園生のまつの葉白く雪ふりて春たつ日ともみえぬ今日かな

賞梅

みそなはすひまだになくて御園生の梅はをしくも散りはてにけり

ふきの花

昨日まで雪ものこりし山かげのたきつ岩根に蕗の花さく

故郷菫

老松のうつほとなれるうちにさへすみれ花さくふるさとの庭

待花

初花のたよりはいまだ見えぬかなふるさと人の文のうちにも

春朝見花

けさもまた蔀あくるをまちかねて軒端の櫻窓よりぞみる

折花

君がたまはらせて折りし一枝におもひしよりは花のすくなき

折にふれて

御園よりをりてかへりしさくら花おまへの瓶にまづぞさしてむ

時鳥稀

天づたふ日枝の祭もすぎぬれどなくねまれなるほとゝぎすかな

こゝちそこなひてこもりけるころ時鳥のはじめて鳴きけるよしきゝて

大前にさぶらひたらば時鳥人づてならできかましものを

蟬

木の間にもあつき日かげやさしくらむ軒にうつりて蟬のなくなる

仰ごとによりて夏夜涼といふことを

軒たかくかけしともしびおろすまで夜風すゞしくふき渡るなり

夕納涼

〔君がたまはらせて云々〕大君に賜らせむとて、取別き[illegible]て折取りし[illegible]枝と思ひしに、[illegible]て手に取りて見れば意外に花の少き枝なりきと也。

〔おまへの瓶〕陛下の御前なる花瓶をいふ。

〔天づたふ云々〕天傳ふは、日の枕詞なり。

〔日枝の祭〕日枝神社は東京市麹町區永田町に在り、祭神は大山咋命、官幣大社也。祭日は六月十五日なり。

〔人づてならで〕人の話に依りて聞くにあらで、自ら直接に聞くを得べかりしならむをとの意也。

〔軒にうつりて〕軒に移轉して也。

「夕されば云々」毎日に夕べ、社にめぐり給ふ意也。珍らしからぬとは、常に見慣れて庭にて今更に珍らしき庭にてはあらねどとの意なり。

「はし近く云々」端近くに、[illegible]の[illegible]、[illegible]まし移しては、玉座を移し給ふを云ふ。

「三日月は云々」三日月は陰暦の三日に出づる月也。西の空に見えそめて、やがて没する故に速く入り果てゝと[illegible]給へる也。

「おもの」天皇の御食用の意なり。

「秋あさき」秋の初めつ方を云ふ。

「日出山」御歌會始の御詠也。

夕さればすゞみがてらにめぐりけりめづらしからぬ庭のかきねを

園中月

はしちかくおましうつしてみそなはす御園の月のかげのさやけさ

夜雁

三日月はとく入りはてゝ星の影つらなる空を雁なきわたる

愛菊

葉にたかるむしも手づからはらひてしかきねの菊の花さきにけり

茄子

そのもりがうゑしかきねの初茄子おものとすべくなりにけるかな

折にふれて

秋あさき庭のしばふの露ふめば身のいたづきも忘られにけり

水鳥

はちすばのふる葉はらひし池水にけさひとつがひ鴨のうかべる

日出山

岩戸あけし神代おぼえて山のはをいづる朝日の影ぞまばゆき

烏

あらそひて塒やしめし紅葉山からすのはねの多くちりたる

子

思ふ事ありとも見えずをさな子の枕はなれてねたるすがたは

寄國祝

幾千代とかぎりもあらじしろしめす豐葦原のくにのさかえは

をりにふれて

濱殿のいけの玉藻に風たちてひそみし蝦のあまたとぶ見ゆ

いりうみにしほやさすらむ中島の釣殿ちかくえびのとぶなり

四月のはじめつかた神田のわたりあまたやけにければ

世わたりの道もあやふき市くらの烟となりしあとのかなしさ

明治二十六年

〔岩戸あけし神代〕天照大神の天岩屋に隠りましゝを、八百萬の神達の出し奉りし時の故事なり。
〔紅葉山〕御苑の中に在る山の名也。
〔しろしめす〕天皇の統治し給ふを云ふ。
〔豐葦原の國〕上古の我國は、海岸は悉く葦原なりしよりの稱なり。
〔濱殿〕芝の濱離宮也。
〔釣殿〕水に臨みたる御殿の稱なり。
〔市くら〕市街の倉庫を云ふ。

近時鳥

きのふかもかりがねきゝし大宮のみほりの上になくほとゝぎす

早涼

白妙の麻のふすまのひやゝかにおもほゆるまでなれる秋かな

海邊萩

舟ゑひのこゝちもさめて秋風になびくいそやの萩をみるかな

岡月

やまがらのなく聲たえしわが岡のくるみの枝に月ぞかゝれる

紅葉淺深

なか〳〵にまだしき枝もありてこそ錦とみゆれ庭のもみぢ葉

瀧邊氷

夜嵐にこほりやそめしおちたぎつ瀧の岩角しろくなりたる

雨中閑談

むらさめのふりぬる老がものがたり耳あたらしきこともありけり

〔きのふかも云々〕詞花集、藤原惟成の歌に「昨日かも霰ふりしかしがらきの外山の霞春めきにけり」とあり

〔白妙の云々〕白妙は單に眞白なる意也。思ほゆるまで云々とは、冷かに感ずる迄に秋も[illegible]過ぎたりと也。

〔いそや〕磯邊の家を云ふ。

〔なかなかに〕却りての意なり。

〔まだしき枝〕いまだ紅葉し盡くさざる枝、即ち青葉まじりの紅葉の枝を云ふ。

〔ふりぬる云々〕村雨の降るに舊りぬるを掛け、舊に對して耳新しと綾なし給へる也、

猫

鈴菜さく垣根はなれぬから猫は遊ぶこてふやはだしなるらむ

鞭

のる駒の道しる人はなか〳〵にみだりに鞭もあてずといふなり

間道尊女

かぐはしきこのみありてぞたちばなの枯木ももとにうつされにける

明治二十七年

新年山

あたらしき年の朝日にふじのねの峯さへにほふ朝ぼらけかな

遠村梅

あたらしきわらやもみえつ山本の梅の花しろく匂ふあたりに

窓前夏月

夕月夜さすにまかせてともしびもかゝげぬ窓のうちぞすゞしき

〔鈴菜咲く云々〕ほだしとは、[illegible]失ふ意に用ゐる言葉とす。
〔のる駒の道〕乗馬の道。即ち馬術を云ふ。下の句は乗馬の道のみに[illegible]ず、凡ての業に通じての教訓とし給へる也。
〔間道尊女〕[illegible]に救に遇ひ、喪を[illegible]
〔かぐはしき〕橘の雅言なり。
[illegible]に遇ひて、父の墓[illegible]ふ。

「わすれては云々」蓮の浮葉の、池一面に生ひ茂れるまゝに不圖忘れては水なき池かと思ふと也。

「富士のねは云々」不二の高根は雲に隱れて大空の暗くなれる意を、くらさはに掛けたる也。

「隣より云々」隣の宿にて植ゑし朝顏なれど、花は此方の庭の方に却りて美しく咲ける趣なり。

「小柴垣」細き木の枝にて作れる垣を云ふ。

「わたの原云々」月影のいと明らかなるまゝに、鵜の如く黑き鳥のゐる岩さへ見ゆと也。

「秋たけて云々」[illegible]

池蓮

わすれては水なき池とおもふまではちすの浮葉しげりあひにけり

海上夕立

ふじのねは雲にかくれてくらさはの沖ゆく船にかゝるゆふだち

鄰家槿

となりより來て見るばかり中垣のこなたにさける朝がほの花

蟲聲遠

むしのねぞとほくきこゆる小柴垣常夏へだつる庭になくらむ

海上月

わたのはら浪路さやけき月影に鵜のゐるいはほも見ゆるよはかな

晩秋蟲

秋たけて實になりはてし朝顏のかきねさびしきむしのこゑかな

雨中水鳥

あめふれば松のこかげにあつまりて池にはうかぶ鴨ぞすくなき

〔朝北に云々〕朝北とは朝吹く北風を云ふ。板敷は緣側なり。
〔文机は云々〕そむくは背を向くること。手すさびは、手慰みなり。
〔かり宮の云々〕かり宮は行宮なり。此の年日清の役にて、大纛を廣島に進め給ひて、行宮にましましゝを以て此の御詠あるなり。
〔御軍人は云々〕出征の將卒等の上を思ひやりて詠ませ給へる也。
〔庭火〕御神樂の時禁中の庭上に焚く篝火を云ふ。
〔おまし〕天皇の御座所。
〔春まちあへず〕來る春をも待ちかねての意也。

風前霰

朝北にふきおくられて板敷のうへにたばしる玉あられかな

埋火

文机はそむけがちにて手すさびに灰かきならす埋火のもと

寒夜埋火

かり宮の窓の夜嵐さむからむしたしみたまへ埋火のもと

大宮の火桶のもとも寒き夜に御軍人は霜やふむらむ

神樂

まさりゆく國の光をみかぐらの庭火さやかに見そなはすらし

深夜神樂

おましまできこゆるかなさよふけて物に紛れぬ御神樂の聲

梅花先春

さしのぼる朝日のどけき大庭に春もまちあへず匂ふ梅かな

關

白川の關の戸ざしのありし世はみやこの風もかよはざりけむ

大本營にましましけるころ鶴聲遙といふことを

廣島の海邊はるかにあしたづの千代よぶこゑはきこしめすらし

靈鷹

うちはなつつゝのひゞきもたかちほの御船におりし鷹は神わざ

寄竹祝

ことしおひのその、呉竹おほきみの千年の坂の御杖ともなれ

葉山にありけるほど高崎正風が別業因波閣に遊びて

千代よばふ鶴のはやまの松かげはよはひのぶべき處なりけり

明治二十八年

田家若菜

稻莖のくちのこりたる小山田ももゆる若菜に春めきにけり

廣島にましましけるころ禁庭梅といふことを

〔白川の關云々〕能因法師の「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白川の關」と詠めるを本歌とし給へる也。都の風とは都會の風俗を云ふ。
〔大本營〕日清の役に大本營を廣島に置き給ひし也。
〔靈鷹〕黄海の海戰の時、高千穂艦の檣桿の上に靈鷹の止まりしを、水兵の登りて捕へ、後に天皇に獻りし事ありしを云ふ。
〔ことしおひ〕今年生ひ出でし新竹を云ふ。
〔鶴のはやま〕鶴の羽を、葉山に云ひ掛けたる也。
〔稻莖〕稻の切株を云ふ。
〔廣島云々〕大本營にましましし也。

［御軍の云々］高千穂艦に山鳩のとまりし後、更に水雷艇に山鳩の宿りし事ありけるを詠ませ給へる也。
［いたる處に云々］日清戦役に連戦連勝せるを云ふ。
［一足も云々］一足は即ち一歩なれば斯く云ひて歩兵の意に詠ませ給へるなり。
［ありなれ河］ありなれ河は、俗説に鴨緑江也との傳に因りて詠ませ給へるなるべし。
［白布を云々］屋根にかへつゝとは、テントを張るを云ふ。たむろは屯營なり。
［軍のみうた］軍歌なり。
［もの丶ね］樂器の音色を云ふ。

鳩

御軍のふねにやどりし山鳩のつばさの上に神やましけむ

軍人

いくさびといたる處に勝を得てやまとごころを世にしめすらし

歩兵

一足もあとにはひかぬつはもの丶やまとごゝろも見ゆる時かな

騎兵

つはもの丶むちうつ駒やいさむらむありなれ河の波をけたてゝ

砲兵

もの丶ふのうちあやまたぬつゝの音は西の國までひゞくなるらむ

工兵

白布をやねにかへつゝ軍人たむろつくるも時のまにして

樂隊

大君の軍のみうたしらべあぐるそのもの丶ねのいさましきかな

〔もろこしの云々〕初句は支那の海を云ふ、此の大御歌は、[illegible]當時の折などに詠ませ給へるなるべし。

〔岩木たく云々〕岩木とは石炭を云ふ大御車は、天皇の召させ給ふ汽車なり。

〔月の輪の陵〕英照皇太后（孝明天皇皇后）の御陵也。

〔あてものも云々〕調馬師の[illegible]していまだ調教を試みざる若駒は、野邊の澤水さへ渡りかぬるならむと也。

〔七草に云々〕草花色々は秋の題なれば、此の御歌の七草は秋の七草也。

〔數まへられぬ〕七草の中は數へられぬ種々の秋草を云ふ。

寄海祝

もろこしの海もとゞろにひゞくらむ御軍人のかちどきの聲

戰場を思ひやりて

山をなすかばねふみこえ御軍のかちどきあぐるもろこしが原

廣島にまし〳〵ける頃停車場といふことを

岩木たく大御車のみむかへにたちいでむ日はいつにかあらむ

明治二十九年

一月三十日の夜月前神樂といふことを

霜さゆるよはのみかぐら月の輪の陵までもきこえゆくらむ

澤春駒

あてものもまだ試みぬ若駒にわたりかぬらし野べの澤水

草花色々

七くさにかずまへられぬ花までもいろをつくして匂ふのべかな

「野をつくしてや」野原の隅から隅まで、至らぬ隈なく風の吹き渡るならむとの意なり。
「釣人は云々」釣する人は磯際に船を着けて陸に上りしに、さし變りて月の船が海に浮び出でたりと面白く對照して詠ませ給へる也。
「うち渡す」うち見渡す、と云ふ意の歌詞なり。
「藻に住む蟲」古歌に「海士の刈る藻に住む虫の我からと音をこそ泣かめ世をば恨みじ、」など詠めり。
「玉ぐしの葉」榊の枝に木綿(ゆふ)を着けたるもの、」神に手向くる料なり。

秋風滿野

ひとかたに萩も薄もなびくなり野をつくしてや風のふくらむ

海上月

釣人は磯にのぼりて沖中に月のふねのみ浮ぶよはかな

孤島殘月

かの島は西にやあたるうち渡す夜霧の末に月ぞ殘れる

霧隔舟

島陰になるかと見ればあま小船霧のうちよりあらはれにけり

秋山家

柿の實の色づく軒に霧たちてのじろなくなり秋のやまざと

月前千鳥

月清み藻にすむ蟲やあさるらむ海にむれてちどりなくなり

社頭霰

さゝげもつ玉ぐしの葉にたばしりて霰ふるなり加茂のみづがき

曉夢

曉のかねにねざめてみはてぬをうれしと思ふ夢もありけり

深夜夢

黑髮をとくとおもひし夢さめて窓のとみればまだくらきかな

寄山祝

天つ日の光をうけて位山身のほど〳〵にのぼる御代かな

東宮御誕辰の御祝いはひし朝詣めするものゝ龜をたてまつりけるを見て

萬代いよはひを君にさゝげむとけふ御園生に龜のいでけむ

東宮をはじめて宮たちの旅にまし〳〵しころてけ定まらずがちにて一夜いたう雨のふりければ

いかにともつねはおもはぬ山々のいこへるにかゝる雨のおとかな

ふりつゞきし雨のやゝはれゆきて日かげさしければ

うれしくも今日は晴れぬとおくて田の水にひたりし稻やかるらむ

〔曉の云々〕世に見果てぬ夢ほど果敢なき物はあらじと云へど、曉の鐘の音に目覺めて、終局まで見果てざりしを嬉しと思ふ夢もありし也。
〔黑髮を云々〕朝寢髮の亂れを解きて更に結ひ上げむとする夢を見しに、其れに夜の明けしと心地して窓外を見たるに、夜はまだ深かりきと也。
〔天つ日の光〕天皇の御成德を云ふ。
〔位山〕飛驒國なる山なれど、古來位の事に云ふ詞也。
〔[illegible]〕[illegible]に應じての意也。
〔[illegible]〕[illegible]けは天氣なり。
〔おくて田〕晩稻を植ゑし田なり。

こゝちよきけふの日和のつゞきなばあがた／＼の水もひぬべし

明治三十年

春月朧

光をば霞につゝむ春の夜の月こそ人のかゞみなりけれ

花始開

若葉のみさすとおもひし山櫻けさうれしくも片枝はなさく

風靜花盛

うれしくもかぜしづかなり御園生の花の盛をみそなはす日に

池蛙

わが庭の池のかへる子身をかへてさゞれの上に飛ぶもありけり

風のみこゝちにてふし／＼けるころ

あやにくにをすたれこめて見まさぬがをしき今年の花ざかりかな

禁庭[illegible]

「あがた／＼」あがたとは縣を云ふ、各縣の水害も[illegible]がて治まるべしとの意なり。

「光をば云々」霞に包むとは、我身の博學なる、或は功績ある事など、世に誇る事なく深く[illegible]する心にいひたる云ふ。

「若葉のみ云々」[illegible]

「わが庭の云々」いへる子は、俗に云ふ「お玉じやくし」なり。身を變へてとは、蛙になれるを云ふ。

「あやにく」あな憎くの義、折あしく也。

「たれこめて」簾を垂るゝ意に、引籠りてまします意を含めたる也。

〔御苑生の云々〕をりもかざさずとは菊の花を手折りて挿頭しても見ざりきとの意なり。
〔袖垣に云々〕垣根に自然の儘に咲き匂へる菊は、人工を加へて菊人形などに作れるよりも懐かしく奥ゆかしと也。
〔秋たけて云々〕初句は秋深くなりての意、身にしむは悲哀の感の身に染みつくを云ふ。
〔みいづを乗せて〕御威光を乗する意にて軍艦を云ふ。
〔とよむ〕音高く響くを云ふ。
〔峠〕手向の義也。越え行く山の頂上を云ふ。其處にて山の神に手向をなすに因れる名稱なり。

御苑生の菊はさかりになりぬれどことしはをりもかざゝざりけり

籬菊

袖垣に匂へる菊は人がたにつくれるよりもなつかしきかな

暮秋蟲

秋たけてかれむとすなるむしのねや身にしむものゝをはりなるらむ

をりにふれて

霄こめて見るものなしと思ひしを山あらはれて朝日さすなり

旭月照波

大君のみいつをのせてゆく船に朝日かゞやく波のうへかな

山中水

來てみればながれは細し山水のいはほにあたる音はとよめど

峠にてかすかにきゝし水の音はこの谷川のながれなりけり

岩上苔

庭つくりまだあたらしとおもふまに岩角青く苔むしにけり

海邊蘆

海づらのあしのひとむら茂りけり蟹とる子らのかげみえぬまで

小學校

ものまなびやすらふ時になりぬらし子どもの聲の庭にみちたる

活人畫

筆とりてうつせるよりも女郎花なびかでたてるかげぞめでたき

將棊

手すさびの駒あらそひもつはものゝ教の道によれるなりてふ

兄弟

はらからのしたしき中のあらそひは時のまにこそ忘れはてけれ

朋友

まこともてまじらふ友はなか〳〵にはらからよりもしたしまれけり

寄日祝

國といふくにのはてまで照す日は君がみいつにひとしかりけり

〔かげ見えぬまで〕かげとは姿、即ち身體を云ふ。
〔やすらふ時〕休暇の時、遊ぶ時間を云ふ。
〔筆とりて云々〕女郎花を女子に擬へたり。靡かで立てるとは、身動きをもなさで立てる意なり。
〔手すさび〕手慰みの意也。
〔駒あらそひ〕將棊の駒の遣り取りを云ふ。
〔はらから〕腹自の義、即ち同胞の意にて、兄弟姉妹を云ふ。
〔まこともて〕まごゝとは誠心誠意の義に、信義の意を籠めたまへる也。

耳

人ごとのよきもあしきも心してきけばわが身の爲とこそなれ

英照皇太后の崩御まし〳〵ける頃

神あがりましぬときくはまことかといひもあへぬに涙こぼるゝ

したしくものたまひにけるみ詞を思ひいでゝはうちなげきつゝ

かへりまさぬけふの御門出をしむかな千代までとのみ祈りしものを

かなしきに胸ふたがりていひいでむことばもしばしわすれけるかな

月の輪のみさゝぎまうでする道にさきだつものは涙なりけり

大宮のうちもしめりて鶯のはつねおそしといふ人もなし

御宴のなきをしりてかみそいふの花も今年はおくれがちなる

みそいふの花にかはらぬ色なれどうかれ心にならぬ春かな

西京にものしける時御殿場あたりにて

見ゆべくも思はざりしをふじのねの雲間さやかに現はれにけり

むかしあらゐの渡といひし處にて

「人ごとの云々」人々の言ふ事の善言にても悪言にても能く心にとめて聞く時は、悉く自己の修養たるべしとの意なり。
「神あがりましぬ」崩御し給ふを云ふ。
「いひもあへぬ」言ひ終らぬ中にの意なり。
「千代までとのみ」千歳までも生き長らへてましませとばかりの意也。
「ふたがりて」塞がりてと云ふに同じ。
「月の輪」山城國愛宕郡月輪の御陵を云ふ。
「御宴の云々」御喪中なれば、觀櫻の御うたげの行はれざる事を、御苑の花も知るならむか今年は常よりも遲れ勝なるよと也。

「すみ馴れし云々」比叡山は京都に間近、山なれば故郷の面影を見給へる也。
「新御陵」前の帝の御陵を云ふ。
「玉串の葉」大神宮式に『木綿(ゆふ)を着けたる賢木、是を玉串と名づく』とあり。神前に捧げて御靈を祀り申す。
「賢所」賢所の義、禁中の温明殿の別名也、八咫の御鏡を此に奉安し奉り、内侍是を守護す、故に内侍所とも云ふ。
「勾欄」欄干なり。
「昇殿」禁中の殿上に昇るを聽さるゝ事、即ち四位以上及び六位の藏人なり。

時のまに車はすぎぬ昔わが波にゆられしをりもありしを

ひえの山の見えそめし時

すみなれし昔おぼえて故郷のたかねをみるもなつかしきかな

新御陵にまうでゝ

さゝげむと玉串の葉はとりながら夢かとのみもたどらるゝかな

外庭にて

つゝじ花今さかりなり築山のさくらの木かげいはね松が根

賢所のあとにて

君がため雨にぬれつゝ摘む草は露もかゝりて清げなるかな

勾欄に毛蟲のはふを御覽ぜさせたまひてまだ昇殿はゆるさぬにとたはぶれさせ給ふをうけたまはりて

位ある松さへ庭にたちぬるをけむしのぼれり板敷の上に

鐵道そこなはれしため還幸御延引になりければ

風あらく雨たえまなき昨日より思ひしことのあふがわびしさ

〔いかでと云々〕如何にして水の細々になりたるか、と訝かり給へる也。
〔みかはの水〕大内の周圍の溝の水を云ふ。
〔鉢ながら云々〕鉢に植ゑし儘なるを見るよりも御池に移植して見れば其の趣を勝りて優りと也。
〔すみし世の〕京都に住み給ひし昔を云ふ。
〔うしろより云々〕山の裏面より立昇ると見し雲の、暫時の間に其の表面をも立隠して夕立降り出でしと也。
〔南の殿〕南殿(デナン)を云ふ、紫宸殿の一名なり。
〔たち花に云々〕右近の橘、左近の櫻を云ふ。

みそののながれのかれ〴〵になりたるをいかでといぶかりしに苗代にひきたるなりとのたまはせければ

いかばかりうれしかるらむゆるされてみかはの水を小田にひく日は

花あやめを人のたてまつりけるに

鉢ながら見しにまされり花あやめみいけの水にうつしうゑれば

をりにふれて

花紅葉みるがごとくもうつくしき染物の色に心うつりぬ

すみし世の昔こひしみ見つるかないつもかはらぬ山のすがたを

うしろより雲のぼると見るがうちに山たちかくし夕立ぞふる

鳴く蟬のこゑのながゆくみそのふの林のかげぞ涼しかりける

月高くなりにし後は東山ひる見るよりもはるけかりけり

月さやかなりける夜

さやけさにみはしをおりて見つるかな南の殿のあきの夜の月

たちばなに櫻に影のさし渡る雲居の月のなつかしきかな

仰ごとによりて小御所より月を見て

御池には月影みちてそりはしの下のみくまとなれるよはかな

奈良縣より八の松蟲を奉りければ

このうちにあまたのこゑに御園生のむしはきこえぬ時もありけり

明治三十一年

鶯萬春友

梅が枝にうたふ鶯よろづ世の春の友とやきこしめすらむ

晴天歸雁

雲もなくはれたる空をかへる雁いかにうれしき旅路なるらむ

禁中花

大君の千代田の宮にさく花は昔の春もしのばざるらむ

社頭花

ねぎごとは親にまかせてともなひし子等は齋垣の花のみぞ見る

〔小御所〕ごんごしよと呼ぶ、足利將軍の頃より禁中に設けて、將軍參內の時、裝束を着更へ休息する所にして、長橋の局の對ひに在る御殿の稱なり。
〔下のみくまと〕下ばかり曇りて暗く見ゆと也。
〔このうちの〕籠の中の也。
〔萬代の春の友〕萬代までも齢を重ね給ひて、作者の心も變りなく鶯と共に仕ふべきなりと也。
〔いかに嬉しき〕好天氣なる上に、懐しき故郷に歸る旅なれば也。
〔昔の春も云々〕江戸城時代の春は、一天萬乘の君の御苑ならざりし故に斯く宣ひし也。

「おりてもと云々」此の邊りの花の景色は一と際勝れたれば、車より降り立ちて見む、と思ふ場所に限りて人々の群集し居れりとの意也。

「あるじまうけ」主人となりて客をもてなす設け、即ち饗應の設備を云ふ「あおと」足音也。足を「あ」と云ふは、あ踏み、あがき、など其例多し。

「濱の御園」濱離宮の御苑を云ふ。

「宴せし云々」昨日の觀櫻の御宴にはさしも美しかりし花の、只一夜の春雨に、全然異なる花かと思はるゝ迄に色變りて散り果てたりと也。

車中見花

おりてもと思ふ所は人しげし車ながらにしばしはな見む

旅宿花

旅やかたあるじまうけの篝火によるもさやけき花のいろかな

花時鞍馬多

宮人の駒のあおとぞつゞくなる遠乘すらし花見がてらに

觀櫻會

さくらさく濱の御園のせばきまで內外の人のつどふ今日かな

雨中落花

宴せし昨日の花と見えぬまでふる春雨にうつろひにけり

朝落花

けさみれば若葉がちにぞなりにける花は木蔭にちりたまりつゝ

雨中蛙

雨そゝぐ田中の里のかきね道ふきの葉がくれ蛙なくなり

夕蛙

くれぬとてぬなはとる船こぎかへるみぎはが池に蛙鳴くなり

をりにふれて

風ごゝちおこたりはてゝうれしくも花のこかげに遊ぶ今日かな

雨中新竹

ふりしきる雨にたわみてわかたけもよゝのうきふしをしりやそむらむ

螢をおこせける人に

ことのはの露のそはぬがをしきかな螢のかげはすゞしけれども

夏月

わが影もさやかに見えてまさごぢの月夜すゞしき庭のおもかな

夕立

軒ふかきこの大宮のうちまでもうちしぶくなり夕立の雨

船中夕立

こゝろざす港は遠きなみのうへにかみさへ鳴りてゆふだちぞふる

〔ぬなは〕沼繩の義、沼に繩の如き狀して生ふる故に此の名あり。蓴菜の古名なり。

〔風ごゝち云々〕風心地は風邪の氣味におはしましゝを云ふ。おこたるは全快し給ひし也。

〔よゝうきふし〕竹の節をよと云ふ縁にて、世の憂きふしと續け給へり。ふしと云ふも亦竹の縁語なり。

〔ことの葉の云々〕其許の贈り來れる螢の影は涼しげに見ゆれど、歎を添へられざるが殘念なりと也。

〔まさごぢ〕眞砂石を敷き列ねたる地を云ふ。

〔かみさへ鳴る〕かみとは鳴神、即ち雷を云ふ。

深山泉

夏ふかき山のかげこそ涼しけれおもはぬかたに水もながれて

夏馬

風かよふせどの木かげにつながれて草はむ馬や涼しかるらむ

十五夜月

いそのかみふるき暦は見ざれども秋のもなかぞ月にしらるゝ

雨中雁

きり雨にくもりて見ゆる岡のへの松原とほく雁なき渡る

湖上雁

紅葉鮒つりにといでし海士小舟かへる堅田にかりなきわたる

曉霧

有明の月をのこしてつらなれる山みな霧にかくろひにけり

夜紅葉

みやつこのたきし昔も見ゆるかな紅葉のもとの篝火のかげ

〔夏ふかき云々〕夏深き山とは、夏も闇になりて市中などにありては暑さ益々烈しき意と、深き山の意とに掛け給へる也。

〔せど〕背門の義にて裏口を云ふ。

〔いそのかみ〕大和国石上(村)郡には布留の里あるに依りて、布留の枕詞とす。

〔ふるき暦〕舊暦を云ふ。

〔紅葉鮒〕近江の湖にて、秋より冬に掛けて漁する鮒の稱なり。

〔帰る堅田に云々〕近江八景の一なる堅田の落雁を詠ませ給へる也。

〔みやつこの云々〕林間に酒を暖めて紅葉を焼くとあるを思し給へる也。

「から衣」單に衣とのみ云ふに同じ。古へは何物に依らず韓國より渡來せし物は珍らかなりし故に、韓何と云ふ習慣語あり、韓衣、韓錦、韓藍、韓紅等の如き皆此の意に出づ。

「星の林」星の數多立並べるを林に喩へたる語也。

「しるき」著きの義明白の意なり。

「ひかれけむ」引き攫はれしならむとの意也。

「風あらき云々」なめならぬは、傾斜しをらざる松は一本も無しと也。

「ひさぐ菜」販賣する青菜なり。

「おもがはり」大人になりて、小供の時とは容貌の變れるを云ふ。

里神樂

里かぐら今はじむらし笛のねも子どもの聲もきこゆなるかな

冬衣

埋火になほさしよりぬから衣おもふばかりにかさねきる身も

星

大空のほしの林の光にもしるきは明日の日和なりけり

磯波

うちよせてかへりし波にひかれけむいそべのもくづあともとゞめぬ

磯松

風あらきいそべにたてる松みればなゝめならぬは一木だになし

朝市

雨はれしあしたのいちにひさぐ菜のぬれたる色の清げなるかな

故郷友

ふるさとのをさなあそびの友も皆おもがはりせり年のへぬれば

山家雲

山あひに見えし白雲しらぬまにのきばの松にかゝりけるかな

田家翁

杖つかで田面をめぐる翁こそよのあえものといふべかりけれ

松上鶴

をり／＼は翅も見えてひなづるのなく聲すなり山松のうへに

山家鷄

にはとりのひなのうひだちいつくしむとなりの人の聲きこゆなり

鏡

朝ごとにむかふ鏡のくもりなくあらまほしきは心なりけり

香水

かめにさす花かと思へばわが袖にそゝぎし水いかをるなりけり

笠

やぶれがさすてたるみれば道のなきこのたかむらも人やわくらむ

〔山あひに云々〕二三の句は、しら雲と云ひ知らぬと重ねて、調べを綾なし給へる也。山間に湧き起ると見えし雲の、何時の間にか山居の軒の松に掛れりと也。

〔よのあえもの〕世の中にて、最もあやかり度きもの、と云ふ程の意也。

〔をり／＼は云々〕山松の梢なる巣の中より、時々白き翅も見えて、雛鶴の鳴く聲聞ゆと也

〔ひなのうひだち〕雛の初立の義、初めて歩み出づるを云ふ。

〔かめにさす花〕花瓶に挿したる花の薫れるかと思ひ給ひたる趣也。

〔たかむら〕竹村の義、竹の林なり。

「三浦の海」相模國三浦郡の海を云ふ
「しづかなる云々」燈火のもとに書など繙きをりて、浮世の中に遠ざかりつゝある心の靜かなるに似ず、對手の燈火(蠟燭)の影は絶間なく打ち搖きて靜心なしと也
「消えず乍らに」夜明にて室内の明るくなれる儘に、燈火は變りなく點りたれど影の暗くなれる也、
「うつせみの世」現身の世の義、現世を云ふ、
「小督」小督の局は高倉帝の寵妃也、
「月清き云々」雲居の雁の玉章とは高倉帝よりの御文を云ふ。
「日に三度云々」論語學而篇「曾子曰吾日三省吾身」云々とあり。

浦舟

ゆく船の帆の影白くみゆるかな浦風なぎし松原のうへに

漁舟

さゞえとるあまの小舟の見ゆるかな三浦の浦の岩のはざまに

閨中燈

しづかなる心にも似ずともし火はたえずまたゝく窓のうちかな

窓燈

ほのぼのとあけゆく窓のともしびは消えずながらに暗くなりにけり

述懐

人のため身のためものをおもふこそうつせみの世のならひなりけれ

小督

月清き雲居のかりの玉づさにしらぶる琴の音もしめりけむ

心

日に三度身をかへりみしいにしへの人のこゝろにならひてしがな

往事渺茫

里居せし昔は夢となりぬれどおやのいさめは忘れざりけり

〔里居せし昔〕いまだ入内し給はざるほど、御里におはしましゝ昔を云ふ。
〔おやのいさめ〕両親の教訓。

野無遺賢

山ふかくひそみし人もおのれから心すゝみていづる御代かな

〔山深く云々〕賢は世に道なき時は即ち隠れて出でざれど、聖代に遇へば出でゝ仕へ奉る例しを云ふ。

寄鏡祝

まさかきにかくる鏡のくもりなき世をこそいのれかしこ所に

〔まさかきに云々〕眞榊に懸る鏡とは八咫之鏡を云ふ、かしこ所は賢所にて、神鏡を齋ひ祀る御殿の稱なり。一名を内侍所とも云ふ。

うれしきもの

旅衣かへりてみれば御子たちの車やどりにむかへましたる

〔旅衣云々〕衣は反す物なれば、旅衣かへりてと續くる例也。旅路より歸り給ひし意也。

つれ〴〵なるもの

とのゐ人ねしづまりたるさよなかにたゞひとりきくあまだりの音

〔とのゐ人〕殿居人の義、宿直する人を云ふ。

明治三十二年

晴天雲雀

なごりなく霞は晴れて朝ひばりあがるかぎりもみゆる空かな

〔音せずて云々〕春の烟雨は音無くして降り濺ぎ、あたりも打霞みて降るとも見えざれば、八重櫻の花房の重げに頭垂れたるに依りて雨や降るらむと知り給へる趣き也。

〔ながえ〕轅は車體に亙りて長く前方に出でたる二條の材、轅棒。

〔庵ながら云々〕初句は宿の中に居作らの意なり。

〔むかふ野末〕向ひ見渡す野の末の意なり。

〔さわらび〕は後出、單に蕨と云ふに同じ。

〔摘みためて云々〕今少し生ひ出づるを待たむと摘まずさりし若菜の春雨に伸びて居る意なり。

雨中花

音せずて雨やふるらむ八重櫻はなぶさおもく見ゆるけさかな

故郷花

この春もみゆきにあはぬ故郷のみやこの花やさびしかるらむ

車中見花

しばしとてひきとゞめたる小車のながえの上にちるさくらかな

春眺望

庵ながらむかふ野末のすゞな畑かすみてくらし雨やふるらむ

暮春雨

かさなれるふきの廣葉に音たてゝふる雨さびし春のくれがた

春蕨

櫻散るをかのさわらび春たけてをざゝが上にぬけいでにけり

をりにふれて

つみためてたてまつらむと思ひしを若菜のうへに春雨ぞふる

〔ことなくて云々〕天下無事靜謐にして、出動する事もなくて暮れ行く年を祝ふならむ。軍艦も武備の爲めありて大掃除を爲し居れりと也。

〔晴るゝかと云々〕晴れ曇るを定なき事あれば憂しき事もあるに喩へ給へる也、世の姿とは世の中の常の狀態の意なり。

〔かちゆく〕徒行の義、乘物に乘らず歩むを云ふ。

〔田家煙〕御歌會始の御詠也。

〔われ富むと云々〕仁德天皇の故事なり。天皇高臺に昇りて民家の炊煙を望見給ひ「朕既富矣」と宣ひし事記に見ゆ

海上歳暮

ことなくてくれゆく年をいはふらしみいくさ船も塵を拂ひて

雲

はるゝかとおもへばかゝる山のはの雲ぞうき世のすがたなりける

雨

たえまなき雨にこもりて思ふかなかちゆく人のそでのしづくを

故郷路

うちたえて久しくとはぬ故郷は道も昔にかはるとぞきく

山家煙

峰たかき松の嵐のふきおちて煙つちはふ山ざとのには

田家煙

われ富むと見そなはすらし遠近の田づらの烟にぎはひにけり

田家犬

おやのためひるげをはこぶ里の子につきそふ犬やてがひなるらむ

〔子に孫に云々〕年老いて、家業を子孫に讓りし老人も尙ほ徒食せざる趣きを詠ませ給へるなり。

〔年を經て云々〕拾遺集、齋宮女御の歌に「琴の音に峯の松風通ふ也いづれのをより調べそめけむ」とあるにも劣るまじき御名歌と申すべし。やさしとは耻かしと云ふに同じ。

〔ひきあひつゝも〕犬の子二匹にて破笠を引合ひ戯れをれる樣を寫實し給へる御歌なり。

〔おほしたつ〕生し立つの義、養育する意也。

〔傳へ來し書〕日本書紀、古事記等、古代の事蹟を記せる書を云ふ。

田家翁

子に孫に業をゆづりし老人も田面にいでぬ日はなかりけり

松風入琴

年をへてひく手忘れしつまごとにかよふもやさし軒のまつかせ

笠

旅人が野路にすてたるやぶれがさひきあひつゝも遊ぶ犬の子

朝眺望

たちならぶ家より上に海見えて朝こゝちよき高輪のさと

友

よき友にまじはる人はおのづから身のおこなひも正しかりけり

教師

花になれ實をもむすべといつくしみおほしたつらむやまと撫子

披書知昔

つたへこしふみありてこそしられけれ遠つみおやの神のみいつも

思往事

みいくさのたよりいかにとまたれしもはやいつとせの昔なりけり

往事如夢

すぎぬればみな夢なるをかりそめのことにも物を思ふはかなさ

譬

國民をあはれみたまふ一ことの玉のみこゑぞ世にひゞきける

春夏秋冬

花ちりて若葉すゞしと思ふまにもみぢみだれてこがらしぞふく

をりにふれて

ふけぬとて夜床に入ればなか／＼にねぶたかりつる目もさめにけり

明治三十三年

早春山

いかほ風まださゆれども梓弓はるなの山ぞかすみそめたる

【みいくさの云々】日清の役に、皇軍の勝敗は如何ならむと其の報告を待ちこがれしも早五年の昔になりぬと也。
【かりそめの事】一寸した事、なんでも無き程の事を云ふ。
【玉の御聲】天皇の宣ふ御言葉を崇めて美しく云ふ語なり。
【花ちりて云々】花は春、若葉は夏、紅葉は秋、凩は冬なり。
【ふけぬとて】夜も深更に及びたりとての意也。
【なか／＼に】却りての意なり。
【いかほ風】伊香保の里に吹く風也。
【はるなの山】伊香保に近き榛名山なり。

梅盛

眞榊にしでたるきぬも薫るまで賢所の梅さきにけり

税所敦子がうせにけるとし花下言志といふことを

みそのふの花見る友は多けれどひとりたらぬがをしくもあるかな

時鳥數聲

時鳥三こゑ四こゑはかぞへしをあまりしげくも鳴くこよひかな

路夏草

葉になりてしげる蕨にひるがほの花もかゝれり山のした道

蓮露

たなぞこの玉おもはえて風たえし池のはちすに露のたまれる

夏人事

いかばかり苦しかるらむ日盛に水まきぐるまひきめぐる人

山家鹿

山もりにおはれやしけむわが庭のすゝきがくれに鹿のたつみゆ

〔眞榊にしで〕眞榊即ち玉串の葉に取り懸けたる木綿さへも薫りを含むばかりに、賢所の梅花咲き出でたりと也。賢所とは禁中にて八咫の御鏡を安置し奉る御殿の稱なり。

〔ひとりたらぬが〕税所敦子一人不足せるを云ふ。

〔たなぞこの玉〕掌中の玉也。たなぞこは手之底の義、たなうらに同じ。

〔水まきぐるま〕撒水車なり。

〔山もり〕御料の山を守る吏員なり

「さはるかと云ふ」夜の大空に廣がり出でし雲は、今我が待ちつる月を遮り果てやせむと心を痛めつゝ眺め居りしに、嬉しくも月の邊りを離れて遠ざかり果てたりと也。

「秋の調べ」音樂の調子なる十二律の秋の調子をいふ。此の御歌にては、風の音も秋めき來たりとの意なり。

「すのこ」竹を編みて作れる縁側を云ひ、轉じて板敷の縁側にも云ふ。

「朝日にけぶる」朝日に輝けて立ち昇る水蒸氣を云ふ。

月前雲

さはるかと思ひしくもはうれしくも月のあたりをはなれけるかな

月前松風

いつとなく秋のしらべになりにけり月さすのきのまつかせの聲

野分朝

よのほどの野分の風のあとみえてすのこの上に萩のちりたる

屋上霜

ふきわたす杉皮しろくおくしものあさ日にけぶる山かげの庵

雪中竹

末遠き千年の友と見そなはすみかきの竹は雪折もなし

里神樂

くれ竹の葉山の宮にきこゆるや森行あたりのかぐらなるらむ

朝雲

朝あらし吹くとしられて山松の梢のくものうごきそめたる

故郷路

やどちかくなりにけらしもすみし頃かよひなれにし道にいでぬる

ふるさとの車やどりにつきたれどなほ道とほし大御門には

故郷庭

あれはて、面かはりせる庭なれどとへばさすがになつかしきかな

閑居夢

しづかなるやどにすめども見る夢に心のさわぐをりはありけり

旅中橋

今日までにわたりし橋をかぞへてもはるかにきぬる旅ぞしらるゝ

田家燈

小山田のしづがわらやのともしびに絲ひく影もみゆるよはかな

松上鶴

さかえゆく御苑の松にひなづるの千代のはじめの聲をきかばや

郷家鶏

〔やど近く云々〕昔我が住みし故郷の宿近くなりしなれど、其の當時通行し馴れし道に、今我が乗れる車は出でたりと也。

〔ふるさとの云々〕京都の停車場に汽車は着したれど、御所までは尚ほ道の程遠く遙かなりと也。

〔あれ果てゝ云々〕昔わが住み居りし家の庭は荒れ果てゝ、見るかげも無く變りぬれども、來て見れば流石に懐かしく眺めやらると也。

〔今日までに云々〕渡り來し橋の數の多きに依りて、遠く來ぬる旅路の程を察し給ひし也。

〔松上鶴〕歌御會始の御詠也。

中垣のひまあらければ庭鳥もへだてなくこそゆきかよひけれ

筆

たらちねのおやのいまさば今も猶いさめらるべき筆のあとかな

船

いかりづなおろして後も湊江の船なほ動くこゝちこそすれ

としどしにみいくさ船のかずそひて海のまもりもやすきみよかな

述懐

昔を思ふちゞのおもひのひとつだにつらぬきかぬるわれぞたになり

華族

よの中にあふがるゝ身を位山のぼるにつけて忘れざらなむ

地方官

ほどほどに心をそゝぐあがたの水にうるほふよもの民くさ

巡査

にぎはへる都大路をまもる人はこゝろのやすき時ぞなからむ

「中垣のひま」は何なる「庭鳥も」のも字は其意甚だ重し卽ち[illegible]にも及ばず、[illegible]も隔てなく行き通ふと也。
「いさめらるべき」今少し手習し給へと注意せらるべしとの意也。
「船なほ動く」投錨して停止せし船の[illegible]行を[illegible]しつゝある心地すとの意也。波に船の動搖する意にはあらず。
「ちゞのひとつだに」[illegible]を思ひ奉る心の千分の一をさへ成し遂げ得ざる我が身は何なりや、との意なり。
「あがたの水」[illegible]地方官を上田[illegible]に掛け給へる也。

「海にくぬがに」くぬがは陸（くが）に同じ、卽ち海軍も陸軍もの意也。
「軍の道をならす」ならすは演習する意なり。
「えたるくさ〴〵」種々の鹵獲品を云ふ。
「庭ながら」御生家の庭に居て、余所ながら遙かに大内山を仰ぎ給ひしを云ふ。
「大内山」禁中を云ふ。
「しき島の云々」崇神、欽明、二帝の都し給ひし大和國磯城島の地名に起れる語にて、大和の枕詞也。倭言葉の道とは和歌の道を云ふ。
「はれのおもの」晴の佩物の義、束帯を云ふ。

軍人

國のため海にくぬがにおこたらず軍の道をならすみよかな

振天府

みるごとに涙ぐまれぬ海くがに命をすてゝえたるくさ〴〵

思往事

庭ながら大内山をあふぎ見し里居のむかしおもひいでつゝ

寄道祝

しきしまのやまとことばの道ひろくなりまさりゆく御代ぞうれしき

明治三十四年

新年梅

としたちてはれのおものをきこしめす大床たかくかをる梅かな

餘寒風

春寒きけさのあらしに霜よけの松葉みだるゝ庭の面かな

春草

北びさし久しくありし雪きえてやゝもえいでぬ庭のわか草

摘菫

手すさびにすみれの花をつみてけりをさな心のなほうせずして

春月

をり／＼はちる花見えてほそどのにかすめる月のなつかしきかな

夕春雨

ふく風も南になりてあたゝけきゆふべの庭に春雨ぞふる

花始開

いまいくかありておましにかをりなむ片枝さきいでし庭の櫻は

花盛

世の人のしらぬぞをしきみそのふの花のはやしの春の盛を

朝花

あさ戸やる人のことばにしられけり昨日にまさる花のさかりは

〔北びさし云々〕古へ殿の正中を母屋とし、其の四面に各一間づゝ廂あり是を廂と爲す、北の庇に御座敷きて大殿籠る、などある是也、後世は家の四方の軒下にて緣側、戸口、窓などの上に別に作り添へて垂れたる簷を云ふ。
〔ほそどの〕宮殿の周りに人の通路に設けたる細長き所廊下を云ふ。
〔おまし〕御座所を云ふ。
〔あさ戸やる〕朝に雨戸を開くるを云ふ。
〔人の言葉に云々〕戸を開け乍ら庭の櫻を賞むる人の言葉の意なり。

夕花

きこしめすことのをはりしゆふべのみのどかに花をみそなはすらむ

都花

ふく風に都大路のちりたちてをり／＼くもる花のいろかな

落花多

吹く風は鄰の花もさそひきてわが庭白くなしてけるかな

月前落花

ちりかゝる花こそかをれ朧夜の月見そなはす君がみけしに

春衣

をとめこが春の衣ぞうつくしき柳さくらをぬひものにして

新樹

山かげの庭のめぐりのかなめがきわか葉も花と見ゆる頃かな

新樹露

わか葉さすかげなつかしきにはとこのえだに餘りて露ぞこぼるゝ

〔きこしめす云々〕御代を治し召し給ふ政事の御務めを了へさせ給ひし夕方のみ、大君は心靜かに花を見そなはすならむと也。

〔散りかゝる云々〕初句、及び次の句は、是を結句の下に移して、君がみけしに散り掛かる花こそ薫れ、と續けて心得べし。みけしとは、御衣を云ふ。

〔ぬひものにして〕絹布に五彩の絲もて模様を縫ひ現はせるもの、刺繡。

〔わか葉も花と〕かなめの若葉は紅色にして花の如くなるを以て斯くは詠ませ給へる也。

〔にはとこ〕庭常の義にて庭に繁る義と云ふ、接骨木。

紫陽花

いづれをかまことの色と定むべき日ごとにかはるあぢさゐの花

初秋扇

人みなの手にならされてよの秋を扇はいまだしらずやあるらむ

薄風

わが庭のしらふのすゝきしらぬまに穗にあらはれて秋風ぞふく

秋夜

あきのよの長くならばとおもひしを思ふばかりは書もよまれぬ

霰

瀧の上の梢さやぎて玉あられはやせの波にちりみだれつゝ

雪中竹

夜のほどの嵐はたえて呉竹の雪しづかにもあくる空かな

車中見雪

車にてゆく〳〵みるもさむきかな雪さやかなるちゝぶが嶺

〔いづれをかまことの〕紫陽花は、日毎に〔色〕かはる花なれば、其の何れの色を眞の本色と定むべきかと也。
〔手にならされて〕手に手に打ち鳴らされ親しまれての意なり。
〔よの秋〕涼しく成りもて行けば、秋の扇と捨てらるゝを云ふ。
〔しらふのすゝき〕白斑の薄にて、葉に白き斑のある薄を云ふ。
〔長くならばと〕秋の夜長になりなば書を讀まむと思ひし物を、との意也。
〔さやぎて〕さわぎてと云ふに同じ。
〔雪中竹〕歌御會始の御詠也。
〔さやかなる〕明白に見ゆる意也。

〔ゆふやけの云々〕夕焼の赤々とまばゆき空の鳥を見つめ給へる目を、御園の木深き陰に移し給へる趣き也。
〔なにの苗云々〕里人が畑を耕し畦を作りをるは、何の苗を植ゑむとするならむと也。
〔萬代のこゑ〕萬歳と喚ぶ聲を云ふ。
〔とよむ〕響き渡る意なり。
〔すみし世〕我が住みて居りし昔を云ふ。
〔わたのとのくに〕初句は渡の外の國の義即ち海外の國々を云ふ。
〔大前の云々〕大前は天皇の御前也。
〔玉の御鉢〕玉は美稱なり、植木鉢を云ふ。

夕

ゆふやけの空ゆく鳥をみるがうちに御園の木かげくれはてにけり

畑

なにの苗うゑむとかする里人が畑うちかへしうねつくるなり

湊

萬代のこゑとよむなりいくさ船いさををつみてかへるみなとに

故郷竹

すみし世にわがうゑおきし呉竹のみさをは今ぞあらはれにける

閑居鳥

しづけさに人なきやどゝおもふらし小鳥も窓にいりて鳴くなり

御苑

わたのとのくにてふ國の草花もみそののうちに匂ふ御代かな

盆栽竹

大前の玉のみはちにうつされてうれしきふしにあへる竹かな

〔みいくさの云々〕ふみを傳ふる鳩とは傳書鳩を云ふ。
〔おものゝ濱〕近江國琵琶湖なる濱の名なり。
〔筆とらぬ云々〕我は筆を取らぬ日は稀なるに、其の書く文字の人並よりは劣りて拙きは何故ならむかと也。
〔石の板云々〕石の板は石盤、石の筆は石筆なり。
〔さゝげたる云々〕三句なる「こもりけり」の五文字は、結句の下に移して心得べし。あえませとは、あやかり給へ、と云ふ意なり。
〔かりそめのこと〕一寸した事、何でも無き事を云ふ。

竹年久

うらやまし年はふれどもわが庭のたけの緑はかはらざりけり

鳩

みいくさの船よりふねに通ひつゝふみをつたふる鳩もありけり

蜆

城のかげうつるおものゝ濱風にたゞよふ船やしゞみとるふね

筆

筆とらぬ日はまれなるを書く文字のなど人なみにおくれたるらむ

石筆

石の板つくゑにおきてまなび子がいしの筆とる音ぞひまなき

布

さゝげたる手織の布にこもりけりあえませと思ふ老がこゝろは

述懐

あやまたむことをおもへばかりそめのことにも物はつゝしまれつゝ

〔すゝよか〕すこやかに同じ、壯健の意なり。
〔苔の下〕地の下の意、墳墓の中を云ふ。
〔しろしめす〕治し召すの義、天の下を統治し給ふ意なり。
〔なべての人〕押並べての人、國民一般を云ふ。
〔とる筆の云々〕文字の書きぶりに依りて其人の心も現はると聞きては、我が書く文字の拙きが耻かしく思はると也。
〔すめらぎ〕統ら君の義にて、天皇を申す。
〔火のあやまち〕過失に因りて起せる火災。失火。

老人

あふごとにすくよかなりといはるゝがおいたる身にはうれしかるらむ

親

御恵のあまりある身をなき親も苔の下にてかしこみぬらむ

心

しろしめす國やすかれとねがふこそなべての人のこゝろなりけれ

筆寫人心

とる筆のあとはづかしと思ふかな心のうつるものときゝては

往事如夢

猫の子をひざにおきつゝふみよみしをさな心もゆめとなりにき

寄民祝

すめらぎの國の爲と萬民よろづのわざにきそふ御代かな

大學の第二醫院にて火のあやまちありけるころ鐘といふ題を得て

こよひまたうつ鐘の音におもふかなはのほにあへる人のこゝろを

明治三十五年

新年梅

大君の千代田の宮のうめの花ゑみほころぶ年の始に

山吹

池の面にちりし櫻はかたよりてさやかにうつる山吹の花

田家卯花

わか竹もおひましりたる杉がきに卯花さけり小山田の里

葵

神山の二葉のあふひ大前のをすにかけしは昔なりけり

霧

かり宮のありとも見えず代々幡の里の杉むら霧ぞこめたる

をりにふれて

〔[illegible]にあまる〕人生に達しゝ也。人生に到達せしを云ふ。

〔新年梅〕歌御會始の御詠也。

〔大君の云々〕二の句は、天皇の御齢の千歳と云ふに係れる詞也。千代田の宮は即ち宮城を云ふ。ゑみほころぶとは咲き出でし意なり。

〔かたよりて〕風のまに〳〵一隅に片寄れる也。

〔神山〕云々賀茂の祭に、二葉の葵を天皇の大前なる御簾に掛けしは昔にこそ[illegible]なりしと也。

〔かり宮〕假宮の義。行宮を云ふ。

うづもれし人を惜みて青森の苹をいかにといはぬ日ぞなき

故郷木

昔わが實を拾ひてし故里のかしの大木は今ものこれり

閑居水

山川のながれをひける遣水のすみよかるべき木がくれの庵

山家水

やまかげの水のながれは清けれど洗ひかぬるは心なりけり

田家客來

そだてゝしわこ來ましぬと老人がわらうちやめていでむかへつゝ

谷松

谷川のながれさへぎる岩の上に二葉の松はしげりあひたる

植物温室

梓弓はるより外の時しらで草木花さくむろのうちかな

煙草

〔遣水〕流水を塞き導きて庭の面などに流し遣るを云ふ

〔すみよかるべき〕水の澄みて清き意より、住み善しと云ふに掛けたるなり。

〔やまかげの云々〕洗ひかぬるは心なりとは、何ほども俗界に心ひかれて、心耳を清むる境に達せずとの意也。

〔そだてし云々〕養育しおほせし和子が來玉へりとて老人が稼業をさし止めて喜べる趣也。

〔谷川の云々〕流れ遣るとは、島の如くに立てる岩を形容せる也。二葉の松とは、松の芽生を云ふ。

〔春より外の云々〕温室の中は常に春暖なるを云ふ。

〔さくら木〕云々〕書物は、古へは櫻の版木に彫りして印刷に付せるを以て、未だ刊行せられず寫本にて世に傳はれる珍書を版木に未だほらせ[illegible]と云[illegible]り。
〔おとゝ〕より云々〕大臣より御前に獻上せる書を[illegible]
[illegible]
〔白雲のよそ〕白雲は[illegible]る物なれば、余所に冠し給へる也。古歌に、余所にのみ見てや止みなむ葛城や高間の山の峯の白雲、など[illegible]。

くゆふし、たばこの烟きえたれどかをりはのこる窓のうちかな

書

さくら木にいまだいぼせぬ古の書の卷こそたからなりけれ

机

おとゞよりさゝげしふみの多きかな大みつくゑの上せばきまで

鏡

朝な〳〵かゞみにうつすわが影のいつともなしに老いにけるかな

絲

一すぢのその絲ぐちもたがふればもつれ〳〵てとくよしぞなき

杖

國のためいたでをおひし軍人杖をちからに歩むかなしさ

電話

白雲のよそなる人のことのはも家にゐながらきく世なりけり

船

横須賀のみなとにぎはふ船おろし心も共にゆくなみぢかな

晩鐘

大宮のうちにきくだにさびしきは入相のかねのひゞきなりけり

深夜鐘

とのゐ人しはぶく聲に夢さめて夜ふかきかねの音をきくかな

燈明臺

雨風にきゆることなきともしびによるも船路はまどはざるらむ

有智子内親王

加茂川のはやせの波のうちこえしことばのしらべ世にひゞきけり

久米舞

くめまひの手ぶり見つゝも仰ぐかな遠つみおやの神のみいつを

農業

田に畑にいでぬ日もなき里人の身のいたづきぞ思ひやらるゝ

光陰如矢

〔船おろし〕軍艦の進水式を云ふ。〔心も共に行く〕心も船と共に進行する意と、心行く事即ち愉快なる意とに掛けたる也。〔うちにきくだに〕常に長閑なる内裏の内にして聞くのでさへ入相の鐘の響は淋しと也。〔とのゐ人〕殿居人の義、宿直する人を云ふ。〔有智子内親王〕嵯峨天皇の皇女、本朝女流無双の秀才にして詩文を能くす。弘仁五年加茂の齋院と爲り給へり。承和十四年十月薨ず、年四十一〔久米舞〕上古久米部に屬せる武人の舞なり。〔いたつき〕辛勞を云ふ。

〔ゆづるにかけて〕弓弦に番へてと云ふに同じ。
〔放つ矢の〕放つ矢の如く、の意也。
〔ことし又云々〕竹の園生とは親王を申す、明治三十五年壬寅六月廿五日第二皇子雍仁親王（秩父宮）の御誕生を祝ひ給へる也、
〔いきとしいける〕世の中に生存する凡ての物を云ふ。
〔新年海〕歌御會始の御詠也。
〔あだ波〕皇國に仇を爲す國を云ふ。
〔なつかしみ〕なつかしさにの意也。
〔薄板〕花瓶を載する臺を云ふ、

ますらをがゆづるにかけて放つ矢の目にもとまらずゆく月日かな

寄鶴祝

ことしまた嬉しくきゝつ千代ふべき竹の園生のひな鶴の聲

をりにふれて

世の中のいきとしいけるものみなにおよぼすは君の恵なりけり

明治三十六年

新年海

軍ぶねいかりおろしてあだ波も音せぬ御代の年祝ふらし

故鄉霞

ふるさとの春なつかしみ來て見れば柳けぶりて鶯のなく

瓶花

薄板にしづくもおちて朝ざくらのどかに薫る瓶のうちかな

苗代水

〔すきかへし云々〕初句は鋤返しの義にて、田を起し耕作するを云ふ、苗代小田とは、籾種を撒きて苗を作る小田を云ふ。
〔昨日の春〕今朝夏の立てる意を此の句にて現はし給へるなり。
〔てる月に云々〕螢は晴夜に光添ふ蟲なれば、月に雲の掛るも厭はぬと詠み給へる也。
〔御門の原〕禁庭の内にある原の名なり。
〔枝ながら云々〕栗の實の附着しをれる儘にての意也。
〔野分〕秋の半過頃に吹く嵐なり。
〔もとよりも〕掃き寄せざりし以前よりもの意也。

すきかへしなはしろ小田に水ひけば菫の花ぞまづ浮びける

首夏鶯

夏木立しげるみそのに聞ゆなり昨日の春のうぐひすの聲

螢

てる月に雲のかゝるもいとはぬは螢見る夜のこゝろなりけり

聞蟲

大前にさぶらひながら聞きてけり御門の原になくむしのこゑ

野分朝

枝ながら栗の實おちて夜のほどの野分のなごりしるきけさかな

落葉

園守がよせし木の葉をもとよりも廣くちらしつこがらしの風

田家落葉

うつ藁のちりふきたつる夕風にもみぢみだるゝ小山田の里

山

草も木もおひぬをみればそのむかし火をふきいでし山にかあるらむ

行路

かち人もこゝろやすきはをぐるまの道さだまれるみやこなりけり

旅泊夢

なみたかくなりぬとみしはゆめにしてねざめしづけき船のうちかな

山家烟

山里のかきねの夕日くもるなりをりたくしばのけぶりなびきて

窓前竹

親も子もわかれざりけり窓のとにしげりあひたる竹のひとむら

松年久

いらかより高くなりぬる老松はへにけむ年も忘れたるらむ

錦

神寶をさめまつれる大とのゝにしきのとばりあやにかしこし

夕眺望

〔草も木も云々〕おひぬを見ればとは生ひ立ち居らざるを見ればの意也、

〔かち人も云々〕かち人とは步行する人、道定まれるは車道、人道の區別あるを云ふ。

〔かきねの夕日〕垣根にさす夕陽の影の意なり。

〔親も子も云々〕何は親竹も若竹もの意、わかれずとは區別し難きを云ふ。

〔いらかより云々〕甍は屋根瓦なり。へにけむ年とは經過せし年を云ふ、

〔神寶〕神代より傳はれる神器、

〔大殿の錦の帳〕大殿とは賢所を云ひ給へるなるべし。八咫之鏡を安置し奉る帳なり。

西山をふりさけみれば入方の日かげまばゆし松の木の間に

尾張濱主

百年をふもとに見つゝ雲の上にたちゐかろくもまひし袖かな

熾仁親王

御杖ともたのみましけむ吳竹のをしくも雪にをれにけるかな

思往事

十年あまり五とせすぎぬ新宮に移りましゝは昨日と思ふに

寄書祝

きこえあぐる神代の卷のふることも事あたらしくあふぐ今日かな

寄世祝

昔よりためしもきかぬ大御代にうまれあへるぞうれしかりける

明治三十七年

夜春雨

〔入方の日かげ〕今將に西山に沒せんとする夕陽の光輝を云ふ。

〔尾張濱主〕尾張連濱主は仁明帝の時の伶人也。舞樂に巧なるを以て外從五位下に叙せらる。百十餘歲の時、帝召して長壽樂を舞はしむるや、袖の翻す所、裾の翻す所、宛然壯者の如し。帝、嘆賞して衣一襲を賜ふ。

〔熾仁親王〕有栖川幟仁親王の御子也明治二十八年一月廿四日薨ぜらる、御年六十一。

〔神代の卷〕日本書紀神代紀を云ふ。

〔昔より云々〕千歲一遇の御代に生れあへるを喜び嬉しみ給へる也。

花はみなちりにし庭にふる雨をのどかにきゝてねぶるよはかな

花盛風靜

ことわざにたがふもうれしわが庭の花のさかりに風たゝずして

葉山にて雪のいたくふりける日

鵜が島もあるかなきかになりにけりふりしく雪に波路くもりて

折にふれて

もろこしの畑のたかきびふく風に霜ちるよはの寒さをぞ思ふ

夜聞水聲

かきねゆくながれあるらし夜にいりてつきたる宿に水の音する

谷川

ながれゆく末はいくせにわかるらむたゞひとすぢのたにがはのみづ

巖上松

大内の山のいはねにしげりゆく小松の千代もみそなはすらむ

鷹

「花は皆云々」花盛なりし頃は、雨の降る毎に、花を氣遣ひて心を痛めしが、今は早花は皆散り果てしかば、心を惱ます事も無く、降る雨の音を長閑に聞きつゝ枕に就く事よと也。

「ことわざに云々」月に叢雲、花に風とは世の常に云ふ諺なるが、其の諺に違ひて、花に風吹かぬ我庭の櫻の盛の嬉しさよと也。

「もろこしの云々」滿洲の高粱を吹く寒風に寄せて征露の將卒の辛苦を詠ませ給へる也。

「つきたる宿」到着せる旅館の意也。

「巖上松」皇后宮の御詠也。

「小松」皇孫殿下によそへ給へる也。

軍人みいつをのせてゆく船にやどりしたかは神のつかひか

寫眞

國のためいたでおふ身のうつしゑはみるに涙ぞもよほされける

眺望

三浦がた富士の高嶺のみえぬ日も江の島のみはさやけかりけり

海眺望

かくれ岩こゝにかしこにあらはれて汐干の海のおもしろきかな

讀書

ともしびのもとにふみ見ておもふかな昔もかゝる事のありけり

折にふれて

戰の友のかばねをふみこえてすゝむこゝろや苦しかるらむ

いまたえむいきの下より萬代をうたふときくに涙こぼれぬ

君をおもふ誠ひとつにたゝかひのにはにも民のすゝむ御代かな

何事も皆うちすてゝ戰の道にこゝろをつくすもろ人

〔軍人云々〕御稜威を乘せて行く船とは、大君の御威光を負ひ行く意にて軍艦を云ふ。

〔國の爲め云々〕痛手負ふ身の寫し繪とは日露戰爭の負傷兵の寫眞を云ふ。

〔三浦潟〕相州葉山の海を云ふ。

〔かくれ岩〕汐の干ざる常の時は海水に隱れ居る磯の岩を云ふ。

〔ともし火の云々〕燈火の下に書を繙きて、今の世に思ひ當る記事のあるに感を催し給へるなり。

〔いま絶えむ云々〕日露の役に我が將士の敵彈に斃れむとする刹那に必ず萬歳と叫びしを云ふ。

たのもしき何はあれどもたゝかひにかたではやまぬ大和だましひ

たゝかひのかちのたよりをきく毎にみ軍人の身をおもふかな

明治三十八年

新年山

鶴のはのかさねて祝ふ年たちて山さへゑめるこゝちこそすれ

薄未出穗

望の夜のちかづくまゝにまたるゝは庭の薄のはつほなりけり

里秋風

さむしろにほしたる粟もちるばかり嵐ふくなり小山田のさと

をりにふれて

海陸のみいくさ人もかへりきてにぎはひあへる御代の秋かな

夜神樂

まもらしゝ軍のかちにみこゝろもすみまさるらし月の夜神樂

〔たのもしき云々〕世の中に頼もしき物は數おほけれど其中にて最も頼もしきは、戰に勝たでは止まじと期する日本魂なりとの意也。

〔かちのたより〕我が軍の捷報。

〔新年山〕歌御會始御詠也。

〔鶴の羽の云々〕初句は、鶴の羽重ねと云ふより、重ねてと續けたり。去年よりの連戰連勝に引續きて、正月元日旅順降伏の捷報ありしをば斯くは詠ませ給へる也。

〔さむしろ〕さは發語、むしろと云ふに同じ。

〔まもらしゝ〕守り給ひしの意也。

深夜風

いつのまにわれ老いぬらむふくる夜の風の音にも目をさますまで

觀艦式

數そひて御國にかへる軍ぶねいかに嬉しとみそなはすらむ

汽車

かなぢゆく車のうちのいくさ人みおくる聲もいさましきかな

彰仁親王

名のみにてこまつのなきぞくちをしき勳も高きこの宮にして

入營

萬代のこゑぞきこゆるつはもの〻今日やたむろにいる日なるらむ

燈前讀書

ともしびにちかくよりつゝ見る書もめがねをたのむ身となりにけり

今昔てらしあはせてともし火のもとにふみ見るよはぞたのしき

孝

〔いつのまに云々〕年の稍々老い行くに從ひて、熟睡を貪り難く、耳さとくのみ成り行くが常なる故に、風の音にも目を覺すと詠み給へる也、
〔數そひて〕日本海々戰、旅順降服等にて敵艦を數多鹵獲せしかば、我が軍艦の數の在來よりも多くなりて凱旋せしを云ふ、
〔かなぢ行く〕鐵路の義、汽車を云ふ
〔名のみにて云々〕小松宮と申せども名ばかりにて、小松（御子）の無きを遺憾に思ふと也、
〔たむろ〕屯の義、即ち兵營なり。
〔照し合せて〕今と昔とを比較する意にて、燈火の縁語也、

はゝそばの惠の露をうけながら子の道はまだつくしかねつゝ

をりにふれて

たゝかへばかつが常なる御軍もなほいかにかとおもふ時あり

いさましき花火の音ぞきこゆなる大御軍の勝いはふらし

葉山よりかへらむとしける時この日頃風ひやゝかなればよき日見定めてはいかにといふおほせごとをうけたまはりて

かしこさのあまりに

大君のあつきめぐみによべよりの風のさむさもわすれつるかな

都にかへらむとたのしみたりしかひなくその日しも雨ふりければ夕つかた

あたゝけき昨日のひよりけふならば君のみまへにさぶらはましを

明治三十九年

新年河

〔はゝそば〕柞葉なり。柞は楢（ナラ）の古名、今俗にハウソと云ふ。其名の同じきより、母の事に擬へて詠むを常とす。

〔惠の露を云々〕深き御惠を受け乍らの意、露は柞葉に云へる緣語にて、別に意あるにはあらず。

〔戰へば云々〕我が大君の御軍は、戰へば必ず勝つが常にて、假にも敗戰する事なしとは思ひ知れども、猶ほ勝敗如何と案ぜらるゝ折ありと也。

〔大君の云々〕厚きを寒きに通はし、下句の寒きに對照し給へる也。

〔昨日のひより〕昨日の日和が今日と交替せばとの意也。

しづかなる世のとしなみは神風の五十鈴川よりたちかへるらむ

新年松

雪深き樺太島のまつかせも御代をことほぐ年たちにけり

白牡丹

深見草ましろにさくはあはれなりうつろひやすき色にならはで

折藤花

春の日の長きしなひをたらちねの君に捧げむふさなみの花

山家藤

おもしろく藤の花さけりわが山の松にいはほにはひまとひつゝ

更衣

ぬぎかへて寒しとおもふ夏衣わかき人には涼しかるらむ

時鳥一聲

時鳥なくひとこゑに大前のみものがたりもしばしやみぬる

夏日

〔しづかなる云々〕静かなる世とは平和克復に及びたる年の始なれば也。神風、五十鈴川の枕詞、川と云ひ、立歸ると詠めるは、年波の縁語也。

〔雪深き云々〕樺太島の、我が版圖に入れる御代の新年を賀ぎ給へる也。

〔深見草〕牡丹の和名なり。

〔春の日の云々〕春の日は長きものなれば、丈に長きと云はむ爲の序に措ける也。しなひとは花房を云ふ。

〔わが山〕我が住む山の意なり。

〔時鳥云々〕大前のみものがたりとは陛下の御前にて人々の御物語しあへるを云ふ。

大宮の軒のしらかべてらす日の光を見てもあつき今日かな

机上月

わがまどの机の上にさしいりて蒔畫の竹をてらす月かな

茸狩

足利はきりにくもりて金山の茸とる道の晴るゝ嬉しさ

菊花第一

紅のみはたに匂ふみしるしの菊のうへにはたつ花ぞなき

寒草

冬ごもる南のまどの松かげにあざみの花のさきこぼれる

海邊山

あまはやいうしほにたてる岩山の魚見もうつる波のうへかな

羈中情

このけしき見せまつらぬがをしとおもふ處も多し旅にいでゝは

机

〔わが窓の云々〕窓より月のさし入りて、竹の蒔繪したる御机の上に影を宿せりと也。
〔足利〕下野國の地名なり。
〔紅の云々〕紅地に金色の菊花を出せる旗、即ち天皇旗に用ゐる菊の花に勝る花は無しと也結句に立つとあるは旗の縁語なり。
〔あざみ〕菊科に屬する草也。たけ三四尺に及び、葉は針狀の鋸齒を有す。山野所在に自生し、夏秋の頃紅紫色の花を開く。
〔魚見〕漁人が魚の群集し來るを見望する高所を云ふ。
〔このけしき云々〕下句は上句に續けて、惜しと思ふ處として見るべし。

「さぶらふ人」常に御前近く參候しをる人、即ち近侍の者を云ふ。
「ふでとりて云々」そのかみはとは、其の昔はの意、よく書かむとも思はざりしとは、無心にして天眞爛漫なりしを、今は巧に書かむと思ふ心出で來て、却りて書道の障害をなす事よとの餘情を含め給へる也。
「しきしまの云々」大和心を鍛へむとは鍛錬する意にて太刀の緣語なり。
「萬代」萬歳を連呼して歡迎する意を云ふ。
「ちはやぶる」神の枕詞なり。
「千萬の神」當國神社に祭られたる戰死者の靈を云ふ。

よむふみは机のうへにおきながらさぶらふ人とかたりあひつゝ

筆

ふでとりていろはならひしそのかみはよくかゝむとも思はざりしを

杖

身におひしいたでもいえてつはもの丶杖もつかぬを見るぞうれしき

撃劍

しきしまの大和心をきたへむと太刀うちかはす音のをゝしさ

凱旋

萬代といたるところに祝はれこゑそこにかへる御軍いとも

社頭水

ちはやぶる神のこゝろもうつるらむさやかにすめる御手洗の水

靖國神社にまうでゝ

神垣に涙たむけてをがむらしかへるをまちし親も妻子も

みいくさの道につくしゝまこともて猶國まもれちよろづの神

沼津にありけるころ

折向ふ山も夕日にそめられてうす紫に見えわたるかな

江の浦のなみしづかにて里人が石きりいだす山もうつれり

高崎正風が七十の賀に

言の葉の道のたかねをこえたれど齢は千代の山口にして

「折向ふ云々」夕日影さして薄紫に見え渡る山の景色を、夕日の染めしさまに擬人して詠ませ給へる也。
「言の葉の云々」歌の道にかけては既に高所に達したる卿なれど、年齢に於ては未だ千年も長らふべきなれば七十歳は麓の齢なりとの意也。

昭憲皇太后御集　卷下

〔新年松〕歌御會始の御詠也。
〔八洲〕大八洲と云ふに同じ、皇國の古稱なり。
〔ことなくて云々〕無事に新年を迎へたる祝盃を擧げざる家は無かるべしと也。
〔みはし〕御庭より殿上に昇る階段を云ふ。
〔惜しき物から〕物からは、物ながらの意、惜しき心地にすれども也。

明治四十年

新年松

年たちて松もよろこぶ聲すなり八洲の外も波たゝぬよを

新年盃

ことなくて今年となりしよろこびの盃あげぬ宿やなからむ

月前花

大宮のみはしの月はかすめども花の色しるく見ゆるよはかな

車中落花

をぐるまの右に左にちる花は惜しきものからおもしろきかな

早苗多

みるかぎり植ゑわたせどもあぜ道になば束れたる苗は殘れり

夏月映水

しげりあふ梢うつりて照る月のやどりはせばし庭のいけみづ

曝書

よきほどに風のかよひてうれしきはとうでし書をほす日なりけり

をりにふれて

大君のみいつおぼえて日かげさす劒が峯の雪ぞかゞやく

湖上雨

ひがひとるゑり見えぬまで雲おりて雨になりゆくしがの大わだ

山家垣

山里のせどの竹垣たかゝらでかしぎのわざもあらはなるかな

田家鳥

しづのめが米とぐ桶にちかづきて雀鳴くなり小山田の里

〔みるかぎり云々〕遙々と廣き田面の見渡す限り早苗を植ゑ付けたれど、苗は猶ほ餘りありて、畦道に束ねたる餘苗の殘し捨てられてありと也。
〔しげりあふ梢〕池の汀に生ひ茂る樹木の枝を云ふ。
〔とうでし書〕取り出でし書と云ふに同じ。
〔劒が峯〕富士山頂なる「けんが峯」を云ふ。
〔ひがひ〕魚の名也「はや」に同じ、近江國にて言ふ稱なり。
〔ゑり〕魞入の約言と云ふ、水中に簀を立て連ねて、魚を捕ふる具なり。
〔炊ぎの業云々〕炊事する状の往來より見ゆる也。

癈兵院

いかにして日を送るらむ國の爲身をそこなひしますらをのとも

舟

近江路のせたの長橋わたるまに下ゆく舟は遠くなりつゝ

眺望

ほの〴〵と夜はあけぬらし白雲のかゝりかゝらぬ山ぞみえゆく

述懷

月に日にものおもふことのまさるかなよのまじらひの廣くなるにも

ためしなきこの大御代にあひてこそ人と生れしかひはありけれ

農

八束穗のたりほの上にいたつきし人のちからもみゆる秋かな

讀書

月に日によむふみ多くなりゆきて日の老いたるがかこたるゝかな

をりにふれて

「いかにして云々」國の爲め身を損ひしは、戰爭の際負傷して不具の身となりしを云ふ。
「近江路の云々」瀨田の長橋は其の距離のいと長きまゝに、渡り初めし頃橋の下を通行せし船は、渡り了へむとする程には遙かに遠ざかりぬと也
「ほの〴〵と云々」かゝり掛らぬ山とは、雲の掛れる山雲の掛らぬ山の意なり。
「まじらひ」交際を云ふ。
「ためしなき」古今に類例を見ざるを云ふ。
「八束穗の垂穗」稻の穗の長く垂れしなひたるを云ふ。
「いたづきし人」耕作に辛苦せし人。

おぼしめすこと多からむ大御代のみまつりごとのしげくなるにも

沼津にありけるころ

海山は雨にくもりて庭の面の松のみ見ゆる今日のわびしさ

田子の浦にゆきしをり

道すがら心にかけし雲はれて雪さやかなる不盡をみるかな

三島にゆく道にて

きせ川の橋ゆく車とゞろけど鳴く鶯のこゑはまぎれず

興津にものしける時

よる波もかすむ海べの日あたりにさくら蝦ほすあまも見えつゝ

みやのうちにかへりける日

うるはしき君がみけしきをろがみて心やすくもなれる今日かな

明治四十一年

新年松

〔海山は云々〕海山は雨に曇りての下に「見えず」と云ふ詞あるべきを、松のみ見ゆると詠み給へる語勢に據りて言ひ略かれたるなり。

〔道すがら云々〕初句は道中絶え間無くの意、心に懸けしとは、雲の縁語にて綾なし給へる也。

〔鶯はまぎれず〕鐵橋を渡り行く汽車の響の中にも紛れなく、定かに鶯の聲聞えたりと也。

〔よる波も云々〕霞む海邊、即ち春なれば、櫻の名を負へる蝦を取出でゝ綾なし給へる也。

〔君が御氣色云々〕麗はしき龍顔を拜し奉りて、との意なり。

あらたまのとしの初日のさしいでゝ雪寒からぬみねの松原

ひばり

甲斐がねの雪もかすみて鈴菜さく沼津の里にひばりなくなり

月前落花

さやかなる光をつゝむ春の夜の月にもみえてちる櫻かな

初時鳥

さやかにもきこしめせとか玉くしげ二聲なきしはつ時鳥

待夕立

黒雲のいぬゐの方にこる見ればけふはふるべしゆふだちの雨

夏日待風

たへがたきもやのあつさにはし近くいづれど風のふかぬけふかな

秋山興

山守のをしふるまたで茸ひとつわが見いでしぞうれしかりける

秋夜長

〔あらたまの〕萬葉に麁玉、未玉、璞など書けり。麁玉は砥にて磨く物なれば、砥と云ひて其まゝ年に冠する詞とすと云ふ。
〔甲斐が根の云々〕遙かに見ゆる甲斐の連山の雪も霞みて、此の沼津の里は鈴菜咲き雲雀囀り、長閑なる春日になれりと也。
〔さやかなる云々〕上の句は朧に霞む月を形容せるにて其他には意味あるには非ず。
〔玉くしげ〕玉は美稱、櫛笥は櫛を容るゝ箱にて、蓋に冠らする枕詞とす
〔いぬゐの方〕戌と亥との間、即ち西北を云ふ。
〔山守〕御料の山を監視する職也。

とりいでゝ古物語よまむにはあきの長夜もうれしかりけり

雁聲近

夕日さす窓につばさのうつるまでわが軒ちかく雁なきわたる

初紅葉

君がへむ千年をいはふ盃の色にいでたるはつもみぢかな

暮秋鳥

秋ふかみしぐるゝ庭の菊の花うつろふかげにほゝじろのなく

故鄕井

神棚にくみてさゝげし古鄕のにはの板井もみさびゐにけり

古寺松

あれはてゝすむ人もなき山寺に松のみ千代をたもちけるかな

山家松

山がつが軒の松がえをさな子のきぬもかけほすはつ木なりけり

海邊松

〔とりいで―云々〕秋の夜は長く徒しき物なれど、古き物語書など取出して讀むには好適の時候なるが嬉しとの意なり。

〔夕日さす云々〕雁金の鳴き渡る影が夕日に照らされて窓に映るまで軒近く飛び行けりと也

〔色に出でたる〕色に出づとは、隱れなく現はれ出づるを云ふ。

〔秋深み〕みは故にの意、秋の深くなれる故に也。

〔みさびゐにけり〕みさびは水の銹也赤々と水面に浮べる水垢を云ふ。

〔はつ木〕枝ある木二本を柱とし、是に竿を亘して物干の用にする木の稱なり。

夕日さす濱のまさごにうつりては小松のたけも高くぞありける

松風入琴

おしやりて月見るほどもつまごとの緒にこそかよへ軒の松風

海邊鳥

ゆふ日さす浦の松原風たちてふねのうへにも鳥なくなり

浮標

わたのはら船のしるべのうきじるしあらぶる波もくだかざらなむ

鏡

朝ごとにむかふかゞみのいつはらぬ老の影こそやさしかりけれ

述懐

さま〴〵のものおもひせし後にこそうれしきこともある世なりけれ

商

立志

ひのもとのくにとまさむとあき人のきそふ心ぞたからなりける

〔夕日さす云々〕磯に立てる小松の斜陽を受けて、砂地に其影の長く引ける實景を詠ませ給へる也。

〔おしやりて云々〕初句は今迄彈きて居給ひし琴を彼方へと押し遣り給ひし也。拾遺集齋宮女御の歌に「琴の音に峯の松風通ふらし何れのをより調べそめけむ」とあるを本歌として詠み給へる也。

〔わたの原云々〕わたは渡る義の詞にて海を云ふ、即ち海原に同じ。うきじるしは浮標也。

〔やさしかりけれ〕やさしとは耻かしの意也。

〔さま〴〵の云々〕苦あれば樂ありとの諺を宣へるなり

國のためひとたびたてしこゝろざしひるがへさぬがたのもしきかな

社頭松

さかえゆくいがきの松にみゆるかな御國を守る神のこゝろも

寄星祝

雲の上につらなる星のさやかにもなりまさりゆく君がみよかな

寄國祝

ひのもとのくにのさかえはしげりゆく青人草のうへにみえつゝ

仁

しろしめす國ひろまれどみめぐみの露にはもるゝ民草もなし

忠

君がため心つくしてまめやかにつかふる臣のおほき御代かな

天つ神しろしめすらむまめやかに君につかふるおみのこゝろは

誠

君がため心をつくすまめ人は神もうれしとたすけますらむ

〔國の爲め云々〕一度立てし志を變ずる事の不可なるをゑませ給へる也精神一到何事か成らざらむの心ばへなり。

〔社頭松〕歌御會始の御歌也。

〔いがきの松〕神垣の松と云ふに同じ

〔雲の上に云々〕天文の學進歩し行きて星の事など明らかに說明し得る世になれる趣き也。

〔ひの本の云々〕繁り行く青人草とは人民の數多く成り增るを云ふ。

〔しろしめす云々〕初句は治め給ふ意也。國廣まるとは臺灣、朝鮮、樺太等の版圖に入れるを云ふ。

〔まめ人〕忠臣。

風のみこゝちにてまし〳〵けるころ

時ならぬ雪ときくにもたれこめてまします君をおもひやるかな

一條順子の病あつしうなりける頃寶冠章を授けられぬときゝて

ためしなき恵のつゆのかゝるとは思ひもよらずはゝそばの上に

喪にこもりける頃内の御使に權典侍良子のまゐりて運動の

ことなどあつきおほせごとをつたへけるを承りて

みつかひをたまはるだにもかしこきを大御詞を身にあまりぬる

おほやけのいらへはゞかる時なればたゞかしこさに袖ぬらしけり

沼津にありしころ

大宮のうちいかならむあたゝけき沼津の里もけさはさむきを

明治四十二年

新年雪

〔時ならぬ雪〕時節はづれに降る雪を云ふ。〔たれこめて云々〕引籠りて靜養し給ひつゝおはします陛下の上を案じ奉れるなり。〔一條順子〕照憲皇太后陛下の御母儀に坐す。〔ためしなき云々〕三句は御恵の掛りし意に、斯かる例なき御恵を蒙らむとは思ひも寄らざりきとの意に掛け給へる也。柞葉は御母の異名、御母にますを以て云ふ。〔たまはるだにも〕御使を賜はる計りにてもの意也。〔おほやけの云々〕公の御答をも憚る時、卽ち喪に籠りておはします程なれば也。

あらたまのとしのほぎごと聞食す千代田の宮に初雪ぞふる

新樹妨月

わかみどりしげりあひたる木のまより星かとみゆる月のすゞしさ

筍

あらがねの土をもたぐる竹の子の力にしるし千代のさかえは

山家早秋

山がつがせどのもろこし實になりてはや秋風のふくゆふべかな

萩盛

さかりぞと垣根にいでゝ見る萩の陰にちりたる花もありけり

月前秋風

あきのよの風ひやゝかになりにけり月もすごしにみそなはすまで

秋風入簾

玉だれのをすのひまもる風寒しみはしの松は霧にしめりて

山家秋興

〔あらたまの云々〕初句は年の枕詞なり。聞食すは聞し召す也。千代田の宮とは宮城を云ふ〔わかみどり云々〕若葉の繁り合ひていとも細小なる隙間より洩るゝ月影なれば、星かと見ゆると詠み給へるなり。〔あらがねの云々〕荒金は土中に在る物なれば、土の枕詞とす。もたぐるは持上ぐる也。しるしとは著明に知らるるとの意也。〔山がつが云々〕山賤とは樵夫を云ふ。せどは背門の義にて裏口なり。〔すごし〕簾越しの意なり。〔玉だれの〕小簾の枕詞なり。

垣のうちにしづのをとめをよびいれて椎ひろはする山かげの庭

河上霧

秋寒きみたけおろしに朝ぎりもながれてくだる木曾の山川

〔秋寒き云々〕秋寒き御嶽の高嶺より吹きおろす山颪に嶺の朝霧も吹き落されて、木曾の谷川に流れ下ると也

夜木枯

こがらしの音にねざめて御垣もる人の寒さを思ふよはかな

〔こがらしの云々〕御垣もる人とは衞士を云ふ。

池鴨

こがらしに吹き送られて来にけらし木葉と浮ぶ池のあし鴨

〔こがらしに云々〕昨日は斯くばかり多くは集ひて居らざりしを、我が庭の池水に木の葉の散れる如く群れ集まれる芦鴨は、今日の木枯の風に吹き送られて來れるならむと也、

雨後山

雲間より甲斐の遠山みえそめて沼津の里の雨ぞはれゆく

〔雲間より云々〕雲のちぎれ〳〵になりし絶間より遂に甲州の遠山も見えそめて、沼津の里に降る雨は晴れ行くと也。

古寺

なにがしの佛の日かもふるでらの庭せばきまで人のつどへる

〔某の〕如何なる人のと云ふ意也。

旅宿夢

夜はいまだあけむともせず旅やかた子のなく聲に夢はさむれど

山家雲

〔軒近き云々〕我が住む山の庵の軒端に間近く立てる松さへ、雨雲の中に隠りて、四邊陰暗なる今日の侘しさよと也。
〔いはがき〕山陰の岩の斷崖を其の儘庭の垣に取りなせるを云ふ。
〔つくらぬ庭〕人工を加へぬ自然の庭を云ふ。
〔かなし子〕いとし子と云ふに同じ。最愛する子の意なり。
〔おのづから云々〕齡に富める人とは老人を云ふ。田づらの里とは小山田の里など云ふに同じく、凡て田家を云ふ也。
〔うれしみ〕嬉しさに也。嬉しく思ひての意なり。

軒ちかきわが山松も雨雲のうちになりぬる今日のわびしさ

山家水

山かげの庭のいはがきおもしろしところ〴〵に水のつたひて

山家庭

やまざとのつくらぬ庭ぞおもしろき苔むす岩に小松ねざして

田家雨

かやぶきをつくろふみればかなし子がふすまのうへに雨のもるらむ

田家翁

おのづからよはひにとめる人多したづらのさとのこゝろやすさに

庭上苔

大かたは苔にうもれて松かげのいはほの色もわかぬ庭かな

牛

小屋ちかくなるをうれしみ里の子にひかれゆく〳〵牛のなくらむ

湖上舟

玉くしげはこねのうみをゆく船にうつれるふじの影うごくなり

文勲

ことしげくなりゆく御代のまつりごとたすくる臣のいさをたかしも

衛生

かりそめのことは思はでくらすこそ世にながらへむ藥なるらめ

粒々皆辛苦

苗うゑて八束たりほをみるまでにいたづく人を思ひこそやれ

をりにふれて

人ごゝろしづけからぬやものごとに進みゆく世のならひなるらむ

くれぬまに沼津の里につきにけりしばし見てこむうみのけしきを

明治四十三年

新年雪

豐年のみつぎのゆきぞつもりけるはれのおもいをきこしめす日に

〔玉くしげ云々〕初句の玉は美稱、くしげは櫛を入るゝ箱也。故に箱の枕詞とす。箱根の海とは蘆の湖を云ふ

〔ことしげく云々〕世の開け進み行くにつれて昔無かりし種々の事端の繁くなり行きて、國家を統治する大御業の容易ならざるを補佐し奉る臣の勳こそ高く貴けれとの意也。

〔かりそめの云々〕小事に拘泥せざるを以て長生の靈藥とすとの意也。

〔いたづく人〕辛苦する人の意なり。

〔新年雪〕歌御會始の御歌也。

〔豐年の云々〕雪は豐年の貢と云ふに依り給へる詞也。

池上藤

いけのおもに影こそうつれ船小屋の上まできかゝるふぢなみの花

暮春里

花の時はやすぎぬらしほし蕨うる家見ゆる山はなのさと

夜橘

なつかしく軒のたちばなかをるなり星ひとつだに見えぬ雨夜に

梅雨近

黒髪のさみだれちかみ朝窓をあけてもくらし空のくもりて

夏月涼

わが庭のすゞしき月にふかしけりそゝのかされて閨に入るまで

野撫子

いとほしくおもはるゝかな刈りてほす夏野の草にまじる撫子

朝蟬

實になれる桃の林の葉がくれにあした涼しく蟬のなくなり

〔船小屋〕船を入れ置く家、艇庫。

〔はやすぎぬらし〕信に最早過ぎ去つたさうな、と云ふ程の意なり。

〔山はなの里〕山の裾の出張りたる村里の稱。

〔なつかしく云々〕古今集に「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」などありて古來花橘の香は懷かしき物に云ひ慣はせるを以て斯く詠み給へる也。

〔黒髪の云々〕黒髪は亂れやすき物なれば、其縁にて二句に掛けたる也。

〔そゝのかされて〕此處にては、うながさるゝ意に用ゐ給へり。

〔いとほし〕可憐の意なり。

茸狩

なが〻らぬ秋の日かげを惜むかなくさびらとりて遊ぶ山路に

山中瀧

山かげの岩根によりて見つるかな名もなき瀧としづはいへども

鄰

しろしめす國のうちとなりにけり鄰とおもひしとりの林も

旅宿夢

大前にさぶらふとみるゆめいまは旅のやどゝも思はざりけり

犬

乘る人は見しらずながら大路ゆく車にそひてはしる犬の子

いつくしむ御心しりて犬の子も大前さらず遊びたはるゝ

歌

世にひろくしげるも嬉し人みなのまことをたねのやまと言の葉

玉

〔なが〻らぬ〕秋の日は短かくして速く暮るゝを云ふ。

〔くさびら〕茸片の義、菌を云ふ。

〔しろしめす云々〕とりの林とは、鷄林、即ち韓國を云ふ。今まで隣の國なりし朝鮮も、天皇の統治し給ふ我が日本の版圖に入りたりと也。

〔大前に云々〕天皇の御前に伺候すと見し夢の間は、斯く御前を離れて旅の宿にある身とも覺えざりきと也。

〔見知らず作ら〕車上の人は、犬に取りては見知らぬ人なれどもの意也。

〔まことを種〕和歌は飾らざる心を詠み出づるものなれば云ふ。

〔大前のみたな〕御座所の謂なり。
〔手染なるらむ〕手染とは手づから染むるを云ふ。
〔たくみなるわざ〕工業を言ふ。
〔神ならぬ云々〕神代には、天磐船などに打ち載りて神達の天翔り給ひし事あるを云ふ。
〔年たらで云々〕未だ學齡に達せずして小學校にも入らざる程の幼兒も君が代の國歌を唱へて御代を祝ぎ奉ると也。
〔可美眞手命〕饒速日命の子也。長髓彦を殺して神武天皇に歸し、衞來殿内に近侍して天皇を守護す、實に物部氏の遠祖たり。
〔から草の亂れ〕韓國の内亂を云ふ。

大前のみたなにすゑてみそなはす玉にはちりもかゝらざりけり

絲

竹垣にぬれたるいとをほしてけりしづのをとめが手染なるらむ

飛行機

たくみなるわざの開けて神ならぬ人も天とぶ世となりにけり

海上舟

うしぶせの山かげちかくつどふなり沼津の海のあまのつり舟

子

年たらでまなびのそのに入らぬ子も千代にやちよとうたふ御代かな

可美眞手命

鉾とりてよるも御垣にたちしこそ近きまもりのはじめなりけれ

思往事

からくさのみだれは夢となりにけりすめらみ國の風になびきて

寄山祝

天つ日の光をうけて年々にしげりそふらむ新高の山

をりにふれて

日のもとのくにひろごるのみのりぶみ神も嬉しとうけたまふらむ

おほけなき君が惠のかしこさは忘るゝまなし老いにける身も

うつしゑのうへにみるだにいたましや水にひたれる川づらの里

沼津にて

みそのふは寒さむけれどすくよかに君ましますときくぞ嬉しき

たまもの、その品々に大君のふかきみこゝろこもるかしこさ

明治四十四年

禁庭花

みそのふの花はさけどもしづかにはみそなはす日ぞすくなかりける

遲日

大前にまゐりおくれぬわたどのゝ窓よりみゆる花をめでつゝ

〔日の本の云々〕國廣ごるの御のりぶみとは、日韓併合の折の詔勅を云ふ

〔おほけなき〕負ふ氣無しの義にて、身に負ひきれぬ意の詞なり。此の御歌にては、身に餘る君が惠の意也。

〔うつしゑの云々〕水害を蒙れる川づらの里の惨狀は、寫眞にて見るだに痛ましと也。

〔すくよか〕すこやかに同じ。壯健。

〔みそのふの云々〕御苑の花盛をも靜かに御覽じ給ふ御暇も尠く、御政務に忙はしくましますす天皇の御上を憶み給へる也。

〔わたどの〕細殿に同じ、廊下。

きこしめすこと多ければ春の日もなほ短しとおぼしめすらむ

苗代

苗代の水田に花ぞ浮びたる蒔きしゆだねは底に沈みて

田家暮春

小山田の里のかきねの春深みしろくなりぬるやまぶきの花

夏川

ふきわたる岸の柳の風うけて里の小川に瓜あらふ見ゆ

朝顔

あさがほのはな見むためにうれしきは窓の日影の曇るなりけり

蟲

秋草の花のまがきの蟲の聲思ありとはきこえざりけり

鈴蟲

やちくさのはなのまがきの夕露に籠より放ちしすゞむしのなく

籬外月

「きこしめす云々」大御政事を御親裁したまふ事務の繁多にましますに依りて、此の春の長き日も尚ほ短くや思し給ふらむとの意なり。

「花ぞ浮びたる」櫻の花の散りて浮べるを云ふ。

「ゆだね」苗代に播く稲種を云ふ、

「白くなりぬる」山吹の花は色褪すれば白く成り行くを云ふ、斯かる微細なる所にまで御目を止め給ひたる、なみ〳〵の御心ならぬを思ふべし、

「窓の日影の云々」日影の輝く時は朝顔の花は忽ち萎へ移ろふ故に、曇るを嬉しと詠ませ給へる也。

老が身は風をいとひて玉だれのすごしにのみも月をみるかな

をりにふれて

ふるごとを口ずさみつゝ軒近き柱によりて月をみるかな

氷

このあした池の緋鯉もかくろひて水あるかぎりこほりはてたる

寒月照梅花

みかきもる人をぞおもふ風さゆる霜夜の月に梅の花みて

野水

魚すくふ子らにことばをかけつゝも野川のはしをわたる旅人

堤

ふりつゞく雨はれそめて里川のつゝみつくろふしつぞむれたる

井

大君のおものゝ爲のほり井には清き水のみわきあがらなむ

池邊松

「玉だれの」簾の枕詞なり。
「ふるごと」古言の義、古への人々の作れる詩歌の類を云ふ。
「このあした」此の朝け、と云ふに同じ。かくろふは隱るの延語なり。
「寒月照梅花」歌御會始の御歌也。
「御垣もる人」衞士即ち守衞を云ふ。
「魚すくふ云々」野川にて魚を漁りをる子供等に、何の魚が捕れるかね、など話かけて旅人の過ぎ行くさまの寫しの御歌也。
「堤つくろふ」霖雨の爲めに潰崩せし堤を修繕する趣きにて此意は上の句に籠められたり。

いろくづもよりて遊べり松のかげさやかにうつる池のみぎはに

曉鳥

紅葉山からすなきたつ聲のうちにわが窓いとも白みけるかな

行路犬

をぐるまのまへをよこぎる犬の子は危きことをしらずやあるらむ

櫛

くしのはに餘りし昔しのぶかなすくなくなれる髪をときつゝ

夕眺望

うちわたす市のちまたのともし火のかげにぎはひてくるゝ空かな

海上眺望

朝づくひきらめきわたる波の上に船こぐ人のかげもうつれり

くれ竹の葉山の海は風なぎてたて石ちかく船のよりくる

寄水祝

わが君のうぶゆとなりし祐の井の水は千代までかれじとぞ思ふ

〔紅葉山〕大裡の御庭に在る山の稱なり。

〔くしの歯に云々〕櫛の歯に餘るとは頭髪の長く多くして、櫛を以て解くにも餘す意也。年老い給ひて、御髪の少くなれるを櫛けづらせ給ふにつけつゝ、若くおはしゝ程、房々と多く生ひ給ひし昔を偲ばせ給へるなり。

〔うちわたす〕うち眺め見渡す意に云ふ歌詞なり。

〔あさづく日〕朝付日の義、夕づく日に對す。朝日かげと云ふに同じけれど、下句なる人のかげと重複するを避けて此の語を取り給へる也。

〔うぶゆ〕産湯也。

〔すめらみくに〕統ら御國の義、天皇の統べ治め給ふ國の意にて我が皇國を云ふ。
〔みいとまの云々〕明治四十四年の御歌の中に「御園生の花は吹けども静かには見そなはす日ぞ尠かりける」きこし召す事多ければ春の日も尙ほ短しと思し召すらむ、など詠ませ給へる趣きに同じ、御政務に暇なくおはしけむ御有様、拜し奉るだにいと惶し。
〔水ひかぬ庭〕水引かぬ庭の意也。即ち遣水も池も無き庭を云ふ。
〔木枯の云々〕凩の吹き荒ぶ冬になりぬれど尙色の褪せぬ紅葉もありと也

寄國祝

天つ日のてらすが如く限なきはすめらみくにの光なりけり

明治四十五年

惜落花

みいとまのあらむ日またで櫻花をしくも風にちりみだれつゝ

夕蛙

水ひかぬ庭にもすむか夕月夜かはづのこゑのちかくきこゆる

大正二年

波のうへの月

すゞみせし軒にもかげのさしぬらむ沼津の海のなみの上の月

殘紅葉

こがらしのふきしく庭のもみぢにもまだ色あせぬ枝はありけり

麻

おるはたの緑にせむとや畑道に里のをとめが麻をほすみゆ

山館松

世に遠きわが山松も大君の千代よばふ聲はかはらざりけり

あしびきの山下庵の松みてもねがふは君が千年なりけり

寄天祝

ひとむらの雲もかゝらぬ空を見てわが君が代をいはふ今日かな

大正三年

社頭杉

あらたまの今年を千代のはじめにていやさかゆらむ伊勢の神杉

〔世に遠き〕人里に遠く離れたるを云ふ。
〔わが山松〕我が住む山の庵の松の意なり。
〔千代よばふ〕千代と呼ぶの延言なり。
〔あしびきの〕山の枕詞なり。
〔ひとむらの云々〕雲も無く晴れ渡れる空を、塵も昇らぬ大御代によそへ給へる也。
〔社頭杉〕歌御會始の御詠なり。
〔あらたまの〕璞玉の義にて砥に掛けて磨く縁より、其まゝ年に冠する枕詞とす。

〔茨城のあがた〕あがたは縣なり、即ち茨城縣を云ふ。
〔みづからも〕昭憲皇太后陛下御自身を申す。
〔かねて仰言〕以前より其の仰せ言ありしを云ふ。
〔いかで〕俗に、どうしての意なり。
〔御車〕明治天皇の召させ給へる御馬車なり。
〔東宮〕大正天皇の未だ皇太子におはしましゝ御時を云ふ。
〔大后宮〕英照皇太后 孝明帝皇后を申す。
〔いたづきて〕苦勞しての意也。
〔おほしたつ〕生ふし立つの義也。耕作せし事を云ふ。

明治二十三年十月二十六日といふ日茨城のあがたへみゆきせさせたまふこは近衛兵の演習をしたしく御覽せさせ給はむとてなりけりみづからも從ひ奉るべくかねておほせごとありしかばいとうれしくていでたつこの大御代ならずばいかで女の身にてかゝることを見むと思ふにおのづから心もいさみたちてうちゑまれぬ御車上野の停車場にとゞまるやがて樓の上にそのぼらせたまふ東宮にも御送りにとくより參りたまへり大后宮よりも典侍幸子御使にてありてあつきおほせ言ども奏すみづからもかしこき御言葉うけたまはるかくておとゞをはじめ送り奉る人々多かるをもらし給はず御前近くめしてみことばありほどなく侍從長參りて何ごともとゝのひたりと奏すやがて劍璽をさきだてゝ汽車に召させ給ふみづからもつらなれる車にのる笛の音きこゆるまもなく烟をあとにして御車はとくすゝみぬ道のほと大かたは田畑にてきのみかはれることもなしされどいづこも稻のみのりよきを見るは民の爲うれしきことぞかし埼玉のあがたはさいつころの洪水に利根川の水あふれきとて民のいたづきておほしたてし畑つものなども皆あれはてたり河の如き處もありてみゆきをゝがむ人々もあるは水に入りあるは舟を浮べなどすいかにし

て一日〻〻を送りつらむと思ふに胸いたうなりもてゆくそこを過ぎぬれば稻葉の浪田のもにみちあふれたるけしきに心もかはりぬ處々のさまめづらしなどいひつゞくる間にはやう水戸につかせたまふ停車場より御馬車にて行在所にいらせたまふこは舊城内にある師範學校をそれと定めたまへるなりとばかりありて例のみたいめのことありはてさせたまひし後もいさゝか疲れさせたまふけしきなくてあすの演習の方略書などとうでさせて御覽ずかく御心にかけさせ給ふを見奉るもかしこしこの夜も常のごとく十一時におほとのごもりぬ二十七日けふもてけよし八時よりいでたゝせたまふ汽車にて宍戸といふ處までわたらせ給ひそれより金華山と名付けたる御馬にめさせたまふ有栖川宮北白川宮をはじめおとゞその外あまたの人々近衞の將校なども馬にて從ひ奉りぬみづからは馬車にてゆく岩間村にいたらせ給ふころ遠近に烟たちのぼりつゝの音こゝかしこに聞えて赤白の旗風にうちなびき馬のいなゝくこゑもところどころにきこえたりたゝかひたけなはならむとおもふころはつゝの音もたえまなきに御心いさませたまひて折々はことかたに御馬すゝめさせつゝねもころに御覽じたまふ折しも秋の末つかたなれど日かげ

〔胸いたう〕胸痛くの意便なり。
〔はやう水戸に〕はやうは、早くの音便なり。
〔とばかりありて〕一寸ばかりありて也、暫時の後と云ふ程の意也。
〔例のみたいめ〕例の御對面の義、即ち謁見を賜はる御儀を云ふ。
〔とうでさせ〕取出ださせの義也。
〔おほとのごもる〕大殿籠るの義にて御寢につかせ給ふを云ふ。
〔てけよし〕天氣宜し也。
〔金華山〕明治天皇の御乘馬なり。
〔ことかた〕異なれる方の義なり。

「みけしき」御有様を云ふ。御様子。
「御野立」野の中に假に設けたるテントの御座所。
「こたび」此の度の約言なり。
「例の御馬」御愛馬の金華山を云ふ。
「さらばとて、おりたつ」然らば其の小銃を連發する狀大砲を打ち發つ有樣を見むとて御馬車より降り給ひし趣き也。
「事あらむ日」國家に大事の出來せる時、卽ち戰爭の折を云ふ。
「晝のおもの」御晝食なり。
「きこしめす」召し上り給ふ。

は猶あつくおぼゆるに更にいとはせ給ふみけしきもなきをこの演習にいでたる兵どもはさらなり文武のつかさ人なべてかしこみ奉るなるべしほどなく終りぬと奏するより御野立にてしばしいこはせ給ひさて汽車にめして行在所へかへらせたまふ二十八日も昨日の時刻よりいでたまひてこたびは成井村にて御覧あり筑波山近く見えてけしきいとよし大かたはきのふのごとしされど今日は敵のちかづきたりと見えて大砲小銃のおとはげしく廣き原にもひゞきわたりぬ上には例の御馬にて道も定めさせたまはず森の中松の林などにわけいりて見めぐらせたまふに木の枝の御あぶみにかゝるもいとかしこしみづからも車よりいでゝ小銃の連發又は大砲のうちかたなども見すそと階級へる士官のいふにさらばとておりたつ黒けぶりたちのぼる中に火氣見えてはげしき音のきこえたるいといさまし事あらむ日は親妻子をもかへりみず君のため命をすてゝたゞかひなむとおもふにいとたのもしくはあれど又いたはしくて胸もふたがるこゝちぞする今日の演習も果てぬれば御野立にて晝のおものきこしめすそれより御馬上にて觀兵式分列式御覧ずみづからは例の馬車にて見る終りて審判あり小松宮はじめ將校うちつどひて御前にすゝむ兩日

のいたづきをねぎらひ給ふみことばありがたじけなみ奉りて敬禮するさま見るもめでたし小松宮には兩日の演習のよしあしを高らかにことわりたまひぬしばし御休ありて汽車にて行在所にかへらせたまふ御道よりおぼしたゝせて縣廳へ臨幸ならせたまふけふはあやにくに御風のこゝちにてれいならず見えさせたまふをもてかくしてかくつとめさせたまふいとかしこしみづからはおほせごとによりて常磐公園なる好文亭といふところにゆくいたりつけば德川昭武その外人々出迎へたり梅あまた植ゑたる林ありこは事ある時の爲に實をたくはへおくとてなりとぞさまざまの木立ありて庭のつくりざまいとおもしろし老松のかげに石の碁盤將棊盤すゑおきたる珍らかにてしばしたちよりて見る高きところなれば家のうちより仙波湖見わたさる十五夜の月のさしのぼるけしきいとよし色づく小田も見おろされたりこは中納言齊昭の世をのがれて後心やすくすまひして民のなりはひを見むために造りしといふさらあるいくおもはる家の內廣らかにて杉戶には詩の韻字のこらずかゝせて詩人を招く時の爲とし又五十音てにをはをかゝせて歌人のためとしたる心しらひのあつきを思ふにいとゆかしまた板敷ありこゝは心ある人々にをり〳〵

〔いたつきを云々〕慰勞の御詔詞を云ふ。

〔ことわり給ひて〕兩軍の戰術其他將卒の動作等を御講評あそばされし也。

〔もてかくして〕おし隱し給ひて也。

〔色づく小田〕十月末つ方なれば、田面の稻の、黄金の波を漂はせをるを云ふ。

〔中納言齊昭〕德川齊昭、字は子信、景山また潜龍閣と號す。天資英邁にして尊王の志に篤く、水戶に弘道館を建てゝ文武の道に盡せり。萬延元年八月薨ず、年六十一、烈公と諡す。文久壬戌、朝廷其の忠節を追賞して從二位大納言を贈り、尋で贈從一位に叙せらる。

〔ここにをは〕をこと點の四隅の假字より出でし稱、詞づかひの法を云ふ。
〔みきなど與へし〕みきは酒を云ふ。
〔上のおほせ〕天皇の御仰言なり。
〔上には云々〕天皇には午後六時頃御歸館あそばされしを、皇后の宮には其れより遲くなり給へる也。
〔つばらかにと思ゝど〕詳細に御物語り聞えむと思へどの意也。
〔とみに〕急にの意。此處にては少し許りの時間にてはの意なり。
〔調度〕手まはりの道具。手道具。
〔もの騷がし〕取込みをるを云ふ。

みきなどあたへし處なりとぞたちかへる道のほど弘道館の碑を見る八角の堂のうちに寒水石の大きやかなる立てり世にしられたる記を自筆のまゝほりいれたるなりけり一句々々讀みもてゆくにその人の御國を思ふ心ざししたはれて涙ぐまれぬ戸びらにはこまやかなるほり物ありかもゐとおぼしきところには易の八卦をほりつけたり昔は此處に學舍あまたありきといふげにめづらしきところをみしかな是も上のおほせごとなくばといとうれしくて時の過ぐるも覺えず人々夜更け侍りぬべしといふにおどろかされていそぎかへる月夜なれどかゝり火たき提灯などあまたてらして晝のごとし御まへに參る上には六時ばかりに歸りまし／＼きとときゝておくれ侍りぬなど奏するにうちわらはせたまふ好文亭のことなどつばらかにとおもへどとみにいひつくすべうもあらねばかたはしのみ奏しするさへはしきことども多かれど筆もすゝまずことにあす東京へかへりまさむとて御調度どもとり納むるにものさわがしければかきさしてやみぬ

世の中秋になりぬれど日盛のあつさはいまだ堪へがたうて何事もおこたりがちな

〔さと打ちふきし〕颯と音して吹き來れる意。〔すゞし〕薄く輕き生絹の衣。〔なみ立てる〕竝び立てる也。〔心も秋にうつる〕秋ぞと覺ゆる心地になりぬとの意也〔おまし所〕御座所の義、起居し給ふ場所を云ふ。〔わたどの〕渡殿は細殿に同し、廻廊を云ふ。〔なりいでゝ〕實を結びをる意也。〔やうかはりて〕樣子の變りをりての意なり。〔女房〕集中に宮仕する女の稱。〔をぐらう〕小暗くの音便。

るを日かげやう〳〵かたぶきしかば南おもての端近う出づるにさとうちふきし松風に垣根の萩の露ほろほろとちりてすゞしの袖のうらがへるも涼し軒のつまよりくれわたりてなみたてる常磐木の間やう〳〵あかくなりゆけばいまや〳〵とまちわたるに月影すこしほのめきそめぬとばかり見出だすうちにさしのぼりたる光さやかにて蟲の音もきこえそむるにおのづから心も秋にうつりぬ

あつき日もやう〳〵暮れなむとするころふと思ひたちて大后宮のわたらせたまふをりのおまし處とさだめおかれたる殿のわたどのよりおりて芝生の道をゆくに板戸のあきたるところありいで、みればこゝぞ御園の畑にてこき紫の色したる茄子青やかなる瓜などさま〴〵になりいでゝ宮のうちとはおもはれぬに藁屋のひとつだに見えぬぞやうかはりてをかしきや女房の瓜をとるとてわれも〳〵と手鋏もちてたちよるを見つゝいそしからぬ賤のめかなとうちわらふほどにはやう道もをぐらうなりぬればおまへに奉らむとていそぎかへりぬ

「とばり深う」帳深く也。帳は戸張の義、帷幔なり。「よべ」昨日の宵。「二重やぐら」御濠の邊に建てられたる物見櫓なり。「ゐて行く」率て行くの義、引連れてと云ふに同じ。「めなれし處」見馴れし處と云ふに同じ。「たちもとほる」萬葉集に、島山をい行き廻(モトホ)る、などあり、即ち立ち廻る意より、轉じては徘徊する意にも云ふ、古言也。「はやおものの云々」早くも御食事を參らする頃なりきとの意なり。

日ごろふりつゞきたる雨にとばり深うこもりたりしを夜のあけゆくころよりやう〳〵小雨になりぬれどよべよりの風はまだふきやまず十時ばかり日影ほのめきそめぬれど猶をり〳〵は雲のうちにかくれしをまひるばかりにぞ名殘なく晴渡りて緑の空にはなりぬる例の二重やぐらへゆきて見よとおほせごとありければ夕つかたより女房たちゐて行くかねてゆきなれたる道よりと思ひしを雨水のいたくたまりたれば築山のうしろの方よりのぼらむとするにこゝも御池の水あふれいでたるに石ふみこえつゝからうしてゆきつきぬめなれし處なれど常よりも多く額をかけさせたまひたればねもころに見めぐりつゝ今日はことに風も涼しければかへりかねてたちもとほるほどはや日も暮れそめて大路のともし火多く見えわたりぬげに大御代のにぎはひは夜もさやかに見ゆるよとおもふにいとうれしくて

　家ごとのともしび見つゝかへるさの道はくらさもしられざりけり

などくちすさびつゝあまりにおくれむもいかゞあらむとていそぎ歸りぬればはやおものまゐるころになむありける

夕日のかげもなごりなく暮れはてたる空に星の光はかずしらず見えわたれど芝生の露は見ゆべうもあらねば月おそしとのたまはするに例の人々とみにみはしをくだりぬほどもなくあまたの燈籠に火ともしわたしたる御苑のけしき見そなはして興せさせたまへるほどやう〳〵梢たかくさしのぼりたる月の光にあたら心しらひの灯もきえたるごとく見る人もなくなりてたゞ月夜よしとのみいひあひたりうへにもはしちかうおましうつさせ給ひて何くれとみものがたりせさせたまふ御ついでに小萩がもとの露やいかにとおほせごとあるにをり〳〵はきらめきても見え侍りなど御いらへまをしつるはた花やかなるもあはれなるもさまざまに蟲のなきいでたるふせごにこめてきくよりもいみじうおもしろしとぞきこしめすみづからはおばしまのもとにいざりいでゝ聞きわく人ならましかばいづれをかえらばましかくてむなしくきかむことよ蟲のおもはむこともうたてしやなどいふほど菅莚うちしめりて月のかげもふけわたるに蟲のねのよひよりもしげくきこえければ

みめぐみの露おきあまる秋の夜を何にわびてかなきあかすらむ

〔例の人々〕常に御前に近侍する人々即ち典侍、掌侍等を云ふ。〔こゝろしらひ〕心知るの延言、心用ゐると云ふに同じ。〔はし近う云々〕御廊下近くまで玉座を進ませ給へる趣き也。〔小萩が下の云々〕源氏物語桐壺の巻に「宮城野のつゆ吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」とあり。〔ふせご〕伏せ籠の意、蟲籠なり。〔おばしま〕欄干を云ふ。〔聞きわく人云々〕鳴く蟲の音に依りて、彼は松蟲の聲是は鈴蟲の聲と聞き分け得らるゝ人ならば、其聲の善惡なども解るならむとの意也。

とひとりごちつゝ、夜風もさむくおぼえければやう〳〵おくふかくすべり入りぬ

野分のあした

夜なかばかりにかありけむ風あはたゞしう吹きたちければいもねられぬまゝに前栽の花うしろめたしと思ひつゞくるほどかねの聲のきこゆるにやう〳〵あけぬなりとつまどすこしおしあけて見れば風もおほかたやみて雲は猶たちまよふ空に月の殘れるもさすがにをかしくてとばかり見いだしたるにまだ時早し御格子もいまだまゐらずと女房どものいふにさはとてふたゝび閨には入りしをおもひの外によくねいりにけむ日もたかうなりさぶらひぬとつぐる聲にうちおどろきておきいでつゝ垣根がもとを見れば萩も薄もみだれあひておのづからなる野べのけしきに似たるなか〳〵におもしろければ朝清めもわざとおこたらせてみけるに栗の小枝の落散りたるなど野分のなごりいとしるし宮のうちだにかゝるを貧しき民のすまひはいかならむと思ひやられて袖もうちしめるこゝちするほど若き人々のゑみたる栗の枝ながら籠に入れたるをもて來ぬ時のまに多くも拾ひてけりと賞しつゝかつはをさな心にかへりにけるよといふにこはなぞたゞ御覽せさせむばかりにこそ

〔蟲の思はむ事〕聞き分くる耳を持たぬ甲斐なさよと蟲の思ふらむ事もうたてしとの意也。
〔何にわびてか〕何事を侘しく思ひてかの意也。
〔前栽〕庭前の植ゑ込みを云ふ。
〔うしろめたし〕心配なりの意。
〔とばかり見出す〕暫時の間見つゝあるを云ふ。
〔さはとて〕さらばとて也。
〔なかなか〕却りて
〔ゑみたる栗〕栗のいがの割れ裂けたるを云ふ。
〔こはなぞ〕是は何ぞ然あらむその義也。俗に、いや〳〵左様の譯では御座りませぬ、と云ふ程の意也。

とことゝわるをうちつどふ人々あまりにことさらめきたりと笑ふほど時計を見ればはやう十時ばかりにぞなりぬる益なきことに興じけりとみづから心をいさめつゝ例のわたどのづたひにまうのぼりぬ

秋情

荻の上風はぎの下露とかやげにたゝならぬは秋のゆふべにぞありける年ごろかり宮にところせくまし〳〵しほどはまことにさることゝぞおぼえてうき秋かこちたりしをり〳〵もありしをこの大宮にうつろひましゝよりはよろづとゝのひておのづから心もやすらかなればいとまある時は御そのにおりたちつゝ萩をりかざし椎の實拾ひなどさま〴〵に興じて日のみじかきをなげくばかりにぞなりぬるされど白露のおきあまりて風にうちみだれ蟲のこゑのこゝかしこにきこゆるゆふつかたなどは物をおもはぬ身にもあはれおぼゆるは秋のならひにこそあめれ

菊始開

秋の半もやう〳〵すぎゆくまゝに萩もすゝきもうらがれ渡りて何となうさう〴〵しくなりもてゆくを園守の心づくしにここかしこよりえりあつめてうゑわたした

〔自ら心をいさめ〕我と我が心に注意を與へこの意也。
〔わたどの〕廻廊を云ふ。
〔まうのぼりぬ〕參り上りぬの義、御前へ參上せりとの意なり。
〔荻の上風云々〕荻の上風の音を聞き荻の下露の亂るゝ樣を見れば、哀れを催すとか古人も言へりとの意也。
〔ところせく〕場所狹まく也。
〔うつろひ〕移るの延語、移轉なり。
〔あめれ〕有るめれの約、有ると見えるとの意也。
〔さうざうしく〕淋々しくの義にて寂寥に成り行く意なり、騒々しきにはあらず。
〔心づくし〕思ひを盡すこと、種々に心を用ゐるを云ふ。

る菊のさまいとをかしをすあげさせて見そなはすに白き赤きけぢめは見ゆれどさきいでむほどはまだいつともわきがたかりけりされど多かる中にはつぼみのふくらかなるもまじれゝばおもひの外にはやう匂ひそめむこともやとおほせらるゝに若き女房たちの頭かたぶけつゝ明日といひまたの日といひあらそふもをかし日もはやくれちかうなりてみはしのもとの松風ふきいでぬれば秋も身にしみてとのたまはするほど心きゝたる女房のすだれをさら〳〵とおろしつればやがておくふかくいらせたまふもののあやめもわかぬばかりくらうなりぬればいそぎおほとなぶらもてまゐりぬ夜の長き頃なればうへにはふみどもとりいでさせたまひてむかし今のことゞもおぼしあはせられてみこゝろしづかにましますほどやう〳〵十一時ばかりにもなりぬるに御文机のうへのものどもとりあつめさせてやがて大とのごもりにたれば女房どもゝ皆すべりいでぬふけゆくかねもしらぬまに夜はほの〴〵とあけわたりて御格子まゐればおどろきて起きいでぬ朝ぎよめのみやつこもまかでぬとて例の女房さうじ少しあけつれば風なつかしう打薫るによく見れば二つ三つばかりさきいでたるなりけり昨日いひしにたがはずとわれはがほにいひほこる

〔をす〕小簾なり。
〔けぢめ〕區別。
〔みはし〕御庭より殿上に昇る階段。
〔秋も身にしみて〕此處にては、少し寒さを感ずる迄になれり、と仰せ給へる心ばへ也。
〔ものゝあやめ〕物の綾目の義、物品の色合。
〔おほとなぶら〕大殿油の義にて、燈火を云ふ。
〔おぼし合す〕考へ合す意なり。
〔大とのごもり〕大殿籠の義にて寢殿に籠らせ給ふ意なり、御寢につかせ給ふを云ふ。
〔すべり出でぬ〕退出するを滑ると云ふ。禁中にて用ゐる詞なり。

もをかし上きこしめしつけてまことにやとのたまはするにはやうみそなはせとそゝのかし奉れば朝風猶寒けれどしばしはし近ういでさせたまひぬいろわきてさきたる菊のみゆるにぞことの外に興じたまひて天長節には必盛ならむとおほせらるゝそのみことばにつけて千代田の宮の秋の盛とみづからいひいでつればうちゑませ給ふもいとかしこし

うちなびくみはたのきくも四の海のはてまでかをる君が御代かな

など思ひつゞけらる、もげに事なき秋のすさびなりけり

觀菊宴

かねてより定めおかれし菊の宴せさせ給ふべき今日となりしをあやにくによべよりの雨猶やまねばいかにとのみ思ひわたることに赤坂の宮までみゆきまし／＼ての御うたげなれば空のみうちまもられてしづごゝろなしされどとりつくろひなどするに十二時ごろになれば風すこしふきいでゝやう／＼雲もなびきそめて日かげさやかにさしわたればいよゝおぼしたゝせたまふ宮のうちおのづからにぎはしうなりもてゆくほどみとものの人々もうちつどひぬ御車もひきいれたりとそうすればや

〔御格子まゐる〕雨戸を開け放つを云ふ。
〔例の女房〕いつもの女房の意、禁中に宮仕する女也。
〔われはがほ〕我は顔の義、誇り顔の意なり。
〔そゝのかし奉る〕勧めうながし奉るを云ふ。
〔みはたの菊〕旗と畑を言ひ懸けたる也。
〔事なき秋〕天下太平の秋の意也。
〔御うたげ〕御宴を云ふ。
〔しづこゝろなし〕靜心無しの義、靜けき心無き意也。
〔取繕ひなどす〕行啓の御支度などせさせ給ふを云ふ。
〔おぼしたゝせ〕思し立たすの義、出御に相成るを云ふ

がて御門をいでたゝせてかの宮につきたまふさて庭づたひに御車きしらせてしばし聚錦亭にていこはせたまひし後出御ましまして菊の花を御覽じつゝあゆませ給ふにかねて召されたる内外の人々御道のせばきまで右に左にたちならびてあふぎ奉る去年はこのところにてわが國のおとゞたち外國の公使などにおほせごとありけるを今日は俄に晴れぬれば又ふりいでむこともやと人々のうへをおぼしやりてたゞちに立食所へわたらせ給ふしばらくして參れるかぎり御前近く召出でつゝねもころなる御詞をたまひて御いしにつかせたまふみづからもおほむかたはらにつきぬやがておものみきなど奉る人々も酒饌たまはりて盃をかさぬるまゝにさきにみめぐりし菊の品さだめしつゝめでかはしわらひ興ずる聲のかりそのうちにとよみ渡るもいとにぎはゝしかゝるをり／＼にぞ御うつくしみの波八洲の外まで及べることもしらるゝに何となう打笑まれて見奉る上にもみけしきいとうるはしう何くれとさわやかにのたまはせたまふ例の樂隊してにぎはしう奏せさするに人々の心ののどやかに見えたるも波風たゝぬ御代の秋なればとおぼえて千年もかくてあらまほしきこゝちぞせらるゝや

「かの宮」赤坂離宮を云ふ。
「おとゞ」大臣。
「おぼしやりて」思ひ遣りての意。
「參れるかぎり」御宴に召されて參れる人々の總てを云ふ。
「御いし」御倚子を云ふ。
「おほむかたはら」御傍なり。
「おものみき」おものは食膳、みきは酒なり。
「八洲」大八洲之國の略、我が日本國の古稱なり。
「千年もかくて」恁うして千年も居たき心地せらるゝとの意也、せらるゝやの「や」は「よ」と云ふに同じ。

〔おほせ言にもあらぬを〕天皇陛下より吹上の御苑へ參りて見よと仰せ出だされしにても無きに、の意なり。
〔たゆたはる〕躊躇する、ためらふ。
〔さうじ〕障子。
〔さておかせ〕其の儘に成し置かするを云ふ。
〔さるきは〕さる人々の分際、貧しき人々の狀態の意。
〔心なくも云々〕御心の中を辨へずして不用意にも障子の破れを張らむと申上けつる事かなとの意也。
〔さうざうし〕寂々しの義、淋しと云ふ意なり。

時雨ふる日

けふは吹上の御苑にものせむとおもひたちたりしを出立たむとする頃より時雨の雲のたちかさなりて今にもふりいでぬべき空あひにぞなりぬるおほせ言にもあらぬをもし道にていたくそぼたれむにはともにさぶらふ人々のなやみもいかゞとおもひたゆたはれてさてやみぬしばらくして風はげしうふきいで雨さへそひて窓のうちまでうちしぶくに戸をさゝせむと思へどあまりにくらかるべければさうじのみさゝせたるに時のまにぬれて紙ところどころやぶるれば人々つくろひてむといへどぬれたる紅葉のことにさやかなるが見ゆればわざとさておかせたるにまづしき人のすまひめきたりとうちわらふ人もあれどそれもまためづらかにをかしくかつはさるきはのおもひやりも出來ぬべしといへばこの寒き日に御風ごゝちもやとこそおもひ奉りしにかへりて雨ごもりの御つれづれもなぐさませたまはむをこゝろなくもきこえさせつるかなといひつゝ笑ふ今朝まで黄ばみたりし枝の大かた赤くなりたるにあやにくにもといひしも忘れて心ある雨よといひあへるもをかし暮方ちかうなりてはまことに寒うなりぬるに戸をさゝせつれば人人もやうやううち散

〔うつり行く〕變遷し行く也。月日の經過するを云ふ。
〔冬木の梢〕冬木とは冬枯れたる樹木卽ち落葉せる木々を云ふ。
〔いつよりも〕例年よりもの意なり。
〔御調度〕室内の御道具。
〔劍璽〕草薙の御劍八尺瓊の曲玉。
〔うつろひます〕移轉し給ふを云ふ。
〔まかでぬ〕罷り出でぬの義、退出せるを云ふ。
〔朝拜〕新年朝賀の御儀なり。
〔掟てさす〕定め仰せらる。

りしぞさう〳〵しきや

年のくれ

月日のうつりゆくまゝにはやう十二月二十日あまりにぞなりぬる冬木のこずゑ風わたりて寒さもいとゞまさりたるにみそのゝ梅のまばらにさきいでたる年のはじめのこゝちすなどいふもをかしことしは春秋にみゆきありて宮のうちにまします日のすくなかりければにやいつよりもとく年の暮れぬるこゝちすけふは例の煤拂ふ日とて御調度ども皆わたどのつゞきなる東のとのにうつしてかりのおましよそほひたるに上には御みづから劍璽を守らせたまひてうつろひましぬされど御政事暇なき頃なればかゝる日もおとゞたちの御たいめことしげくて大かたは御小座敷にましませり四時頃になりて今朝よりいりこみし人々まかでぬと奏するにやがてもとの宮にぞかへりたまふところ〴〵のをすもあたらしうかけかへたる淸らに見えていとこゝちよし上には朝拜のことなど何くれとおきてさせたまふさぶらふ女房たちつぎ〳〵にものたまはるめりさるなかにも歌御會始のこと心にかゝりて語りあへり年あけなばにぎはゝしうて宮づかへもことしげくやあらむはやう歌もよ

みおかばやとおもへどまだ一首だにといふもありゐるはえらばるべきは誰がにか
あらむといふもありていとをかしことなくてことしも末になりたるはめでたけれ
ど何となう心もいそがるればまた日の長くなりなむ時おもひいづることあらばか
きもくはへてむ

華族女學校にものしける時

年のうちに今ひとたびとこはるゝまゝにかねて心にかけたることなれば十二月の
十九日といふ日九時ごろより華族女學校にものしぬいたりつけば職員どもをはじ
めてあまたの生徒うやうやしくいでむかへたる處がらことにうれし階をのぼりて
まうけの座につきゐるに冬ともしらぬばかりあたゝかにしなしたる心しらひのほ
どあさくもおぼえず例の人々のたいめなどもをはりぬればやがて室毎にいりて授
業を見るにをさなき子の何心もなくうちゑみつゝ心やすげに教をうくるいとらう
たげなりかゝるほどより學びてこそはと末たのもし又ねびとゝのひたるかたはあ
からめもせずひたすらにまなびの道に心をいれためりわざのすゝみたらむ後はか
ならず世のかゞみともなるべきが多からむとおぼゆるうへにたちゐふるまひなど

〔誰がにかあらむ〕誰の歌にかあらむの意なり。
〔心もいそがる〕心の中も歳暮のいそぎに打ちつれて靜かならぬを云ふ。
〔しなしたる〕設備したるの意也。
〔心しらひ〕心用ゐと云ふに同じ。
〔たいめ〕對面也、拜謁を賜ける意なり。
〔らうたげなり〕可憐なる狀に見ゆとの意なり。
〔ねびとゝのふ〕年の稍々長じて大人びたるを云ふ。即ち上級生の謂なり。
〔あからめ云々〕わき見もせず也。
〔男さびたるさま〕男子めきたる樣子の意なり。

のつゆ男さびたるさまなくなつかしげに見ゆるこそうれしけれ猶のこるかたなく見めぐりてもとの處にてしばしやすらふに十二時半ばかりになりぬさてかへらむとするに園にて遊びゐたりし子どもの聲のしづまりぬればいかゞしつらむとおもふにはやわれを送らむとて門のかたにゆきぬるなりといへば心もいそがれて車にうちのりぬ

餘寒

春たちかへる空のけしき何となうのどかなりと思ひたりしにけさは雪げの雲のたちまよひて風もいといたう吹きあれたる今はた冬にかへるかとおもふばかりにぞありけるされば宮の內だに寒くてすびつなどとうでさするにをすのとちかくにほふ梅も雪かと見ゆるぞをかしきや若き女房たちのさすがに枝はえをらでこぼれたるつぼみを拾ひ集めて見するに水だめに浮べてだに奉らましかばいかに興せさせたまひなむといへばたゞ手すさび事に侍りしをかく匂ひいづることこそうれしけれとてうち笑みつゝきそうのぼりぬ風のおこりもぞするといへどわれさきにと拾ひ爭ふにかへりて汗もいづべきこゝちしつといふをきゝて年のわかければこそおほせご

〔園にて云々〕運動場にて遊びをりし生徒を云ふ。
〔雪げの雲〕雪氣の雲なり雪を催ほす雲を云ふ。
〔いといたう〕いと痛くの音便、甚しくの意也。
〔すびつ〕炭櫃の略枕草紙に「すさまじきもの、火おこさぬ火桶すびつ」などあり、鑪。
〔をすのと〕小簾の外なり。
〔水だめに云々〕水盤に浮べて御前に奉り御覽に入れなば、趣き變りて見ゆる故、興味を覺え給はむか、と宜ひし也。

とにもあらぬをとうちわらふ人の多ければはぢらひてまかでしもをかし日のながき頃なればかゝる事にもうち興じぬかし

摘草

このねぬるあしたのほどは深くかすみわたりて雨にもなりぬべう見えたりしを空やう〳〵晴れわたりてさしいでたる日影もいとのどかなりければふとおもひたちて御苑にものしぬ廣芝のあたりに至れば若草のあまたおひたちて花の色々見ゆるに目とゞまりてしばしたちやすらふほど若き人々のつみはやしつゝこれもうるはしかれもかぐはしなどいふにうちまじりて興じつゝ時の過ぐるもおぼえずあはれ宮たちにつませまゐらせて見奉らばやいかにらうたくおはしまさむをといひしにこは上に御覽ぜさせむの御心なればあながちに御わたくしの御すさびのみにはおはしまさじをといらへするもをかし夕つかたは風もふきいでぬべしと人々のいふにさらばとてかへる〳〵もまた摘みそへつ上にも遠からず御馬めしいでゝわたらせたまふべきをと思ひてかへりみるに咲きたる花の多ければにやいづこもさびしくなれりとは見えぬぞうれしきおのづから心ものどかにて日のかたぶくほどに

〔このねぬる云々〕萬葉集に「秋立ちて幾日もあらねばこの寢ぬる朝けの風は袂すゞしも」などあり。一夜寢て、起き出でし早朝の意なり。

〔らうたく〕可愛らしくと云ふ程の意なり。

〔こは上に云々〕是は主上に御目に掛け奉らむと思し召し給ふ御心にて草を摘ませらるゝ御事なれば、あながちに、御自身のみ興じさせ給ふ業なりとのみ申すべきにはあらじ、との意なり。

〔かへる〳〵〕かへす〳〵と云ふに同じ、夕方より風も吹き出でなば草花も萎るべしと思へば、あるが上にも摘み添へたりとの意なり。

〔鈴菜〕たう菜を云ふ。
〔田面をかへす〕かへすとは鍬き返すを云ふ。
〔かりそめの云々〕斯かる些細なる事までも、能く御記憶あそはされ居りて御忘れなき事よと女房達の申上けたる也。
〔さぶらふ御達〕常に近侍する御前達なればこそ、との意也。
〔よしなしごと〕理由も無き事、つまらぬこと。
〔さうざうし〕寂々しの義、淋しの意也。
〔黄鳥〕うぐひす。

ぞかへりまゐりぬる

春日田家

去年のこのごろは西の都にみゆきありけるをはやう一とせもすぎぬるかなとさらにその時のことゞも思ひいづるが中に東山のけしきは言ふもさらなり麓の畑に麦の青みて鈴菜の花のうちかをりたるいとおもしろかりきなどかたりあひつゝ里人のあれたるわらやよりいでゝれんげ草の咲きみちたる田面をかへすをそのいたづきもおもはでたゞ花を惜しと思ひしこそわれながらをかしうもはづかしうもありしかとひとりごちしにかりそめのことまで忘れたまはずといらへするに民のわざばかりいとまなきはなしさるをなほざりに思ひしことよとさぶらふ御達なればこそかゝるよしなしごともかたるなれといひつゝ打笑ひぬすぎこしかたを思へば何ごともみな一夜の夢なりけりな

待花

さかり久しと思ひたのみし軒端の梅ものこりなうちりはてゝ御苑の春もさう〴〵しうなりにたるに黄鳥の心ありげにたえずさへづる聲のなつかしければはしちか

「はつかに」ほのかにと云ふに同じ。「ほゝ笑むともなく」云々　笑出づる様子も無くて。「さるべき事ども」觀櫻の御宴の御催の事どもの意也。「春に似ぬ心ぞ」春はうら〳〵と長閑なる時節なるに、今より觀櫻の御宴の日取を云々するが如きは、餘りに性急にて、春に似ぬ心ぞ、と仰せありしと也。「ふるきこよみの」舊暦のの意なり。「しはぶきがち」咳を爲しがちに惱ませ給へる也。「おこたりがた」快方に向ひたる氣味を云ふ。

ういでゝ見るに柳の眉かとおもふばかり櫻の枝のふしだちたれどいまだ蕾のそれとだにわかぬぞかひなきやかくて一日〳〵とまつほどにやうやう花の色のはつかに見えければ上につげ奉り人々にもいひしらせつされど時ならぬ嵐の寒ければにやほゝゑむともなくて日數かさなりぬ御宴せさせ給ふべきはいつのころにかあらむ去年の春はこの大宮におはしまさゞりしかばさるべきことどももむなしうなりにしをことしはにぎはゝしうとこそ上にもおぼすらめなどとり〴〵にいひつゞけて今日か明日かと思ふほどにやう〳〵梢まばらに咲きいでぬ御宴の日はいつにか定めさせ給ふらむといふをきこしめしてまだ盛にはほどもあるらむものを何とてかく春に似ぬ心ぞとうちわらはせ給ふに御いらへもきこえさせずあまりにあわてにけりと我ながらおもふもいとをかしうこそ

月あかき夜

ふるきこよみの九月十三夜なりとて空うちながめたるに村雲のたちかさなりてさやかにも見えざればむなしう内に入りしもはやうをとつ日とはなりぬこよひ十五夜の月こそよからめとて女房三たり四たりばかりなむ紅葉山に行きけるみづから

〔おばしま〕欄干。
〔かたらへる人〕紅葉山へ月見に行きて歸り來れる女房等を云ふ。
〔こまやかなる應へぞなき〕御苑の月の景色を委しく語らずと也。
〔嬉しき人の情〕女房達の忠心を云ふ
〔あらたまの〕荒玉の義、土中より掘出でし儘の玉は、砥石にて磨く意より、砥に冠し、引續けて年までに云ひ掛くる枕詞とすと云ふ。
〔四方拜〕元旦の寅の刻に、天皇、前庭に出御ましまして、天地四方、山陵を拜し給ひ、年災を禳ひ、寶作を祈らせらるゝ御儀なり。

は風のこゝちにて大前にもまうのぼらずしはぶきがちにうちふしたるが今はおこたりがたなれば枕をそばだてゝ見るにたてこめたるさうじに影のうつりたるさすがにをかしうこそありけれいにし年のけふは水戸の好文亭より仙波湖の月も見しを今年はをりあしうてうちむかふことだにかたければおばしまちかう立出でゝかたらへる人をよび入れて御苑のけしきやいかにと尋ぬるにこまやかなるいらへぞなきうちつけにいぶかしく思ひしかどよく思へばそはわが爲なりけりたゞによしときかばおもはずたちいでもやせむとおもひてなりけりなかなかに月見むよりも

うれしき人のなさけにこそ

新年

あらたまのとしたちかへりぬれどまだ春といふべきにもあらねばこの曉の四方拜の御まうけどころ風の寒さいかにぞとよゝより思ひつゞけゝるにすびつなどもおしやらむばかりあたたかにて朝日うらうらとさしいでゝ御苑わたりも何となう打霞みたるにおのづから心ものどやぎぬ上にも晴のおものきこしめさむとみぞひきつくろはせていでますを女房たち御いはひの式の具など今のうちにと取集めて御ま

〔すびつ〕炭櫃の約にて爐を云ふ。
〔晴のおもの〕晴の儀物の義、四方拜の御儀に束帯の御裝束して出で立たせ給ふを云ふ、
〔從ひて參りぬ〕皇后陛下も御後に從ひて出御し給へる趣き也、
〔御すさび〕御慰み
〔さだめなき云々〕空の晴れ曇りに定めなく、とかく不順なる時候に冒されしならむ、との意也、
〔この醫師ども〕女房等が、庭に出で立たせ給ふとも、玉體に御障りあらじ、など醫師めきたる事を申したるに依りて、女房達を指して、此の醫師どもに云々と仰せられし也。

しどころにすゑ奉りなどするにほどなく入御まし〳〵て例のごとく御祝ごと行はせ給ふしばしいこはせたまふほど朝拜の人々もそろひたりと奏するにこたびは正殿にいでたゝせ給ふに從ひてまゐりぬあまたの人々のことほぎうけさせ給ふみけしきいとうるはしう見奉るさて夕つかたの御盃ごともをはりぬれば朝まだきより何くれとつかうまつりし人々も少しいとまあるにゆるびやしけむ大輔のもとにうちつどひて今日のめでたさなどかたりあひつゝをり〳〵は打笑ふこゑのきこゆるかとおもへばしはぶきもなくしづまりぬるにねぶりをやもよほしつらむとおもふほど上のめさるゝに驚きてたれをかと見めぐらすもありわれにやあらむといひてすみやかにまゐるもありそをきこしめしてうちわらはせ給ふものどかなる代の年の始の御すさびにこそ

花のさかりに

さだめなき空のけしきにやさそはれけむこゝち常ならずさりとて打臥すほどにもあらねば强ひてまうのぼりぬ上は出御ましましたりとて女房どものおばしまちかくたちいでゝ何事をかかたらひつゝ打笑ふを見てこれぞまことの花見なるとふと

ひとりごちしにしばしいでさせたまへ風もあたゝかなればさはらせ給ふこともおはしまさじなどそゝのかすがうれしければ同じくば花のかげまでと思ふはいかにこれもこの醫師どもにとひてこそといへば皆うちわらひて藪根子こそ苗字を藪とよばれはべればとく御いらへもつかうまつるべけれといふもをかしまづ御階をおりむとするに例の御達みともつかうまつらむとてわれも〳〵ときたるかと思へばかならず同じ道にともなくておもひ〳〵にわおこの花のかげにゆきしも常にかはりて興ありけり

扇

おぼろに見ゆるまでたちこめたりし御苑の霧もやう〳〵はれ渡りて日影のさしのぼるころより風さへふきやみてひるのあつさのたへがたければおばしま近く立出でつゝ空のみうちながめて一しきりふらましかばと思ふにあやにく雨雲の見えぬそかひなき草木もしらぬ風をこめたる扇といふものもいつの御代よりの御さだめにかあらむ大前にては憚るべきことになりにたりそも夕つかた湯あみにとてまかでしよりは心のまゝにものすべけれどもたぬになれてとらむとしも思はぬをこの

〔苗字を藪と云々〕権掌侍藪嘉根子を云ふ。苗字を藪醫者の義に戯れし也。
〔例の御達〕典侍、權典侍を云ふ。
〔ふらましかば〕降つたならば、涼しくならむとの意。
〔あやにく〕あな憎くの義、生憎。
〔そも夕つ方云々〕扇は天皇の大前にて使用する事なり難き掟なれど、それも、夕方入浴後は使用を聽されたりと也。
〔御手たゆくは〕御手が御勞れならば打あふぎ奉らむとの意也。

「やり水」庭などへ流しやる水也。「さと吹きわたり」颯と音立てゝ吹き渡るを云ふ。「あしたの風」朝風を云ふ。「前栽」前庭の植ゑ込み、花壇。「梢あまたに云々」木々の梢に澤山に蟬の聲の聞ゆる意なり。「ちゝと鳴く」古歌は、簑蟲のちゝよと鳴くとあり。ははそのと云へるに對せる語也。

あつき日にとて御達のすゝみつゝ御手たゆくばつかうまつらむとて色々の繪かきたるをとりいづるに風を専とするものながらさすがにこの秋草の花はいかに岩根にかゝる白波はといはれては涼しき繪のかたをとるぞをかしき長き日もくれ近うなりてやり水のあたりをゆきめぐるに森の下風さとふき渡りて汗もひぬべくおぼゆるにあつしとわびたりしも夢のやうにこそなりにしか

秋のはじめ

秋たちしよりやう／＼十日ばかりなるに御苑のさくらもみぢしてあしたの風にちりみだれたる見すてがたうてはしちかうたちいでぬ前栽のすゝき一もと穂にいでゝ打靡きたるさすがにをかしうこそありけれされど日盛は猶あつくて蟬の聲の梢あまたにきこゆるなどたゞ夏とのみおぼゆるものからなつかたは何となう吹來る風も身にしみ庭のはゝその下草露ちりてちゝとなきそめし蟲のこゑやめづらしかりけむ何事をか語りあひたりし女房の聲もとみにやみぬこれなむ日ごとに御題たまはる人々なればまたの日はかならずいみなく蟲の聲よりもなつかしうよみて奉るならむといひしかばおもひもよらぬおほせごとかなとことさらにいらへするも

なか〳〵に興ありとかくいふほど夜もふけわたりけむ松の嵐のさむうふき渡るにみこゝちなそこなひたまひそといひければ人々と共に奥深くすべりいりぬ

禁庭の野分

朝露のひるまはさしもなかりしそらの俄にかきくもり夕づゝの光もみえずとかくするほどに雨いたく降り出でゝほとり近くかたりあふ人の聲だにきゝわかぬまでになりぬ閨に入る頃はなほ雨のおとのみきこえしを夜ふかくなるまゝに雷さへ鳴りはたゝきて夢現とも思ひ定むるひまなく稲妻のきらめきわたるいとけうとしあかつきがたには雨はをやみぬれど風はげしうふきいでて宮のうちもゆるぐばかりなるにいとゞ目もあはず上には民のためとてかしこくも遠き境にいでましたるほどなればいかなる行宮にまし〳〵てこの風の音に御心をなやましたまふらむ皇太后の宮にはいかにおはしますにか幼き宮たちもおどろきやしたまふらむと思ひつゞくるほどに夜も明けぬれどいまだ風靜まらでいづこもおろしこめたるいともいむづかし軒近き栗の枝のむすべる實ながら吹折らるゝおといと烈しく御階の下の芭蕉も筒井のかたはらなる柳も皆をれふしぬ今を盛と見えし眞萩も名殘なくちり

〔朝露のひるま〕露の干ると云ふ縁より、晝間と續けて言ひ出で給へるなり。
〔夕づゝ〕夕續の義にて、日光に續く意の稱と云ふ。太白星（金星）を暮天に稱する語、宵の明星。
〔きゝわかぬ〕聞き分けられぬ。
〔はたゝく〕烈しく鳴動するを云ふ。
〔けうとし〕氣疎しの義、もの恐ろしと云ふ程の意也。
〔目もあはず〕眠る事なり難きを云ふ
〔皇太后の宮〕英照皇太后を申す。
〔おろし込めたる〕戸を鎖したるまゝ開け放たぬを云ふ
〔あやしげなる賤が家居〕粗末なる賤の家の意なり。

みだれたるいとさびしく見ゆ宮のうちだにかくあれぬるをましてあやしげなるしづが家居などは倒れぬるも多からむなど思ひやればすゞろに悲しおしなべてみのりよしと聞きつる千町田の稻もふきそこなはれつらむやなど心にかゝりて

國のため科戸の神もこゝろしていな葉のうへはよきて吹かなむ

なほとやかくとむねをいたむるほどにいつとなく靜まりて日影まばゆく雲間にさしいでぬるにおのづから人のこゝろもおちゐにけり

金剛石

金剛石も　みがゝずば
珠のひかりは　そはざらむ
人もまなびて　のちにこそ
まことの德は　あらはるれ
時計のはりの　たえまなく
めぐるがごとく　時のまの
日かげをしみて　はげみなば

〔すゞろに〕そゞろに、と云ふに同じ、漫にの意也。
〔科戸の神〕級戸邊之命を云ふ、伊弉諾尊の御息に化りませる風の神也。
〔おちゐにけり〕落ちつきたりの意。

〔金剛石〕金剛石は寶石の中にても最も貴重なる物なれど、それも土中より掘出でし儘にて磨かざれば光輝は添ふべからず。人も學びて後にこそ人の光輝ある眞の德は現はるゝ物なれ。時計の針の間斷なく廻轉するが如く、倦怠なく寸陰を惜しみて勉勵せば、何事か成就せざる事あらむや との意也。

〔水は器に從ひて〕古諺に、水は方圓の器に從ふと言へるに據り給へるなり。
〔そのさま〴〵に〕水は方形なる器に容るれば方形と爲り、圓形なる器に盛れば圓形に從ふ意なり。
〔うつるなり〕人は友人の善惡に因りて、善人も惡人と變じ、惡人も善人に移ると也。
〔こゝろの駒〕意馬の義に出でたる詞なれど、此の御歌にては、單に心の意に用ゐ給へる也心を勵まして學業を修めよと也。

いかなるわざか　ならざらむ

水は器

水はうつはに　したがひて
そのさま〴〵に　なりぬなり
人はまじはる　友により
よきにあしきに　うつるなり
おのれにまさる　よき友を
えらびもとめて　もろともに
こゝろの駒に　むちうちて
まなびの道に　すゝめかし

右の唱歌二篇は明治二十年三月華族女學校へ賜へるなり

附載

みがゝずば玉も鏡も何かせむまなびの道もかくこそありけれ

右明治九年二月東京女子師範學校に下し賜へる

きよらなるはちすの絲の一すぢにいのりし老が心をぞおもふ

右明治十一年大藏卿大隈重信の老母が年月とりあつめし蓮の絲もておりいでたる佛像をたてまつりしを見そなはして下し賜へる

鶴遐年友

雲の上のしるべのたのみし老松の千代にともなへ天のたづむら

右明治十二年岩倉洗子の八十の賀に下したまへる

霜後殘菊

霜をへてなほこそかをれ大君のかざしとなりし白菊の花

「みがかずば云々」玉も磨かざれば光輝を發せずして寶物たるを得ず、鏡も磨かざれば物の影を映すを得ず、共に何の益にも立たず、人も學ばざれば德を成さず、物の益に立ち難しと也。

「一すぢに」絲の緣語なり、一心にの意也。

「雲の上のしるべ」雲の上まで生ひ立てる松を云ふ。

「天のたづむら」天の田鶴群なり。

「霜を經て」岩倉公の老後の意を含め給へる也。

「大君の挿頭」天皇の補佐の意なり。

「よろこびの云々」晃親王の「喜壽」の賀なれば、喜のと調べ出で給へるなり。ふしを重ねてとは、次の句に呉竹と云へる縁語なり。

「晃親王」山階宮第一世の親王に坐す

「ひらけ行く云々」初句は學びの道の開け行く意を、花の開く意に掛けて詠み給へる也。春をこそ待てとは、良妻賢母となりて國家に盡す時を期待すとの意也。

「千年の坂の云々」百、千、萬と數ふる時は、百歳は千年の初めなれば斯く詠ませ給へり。

「若松の云々」親王の御子達の千年を經る世も親王は長らへ給ふべしと也

右明治十七年贈太政大臣岩倉具視の追悼に下し賜へる

寄竹祝

よろこびのふしをかさねて呉竹のちよも榮えむ末ぞたのしき

右明治十八年晃親王の七十の御賀に下したまへる

ひらけゆくまなびの窓の花ざくら世に匂ふべき春をこそまて

右明治二十二年五月ある女學校へ下したまへる

寄筆祝

もゝとせを千年の坂のはじめにて筆の林もわけはまどはじ

右明治二十二年四月從二位伊達宗紀の百歳の賀に下したまへる

寄松祝

さかえゆく老木のまつは若松の千年の末も見るべかりけり

右明治二十八年晃親王の八十の御賀にくだしたまへる

鶴有慶音

〔さくらの絲〕絲櫻の枝を云ふ。絲柳の枝を、柳の絲と云ふに同じ。
〔くりかへし〕絲の緣語なり。八十八の齢を繰り返して行末長く榮えよとの意也。
〔君をおもふ云々〕一二の句は、道眞公の誠忠の志を云ふ。一筋とは二心なき意なり。放つ矢先にとは、道眞一日都良香を訪ふ。良香想へらく彼は儒生、射術を知らざるべしと、試みに弓矢を授く、道眞一發、即ち中る。觀る者驚嘆すと。
〔捨てしこの身〕この身とは子供の身なり。
〔あし田鶴の〕鶴の羽の緣より、華山に冠し給へる也。

このやどのさくらの絲をくりかへし末長かれと鶯のなく

右明治三十八年二月從一位勳一等近衛忠凞の八十八の賀に下し賜へる

菅原道眞

君をおもふまことの道の一筋はかねてもしるし放つ矢先に

右明治三十五年二月菅公會へ下し賜へる

國のためすてしこの身を惜むにもまづ思はるゝ親心かな

ちよふべきうまごを枝に吳竹のすくよかにして御代につかへよ

右明治三十七年九月海軍少佐高崎元彦の戰死せしにつけて父樞密顧問官男爵高崎正風がよめる歌を見そなはしてくだしたまへる

あしたづのはやまの里にうちむかふ富士より高き齢かさねよ

右明治三十八年皇后宮大夫子爵香川敬三の別業にてよませ給へる

あえものとももてはやすなりすくよかによはひかさねし人の盃

右明治四十二年六月伯爵土方久元樞密院副議長伯爵東久世通禧樞密顧問官侯爵佐佐木高行同子爵黒田清綱の高齢を祝賀する讌あり

ときこしめして下し賜へる

さやかなる聲こそのこれことのはの道しるべせし山ほとゝぎす

右明治四十三年五月正二位勳二等三條西季知の三十年祭に下したまへる

松間鶴

さらにまたへぬべき千代ぞこもるらむいや榮えゆく松の二木に

右明治四十三年樞密顧問官侯爵松方正義の金婚式に下したまへる

あしたづの雛をはぐゝむ聲すなり榮ゆる峰の松の梢に

右明治四十四年一月侯爵前田利爲に下し賜へる

〔あえもの〕あやかり度きものの意なり。

〔もてはやす〕彼の人々の高齢にあやかり度しと人々の讃みて評判し合ふを云ふ。

〔すくよか〕すこやかに同じ、壯健にの意也。

〔さやかなる云々〕初句は季知卿が、皇后陛下の爲めに歌道の御道しるべ申上げし勞きを始め、其の世に盡しゝ功績、其の遺し置ける歌どもを云ふ。

〔さらにまた〕生ひ出でし初めの年に立ち返りて、更に又經過すべき千年の色を籠るらむとの意なり。

〔はぐくむ〕養育するを云ふ。

昭憲皇太后御集　終

明倫歌集

明倫歌集序

掛卷も畏き天設日の皇子の尊の大御世しろしめしける神つ代のさまは、天皇の高く尊くおはしますより、おほみたからの下が下に至るまで、眞澄鏡の清き眞心もて、天津神、國津神に齋き仕へまつりて、靈幸ふ神ならひのまに〳〵、ならしばの習ひなれつゝ、大八洲の國、浪平らかにおだしかりしかば、殊更に教へごと、たてゝ、言擧せし事こそはあらざりしかど、言さへぐ漢土人の五の教も、すべてこの神ならひの中にこもらひ備はりて、ならはぬ方もなくなむありける。然あるは、父母を尊び、妻子をうつくしむよりはじめて、若草の妻とある妹は、定めたる吾が夫をおきてほかに男はなしといふ心を須勢理姫尊は歌ひ給ひ、臣として仕ふるものは、山行かば草むす屍、海行かば水づく屍、大君の御言のまに〳〵こそ、身をば盡さめといふ心を、靱かくる大伴氏の遠つ祖は言だてせしなど、人の世となりても、ならふべきためしに、言ひ繼ぎけらし。かゝれば、名に立てたる教へごとの繁き國よりも、こよなく立まさりて、空蟬の世の人心に表裏なく行ひ、はた正しかりしかば、神習ひの眞心を、深く厚く稟け來ぬるによりてなりけり。かくて世々に時につけつゝ、心の誠をあらはして、歌ひと歌ひ、詠みと詠む歌ども多

きが中に、かきなす琴の、ことさらびて、教草と聲つくろひたるわざにはあらで、古心の、おのづから言葉の花に匂ひ出でたるが、後々までもまれ／＼殘れるに、打聽く人の教となれるを見聞くにつけて、おほよそに思ひ過さむは、いともあたらしければ、人々にも事おほせて、海人の刈る藻の、掻集めたるに、あまた年經て數つもりぬれば、いかで世のうなゐ子ども口ずさびにもなさしめて、古よりの赤き心の下葉にもたさせまほしくて、更に撰り整へしおるに、玉垂のうちより漏り出でたる高く貴き御言をも憚らず、塵にまじれる道芝の短く卑しき言詞とても摘み捨てぬは、古き世々に跡多かれば、今も許さるゝ事なるべし。おほよそ、歌は千餘り、卷は十卷に滿ちぬれば、是を名づけて人の道を明らむる歌集といふ。然はあれども、藻に埋るゝ白玉は光輝られず、砂子にまじれる黄金は拾ふに盡きぬたぐひにて、尙漏れたるも多かめれど、さるは又つぎ／＼にも物すべし。あはれ、此の歌世にひろまり、人の心によく染みて、まめに雄々しかりし上つ代ぶりにかへらひ行きて、大御國の御光、ます／＼に、四方の海の外まで照り輝やかば、内つ御國は、いよゝうら安くして、重波のいやつぎ／＼に、古の道歌ふ人、多からむには、この書の跡こゝに盡きず、後の世にも撰び重ねて、幾千卷とも積らましかば、終にはさへづるや外國人等に、我が神國の道をさとすはしたでともなりゆきなまし。然あらむ

には、己が願ぎ思ふに餘ありて、いかばかりか、かしこき幸とも述べ盡し難くぞあらむ。かくいふは、年の名を嘉び永しといひ初めて、四かへりにあたれる年の秋、御世長月とことほぐ、なかば盛久しき菊の雫を常磐の硯に注ぎて、命も長き筆を染みつゝ、これを記す。

權中納言源朝臣齊昭

明倫歌集目次

一君臣歌（百八十八首）……四二七
一君臣贈答歌（二十四首）……四五五
一父子歌（二百十四首）……四五九
一父子贈答歌（二十六首）……四九二
一夫婦歌（百三十四首）……四九四
一夫婦贈答歌（三十八首）……五一四
一兄弟歌（三十七首）……五二二
一兄弟贈答歌（三十九首）……五二六
一朋友歌（百三十三首）……五三二
一朋友贈答歌（二十八首）……五五二
一神祇歌（七十七首）……五五七
一國體歌（三十五首）……五六九

一　文　　歌（七十二首）……五七五
一　武　　歌（三十九首）……五八六
一　拾遺歌（百十九首）……五九二

明倫歌集目次終

明倫歌集　巻第一

君臣歌

後柏原天皇御製
御着到和歌
をさめしる我世いかにと浪風の八十島かけてゆくこゝろかな

同
聖廟法樂和歌
いかにせば月日をおなじ心にて雲のうへより世をてらさなん

光嚴天皇御製
風雅集
てりくもり寒きあつきもときとして民に心のやすむまもなし

後醍醐天皇御製
續後拾遺集
世治まり民やすかれといのることそわが身につきぬ思なりけれ

「治めしる云々」今朕が統治しつゝ有る此の世の中は、如何なる状態ならむかと、遠き國々島々の果までも心の配らるゝよと也「八十島」八十は數の多きを言ふ。「月日を云々」日月の曇りなく、遍く世を照らすと同様なる心を以て、との意也。「雲の上」月日の縁語にて禁中を云ふ。「照り曇り云々」照るも日曇る日も、寒きにも暑きにも人民を思ふ心は一刻も休止せずと也「世治まり云々」世治まり人民安く有れと祈るが、朕の始終の思なりと也

「時し有れば云々」春になれば奥山の谷間より出で來る鶯に、汝の言葉なる深山の中に、若し世を救ふべき聖人などの隠れて居りはせずやと問ひ試み度しと也。
「つかふべき云々」朕が世には遺賢在野など云ふ事なきやうに、深山の奥までも賢者を尋ねて、遍く登用せむ事を期すと也。
「天津日嗣」天皇の御位を云ふ。
「みつ垣の」久しきの枕詞なり。
「世を思ふ」民安かれと思召す也。
「橿原の宮」神武天皇の御世を申す。
「豐の御禊」大嘗祭の御禊なり。
「世に立つ」御即位の年の始を云ふ。

後宇多天皇御製
新千載集
時しあればたにより いづる鶯に世をたすくべき人をとはばや

後村上天皇御製
新葉集
つかふべき人やのこると山ふかみ松のとざしも猶ぞたづねむ

後奈良天皇御製
續題吟集
くもりなき天津日嗣をみづ垣のうけてひさしき身に祈るかな

龜山天皇御製
新後撰集
すべらぎの神のみことをうけ來つゝ彌つぎ／＼に世を思ふ哉

後村上天皇御製
新葉集
たかみくらとばりかゝげて橿原の宮のむかしもしるき春かな

二條天皇御製
玉葉集
そら晴れし豐の御禊に思ひしれなほ日の本のくもりなしとは

後宇多天皇御製
續千載集
いとゞまた民やすかれと祈る哉わが身世にたつ春のはじめは

後醍醐天皇御製
續千載集
民のためときある雨を祈るともしらでや田子の早苗とるらん

同
續千載集
いそぐなる秋のきぬたのおとにこそ夜さむの民の心をもしれ

後鳥羽天皇御製
續後撰集
夜を寒みねやの衾のさゆるにもわらやの風をおもひこそやれ

後光嚴天皇御製
新拾遺集
いまさらに年の暮とも驚かすいそぎなれたるあさまつりごと

後村上天皇御製
新葉集
鳥の音におどろかされて曉の寢ざめしづかに世をおもふかな

伏見天皇御製
新拾遺集
神やしる世のためとてぞ身を思ふ身の爲にして世をば祈らず

崇光天皇御製
新千載集
鈴鹿川八十瀨の浪のたゞゐにも我身のための世をばいのらず

〔時ある雨云々〕五風十雨が時に順ふやうにと祈るとの意なり。
〔田子〕農夫なり。
〔いそぐなる〕いそぐとは支度を爲るを云ふ。寒くなるにつけて衣を擣ちて冬の支度を爲す意也。
〔夜寒の民〕夜の寒き意に、貧しき民の意を含める也。
〔藁屋の風〕粗末なる民の家の板戸の隙より入り來る寒風を云ふ。
〔いそぎ馴れたる〕常に政事に御暇なき意也。
〔鳥の音〕鷄の聲。
〔おどろかされて〕夢を驚かされて也眠を覺ますこと。
〔鈴鹿川〕伊勢に在り。瀨の多き故に八十瀨と云ふ。

伏見天皇御製
玉葉集
いたづらに安きわが身ぞはづかしきくるしむ民の心おもへば

同
新千載集
世をすくふ心のうちのなほざりに民のうれへをなすぞ悲しき

光嚴天皇御製
新後拾遺集
十年あまり世をたすくべき名はふりて民をし救ふ一事もなし

同
風雅集
祈る心わたくしにては岩清水濁りゆく世をすませとぞ思ふ

後醍醐天皇御製
新葉集
身にかへて思ふとだにもしらせばや民の心のをさめがたさを

後嵯峨天皇御製
續後拾遺集
なか〳〵に人よりものをおもふかな世をおもふ身の心づくしは

後鳥羽天皇御製
續後撰集
人もをし人も恨めしあぢきなく世をおもふゆゑに物思ふ身は

〔いたづらに〕徒事の意、何事も爲さざるを云ふ。
〔世をすくふ〕云々、世を濟はむ心の等閑なるが故に、民の愁へを爲すもの多きが悲しと也。
〔十年餘り〕云々、即位以來、世を濟ふと云ふ名のみ徒らに言ひふるされて其の實を擧げし事なし、と御謙遜あそばされし也。
〔わたくしにては〕私意を以ては祈りを言はず、との意を岩清水に言ひ掛けし也。岩清水は男山八幡宮なり。
〔身にかへて〕朕が身命に替へて民心の治め難きを心痛し居る事ぞと也。
〔心づくし〕心配。
〔あぢきなく〕味氣無の義、無益に。

「あはれとは云々」賊臣の爲に都を落ちさせ給ひ、隱岐島に行幸し給へる途にての御製也。斯かる折にも猶國民を思す大御心の深く坐しませる御事いと惶し。
「なほざりに」等閑に、疎略にの意。
「たゞ昔とは云々」古への何れの帝の時代と云ふ事は考へ定めざれど、との意なり。
「御代かしこしと」有難き御代也と、の意。
「末々まで」末の代迄の意にて、呉竹のは、末の枕詞也。
「葦原」日本、豐葦原之瑞穂國を云ふ
「道ある世」正道の行はるゝ世也。
「おどろが下」荊棘の繁れる險路也。

後醍醐天皇御製
増鏡
あはれとはなれも見るらんわが民をおもふ心は今もかはらず

後光嚴天皇御製
新千載集
なほざりに思ふゆゑかと立かへりをさまらぬ世を心にぞとふ

後醍醐天皇御製
風葉集
治まれるあとをぞしたふおしなべてたゞ昔とは思ひわかねど

後嵯峨天皇御製
玉葉集
此君の御代かしこしと呉竹のすゑ〳〵までもいかでいはれむ

花園天皇御製
風葉集
あしはらやみだれし國の風をかへて民の草葉も今なびくなり

後鳥羽天皇御製
新古今集
おく山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ

後宇多天皇御製
續千載集
春秋のかげをならべて見つるかなわがすべらぎのおなじ光に

孝謙天皇御製

萬葉集

四の船はやかへりこと白香つけ我裳のすそにいはひてまたむ

桓武天皇御製

同

此酒はおほにはあらずたひらかに歸り來ませといはひたる酒

後村上天皇御製

新葉集

位山こえてもさらにおもひしれ神もひかりをそふる世ぞとは

後光嚴天皇御製

新拾遺集

世を治め民をあはれぶまことあらば天津日嗣の末もかぎらじ

龜山天皇御製

續拾遺集

岩清水たえぬながれに身にうけつわが代の末を神にまかせむ

伏見天皇御製

玉葉集

代々たえずつぎて久しくさかえなん豐あし原の國やすくして

後村上天皇御製

新葉集

四方の海なみもをさまるしるしとて三の寶を身にそつたふる

〔四の船〕遣唐使の船を云ふ。奈良朝の頃、遣唐使の船は四艘出す定めなれば也。

〔白香つけ云々〕裳に白木綿を著け潔齋して神に祈るを云ふ。

〔おほにはあらず〕凡には非ずの義、尋常一樣の心にて賜はる酒には非ずと意也。

〔位山〕飛驒國なる山の名なるを、位に擬へたる也。

〔神も光を〕位の昇進せしも神の御蔭なる事を忘るなとの意也。

〔末も限らじ〕行末も限りあらじの意

〔絕えぬ流れ〕天壤無窮の帝位。

〔四方の海〕四海。

〔三の寶〕三種の神器、鏡、劍、玉

「人のひとより」何ば差置きこもの義なり。

「我が心云々」我は法親王の身として御代の太平を佛に祈る外には他に又思ふ事なき眞心を君にも知し召し給ふらむと也。

「片岡の云々」此歌の上句は、動なきと云はむ爲めの序にてか別に意味あるには非ず。

「萬代を云々」萬代を待つとて松に掛けたり。松尾山は京都の松尾神社を云ふ。

「春日山云々」奈良の春日神社の松陰に居て、尚ほ天皇の千歳を祈らむと也。

「つもり」津守氏は代々住吉社の神官なれば斯く云へり

新葉集　　二品法親王深勝

民やすく國をさまれといのるかな人のひとよりわが君のため

續千載集　　一條内大臣 内實

民やすく國ゆたかなる御代なれば君をちとせと誰かいのらぬ

新千載集　　二品法親王慈道

わが心君ぞしるらん代をいのるほかには又もおもひなしとは

風雅集　　賀茂惟久

かた岡の岩根の苔路ふみならしうごきなき世をなほ祈るかな

後葉集　　一宮紀伊

萬代をまつのを山のかげしげみ君をぞいのるときはかきはに

内裏九十番歌合　　入道前太政大臣女

かすが山ときはの松のかげにゐて猶すべらぎの千年いのらむ

續後撰集　　津守國平

我君をまつの千年といのるかな代々につもりの神のみやつこ

〔怠らず云々〕我は大君の御代の爲めに神に祈る事を怠らず、されば我は神に仕ふる身なれど、又君に仕ふる身に同じと也。

〔七瀨の淀〕昔へ朝廷にて七瀨祓とて、七瀨を七所撰びて祓を行はしめ給へり。但し此處なるは加茂川の七瀨なるべし。

〔神山のみ社〕加茂の神山なりと。

〔諸神の云々〕君の萬歲を祈りまつる我が赤心は、諸神の心に叶ふならむとの意也。

〔神垣に云々〕天下泰平を神に祈るが神官の赤心なりとの意。

〔僞なしと〕汝の心は僞なしと神も靈驗を跡るべしと也

新千載集　　　津守國夏

おこたらず祈るも御代の爲なれば君と神とに身はつかへつゝ

內裏九十番歌合　　　津守國清

住吉の神につかふる身にしあれば君をぞ祈るよろづ代までに

玉葉集　　　賀茂任藤朝臣

きみがため七瀨の淀にみそぎして八百萬代をいのりそめぬる

現存六帖　　　賀茂經久

神山のみ社におひそふ玉つばき八千代は君のためといのらむ

千載集　　　藤原季經朝臣

諸神のこゝろに今ぞかなふらん君を八千代といのるまことは

新拾遺集　　　祝部（はふりべの）行氏

神垣に御代をさまれと祈るこそ君につかふるまことなりけれ

同　　　從三位常昌

君が代をいのる心のまことをばいつはりなしと神はうくらむ

〔稲荷山云々〕稲荷山に參詣する者は貴賤多けれど、其の大衆も、心は皆齊しくして、君が代を祈らぬ者とてはなしと也。
〔一言の神〕大和國葛城山に坐す葛城一言主神を云ふ。此の神の御名に、君を祈る一事と掛けて詠める也。
〔糺の杜〕下鴨の社を云ふ。
〔あけの玉垣〕心の色は、朱の神垣の如くにてあり、即ち赤き心也との意。
〔葵草〕向ふの枕詞に置ける也。
〔別雷〕加茂神社に坐す神なり。
〔道に急げば〕神社へ詣でむと急ぐを云ふ。
〔おきゐつゝ〕起きても居てもの意也

家集　　　伊勢
いなり山ゆきかふ人に君が代をひとつこゝろに祈りやはせぬ

續古今集　　　賀茂氏久
君をいのるたゞ一言の神のみやふたごゝろなき程はしるらん

新古今集　　　前大僧正慈圓
きみをいのる心のいろを人とはゞたゞすのもりのあけの玉墻

雪玉集　　　逍遙院内大臣實隆
君をあふぐ心をとはゞあふひ草むかふ日影をさしてこたへむ

雲玉抄　　　賀茂重保
君を祈るねがひを空に滿てたまへわけいかづちの神ならば神

新葉集　　　津守國貴
君をいのる道にいそげば神がきにはや時つげて鳥も啼くなり

同　　　從一位隆基
おきゐつゝ君をいのれば神垣にこゝろ通はぬあかつきもなし

續後撰集　　權大納言實雄

神垣や三室のさかき木綿かけていのる八千代もたゞ君のため

續後拾遺集　　權中納言公雄

木綿かけて御代をぞいのる榊とる八十氏人の同じこゝろに

春葉集　　荷田東麿

のがれても身はおく山の榊葉のさかゆく世をば祈らざらめや

新古今集　　俊惠法師

神風やたまくしの葉をとりかざし內外の宮に君をこそいのれ

鳥山床草　　參議源治紀

わが君は千代に八千代の末かけていのりおかまし伊勢の神垣

月清集　　後京極攝政前太政大臣良經

民もみな君にこゝろをつくば山しげきめぐみの雨うるふ世に

古今集　　詠人不知

筑波嶺の此の面かの面に蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし

〔三室〕大和國三室山、即ち三輪明神なり。
〔木綿かけて〕榊葉に木綿を取懸くる事、神を祭る古儀なり。
〔八十氏人の云々〕多數の氏人皆同じ心に御代の長久を神に祈ると也。
〔遁れても〕假令此の世を遁れて奥山に隱れ住むとも末行く君が御代を祈らざらむやと也。
〔神風や〕伊勢の冠辭なるを、其まゝ伊勢の事に云へるなり。
〔玉串の葉〕神に捧ぐる榊の小枝也。
〔內外の宮〕內宮伊勢皇大神宮、外宮豐受大神宮。
〔心をつくば山〕心を盡す意を筑波山に云ひ掛けし也。

〔佐保川〕大和の名所なり。
〔愚かなる云々〕如何なる人をも捨て給はぬ君の惠をば此の愚蒙なる我身をさへ惠み給ふに依りて思ひ知りぬる事よと也。
〔やぶしもわかぬ〕藪をも分かぬの義にて、擇り好みをせざる意也。
〔敷島の道〕和歌の道を云ふ。歌の道は廣大無邊なれば之を君の惠に比して言へる也。
〔武士の云々〕軍人は大君の任命の儘に、一向に聞き從ふべきものぞと也
〔かへりみなくて〕身をも家も顧ず。
〔醜の御楯〕賤しき一兵卒の意なり。
〔筑紫云々〕筑紫の防人に行くを云ふ

芬陀利花院前關白内大臣 内經

風葉集
しづむ身と何思ひけむ佐保川の深きめぐみのかゝりける世に

後福光園院攝政太政大臣 良基

新續古今集
おろかなる身にこそさらに知られぬれ人をしすてぬ君が惠は

大江宗秀

風雅集
天の下誰かはもれん日のごとくやぶしもわかぬ君がめぐみは

權大納言 爲遠

新續古今集
すゑとほくなほこそあふげ敷島の道よりひろき君がめぐみを

詠人不知

萬葉集
武士のおみのをのこは大君のまけのまに〳〵きくとふものぞ

今奉部與曾布

同
けふよりはかへりみなくて大君の醜の御楯といでたつわれは

太田部荒耳

同
天地の神をいのりてさつ矢ぬき筑紫の島をさしていくわれは

萬葉集

大君のみことかしこみいそにふりうなばら渡る父母をおきて　丈部造(よぼろべのみやつこ)人麿

同

大君のみことにされば父母をいはひべと置てまゐで來にしを　雀(さき)部(べの)廣島

同

大君のみことかしこみあを雲のたなびく山をこえて來ぬかも　小(を)長谷(はっせ)部(べの)笠麿

新勅撰集

山は裂け海はあせなん世なりとも君にふた心われあらめやも　鎌倉右大臣實朝

新葉集

君がため世のため何か惜からんすてゝかひある命なりせば　中務卿宗良親王

柳葉集

ありて身のかひやなからん國のため民の爲にと思ひなさずは　中務卿宗尊親王

新葉集

思ひかねス入にし山をわけすてゝまよふうき世もたゞ君のため　文貞公師賢

「大君の云々」大君の御言を畏み乍ら海中の岩に船を衝き觸れなどして、危險を冒して海原を遠く渡り行く事よ、懷かしき父母をも家に殘し置きて、との意也。

「みことにされば」命にし有ればの意なり。

「いはひべと云々」齋瓶(イハヒベ)を置くやうに家に殘し置きての義也。

「大君の云々」以上の萬葉の歌は、防人の、其の任地に赴く時の歌也。防人(さきもり)は要害の地の守衛兵を云ふ。

「をしからめやも」[illegible]は反語。何かは惜しからむ、[illegible]有らじとの意也。

「わけ捨てゝ」遁世せし身を君の爲め更に奮起せし也。

「勅なれば云々」承久亂の宇治川合戰の時、敵に捕はれて詠める歌にて、物部の八十とは宇治川を云はむ爲の冠詞、瀨には立たねどとは、功は立てねど、と云ふ程の意也。

「君にませたる」君に捧げしの意也。

「たゝなめて」いづみの枕詞なり。

「みを絶えず」みをは水脈に身をの意を兼ねたる也。

「せきの藤川」美濃國の關の里の藤川の事、絶えずと云ふ序詞なり。

「君が代に云々」上句は、流れてと云はむ爲の序也。

「流れて」流れ〳〵ての事、即ち何時までもの意也。

「[illegible]」、心ニ一心也

承久記

勅なれば身をばよせたき物部の八十うぢ川の瀨にはたゝねど　鏡月房

家集

今さらに何か思はんはやくより君にませたるかばねなるはや　揖取魚彥

萬葉集

たゝなめて和泉の河のみをたえずつかへまつらん大宮どころ　境部宿禰老麿

同

天地とあひさかえんと大宮をつかへまつればたふとく嬉しき　大納言巨勢朝臣 奈良麿

古今集

美濃の國せきの藤川たえずして君につかへんよろづ代までに　讀人不知

家集補

君が代にみなそこすめる岩清水ながれて千代に仕へまつらむ　大中臣能宣

拾遺愚草

神も見よ貴船の川波ゆきかへりつかふる道にわけぬこゝろを　權中納言定家

新千載集　　　　　　　　　　　　　前中納言宣明

つかへきてひとつ流の絶せねばくもらじと思ふ我こゝろかな

同　　　　　　　　　　　　後光明照院前關白左大臣 道平

ちはやぶる神代のちぎりたえもせず今も仕へて年ぞ經にける

内裏九十六番歌合　　　　　　　　　左大臣 公賢

君がためふた心なきこゝろにてつかふる道に六十ぢ經にけり

新千載集　　　　　　　　　　　　　大納言經顯

かくしつゝつもる六十ぢの老の坂さかしき道に猶ぞつかふる

續拾遺集　　　　　　　　　　　　　兵部卿隆親

年たけておもひもよらず君が代に又つかふべき道はありとは

新拾遺集　　　　　　　　　　　　　六條内大臣 有房

老らくの白髪までにつかへきて今日の御幸にあふがうれしさ

新葉集　　　　　　　　　　　　　　前大納言光有

おもひきや三代につかへて吉野山雲井の花になほ馴れむとは

〔つかへきて〕云々、昔に仕へ奉りし如く今日に至るまで一貫せし物は常に雲なく正しくふかき思ふ我が心なりとの意也。〔千早振〕云々、何は神の枕詞也。〔神代の契〕祖先たる天兒屋根命は、既に天皇を補佐し奉れと天照大神より勅詔を蒙りし事あるを云ふ。〔さかしき道〕尊考に取りて至難なる任務の意なり。〔年たけて〕云々、老後に再び君に召出されし勇命に感泣せる心ばへ也。〔老らく〕老ゆるの轉語也、老に同じ。〔三代〕後醍醐天皇、後村上天皇、長慶天皇の三代の御世をいふ。

「つかふとて」云々、曉深く雪を踏分けて出仕して見れば禁中の雪景〔色〕に又一しほ神々しさを覺ゆと也。
「降雪の」白髪の序に置ける也。老年まで朝廷に奉仕しての意を詠めり。
「霜雪の」霜も雪も共に白き物なれば白髪に冠せし也。
「五代まで」云々「年寒き」云々とは、歳寒くなりても松の葉の常磐なるを云ふ。即ち我は松の如く節操を變へずして五代の御代迄も奉仕し來れりとの意也。
「仕へつゝ」云々」夜毎に更け行く時々の鐘聲を禁中に聞く迄事務を執りて早く家に歸らむとは思はずと也。

同　　文貞公師賢

つかふとてまづふみわけし九重のくもゐの庭の雪のあけぼの

萬葉集　　左大臣橘宿禰諸兄

ふる雪のしら髪までに大君に仕へまつればたふとくもあるか

拾遺愚草　　權中納言定家

霜ゆきの白髪までにつかへきぬ君は八千代をいはひおくとて

新古今集　　土御門内大臣通親

あさごとにみぎはの氷ふみわけて君につかふる道ぞかしこき

新拾遺集　　中園入道前太政大臣公賢

五代まで君につかへて年さむき松のこゝろはならひきにけり

五百番歌合　　前大納言有光

今ははやおぼえず年も暮にけり身を忘れつゝつかへこしまに

草菴集　　前大納言良教

つかへつゝ家路いそがぬ夜な〳〵の更ゆく鐘を雲ゐにぞきく

續拾遺集　　前大臣爲氏

鳥のねぞあかつきごとになれにける君に仕ふる道いそぐとて

天明五年歌合　　左大臣

雲ゐにぞいそぎつかふる天の戸のあけの衣の數ならぬ身も

新續古今集　　祝部成前

世を祈る身にしあらねばいかでわれ君に仕ふる數となるべき

續後拾遺集　　從三位爲信

うしとても君につかふるかずなれば身に慰めて世をば恨みじ

風雅集　　藤原時業

同じくば衰へざりしもとの身を今にかへして世につかへばや

新葉集　　前大納言光任

命あれば衣をたれしいにしへにたちかへりてぞ又つかへける

玉葉集　　山階入道前左大臣實雄

君がへむ千代にやち代の末までも吾身かはらず仕へてしがな

〔鳥のねぞ云々〕朝とく〳〵也。とく出仕するを例とする事は、鳥音、ある鶏の音に用ゐたりしと也。〔あけの衣〕五位の異名、緋袍を着るに依りて云ふ。此句は夜の明くると同時に出仕する意を言ひ掛けし也。〔世を祈る云々〕世の治を祈る者、即ち政務に携はる身たらねば、位官の數に入るべくもなしと謙遜せし也〔うしとこそ〕世の中は憂き物なれど我は君に仕へ奉る一人也と思へば何より樂しくて、憂世の事などは數へれずと也。〔衣を垂れし古へ〕一度官服を脱ぎし身の、再び之を着し仕官せしを云ふ

「いろかへぬ云々」上句は「掛く」と云はむ爲めの序、黒髪山は下野國に在り。

「ゆふだすき」木綿手襁は神に仕ふる時に取掛くる物也故に掛けて幾世と續けたり。

「仕ふるも云々」奉仕する計りにても心勇みて愉快を覺ゆる御代に逢ひて人皆聖德を仰ぐ事よと也。

「あづさ弓」矢の枕詞に置けり。八島大八洲の略にて我國の古名也。

「たらはしてりて」天皇の威德の足り滿ちて輝くを云ふ

「御民われ」我等國民の意なり。

「あへらく」逢へるの延言なり。

「さゝへじ」指定せじ

新千載集

いろかへぬ黒髪山の山かづらかくてやひさにつかへまつらむ　從三位行家

百首和歌

君を祈る賀茂の社のゆふだすきかけていく世か我もつかへむ　源晴信

近代着到御百首

つかふるも心のいさむ御代にあひてかしこき君をあふぐ諸人　右大辨賢房

鶴山詠草

あづさ弓やしまの外もおしなべてわが君が代の道あふぐらし　参議源清紀

萬葉集

天地にたらはしてりてわが大君しきませばかもたぬしき小里　大伴宿禰家持

萬葉集

御民われいけるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば　海犬養宿禰岡麻呂

續後拾遺集

千載とも御代をばさゝへじしきしまや日本島根の動きなければ　源俊頼朝臣

「大君は云々」大和なる御船の山に、白雲の棚引かぬ日とては無き如く、天皇の御代も盡くる日あらじと也。

「ひたてりにして」直照りの義、橘の實の照輝きて、の意なり。

「ときはにまさむ」常住不變に在し坐すべき也の意。

「はこやの山」藐姑射の山は仙人の住む山の名也、故に仙洞御所の意に取りて太上天皇の宮殿の稱とす。

「あきつ神」現津神の義、現世に坐します神、即ち天皇を申す。

「鹿島」茨城縣鹿島神宮なり。

「しほひく山」潮引きて、海も山と變ずる意と云ふ。

春日王

萬葉集

大君は千年にまさんしら雲のみふねの山にたゆる日あらめや

大伴宿禰家持

萬葉集

おほ君はときはにまさむ橘のとのゝたちはなひたてりにして

皇太后宮大夫俊成

千載集

百千たび浦島が子はかへるともはこやの山はときはなるべし

平宣長

玉鉾百首

物皆はかはり行けどもあきつ神わがおほ君の御代はとこしへ

權中納言定家

拾遺愚草

鹿島や檜はらすぎ原ときはなる君がさかえは神のまに〳〵

西行法師

山家集

大海のしほひく山になるまでにきみはかはらぬ君にましませ

前中納言爲相

續千載集

君はたゞ心のまゝのよはひにて千とせよろづ世數もかぎらじ

古今集
古へにありきあらずは知らねども千年のためし君にはじめむ　素性法師

たゞ二集
ふる雪もてらす日影も君が代の空につきせぬためしなりけり　従二位家隆

心珠詠草
めぐる日のかはらぬ影や君が代の限知られぬためしなるらん　三光院内大臣實枝

詠百首
いく千代も同じ月日のめぐりきて變らぬ御代は空にしるしも　散位隆實

金葉集
みづ垣の久しかるべき君が代はあまてる神やそらに知るらむ　藤原爲忠

鶴山詠草
あまてらすうちとの神も隔てなく果らぬきみが御代まもるらん　参議源治紀

新續古今集
八百萬そこらのかみの年なみによるひるまもる君が御代かな　前大納言匡房

「ありきあらず」千歳を經し人は古へに在りしや否やは知らねどの意也。
「ふる雪も云々」雪空となり又晴天となり、天氣の種々に成るも、君が代の空に盡きせぬしるし、卽ち無窮なる例ならむと也。
「めぐる日の云々」太陽の變らぬ影に御代の變らぬ狀を比べたる也。
「しるしも」著明也の意、明かに知らると也。
「みづ垣の」久しの枕詞なり。
「あまてる神」天照大神を申す。
「天照す内外の神」伊勢の内宮、外宮を云ふ。
「そこらの神」數多の神の意なり。
「年並に」年毎に也

〔くもらじな云々〕初句は結句の下に移して心得べし。天つ日嗣の跡享けてとは、帝位に即かせ給ひしを云ふ。〔絶えせぬ云々〕皇統連綿として絶えせぬを云ふ。〔かみ代より云々〕神代の昔より今に至る迄傳はれる皇位の程の久しさよとの意也。〔三種の寶〕八咫の鏡、八尺瓊の曲玉、草薙の劍を云ふ。〔ひさかたの〕日刺方の義にて天の枕詞なるを、行末の久しとの意に掛けて詠める也。〔伊弉諾尊〕天照大神の父神に坐す。〔住吉の云々〕住吉の松の齡は、君が代の長久に准へて神も植ゑけむと也

新續古今集　　前中納言實任

くもらじな天つ日嗣のあとうけて昔にかへる御代のみかげは

五百番歌合　　源成直

神代よりたえせぬ天つ日嗣とてげにくもりなき君はわがきみ

續後撰集　　中原師光

かみ代よりいま我國につたはれる天つ日つぎのほどぞ久しき

五百番歌合　　左衛門督長親

神の代の三種のたから傳へますわがすべらぎの道ぞたゞしき

詠百首　　中務卿宗良親王

君が代はなほ行末もひさかたのあめにはじめし神のまに〳〵

夫木抄　　仲實朝臣

いざなぎのみことの時に定めきて我君ひさに世にまさむとは

詞花集　　詠人不知

君が代の久しかるべきためしにや神もうゑけむすみよしの松

家集　　源　兼澄

住吉のきしになみたつ松もみな千とせは君にゆづるべらなり

月清集　　後京極攝政太政大臣 良經

それもなほ千代の限のありければ松だに知らぬ君が御代かな

續古今集　　大藏卿　爲長

今日よりぞちゝの松原ちぎりおく花は十かへり君はよろづ代

夫木抄　　嘉陽門院越前

神垣やゆきめぐりても君ぞ見んおひそふ松のよろづ代のかげ

高陽院七番歌合　　正家朝臣

君が代はかねてぞしるきかすが山ふた葉の松の神さぶるまで

萬代集　　贈大納言時信

君が代はあまてる神の宮づくり八百よろづ度あらたまるまで

今撰和歌集　　三位源賴政

君が代は千尋の底のさゞれ石の鵜のゐる磯とあらはるゝまで

〔なみたつ〕並び立つ也。

〔それもなほ〕松は長久の物也とは云へど、それでも猶ほ千年の齢に限られをるを云ふ。

〔十がへり〕松の花は百年に一度咲き出づと云ふ傳說あり、十返りは卽ち其百年を十度繰返す事を云ふ。

〔ゆきめぐりても〕幾萬本となく生ひ添ふべき松林の中を行き廻る意也。

〔かねてぞしるき〕君が代の長久なる事は豫てより著明也との意。

〔神さぶる〕神々しくなる、古色蒼然となるの意。

〔宮造〕伊勢神宮は二十年毎に新しく御造營の例也。

〔さゞれ石〕小石。

〔わが君は云々〕現在の國歌也。但し初句は一本に「君が代は」とあるに據れり、沙石の巖となり、其上に苔の生茂るまで大君は永久に坐しませとの意也。
〔天の羽衣〕天人の空を飛行する折の着衣なり。
〔なづとも云々〕佛説に、四十里四方の岩を、三年に一度梵天より天人の下り來て、三銖の衣にて撫で盡す年間を一刧と云ふ。君が代は斯樣に撫でても／＼盡きぬ岩ならむと也。
〔竹の園生〕親王の異稱、梁孝王の竹園の故事に出づ。
〔呉竹の園〕前條に同じ。
〔春の宮〕皇太子。

古今集　詠人不知
わが君は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで

拾遺集　同
君が代は天の羽衣まれにきてなづともつきぬいはほならむ

夫木抄　衣笠内大臣家良
おほ空にかはべの石はのぼりつゝ星となるとも君はわすれじ

春葉集　荷田東麻呂
あふがばや星のはやしも我君の八百よろづ代の數にかぞへて

新續古今集　兼貴王母
身につもる年に萬代とりそへて今日わが君にたてまつるかな

夫木抄　大藏卿有家
年を經て生ひそふ竹の園の内につきせざるべき君が千代かな

月清集　後京極攝政太政大臣良經
くれ竹のそのよりうつる春の宮かねても千代の色は見えにき

〔天の下云々〕天下は長閑に治まる世となれり、惟ふに是れ君の惠の空に滿ちて、地を掩へるならむと也。
〔色にも云々〕顏色にさへ嬉色を現はせりとの意にて、花の咲けるを擬人して斯く云へる也
〔身にかへて〕花の散るは惜しけれど身命に變へて迄は惜しまじ、君が代には春は無限に廻り來るべければ、との意也。
〔千々の春云々〕千代萬代の春秋まで長らへて、其の月と花とは君が見給ふべき也との意。
〔諸共に云々〕天照る月の萬代に住む(澄む)如く、君も永久に坐さむと也久方は天の冠詞。

新續古今集　前中納言雅孝
天の下のどかなる世となりにけり君がめぐみや空にみちぬる

新古今集　刑部卿範兼
君が代にあへるは誰もうれしきを花は色にもいでにけるかな

同　參河内侍
身にかへて花も惜まじ君が代に見るべき春のかぎりなければ

續古今集　入道前太政大臣公經
いろ〳〵にさかえて匂ふ櫻花わがきみ〳〵の千代のかざしに

玉葉集　鎌倉右大臣實朝
千々の春よろづの秋にながらへて月と花とは君ぞ見るべき

新後拾遺集　權大納言忠光
かぎりなく世をこそ照らせ空にすむ月日や君がみ影なるらん

玉葉集　後花山院入道右大臣定雅
もろともに君ぞすむべき久かたのあまてる月のよろづ代の秋

千載集
かぜわたる民のくさ葉も年あれば君にぞなびく千代の秋まで　前大納言基良

三十六番歌合
道を知り人をしる世のをさまりて君になびかぬ草も木もなし　權中納言政顯

天正記
君も臣もこゝろあはせてをさむてふ世の聲しるし庭の松風　近衛左大臣信輔

古今集
ふして思ひおきてかぞふる萬代は神ぞしるらんわが君のため　素性法師

萬葉集
天つちとあひさかえむと思ひつゝつかへまつりし心たがひぬ　詠人不知

同
東のたきのみかどにさもらへど昨日も今日もめすこともなし　同

同
はしきやし榮えし君のいましせば昨日もけふも吾を召ましを　資人金明軍

「年あれば」年は豐かに稔ること、卽ち豐年なればとの意なり。
「道を知り云々」王道を能く知し召して人民を能く統治し給ふ御世なれば安らかに治りて、萬民を初め草木に至る迄皆共に心服し奉るよと也。
「世の聲」世間の評判と云ふ程の意也
「天地と云々」此歌は天武帝の皇子日並知皇子の薨去の時に侍臣の詠める歌也。
「瀧の御門」日並知皇子の御殿の稱。
「さもらへど」伺候して居れど、との意なり。
「はしきやし」敬愛すべきの意。
「召さましを」我を召し給ふべきに。

〔緑子の〕幼兒の如くの意なり。
〔たもとほり〕逼ひ廻りての意。是歌も同じく日並知皇子を悼み奉れる也
〔あめ見る如く〕大空を仰ぎ見る如くの意也。
〔御子の御門〕日並知皇子の御所を云ふ。
〔あま雲の云々〕天雲の晴るゝ時なく物悲しきは、天皇の崩御を空も悲しむならむと也。
〔おもひにかなふ〕思ひ通りになる物ならばの意。
〔おくれましやは〕君に後れて、世に生き殘らむやと也。
〔山科の宮〕醍醐天皇の山科の御陵也
〔君に再〕花山院の御讓位と、出家とを云ふ。

萬葉集　資人金明軍
緑子のはひたもとほり朝宵にねのみぞわが泣く君なしにして

萬葉集　柿本朝臣人麻呂
久方のあめ見るごとく仰ぎ見しみこの御門のあれまくをしも

高倉天皇升遐記　土御門内大臣通親
あま雲のはれずものゝかなしきは大空さへや君をこふらむ

後撰集　三條右大臣定方
人の世のおもひにかなふ物ならば我身は君におくれましやは

同　同
はかなくて世にふるよりは山科の宮の草木とならましものを

千載集　藤原長能
老らくのいのちのあまり長くして君にふたゝび別れぬるかな

新葉集　關白左大臣經忠
いまはまた涙になしてつゝむかな袖にあまりし君がめぐみを

千載集

常に見し君がみゆきを今日問へばかへらぬ旅ときくぞ悲しき　　法印澄憲

續古今集

おくれゐて思ひやるこそ悲しけれ高野の山の今日のみゆきは　　皇太后宮大夫俊成

宮川歌合

道かはるみゆき悲しきこよひかな限りのたびと見るにつけても　　西行法師

後拾遺集

おくれじと常のみゆきはいそぎしを煙にそはぬ旅のかなしさ　　大納言行成

大鏡

かけまくもかしこき君が雲のうへに煙かゝらん物とやは見し　　常陸國農民

玉葉集

みがゝれし玉のうてなを露深き野べに移して見るぞかなしき　　西行法師

續世繼物語

思ひきや虫のねしげき淺茅生に君を見すてゝかへるべしとは　　藏人實重

〔今日問へば〕今日は何處への行幸ぞと人に問へば、との意也。
〔かへらぬ旅云々〕歸らぬ御旅へ出で給ふ行幸也と聞くが悲しと也。
〔おくれゐて云々〕高野山への御葬送の折、己れは御供に仕へ申さずして悲しめる也。
〔道かはる御幸〕御葬送を云ふ。
〔限りの旅〕御見納の御幸の意也。
〔煙にそはぬ〕玉體の御幸には常に後るゝ事なく御供申奉りしが、玉體の今は煙となり給へるに、其の煙に御供なり難きが悲しと也。
〔思ひきや云々〕陵墓より歸る心也。見捨は葬りての意

「思ひきや云々」業平朝臣の「忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪踏分けて君を見むとは、」と云へるを本歌とす
「君なくて云々」よる方は寄處の意にて、絲を搓るに係る縁語也、亂るゝと云ふも亦同じ。
「しづく」水面に影の映るを云ふ。
「みな人は云々」世間の人々は已に喪服を脱ぎて花やかなる衣になりしが、我は法衣の儘にてあり、せめて其の袖の涙よ、乾きなりともせよと也。
「やはあらぬ」やは反語、今日であるの意也。
「雲隱る」天皇の崩御を云ふ。
「雲の上」禁中。
「見し世」過し昔。

新葉集
思ひきや山踏のみ雪ふみわけてなきあとまでも仕ふべしとは　前大納言光任

新古今集
君なくてよるかたもなき青柳のいとゞうき世ぞ思ひみだるゝ　權中納言國信

古今集
水の面にしづく花の色さやかにも君がみかげの思ほゆるかな　小野篁朝臣

同
みな人は花のころもになりぬなりこけの袂よかわきだにせよ　僧正遍昭

古今集
草ふかき霞の谷に影かくし照る日のくれし今日にやはあらぬ　文屋康秀

後拾遺集
などてかく雲隱るらんかくばかり長閑にすめる月もある世に　命婦乳母

新千載集
雲の上はかはりにけりと聞く物を見し世に似たる夜半の月哉　皇太后宮太夫俊成

〔二年の云々〕ふたとせの秋の哀れとは嘉元二年後深草院崩御あり、翌三年龜山院崩御ありしまゝを云ふ。故に下句に深草の露も未だ消えぬと詠める也。

〔しぐれさへ云々〕君の喪に籠りて袖に涙の乾く類なき頃なるに、時雨さへいとゞ降り添ひて、心の晴れやらぬ秋の暮しきよと也。

玉葉集　　　　　　　　　　　　前大納言　爲兼

ふたとせの秋のあはれは深草やさが野の露もまたきえぬなり

續千載集　　　　　　　　　　　新　宰　相

しぐれさへかゝる秋こそかなしけれ涙ひまなき頃のたもとに

同贈答歌

萬葉集　左大臣橘宿禰諸兄

堀江には玉しかましを大ぎみの御船はてむとかねてしりせば

萬葉集　元正天皇御製

玉しかず君が悔いていふ堀江には玉しきみてゝつぎて通はむ

同　聖武天皇御製

よそにのみ見ては有しを今日みれば年に忘れず思ほゆるかも

萬葉集　左大臣橘宿禰諸兄

葎はふいやしきやどもおほ君のまさむと知らば玉しかましを

大鏡　中將伊衡

一年にこよひかぞふる今よりはもゝとせまでの月かげを見む

大鏡　醍醐天皇御製

いはひつることだまならば百年の後もつきせぬ月をこそ見め

〔堀江には云々〕攝津國なる難波堀江に、元正天皇の行幸ありし時諸兄の詠める歌也。斯様に御船を此處に泊めむと豫て知りせば、此の堀江には玉を敷きて清らになし置きけむ物をと也。
〔君が悔いてふ〕卿が失念に思ふと云ふ此の堀江にはの意也。
〔玉しきみてゝ〕自ら玉を敷き滿たしめて引續きて又行幸せむと也。
〔よそにのみ見て〕今迄は知らざりしをとの意なり。
〔一年に〕村上帝御誕生後、百日の御祝に詠める歌也。
〔ことだま〕言靈の義、言葉に靈あらばとの意也。

後村上天皇御製
新葉集
そでふるゝはな橘のをりを得てかざすあやめの長きためしぞ

妙光寺内大臣　家賢
新葉集
たち花のかげふむ今日のあやめぐさ長きためしの惠をぞしる

後二條入道關白太政大臣　兼基
新古今集
かゝるせもありける物を宇治川の絶ぬばかりも歎きつるかな

圓融天皇御製
新古今集
むかしより絶せぬ河の末なればよどむばかりを何なげくらむ

前大納言爲氏
續後撰集
和歌の浦にひとり老ぬる夜の鶴の子の爲思ふねこそなかるれ

崇光天皇御製
新後撰集
わかの浦に子を思ふとてなく鶴の聲は雲ゐにいまぞきこゆる

孝謙天皇御製
萬葉集
大舟にまかぢしゞぬきこの吾子を唐國へやるいはへ神たち

「袖ふるゝ云々」花橘の咲く折を得て挿頭す菖蒲の、其の根の長き祝ひの嘉例として折りて贈れる也との意。
「橘の蔭ふむ云々」妙光寺内大臣、當時右近衛大將なりしかば、我身を右近の橘の蔭踏む身と詠める也。
「かゝる瀬」斯かる時機、即ち右大臣に任ぜられしを云ふ。下句は前に大將を罷められて歎き居りし趣き也。
「よどむばかり」流れの滯ること、官を免ぜられたる事のみを歎くべきに非ずと也。
「和歌の浦」爲氏は和歌の家なると、其浦は鶴の名所なるとに據りて斯く初句に置ける也。

萬葉集　藤原清河

春日野にいつく御室の梅の花さかえてありまて歸りくるまで

同　遠江守　櫻井王

長月のそのはつかりの使にもおもふこゝろはきこえこぬかも

萬葉集　聖武天皇御製

おほの浦のその長濱によする波ゆたけく君をおもふこのごろ

新葉集　後村上天皇御製

世のためもあらましかばと思ふにぞいとゞ涙の數はそひける

新葉集　右近大將　長親

歎きわびなきをば夢と思ふ身にあらましかばときくぞ悲しき

同　御村上天皇御製

今さらに昔にこそたつれ三年まであやめもしらで過ぎし悲しさ

萬葉集　前大納言　實雄

あやめをもしらで過ぎこし程よりも今日こそ更にねをば添へけれ

「いつく」齋ひ祭る
「さかえて云々」其の梅の花の咲き匂へる如く立ち榮えて、我が歸り來る迄待ち玉へと也。
「長月の云々」九月になりて、天飛ぶ雁の使は來るといへど、一向に御音信の無き事よと也
「おほの浦」遠江なる長濱に打寄する波は寛かなる故、之を下句の序とせるなり。
「あらましかば」閑院家の爲めにも、妙光寺内大臣の在世してありしならばとの意也。
「今さらに云々」此歌は御母新待賢門院崩去の後、三年の諒闇を了へさせ給ひての御詠也。
「あやめ」菖蒲に、黒白を分けし也。

〔忘れては〕云々、業平朝臣が、惟喬親王を叡山の麓なる小野の山莊に、雪中御訪ね參らせ、斯かる山中に雪踏み分けて君を訪れ奉らむとは思ひきや、今日の事、只夢の心地すとて、藤氏の專橫の世を歎かれし也。

〔背かざりけむ程〕心の儘ならぬ世を見捨てずして、遁世せざりし昔を口惜しく思ふと也。

〔つらなる枝〕連枝の義、兄弟を云ふ。〔連なりし云々〕其の連枝ありしならむには、如何に嬉しからむと思出でて、花さく春は一しほ連枝（兄弟）を慕はしく思ふならむと也。

古今集

忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見んとは　　在原業平朝臣

新古今集

夢かとも何か思はむうき世をばそむかざりけん程ぞくやしき　　惟喬親王

新葉集

思へたゞ花さく春をまちかねてつらなる枝のかれしなげきを　　前大納言爲定

新葉集

つらなりし枝もあらばとおもひ出て花さく春は猶やなげかむ　　中務卿宗良親王

明倫歌集 卷第二

父子歌

萬葉集　　山上憶良

しろかねもこがねも玉も何にせむにまされる寶子にしかめやも

家集　　相摸

何事も心にあらぬ身なれどもこのたからこそまづはほしけれ

花山天皇御製　續古今集

思ふ事今はなきかななでしこの花さくばかりなりぬと思へば

後醍醐天皇御製　續古今集

いろ／＼に枝をつらねて咲にけり花もわが世も今さかりかも

拾遺愚草　　權中納言定家

まちえつる古枝の藤の春の日にこずゑの花をならべてぞ見る

〔しろがねも云々〕金銀珠玉も殘し置きて何にせむ、子に增る寶は世にあらじと也。

〔心にあらぬ〕何事も心に欲しと思はぬの意なり。

〔思ふこと云々〕撫子とは、愛撫せし小兒の意、花咲く計りとは其の成人せしを云ふ。

〔いろ／＼に云々〕皇子の親王、内親王達に、それぞれに成人して身を立てたり、今の時こそ我が全盛の春ならめと也。

〔古枝の藤〕藤原氏の末流の意なり。

〔梢の花〕こずゑに子の事を掛けし也

拾遺愚草　　　　權中納言定家
袖せばくはぐゝむ身にも餘るまでこの春にあふ御代ぞ嬉しき

柔枝集　　　　源　[illegible]　孝
あら玉の今年はよをもゆづる葉の常盤の色にならへとぞ思ふ

續拾遺集　　　　藤原爲綱朝臣
契あればみのおもひ出の日蔭草このよをかけて又むすぶかな

新古今集　　　　赤染衛門
草わけてたちゐる袖の嬉しさにたえずなみだの露ぞこぼるゝ

千載集　　　　入道前中納言雅兼
嬉しさをかへすがへすもつゝむべき苔の衣のせばくもあるかな

一條天皇御製
續古今集
二葉より松のよはひを思ふには今日ぞ千年のはじめなりける

三草集　　　　少將源定信
わかみどりさすがに千代のおひ先もこもる二葉の松の色かな

〔袖せばく〕卑しき身分の意、古へ卑官の裝束は、其の袖の狹かりしを以て云へる也。
〔はぐくむ〕養育すること。
〔あら玉の〕年の枕詞なり。
〔ゆづる葉の云々〕家督を讓る意に掛けたる也。
〔契あれば〕父子の宿縁あればの意。
〔日蔭草〕爲綱の子爲俊が、豐明節會に、冠に日蔭の葛を取掛けて仕へまつれるを喜べる也
〔嬉しさをかへす云々〕作者の子の雅頼が昇殿を聽されしを喜べる也。
〔二葉より〕後朱雀院の誕生を祝ひ給へる御製なり。
〔若緑〕是も幼君の將來を祝へる也。

〔春日山云々〕春日は藤原氏の祖神なるが故に斯くは詠めり。北の藤波は藤氏四門の随一なる北家を云ふ。
〔言とはぬ〕物言はぬと云ふに同じ。
〔ありとふを〕有りと云ふを也。
〔憶良らは〕是は憶良が宴に侍して詠める也。今は罷らむとは退出せむとの意、四句は其子の母と云ふに同じ
〔出走り云々〕家を走り出でて山奥に去りなむと思へど子の愛に繋がれて思ひ止まるよと也
〔くたしすつらむ〕朽らし捨つるならむとの意也。
〔人の親の〕親の心は闇夜にては無けれど子を思ふ道に迷ふと也。

新古今集
かすが山たにの松とはくちぬともこずゑにかへれ北の藤なみ　皇太后宮大夫俊成

萬葉集
言とはぬ木すらいもとせありとふをたゞ獨子にあるが苦しさ　市原王

同
憶良らは今はまからむ子なくらむそのかの母も我を待つらんぞ　山上憶良

同
すべもなく苦しくあれば出走りいなゝと思へど子らに障(さや)りぬ　同

同
富人の家の子どものきる身なみくたしすつらむきぬ綿らはも　同

土佐日記
世の中に思ひあれども子を戀ふるおもひにまさるおもひなき哉　紀貫之

後撰集
人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道にまどひぬる哉　兼輔朝臣

新葉集

位山あとをたづねてのぼれども子を思ふ道になほまどひぬる　土御門内大臣通親

別雷社歌合

子を思ふ道にぞいのるすべらぎに仕ふる道をたがへざらなむ　左大辨雅頼

新古今集

立かへりすてゝし身にも祈るかな子を思ふ道は神もしるらむ　皇太后宮大夫俊成

後拾遺集

思ひやれまだ鶴の子のおひ先を千代もとなづる袖のせばさを　藤三位親子

新千載集

おもひやれ子を思ふ鶴の一つおひおなじねになくよるの心を　藤原基任

風雅集

こゝのつの澤に鳴くなるあしたづの子を思ふ聲は空に聞ゆなり　藤原基俊

玉葉集

年をへて霜の下なるあしたづの子をおもふ音に春をしらせよ　從二位家隆

「位山云々」位山は飛驒國の山なるを位の事に云へり。位の昇る道は父祖の踏みし跡を迪りて昇る事を得れども子を思ふ道には常に惑ふと也。

「立かへり」世上の事は凡て振り捨てゝ、出家せし身も子の爲めには更に立かへりての意。

「鶴の子」我子を云ふ、下に千代と言はむ爲めに斯く詠める也。

「前のせばこ」卑官にして、十分にならぬ意なり。

「こゝのつの澤」詩經に、「鶴鳴二于九皐一、聲聞二于天一」とあるに據りて詠める也。

「春を知らせよ」出世して、辛苦する我を安んぜよと也

詞花集
夜の鶴みやこの内にこめられて子をこひつゝもなき明すかな　高内侍

新千載集
子を思ふ涙くらべばよるの鶴われおとらめやねにたてずとも　後三條前内大臣實忠

新古今集
いかにせむ我世ふけひのうらみても子を思ふ鶴の愚なる身を　權中納言雅世

新葉集
難波江やあしまの浪のよるの鶴子を思ふ道はさはらずもがな　權大納言公夏

康富記
あきらけき月の夜にしも子をおもふ心のやみの鶴はなくなり　中原朝臣康富

後拾遺集
五月やみ子戀の杜のほとゝぎす人しれずのみなきわたる哉　藤原兼房朝臣

新千載集
月見てもなぐさみなましなぞもかく心のやみに子を思ふらむ　前大納言經繼

「夜の鶴」白氏文集に「夜鶴憶レ子籠中鳴」とあり。
「みやこの内」此句は夜鶴の身や籠の内に籠められてと續なして、都の内にと兼て云へる也
「子を思ふ云々」夜の鶴が子を思うて鳴く涙と、我が子を憶うて泣く涙と泣きくらべせば、我は鶴に劣らじとの意也。
「ふけひの浦」我が齢の更けたるを吹飯に掛け、次に怨みてと續けたる也
「難波江や」初句の緣語を以て一首を貫ける歌にて、意は下句のみにて盡せるなり。
「子戀の杜」伊豆國の名所なり。
「なぞもかく」何とて斯くはの意也。

〔いとけなき云々〕幼兒を奈良に置きて思へやれば、其の面影が今宵の月にありありと見え浮ぶと也。

〔君をこそ云々〕旅行するに付きて、家の子等を人に托す心を詠める也。

〔日影まつ間〕日のさし出づれば露の消ゆる如く、今死に臨める時の意也。臨終の際迄も子の上のみ心に思はると也。

〔よそへつゝ〕撫子の花を子に准へて見れどもの意也。

〔いづれともなく〕何れも愛らしけれどの意。

〔後れて咲く〕末の子が殊に可憐也との意なり。

〔一入もがな〕一層赤くなれかしと也

夫木抄
いとけなき我子を奈良の里におきてこよひの月に面影にたつ　藤原基俊

十六夜日記
君をこそ朝日とたのめふる里にのこすなでしこ霜にからすな　阿佛尼

太平記
あはれなり日影まつまの露の身に思ひおかるゝなでしこの花　中院大納言公宗

新古今集
よそへつゝ見れど露だになぐさまずいかにかすべき撫子の花　惠子女王

後撰集
撫子はいづれともなく匂へども後れてさくはあはれなりけり　貞信公忠平

泊洦舍集
はぐゝむもしたふもおなじ心には何事をかはおもひへだてむ　清水濱臣

拾遺愚草
子をおもふ深きなみだの色に出てあけの衣のひとしほもがな　權中納言定家

〔月の桂も折る〕所謂月桂冠を頂く事を云ふ。我が子をして家風を吹き起さしめ、月の桂の枝をも吹折る程にさせ度しと也。
〔あらく吹く風〕荒々しき世の波風を云ふ。
〔宮城野云々〕陸前國なる宮城野は萩の名所なれば、小萩を點じて子の上に掛けたる也。
〔小篠原云々〕臨終に近き身の、未だ死なずして子の上をのみ案じ思はると也。
〔水莖の〕岡の枕詞なり。
〔はゝその杜〕山城國の名所にて母の代用語とす。
〔庭つ鳥〕かけの冠詞、かけは鷄の古名なり。

拾遺集　菅原大臣道眞母
ひさかたの月の桂も折るばかり家のかせをも吹かせてしがな

新古今集　赤染衛門
あらくふく風はいかにと宮城野のこはぎが上を人のとへかし

新今古集　皇太后宮大夫俊成
をざさ原風まつ露のきえやらでこのひとふしを思ひおくかな

新千載集　藤原信良
水ぐきの岡べのさゝのひとふしもこのよに殘す言の葉もがな

詞花集　源義國妻
このもとにかき集めたる言の葉をはゝその杜の形見とは見よ

東歌　橘枝直
子を思ふ親のをしへの庭つ鳥かけてわするなのこすひとこと

同　同
愚さのおやに似よとは思はねど訓へおかるゝ子のゆくへかな

家集　源重之
人の世は露なりけりとしりぬればおやこのみちに心おかなん

明日香井集　參議雅經
今はわれ心のやみもはるにあひぬ子を思ふ方の道はまどはじ

萬葉集　他田舍人大島
唐衣裾にとりつきなく子らをおきてぞきぬやおもなしにして

同　作者不知
旅人のやどりせん野に霜ふらばわが子はぐゝめ天のたづむら

十六夜日記　和徳門院新中納言
いかばかり子を思ふ鶴のとびわかれならはぬ旅の空に鳴くらむ

古今集　小野千古母
たらちねのおやの守とあひそふる心ばかりはせきなとゞめそ

金葉集　平康貞女
磯菜つむ入江の波のたちかへり君みるまでのいのちともがな

「人の世は」人世は露の如く果敢きにつけても、親子の道に心を注ぎて親しく有り度しと也
「今はわれ云々」今我は心の闇も晴れ渡りて、子を思ふ道にも惑はずなりぬと也。三句は闇の晴るゝ意と、春に逢へる意、即ち子の立身せるを云ひ含めたる也。
「おもなし」母無しの意なり。
「わが子はぐゝめ」子を思ふ愛情の深き鶴よ、我が子をも愛護せよの意。
「たらちねの」足乳根は親の冠辭、せきなとゞめそは、塞き止むる勿れの意なり。
「磯菜つむ」初二の句は立返りの序、君とは親を云ふ。

「いとせめて云々」老人の身は切に悲し、此の生別が軈て死別とならむと思へばとの意にて此の別と云へるに子の別を含めし也
「から紅ゐの涙」紅涙、即ち血の涙の義に、成尋が唐土へ行く意を含めてから紅ゐと詠めり
「からき思ひ」我子の唐へ行く意を含めて辛きと詠めり
「二世とは云々」佛説に、親子の契は一世、夫婦は二世、主從は三世とあるを云ふ、即ち親子の契は二世迄に亘らぬ故、此世にて別るれば再び契り難き悲しさを云へる也。
「まひはせむ」まひとは賄賂を云ふ。
「こひのむ」乞祈る

拾遺集　　源嘉種妻
もろ共にゆかぬみかはの八橋はこひしとのみや思ひわたらむ

新葉集　　右近大將長親
いとせめて老ぬる身こそかなしけれこの別路を限とおもへば

千載集　　成尋法師母
しのべどもこの別路をおもふにはからくれなゐの涙こそふれ

新拾遺集　　同
もろこしへゆく人よりもとゞまりてからき思ひは我ぞまされる

業妙集　　源義久
二世とは契らぬ物をおやと子のわかれん袖のあはれとをしれ

萬葉集　　作者不知
若ければ道ゆきしらじまひはせんしたへの使おひてとほらせ

同　　同
ぬさおきて吾はこひのむ欺かずたゞにゐ行きて天路しらしめ

齊明天皇御製
日本紀
飛鳥河みなぎらひつゝゆく水のあひだもなくも思ほゆるかも

詞花集　神祇伯顯仲
あさましや君に着すべきすみぞめの衣の袖をわがぬらすとは

風雅集　赤染衛門
わがために着よと思ひし藤衣身にかへてこそかなしかりけれ

新古今集　源道濟
はかなしといふにもいとゞ涙のみかゝるこの世を頼みける哉

新千載集　源有長朝臣
たのむべき末葉の露を先だてゝ殘るわが身ぞおきどころなき

續後拾遺集　前大納言爲世
さきだちてきえぬる露の命にもかはらで殘るおいが身ぞうき

惇信貞文　林永善
さきだたぬ命ぞつらきながらへてこの別にもあふとおもへば

〔飛鳥河云々〕飛鳥河の早瀨の水煙立て逝水の如く、間斷なく子の事を思ひ歎く事哉と也。
〔あさましや云々〕子に先だたれたるを悲しめる也。墨染の袖とは喪服を云ふ。
〔我が爲めに云々〕是も前の歌に同じ藤衣は喪服也。我が爲めに子が着るべき喪服を、我が先に着る悲しさよとの意なり。
〔はかなしと云々〕此世に子の世を掛けたり。頼みなき世を頼みて果敢なしと思ひ知るも涙の種也と嘆ける也
〔末葉の露〕末子を云ふ。
〔かはらで殘る〕子の命に代らずして生き殘れるを云ふ

同

思ひきや殘るかひなき老づるのこの先だてゝねになかんとは　同

同

あつめよといさめし窓の螢さへ今はこがるゝおもひなりけり　同

新千載集

思きや六十ぢのあまりの坂こえてこの別路にまよふべしとは　大炊御門前内大臣母

家集

さもこそは人におとれる我ならめ己が子にさへおくれぬる哉　源重之

新葉集

しぐれより猶ほさだめなくふる物はおくるゝおやの涙なりけり　中務卿宗良親王

うなゐ松

恨めしないかなる世より親に子の先だつ道のありそめぬらむ　豐臣勝俊

同

時のまも見ねばいづらとさわがれし人に別れて幾日經ぬらむ　同

〔思ひきや云々〕殘る甲斐なき老人が生き殘りて、子の死を泣き悲しまむ物とは思はざりきとの意也。
〔あつめよと〕螢を集めて苦學せし晉の車胤の故事也。
〔いさめし〕訓誡せし意なり。
〔こがるゝ〕亡き子を慕ふ意にて、螢火の縁語なり。
〔この別路〕此の別に、子の別を兼ねて云へる也。
〔さもこそは云々〕成程我身は人に劣れる身なり、我が子にさへ後れたりとの意なり。
〔恨めしな云々〕いつの世より子が親に先立つ如き反對なる道が始まりしならむと也。
〔いづら〕何處。

醍醐天皇御製

續古今集

春深きみやま櫻もちりぬればよをうぐひすのなかぬ日ぞなき

〔春深き云々〕み山櫻も散りぬればとは、延長元年三月文彦太子の薨去ましましゝを云ふ。四句は世を憂く思ふ意を兼ねたり。

玉葉集　　清愼公實賴

九重も花のさかりとなるなかにわが身ひとつや春のよそなる

〔九重〕禁中を云ふ。〔春のよそ〕子の喪に籠れる意也。

家集　　伊勢

春は花秋はもみぢと散しかばたちかくるべきこのもともなし

〔春は花云々〕春と秋との兩度に、重ねて子を失へるを悲しめる也。末の下に、見の許の意を合みて、寄處なきを歎けり。

上東門院

後拾遺集

見るまゝに露ぞこぼるゝおくれにし心もしらぬなでしこの花

〔露ぞこぼるゝ〕涙の露の零るゝ意。〔おくれにし心〕子に後れて生き殘り居る心を云ふ。

正木葛　　三浦元連

ふるすかい松ぞつれなき見るたびにすがりしものを撫子の露

雲錦集　　賀茂季鷹

撫子の花もまがきに殘らずばなににこゝろをなぐさめてまし

〔撫子の云々〕子を失ひし宿の間垣の邊りに、咲き殘れる撫子をせめての形見と思へる心ばへなり。

三草集　　少將源定信

明日よりは何をたのみにながめまし嵐にかれしなでしこの花

詞花集　　　　　　　　　　　　　　　　　　待賢門院安藝

人しれず物思ふをりもありしかどこの事ばかり悲しきはなし

果葉集　　　　　　　　　　　　　　　　　　田邊通直妻

一年もすぎぬかふこのいのちには桑こきたれて母ぞ泣くなる

拾遺集　　　　　　　　　　　　　　　　　　平　兼盛

なよ竹の我子のよをばしらずしておほしたてつと思ひける哉

明日香井集　　　　　　　　　　　　　　　　參議雅經

ぬば玉のこの黒髪をかきなでておもひし末にかゝるべしとは

うなゐ松　　　　　　　　　　　　　　　　　豐臣勝俊

黒髪も長かれとのみかきなでしなど玉の緒のみじかゝりけむ

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　同

夜の鶴やみになくねをいかばかり苔の下にもあはれとやきく

明日香井集　　　　　　　　　　　　　　　　參議雅經

苔の下も見る心地する面かげにはぐくみたてし袖ぞくちぬる

「人知れず云々」従来に、人に知られぬ心の中の苦悶も多かりしかど、子を失ひし苦悶ほど悲しきは無しと也
「かふこ」飼ふ蠶の義にて子の事に云へる也。
「桑こきたれ」桑の葉を掻き落す意にて、涙に掻きくるゝを云ふ。
「なよ竹の」次句の世（節）に掛け、下句の生ふし立つに利かせたる詞也。
「ぬば玉の」黒に言ひ掛くる枕詞也。
「おもひし末云々」未来の栄えを思ひ居りしに、それに違反せりとの心ばえ也。
「玉の緒」命を云ふ
「夜の鶴」四六三頁に註せり。
「苔の下」地下。

金葉集

もろともに苔の下にはくちずして埋もれぬ名を見るぞ悲しき　　和泉式部

拾遺集

忘られてしばしまどろむ程もがないつかは君を夢ならで見む　　中務

後拾遺集

うたゝねの此よの夢のはかなさにさめぬやがていの命ともがな　　藤原實方朝臣

同

殘しおきてたれを哀と思ふらんこはまさるらんこはまさりけり　　和泉式部

土佐日記

なかりしも有つゝ歸る人の子のありしもなくてくるが悲しさ　　紀貫之

果葉集

人の親の心をやみにたとへしも月見てはれぬおもひにぞしる　　□□因命

萬葉集

まき柱ほめてつくれる殿のごといませ母とじおもかはりせず　　坂田部首麻呂

「もろ共に云々」我が子の小式部内侍と共に死して地下に朽ちずして、小式部の埋れぬ名を見るが悲しと也。埋れぬ名とは、集の詞書に、「小式部内侍失せて後、上東門院より年頃賜はりける衣を、亡き跡にも遣はしたりけるに、小式部内侍と書き付けられたるを見て詠める、」とあり。「殘し置きて云々」集の詞書に、「小式部内侍なくなりてうまご共の侍りけるを見て詠める、」とあり。「こは增るらむ」子供をば最も哀れと思ふならむ、との意也。「おもかはりせず」年寄にならずの意也

〔春草は云々〕春草は美しけれど後には枯れ果つる慣ひ也、我が君は巖の如く常盤に坐しませと也。
〔心ある云々〕心ある君が爲には、花も色香を添へて歡び迎ふるならむとの意なり。
〔やしはご〕玄孫を云ふ。俗に謂ふ、やしやご也。
〔垂乳根〕母の枕詞轉じて親の稱。
〔道のしるべ〕茲にては親の教訓の意なり。
〔おふしたてし〕親の教育に依りて我は斯様に君の惠を受くる身とは成れりと也。
〔報いむ物か〕恩返しは成し了へたりと謂ふべきに非ずとの意也。

萬葉集
春草は後はうつろふいはほなすときはにいませたふとき我君　市原王

風山詠草
心ある君を木かげにまちとりて花もいろ香を今日はそふらん　權中納言源綱條

うけらが花
八千年のよはひを經つゝやしは子のその玄孫も君ぞ見るべき　橘千蔭

續古今集
垂乳根の道のしるべの跡なくば何につけてか世につかへまし　前大納言爲家

古郷紀行
おふしたてし親なかりせばいかにして君の惠を我はうくべき　平景隆

六帖詠草
家富みてあかぬことなくつかふともむくいむ物かおやの惠は　小澤蘆庵

新千載集
七十ぢの老の坂までおひそへる親のまもりに身をもたてつゝ　按察使實繼

篠の葉草
やすかれと思ふこの身ぞあづさ弓八十ぢにちかき親の爲なる　源　貞辰

續古今集
たらちねの心のやみをしるものは子をおもふ時の涙なりけり　前大納言　基長

新千載集
人の子の親になりてぞわが親のおもひはいとゞ思ひしらるゝ　康資王母

六帖詠草
子をおもふ道にまどひていまぞしるちゝぶの山のふかき恵を　小澤蘆庵

同
惜からぬ命ながらも垂乳根のある世はかくてあるよしもがな　同

近世名家集
惜からぬ身ぞをしまるゝたらちねの親の殘せる形見と思へば　元政

續後撰集
老らくの親の見る世と祈りこしわがあらましを神はうけゝむ　前大納言　爲家

〔安かれと云々〕我が身を安かれと思ふも、八十歳に近き親の爲にてありとの意。梓弓は、やの枕詞なり。

〔たらちねの云々〕親の心の闇を知るものは、我が子を思ふ時の涙也との意にて、俗に子を持って知る親の恩の謂也。

〔人の子の云々〕子を持ちて親に成りて初めて我が親の有難さは思ひ知らるゝと也。

〔ちゝぶの山云々〕秩父の山に父を寄せたる也。深きとは其山の奥深き縁語なり。

〔ある世はかくてと〕親の在る間は無事に長らへての意。

〔親の殘せる〕親より受けし身を云ふ

新千載集　　　　　　　　　　賀茂久世

たらちねの老の數のみいとはれてわが身をしらぬ年のくれ哉

門葉集　　　　　　　　　　鶴若丸

やゝつもるわが身の年を思ふにもまづたらちねの老ぞ悲しき

草庵集　　　　　　　　　　頓阿法師

荒き風ふせぐたよりをいかゞせん老木のはゝそ朽ちはてぬ間に

新葉集　　　　　　　　　　文貞公

蔭よわるはゝその紅葉いかならんこのした道の荒れはてしより

後鳥羽天皇御製
增鏡

たらちねの消えやらでまつ露の身を風より先にいかでとはまし

句題和歌　　　　　　　　　　大江千里

秋の日は山の端ちかしくれぬ間に母に見えなんあゆめあが駒

萬葉集　　　　　　　　　　大伴宿禰家持 代妻

白玉のみがほし君を見ずひさにひなにしをれば生るともなし

「たらちねの云々」親の老い行く年の數のみ心憂く厭はれて、我身には年の積るをも知らぬ年の暮かなと也。

「やゝつもる云々」我が年齢の重なるにつれて、父母の年の老い増るを悲しと思ふと也。

「老木の柞云々」年寄の母の死歿せざる間にの意。

「蔭よわる云々」年寄りて衰へ行く母は此頃如何に坐すらむ我は奸賊の爲に流人となりて斯く東の果に幽閉せらるゝ身となりしよりとの意也。

「風より先に」無常の風の誘はぬ先にの意也。

「見がほし」見度いとの意なり。

「ひな」邊鄙の地。

萬葉集　　中臣部國足
月日夜はすぐはゆくともあもしゝが玉の姿はわすれせなふも

同　　丈部眞麻呂
時々の花はさけどもなにすれぞはゝとふ花のさきでこずけむ

同　　詠人不知
足乳根の母が手離れかくばかりすべなき事はいまだせなくに

後撰集　　八歳女
神無月時雨ふるにもくるゝ日を君まつほどはながしとぞ思ふ

太平記　　八歳宮 恒良親王
つく〲〵とおもひくらして入相の鐘をきくにも君ぞこひしき

續拾遺集　　平政家
信濃なるそのはらにこそあらねども我がはゝきぎと今は頼まん

萬葉集　　阿部朝臣老人
天雲のそぎへのきはみわがそへる君にわかれん日ちかづきぬ

〔月日夜は云々〕あもしゝは父母、なふもは無くとものの意、萬葉時代に於ける東國の方言なり、意は年月の立てども父母の尊顏は忘られずと也。

〔時々の云々〕なにすれぞとは、何に爲る事ぞの意、こずけむは來ざりけむの約、時々の花は咲きても母の樂しまずは甲斐なしとの意也。

〔すべなき事〕術なきの義、筋の無い事の意なり。

〔神無月〕十月。

〔つく〲〵と〕三句に入相の鐘と云へる緣にて、撞くづくと云へる也。

〔園原〕信濃の名所に、其腹(同腹)の意を掛けし也。

〔そぎへ〕極れる所

［父母の云々］父母の住む宿の裏庭に生ひたる百世草の名に背て、百世までも生き長らへて、我が歸る日を待ち給へと也。
［父母え］えは、よと云ふに同じ。
［みづく白玉］水漬く白玉の義、海中の眞珠。
［たゝみけめ］上句は母を云はむ爲めの序、懐かしき母の許を離れ行く悲しみを述べし也。
［花にもがも］花であって欲しいとの意。
［さゝごて］捧げての方言なり。
［あもとじ］母刀自
［みづら］髻、上古の結髪の稱。
［水鳥の］たちの枕詞なり。

萬葉集

生玉部足國

父母の殿のしりへのもゝよ草もゝよいでませわがきたるまで

同

川原蟲麻呂

父母えいはひて待たね筑紫なるみづくしら玉とりてくまでに

同

生部道麻呂

たゝみけめむらじが礒のはなりその母を離れてゆくが悲しさ

同

丈部黒當

父母も花にもがもやくさまくら旅はゆくともさゝごてゆかむ

同

津守宿禰小黒栖

あもとじは玉にもがもや戴きてみづらの中にあへまかまくも

同

上丁牛麻呂

水鳥のたちのいそぎに父母に物いはずけにていまぞくやしき

同

川上巨老

旅ゆくにゆくとしらずてあもしゝにこと申さずて今ぞ悔しき

萬葉集
我が母の袖もちなでてわがからになきし心をわすらえぬかも　物部乎刀良

同
父母がかしらかきなでさくあれていひし詞ぞわすれかねつる　丈部稻麻呂

同
わすらんと野ゆき山ゆきわれくれどわが父母は忘れせぬかも　商長首麻呂

平家物語
薩摩がた沖の小島にわれありとおやには告げよ八重のしほ風　康頼入道

道行振
たらちねの親に告げばぞあらしてふ岩國山も今日はこえぬと　源貞世

萬葉集
津の國のうみの渚に舟よそひたしでもときにあもがめもがも　丈部足人

同
難波津に裝ひ／＼て今日のみやいでてまからん見る母なしに　丸子部連多麻呂

「そでもちなでゝ」袖持ち撫でゝ也。「我がからに」我が故にの義、我が身の爲めにの意也。「忘らえぬ」忘られぬに同じ。「さくあれ」さきく有れの義、幸福なれとの意也。「わすらむ」と云ふ忘れむと同じ。以上の萬葉の歌は、何れも東國の兵士が筑紫の防人（さきもり）として、沿岸防禦の兵に赴く折に詠める親子の別れの歌也。「沖の小島」硫黄が島也。俊寛、成經、康頼の三人、淸盛の爲に流罪に處せられし時の歌也。「岩國山」周防國に在り。「あもがめもがな」今一度母の御目に掛り度しと也。

「ぬさまつり」幣奉りの義、幣帛を捧げての意なり。
「いはふ命」齋ふは祈るに同じ、我が命の安泰を神に祈る意なり。
「おもちゝ」母父。
「天地の云々」天地のどの神を祭りて祈願せば、我が慈母に今一度物言ふ事を得べきかと也
「面影に見ゆも」最終の「も」は感詞。
「もろこしの云々」此歌は榮西禪師が支那に在りて故鄕の母を思ひて詠める也。楷に子を含め、柞に母を寄せたり。
「夏草の葉は」葉はに母を掛けし也。
「いくべき方」活くべきに、往くべきを掛けし也。
「垂乳根」父母。

萬葉集　神人部子忍男

ちはやぶる神のみ坂にぬさまつりいはふ命はおもちゝがため

同　大伴部麻與佐

あめつちのいづれの神を祈らばかうつくし母に又こととはむ

六帖詠草　小澤蘆庵

父母の旅なる我を思ふらん侍つらんさまのおもかげに見ゆも

雲葉集　權僧正榮西

もろこしの楷もさびし日の本のはゝその紅葉ちりやしぬらん

金葉集　詠人不知

露の身の消えもはてなば夏草のはゝいかにしてあらんとすらむ

十訓抄　小式部內侍

いかにせんいくべきかたも思ほえず親に先だつ道をしらねば

喪父詞　豐臣勝俊

さきだたばいかに歎かんたらちねの子を思ふ道は我も知りぬる

まかりつるに　源重之子僧
いかにせんはゝその杜の老木よりなほ下草のかれぬべき身を

家集　相模
都なるおやを戀しと思ふにもいきてのみこそ見まくほしけれ

續千載集　津守國冬
よしさらばこのたびつきねわが淚またもあるべき別ならねば

家集　源兼澄
しでの山かへる〳〵もしるべせばおやの先にぞ我はたゝまし

拾玉集　前大僧正慈鎭
みなしごのたぐひ多かる世なれども唯我のみと思ひ知られて

玉葉集　從二位倫子
あらし吹くみ山の里に君をおきて心もそらに今日はかへりぬ

當山詠草　贈大納言源光圀
わくらはにとふ人もなき山の奥にひとりも君をすてゝゆく哉

〔いかにせむ云々〕老いたる母よりも其の下草の枯れなむとするを如何にせむとの意にて、母に先立つ己が身を悲しめる也。〔いきてのみ〕活きてに、往きてを兼ねたる也。〔このたびつきね〕此度の悲しさに泣く〳〵淚よ盡き果てよとの意なり。〔かへる〳〵〕返す返すに同じ、丁寧にの意也。〔みなし子の云々〕初句は親なし子也孤兒は世に多からむも、我のみ孤兒の心地して親が戀しと也。〔み山の里〕山里の墓所を云ふ。〔わくらはに〕稀に。〔山の奥〕これも墓所を云ふ。

新葉集
おくれじと思ひし道もかひなきはこの世の外のみよし野の山　中務卿宗良親王

玉葉集
歸りてはまづたらちねを見し物を今日は誰にか逢んとすらん　源　道　濟

新古今集
今はさはうき世のさがの野べをこそ露きえはてし跡と忍ばめ　皇太后宮太夫俊成

果葉集
身にはまだしらぬ涙のふぢ衣かゝるたもとぞはじめなりける　□　□　重　堅

新古今集
露をだにいまはかたみのふぢ衣あだにも袖を吹くあらしかな　藤　原　秀　能

續拾遺集
限りあれば我とはそめぬふぢ衣なみだのいろにまかせてぞきる　祝　部　成　茂

拾遺集
かぎりあれば今日ぬぎすてつ藤衣はてなきものは涙なりけり　藤原道信　朝臣

〔おくれじと云々〕何事も親に從ひて後れじと思ひし心も、其甲斐なくなれりと也。此世の外とは後醍醐天皇の此世を神去り給ひしを云ふ。
〔かへりては〕外出して家に歸りては常に親に逢ひし物をとの意なり。
〔今はさは〕今はさらばの意なり。
〔さがの野べ〕京都なる嵯峨野、中古墓地ありし所也。
〔ふぢ衣〕藤衣は喪服なり。
〔限あれば〕集の詞書に「父充仲みまかりける頃、社のならひにて着服せぬ事を歎きて詠める」とあり。
〔かぎりあれば〕着服の時日は令に制定あるを云ふ。

〔見るからに云々〕死後の遺品を見て感を催せる也。涙の玉櫛笥と續け、櫛笥の緣に因りて身に云ひ掛けし也

〔たらちねの云々〕初句は親の枕詞、いさめは數への意なり。親の數へし形見の琴の技藝に一層親を偲ぶ心也

〔たらちねや云々〕若し親の命に代らむとして、代り得べき事ならば、我が死せる後、親は此世に止まりて、我が死を慟哭するならむと也。

〔垂乳根の云々〕親の老後に生れし我は、親に久しく添はれぬが悲しと也

〔片丘〕墓地の名を見る事の難き意に云ひ掛けし也。

〔玉櫛笥〕蓋の冠辭

玉葉集　　権大納言　内經

見るからに落る涙の玉くしげ身につたふべきかたみなりけり

續拾遺集　　藤原公世朝臣

たらちねの親のいさめの形見とて習ひし琴のねをのみぞ泣く

新千載集　　藤原業清朝臣

たらちねの跡にのこりて笛竹のよにはしられぬねこそなかるれ

千載集　　顯昭法師

たらちねやとまりて我を惜まゝしかはるにかふる命なりせば

玉葉集　　前中納言爲相

垂乳根の老いよはひに生れあひて久しくそはぬ身をぞ恨むる

新千載集　　権中納言基隆

夢にだにあひ見ることは片丘のあはれ親なき身となりぬる

金葉集　　詠人不知

玉くしげかけごに塵もすゑざりし二親ながらなきぞかなしき

家集

泣々も別れし時をわかれにてわかるゝおやのなきぞかなしき　賀茂眞淵

拾玉集

墨染の袖をぞしぼるたらちねのあらましかばと思ひつゝけて　前大僧正慈鎮

千首

あはれてふ事につけつゝ口のはに我が足乳根のかゝらぬはなし　中務卿宗良親王

續拾遺集

足ちねのあらばあるべき齢ぞとおもふにつけて猶ぞこひしき　從二位能清

新後撰集

たらちねのありしその世にあはれなど思ふ計りも仕へざりけん　天台座主道玄

正木葛

あはれなり曉ふかくおきいでて今はつかへんたらちねもなし　岡本道壽

新後撰集　龜山天皇御製

大井川ゆくせのなみもおなじくば昔にかへれきみがかげ見む

〔泣々も云々〕泣き乍らも生別せし時を此世の別れとして、更に死別れする親の無きが悲しと也。

〔あらましかばと〕此世に生きて居たならばと願ふ意なり。

〔あはれてふ云々〕哀れと云ふ事につけては、いつも口のはに親の事が言ひ出でらると也。

〔足乳根の〕親が生きて居らば、今年は何歳也と思ふにつけても猶戀しさの増る事よと也。

〔たらちねの〕兩親の在世中に何故に心ゆく程孝行せざりけむと也。

〔大井川〕山城國の名所、桂川の上流。

〔君が影〕父帝の御姿を云ふ。

「たらちねの」未だ父母在世の時に、親の亡き後の事を想像せしが、誠に親の歿後に際して見るに、想像せしよりも增りて戀しく悲しと也。
「ひつち穗」刈りたる後に、再び自生して實る稻を云ふ卽ち「ひつち」は親の無き稻なれば、それを見て、我が亡父を思ひ出でし心なり。
「箒木」信濃國園原に生ふる木の名也此木は遠くより見て、近づけば分き難くなるとの傳說に因りて詠める也
「あらぬこのめ」子の眼に、木の芽を掛けたる也。
「しらる計」世に知られる程の譽にても詠み度しと也。

續古今集
たらちねのなからむ後の悲しさをおもひしよりも猶ぞ戀しき　前大納言爲家

果葉集
なき跡にものおもひ草植ゑずともこはわするべき親の上かは　「　」普隆

雲玉集
我が宿の門田の早苗(わせ)のひつちほを見るにつけても親ぞ戀しき　曾根好忠

正木葛
面影を寫しとめつゝはゝきぎのあるかと見てもなきぞ悲しき　松山富久

漫吟集
蔭とせしはゝそはかれて春雨にあらぬこのめのなに潤ふらむ　阿闍梨契沖

正木葛
去年のけふはゝその杜の枯しより賴むかげなく袖ぞしぐるゝ　月野木淸興

新葉集
散りはてしはゝその杜のなごりともしらる計りのことのはもがな　中務卿宗良親王

従二位隆教

新千載集

たらちねのあらばといとゞかきくれて涙にまよふ敷島のみち

前大納言實之

歌仙落書

教へおく其のことの葉を見るたびに又とふかたのなきぞ悲しき

藤原隆祐朝臣

續古今集

ことの葉は身にこそしらねたらちねの形見計りにとふ人もがな

前大納言爲氏

新後拾遺集

垂乳根のありていさめし言の葉はなき跡にこそ思ひしらるれ

兵部少輔中原遠忠

百番自歌合

かひなしや親のいさめしふることを老いてぞ更に思ひしりぬる

丹波長有朝臣

新後撰集

傳へ來てことのはにこそのこりけれおやのいさめし道芝の露

逍遙院内大臣實隆

新後拾遺集

忘られぬおやのいさめのことのはぞしのぶのつゆの置所なる

〔たらちねの云々〕父が世に在らば、歌の道に斯くは迷はじ物をと思ふも涙の種也と云ふ程の意なり。

〔とふかたのなき〕質問すべき親の亡きを云ふ。

〔ことの葉は云々〕歌道の事は、我れ自身は心得とてもなけれど、親より傳へられし事だけは、せめて問ふ人もあれかし、さらば後世にも言ひ傳はらむと也。

〔ありていさめし〕在世中に教へ賜はりし訓誡の言葉は、その殁後に思ひ知らると也。

〔かひなしや〕老人になりて、今更に親の訓誡を思ひ出でしが、最早何の甲斐もなしと也。

永正四年御百首
愚なる我ぞかひなきたらちねのいさめしことは忘れはてねど　前中務少輔季經

百首
愚なる身を歎くにもたらちねの親のいさめを戀ひぬ日はなし　慈照院左大臣義政

續拾遺集
わかれをば一夜の夢と見しかどもおやのいさめぞ絶えて久しき　從二位顯氏

續後撰集
たらちねの親のいさめのかず／＼に思ひ合せてねをのみぞ泣く　前大納言爲家

新千載集
そむきけむ親のをしへのかなしきにはるゝ計りの道をみせばや　前大納言爲家

同
上りえぬこの一坂はたらちねのいさめし道やふみたがへけむ　權中納言爲明

續拾遺集
在しよの親のいさめの儘ならばくやしく身をば歎かざらまし　前大納言爲氏

「愚なる云々」亡き親の訓誡は今も忘却せざれど、愚昧にして行ひ難き身の甲斐なさよ、と謙遜して悲しめる心ばへ也。

「わかれをば云々」死別は一夜の夢の如き心地すれど、その親の訓誡は久しく殘れりと也。

「そむきけむ云々」親の在世中、その訓誡に背きし事を今更悔しく悲しく思ふ事なるにつけて、其の悲しさを消滅せしむる程の道を講じ度しと也

「上りえぬ云々」亡き親の教への道を踏違へしに依りて此の〔子の〕一坂が上り得られぬならむと也。

「歎かざらまし」歎く事あらじの意。

〔悔しくもあるか〕あるかの「か」は哉に同じ。
〔かぞいろ〕父母を云ふ。
〔たらちねの云々〕親の訓誡を受けしは、今は昔になりて、老耄し果てし身の悲しさよと也
〔あはれにも云々〕若き頃、轉寢などするは宜からずと訓誡せられしが、其の轉寢をせし夢に亡き親の面影に逢へるも悲しと也
〔物思ふ〕前の歌に略ぼ同じ心也。
〔世はことに〕幽顯處を異にせるを云ふ。
〔ありて見しよ〕兩親の未だ世に在りし時に見し月夜の意なり。
〔みしよの秋〕親と共に見し時の秋」

心珠詠草　　　　　　　　　　　　三光院内大臣實枝
物毎にくやしくもあるかかぞ色のいさめし頃は思ひしらずて

新撰六帖　　　　　　　　　　　　前左京權大夫行家
たらちねのおやのいさめも昔にて身はおひほれの果ぞ悲しき

新葉集　　　　　　　　　　　　　右近大將長親
あはれにもなき面影のかよひける親のいさめしうたゝねの夢

槑葉集　　　　　　　　　　　　　［　］正善
物思ふわがうたゝねをたよりにていさめし親を夢に見しかな

家集　　　　　　　　　　　　　　源　道濟
世はことになりにけれども足乳根の同じ樣にて夢に見えける

新千載集　　　　　　　　　　　　前大納言爲氏
たらちねのありてみしよは隔たれど忘れぬ影ぞ月にことゝふ

新後撰集　　　　　　　　　　　　中臣祐親
足ちねのおやのみしよの秋ならば月にも袖はしぼらざらまし

拾遺風體集

昔にもなさじとぞ思ふたらちねの名殘をしらで行く月日かな　前中納言爲相

夫木抄

足乳根のあととて見れば小倉山むかしの庵ぞこけにのこれる　法眼慶融

新拾遺集

たらちねのむかしの跡とおもはずば松の嵐やすみうからまし　前大納言爲家

新千載集

嬉しきに先づ昔こそこひしけれはゝそのもりを見るにつけても　權僧正永緣

新古今集

昔だにむかしと思ひしたらちねの猶ほ戀しきぞはかなかりける　皇太后宮大夫俊成

拾玉集

いわけなき其のかみ山に別れにし我がたらちねの道を知らばや　權大僧正慈鎭

新勅撰集

行末にかゝらむ身とも知らずしてわがたらちねの生し立てけむ　源師光

〔昔にも云々〕親の死を過去の事とせずして何時までも名殘を惜しみ、それをせめてもの心やりと爲むと思ふ物を、心なくも過ぎ行く月日かなとの意なり。

〔小倉山〕京都の西山を云ふ。

〔たらちねの云々〕此の松の嵐のみ吹く庵も、親の住み居りし跡と思へば淋しとも思はずと云ふ程の意也。

〔嬉しきに〕集の詞書に、「未だ凡僧に侍りける時、母の常に維摩會の講師せむを見ばやと申しけるに、身まかりて後程なく彼の講師給はりて奈良へ下りけるに、柞の杜を過ぐとて詠める、」とあり。

後撰集　　　　　　　僧正遍昭
垂乳根はかゝれとてしもぬば玉の我が黒髪を撫でずや有りけむ

うけらが花　　　　　　　橘千蔭
たらちねの撫でしむかしをわすれねばかきも拂はぬ元結の霜

續古今集　　　　　　　前大納言爲家
けふ迄もうきは身にさふさがなれば三年の露の乾くまもなし

伏見天皇御製
新後拾遺集
數ふれば十年あまりの秋なれどおもかげちかき月ぞかなしき

三草集　　　　　　　少將源定信
かぞいろいまさばとばかり老らくのけふの筵に敷き偲ぶかな

東歌　　　　　　　橘(たちばなの)枝直(えなほ)
嬉しくも老いぬればこそたらちねの五十年(いそとせ)の御靈けふ祭りけれ

〔垂乳根は云々〕こは遍照が剃髪の時詠める歌也。両親は我が幼年の折、此の髪を斯く剃り落せよとて撫でゝ育で給はざりしならむにとの意也。
〔元結の霜〕白髪を云ふ。
〔けふ迄も云々〕集の詞書に「前中納言定家身罷りて後三年の佛事を嵯峨の家にし侍りけるに遣はしける、入道前太政大臣、今日と云へば秋のさがなる白露も更にや人の袖濡らすらむ、返し、今日迄も云々、」とあり。
〔かぞいろ〕父母を云ふ。
〔おいらく〕老ゆるの延言也。老と云ふに同じ。

同贈答歌

花山天皇御製
詞花集
よのなかにふるかひもなき竹の子は我が經むとしを奉るなり

冷泉天皇御製
同
年へぬる竹の齡をかへしても子のよを長くなさむとぞおもふ

後龜山天皇御製
新葉集
かくていみたえずきかばやそのかみの秋おもほゆる峯の松風

嘉喜門院
同
あはれとも君ぞきゝける今ははや吹きたえぬべきみねの松風

嘉喜門院
同
よつのをゝ調にそへし松風は聞きしにもあらぬねにやありけむ

後龜山天皇御製
新葉集
松にふくかせはむかしの秋ながら半のつきやおもがはりせし

〔よのなかに云々〕集の詞書に、「冷泉院に筍奉らせ給ふとて詠ませ給ひける、」とあり。世に在る甲斐も無き我身なれば、今後の筍は父君に奉らむとの意也。
〔かへして〕返却しこの意也。
〔子のよ〕我子の齢に、此の世を兼ねたり。
〔後龜山天皇〕長慶天皇の誤なり。次に松に吹く風云々の御製、及び次頁なるも亦同じ。
〔峯の松風〕松風とは琴の異名也。茲にては琵琶を云ふ。
〔よつのを〕四絃の義にて琵琶を云ふ。

萬葉集　月下部使主三中之母（くさかべのおみみなかのはゝ）

家にして戀ひつゝあらずば汝（な）が佩（は）ける太刀に成ても祝ひてしがも

同　月下部使主三中

たらちねの母を別れてまこと我れ旅のかりほに安くねむかも

新葉集　後龜山天皇御製

をしむにもよらぬわかれはうきものと君故花や思ひしるらむ

嘉喜門院

同

あかずしてわかれしまゝにとゞめ置きし心や花を誘ひきぬらむ

宇治拾遺物語　謙德公　伊尹

人しれず身はいそげども年をへてなど越えがたき逢阪の關

同　九條右大臣　師輔

東路にゆきかふひとにあらねどもいつかはこえむ逢阪のせき

千載集　中納言定頼

故鄕の板間のかぜにねざめして谷のあらしをおもひこそやれ

〔戀ひつゝあらずは〕汝を戀ひつゝあらむよりはの意也。
〔いはひてしがも〕いはひは齋ふ義なるが、此歌にては汝を守護し度しとの意に云へる也。
〔たらちねの云々〕母を家に殘し置きて、我一人旅の假庵に安眠せむか、安眠なり難しと也
〔をしむにも云々〕此歌は門院入内ありて、急ぎ歸られたれば、翌日花の一枝に添へて贈り給へる歌也。
〔嘉喜門院〕後村上天皇の中宮、長慶、後龜山二帝の御母に坐す。
〔逢阪の關〕逢ひ見る意を籠めて云へる也。
〔板間の風〕板戸の隙漏る風なり。

千載集
谷風の身にしむごとに故郷のこのもとをこそおもひやりつれ　　大納言公任

家集
雲拂ふかせにつけても山里のつきかげいかにさえて澄むらむ　　康資王母

同
風はやみさえもさえずも山里はみやこの月ぞおもかげにたつ　　女

風雅集
子をおもふ心や雪にまよふらむ山のおくのみゆめに見えつゝ　　皇太后宮大夫俊成

同
打もねずあらしの上の旅まくらみやこの夢にわたるこゝろは　　前中納言定家

源重之集
千年ふるこつるの池もかはらねばおやの齡をおもひこそやれ　　源致親

同
千年をばひなにてのみや過すらむこつるの池ときゝて久しき　　源爲親

〔谷風の云々〕我は又谷風の寒く吹く毎に、故郷の子の上を思ひやるとの意なり。
〔雲拂ふ云々〕雲吹き掃ふ風につけても月影は冴え増りて、山里に住む身は一入寒さを覺ゆるならむと也。
〔風もやみ云々〕風の吹かぬ日も寒き日も寒からぬ日も常に都に在す母君を戀しく思ひ暮すのみと也。
〔子を思ふ云々〕子を思ふ心は雪に迷ふならむか、雪の積る山里のみ此頃は夢に見ゆと也。
〔こつるの池〕陸奥の名所なり。子鶴の意に通はして云へり。
〔千歳をば〕子鶴の縁にて云へる也、

〔老ぬれば云々〕さらぬ別とは、脱れ難き離別の意にて死に別れを云ふ。
〔世の中に云々〕親は千年も生きてましませと祈る子の爲めに、世の中に死別と云ふ事が無くて欲しと也。
〔諸共に云々〕他に思ふ人（係累）なくば、一緒に死に度しと也。
〔君が爲め云々〕父君をして悲歎に沈ましめじと思へば愈死の苦痛に堪へずと也。
〔涙を添へ（二）〕道芝の露さへ分け難きに、其露に涙の露をさへ添への意也。
〔荒き風云々〕今迄は我ありて、何事につけても庇護せしがの意也。

古今集　伊豆内親王
老ぬればさらぬ別れもありと云へばいよ／＼見まくほしき君かな

同　在原業平朝臣
世のなかにさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子の爲め

新拾遺集　祝部成仲
諸共に越えましものを死出の山又おもふひとなき世なりせば

同　女
君がためいとゞ別の惜しきかなかゝるうきめを見せじと思へば

新葉集　興良親王
いかになほなみだをそへて分けわびむおやに先立つ道芝の露

同　中務卿宗良親王
われこそはあらきかぜをも防ぎしかひとりや苔の露拂はまし

明倫歌集 卷第三

夫婦歌

建速須佐之男命御詠
古事記
八雲立つ出雲八重垣つまごみにやへがきつくるその八重垣を

神武天皇御製
同
葦はらのしげこき小屋に菅疊いやさやしきて我がふたりねし

萬葉集
難波人葦火燒く屋は燥したれどおのが妻こそとこめづらしき　詠人不知

同
住の江の小集にいでてうつゝにもおのが妻すらを鏡と見つも　同

玉葉集
女郎花我がしめゆひし一本のほかにこゝろはうつさざらなむ　大納言長雅

〔八雲立つ〕素戔嗚尊、奇稻田姫を妃として出雲の須賀に大宮を造らせ給へる折しも、八重雲の起るを見給ひ其雲を序として宮殿の八重垣を造り給ふ事を詠ませ給へる也。
〔しけこき小屋〕醜き小家。
〔いやさやしきて〕能く清め敷きて也
〔燥したれど〕燥ぶりたれど也。
〔とこめづらしき〕常珍しきの義、常に廢りなく、永久に愛せらると也。
〔鏡と見つゝも〕己が妻を鑑鏡とすべき美人と見たりと也
〔我がしめゆひし〕我が占領せし、我妻と定めしの意。

〔かさねこし云々〕既に妻を重ねし事さへある君なれば此の上は外の色に心を移す如き行ひを爲す勿れと也。
〔つゝましき云々〕新婚の時の心を、行末長く忘るなとの意也。初句は耻かしきと云ふ程の意なり。
〔おきていかば〕我が最愛の妻を一人殘し置きて行かば妻は黒髪を枕にして此の長き夜を明しかねつゝ我を戀ふらむと也。
〔釧〕玉にて造れる腕輪を云ふ。
〔奥の手〕左手を云ふ。
〔いつまもが〕間假(イトマ)が欲しと也。
〔石見のや〕石見國高角山は人麿の故鄕なれば云ふ。

詠千集　　　　　　　　　　　　　　　　權大納言師兼
かさねこし妻だにあるをはなごゝろもまたこと色に心うつすな

三草集　　　　　　　　　　　　　　　　少將源定信
つゝましき新手枕のこゝろをばいもせのみちのすゑも忘るな

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　田部忌寸櫟子
おきていかば妹戀むかも敷妙のくろかみしきて長きこの夜を

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　振田向宿禰
我妹子は釧にあらなむ左手のわが奥の手にまきていかましを

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　物部古麿
我が妻も繪にかきとらむいつまもが旅ゆく我は見つゝ偲ばむ

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　柿本人麿
石見のや高角山の木の間より我が振るそでをいもみつらむか

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　同
笹の葉はみ山もさやにさわげども我は妹おもふ別れ来ぬれば

萬葉集
吾妹子をいざみの山を高みかも大和の見えぬ國とほみかも　石上大臣麻呂

同
山越の風を時じみぬる夜おちずいへなる妹をかけてしぬびつ　軍王

同
大伴のみつのはまなる忘貝いへなるいもをわすれておもへや　身人部王

同
さきもりに立ちしあさけのかなどでに手放れ惜て泣きし子等はも　詠人不知

同
闇の夜の行先しらずゆく我をいつきまさむと問ひし子らはも　同

同
大君のみことかしこみかなし妹が手枕はなれ夜たち來ぬかも　同

同
大君の命かしこみ出でくればわぬとりつきていひし子らはも　物部龍

〔いさみの山〕伊勢國なる山なり、之を「いざ見に云ひ掛けたり。
〔時じみ〕間斷なく常にと云ふ程の意なり。
〔ぬる夜おちず〕寢る夜遺ちず也。毎夜毎夜の意。
〔大伴の〕みつの枕詞なり。
〔みつの濱〕攝津の名所なり。
〔忘れて思へや〕思ひ忘れむや、忘れはせじとの意也。
〔さきもり〕埼守の義、防人也。前頁に註せり。
〔かなとで〕金戸出の義、固めたる戸口を出づる時。
〔闇の夜の〕闇夜の如く、先方のわからぬ意也。
〔わぬとりつき〕我に取り着きて也。

〔たちこもの〕起鴨のの義にて、立つの枕詞也。
〔たちの騒ぎ〕出發する時の取込み。
〔防人に云々〕防人（サキモリ）の事は既に註せり。立む騒ぎは前條の註に同じ
〔なるべきこと〕生計を立つべき業。
〔ふじの山び〕山びは、山邊に同じ。
〔いづち〕何方。
〔植竹の云々〕植竹のは、本の冠詞、とよみは、騒ぐ意いづしは何方（イヅチ）の方言なり。
〔おの妻〕己が妻。
〔おほゝしく〕鬱々として、と云ふ程の意也。
〔ありける船〕潮時を待ちて、出發せざる船の意。
〔しましくも〕暫時にてもの意也。

萬葉集
たちこものたちのさわぎに相見てし妹が心はわすれせぬかも　丈部與麻呂（はせつかべのよまろ）

同
防人に立（た）むさわぎに家の妹がなるべきこともいはず來ぬかも　若舍人部廣足（わかとねりべひろたり）

同
霞ぬるふじのやまびに吾來なばいづち向きてか妹がなげかむ　詠人不知

同
植竹の本さへとよみいでていなばいづしむきてか妹が歎かむ　同

同
おの妻を人の里におきおほほしく見つゝぞ來ぬるこの道の間（あひだ）　同

同
潮まつとありける船をしらずしてくやしく妹を別れ來にけり　同

同
筑紫路のかたの大島しましくも見ねば戀しきいもを置て來ぬ　壬生使主大嶋

〔吾妹子が云々〕我妻が結び呉れし衣の下紐は、年月を經て切れに了ふとも、妻に逢ふ迄は解かじと也。
〔つけし紐がを〕結び着けし紐の緒なり。
〔絶えにけるかも〕我が手して解けるにはあらで、月日を經て朽ち斷れたりと也。
〔しぬびにせよ〕思出にせよの意、此の結びし紐を見て妾を偲び給ひて、他の女に心を移す勿れと云ひて、の意なり。
〔いはの妹〕家の妹等の意、方言也。
〔風のと〕風の音。
〔まよび〕綻び也。
〔眞旅〕假初の旅に對する語、卽ち長旅の意なり。

萬葉集　　笠朝臣金村

吾妹子が結てし紐を解めやもたえばたゆとも直に逢ふ迄に

同　　上毛野牛甘

難波路を行て來ませと吾妹子がつけし紐がを絶えにけるかも

萬葉集　　朝倉益人

吾妹子がしぬびにせよと附し紐絲になるともわはとかじとよ

同　　詠人不知

いはの妹等わをしのぶらし眞結びに結し紐の解くらく思へば

同　　同

風のとのとほきわぎもがきせし衣袂のくだりまよび來にけり

同　　占部蟲麿

旅といへば眞旅になりぬ家のいもがきせし衣の垢づきにけり

同　　玉造部國忍

旅ごろもやつかさねきていぬれどもなほ膚寒し妹にしあらねば

萬葉集

あは雪の庭に降りしきさむき夜を手枕まかひひとり寐むかも　大伴宿禰家持

同
妹とありしときはあれどもわかれては衣手寒き物にぞ有ける　詠人不知

同
海原にうきねせむ夜はおきつ風いたくな吹そ妹もあらなくに　同

同
ぬば玉の妹がほすべくあらなくに我衣手をぬれていかにせむ　同

同
秋風は日にけに吹きぬ吾妹子はいつとか我をいはひ待つらむ　同

同
家風は日に〳〵ふけど我妹子がいへごともちて来る人もなし　丸子連大歳（まろこのむらしおほとし）

同
蘆垣のくまどに立て我妹子がそでもしほゝになきしゝのばゆ　刑部直千國（おさかべのあたひちくに）

〔あは雪の云々〕雪降り積みて寒き夜を、獨寐の床に妻を偲ぶ心也。まかひは卷きの延語也

〔妹とありし云々〕妻と共に在りし頃は、一人寐せし折も、別に何共思はざりしが、斯く別れて見れば衣手寒しと也。

〔ぬば玉の云々〕衣を濡らして、之を乾すべき妻も無き歎きを云へる也。あらなくには、在らぬにの意也。

〔秋風は云々〕日にけには、日を逐うての意、いつとかは、何時歸るとかの意也。

〔家風〕家の方より吹く風の意、家を戀しく思ふ心也。

〔家ごと〕家よりのことづてを云ふ。

〔春花の云々〕うつろふは散る事、月日よみつゝとは、月日を指折り數ふるを云ふ。
〔我妻は云々〕こひらしは、戀ふらし、かごは影、共に方言なり。
〔國々の社の神〕防人が歷行く國々の社の神を云ふ。
〔あがこひ〕贖乞の義、神に祈請する意なり。
〔草枕云々〕初句は旅の冠詞、妻に早く歸り來らむと言ひ置きしに、思はず年の經ぬる事よ、如何に我を待つらむとの意也。
〔たらし姫〕神功皇后の御名。
〔あらませば〕あつたならばの意也。
〔來ね〕來ねよの意

萬葉集
春ばなのうつろふまでに相見ねば月日よみつゝ妹待つらんぞ　大伴宿禰家持

同
我妻はいたくこひらし飲む水にかごさへ見えてよに忘られず　若倭部身麿

同
國々の社のかみにぬさまつりあがこひすなむいもがかなしさ　忍海部五百麿

同
草枕旅にひさしくあらめやといもにいひしをとしの經ぬらむ　詠人不知

同
たらし姫御船泊てけむ松浦の海妹がまつべきつきは經につゝ　同

同
ねば玉の夜わたる月にあらませば家なる妹に逢ひて來ましを　同

同
足引のやま飛びこゆる雁がねはみやこにゆかば妹に逢ひて來ね　同

〔常陸さし云々〕故郷の常陸國をさして行く雁が欲し、若し有らば我志を記し付けて妻に告げやらむと也。
〔我がもての〕我が面の義、我が顔の意なり。
〔忘れもしたは〕忘れもせばの意也。
〔さゆるの花〕小百合の花の方言。
〔かなしけ妹〕悲しき妹に同じ。悲しは懐かしき意也。
〔妹が門云々〕是も常陸より出でゝ防人に旅立つ折の詠也。二句は甚だ遠ざかりゆくの意也。
〔雲井に見ゆる〕遙々と遠く見ゆるを云ふ。
〔とこめづら〕常に賞はしき意也。
〔おろすゑ〕おろし据ゑの意なり。

萬葉集　物部道足
常陸さしゆかむ雁もがあが戀をしるしにつけて妹に知らせむ

同　占部小龍
我がもての忘れもしたは筑波根をふりさけ見つゝ妹はしぬばね

同　大舍人部千文
筑波根のさゆるの花の夜床にもかなしけ妹ぞ晝もかなしけ

同　詠人不知
妹がかどいやとほそきぬ筑波山かくれぬほどに袖は振りてな

同　同
遠くありて雲井に見ゆる妹が家に早くいたらむ歩め黒駒

同　若舍人部廣足
潮滿てば舟はそよそへ我つまのとこめづらしき行きてはや見む

同
難波津に御舟おろすゑやそかぬき今は漕ぎぬと妹に告げこそ

萬葉集
押照るや難波の津より舟よそひあれはこぎぬと妹に告げこそ　物部道足

拾遺集
波のうへに見えし小島の島がくれ行くうらもなし君にわかれて　笠金岡

古今集
唐衣きつゝなれにし妻しあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ　在原業平朝臣

萬葉集
鴨山の岩根しまけるわれをかもしらずと妹が待ちつゝあらむ　柿本朝臣人麻呂

太平記
故郷に今宵ばかりのいのちとも知らでや人のわれをまつらむ　藤原武時

萬葉集
かくのみに有りけるものを妹も我も千年のごとも頼みたりける　大伴宿禰家持

同
昔こそよそにも見しか吾妹子が奥津城ともへばはしき佐保山　同

〔押照るや〕難波の枕詞なり。
〔あれはこぎぬと〕我は漕ぎ出でぬと妻に告げよと也。
〔波の上に云々〕波の上に遙かに見えし沖の小島に船は近づきて、其の島の彼方に隱るゝ迄遠ざかりて妻に別るゝ心も無しと也
〔唐衣云々〕此歌は三河國八つ橋にて「かきつばた」の五文字を句の上に据ゑて詠まれし也。
〔鴨山の〕人麿の石見國にて死に臨みて、妻を思ひて詠める歌也。今我は鴨山の岩根を枕として死なんとするをも、妻は知らずして歸宅を待ちをるならむと也。
〔奥津城ともへば〕墓と思へば也。

〔衾路を云々〕衾路は引くの枕詞、引手山は大和の名所なり。生けりともなしとは、生きたる心地も無し、との意也。
〔野邊までに云々〕皇后宮崩御ましまし、其の御送葬の夜、雪の降りたるに詠ませ給へる御歌にて、野邊とは御葬送の野邊を云ひ、御幸に深雪を掛けて綾なし給へるなり。
〔秋さらば云々〕妻の死して後、其の形見となれる撫子を見ての歌也。初句は秋になればとの意也。
〔いやとほさかる〕愈々年月を經過すとの意也。
〔別れし星〕七夕の星の別れしを云ふ

萬葉集　　　　　　　　　　　　　　　　　柿本朝臣人麻呂

衾路を引手のやまに妹をおきて山路をゆけば生けりともなし

一條天皇御製
後拾遺集

野べまでに心一つは通へどもわがみゆきとは知らずや有るらむ

萬葉集　　　　　　　　　　　　　　　　　詠　人　不　知

秋山のもみぢあはれとうらぶれて入にし妹はまてど來まさぬ

萬葉集　　　　　　　　　　　　　　　　　大伴宿禰家持

秋さらば見つゝしのべといもが植ゑしやどの撫子咲にけるかも

新古今集　　　　　　　　　　　　　　　　清　愼　公　實賴

女郎花見るにこゝろはなぐさまでいとどむかしの秋ぞ戀しき

萬葉集　　　　　　　　　　　　　　　　　柿本朝臣人麻呂

去年見てし秋の月夜はてらせども相見し妹はいやとほさかる

後朱雀天皇御製
後拾遺集

去年のけふわかれし星もあひぬめりなど類なき我が身なるらむ

萬葉集

うつくしき人のまきてし敷妙の吾が手枕をまくひとあらめや　太宰帥大伴卿旅人

風雅集

秋風の身にしむばかりかなしきは妻なき床のねざめなりけり　祝部成仲

拾遺集

思ひきや秋の夜風のさむけさに妹なきとこにひとりねむとは　大貳國章

萬葉集

現にもおもひてしかもゆめのみに袂まきぬと見ればすべなし　詠人不知

朱雀天皇御製

玉葉集

獨寢にありしむかしのおもほえて猶はなき床をもとめつるかな

千載集

思ひやれむなしきとこをうちはらひむかしをしのぶ袖の雫を　藤原基俊

六帖詠草

馴れ〳〵しむかしにかへす夢さめて空しき床に殘るおもかげ　小澤蘆庵

「うつくしき云々」美しき人とは、ここにては愛せし亡妻を云ふ、彼の亡き妻の外には吾が手枕を貸す女にあらじと也。三句なる敷妙のは枕の冠詞なり。

「思ひきや云々」斯く秋風の寒き夜に一人寐むとは思ひ掛けざりきとの意にて、亡妻を憐み身を悲しめる也。

「現にも云々」夢にのみ亡き妻に逢ふと見るは甲斐なし、いかで其の夢を現に爲し度き事よと也。

「ありし昔」皇后の世に在しゝ昔を云ふ。

「むなしき床」妻の臥して居らざる床即ち獨寢の淋しき臥床を云ふ。

「たまなきの里」霊無きに掛けたる也　和泉式部の歌にも　亡き人の来る夜と聞けど君もなし我が住む里や玉なきの里、など詠めり。「行方なき」云々、行方の知られぬ霊に玉の小櫛を掛けて云へる也。「なほそのかみを」猶その昔の意に、櫛の縁にて髪の意を云ひ掛けし也。「ふるき枕」亡妻の残し置ける枕、李夫人の故事に出でし語なり。「枕づく」枕を共にする意にて、妻の冠詞とせる也。「朝鳥の」云々、朝鳥のは、音に鳴くと云はむ為めの序。なみは無きにの意「心むせつゝ」心むせかへりつゝの意也

菊葉集

妹恋て幾夜かぬれどゆめにだに見ぬたまなきの里ぞかなしき　[illegible]種世

新後拾遺集

行方なき玉のをぐしもかたみにて猶ほそのかみを忘れわびぬる　前大納言忠良

新拾遺集

今は我れ誰と共にかならぶべきふるき枕ぞ見るもかなしき　式部卿久明親王

萬葉集

家に行きていかにか我がせむ枕づく妻屋淋しく思ほゆべしも　山上憶良

家集

妹が門いでいるごとにはや行きてはやかへらこといひし人にも　小野古道

萬葉集

朝鳥の音のみやなかむ吾妹子に今またさらにあふよしをなみ　高橋朝臣名闕

同

吾妹子が植ゑし梅の木見るごとにこゝろむせつゝなみだし流る　大宰帥大伴卿

萬葉集
妹が見し樗(あふち)のはなは散りぬべし吾が泣く涙いまだひなくに　山上憶良

拾遺遺
いかにせむ忍(しのぶ)のくさも摘佗ぬかたみと見えし子だになければ　詠人不知

家集
緑子を見れば涙のかずそひてありしむかしぞいとゞこひしき　伊藤維禎

常山詠草
池水につがはぬをしの心をばいまぞ我が身のうへにしりぬる　贈大納言源光圀

家集
我が後をたのみし人はさき立ちて老にける身をいかにしてまし　小野古道

續後撰集　村上天皇御製
ふるほどもなくてきえにし白雪は人によそへて悲しかりけり

後撰集
なき人のともにしかへる年ならば暮行くけふはうれしからまし　中納言兼輔

〔妹が見し云々〕亡き妻を悲しむ我涙の未だ乾かぬ間に妻が愛せし樗の花さへ散りなむとすと也。

〔いかにせむ云々〕妻の形見と思ふべき子すら無き故に妻を偲ぶ思出に乏しきを如何にせむとの意也。

〔緑子〕幼兒也、茲にては妻の殘し置ける子を云ふ。

〔つがはぬをし〕配耦を離れたる鴛鴦鳥なり。

〔我が後を云々〕我が亡き跡を頼みし人の意、即ち妻に先立たれたる老の身の悲しきを云へるなり。

〔ともにし歸る〕新しき年の立ち歸ると共に亡妻も立ち歸らばの意也。

磐姫皇后

萬葉集

ありつゝもきみをば待たむ打靡くわが黒髪にしものおくまでに

同

同

かく計り戀つゝあらずば高山の岩根しまきて死なましものを

衣通郎姫

日本紀

我がせこが來べきよひ也さゝがねのくもい行ひ今宵しるしも

光明皇后

萬葉集

我がせことふたりみませばいくばくか此の降雪のうれしからまし

安部女郎

萬葉集

今更になにかおもはむ打靡きこゝろはきみによりにしものを

同

同

我がせこは物な思ひそ事しあらば火にも水にも我なげなくに

詠人不知

萬葉集

打日刺宮路をひとはみちゆけど我がおもふ人はたゞ一人のみ

「ありつゝも云々」仁徳帝を戀ひ給へる歌也。我は此處に在りて、白髪の老媼となる迄も君を待ち申さむとの意なり。

「我がせこが云々」初句は履中帝を指して云ふ。さゝがねは小蟹(ササガニ)の轉語にて蜘蛛の枕詞也、行ひとは行動の義、振舞と云ふに同じ。

「我せこと云々」初句は我が夫君の義にて聖武帝を指して云ふ。

「今更に云々」心は一と筋に君に寄せ參らせあれば、今更に彼是と何をか思ふべきと也。

「我なけなくに」我は水火の中に身を投ずるをも辭せざるべければの意。

〔敷島の云々〕天にも地にも一人より外に無き君を失ひし故に悲しみ堪まり無き也、我國に二人ある人ならば斯くは嘆かじと也

〔我が命云々〕惜しからぬ我が命も、君と契をこむるに依りて長壽せむ事を欲する也となりさにづらふとは、美しく榮ゆる意の語なり。

〔大船の〕大船の如くの意也。

〔あり磯〕荒磯。

〔ほかごころ〕他に移す心、變心。

〔黑髮の云々〕黑髮の白髮となる迄添ひ遂げむと結びし我心を、今更に解き捨てむやと也。

〔天雲の〕寄合の枕詞也。

〔さねぬ〕寢ぬ。

萬葉集
敷島のやまとのくにゝ人二人ありとしおもはゞ何かなげかむ　　詠人不知

同
我が命惜くはあらずさにづらふきみによりては長く欲りする　　同

同
大船のおもひたのめる君故につくすこゝろはをしけくもなし　　同

同
あり礒こえほかゆく波のほかごころ我はおもはじ命死ぬとも　　同

同
黑髮の白髮（かみ）までとむすびてしこゝろひとつをいまとかめやも　　同

同
天雲のよりあひとほみあはずともあだし手枕われはまかめや　　同

同
さねぬ夜は千夜もありとも我がせこが思ひ悔ゆべき心はもたじ　　同

〔末の松山云々〕袖中抄に、末の松山波越すと云ふ事は昔男、女に逢ひて末の松山を指して彼山に波の越えむ時こそ心變は有るべきと誓ひけるより、男も女も心變りするをば末の松山波越すと詠む也彼山は遠くて見れば、山より彼方に波の起つが、嶺の上に見越されて、山を越ゆと見ゆるに依りて、誠の波の越ゆべき由を誓へるなめり云々と見ゆ。

〔蘆の屋の云々〕蘆の屋の昆陽は難波の地名也。上句は忍びにと云はん爲の序、まろとは自分を云ふ。

〔あれ墨坂〕我住へを地名に掛けし也

古今集　詠人不知

君をおきてあだしこゝろをわがもたば末の松山波も越えなむ

萬秋門院　新續古今集

かくて世をふるの高はし行末も君をぞたえずたのみわたらむ

古今六帖　伊勢

蘆の屋のこやのしの屋の忍びにもいな〱まろは人の妻なり

後撰集　平高遠妻

忘るなといふにながるゝ涙川うき名をすゝぐ瀬ともならなむ

萬葉集　柿本朝臣人麻呂妻依羅娘子

な思ひそと君はいへども逢む時いつと知りてか我が戀ひざらん

同　柿本人麻呂妻

君がいへにあれすみざかの家路をも我はわすれじ命死なずば

同　鏡女王

秋山の木の下がくれゆくみづのわれこそ増さめ御思ひよりは

萬葉集
枕太刀腰にとりはきまがなしきせろがまきこん月の知らなく　檜前舍人石前妻

同
防人にゆくは誰がせとゝふ人を見るがともしさ物思ひもせず　詠人不知

同
あしべゆく雁の翅を見るごとに君が負しゝなぐ矢しおもほゆ　同

同
あめつしの神にぬさおき齋ひつゝいませ我夫あれをし思はゞ　同

同
あさもよしきへゆく君がまつち山待つらんけふぞ雨な降りそね　同

同
しなぬ路は今の墾道かりばねに足ふましむなくつはけわがせ　同

古今集
我がせこを都へやりて鹽竈のまがきがしまのまつぞ戀しき　同

〔枕太刀云々〕せろとは夫を云ふ。まがなしきは、我が愛するの意。つくは月也。枕太刀を佩きて最愛の我が夫が尋ね来むは何時の月ならむか、との意也。
〔防人に云々〕防人の事は前頁に註せり。防人に召されて遠く出立つ人は誰の夫なるかと物思ひもせずに我に問ふ人が羨しと也。己が夫の防人にさされて別れ行くを悲しめる也。
〔なぐ矢〕投矢。
〔あめつし〕天地の方言。
〔あさもよし〕紀の枕詞なり。
〔しなぬ〕信濃。
〔かりばね〕刈りたる根。
〔鹽竈〕陸奥の名所

古今集

風ふけばおきつ白なみ立田山夜半にや君がひとり越ゆらむ　詠人不知

萬葉集

我夫子はいづく行くらんおきつもの名張の山をけふか越ゆらむ　當麻眞人麻呂妻

同

ながらふるつまふく風のさむき夜にわが夫の君は獨りかぬらむ　譽謝女王

同

神風の伊勢のはまをぎをりしきてたびねやすらん荒き濱べに　碁檀越妻

同　阿閉皇女

是やこの大和にしては我が戀ふる紀路に在りといふ名におふせの山

同　倭太后

人はよし思ひ止むとも玉かづらかげに見えつゝ忘らえぬかも　依羅娘子

同

けふけふと我が待つ君は石川の貝に交りてありといはずやも

〔風吹けば云々〕白波は盗人の異名、後漢の靈帝の時賊張角、西河の白波谷にて盗をなせる故事に出でし語也盗賊の出没すと聞く立田山を、夜半に只獨り我が夫の越え行く危險さよとの意也。

〔沖つ藻の〕名張の冠詞なり。名張は伊賀國名張郡を云ふ。

〔獨か寢らむ〕獨り寢る事ならむの意なり

〔神風の〕伊勢の枕詞なり。

〔大和にしては〕大和に在りて常に聞及べる紀州の背の山は是かとの意にて、背を夫の事に掛けて戀ひ偲び玉ひし也。

〔折々の云々〕折々の辛さとは、時々空閨を守る辛さを云ふ。やがてなき世もとは、軈て其の夫の亡くなりて永久に空閨を守る辛さを見るに至れる意也。

〔一聲も云々〕後一條院の崩御の年に詠み給へる歌也。時鳥よ、今年の五月雨時は闇夜に迷ひつゝありとの一言を、後の世の昔に告げ來れよと也。

〔九重の云々〕後醍醐天皇の御陵に詣でゝ詠み給へる也。九重は禁中、苔の下は地下の意也。

〔別れにし云々〕此歌は衣通姫の、我が背子の來べき宵也小蟹の蜘蛛の行ひ豫てしるしも、の詠を本歌とす。

詞花集　　詠人不知

折々のつらさを何に歎きけんやがてなき世も有ればありけり

千載集　　上東門院

一聲も昔に告げなんほとゝぎすこのさみだれは闇にまよふと

同　新古今集

逢ふことも今はなきねの夢ならでいつかは君を又は見るべき

新葉集　　新待賢門院

九重の玉のうてなもゆめなれやこけのしたにし君をおもへば

新千載集　　源頼時女

先立たじおくれじとこそ思ひしかちぎりしかひもなき別れかな

後撰集　　時望朝臣妻

別れにしほどをはてともおもほえず戀しきことの限りなければ

後拾遺集　　土御門右大臣師房女

別にし人は來べくもあらなくに如何に振舞ふさゝがにぞこは

後拾遺集　　伊勢大輔

別れにしその日ばかりはめぐり來て今もかへらぬ人ぞ戀しき

詞花集　　赤染衛門

去年の春散にし花も咲にけりあはれわかれのかゝらましかば

萬代集　　盛方妻

見ても猶ほ袖ぞ濡れぬる亡き人のかたみとしのぶみづくきの跡

〔別れにし云々〕一週忌に詠める歌なり。月日は別れし其の日に廻り來つれども、歸り來ぬ人が戀しと也。

〔あはれ別れの〕去年別れし我が夫も此の如くあり度しとの意也。

〔みづくきの跡〕筆跡を云ふ。

同贈答歌

豐玉毘賣命御詠　古事記

赤玉は緒さへひかれど白玉の君がよそひしたふとくありけり

日子穗々手見命御詠　古事記

沖つ鳥鴨づく島に我がゐねしいもはわすれじよのことごとも

萬葉集　作者不知

かくのみに有りけるものを猪名川の沖を深めて我がもへりける

同　妻

ぬばたまの黑髪ぬれて沫雪のふるにや來ますこゝだ戀ふれば

同　高橋連黑人

吾妹子に猪名野は見せつなつきやまつぬの松原いつか示さむ

同　同

いざ子ども大和へはやくしらすげの眞野の榛原手折りてゆかむ

〔赤玉は云々〕赤玉は、其の玉を貫き通せる緒までも光りて美しけれど、白玉の如き清々しき君の容儀こそ尊く覺ゆれと也。

〔沖つ鳥云々〕初句は鴨の冠詞、鴨着く島とは海宮を云ふ。ゐ寢しは共寢せしを云ふ。

〔猪名川〕攝津の名所なり。

〔沖を深めて〕行末を樂しみに、奥深く思ひたりしと也。

〔ぬば玉の〕黑の冠詞なり。

〔こゝだ〕許多。

〔高橋連〕高橋は高市の誤なり。

〔猪名野〕攝津の名所なり。

〔榛原〕萩原に同じ

萬葉集　白菅の眞野のはりはらゆくさ來さきみこそ見らめ眞野の榛原　妻

同　妹も我も一つなるかも三河なるふたみの道ゆわかれかねつる　黒人

同　三河のふたみの道ゆ別れなばわがせも我もひとりかもゆかむ　妻

同　おきていかば妹はまがなし持てゆく梓の弓のゆづかにもがも　防人名缺

同　遲れ居てこひはくるしも朝がりの君が弓にもならましものを　妻

萬葉集　武庫の浦の入江のす鳥はぐくもる君をはなれて戀に死ぬべし　遣新羅使人妻

同　大船に妹乘るものにあらませばはぐくみ持ちてゆかましものを　使人

〔白菅の云々〕ゆくさ來さは、往來にの義。二句と結句とに眞野の榛原と重ねて言へるは古歌の體にて、別に意あるには非ず。〔妹も我も云々〕一つ、二みの道、三河と綾なして云へり。道ゆは、道よりの意也。〔まがなし〕眞悲しの義、痛はしと云ふ程の意也。〔ゆづかにもがも〕妻を弓束になしても持ちて行き度しとの意なり。〔朝かりの〕朝狩の弓になりて伴れて行かれ度しと也。〔武庫の浦〕攝津國武庫郡の海也。〔す鳥〕巢に在る鳥を云ふ。〔はぐくもる〕はぐくむの延語なり。

萬葉集
君がゆく海べのやどにきりたゝばあが立ちなげく息と知りませ　妻

同
秋さらばあひ見むものを何しかも霧に立つべくなげきしまさむ　使人

同
大ぶねをあるみに出しいます君つゝむことなく早やかへりませ　妻

同
まさきくて妹が齋はゞ沖つ波千重に立つとも障りあらめやも　使人

同
別れなばうらがなしけむあが衣下にを着ませたゞに逢ふ迄に　妻

同
吾妹子が下にも着よとおくりたるころもの紐を我がとかめやも　使人

同
吾が故におもひなやせそあきかぜの吹かむその月あはむものの故　使人

〔君がゆく云々〕君が行く海邊の宿に霧が立ちしならばその霧は君を戀ひ慕ひて我が嘆息する息也と思ひ給へとの意なり。

〔秋さらば云々〕秋にもならば歸朝して又相見む物を、さのみ歎く勿れとの意也。

〔あるみに出し〕荒海に出だし也。

〔つゝむ事なく〕恙なくの意也。

〔まさきくて云々〕妻が無事にて吾を祈り居るならば、いかに荒立つ海上も障りあらじと也

〔うら悲し〕心悲しの意を、衣の裏に掛けて云へる也。

〔衣の紐を云々〕紐を解かじとは、他の女に契りを交さじとの意也。

萬葉集
栲衾新羅へいますきみがめをけふかあすかといはひてまたむ　妻

同
遙々におもほゆるかも然れどもけしき心をわが思はなくに　服部於田

同
我がゆきのいきつくしかば足柄の峯はふ雲を見とゝしぬばね　妻　服部呰女

同
我が夫を筑紫へ遣りてうつくしみ帶は解かなゝあやにかも寢も　藤原部等母麻呂

同
足柄のみ坂にたして袖ふらばいはなるいもはさやに見もかも　妻　物部刀自賣

同
色深くせなが衣は染めましをみさかたばらばまさやかに見む　物部歳徳

同
白玉を手にとりもちてみるのすも家なるいもを又見てもゝや

〔栲衾〕栲布にて作れる衾は純白なるを以て、白(シ)に冠する詞とす。〔君がめを〕君が目をの義、歸朝して君の御目に掛る日をの意也。〔けしき心〕異しき心の義、變心に同じ。〔いきつくしかば〕息つき歎かばの意なり。〔見とゝしぬばね〕見つゝ偲び給への意也。〔我が夫を云々〕我が夫を防人として筑紫へ遣りて、愛慕しつゝ、帶を解かず、歎き作ら獨寐む事哉と也。〔足柄の云々〕いはなるは家なる、たしては立ちて也、〔みるのすも〕見るが如くの意なり。

萬葉集　妻椋椅部刀自賣

草まくらたびゆく背が丸寢せばいはなる妹はひもとかず寢む

同　東人妻

間なく戀ふれにかあらむ草枕たびなる君がゆめにし見ゆる

同　佐伯宿禰東人

草枕旅にひさしくなりぬればなほこそおもへなこひそわぎも

新葉集　後京極院

思ひやれ塵のみつもる四の緒に拂ひもあへずかゝるなみだを

新葉集　後醍醐天皇御製

涙ゆゑ半のつきはくもるともなれて見し夜のかげはわすれじ

同　文貞公

里の蜑がしほなれごろも忍べとて辛き別れのかたみにぞやる

同　妙光寺内大臣母

里の蜑がしほなれ衣とゞめてもながらへばこそ形見にもせよ

「丸寐」俗に云ふごろ寐也。

「いはなる妹」家なる妹の方言。

「戀ふれにか云々」戀ふればにや有らむの義也。

「草枕」旅の枕詞。

「思ひやれ云々」こは後醍醐天皇より御琵琶を召されしに依り、后の詠み添へ給へる歌にて久しく手にせざる四緒の事を思ひ遣り給へと、昔に變りて衰へし禁中の狀を歎き給へる也

「半の月」琵琶の面に裝着せる半月の飾りなるを、眞の月に見立てゝ詠み給へる也。

「里の蜑が云々」此歌は文貞公が東國に流されて下向する時に、形見の衣に添て贈れる也。

新葉集　　　　　　　　　　文貞公

海山を見る空もなしわがこゝろさながら君にそへて來しかば

同　　　　　　　　　妙光寺内大臣母

めぐりあふちぎりならずば中々にうきを見はてぬ命ともがな

新千載集
贈皇太后宮

あふ事のかぎりのたびの別れにはしでの山路ぞ露けかるべき

同
村上天皇御製

君のみや露けかるべき死出の山おくれじと思ふわが袖を見よ

「海山を云々」是は尾張より詠みて贈れる歌にて、海山の景色を見る心もなし、魂は悉く君に添へて來つる我なればと也。

「めぐり逢ふ云々」とても再會する事なり難き恐ならば行末の憂き苦しみを見果てぬ中に死に度しと也。

「あふ事の云々」選子内親王を産ませ給はむとて、里にさがり給ふ時の御歌也。御産の事なれば斷く心細きさまに詠まれし也。死出の山とは冥途の山を云ふ。

明倫歌集　卷第四

兄弟歌

玉葉集
古もたぐひもあらじ我が宿にえだをつらぬるかしは木のかげ　　前大納言　光頼

新拾遺集
武藏野のわかむらさきの衣手はゆかりまでこそ嬉しかりけれ　　太宰大貳　重家

新千載集
軒近き竹の園生のよゝのかぜつらなるえだにふきぞつたへむ　　二品法親王尊胤

常山詠草
數ふれば君がよはひのたかまつそつらなる枝も千代に倣はむ　　贈大納言源光圀

東歌
伊勢の海清きなぎさに拾ふてふかひある千代はきみぞ數へむ　　橘　枝直

〔古へも云々〕枝を連ぬるとは、連枝の義にて兄弟を云ふ。かしは木とは左右の衛門督の異名なり。
〔武藏野の云々〕兄の清輔が紫の衣（四位）を着る自分になれるを喜びて其の弟の身たる自分まで嬉しと云へる也。
〔竹の園生〕親王の別稱。梁孝王の竹園の故事に出でし語なり。
〔數ふれば云々〕父君の高齢にあやかりて、我等兄弟も其の松の千代に倣ひて、長壽を得度しと也。

續古今集
今日ぞ思ふ君にあはでややみなまし八十路餘りの齢ならずば　入道兵部卿昭平親王

日本紀
山城の筒城(つゝき)の宮にもいまをす我がせを見ればなみだぐましも　國(くに)依(より)姫(ひめ)

萬葉集
我がせこを大和へやると小夜更けてあかつき露に我が立ちぬれし　大(おほ)來(くの)皇(ひめ)女(みこ)

同
二人ゆけど行き過ぎがたきあき山をいかでかきみが一人こゆらむ　同

同
よそに居て戀ふれば苦しわぎも子を繼ぎて逢見む事計りせよ　大(おほ)伴(ともの)田(た)村(むらの)大(おほ)孃(いらつめ)

同
遠からば侘てもあらむを里近くありと聞きつゝ見ぬがすべなき　同

同
白くものたな引く山の高々に我がおもふいもを見むよしもがな

〔山城の云々〕とは仁德帝の皇后、筒城の宮に在しける時、口持臣勅を奉じて還幸を勸め奉り、雪雨に濡れつゝ宮庭に日夜を經しかば、其妹の斯くは詠める也。
〔我が兒子を云々〕わが兒を大和へ旅立たせやる支度の爲めに夜を更かし曉の露に濡れて種々に心を配れりとの意也。
〔わぎも子〕此歌にては妹を云ふ。即ち此の作者は父に附きて田村に住み妹の坂上大孃は母に屬きて坂上に在りしより、姉妹一處に居るやうに事計りせよと詠めり
〔侘てもあらむ〕遠き所ならば思ひ切りもせむの意。

萬葉集

いかならむ時にか妹をむぐら生のいやしき宿に入りまさしめむ　　大伴田村大孃

同

我宿のはぎの花さく夕かげにいまもみてしがいもがすがたを　　同

同

沫雪の消ぬべきものを今までにながらへぬるは妹に逢はむため　　同

同

丹生の川瀬は渡らずてゆくゆくと戀ひたむ吾がせいで通ひ來ね　　長皇子

同

神風の伊勢の國にもあらましを何しか來けむ君もあらなくに　　大來皇女

同

見まくほり我がする君もあらなくになにしか來けむ馬疲らしに　　同

同

うつそみの人なるわれや明日よりは二上山を妹背と我が見む　　同

〔いかならむ〕云々、葎生の賤しき宿とは、己が家を謙遜せる詞也。如何なる時期にか妹を我宿に入れしめ得べきかとの意也。
〔今も見てしが〕今此處に妹を伴ひ來度しとの意なり。
〔沫雪の〕消の枕詞也。消ぬべきとは死ぬべき事を云ふ。
〔丹生の川〕云々、丹生川は大和の名所なり。戀ひたむとは戀ひ痛むの義にて、深く慕ふ意なり。
〔神風の〕云々、皇女が伊勢の齋宮に坐しゝ時、兄君大津皇子が京にて薨ぜられしかば、京に上りて詠み給へる也。君も在らぬに何しに上京せしならむとの意也。

〔あしび〕馬醉木、俗に「あせみ」と謂ふ、灌木の名也。
〔かゝらむと云々〕家持が越中守なりし頃、弟の喪を聞きて詠める也。斯樣に死別せん事を豫め知り居らば、此の越の海の荒磯の浪の光景をも見せ置くべかりし物をと也。
〔山べまそゆふ〕長き木綿と短かき木綿とを取掛けて神山に葬れるを云ふ。
〔渡り川〕佛說に謂ゆる三途の川也。
〔歸り來るがに〕歸り來る時あるにとの意なり。
〔消え殘るべき身〕死なで生殘り得べき身の意也。
〔つらなる枝〕連枝の義にて、兄弟をいふ。

萬葉集
磯の上に生ふるあしびを手折らめど見すべき君が在りと言はなくに　大來皇女

同
かゝらむと兼て知りせば越の海の有その浪も見せましものを　大伴宿禰家持

同　高市皇子
神山の山べまそゆふみじか木綿かくのみからに長くと思ひき

古今集
泣くなみだあめとふらなむ渡川水まさりなばかへりくるがに　小野篁朝臣

續古今集
誰も皆きえのこるべき身ならねど行きかくれぬる昔ぞ悲しき　儀同三司 伊周

續古今集
はかなきは世の常とても慰めつこひしきをこそ思ひわびぬれ　道命法師

續後拾遺集
目の前につらなる枝もかれゆくをかゝる朽木のなど殘るらむ　前關白 基忠

新拾遺集　　按察使實繼

思へたゞつらねし枝はくちはてゝたのむかげなくなれる歎きを

悼式部卿親王文　　良恕親王

つらなれる枝と頼みし一かたの朽つる木蔭をあはれとも見よ

續拾遺集　　普光院關白左大臣　良實

あだに散る花によそへてなき人を思へば落つる我がなみだかな

悼妹文　　九條攝政左大臣　道房

咲く梅のこずゑを見ても思ひ出でよ連なるえだのかれし名殘を

玉葉集　　從一位兼敎

春しらぬうき身もつらしいにしへにつらねし枝の花に別れて

後撰集　　貞信公　忠平

春の夜の夢の中にも思ひきやきみなき宿をゆきて見むとは

新葉集　　中務卿宗良親王

數ならぬなげきになきて我はたゞかへりわびたる雁の一つら

〔つらねし枝〕連なる枝に同じ、前註を見るべし。兄弟は皆死歿し果てゝ頼みとする者の無き身の悲しさを思ひ遣り給へと也。

〔あだに散る云々〕是は作者の兄の九條左大臣の薨去を悲しめる歌也。

〔咲く梅の云々〕梅を見て妹の死を悲しみ、己れ一人世に殘れるを歎きたるなり。

〔春知らぬ云々〕昔兄弟に死に別れて以來、春の長閑に面白き事をも知らずして年月を送れるが辛しと也。

〔春の夜の云々〕集の詞書に、兄の服にて一條に罷りてとあり、兄君の死を夢に思ひなして詠める趣き也。

〔遲れても云々〕遊義門院のかくれ給ひての秋の御製にて、列に放れて別るゝ雁に、御身を准へ給へる也。
〔理に云々〕藤衣は喪服なり。ゆかりの色とは紫の色にて藤の緣語なり。兄弟のゆかりの意に詠まれたり。
〔春日野の云々〕春日野の原と、同胞（ハラカラ）に掛けたり。浮田の杜は大和の名所なるを、世の中の憂きと掛け、また歎きに木を言ひ掛けたる也。
〔埋火のあたり〕爐邊を云ふ。まとゐは團居の義、會合するを云ふ。

伏見天皇御製

風雅集

遲れてもかついつまでと身をぞ思ふつらに別るゝ秋の雁がね

贈大納言源光圀

常山詠草

理(ことわり)に過ぎてぞぬるゝ藤ごろもわれもゆかりのいろにもれねば

小澤蘆庵

六帖詠草

春日野のはらからこそは世中のうきたの森のなげきをもとへ

少將源定信

三草集

埋火のあたり長閑にはらからのまとゐせし世ぞ戀しかりける

同贈答歌

元明天皇御製

萬葉集

丈夫の鞆のおとすなり武士のおほまへつぎみたて立つらしも

同　御名部皇女

我大君物なおもほしそ皇神のつぎてたまへるわれなけなくに

續後撰集　貞信公 忠平

折りて見るかひもあるかな梅の花ふたゝび春に逢ふこゝちして

同　枇杷左大臣 仲平

埋木に花さく春のなかりせばまちがきえだもたれかをらまし

新千載集　後醍醐天皇御製

待たれつる心ひらけておそ櫻にほひひさしきいろぞことなる

同　達智門院

今そげにこころひらけて君が代に花もかひある色を添へける

〔丈夫の云々〕和銅元年の御製也、時に東夷不穩の狀ありしかば、將軍以下、練兵の爲め弓射る音を聞し召して詠み給へる也。〔われなけなくに〕本居翁は、われは君の誤ならむと云へり。なけなくには「なからなくに」と云ふに同じ。〔折りて見る云々〕是は貞信公の兄君始めて大臣になれるを喜びて詠める也。〔埋木〕今迄世に埋れ居りし身を埋木に喩へたる也。〔待たれつる云々〕達智門院の立后の時に祝ひ參らせし御製也、心開くとは心晴々する意也

權僧正永縁

金葉集

行末のためしとけふをおもふとも今いくとせか人にかたらん

内侍

同

幾年も君ぞ語らんつもりゐておもしろかりしはなのみゆきを

源頼雄朝臣

常山詠草

春といへば先つ咲く庭のうめが香を今ぞみはやせ花のさかづき

贈大納言源光圀

同

千代の春かけて霞をくみて見んつらなる枝のはなのさかづき

龜山天皇御製

續古今集

君さそふしるべにぞやるうぐひすも來ゐる軒ばの梅の匂ひを

月花門院

續古今集

思ひやる心をかせの便りにてたがなほざりのうめのにほひぞ

平親清女妹

新後撰集

こひしさの身よりあまれる思をば夜はの螢によそへても見よ

〔行末の云々〕集の詞書に「花見の御幸を見て妹の内侍の許に遣はしける」とあり。即ち此の光榮は行末かけての面目と思へど、今後幾年を長らへて人に語らむかと年の老いたるを歎ける也。

〔春といへば〕春来れりと言へば也。

〔千代の春云々〕霞を汲むは酒を飲む意也。連なる枝とは兄弟を云ふ。

〔君さそふ云々〕本集の詞書に「月花門院に、梅花奉らせ給ふとて」とあり。

〔思ひやる〕天皇の思ひ遣り給ふ御心を云ふ。

〔餘れる思〕餘る思を螢火に准へし也

續後撰集
我は又晝の思ひのきえばこそ夜はのほたるに身をもたぐへめ　平親清女

同
はぐくみし昔の袖のこひしさに花たちばなのかをしたひつゝ　權大納言長家

同　上東門院
橘の匂ひばかりもかよひ來ばいまもむかしのかげは見てまし

後拾遺集
匂ひきやみやこの花はあづまぢのこちの返しの風につけしは　源兼俊母

同
吹返す東風のかへしは身にしみき都の花のしるべとおもふに　康資王母

玉葉集
言の葉の露ばかりだに懸けよかし草のゆかりの數ならずとも　法性寺入道前關白家參河

同
紫のいろに出でてはいはねども草のゆかりをわすれやはする　二條院讃岐

「我は又云々」夜半の螢と云へるに對へて晝の思ひと詠めり。思ひに火を云ひ合めたる事、前の歌に同じ。
「はぐくみし云々」集の詞書に、「上東門院に花橘を奉るとて、」とあり。昔の袖とは、古今集に「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」とあるに據れり。
「こちのかへし」東風の返しの義、即ち、都より東國の方に吹く風の意。
「吹き返す云々」初二の句は返信の意也。是が都よりの便りと思へば、身にしみて嬉しと也
「草のゆかり」兄弟の意を云ふ。
「紫」草の名、色、ゆかりは其緣語也

〔山吹の云々〕山吹の花は美しければ女の美貌に喩ふる事古歌の例也。されば其花を取り持ちて、亡妹を偲べる心ばへ也。
〔わがしめし〕我が占めしの義、我が物と獲得せしの意なり。
〔あはぬ日まねみ〕逢はぬ日遍ねみの義、會はぬ日の多さにの意也。
〔我宿の云々〕我が宿に今咲く此萩の花の夕陰に妹の立てる姿を見度しとの意也。
〔もみづる〕紅葉する楓の意なり。
〔かけつゝ〕思ひを掛けつゝの意也。
〔足乳根〕後醍醐帝を指して申す。
〔ふるさと〕吉野山をいふ。

萬葉集　大伴宿禰家持妹
山吹の花とりもちてつれもなくかれにしいもを忍びつるかも

同　家持代妻
妹に似る草と見しよりわがしめし野べの山吹たれか手折りし

同　同
つれもなく枯にし物と人は言へど合ぬ日まねみ思ひぞ我がする

同　大伴田村大嬢（おほいらつめ）
或が宿の萩のはなさくゆふかげにいまも見てしがいもが姿を

同　坂上大嬢（さかのうへのおほいらつめ）
我が宿にもみづるかへで見る毎に妹をかけつゝ戀ひぬ日はなし

櫻雲記　中務卿宗良親王
足乳根の守りをそふる三芳野の山をばいづちたちはなるらん

同　後村上天皇御製
ふるさとゝなりにし山は出づれども親の守りは猶ほもあらなん

後村上天皇御製

新葉集

年をふるひなの住ゐの秋はあれど月はみやこと思ひやらなん

中務卿宗良親王

新葉集

いかにせん月もみやこと光そふ君すみの江のあきのゆかしさ

後村上天皇御製

新葉集

廻り逢はむたのみぞしらぬ命だにあらばと思ふほどのはかなさ

中務卿宗良親王

同

廻り逢はむたのみあるべき君が代に獨り老いぬる身をいかにせん

景雄

新葉集

いかに猶ほあかしわぶらむ旅ならぬふるさとさへも冴ゆる霜夜を

信常

同

思ひやれふるさとさへもさゆる夜に風吹きそふ旅のねざめを

通直女

同

いざといふ人を便りにいづくまであねはの松のいなむとすらむ

〔年を經る云々〕是は住吉の行宮より東國なる宗良親王の許へ贈り給へる歌にて、鄙の住ひの秋の景色も懷かしからざるにあらねど、月は矢張り都が佳しと思ひ遣り給へと也。

〔月も都と光添ふ〕君が住み給へば、即ち其處が行宮也として月も光彩を添ふるの意也。

〔廻り逢はむ云々〕命だにあらば何時か廻り逢はむも、其の命さへ頼まれぬ果敢なさよと也。

〔いかに猶云々〕住み馴れし故郷に居てさへ寒き霜夜を旅なる君は如何に明し侘ぶらむと也。

〔あねはの松〕奥州の名木也、姉の意に言ひ掛けたり。

〔風の音は云々〕初句の音信の意、雲井とは遠方を云ふ假令此處を別れ行くとも、我が生きて有らむ限りは、如何に遠き處にても音信は絶えず聞かせむと也。
〔このもとに云々〕實家より卅六人集を借りて返されし時、故大炊御門右大臣の筆蹟ありしかば、其の端に書き付けられし由、集の詞書に見ゆ。
〔賴みし蔭〕故大炊御門右大臣を云ふ
〔かつ〴〵に〕逐次兄弟に死に別れて賴み無き身の、獨殘れる我が命も何時迄か斯くて有られむやとの意也。
〔かれ行く枝〕道意自身を云ふ。

姉

萬葉集
風の音はたえず聞えむ雲井にも姉はのまつのあらむかぎりは

太皇太后宮

千載集
この本にかき集めたることのはを別れし時のかたみとぞ見る

權大納言 實家

千載集
このもとに書くことのはを見る度に賴みし蔭のなきぞ悲しき

永福門院

新千載集
かつ〴〵に片枝(え)枯れぬる一つまついつまでとてが朽ち殘るらん

同

前大僧正 道意

朽ち殘る一木のまつのいかげをこそかれゆく枝もなほたのみけれ

明倫歌集　卷第五

朋友歌

萬葉集
新しき年のはじめに思ふどちいむれて居れば樂しくもあるか　大膳大夫(だいぶ)道祖王(みちのやのおほぎみ)

風雅集
新しき年のはじめにうれしきはふるき人どちあへるなりけり　中納言兼輔

詞花集
萬代のためしに君がひかるれば子の日の松もうらやみやせん　赤染衛門

萬葉集
盃にうめのはなうけて思ふどちのみての後は散りぬともよし　大伴坂上郎女(おほとものさかのうへのいらつめ)

後撰集
梅の花今はさかりになりぬらむたのめし人のおとづれもせぬ　兵部卿敦固親王

〔新しき云々〕年の初めに、同じ心の友人等と會合して語りあへば樂しと也。い群れてのいは發語。

〔新しき云々〕新年と舊友とを取合せて綾なせるにて一首の意は明か也。

〔子の日〕舊暦正月の初子の日に、人々野に出でゝ小松を引く事、古への例なり。

〔梅の花うけて〕うけては浮べて也。

〔梅の花云々〕梅の花は今は盛りになりしならむに、其花の咲かむ頃には音づれむと約束せし友人の、何等便りなきは如何にせし事かと也。

〔しなさかる云々〕句は越の枕詞、柳かづらきとは柳の枝を插頭になして遊ぶを云ふ。家持は越中の國守たりし故に此歌あり
〔おく山の云々〕一二の句は、審らかにと云はむ序也、審らかは能く悉の意、結局は男子の友人を云ふ。
〔忘らえめやも〕忘られめやもに同じ忘るゝ事なり難からむ、との意也。
〔春日野に云々〕心やらむは、心を慰めむとての意、結句は、暮れずにあり度しとの意也、
〔そこともいはず〕處を定めずの意、
〔旅寐してしか〕旅寐をしたしと也。
〔山峽〕山と山との間を云ふ。

萬葉集
鶯のなき散らすらむはるのはないつしかきみとたをりかざゝむ　大伴宿禰家持

同
しなさかる越の君らとかくしこそ柳かづらき樂しくあそばめ　同

同
おく山の八つをの椿つばらかにけふはくらさね大丈夫(ますらを)のとも　同

同
春日野の淺茅が上におもふどち遊べるけふはわすらえめやも　作者不知

同
春日野に心やらんと思ふどち來りしけふは暮れずもあらぬか　同

古今集
思ふどち春の山べに打むれてそこともいはずたびねしてしか　素性法師

萬葉集
山峽(かひ)に咲けるさくらをたゞ一目きみに見せては何かおもはむ　大伴宿禰池主

萬葉集

櫻花今ぞ盛りと人はいへどわれはさぶしもきみとしあらねば　　大伴宿禰池主

續後拾遺集

俺かずともけふはかへりて山櫻はなざかりをばゝにつげまし　　讀人不知

拾遺集

世の中に嬉しきものは思ふどち花見てくらすこゝろなりけり　　平兼盛

古今集

我が宿の花見がてらにくる人はちりなむのちぞこひしかるべき　　凡河內躬恒

新後撰集

花見むと契りしひとをまつほどにあやなく春の暮れにける哉　　中原師尙朝臣

同

散りはてゝ後は何せむやまざとの花見よとてぞ人はまたれし　　平親世

新後集

見せばやと人をぞしのぶ山櫻あかぬこゝろのへだてなければ　　平春海

〔櫻花云々〕さぶしは淋し也。今は櫻の花盛なりと世人は言ひ歡べと、我は君と共に遊はざれば心淋しと也。

〔俺かずとも〕我は花に俺かずあれど一先づ今日は家に歸りて、此花盛の狀を友に告げて諸共に樂しみを分たむとの意也。

〔我宿の云々〕我宿は今花の盛なれば共花見がてらに友人が訪ね來りて、日々面白く暮らしをれど、花の散りし後は友人等も來らざるべければ、其時は友人等を戀しく思ふ情に堪へ難からむと也。

〔契りし人〕共に花を見て遊ばむと約束せし友人ゝ綾なくは、無雜作に。

〔稀人を云々〕稀人とは客人を云ふ。意は客人を非情の花も待得て喜びの色を添へつゝ咲匂ふならむと也。

〔呼子鳥〕深山に棲みて、春より初夏に掛けて鳴く鳥也。古今三鳥の一にて鸚鵡の鳥と言へる。

〔唐人も云々〕是は三月節句の歌也。此日は唐人も船を浮べて遊ぶと云ふ日なれば、我が學兄よ花蘰を飾りて共に遊ばむと也。

〔春日さす云々〕一二の句は序也。うらとけて、心解けての義、胸襟を開きての意也。

〔紫の云々〕論語に「惡紫之奪朱」と、あるに據りて詠める。

嵐山詠草　　　　權中納言源綱條

稀人を花も待えてよろこびのいろをそへつゝさきにほふらむ

後撰集　　　　春道列樹

我が宿のはなになき(鳴き)そ呼子鳥よぶかひありて君も來なくに

萬葉集　　　　大伴宿禰家持

唐人も船をうかべて遊ぶとふけふぞわがせこはなかづらせよ

後撰集　　　　詠人不知

春日さす藤のうら葉のうらとけて君しおもはゞわれもたのまむ

常山詠草　　　　贈大納言源光圀

紫の朱をうばひてさくふぢのゆかりへだてぬはるのともがき

萬葉集　　　　大伴宿禰家持

山吹の花のさかりにかくのごときみを見まくは千年にもがも

後撰集　　　　詠人不知

白妙に匂ふまがきのうのはなのうくも來てとふ人のなきかな

玉葉集

松がねのいはたの岸の夕涼みきみがあれなとおもほゆるかな　　西行法師

拾遺集

相見ずて一日もきみにならはねば棚機よりもわれぞまされる　　紀貫之

萬葉集

女郎花咲きたる野べをゆきめぐり君を思ひてたもとほり來ぬ　　大伴宿禰池主

家集

君一人とひ來ぬからにわが宿のみちも露けくなりにけるかな　　源宗行朝臣

萬葉集

鶉鳴きふりにし里の秋萩をおもふひとどちあひ見つるかも　　豐浦寺尼

同

もみぢ葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今宵はあけずもあらなむ　　大伴宿禰家持

家集

諸共にきみと來ぬまの紅葉はこころのやみのにしきなりけり　　前大納言實國

「君があれな」君が居たならば樂しからむと思はるゝとの意なり。

「相見ずて云々」七夕の後朝に、躬恒の許に贈れりし歌也。君と我との間は、一日も見ずして居られぬ例なれば、一年に一度の逢瀬を待つ織女の心よりも一層切なりし也。

「たもとほり來ぬ」徘徊して來りたりとの意なり。

「君一人云々」君一人が訪問せぬ故に我宿の道も露けくなれりとの意、露けくは悲しみの意を含めたる也。

「過ぎまくをしみ」過ぎむ事の惜しさにの意也。

「心の闇の」衣錦夜行の故事に依る。

〔我宿の云々〕上句は下句の序、雪を行きに云ひ掛けたる也、松（待つ）の木に降れる雪の日なれば、行かずして君を待ちてあらむと也。

〔君をのみ云々〕此歌は、「君が思ひ雪と積らば頼まれず春より後はあらじ」と思へば、」と躬恒の詠めるに答へし歌也。

〔白雪の云々〕舊友ならでは此の白雪を踏分けて我が住む山里を訪れむやとの意也。

〔情の深さ云々〕情の深さに比すれば雪の深さは及ばずとの意也。

〔かれにし人〕枯れに離れを掛けし也

〔聲かはす〕物言ひ交はす意なり。

萬葉集

我宿の君まつの木に降る雪のゆきには行かじ待ちにし待たむ　　作者不知

古今集

君をのみおもひ越路の白山はいつかはゆきのきゆるときある　　宗岳大頼

常山詠草

白雪のふりしむかしの友ならで誰かとはましふみまへいきと　　贈大納言源光圀

新拾遺集

とふ人の情のふかき程まではつもりもやらぬにはのしらゆき　　夢窓國師

古今集

我がまたぬ年は來ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせぬ　　凡河内躬恒

常山詠草

立つ波も心へだてぬ友ちどりまなくしばなくこゑかはすなり　　贈大納言源光圀

家集

都にはきみをのみこそおもひつれ紅葉のをりも花のさかりも　　橘爲仲朝臣

〔一節に云々〕集の詞書に「承平四年中宮の賀侍りける時に竹の杖造りて侍りけるに、」とあり。

〔參議好古〕清原元輔の誤なり。

〔千歳經む〕右大臣の五十賀に詠める也。千歳をも經べき君が、朝廷に奉仕せらるれば、天皇の天下は安泰なりと也。

〔年月は云々〕年月の新なる毎に見る君なれど、何時逢ひても君は飽を足らずと也。

〔足引の云々〕上句は凡て序也、ねもごろは、懇に也。

〔筑前掾云々〕萬葉に、主人散位寮散位馬史國人とあり

〔鳰鳥の〕息長の枕詞なり。

拾遺集
一節に千代をこめたる杖なればつくともつきじ君がよはひは　大中臣頼基

同
千年經む君しいませばすべらぎの天の下こそうしろやすけれ　參議好古

續千載集
諸いごとはかなき身をば置きながら君が千年を祈りやるかな　藤原高光

萬葉集
年月はあたら〳〵にあひ見れど吾が思ふきみはあきたらぬかも　民部少丞大伴宿禰村上

同
一昨日(をとつひ)も昨日も今日も見つれども明日さへ見まくほしき君哉　橘宿禰文成

同
足引の山に生ひたるすがのねのねもごろ見まくほしき君かも　余明軍

同
鳰鳥の息中川は絶えぬともきみにかたらむこと盡きめやも　筑前掾門部連石足(ちくぜんのじようかどべのむらじいはたり)

古今集

詠人不知

思ふどちまとゐせる夜は唐錦たゝまくをしきものにぞ有ける

萬葉集

筑前掾門部連石足

三埼廻のありそによする五百重波立ちてもゐてもわが思へる君

同

湯原王

燒太刀のかど打はなつ丈夫が豐御酒にわれゑひにけり

同

大宰帥大伴卿

君が爲釀し待ち酒やすの野にひとりやのまむともなしにして

同

紀郎女

風高く邊にはふけども妹がためそでさへぬれて刈れる玉藻ぞ

同

作者不知

死にも生きも同じ心とむすびてし友やたがはむ我もよりなむ

同

作者不知

何せむに違ひはをらむいなもうも友のなみ／＼我もよりなむ

〔思ふどち云々〕友人等相集りて團欒し遊ぶ夜は、何時迄も立ち離れにくしと也。唐錦は裁斷するが惜しき物なれば、立たまく惜しと云へる也。

〔三崎廻の云々〕上句は序也。立ちても居ても常に我が思ふ女よとの意也

〔燒太刀の云々〕かどは稜角、即ち刀の鎬也。一二の句は丈夫と言はむ爲めの序にて、丈夫の我が親盃に醉ひたりとの意也。

〔待ち酒〕客を待つ爲に釀造して置く酒。

〔やすの野〕近江の地名なり。

〔邊には吹けども〕邊とは海邊を云ふ。

〔いなもうも〕否も諾もの義、否定するも承諾するも。

後撰集

我もおもふひともわするなありそ海の浦吹く風の止む時もなく　　均子内親王

土佐日記

棹させどそこひも知らぬわたつみのふかき心を君に見るかな　　紀貫之

後拾遺集

陸奥のあだちの眞弓引くやとて君にわが身をまかせつるかな　　源重之

新千載集

訪はれずば獨りみやまの月影をさびしとだにもたれにかたらむ　　狛（こま）秀房

同

ながらへば思ひ出にせむ思ひ出でよ君とみかさの山の月かげ　　琳賢法師

後拾遺集

都には誰をか君はおもひいづるみやこの人はきみをこふなり　　大江匡（まさ）衡（ひら）朝臣

玉葉集

君だにも都なりせば思ふこと先づかたらひてなぐさみなまし　　増基法師

〔我も思ふ云々〕荒磯海の浦風の止む時無き如く、互に相思はむと也。

〔棹させど云々〕上句は序也、大海の如き底の知られぬ深き心を君が上に見る事よと也。

〔陸奥の云々〕一二の句は引くと云はむ爲めの序、引くは俗に謂ふ贔屓する意也。

〔訪はれずば〕友人に訪問されずばの意。獨深山に獨見る意を掛けたり。

〔ながらへば云々〕君と共に三笠山の月を見し事を、世に長らへ生きて有らば思出にせむ、君も思出でよと也

〔都には〕都の友の中にてはの意也。

〔都の人〕大江匡衡自身を云ふ。

〔思ふこと云々〕我と心の全然同じやうな友がありて欲しき物よ、さらば何事をも言ひ合せて世を過さむと也
〔行き足らはして〕使命を全うしてと云ふ程の意也。
〔天地の云々〕旅行する友の無事を神に祈れる也。
〔玉矛の云々〕初句は道の枕詞也。道の神とは岐神（俗に道祖神と云ふ）を指す。まひはせむとは、賄賂即ち供物を捧げむとの意也。
〔玉にもがもな〕玉にて有り度し、さらば手纏になして共に行かむと也。
〔君がゆき〕ゆきとは旅行を云ふ。
〔かづらかむ〕挿頭にせむの意なり。

自歌合　　中原遠忠
思ふこと我に均しき友もがな言ひあひせつつ世をすごさまし

萬葉集　　多治比眞人鷹主
唐くにに行き足らはして歸り來む丈夫猛夫に御酒たてまつる

同　　作者不知
天地の神も助けよくさまくらたびゆくきみが家にいたるまで

同　　大伴宿禰池主
玉矛の道の神たちまひはせむわがおもふ君をなつかしみせよ

同　　大伴宿禰家持
我が夫は玉にもがもな手にまきて見つゝ行かむを置きていかばうし

同　　同
きみがゆきもし久ならば梅柳たれとともにか我がかづらかむ

同　　同
いはせ野に秋萩凌ぎうまなべて初鳥がりだにせでやわかれむ

〔遅れ居て云々〕君が後の朝明に遠山を越えて去りなば我は一人遅れ居て戀ひつゝ居らむぞ、跡より追掛け行かむと也。
〔我が背子が云々〕吾兄が國へ行かば時鳥の鳴く此の五月は、我一人にて淋しき事ならむとの意なり。
〔眞寸鏡〕見あかぬの序詞なり。
〔さびつゝ居らむ〕淋しみつゝの意也
〔大伴の〕みつの冠辭也。みつは難波の三津の濱なり。
〔波の上ゆ〕波の上よりの意、息づかしは息苦しきの意也。
〔防人〕崎守の義也前頁に註せり。
〔櫛も見じ〕櫛を取て髮も梳らじの意

萬葉集
遅れ居てわれはやこひんはるがすみたなびく山を君がこえいなば　作者不知

同
我が背子が國へましなばほとゝぎす鳴かむ五月はさぶしけむかも　内藏忌寸繩麿

同
眞寸鏡見あかぬきみにおくれてや朝ゆふべにさびつゝ居らむ　彌沙滿誓

同
大伴のみつのまつばらかきわけて我立ちまたむはや歸りませ　山上憶良

同
波の上ゆ見ゆる小じまの雲がくれあな息づかし相別れなば　笠朝臣金村

同
國々の防人つどひふねのりてわかるゝ見ればいともすべなし　神麻續部島麿

同
櫛も見じ屋ぬちもはかじ草枕旅ゆくきみをいはふとおもひて　作者不知

古今集
思へども身をしわけねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる　伊香子淳行

古今集
雲井にもかよふ心のおくれねばわかるゝ人に見ゆばかりなり　清原深養父

同
白雲の八重にかさなるをちにても思はむ人にこゝろへだつな　紀貫之

同
限りなき雲井のよそにわかるとも人をこゝろにおくらさむやは　読人不知

同
別るれば程をへだつと思へばや且つ見ながらにかねてこひしき　在原滋春

後撰集
身をわくることの難さにます鏡かげばかりをぞ君にそへつる　大窪則善

拾遺集
東路の草葉を分るひとよりもおくるゝそでぞつゆけかりける　女蔵人参河

〔思へども云々〕此身は二つに分くる事を得ねば、別に臨みて思ふ心のみを君に添へて遣る事よと也。
〔雲井にも〕雲居の外の遠き所までにもの意也。
〔白雲の云々〕白雲の八重に累なる如き遠方に行きても我は君を思ひつゝあるべければ、君も此の我に心を隔つる勿れと也。
〔限なき云々〕人をとは其の遠方に別れ行く人の意にて心は我が心を云ふ。おくらさむやはとは、何處迄も隨行せむとの意也。
〔思へばや〕思へばにやの意也。
〔身を分くる〕前の「思へども」の歌意に殆ど同じ。

〔別れ行く云々〕別れ行くに臨みて、君が乘る船は其の繫ぐに任すれど、我心は君の方に寄ると也。

〔二つなき云々〕二つは無き我心を君に留め置きたる事なれば、自分で自分に別るゝと同じ事に思はると也。

〔遙々と云々〕白波を袖に掛くとは、別を悲しむ淚に袖を濡らす意なり。

〔東路の云々〕東路の野路の草葉の露の繁さに、行く人も留まる我もいとゞ袂を濡らす事よと也。

〔手向の幣〕古へは幣袋に幣を入れて旅行の道々の神々に奉れる例也。

〔年の四年〕國司の任期の四年を云ふ

後拾遺集

別れゆく船をつなぐにまかすれど心はきみがかたにこそ引け　藤原孝善

金葉集

さし上る旭にきみを思ひ出でむかたぶく月にわれをわするな　中納言通俊

詞花集

二つなきこゝろを君にとゞめ置きて我さへ我にわかれぬるかな　僧都清胤

新古今集

遙々ときみが分くべき白波をあやしやとまるそでにかけつる　俊惠法師

新勅撰集

東路の野路の草葉のつゆしげみゆくもとまるも袖ぞしをるゝ　禎子内親王家攝津

續古今集

色々におもふこゝろを集めてこそ君が手向のぬさとなしつれ　大中臣能宣朝臣

同

一日だに見ねば戀しき君がいなば年の四年をいかゞくらさむ　凡河内躬恒

風雅集　　　　　　　　　　　　　　紀貫之

遠くゆく君をおくるとおもひやるこゝろも共に旅ねやをせむ

句題和歌　　　　　　　　　　　　大江千里

東路に隔てはつとも武藏あぶみふみたがふなと思ひてぞやる

詞集　　　　　　　　　　　　　　參河内侍

今ぞしる心づくしは君がため惜むあまりの名にこそありけれ

六帖詠草　　　　　　　　　　　　小澤蘆庵

諸共に老にけるかな大丈夫がわかれにかくぞそでしぼるべき

家集　　　　　　　　　　　　　　賀茂眞淵

能く行きてよくかへり來て足乳根の變らぬ御前はや拜みませ

萬葉集　　　　　　　　　　　　　大伴宿禰百代（もゝよ）

草枕旅行くきみをうつくしみたぐへてぞ來し志賀のはまべに

同　　　　　　　　　　　　　　　藤原朝臣執弓（とりゆみ）

堀江越え遠き里までおくりける君がこころはわすらゆまじも

〔遠く行く云々〕遠方へ行く君を思ふ我心は、君が身を暫時も離れねば、君と共に常に旅寐する事ならむと也

〔武藏鐙〕武藏國産の鐙にて中古の名物也、踏みと云はむ爲めの序なれども此時は其鐙を馬の餞けに贈りしより斯く詠める也。

〔心つくし〕心盡しに筑紫を言ひ掛けたる也。

〔諸共に云々〕別に臨みて斯く互ひに涙に袖をしぼるは共に老いたる故ぞかしとの意也。

〔能く行きて〕能くは、無事にと云ふ程の意也。

〔うつくしみ〕愛する餘りにの意。

〔わすらゆ〕忘らるの古言なり。

漫吟集　阿闍梨契沖

別れ來て友をおもへば馴々てしたしきほどはうときなりけり

後拾遺集　藤原維規

逢坂の關打ちこゆるほどもなくけさはみやこのひとぞこひしき

萬葉集　山上憶良

難波津に御船はてぬときこえこばひもときさけて立走りせむ

同　久米朝臣廣繩

去年のあきあひ見しままにけふ見ればなほもめづらし都方人(みやこべのひと)

萬葉集　□□朝利

本つ人名乘聞ずばもろともにしらぬおきなと見てやすぎまし

古今集　紀貫之

明日しらぬ我身と思へど暮れぬまのけふは人こそ悲しかりけれ

同　壬生忠岑

時しもあれ秋しも人に別るべきあるを見るだに戀しきものを

〔別れ來て云々〕別れて後に友を思へば、友情甚だ切なるものありて、別れざりし間は其情合疎かりきと也。

〔逢坂の云々〕僅に京都を出でゝ逢坂を越ゆる程もなく早くも今日は都の人が戀しと也。

〔難波津に云々〕君が唐國より歸朝して、大阪灣に着船せりと聞かば、取る物も取りあへず走り行きて迎へむとの意なり。紐ときさけてとは袍の襟紐をも結び果さざる意にて、あわたゞしき貌を面白く云へる也。

〔本つ人〕本人の造語なり。

〔暮れぬ間云々〕未だ明日にならぬ今日の意なり。

〔見れど飽かず〕移り去ぬればとは、死去するを云ふ。〔いはた野〕山城國なる埋葬の地也。〔いづら〕何處。〔いつしかと云々〕何時か歸宅するならむと待ちて居りしならむ妹に、一片の消息だにせずして死去せる君の悲しさよと也。〔百足らず〕初句は八十の冠詞、過ぎにし人とは死去せる人を云ふ。〔君まさで云々〕河原左大臣を悼める也。此の大臣は庭に鹽竈の浦の景色を作り置かれしより斯くは詠めり。〔煙絶えにし〕とは大臣薨去の後、鹽燒く煙も絶えし趣きを云ふ。

萬葉集

見れど飽かずいましし君が紅葉の移り去ぬれば悲しくも有るか　內禮正縣犬養宿禰人上（あがたいぬかひのすくねひとかみ）

同

いはた野に宿りする君家人のいづらと我をとはゞいかにせむ　作者不知

同

いつしかと待つらむ妹に玉づさのことだにつげずいにし君かも　大伴宿禰三中（みなか）

同

百足らず八十の隈路（くまぢ）に手向せば過ぎにし人にけだしあはむかも　刑部（おさかべ）垂麿（たりまろ）

古今集

君まさで烟りたえにし鹽がまのうらさびしくも見えわたるかな　紀貫之

同

時鳥けさ鳴く聲におどろけば君にわかれしときにぞありける　同

後撰集

植ゑ置きし二葉の松はありながら君が千とせのなきぞかなしき　同

後拾遺集　源爲善朝臣
君が植ゑし松ばかりこそ殘りけれいづれの春の子日なりけむ

古今集　三春有佐
君が植ゑし一むら薄虫のねのしげき野べともなりにけるかな

後撰集　藤原清正
君がいにしかたやいづこぞ白雲のぬしなき宿と見るぞ悲しき

詞花集　藤原相如
夢ならで又もあふべき君ならばねられぬいをも歎かざらまし

續古今集　式部卿邦省親王
馴れし世のともだにもなし古の見えつるゆめをたれにかたらむ

玉葉集　西行法師
船岡の裾野のつかの數そへてむかしのひとにきみをなしつる

新葉集　中務卿宗良親王
同じくば共に見し世の人もがなこひしきをだにかたり合せむ

〔君が植ゑし云々〕いづれの年の春の子の日に、君が野邊より引きて植ゑし松ならむか知らねど、植ゑし君は亡くなりて、松ばかり形見に殘れるも悲しと也。

〔君がいにし云々〕君が死にて行きし方は何處とも知られず、主なき宿となれる悲しさよとの意也。

〔ねられぬいをも〕安眠のなり難きを云ふ。

〔馴れし世の云々〕昔親しみ馴れし友も今は無ければ、古への事を夢に見ても語りて偲び合ふを得ずと也。

〔船岡〕山城の墳墓の地なり。

〔同じくは〕出來る事ならばの意也、

「友千鳥云々」友に後れて世に殘れる意を友千鳥によそへて云へり。時はわからぬと云ふに和歌の浦を掛けたるなり。

「此ほどの云々」親を失へる女の上を思ひやれる也。

「昔見し云々」亡友を偲ぶ心を、其家の梅に訴へしにて汝は主人顏になりてだに、我に物語せよと也。

「住み捨てし云々」古へ住み捨てし女は故人になりて、たゞ其の庭の花に跡を偲ぶ事よとの意なり。

「玉の緒の云々」長生の例に引かれし人も、死んで了へば同じ事ぞと也。

「苔の下」墳墓の下をいふ。

果葉集　□□敏夫

友千鳥おくるゝあとにおもひ出づるいつはと時はわかの浦波

同　□□信常

此のほどのねざめの命親なしにふすらむとこのなみだいかにぞ

同　同

おもひ出づやねられぬ床につくづくと枕かはし・夜々の情を

金葉集　藤原基俊

昔見しあるじがほにも梅が枝のはなだに我にものがたりせよ

續千載集　藤原業井

住みすてし人はむかしになりはてゝ花に跡とふやとぞふりぬる

新古今集　權大納言長家

玉のをの長きためしに引人もきゆればついにことならぬかな

玉葉集　權中納言俊忠卿

春の花秋の紅葉を見しとものなかばはこけのしたにくちぬる

新勅撰集

打むれて尋ぬるやどはむかしにて面影のみぞあるじがほなる　覺盛法師

玉葉集

見しほどの昔をだにも語るべき友もなき世になりにけるかな　藤原則俊朝臣

新後拾遺集

せめて今いひてなぐさむともがな心に餘るむかしがたりを　西園寺前内大臣女

拾遺愚草

年月はきのふばかりの心ちして見馴れしとものなきぞかなしき　權中納言定家

新葉集

故郷に立歸るともいまは世にむかしをかたるともやなからむ　大藏卿在仲

家集

語るべき友さへ稀になるまゝにいとゞむかしの忍ばるゝかな　兼好法師

同

思ふ人あらば嬉しき身ならまし在りのすさびはある世ながらに　賀茂眞淵

「打むれて云々」今日多勢して訪れし宿は、其の主人は亡くなりて、目に浮ぶ面影のみぞ主人顏に見ゆるも悲しと也。

「見し程の昔」自分が過ぎ來りたる過去の意なり。

「せめて今云々」せめて今我が心に餘る昔語を共に語り合ひて慰むべき友がほしと也。

「年月は云々」過ぎし年月は昨日の程の心地するに、其間相親しみし友の無きが悲しと也。

「語るべき友」昔の事を語るべき友の意なり。

「ありのすさび」共に世の中に生存し居る結果として、賴もしき事も惜き事もあるを云ふ。

〔今は世に云々〕我身には親友は皆死亡して世にあらざるに、松は何本も群がりて昔も今も親しげに立ち竝びをる事の羨しさよと也。
〔今は世に云々〕自分のみ知りをりて戀しく偲ぶ昔の事を、語り合ふべき友も今は無きが淋しく悲しと也。

漫吟集　　　　　　　　　　　　阿闍梨契冲

今は世に心ひとしきともゝなしうらやましきはまつのむら立

正木葛　　　　　　　　　　　　藤原齊世

今は世に語り合さんともぞなきわれのみ知りて忍ぶむかしを

〔龍の馬も云々〕瞬間に千里の途をも往復すると云ふ駿馬の今も此世にあらば得まきものよ奈良の都に行來して舊友に逢はむ爲めにとの意にて、九州に在りて都の友を戀へる心也。〔さす竹の〕大宮の枕詞なり。〔佐保の山べ〕大伴卿の住み居りし地なり。〔八すみしゝ〕安らかに知し召す意にて、大伴の枕詞也〔みけつ國〕統治し給ふ國なり。〔心ぐく〕心のくゝもりて晴々せざるを云ふ。〔奥山の云々〕上の句は序なり。菅の根のは、次に根と云はむ爲めに措けり。

同贈答歌

萬葉集
龍の馬も今も得てしが青によし奈良のみやこに行きて來むため　太宰帥大伴卿 旅人

同
龍の馬をあれは求めむ青によし奈良のみやこに來む人のため　山上憶良

同
さす竹の大宮人のいへとすむ佐保のやまべをおもふやもきみ　太宰少貳石川朝臣年足

同
八すみしゝ我大君のみけつ國は大和もこゝも同じとぞおもふ　太宰帥大伴卿

同
心ぐくおもはゆるかもはる霞たなびくときにことしかよへば　大伴宿禰家持

同
奥山のいはかげに生ふる菅の根のねもごろ我を相思はざれや　藤原朝臣久須麿

萬葉集

山吹は撫でつゝ生ふさむ有りつゝも君來ましつゝかざしたりけり　置始連長谷

同

我背子がやどの山吹咲きてあらば止まず通はんいや年のはに　大伴宿禰家持

同

長門なる沖つかり島おくまへてわがおもふ君は千年にもがも　巨勢倍對馬

同

おくまへて我を思へるわがせこは千年五百年ありこせぬかも　橘右大臣

信明集

あたらよの月と花とを同じくばあはれ知れらむ人に見せばや　源信明

古今集

君ならでたれにか見せん梅の花いろをもかをも知るひとぞしる　紀友則

拾遺愚草

呉竹にこづたふ鳥の枝うつりうれしきふしもともにこそよれ　左衛門督隆房

「山吹は云々」君が來りて我宿の山吹を插頭したれば、今よりは是を紀念として大切に生ふし立てむと也。
「年のはに」年毎にの意なり。
「長門なる云々」かり島は長門の沖に在る島の名、おくまへては奥深く思ふ意にて、二句までは其の序也。
「ありこせぬかも」生存して有り度しと願ふ意なり。
「あたらよの云々」あたらは可惜の意也。此夜の月と花とを物の哀れを知れる人に見せ度しとの意。
「呉竹に云々」集の詞書に、建久六年正月叙位に、ともに加階したるあしたに、とあり。

〔百千鳥云々〕一二の句は節(よ)の程と云はむ爲めの序也。節の程とは、ふしの間、卽ち皆時の意也。ともに踏み見しとには、其に加階せる事を云へる也。

〔つれなくば云々〕此方より剛情に搆へて君を訪はずあらば、君が訪ひ來るならむと思ひしに、此の雪に訪ひ來ぬ君の剛情さには遂に我は負けたりと也。

〔玉くしげ〕蓋の枕詞なり。

〔あけながら〕朱乍らの意にて、五位の袍の色を云ふ。四位に叙せらるべしと思ひしに反せる由を云へる也、

〔濃き紫〕中納言の袍の色を云ふ。

拾遺愚草　　中納言定家

百千鳥こづたふ竹のよいほどもともにふみ見しふしぞ嬉しき

月清集　　後京極攝政前太政大臣良經

つれなくば君もやとふと思ひつるけさの雪にも遂にまけぬる

同　　中納言定家

我が宿の庭のあとにもつれなくてとはんこころの深さをぞしる

後撰集　　源公忠朝臣

玉くしげ二年あはぬ君が身をあけながらやはあらんと思ひし

同　　小野好古朝臣

あけながら年ふることは玉くしげ身の徒らになればなりけり

同　　九條右大臣師輔

思ひきやきみが衣をぬぎかへてこきむらさきい色に見んとは

同　　庶明朝臣

古もちぎりてけりな打ちはぶき飛びたちぬべき天の羽ごろも

〔沖つ波云云〕沖つ波は高しと云はむ爲めの序也。高師の濱は和泉の名所なり。意は濱松の松より待つに言ひ掛けしのみの心ばへ也。

〔おきつの濱〕和泉の名所なり。

〔いかばかり云々〕老後に斯くも遠く隔り行く別れを、如何に辛く思ふならむと君は我心を推察するならむの意なり。

〔君はよし云々〕此度の遠き別れに就きては、行く君よりも留まる我身の待つ程ぞ辛しと也

〔君が代の云々〕遠くへ行く旅なれば長命を祈りて出發すと也。生の松原は筑前の名所也。

〔妹背川〕紀州名所

古今集　紀　貫　之

沖つ波高師の濱のはままつの名にこそきみをまちわたりつれ

同　藤　原　忠　房

君を思ひおきつの濱に鳴くたづの尋ねくればぞありとだにきく

拾遺集　清原元輔朝臣

いかばかりおもふらむとかおもふらむ老いて別るる遠き別れを

拾遺集　源　滿　仲　朝　臣

君はよし行末遠しとまる身の待つほどいかがあらむとすらむ

續古今集　小野宮右大臣實資

行きめぐりあひ見まほしき別れにはいのちも共にをしまるるかな

同　太宰大貳　高遠

君が代の遙に見ゆる旅なればいのりてぞゆくいきのまつばら

新千載集　清　輔　朝　臣

妹背川かへらぬみづの別路はききわたるにもそでぞぬれける

新千載集

聞きわたる袖だにぬるる中河のみづのこころをくみて知らなむ　後德大寺左大臣　實定

〔聞きわたる云々〕昔は、我が妻の死去せる事を聞くばかりにても悲しとの歌を賜はりしが、それにつけても眞實に妻を失ひし我が心の中を察し給へとの意にて、渡る、濡るゝ、汲む等の言葉は、皆共に河の緣語也。

明倫歌集　巻第六

神祇歌

後宇多天皇御製
風雅集
天つかみくにつ社をいはひてぞ我があしはらの國はをさまる

後村上天皇御製
新葉集
行末を思ふも久しあまつかみくにつやしろのあらむかぎりは

皇太后宮大夫俊成
家集
明らけき雲の上をばよろづよと天つやしろもてらしますらむ

後西園寺入道太政大臣 實兼
風雅集
天つ神くにつやしろと分ちてもまことをうくる道はかはらじ

荷田東麿
春葉集
誰が爲と誰か思はむ世を守るあまつやしろもくにつやしろも

〔天つ神云々〕天津神、國津社とは天神地祇の意にて、汎く神々をさして宣へる也。齋ひては祀りての義、葦原の國は皇國の古稱なり。

〔行末を云々〕天神地祇の此世に祀られて坐しまさん限りは、其神々の守らせ給ふべければ我國の行末は無窮也との意なり。

〔明らけき雲の上〕皇威輝く禁中の意なり。

〔天つ神云々〕天神地祇と別々に分れおはしても、誠を受け玉ふ道には變りあらじと也。

〔誰が爲云々〕歌は一視同仁に坐す意を示せる也。

雲錦集

夜のまもりひるのまもりと天つ神國のやしろや鎭めましけむ　賀茂季鷹

新拾遺集

思ひかねたばかりごとをせざりせば天の岩戸は開けざらまし　阿保經覽

日本紀竟宴歌

常闇も樂しき御代となりけるは天たちからをたすけありけり　阿刀宿禰春正

後醍醐天皇御製

新千載集

天の戸のあけし月日もかはらぬはかみ代ながらの光りなりけり

續拾遺集

明らけき御代のはじめのあさひやま天照神のひかりさしそふ　前參議爲長

風葉集

岩戸出でし日影は今も曇らねばかしこき御代をさぞ照すらむ　山階入道前左大臣實雄

金葉集

曇りなく豐さか上る朝日にはきみぞつかへむよろづよまでに　源俊頼朝臣

〔夜のまもり云々〕大御代の晝夜の御守の爲めにとて、古へ天神地祇を祀りて神社を建て始め給ひしならむとの意也。

〔思ひかね云々〕思兼命（高皇產靈尊の御子）の謀に依りて、岩戸の前にて神樂を奏せざりしならむには、世は永久に常暗となりしならむと也。

〔常闇も云々〕闇黑の世が、明かなる御代になれるは、天の岩戸を押開きし手力雄之命の補佐ありしに依るとの意也。

〔あさひやま〕山城の名山なり。

〔かしこき御代〕聖天子の御代。

〔豐さか昇る〕豐かに榮え登る意也。

花園天皇御製

風雅集

神風にみだれしちりもをさまりぬ天照す日のあきらけき世は

後宇多天皇御製

同

とこやみを照らすみかげのかはらぬは今もかしこき月讀の神

大中臣爲定朝臣

生載集

月讀の神してらさばあまぐものかゝる憂世もはれざらめやは

逍遙院内大臣實隆

雪玉集

日に見えぬものとはいはじあけくれの月日ぞもの〻神の光を

右兵衛督成直

新葉集

神路山出づる朝ひやきみが代をよるひる守るひかりなるらむ

後村上天皇御製

新葉集

九重に今もますみのかゞみこそ猶ほ世を照らすひかりなりけれ

中園入道前大政大臣公賢

風雅集

九重に天照る神のかげをうけてうつすかゞみは今もくもらじ

〔神風に云々〕亂れし塵とは騷亂を云ふ。今も伊勢の大神の御稜威明らかにして亂塵も神風に吹掃はれたりとの意也。

〔とこやみ〕暗夜を云ふ。

〔月讀神〕天照大御神の御弟に坐す。

〔月讀の云々〕月の神の照し給はゞ暗雲の掛かれる憂世も晴れむと也。四句は、斯かるに掛るを兼ねたり。

〔日に見えぬ云々〕神は目に見えぬ物と人は云へど、我は然思はず、日夜の日月の影こそ其御本體なれと也。

〔神路山〕伊勢神宮の山なり。

〔今もますみの鏡〕今も坐すに眞澄を掛けたる也。

〔天照す云々〕天照らす日の大神の御影を遷せる八咫の鏡の傳はれる國は曇りあらむや曇りあらじとの意也。
〔曇なき云々〕天照大神は、曇なき天皇の御心に御光を宿し給ふとの意にて、日神の常に天皇を守らせ給ふ趣きを云へる也。
〔八咫鏡云々〕八咫の鏡を捧げ持ちて岩戸を開きたる故事を詠めるなり。
〔とこしへに云々〕日の御靈つけし鏡とは、日本紀に、是時天照大神、手持二寶鏡一授二天忍穗耳尊一而祝之曰、吾兒視二此寶鏡一當猶レ視レ吾、云々とあるを云ふ。
〔二つの宮〕伊勢の内宮、外宮を云ふ

風雅集　　權大納言公蔭
天照すみかげをうつすます鏡つたはれる代のくもりあらめや

新續古今集　　大納言師賢
曇りなき君がこころのかがみにぞあまてる神はかげやどしける

後拾遺集　　大江廣秀
曇りなきやたのかがみや岩戸あけし天照るかみのひかりなるらむ

玉葉百首　　平宣長
とこしへに世をてらします日の御たまつけし鏡は伊勢の大神

達智門院
新續古今集
神風や二つの宮のみやばしらひとつこころに世をまもるらし

鶴山詠草　　參議源治紀
天照す内外の神もへだてなくくもらぬきみが御代まもるらし

新古今集　　皇太后宮大夫俊成
神風や五十鈴の川のみやばしらいく千代すめと立て始めけむ

〔五十鈴川云々〕流れの末といふに、大神の御末、即ち皇室の意を含めて詠める也。
〔大君を云々〕さきくは幸福あれの意。さくすゞは五十鈴の枕詞。誰かは反語、誰かはの義也。
〔保食の神〕伊勢の外宮に在す神、豊受姫神を申す。此神の御體より五穀化り出でし事、日本書紀に見えたり。
〔五種の田なつ物〕稲、稗、麥、大豆、小豆を云ふ。
〔くゝのち〕日本書紀神代紀に、次生二木祖句々廼馳一云々とあり、萬木の祖神也。
〔かやの姫〕草の祖神・草野姫、亦名を野槌と申す。

正木葛
五十鈴川清き流れのすゑまでもすめるやかみのこゝろなるらむ　青木定信

春葉集
大君を幸くといはふさくすゞのいすゞの宮をたれかあふがぬ　荷田東麿

日本紀竟宴歌
保食の神のちからは五くさのたなつものをぞ身よりなしける　大中臣安則

同
五くさの田なつものをば保食のかみぞなしける萬代のため　兵部大輔山道

同
くゝのちの産み施せる色々の木こそみやこのさかりなりけれ　源朝臣公輔

同
年毎のはるやむかしのかやの姫野にも山にもくさのもゆらん　平朝臣齊章

夫木抄
神こそは野をも山をも作りおけ人にまことのみちをふめとて　後九條内大臣基家

〔昔人の云々〕神の鏡の曇る時なきが如く、昔人の心をも磨きて、常に曇らすなと也。

〔曇なく云々〕神鏡の曇なく世を照らし給ふ事は、天照る空の日影を見ても思ひ知れと也。

〔何事も云々〕何事も凡て夢に等しき世の中に、神の眞のみは現なりとの意也。

〔瑞垣の云々〕外面の宮居とは、伊勢の外宮を云ふ。宮居は年を經て古くなりたれど、神德は今も倚ほ新らしとの意にて、あらたに靈驗灼然の意をも含めたる也。

〔葵草〕賀茂の祭に用ゐる挿頭花にて再云々は。二度其祭使となれる意也

御醍醐天皇御製

續後拾遺集

昔人のこころもみがけ千早ぶるかみのかがみのくもる時なく

玉葉集　荒木田經顯

曇りなく今もますみのかがみとはあまてるそらの日影にも知れ

衆妙集　源藤孝

大方は鏡を見ても思ひ知れそらにくもらぬかみのこころを

壬二集　從二位家隆

何事も夢とのみ見る世の中にかみのまことぞうつゝなりける

外宮北門歌合　藤原家業

瑞垣のそともの宮居ふりぬれど神のめぐみぞなほあらたなる

新後拾遺集　詠人不知

君が代にふたたびかざす葵草かみのめぐみもかさねてぞしる

心珠詠草　三光院内大臣實枝

安からぬうき身ながらも世にすめば神の惠にいかでもるべき

玉鉾百首　　　　　　平　宣長

天地のかみの惠しなかりせば一日ひとよもありえてましや

詠百首和歌　　　　　神主　崇業

日の本は神のみ國ときくからにいますがごとくたのむとをしれ

新續古今集　　　　　大江茂重

道しあれば猶ほたいむかな偽りをたゝすの杜のかみにまかせて

千首和歌　　　　　中務卿宗良親王

理りをたゞすの神にねぎかけてなほさりともと世をたのむかな

廣田社歌合　　　　藤原隆信朝臣

白玉のまさごのかずにあらねども惠みひろたの名をたのむかな

新拾遺集　後醍醐天皇御製

こゝの重の葵かざして今日はまた神につかふる雲のうへびと

同　　　　　　　關白前左大臣基平

長閑なるはるの祭りの花鎭めかせをさまれとなほいのるらし

〔天地の云々〕天地神明の惠みの無かりせば、一日一夜と雖も存在し得られむや、存在し難からむとの意也。〔いますが如く〕論語に、神を祭ること神在すが如くすとあるに據れる也〔たゞすの社〕山城の下鴨神社なり。偽りを正す意に云ひ掛けたる也。〔理を云々〕ねぎかけては祈願を掛けての意。當時世の中亂れたれば、道理をたゞすの神に祈りて、我が君の代にし度しとの心を詠み玉へる也。〔ひろた〕攝津國武庫郡なる廣田神社を云ふ。〔雲の上人〕殿上人〔花鎭〕陰暦三月に行はるゝ祭なり。

家集

祈りつゝかみのめぐみにまかせつる苗代水はいつも絶えせじ　　橘為仲

續千載集

天皇の天のみおやのみことのり傳へて祈るとよのみや人　　度會行忠

家集

貴きやすめらみことはかみながらかみをまつらすけふの新嘗　　賀茂眞淵

千載集

動きなく千代をぞ祈るいはや山とるやさかきのいろかへずして　　藤原經衡

同

天の下のどけかれとや榊葉をみかさのやまにさしはじめけむ　　藤原清輔朝臣

新勅撰集

霜八たびおけどみどりの榊葉にゆふしでかけて世を祈るかな　　祝部忠成

風雅集

名草山とるや榊のつきもせずかみわざしげき日のくまのみや　　紀俊文朝臣

〔祈りつゝ云々〕苗代水とは晩春より初夏に掛けて、稻草を下す田の水を云ふ。神に祈りて引く苗代水は、いかに旱の時と雖も涸るゝ事なしと也

〔とよの宮人〕豐受宮、卽ち伊勢外宮の神宮を云ふ。

〔貴きや云々〕天皇は現在の神にましまし乍ら、尙ほ祖先の神を祭り給ふ今日の新嘗祭の貴き事よと也。

〔動なく云々〕三句に岩屋山と云へるに依りて動なくとも詠めり。岩屋山は備中の名所なり。

〔三笠山〕春日神社を云ふ。

〔名草山〕紀伊の名所なり。

〔日前の宮〕日前國懸神社を云ふ。

〔東の云々〕ことむけては平定しての意也。日本武尊東夷征伐の事よりして、草薙劒は熱田神宮に鎭め祀りしを云ふ。
〔ふるの御社〕奈良縣山邊郡なる石上神宮を云ふ。祭神は布都御魂の御劒なり。
〔大君の云々〕初句は冠詞、三笠は春日神社。鹿島は常陸國鹿島神宮にて春日と同神武甕槌命を奉祀す。意は春日神社も素より貴けれど、倘ほ鹿島の本宮の方が勝れて惶く覺ゆと也
〔玉津島〕紀州の名社、祭神は和歌三神の隨一、衣通姫なり。
〔ともすれば〕やゝもすればの意也。

玉葉百首　　平　宣　長
東の國ことむけて御つるぎは熱田のみやにしづまりゐます

うけらが花　　橘　千　蔭
御劒をいはひそめてし昔より世をてらしますふるのみやしろ

同　　同
大君のみかさの山もありといへど鹿島がさきの本つみやしろ

新續古今集　　後照光院關白左大臣 道平
曇なき御代にひかりをさしそへて猶ほ道てらせたまつしまひめ

藤河百首　　權中納言定家
祈るより神もさこそはねがふらめ君明らかにたみやすしとは

道遙院内府家著到百首　　三光院内大臣 實枝
神もまた神にそいゐるいやつぎに君の君をしまもる代なれば

拾塵集　　多々良政弘
ともすれば人はおこたる神垣に神やときはの世をいのるらむ

玉葉集
皆人の祈る心もことわりにそむかぬみちをかみやうくらむ　藤原爲守

新拾遺集
理りにたがはぬみちを春日やま神の心ときくもたのもし　前大納言經顯

月清集
民の戸もかみのめぐみにうるふらしみやこの南宮居せしより　後京極攝政前太政大臣良經

新後撰集
天の下のどけかるべし難波がたたみのゝ島にみそぎしつれば　津守國經

永福門院

同
天の下治まりぬらし三笠やまあまねくあふくかみのめぐみに　後京極攝政前太政大臣良經

續拾遺集
千早振別雷のかみしあればをさまりにける天の下かな　爲盛朝臣

內裏九十番歌合
治まれる御代にぞいとゞ知られける神は正しき道守るぞと

「皆人の云々」人々は神に種々の事を祈願するならむが道理に背かぬ正道につきての願を神は受け給ふならむとの意也。

「民の戸も云々」此の神の此處に宮居を定め給ひしより民の家居も神の御惠に潤ひて榮えゆく事よと也。

「天の下云々」難波の海なる田蓑の島に於て禊祓したれば今日よりは天下に罪穢れなくなりて長閑けからむとの意也。

「三笠山」春日明神を云ふ。

「別雷の神」京都なる上賀茂の神社なり。

「治まれる云々」此の歌は、下句を上に移して見るべし

續古今集

久にへて君君なれと守るらしひとのくにゝよりわがくにのため　　平長時

同

八百萬神もさこそはまもるらめてる日の本の國つみやこを　　大納言爲家

正木葛

諸人のいのるにつきてやすき世もなほやすかれと神や守らむ　　殘夢

千載集

天皇を八百萬代のかみもみなときはにまもるやまの名ぞこれ　　宮内卿永範

新葉集

諏訪の海や氷を踏みて渡る世も神しまもらばあやふからめや　　中務卿宗良親王

新後撰集

榊とるみかさの山にゆふかけていのる日嗣のなほやさかえむ　　前中納言兼仲

續後拾遺集

天地の神のたもてる國なればときはかきはにきみぞさかえむ　　關白大政大臣冬平

〔久にへて〕年を久しく經過して、との意也。

〔君々なれ〕我が大君よ、何時までも大君にてましませと云ふ意也。

〔八百萬云々〕都は我が日本の主要の地なれば、多くの神々もさこそ守り給ふならむと也。

〔いのるにつけて〕諸人が無事安穩を祈るにつけての意なり。

〔天皇を云々〕集の詞書に、「嘉應元年高倉院御時、大嘗會悠紀方神遊の歌近江國守山を詠める、」と見えたり。即ち近江の守山を常盤に「まもる山」と詠める也。

〔諏訪の海〕信濃國なる湖水なり。

〔日嗣〕皇位。

〔民の爲め云々〕民の爲め、世の爲めに祈る神事の多き御國は益々榮え行くべき也との意なり。

〔幣まつり云々〕神に幣帛を奉り、種々の贖物を捧げなどして、人皆擧りて清き心に祈るに依りて、我が御國の光は益々榮えむとの義也。

續後拾遺集

民の爲め世の爲めいのる神わざのしげき御國はなほさかえむ　度會常長

六帖詠草

幣まつりあがふるまゝに光りそふ神のみくにはいよゝさかえむ　小澤蘆庵

明倫歌集 卷第七

國體歌

〔我國は云々〕我國は天照大神、即ち日之神の御末の連綿として位と坐す國なれば日の本と云ふとの意也。
〔曇らぬ君〕明君の義にて、聖天子を云ふ。
〔天地の云々〕我國を神國と言初めしは天地開闢の時よりの事ならむと也
〔天よりおろす〕伊弉諾尊、天浮橋の上に立たして下界に沼矛を指し下し給ひし故事を云ふ
〔玉鉾の〕道の枕詞なり。
〔神代の道〕天祖天神達の定め給ひし人の道の意なり。

玉葉集　　後京極攝政前太政大臣 良經
我國は天照る神の末なればひの本としもいふにぞありける

千首　　中務卿宗良親王
畏くも照る日の本と名づけたる曇らぬきみをあるじにはして

新拾遺集　　源智行
天地のひらけしよりや千早振神のみくにといひはじめけむ

後嵯峨天皇御製
續古今集
久方の天よりおろすたまぼこのみちある國ぞいまのわが國

新續古今集　　榮仁親王
敷島の大和島根をふみそめしかみよのみちぞいまもたゞしき

〔國は多けど〕國は多けれどもの意也。〔かむろぎ〕天皇の御祖神。〔大汝云々〕大汝は大國主命の別名、少彦名命は高皇產靈尊の御子也。此の大少の二神、兄弟の義を結び玉ひ、この大八洲國を造り固め給ひし事、紀記に見えたり。〔天地の云々〕國家の根底の盤石の如く堅固にして動き無きは、天地の神の之を堅められしならむとの意也。〔百千々の云々〕天地の神の堅め給へる我が國の基礎は萬世不變なりとの意也。〔よさしまつれる〕天祖の詔勅を云ふ。〔としある〕豐かに稔る意なり。

玉鉾百首
天の下國は多けどかむろぎのうみなしませる大八洲國　　平宣長

同
大汝少彦名（おほなむちすくなひこな）のよろしくもつくりかためしおほやしまぐに　　同

家集
大汝少彦名のつくらし、おほやしまぐにはひろらにあつらに　　楫取魚彦

琴後集
天地のかみや堅めしよろづよに立てゝうごかぬくにのみ柱　　平春海

同
百千の代にもうごかじあめつちの神のかためし大和島根は　　同

うけらが花
天の原よさしまつれる日のみ神てらさむ限りくにはうごかじ　　橘千蔭

同
千五百秋としあるからに神代より瑞穗の國とたたへけらしも　　同

萬葉集
敷島の大和のくには言靈(ことだま)のたすくるくにぞまさきくありこそ　作者不知

拾遺愚草
天地と限りなかれとちかひおきしかみの御言ぞわがきみのため　權中納言定家

新古今集
敷島や大和島根も神代よりきみがためとやかためおきけむ　御京極攝政前太政大臣良經

新拾遺集
天地の昔をとへばあしはらやなほそのかみの代々ぞひさしき　詠人不知

續千載集
天地の開けそめぬる神代よりたえぬ日つぎのすゑぞひさしき　前關白左大臣家平

夫木抄
唐土の代々はうつれどしきしまや大和島根はひさしかりけり　土御門內大臣通親

同
神代より三くさの寶傳はりてとよあしはらのしるしとぞなる　從一位教長

〔敷島の云々〕言靈の助くる國とは、言語に靈驗ある國の義。我國の詞は一種の美妙なる靈ありて、それに依りて文學の道も榮え行く國なるが、此の上ともに幸あれかしと也。
〔天地と限なかれ〕寶祚之隆當與天壤無窮矣と宣ひし日神の詔勅を云ふ。
〔敷島や云々〕我國は神代より大君の御爲めにとて堅め置かれしならむとの意也。
〔天地の云々〕我が國家の淵源の遠きを云へる也。華胥は皇國の古稱也。
〔たえぬ日嗣〕皇統連綿として中絶せざるを云ふ。
〔うつれど〕支那の革命の絶えぬ意也

琴後集

神代より神の寶ととるゆみをまもりとなせるくにぞこのくに　　平　春　海

新千載集

海原やなみにたゞよふ葦芽(あしかび)のかひあるくにとなれるかしこさ　　津　守　國　冬

續現存六帖

神代よりその名しられてわたつみの波をさまれる浦安のくに　　内　大　臣　實繼

風雅集

みことのりみだれぬ國の障りなく豐葦はらのくにぞをさまる　　祭　主　定　忠

詠百首

世を守る千々の社の神しあれば何かみだれむあしはらのくに　　中　納　言　長　親

新玉津島歌合

幾千代も守りはすてじ敷島のやまとしまねはかみのくにとて　　前　大　納　言　公忠

夫木抄

秋津島神の治むる國なればきみしづかにてたみもやすけし　　源　　仲　　綱

〔神代より云々〕神の寶と執る弓とは天之眞鹿兒弓、生弓矢などの類を云ふ日本紀、古事記等の神代卷に見えたり。意は我國尙武の俗の久しきを云へる也。

〔海原や云々〕日本書紀神代紀に據りて、皇國の開闢以來日を逐うて美しき國となれる事を讚稱せる也。葦芽とは天地開闢の時始めて成り給へる神の貌を云ふ。

〔浦安の國〕安樂國の意にて、日本の古稱なり。

〔勅亂れぬ〕天祖天神の神勅のまゝに萬代不變なるを云ふ。

〔千々の社〕天神地祇を奉祀せる國々の神社を云ふ。

六帖詠草　小澤蘆庵

愚にも千代萬代といのるかなここはとこ世のやまとしまねを

風雅集　民部卿爲定

限りなきめぐみを四方にしきしまや大和島根はいまさかゆなり

萬代集　詠人不知

千早振神のさだめし國なればいにしへよりもいまぞさかえむ

夫木抄　大納言爲家

豐なる七の道のみつぎものうみやまかけてさだめおきてき

琴後集　平春海

織り出づるこまもろこしの品はあれど大和錦にしくものぞなき

詠百首　左中將基綱

天地の神のかためし御國とてをかしはてたるえみしをも見ず

雪玉集　逍遙院内大臣實隆

仰ぎ来て唐土人(もろこしびと)も住みつくやげにひのもとのひかりなるらむ

〔愚にも云々〕此の日本國は、もとより永久不變の國なるを、愚かにも我は千代萬代などと制限ある言の葉を以て祈りし事かなと也。

〔限なき云々〕君の惠を四方に敷くと云ふ意より、敷島に續けて詠めり。

〔豐なる云々〕七の道とは、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道、卽ち日本全國を云ふ。

〔織出づる云々〕高麗、唐土の織物も美なれども、我が錦には如かずとの義にて、何事も我が國風の善きを讃稱せる也。

〔をかしはてたる〕外夷の犯し果てたる事無しの意也。

太平記

草も木も我が大君の國なればいづくかおにのすみかなるべき　　紀朝雄

玉葉百首

天照るや月日のかげを見る國は本つみ國につかへざらめや　　平宣長

〔草も木も云々〕鬼とは王命に服從せざる者を云ふ。草木に至る迄、天下悉く我が王土たる上は、鬼の如き非國民の住處は無しとの意也。

〔天照るや云々〕日月の御光に浴して生存する限りの世界の人間は、其の日月の神の生れ出で給ひし本國たる我が日本に奉仕せずしては有られ難しと也。

明倫歌集 卷第八

文歌

後龜山天皇御製
新葉集
集めては國の光となりやせむ我がまどてらす夜はの螢は

後醍醐天皇御製
新千載集
數々に集むる玉のくもらねばこれも我が世のひかりとぞなる

大納言師兼

宗良親王千首和歌
君の爲め民の爲めにとおもはずば雪も螢もなにかあつめむ

村上天皇御製
後撰集
敎へおくことたがはずば行すゑの道遠くともあとはまどはじ

後白河天皇御製
續後撰集
濱千鳥踏みおく跡のつもりなばかひある浦に逢はざらめやは

「集めては云々」夜半の螢とは、晉の車胤が螢を集めて燈火に替へて讀書せし故事也。學窓の光は、卽ち國家の光たるべきならむとの意也。

「數々に云々」集むる玉とは、續後拾遺集を撰ぜしめ給ひし事を云ふ。我世の光とは、朕が代の光輝ある一事業の意也。

「君の爲云々」雪もとは晉の孫康の故事に因る。螢もは前に註せり。學問は私利を營む爲のものならぬ事を詠み給へる也。

「踏みおく跡」學業に勉勵する意也。

〔知らざりし云々〕古への代々の賢君の御跡に見習ひてあらば、やがて其の明かなりし御代に今の代を復す事を得むと也。
〔聖の御代〕聖天子の御代。
〔古きを移す〕古文學を盛にするを云ふ。
〔君が爲云々〕此歌は村上天皇の、未だ親王にて在しゝ頃、書物を奉りて詠める歌にて、古への聖代の跡に倣ひ給へとて此書を奉るとの意也。
〔上つ代の云々〕上代の事蹟を能く考究せよ、古事記は其の事實を寫せる鏡也との意なり。
〔まつぶさ〕詳細。
〔日本御書〕日本書紀三十卷を云ふ。

後嵯峨天皇御製
續後撰集
知らざりし昔にいまやかへりなむかしこき代々の跡習ひなば

同　　前太政大臣　實氏
傳へきく聖のみ代の跡を見てふるきをうつすみちならはなむ

後撰集　　貞信公　忠平
君が爲めいはふ心のふかければひじりの御代のあとならへとぞ

家集　　儀同三司　實蔭
うつし置きて神代のことも曇りなき文こそ道のかゞみとは見れ

琴後集　　平春海
天地の遠きはじめも見てぞしる神代のふみをいまにつたへて

玉鉾百首　　平宣長
上つ代のかたちよく見よ石上(いそのかみ)ふることぶみはまそみのかゞみ

同　　同
まつぶさにいかで知らまし古を日本(やまと)御書(みふみ)の世になかりせば

〔神無月云々〕集の詞書に、「貞觀の御時、萬葉集はいつ計り作れるぞと問はせ給ひければ詠みて奉りける、」とあり。楢の葉の云々は、奈良朝の御代に成れる集なりとの意を云へる也

〔武夫の云々〕初句は八十の冠詞、八十氏文とは諸家の系圖記錄を云ふ。

〔見おろせば云々〕古書を繙きて後世の事を見れば何事も明か也。されば古書は學界の高嶺ならむと也。

〔遠つ國云々〕如何なる遠國、知らぬ境の言葉も、文學の道には隔なしとの意なり。

〔昔の人は云々〕古人の言行も目の前に見ゆるを云ふ。

古今集

神無月時雨ふりおける楢の葉の名におふ宮のふることぞこれ　　文屋有秀

うけらが花

かしこきや奈良の都の宮人とかたらふものはふみにざりける　　橘千蔭

夫木抄

武士の八十氏文はかたがたにゆきわかれたるあとぞ見えける　　正三位知家

家集

見おろせば下つ千里のくまもなしふりぬる文や高根なるらむ　　賀茂眞淵

家集

遠つ國知らぬ境のことのはもふみゝるみちにゆきかよひけり　　平大平

鈴屋集

書よめば大和唐土むかしいまよろづのことを知るぞうれしき　　平宣長

同

書よめば昔の人はなかりけりみないまもある我がともにして　　同

鈴屋集　　平宣長
食ふものは滿ちてもきゆる腹の中に長く殘るはよめる書なり

同　　同
書よまでなにゝつれづれなぐさめむ春雨のころ秋のながき夜

同　　同
をりをりに遊ぶ暇はある人のいとまなしとてふみよまぬかな

同　　同
書よめば又たぐひなき樂みをふみ見ぬひとは知らぬなりけり

同　　同
千萬の書もとしへて怠らずよめばよみうるものにぞありける

同　　同
いろはだにえ知らぬ人をはかなしと見つつ書見ぬ人ぞはかなき

家集　　權中納言源宗武
書よまであそびわたるは網の中に集まる魚のたのしむがごと

〔食ふものは云々〕食物は腹に滿たしても軈て消化して空しくなれど、讀める書物は消化すればする程深く心に殘る物ぞと也。〔つれ〴〵〕徒然、無聊の義なり。〔書讀めば云々〕書物を繙けば、云ふに云はれぬ樂しみある事なるを、書を讀まぬ人は此の樂しみを知らぬ事の不憫さよと也。〔千萬の云々〕千萬卷の書籍と雖も、倦まず怠らず讀みもて行けば、遂には讀み盡くす事を得べきなりとの意なり。〔いろはだに〕いろはの文字すらの意。人を嗤ひて自己を顧みざる者を戒めしなり。

「身の後は云々」身の後とは死後を云ふ。但し此歌にては來世の意に用ゐたり。我は古書を集め持てるも、之を繙きもせずして徒らに朽たし果てし罪業深きに因りて、來世には紙蟲などに生れ變らむ歟との意也。
「今はたゞ云々」古學に精通せる友は今は殆ど歿し盡したれば、古書を繙きて古人を友とするの外は無しと也。
「踏み分けよ云々」皇學の貴き事を知らずして、漢籍のみを學ぶは大和民族の踏むべき道に非ず、須らく皇國の神典を讀破せよと也。
「ことよき」能い加減の所説の意也。

六帖詠草　小澤蘆庵
身の後はしみとやならむ昔書見るとはなしにくたしはてつる

拾遺愚草　權中納言定家
徒に打ちおくふみも月日へてあくればしみのすみかとぞなる

常山詠草　贈大納言源光圀
今はたゞ書より外の友もなしむかしをかたるひとしなければ

春葉集　荷田東滿
親の親の世を汲みしらる水莖の跡や子の子のしるべにはせむ

同　同
踏み分けよ大和にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは

鈴屋集　平宣長
からぶみもこれはことよき唐書とおもひてよめば損ひもなし

家集　儀同三司　實愛
見る書にしるしおかずば代々かけて昔をこふる跡はのこらじ

琴後集

降りゆくこの世のさがも知らざらむ書見て遠き路をとはずば　平　春海

新續古今集

尋ねずばかひなからまし古の代々のかしこき人のことのは　中納言通俊

續古今集

八雲立出雲八重垣けふまでもむかしのあとはへだてざりけり　後京極攝政太政大臣 良經

六帖詠草

すさのをの神のみ代よりあらがねの地に傳へて茂ることのは　小澤蘆庵

玉葉集

秋津島人のこゝろを種としてとほくつたへしやまとことの葉　前大納言爲家

閑田詠草

千々にさくことばの花もすなほなる心ぞ本の根ざしなるべき　伴　蒿蹊

同

ことのはの道によらずば嬉しきもうきも思ひをいかでしらまし　同

「降り行く云々」降り行くとは廢頽し行く意、此世のさがとは世の性質、即ち人情風俗、文武の道等の萬事に亘りての世間の狀態の義なり。

「尋ねずば云々」歷代の古書を繙きて賢き古人の言葉を尋ね知らずば、人として何の甲斐もあらじと也。

「八雲立つ云々」一二の句は素戔嗚尊の神詠の句にて、我國固有の歌道の意なり。

「あらがねの地」荒金のは地の冠詞、地とは國土を云ふ

「人のこゝろ云々」古今集の序を取りて言へる也。

「本の根ざし」根本の義、歌道の本意ならむと也。

［あはれとや云々］神の御前に手向け奉る爲めに詠める歌にはあらずとも凡て眞心の深く籠れる歌ならば、神は其歌を見て同情を寄せ給ふべしとの意也。
［秋津島云々］四海波靜かに治まる御代にて、歌の道も復古せりと也。かへは波の縁語。
［世に廣く云々］歌道復古の義なること前の歌に同じ。敷島の道とは歌道を云ふ。
［咲く花の云々］時期の到來せるに依りて、花の咲く如くに古學の道は開け立てりと也。
［生ひぬ櫻］支那には生育せざる櫻。
［蔭しめて］花蔭に居を卜しての意也

雪玉集　　逍遙院内大臣實隆

あはれとや見そなはすらむ言の葉は必ず神の手むけならでも

拾遺愚草　　權中納言定家

秋津島外まで波はしづかにてむかしにかへるやまとことのは

三十六番歌合　　權中納言元長

世に廣く仰がざらめやいにしへに又立ちかへるしきしまの道

新拾遺集　　入道二品親王法守

天地と共に久しきしきしまのみちある御代に逢ふがうれしさ

家集　　荒木田久老

咲く花の匂ふがごとくふることは開けみちぬよ時のゆければ

うけらが花　　橘千蔭

から國に生ひぬさくらの蔭しめてむれつゝ歌ふ大和ことのは

六帖詠草　　小澤蘆庵

いかばかり榮えかゆかむ動きなき御代は常世の大和ことのは

漫吟集

春は萠えも秋はもみぢて神代よりをりにつけたる大和ことのは　阿闍梨契沖

新撰六帖

さばかりのあさ政しげけれど世々にすてぬはしきしまのみち　右大辨入道光俊

新千載集

武士のこれや限りのをり〳〵もわすられざりししきしまのみち　源和氏

後嵯峨天皇御製

夫木抄

昔へやいかなる繩を結びおきて今もその代のことをしるらむ

雪玉集

結びても繩はその世に朽ちぬべし長きためしぞ水くきのあと　逍遙院内大臣實隆

日本紀竟宴歌

わたづみの千重の白波こえてこそ八しまの國に文はつたふれ　橘朝臣直幹（なほもと）

鈴屋集

廣はたのかみの御代にぞくだらよりふみてふものは奉りける　平宣長

〔春は萠え云々〕春は萠え秋は紅葉こそとは、結句なる大和ことの葉に掛れる語也。春秋の折節につけつゝ、和歌に心を遣るは神代も今も變らずとの意也。

〔あさ政〕朝廷の御政務。しげゝれどは忙はしけれどの意なり。

〔武士の云々〕歌は武士が戰場に臨みて、今が最期と云ふ折々にも忘られざりしほどの道にて、實に貴さの限り也との意也。

〔繩を結び〕支那の太古、繩を結びて約束の證としたる故事に因る。

〔文は傳ふれ〕應神の御世に漢籍の渡來せしを云ふ、

〔廣幡神〕應神帝。

〔古事を云々〕支那より傳來せる文字なれど、我が皇國の古事を詳かに傳へ殘せるに依りて御國の一の寶となれりと也。

〔耳に聞き云々〕我が見聞せし事どもを文筆の上に寫し止めて、後世の人々の言ひ草に殘し置かむと也。

〔主や誰云々〕古への事を書き置ける此の書の作者は誰とも知られねど、心の儘に記せる文章の有樣に依りて其の人品の面影に浮びて見ゆと也。

〔とる人の云々〕作者の學力の程は筆に現はるゝ物なれば文筆は卽ち斯道に於ける玉鉾也との意、玉鉾は古代杖とせし鉾也。

鈴屋集　　平宣長

古事を今につばらにつたへ來て文字も御くにの一つみたから

曾丹集　　曾根好忠

耳に聞き目に見ることを寫し置きて行末の世の人にいはせむ

拾遺愚草　　權中納言定家

主や誰見ぬ世のことをうつしおく筆のすさびに浮ぶおもかげ

續後撰集　　式子内親王

筆の跡に過ぎにし事をとゞめずばしらぬ昔にいかで逢はまし

春葉集　　荷田東滿

昔今の人のことのは花紅葉ふでのはやしのうへにこそ見れ

家集　　平大平

とる人の力ぞ筆にあらはるゝふみかくみちのこれやたまほこ

新續古今集　　詠人不知

見る度に老いのなみだをそゝぐかなむかしの人の筆のすさびに

閑田詠草

我が筆ぞあまり拙き名ばかりをしるすに足ると思ひすてゝも　伴　蒿　蹊

常山詠草

秋風につらもみだれてゆくかりのかげ恥かしきふでの跡かな　贈大納言源光圀

續千載集

忍ぶべき人もやあると濱千鳥かきおくあとを世にのこすかな　式乾門院御匣

琴後集

等閑に書きなすさめそ鳥の跡は人のこゝろも見ゆといふなり　平　春　海

詞花集

思ひやれ心の水のあさければかきながすべきことのはもなし　大政大臣實行

新葉集

思ひなるほども知られむ水莖のあとをこゝろのしるべとも見ば　前内大臣實繼

うけらが花

さばかりは言ひもえがたき眞心のおくをも見する水莖のあと　橘　千　蔭

〔我が筆ぞ云々〕名ばかりを記すに足るとは、楚の項籍が、書は以て姓名を記すに足ると揚言せしを云ふ。

〔秋風に云々〕秋風に列を亂して行く雁の如く、しどろもどろなる我が筆跡の恥かしきよと也、雁は文字を成す鳥なれば斯くは喩へて詠めり。

〔忍ぶべき人〕我が歿後に、我を追懷する人の意也。

〔鳥の跡〕文字を云ふ。支那の太古、獸蹄鳥跡の文を見て創めて文字を造りしより云ふ。

〔心の水〕水に書き流すと言ふに寄せむ爲の詞にて、單に心の意也。

〔水莖のあと〕文字を云ふ。

「我が身世に云々」朕が亡き後には朕が書き殘せる文書を見て何人かあはれと褒むる者あらむや、誰もさは思はじと宣へる也。「見る度に云々」昔の歎きを書き殘し置ける文書を見る毎に、其時を偲び出でゝは落涙すと也。「書きつくる云々」古人の書を見て我が及ばざるを歎息せる趣き也。「もしほ草」藻鹽草に掻き寄せて集むる物なれば、かくと言はむ爲めの序に置ける也。

後二條天皇御製
新拾遺集
我が身世になからむ後はあはれとは誰かいはまの水莖のあと

東關紀行　藤原言員
見る度になみだぞおつるいにしへのなげきをのこす水莖の跡

新千載集　前中納言公有
書きつくる昔の跡を見るたびに及ばぬ身こそねは泣かれけれ

續千載集　度會朝棟
行末の名をこそ思へもしほぐさかきおく跡のくちぬためしに

明倫歌集　卷第九

武歌

萬葉集

大丈夫の心思ほゆおほきみのみことのさちを聞けばたふとみ　　大伴宿禰家持

同

霰降り鹿島の神に祈りつゝすめらみくさにわれは來にしを　　大舍人千文

同

千萬の軍なりとも言擧げせずとりて來ぬべきをのことぞ思ふ　　高橋連蟲麿

家集

千萬の軍なりとも千はやぶるひとをなごさであにかへらめや　　平春鄉

新葉集

君がためわがとり來つる梓弓もとのみやこに歸さざらめや　　前內大臣隆俊

「みことのさち」勅言の幸の義。大伴佐伯の二氏に、「海行かば水漬く屍、山行かば草蒸す屍」云々、の旨を賜はれる幸福を云ふ。斯く貴き勅言を蒙れる氏人の大丈夫等の歡喜の心思ひ遣らると也。

「霰降り」霰の降る音はかしましきより、鹿島の枕詞とす。

「言擧せず」彼れ是れ言はずの意也。

「とりて來ぬべき」とりひしぎて來るべきの意なり。

「なごさで」緩和せしめずして。

「もとの都」平安京を云ふ。

新葉集　　中務卿宗良親王

思ひきや手もふれざりし梓弓おきふしわが身馴れむものとは

同　　前大納言守親

陸奥の安達の眞弓とりそめしそのよにつかぬ名をなげきつゝ

五百番歌合　　關白左大臣師基

足乳根のとりはじめたる梓弓これさへいへのかせとなりぬる

衆妙集　　源　藤孝

願くは家に傳へむあづさゆみもとたつばかりみちをたゞして

後鈴屋集　　平　春庭

とる人のこゝろをさへに引立てて弓ぞ御國のたけきつはもの

同　　同

とるまゝに猛きこゝろも自らふりおこさるるあづさゆみかな

うけらが花　　橘　千蔭

御執らしの梓の弓は神代よりわがおほきみのまもりなりけり

〔思ひきや云々〕今迄は手を觸るゝ事さへ無かりし梓弓を、起臥に手操りて軍勢を率ゐ戰場に臨まむとは思ひ設けざりと也。

〔安達の眞弓〕陸奥の安達よりは善き弓を作り出でてしかば此の名ある也

〔足乳根〕母の枕詞より轉じて親の事を云ふ。

〔家の風〕我が家の名譽の業。

〔本立つばかり〕一流の家柄となりて世に立つ計りの意なり。

〔とる人の云々〕とる人とは弓執る人也。心を引立つと云ふは弓の緣語也

〔御執らしの弓〕君主の料とする弓の意也。みたらしの弓とも云ふ。

「四方山の云々」初句は四方の人々と云ふ程の意。其の多勢の寶とする弓を、今日神前に奉納せりと也。
「天の羽々矢」日本書紀、天孫降臨の一書に、「手提二天梔弓、天羽々矢一」云々とあり。且神武天皇が長髄彦に示し賜ひしも天羽々矢なり。
「弓末振起し」弓を振り立てゝ射る状なり。
「語りつくがね」語り傳ふる爲にの意。
「武夫の云々」一二の句は高見に係れり。高見山は近江の名所なり。
「矢並つくろふ」矢の曲りを撓む。
「上矢のかぶら」箙(エビラ)の上指にせる鏑矢を云ふ。

拾遺集　詠人不知
四方山の人のたからとするゆみを神の御前にけふたてまつる

日本紀竟宴歌　藤原朝臣忠紀
久方の天の羽々矢のなかりせばあらぶるひとを何かむけまし

萬葉集　笠朝臣金村
大丈夫の弓末振起し射つる矢を後見むひとはかたりつくがね

武家百首　權大納言源頼宣
武士の弓矢とる名の高見山なほいくたびもこえむとぞおもふ

金槐集　鎌倉右大臣實朝
武士の矢並つくろふ籠手のうへに霰たばしる那須のしのはら

太平記　菊池武時
武士の上矢のかぶらひとすぢにおもふこゝろは神ぞ知るらむ

拾遺員外　權中納言定家
百敷や照る日の前にとるほこのたつるこゝろは神もしるらむ

六帖詠草

武士の手毎にもたるくはし矛ちたるのくにぞたけきくになる　　小澤蘆庵

萬葉集

虎に乗りふる屋をこえてあをぶちに蛟（みつち）取来むつるぎたちもが　　境部王

夫木抄

世をはかる人もあらばと武士のつば拔したる太刀もかしこし　　中務卿宗良親王

續千載集

これをだに仇にはおかじ秋の霜ふかき守りかたみとおもへば　　山本前太政大臣公守

常山紀談

打太刀のかねのひゞきは久方の天つそらにぞきこえ上ぐべき　　三原紹心

平家物語

武士のとり傳へたるあづさゆみ引きてはひとのかへすものかは　　平景高

太平記

かへらじとかねておもへば梓弓なきかずにいる名をぞとゞむる　　楠正行

〔武士の云々〕一二の句は、矛と云はむ爲めの序に置けるのみ也。くはし矛云々は、細戈千足國にて我國の古名也。卽ち細戈の名ある國號を擧げて、尙武の國風なる事を歌へる也。
〔つるぎたちもが〕劍太刀も有つて欲しき物よの意也。
〔つば拔したる〕鍔元をくつろげたる、など云ふに同じ。
〔秋の霜〕光の冴え渡れる太刀。
〔かねのひゞき〕鍛鐵の槌の響きを云ふ。
〔武士の云々〕上句は序也。武士は一旦進みては引退く者に非ずと也。
〔なきかず〕亡き人數に入るの意也。

太平記
たらちねの名をばくたさじ梓弓いなばのやまの露ときゆとも　平信孝

慕景集
二つなき理(ことわり)しらばものゝふのつかふるみちはうらみなからむ　太田持資

同
かゝる時さこそいのちの惜からめ兼てなき身と思ひ知らずば　同

應仁略記
惜むとて今まではよもながらへじ身を捨てゝこそ名は殘りけれ　西行法師

常山紀談
骸(なきがら)をば岩屋のこけにうづみてぞ雲井のそらに名はとどむべき　高橋紹運

同
命より名こそをしけれ武士のみちにかふべきみちしなければ　森迫親正

同
名の爲めに捨つる命はをしからじ終にとまらぬうき世と思へば　平塚爲廣

〔たらちねの云々〕身は稻葉山の露と消え失すとも、父信長の武名を朽たし穢すが如き振舞を成さじとの意也、稻葉山は美濃の名所なり。
〔二つ無き〕佛說に生死の道の二つ無きを云ふ。
〔かゝる時〕俗に、いざ鎌倉と云ふ時の意、いよ〳〵命を投げ出すと云ふ場合を云ふ、作者持資は即ち太田道灌なり。
〔惜しむとて云々〕命を惜しむが故に今迄生き來れるには非ず、死すべき時に死して名を殘さんとて長らへし身ぞとの也。
〔終にとまらぬ〕所詮は死して空しくなる身の意なり。

〔命をも云々〕命の輕きこと羽毛の如く、道の重きこと泰山の如し、の意を詠める也。

〔我君の云々〕玉の緒は命を云ふ。作者の鳥井勝尙は或は勝孝に作る、されど墓碑には勝商と記せり。武田氏の臣にて節を全うして死せる人也。

〔老も隔てぬ〕老人も若き人に異ならぬの意也。

〔神代ゆ掛けて〕神代より今の世に掛けての意なり。

〔走り猪の〕猪突の意にて、顧せぬの序に措ける也。

〔虎吼ゆる國〕强暴なる蕃人の住む國の意なり。

風雅集

命をもかろきになして武士のみちよりおもきみちあらめやは　源致雅

四戰記聞

我が君の命にかはるたまの緒をなにいとひけむもの、ふのみち　鳥井勝高

三草集

世の人に劣らじとおもふ一筋は老もへだてぬ武士の道　少將源定信

雲錦集

大日本神代ゆかけて傳へつるを、しきみちぞたゆみあらすな　賀茂季鷹

うけらが花

千萬のあだにむかひてはしり猪のかへり見せぬを心ともがな　橘千蔭

家集

虎ほゆるくにの境もものゝふの守るかぎりはやすけかりけり　小野古道

明倫歌集　卷第十　雜部

拾遺歌

伏見天皇御製

風雅集

天つ空照日の下にありながらくもるこゝろのくまをもためや

逍遙院内大臣實隆

雪玉集

曇らぬを神代のまゝのこゝろぞと空にいさめて月や澄むらむ

權大納言守房

新葉集

霞むよの月を見るめも曇らじと思ふこころをなほみがきつゝ

菅贈太政大臣道眞

新古今集

海ならずたゝへるみづのそこまでもきよき心は月ぞ照らさむ

權大納言資明

風雅集

誰も皆心をみがけひとを知るきみがかゞみのくもりなき世に

〔天つ空云々〕明かなる天日の下に生を享くる身として、いかで曇りある穢しき心を持ためやとの御製なり。

〔空にいさめて〕大空に在りて下界の人々に訓誡を施しつゝの意也。

〔霞むよの〕朧月を見るにつけても我心に曇り無きやうにと精神を練磨すとの意なり。

〔海ならず云々〕海は其底までは月の照すは勿論なれど海ならぬ我が心の底と雖も、清ければ月は照覽し給ふ事ならむと也。菅公筑紫にて詠める歌なり。

「知るや人云々」玉は磨けば光る物なる事は誰人も能く知る所なれど、人の心の玉も磨けば磨くほど光を添ふる物なるを人々の知るや否やと也。
「わりなしや云々」假令人は我を人でなしの人間よと譏るとも、謂れも無く自暴自棄せむやとの意也。初五文字は、下の句の上に移して解すべし
「劣りしもせじ」人ばかりが、昔の人に劣ると云ふ理屈あらじとの意也。
「男やも云々」男兒たるべき者、萬代に名を殘さずして徒らに朽ちむやとの意也。
「語り告ぐがね」語り告ぐべき爲めにの意也。

春葉集
知るや人たもつ心の玉だにもみがくにつけてひかりありとは　荷田東滿

金玉詞林
人多き人の中にもひとはなし人になれひと人になせひと　詠人不知

家集
わりなしや人こそ人といはざらめ自から身をや思ひすつべき　紫式部

同
人ばかり劣りしもせじ月も日もなにかむかしの空にかはれる　伊藤維楨

萬葉集
男(をのこ)やもむなしかるべき萬代にかたりつぐべき名はたゝずして　山上憶良

同
大丈夫は名をしたつべしのちの世に聞繼ぐ人も語りつぐがね　大伴宿禰家持

同
敷島や大和の國に明らけき名におふともをこゝろつとめよ　同

〔劍太刀云々〕我が大伴氏の族は、いやが上にも武道を研ぎ磨きて祖先以來の光輝ある家名を汚さぬやうにせよとの意也。

〔劍太刀云々〕大丈夫たるもの、武名を輝さずして徒らに長らへ居るは、果敢なき草木の類と擇ぶ所なからむとの意也。

〔埋れぬ云々〕成す事も無くて死歿せば、名を後世に殘し難しと也。

〔後めたけれ〕心配に堪へ難しの意。

〔澄めるを受けて〕祖先よりの清き名を受け繼ぎての意なり。

〔代々の親〕歷代の己が祖先を云ふ。

〔いつけ〕父母に能く奉仕せよの意也

萬葉集

劍太刀いよゝとぐべし古ゆさやけくおひて來にしその名ぞ　大伴宿禰家持

家集

劍太刀名をとどめずば草木にもひとしかるべき大丈夫のとも　富士谷成章

新續古今集

埋れぬ後の名さへやとめざらむなす事なくてこの世くれなば　後京極攝政太政大臣良經

千載集

ともかくも我が身一つはなしつべし殘らむ名こそ後めたけれ　道命法師

風雅集

水上の澄めるを受けて行くみづの末にもにごる名をば流さじ　大江廣秀

玉鉾百首

代々のおやのみかげわするな代々の親は己が氏神己が家の神　平宣長

同

父母はわが家の神我が神とこゝろつくしていつけもろびと　同

三草集

假の世とこの世をいはば君と親のめぐみをいかが人に答へむ

少將源定信

同

子を思ふ心のみちのこゝろもておやにつかへよ世のなかの人

同

東歌

臣のわざつくすとならば劣れるを惠まむことを忘るなよゆめ

橘　枝直

五百番歌合

誰も世につかふる道は夏草のことしげゝともいとはざらなむ

兵部少輔中原遠忠

玉鉾百首

天照す神の御民ぞみたからをおほろかにすなあづかれるひと

平　宣長

鈴屋集

世の中は何につけてもかみを思へ神のめぐみをゆめなわすれそ

同

同

いざ子共きかしらせずて王たはふ神のみしわざ助けまつろへ

同

〔假の世と云々〕佛教にては、此の世は假の世也と說きて、後世の事を大事に爲す事なるが然らば君の惠み父母の恩なども無き意義に立到らむ、努々斯かる說に惑はさるゝ勿れと也

〔劣れるを惠まむ〕先づ弱者を惠む事を忘るゝ勿れとの意なり。

〔誰も世に云々〕君に仕ふる道は種々に事繁きも、之を厭はずして努力するを忠臣とすとの意也。

〔みたから〕大御寶の意、國民を云ふ

〔預れる人〕國民を管理する官人等よ民を疎略にする勿れとの意也。

〔いざ子ども〕汎く人々を指して云ふ

玉鉾百首

ぬえ草の妻子(めこ)やつこらは皇神の授けしたからうつくしみせよ　平宣長

漫吟集

淺茅原かれふの床に子をおきて上るひばりやこゝろそらなる　阿闍梨契沖

新撰六帖

出羽なるひらかのみ鷹立ちかへり親のためには鷲もとるなり　右大辨入道光俊

詠百首

思へたゞ心なき鳥の鴛鴦(をし)だにもよその妻には流れあふかは　越前

今昔物語

かぞいろはあはれとも見よ燕すらふたりは人に契らぬものを　詠人不知

萬葉集

紅はうつろふものぞつるばみのなれにしきぬに猶ほしかめやも　大伴宿禰家持

新古今集

さらぬだに重きが上のさよごろも我がつまならぬ妻な重ねそ　寂然法師

「ぬえ草の云々」ぬえ草は妻の冠詞。やつこらとは奴婢等を云ふ。うつくしみは愛憐の意なり。

「かれふの床」枯れたる草村の中の巣を云ふ。

「ひらかのみ鷹」一條天皇の御宇に、平賀の鷹が親の爲めに鷲を捕りし故事を詠める也。

「思へたゞ云々」心無き鳥、心清に掛けたり。教育なき鴛鴦すらも他の妻に對しては契を結ばぬを思へと也。

「かぞいろは」父母を云ふ。

「紅は云々」紅色は美なれども褪め易し。橡色(淺黒色、上古賤人の服)の變色せざるに如かずとの意也。

小澤蘆庵

六帖詠草拾遺

我が宿のつまだにあるをあやめくさよそにはかけじ露の契も

古今集　小野美樹

女郎花多かる野べに宿りせばあやなくあだの名をやたちなむ

同　兼覧王

女郎花後めたくもみゆるかなあれたるやどにひとりたてれば

同　在原朝臣業平

今ぞ知る苦しきものと人待たむ宿をばかれずとふべかりけり

漫吟集　阿闍梨契沖

あさるとて己が友よぶ庭つどりとりにもしかず人のこゝろは

三草集　少將源定信

うらおもてかはらぬ人を友とせよこの手柏のとにもかくにも

後撰集　高津内親王

直き木に曲れる枝もあるものを毛をふき疵をいふがわりなき

〔我が宿の云々〕我が妻にすら未だ十分なる滿足を與へざるに、よそに惠を懸くる事あらじとの意也。

〔女郎花云々〕女郎花に婦女子をよそへたり。あやなくは理由も無くの意。あだの名とは好色の名を云ふ。

〔女郎花云々〕荒れたる宿に只一人女の栖み居る事は、どうも氣が置けるものよとの意也。

〔今ぞ知る云々〕人を待ちて初めて待つ人の心の苦しさを知れる意也。

〔あさる〕食をあさる也。

〔裏おもて云々〕萬葉に、奈良坂の兒の手柏の二面とにも角にもねじけ人の友とあるに據る

雪玉集

見ずやいかに曲れる枝におほはれて直き檜のあらはれぬ世を　逍遙院内大臣實隆

千首和歌

杣山やしげきいばらのなかを見よ老木も人のひかぬものかは　中務卿宗良親王

古今集

形こそみ山隱れのくち木なれこころは花になさばなりなむ　兼藝法師

春葉集

位山高根のまつもおよぶものをふもとにしらぬたにのうもれぎ　荷田東滿

閑田詠草

み山木の本のすがたぞ忍ばるる人のこころのはなになる世に　伴蒿蹊

家集

手折らじなひとの垣根の梅の花我にし知らぬをしきこころは　寂身法師

古今集

咲く花に思ひつく身のあぢきなさ身にいたづきのいるもしらずて　詠人不知

〔見ずやいかに〕直き物は却りて埋れ曲れる物は世に現るゝといふ例古今に多き情態なり。

〔杣山や云々〕薪伐る山の茂き荆棘の中を見よ、老木なりとても世の中に引き出さるゝ物也老いたりとて自暴自棄せずして時を待つに如かずと也

〔位山云々〕世には高位高官の人もあるを、其の一端をだに知らで世に現はれぬ此身の甲斐なさよと也。

〔本のすがた〕僞りなきこころ本音、

〔花になる〕浮華に流るゝ意也、

〔咲く花に云々〕思ひつくみに、つぐみ(鳥の名)を隱して詠める也。

「盛をば云々」隆盛なる時代には訪問し来る者も多けれど、失脚せる場合は顧る者なき意を櫻樹に擬へて云へる也。
「色見えで云々」花は散る時は色が變れど、色も變らずして忽地に變づるは世人の心也との意なり。
「つのぐむ」芽ぐむに同じ。
「はかなしや云々」井の中の蛙、大海を知らずの諺を詠める也。
「蓮葉の云々」濁水にも染まぬ蓮葉が何故に其の葉に置く露を玉と見せて人を欺くならむとの意也。
「後ときの云々」六十の手習も必ず徒勞ならぬ謂也。

家集　正覺法師
盛りをばとふひと多し散る花の跡をとふこそなさけありけれ

古今集　小野小町
色見えでうつろふものは世の中の人の心のはなにぞありける

詞花集　後惠法師
まこもぐさつのぐみわたる春べには繋がぬ駒も放れざりけり

家集　藤原爲顯
はかなしや筒井の蛙我ればかりほかをもしらぬあさきこゝろは

古今集　僧正遍昭
蓮葉のにごりにしまぬ心もてなにかはつゆをたまとあざむく

同　大江千里
後ときのおくれて生ふる苗なれどあだにはならぬ頼みとぞきく

三草集　少將源定信
何事もやしなひて見よあきの田の稲ばも本はうゑし早苗を

堀河百首　　　　隆源法師

庭もせに朝毎稲を干すよりもはてをゆひてぞかくべかりける

古今集　　　　詠人不知

み山には霰ふるらし外山なるまさきのかづらいろづきにけり

玉葉集　　　　前大僧正道潤

早き瀬の水のうへには降り消えてこほるかたよりつもる白雪

新葉集　後村上天皇御製

年寒きためしは誰も習ふらむまつにつもりのうらのしらゆき

古今集　　　　詠人不知

雪ふりて年の暮れぬる時にこそつひにもみぢぬまつも見えけれ

新拾遺集　　　　攝政太政大臣良基

知られじな氷をかづく鳰鳥(にほどり)のそこにくだくるこゝろありとは

古今集　　　　典侍藤原直子朝臣

蜑のかる藻に棲む虫の我からとねをこそなかめ世をばうらみじ

〔庭もせに云々〕庭もせは、庭も狭き許りにの意、即ち庭一面に也。はてとは稲を掛け乾す竿を云ふ。何事も凡て段取りが肝要なる心ばへを云へる也。

〔み山には云々〕深山には霰が降るならむ、里近き外山なる眞拆の葛は紅葉せりと也。

〔早き瀬の云々〕急流の上には雪は降れども積らず、淀める水の氷る方より降り積むと也。

〔年寒き〕論語に歳寒而知二松柏之後一凋一の典故に因る。

〔つもりの浦〕攝津の名所なり。

〔もみぢぬ松〕紅葉せざる松の意也。

〔我から〕虫の名を我自身の意に係く

春葉集　　　　　　　　　　荷田東滿
世をうしと難波のえやは恨むべきわざもあしかる身をば知ずて

詠百首　　　　　　　　　　源家長
津の國の難波のことにつけつゝも善きをば悪しといひなかくしそ

閑田詠草　　　　　　　　　伴蒿蹊
よしあしに移る習ひを思ふにもあやうきものはこゝろなりけり

家集　　　　　　　　　　　權大納言雅後
世を渡る習ひよ世にはあやふきを誰かこゝろのまゝのつぎはし

六帖詠草　　　　　　　　　小澤蘆庵
思ふ事末もとほらじ橋の名のとだえしまゝにかけも繼がずば

黄葉集　　　　　　　　　　從二位爲子
心だに我が思ふにはかなはぬを人をうらみむことわりぞなき

新葉集　　　　　　　　　　前太政大臣公賢
さのみやは理りしらでうらむべき身のうきにこそ人もつらけれ

〔世をうしと云々〕我が所業の悪しき事を思はずして、何ぞ世の中を恨むやとの意也。難波の江より、えやはと續け、悪しかるを蘆刈るに通じて綾なせる也。

〔難波の事〕何ぞの事の意にて、下に善（葦）、悪（蘆）と云はむ爲めの綾に措ける也。

〔よしあしに云々〕善人にも成り悪人にもなるは心の持ちやう一つなれば危き物は心也と云へる也。

〔こゝろのまゝ〕心の儘を、眞間の地名に言ひ掛けし也眞間の繼橋は下總の名所なり。

〔とだえの橋〕陸奥國の名所にて古歌に多く見ゆ。

詞花集
おのが身のおのが心にかなはぬを思はゞ物は思ひしりなむ　和泉式部

風雅集
思ひしる心となればいたづらにあたら此の世をすごさざるらむ　寂然法師

家集
一筋に思ひさだむるこゝろだにあらばうき世をなげかざらまし　正三位成實

新後拾遺集
一すぢにひとをも身をも思ふかな打つ墨繩の直かれとのみ　前中納言定房

閑田詠草
ほどほどにふしなかりせば呉竹の直きも頼むかひやなからむ　伴蒿蹊

東歌
野邊に生ふるいさゝ村竹いさゝめも人の爲めよき事はかりてよ　橘枝直

漫吟集
うき節もしばしまためよ竹の子の生ひそふ後の影もこそあれ　阿闍梨契沖

「おのが身の」云々」我が身ですら、我が心の儘にならぬ事を思へば、他はなほ萬事は直ちに解決し得べからむとの意也。
「思ひ知る」云々」凡ての事を能く思ひ覺らば此世を徒らに過すことは成り難からむと也。
「一すぢに云々」初句は墨繩の縁語なり。大工の用ゐる墨繩の如く直く正しくあれと也。
「ほどほどに」云々」人間は只正直のみにても頼もしからず、其の時々に一種の犯し難き節操ありなからざるべからずとの意也。
「いさゝめ」いさゝかと同じ。
「生ひそふ後」遂には大林となる意也。

うけらが花

竹の根の下はひわたるふしのまもけふの日影をあだに暮すな　　橘　千蔭

古今集

何をして身の徒においぬらむとしのおもはむことぞやさしき　　詠人不知

拾玉集

大空の思はむこともはづかしなさし仰ぎつゝかくてすごさば　　前大僧正慈鎮

家集

いそがずば濡れざらましを旅人のあとより晴るゝ野路の村雨　　源　持資

雪玉集

武士の矢ばせの舟は早くともいそがばまはれ瀬田のながはし　　源　俊頼

續後撰集

最上川人をくだせばいな舟のかへりてしづむものとこそきけ　　寂然法師

閑田詠草

末遂にうみとなるべき山水もしばし木の葉のしたくゞるなり　　伴　蒿蹊

〔竹の根の云々〕上句は序。ふしの間は少しの間の意にて竹の縁語也。寸陰をも惜しむべき心ばへを詠へるなり。

〔何をして云々〕如何なる事業を成して我が身は斯く老いたるならむか、穀つぶしよゝ我が齢の思ふ事ならむが恥かしと也。

〔大空の云々〕大空が、慈鎮は馬鹿者よなど思ふならむが恥かしと也。

〔さし仰ぎつゝ〕空を打眺めつゝ徒らに暮らす意なり。

〔武士の〕矢の枕詞なり。

〔最上川〕出羽國なる名所也。

〔末遂に云々〕堪耐は人世唯一の修養なるを云へる也。

雨夜燈

遠くなりちかくなる海の濱千鳥鳴く音にしほのみちひをぞしる　　詠人不知

古今集

底ひなきふちやはさわがぬ山川の淺き瀬にこそあだなみは立て　　素性法師

六帖詠草

山川の底のさゞれも數ふべく見ゆるは水のすめばなりけり　　小澤蘆庵

漫吟集

大方のひとはことのみよしのがはたきの白玉緒をぬかずして　　阿闍梨契沖

同

浮草の身こそなみにもしたがはめなどか心のねをたえぬらむ　　同

新古今集

浮草の一葉なりともいそがくれおもひなかけそおきつ白波　　寂然法師

續古今集

順德天皇御製

憂しとても身をば何處におくの海の鵜のゐる岩も波はかくらむ

〔遠くなり云々〕千鳥の聲の遠くなる時は干潮の時、近く聞ゆる折は滿潮の時ぞとの意也。
〔底ひなき云々〕底の無き深淵には波は騷がず、山川の淺瀬にこそ仇波は立ち起るなれとの意なり。
〔底のさゞれ〕水底の小石。
〔大方の云々〕大堰の人は、「あゝ是が吉野川か、佳い川だ、」など其川の瀧つ瀬の有樣などを能くも見極めずして早呑込すと也。
〔浮草の云々〕小町の「身を浮草の根を絶えて」の歌を本歌とす。
〔沖の白波〕盜人の異名なり。委しくは前頁風吹けばの條に註せり。

「世を捨て云々」世を厭ひて山に入る人あれど、其山にても猶ほ世の憂き時は、何方へ行く事ならむかとの意なり。

「筑波山云々」端山は麓の山、繁山は奥の山を云ふ。筑波山は樹木繁りをれども、分け登るには障りなしとの意にて、何事にても断じて事を成す時には支障なき趣きを云へる也。

「すめばすみぬる」住めば住む事を得るの意也。

「住まで思ひし」住みて見れば矢張り憂世の内なりきとの意也。

「寒かりき」此句の下に、今は烈風をも寒くは思はず、の意を含める也。

古今集
世を捨てて山に入る人山にてもなほうき時はいづちゆくらむ　凡河内躬恒

同
筑波山端山繁山しげけれどおもひ入るにはさはらざりけり　源重之

同
天雲のたえずたなびく峯にだにすめばすみぬる世にこそありけれ　惟喬親王

玉葉集
山里をうき世のほかのやどぞとは住までおもひし心なりけり　中務卿宗良親王

拾遺集
手枕のすき間の風も寒かりき身はならはしの物にぞありける　詠人不知

拾塵集
一重なる人もぞあると世を知ればうすき衾もさえぬ夜はかな　多々良政弘

三草集
事足れば足るにも馴れて何くれと足るがなかにも猶は歎くかな　少将源定信

〔世の憂さも云々〕能き程に飲めば世の憂さも忘れ得る酒なるに、程を過して、却りて身の憂へを添ふる人もある事よと也。

〔言の葉の云々〕言葉多き者は誠すくなしとの意也。

〔爲す業に云々〕其人の所爲に依りて其の心も現はるゝ物なるを、人の知らじと思ひ居る淺ましさよと也。

〔僞りの云々〕僞りと云ふ事の無き世の中であつたならば、人の言ふ事は皆眞實なれば、如何に嬉しき事ならむと也。

〔世の中に云々〕何ならずとは、なんでも無しの意。虎狼よりも人の口の害恐しきを云ふ。

家集　　賀茂眞淵

たまたまに人とある世をうき時は背かまほしく思ふはかなさ

六帖詠草　　小澤蘆庵

世のうさも忘るゝ酒に醉ひしれて身のうれへそふ人もありけり

同　　同

ことのはの多かるよりや自からまことすくなき罪もうくらむ

同　　同

なすわざにおのが心はかくれぬを人は知らじと思ひけるかな

古今集　　讀人不知

僞りのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし

月清集　　後京極攝政前太政大臣良經

世の中に虎おほかみはなにならず人のくちこそ猶ほまさりけれ

桂園一枝　　香川景樹

唐土の虎ふす野べにふく風のめにみぬところおそろしの世や

後撰集
なき名ぞと人にはいひてありぬべし心のとはばいかが答へむ　　詠人不知

新勅撰集
身のはてよいかに縫らむ人しれぬこゝろに恥づる心ならずば　　左中將公衡

春葉集
身を守る心の關しまさしくば世にまがごとのいかで出でこむ　　荷田東滿

閑田詠草
さしてゆくこゝろの道しなほからば何か人目をはゞかりの關　　伴蒿蹊

續千載集
立ちかへり又君が代にあふさかのこゆる關路にすゑもまよふな　　一條內大臣內實

風雅集
大丈夫はしか待つことのあればこそ茂き歎きもたへしのぶらめ　　皇太后宮大夫俊成

春葉集
大丈夫や折りにふれてはたけり猪の猛き心もなどなかるらむ　　荷田東滿

「なき名ぞと云々」無き名とは無實の評判の意也。左樣の噂さは事實に非ず、と人に對しては偽り言ひもせむが、我が良心が我に問ひしならば如何に答へむか、との意也。
「心に恥づる云々」我れと我が心に恥づる心が無かつたならばの意。
「心の關」心の締り心の締め括り、など云ふ程の義、まさしくばとは、強固ならばの意也。
「はゞかりの關」陸奥の名所なり。
「さして行く云々」心のの正しくあらば何ぞ人目を憚らむやとの意也。
「待つことと云々」期待する事ある故に忍耐すとの意也。

漫吟　　　　阿闍梨契沖

足引のやまを抜くてふ手力も身にはおもはず心にもがな

後鈴屋集　　　　平春庭

弭の音きこえぬ國とあづさゆみこゝろゆるぶな大丈夫のとも

琴後集　　　　平春海

治れる代のまもりの梓弓ひきなゆるへそ武士のみち

うけらが花　　　　橘千蔭

葛城の襲津彦眞弓つるはげてゆるへぬをこそこゝろとはせめ

家集　　　　賀茂眞淵

いざこども心あらなむ陸奥の千島の蝦夷もやさしとぞきく

新古今集　　　　成尋法師母

唐土も天の下にぞありときく照る日の本をわすれざらなむ

肖像自贊　　　　平宣長

敷島の大和ごゝろを人とはば朝日ににほふ山ざくらばな

「足引の云々」足引のは山の枕詞。山を抜く手力とは、楚の項籍が長嘆の辭、力抜山氣蓋世云々の句に因る。

「弭の音云々」初二の句は戰爭の無き國の意也。治に居て亂を忘るべからざる趣きを詠めり。

「治れる云々」世の治まりをるは畢竟武道が之を守りをれば也。されば太平の代なればとて武道を怠らば亂を生ずべしと也。

「葛城襲津彦」武内宿禰の子、新羅を撃てる勇將なり。

「いざこども」汎く衆を指して云ふ語なり。

「やさしとぞ聞く」は從順也と聞くの意なり。

「大和心」日本魂。

雪玉集

君を仰ぎ民ををさむる理のたゞしきみちぞよろづよのため　逍遙院内大臣實隆

〔君を仰ぎ云々〕君を貴び、民を治むる道理の正しき道を、萬代の爲めに民に定め置かれし、即ち我が國の道也との意なり。

萬葉集

聖武天皇御製

大丈夫のゆくとふ道ぞおほろかに思ひてゆくな大丈夫のとも

〔大丈夫の云々〕此度の行は、大丈夫たるべき者の名譽の道なれば、必ずとも疎略に思ひて行く勿れ、大丈夫等よ、十分に留意して任務を全うせよと也。

明倫歌集　終

明倫歌集跋

この集に收め給へるが中に、神こそは野をも山をもつくりおけ人に誠の道をふめとて、かくみえたるがごとくにしあなれば、天下の青人草、おのがむきむきあることなく、ひたぶるに神習ふべき理にこそ。爰にわが景山公、はやくよりこのことおぼしたち給ひて、萬まつりごち給ふ御暇のをりをり、御みづからも物したまひ、又人々にも撰ばせ給へるほどに、小山田與清、吉田令世、此二人はことはたさずしてあしたの霜ゆふべの露と消えにしかば、つぎて前田夏蔭、鶴峰戊申等におほせ給へるを、或はおほやけのいとまなく、あるは身まかりなどして撰みさしたるを、令世の子尙惠してととのへしめ給ひぬれば、いかで世に廣めてむとこひまをし置きつをる、此度かた木にゑらせて、あまねくさとすになむ。いでそこの書、今より後、世の中にみちたらひて、人のこゝろによく染みなば、一つには、他國のをしへならでも、もとより神のみちあることをさとり、二つには、邪なる妖言に相まじこり口會ふこともなくして、直く正しきに移ろひ、三には、細戈千足の國振りしるく、猛く雄々しきともがら、貢實の數へもあへず出來なむ物ぞと、よろこびに堪へずして、そのよしいさゝか記せるは、葉がへぬ松に枝をつらねて、濁りなき徳川の流を汲むめる　　賴位朝臣

文久元年十一月

勤王諸家詩歌集

勤王諸家詩歌集　卷上

詩集の部

侍宴

弘文天皇

皇明光日月、帝德載天地、三才並泰昌、萬國表臣義。

「宴に侍す」皇明日月光り、帝德天地に載つ、三才並に泰昌、萬國臣義を表す、

述懷

弘文天皇

道德承天訓、鹽梅寄眞宰、羞無監撫術。安能臨四海。

「述懷」道德天訓を承く。鹽梅眞宰に寄す。羞づらくは監撫の術なし、安んぞ能く四海に臨まむ、

高士吟

賀陽豐年

一室何堪掃、九州豈足步、寄言燕雀徒、寧知鴻鵠路。

「高士吟」一室何ぞ掃ふに堪へん、九州豈步するに足らんや、言を寄す燕雀の徒、寧ぞ知らん鴻鵠の路を、

自詠

菅原道眞

「弘文天皇」天智天皇の長子、御母は伊賀采女宅子娘、第三十九代の天皇也。

我國の詩の元祖で然かも正々堂々、正に帝王の詩也。

「三才」天地人共に泰平安昌の義也。

「天訓」天道の眞理。

「賀陽豐年」京都の人、經史に通ず。東宮學士。弘仁六年卒、年六十五。

「九州」支那全土を云ふ、茲は國内の義。

〔菅原道眞〕是善の子、世に菅丞相と稱す、延喜三年二月九州太宰府に薨ず、年五十九。

〔離レ家〕既に配所の身となり、家郷京都を離れて三四ヶ月になれるを云ふ。

〔九月十日〕延喜元年の九月十日、菅公太宰府たる配所の作也。

〔秋思詩篇〕昌泰三年九月十日、九月九日菊見の宴を翌つて、群臣に宴を賜ふ時作りし詩の題也。

〔應制〕天子の命を承けて作るをいふ

〔丞相〕右大臣たる菅公自身也。

〔春秋〕春夏秋冬の略也、年若きをいふ。

離レ家三四月。落レ涙百千行。萬事皆如レ夢。時々仰二彼蒼一。

家を離れて三四月。涙を落す百千行。萬事皆夢の如し。時々彼蒼を仰ぐ。

九月十日　　菅原道眞

去年今夜侍二清涼一。秋思詩篇獨斷レ腸。恩賜御衣今在レ此。捧持毎日拜二餘香一。

九月十日去年の今夜清涼に侍す。秋思の詩篇獨り腸を斷つ。恩賜の御衣今此に在り。捧持して毎日餘香を拜す。

九月後朝同賦二秋思一應レ制　　菅原道眞

丞相度年幾樂思。今宵觸レ物自然悲。聲寒絡緯風吹處。葉落梧桐雨打時。君富二春秋一臣漸老。恩無二涯岸一報猶遲。不レ知此意何安慰。飲レ酒聽レ琴又詠レ詩。

九月後朝同じく秋思を賦し制に應ず。丞相度むる年幾か樂思す。今宵物に觸れて自然に悲しむ。聲寒くして絡緯風吹く處。葉落ちて梧桐雨打つ時。君は春秋に富み臣漸く老ゆ。恩は涯岸なくして報猶ほ遲し。知らず此意何に安慰せむ。酒を飲み琴を聽き又詩を詠ず。

不レ出レ門　　菅原道眞

〔謫落〕罪ありて配流せらるゝをいふ。
〔柴荊〕芝や荊にて造れる荒れたる小家也。
〔都府樓〕支那の節度使の役所の名。太宰府は唐の節度府に準ずる故、太宰府廳の樓をいふ。今は[illegible]遺りて、大なる礎のみ殘れり。
〔觀音寺〕太宰府の近くに在り。此の寺も鐘も昔のまゝに殘れり。
〔細川頼之〕足利義光の臣、元中九年歿。年六十四。
〔蒼蠅〕佞人を指す。
〔禪榻〕禪寺の寢牀。
〔伊達政宗〕仙臺藩祖、寛永十三年五月廿四日歿、年七十。明治卅四年十一月贈正三位。
〔南蠻〕葡、西等の國をいふ。

一從謫落在柴荊　萬死兢々跼蹐情　都府樓纔看瓦色
觀音寺只聽鐘聲　中懷好逐孤雲去　外物相逢滿月迎
此地雖身無檢繫　何爲寸歩出門行

門を出でず　一たび謫落して柴荊に在りし從り、萬死兢々たり跼蹐の情。都府樓纔に瓦色を看、觀音寺只鐘聲を聽く。中懷好し孤雲を逐つて去り、外物相逢うて滿月迎ふ。此の地身に檢繫無しと雖も、何爲ぞ寸歩も門を出でゝ行かむ。

海南行　　細川頼之

人生五十愧無功　花木春過夏已中
滿室蒼蠅掃難去　起尋禪榻臥清風

海南行　人生五十功なきを愧づ。花木春過ぎて夏已に中す。滿室の蒼蠅掃へども去り難し、起つて禪榻を尋ねて清風に臥す。

欲征南蠻有作　　伊達政宗

邪法迷國唱不終　欲征蠻國未成功
圖南鵬翼何時奮　久待扶搖萬里風

南蠻を征せんと欲して作あり　邪法國を迷はし唱へて終らず、蠻國を征せんと欲するも未だ功を成さ

しく、獨り作す當年叱咤の聲。

述懷　　蒲生君平

丈夫生有四方志　千里劍書何處尋　身任轉蓬無遠近
思隨流水幾浮沈　笑看樽酒狂生態　泣讀離騷醉後吟
唯賴太平恩澤渥　自將章句託青衿

〔述懷〕丈夫生れて四方の志有り、千里の劍書何れの處にか尋ねん、身は轉蓬に任せて遠近なく、思は流水に隨つて幾浮沈。笑つて樽酒を看て狂生の態し、泣いて離騷を讀んで醉後に吟ず、唯太平恩澤の渥きに頼りて、自ら章句を將て青衿に託す、

〔蒲生君平〕名秀實、下野宇都宮の人、寛政三奇士の一、文化十年七月卒、明治十四年五月贈正四位、
〔轉蓬〕流寓に喩ふ
〔離騷〕楚の屈平の作りし賦。
〔青衿〕青襟の衣服、學生の服なり、轉じて學生をいふ。

無題　　蒲生君平

劍鏡今猶輝。傾心在我王。政非由貴國。官不任棟梁。
卓識誰居逸　疎放自野狂　平生臆中涙　空誦舊苑章

〔無題〕劍鏡今猶輝く、心を傾くるに我が王に在り、政は貴國に由るに非ず、官棟梁に任ぜず、卓識誰か逸に居る、疎放自ら野狂す、平生臆中の涙、空しく舊苑の章を誦す、

〔棟梁〕むなぎと、はり。重任に堪ふる者をいふ。
〔舊苑章〕舊章、先王の禮樂政刑をいふ。

無題　　蒲生君平

治極民多幸　悠々數百年　因時人易老　恨古夜難眠　義勇楠河内

〔楠河内〕楠木河内

〔大塔王土牢〕護良親王の土窟鎌倉に在り。
〔一道〕一通に同じ
〔隻字〕一字に同じ隻は單なり。
〔黃壤〕黃土也。孟子に「夫蚓上食黃壤」
〔春蚓〕文字拙弱なるを春蚓秋蛇と形容す。
〔八百八街〕當時江戸の市街を稱して八百八町といへり
〔賣蟲聲〕蟲屋の賤
〔西郊〕秋の野。
〔潯陽〕陶淵明字は元亮、號して五柳先生といふ。
〔西山〕伯夷叔齊の隱れし首陽山。
〔采菊見南山〕淵明の詩「采菊東籬下、悠然見南山」

大塔王土牢　　賴　杏　坪

一道封章涙萬行　誰將隻字上君王　可憐黃壤無窮恨
春蚓到今書訴長

「大塔王の土牢　一道の封章涙萬行。誰か隻字を將て君王に上る。憐む可し黃壤窮り無きの恨、春蚓今に到りて訴を書して長し。」

江都客裡雜詩　　賴　杏　坪

八百八街宵月明　秋風處處賣蟲聲　貴人不解籠間語
總是西郊風露情

「江都客裡雜詩　八百八街宵月明かなり。秋風處處蟲聲を賣る。貴人は解せず籠間の語、總て是れ西郊風露の情。」

陶靖節采菊圖　　賴　杏　坪

首陽潯陽二千年　正氣不銷天地間　誰議西山采薇老
再生采菊見南山

「陶靖節菊を采るの圖　首陽潯陽二千年、正氣銷せず天地の間。誰か議す西山薇を采りし老、再生菊を采りつゝ南山を見る。」

〔大江〕淀川。
〔黛色〕黒緑色、
〔岐嶷〕山の極めて高き狀。
〔豫章公〕正成、豫章は楠木をいふ。
〔孤壘〕赤坂城をさす。
〔旅〕もと五百人の兵をいふ。
〔鬼蜮〕奸賊。蜮は水中にあり沙を含んで射かけ、人之にあたれば病むといふ怪物。
〔宕叡〕愛宕山と比叡山。
〔武庫〕攝津武庫山
〔壞長城〕長城は名將をいふ、正成をさす。
〔大廈〕大家、國家に譬ふ。文中子に「大廈將顚、非一木所支也」
〔扶植〕扶持樹立。
〔起踣〕踣は仆る也

山勢自東來。如鳥開雙翼。遙夾大江流。相望列黛色。南者金剛山。
插天最岐嶷。拖尾抵海堧。蜿蜒盡南域。隱與城郭似。擁護天王國。
相見豫章公。孤壘扞群賊。合圍百萬兵。陣雲繞麓黑。臣豈不自惜。
受託由面勅。灑泣誓吾旅。爲昔鏖鬼蜮。果然七尺軀。自有回天力。
宕叡連武庫。隔江對正北。公死實在彼。在公盡臣職。所惜壞長城。
寧支大廈仄。吾行歷泉紀。往反緣大麓。顧瞻山海間。慷慨三太息。
丈夫有大節。天地賴扶植。悠々六百載。姦雄迭起踣。一時塗人眼。
難洗史書墨。仰見山色蒼。萬古淨如拭。

「南遊往返數金剛山を望み楠河州公の事を想ふ」山勢東より來り。鳥の雙翼を開くが如く。遙に大江の流れを夾んで相望むに黛色列なる。南なる者は金剛山。天を插んで最も岐嶷。尾を拖いて海堧に抵る。蜿蜒南域を盡し。隱として城郭と似。天王國を擁護す。想見す豫章公。孤壘群賊を扞ぐ。合圍す百萬の兵。陣雲麓を繞りて黑し。臣豈に自ら惜まざらんや。託を受け面勅に由り。泣を灑いで吾が旅に誓ひ。昔の爲に鬼蜮を鏖にす。果然七尺の軀。自ら回天の力有り。宕叡武庫に連り、江を隔てゝ正北に對す。公の死は實に彼に在り、公に在りては臣職を盡す。惜む所は長城を壞つにあり、寧ぞ大廈の仄くを支へんや、吾行いて泉紀を歷、往反大麓に緣す、顧みて山海の間を瞻、慷慨三太息、

〔偶作〕十三春秋、逝者已に水の如し。天地始終無く、人生生死有り。安んぞ古人に類するを得て、千載青史に列せられん。

〔青史〕歴史、記錄をいふ。支那古昔漆を以て青竹に書す。

裂封冊

頼山陽

史官讀到日本王　相公怒裂明冊書　欲王則王吾自了

朱家小兒敢爵予　吾國有王誰覬覦　叱咤再蹶八道血

鴨綠之流鞭可絶　地上阿鈞不相見　地下空賜恭獻謚

〔封冊を裂く〕史官讀んで到る日本王、相公怒って裂く明の冊書。王たらんと欲せば則ち王たり吾自ら了せむ、朱家の小兒敢て予を爵せんや。吾國王あり誰か覬覦せん。叱咤再び蹶む八道の血、鴨綠の流れ鞭もて絶つべし。地上の阿鈞相見ず、地下空しく賜ふ恭獻の謚。

〔相公〕秀吉をさす
〔朱家〕明朱姓。
〔八道〕朝鮮。
〔阿鈞〕明の神宗、名は翊鈞。
〔恭獻〕足利義滿。明の封冊を受け恭獻なる謚號を貰ふ

蒙古來

頼山陽

筑海颶氣連天黑　蔽海而來者何賊　蒙古來　來自北。

東西次第期呑食　嚇得趙家老寡婦　持此來擬男兒國

相模太郎膽如甕　防海將士人各力　蒙古來　吾不懼。

吾怖關東令如山　直前斫賊不許顧　倒吾檣　登虜艦

擒虜將吾軍喊　可恨東風一驅附大濤　不使羶血盡膏日本刀

〔趙家老寡婦〕宋は趙姓、老寡婦は楊皇太后をいふ。
〔男兒國〕吾國の古名オノコロ島といふによる。姑く男兒の義として用ふ
〔相模太郎〕北條時宗の幼名。
〔如甕〕大なる形容

蒙古來。東海の鯨鯢天に逆りて黑し。海を蔽うて來る者は何れの賊ぞ。蒙古來る。北より來る。東西次第に呑食を期す。趙家の老寡婦を嚇し得て。此を持して來り擬す男兒の國。相模太郎膽甕の如く。防海の將士人各力む。蒙古來る、吾は怖れず、吾は怖る關東の令山の如く、直前賊を斫つて顧るを許さざるを。吾が檣を倒し虜艦に登り。虜將を擒にして吾軍喊す。恨むべし東風一驅大濤に附し。羶血をして盡く日本刀に膏せしめざりしを。

謁楠河州墳有作　　頼　山　陽

東海大魚奮鬣尾　蹴起黑波汙灝穹　隱島風雲垂慘毒
六十餘州總鬼蜮　誰將隻手排妖氛　身當百萬哮闞群
揮戈擬回虞淵日　執頭同劉郎墨雲。關西自有男子在
東向事定降將軍　旋乾轉坤答値遇　酒掃輦道迎鑾輅
論功誰陽最有力　漫將李郭安天步　出將入相徒來班
前狼後虎事復變　獻策帝閽不得達　決志軍務費生還
且餘兒輩繼微志　全家血肉殲王事　非有南柯存舊根
偏安北闕向何地　攝山遶迴海水碧　吾來下馬兵庫驛。
想見訣兒呼弟來戰此　刀折矢盡臣事畢　北向再拜天日陰。

〔[illegible]〕外寇の[illegible]の賤稱。
〔楠河州〕楠河内守正成。
「東海大魚」北條氏。聖德太子の天王寺の未來記に「人王九十五代に當つて東魚來りて四海を呑む」とあり。
〔黼扆〕天子諸侯に面會される時背後に立てし衛立、斧の模様有り。
〔垂慘毒〕前に後鳥羽上皇この地に遷され給ひしことあるによつて云ふ。
〔鬼蜮〕鬼やまむし
〔哮闞〕哮は吼える。闞は虎が怒つて吼える聲。
〔虞淵〕日の入る處。淮南子にある故事。

頼山陽

文政之元十一月。吾下筑水僦舟筏。水流如箭萬雷吼。
過之使人竪毛髪。居民何記正平際。行客長思己亥歳。
當時國賊擅鴟張。七道望風助豺狼。勤王諸將前後殞。
西陲僅存臣武光。遺詔哀痛猶在耳。擁護龍種同生死。
大擧來犯彼何人。誓剪滅之報天子。河亂軍聲代銜枚。
刀戟相摩八千師。馬傷冑破氣益奮。斬敵取冑奪馬騎。
被箭如蝟目眥裂。六萬賊軍終挫折。歸來河水笑洗刀。
血迸奔湍噴紅雪。四世全節誰儔侶。九國逡巡西征府。
棣蕚未肯向北風。殉國劍傳自乃父。嘗卻明使壯本朝。
豈與恭獻同日語。丈夫要貴知順逆。少貳大友何狗鼠。
河流滔々去不還。遙望肥嶺嵩南雲。千載姦黨骨亦朽。
獨有苦節傳芳芬。卿弔鬼雄歌長句。猶覺河聲激餘怒。

〔正觀公〕菊池武光の法諡。
〔正平己亥〕正平（南朝の年號）十四年。
〔行客〕己を指す
〔鴟張〕鴟は惡鳥、鴟の如く暴を振ふ
〔七道〕東海東山山陽山陰南海西海北陸の七道。
〔豺狼〕山犬と狼、賊軍をいふ。
〔西陲〕西のはてなる九州。
〔龍種〕皇胤、懷良親王をさす。
〔銜枚〕枚は馬口に含まして聲を出さしめざるもの。
〔四世〕菊池氏四世、武時・武光・武政・武朝。
〔西征府〕親王を奉ぜる菊池氏をさす
〔棣蕚〕和名「ニハ

筑後河を下りて感あり　文政の元十一月、吾筑水を下るに舟筏を僦ふ。水流箭の如く萬雷吼ゆ。之を

ほ屬毉せずんば。好するに寶刀を以て渠が頭に加へん。

舟宿暗門憶昔隨家君泊此今十一年矣　　賴山陽

蓬窗月暗樹如煙。拍岸波聲驚客眠。默數浮沈十年事。平公塔下雨維船。

舟暗門に宿す憶ふ昔家君に隨ひて此に泊す今十一年なり　蓬窗月暗くして樹煙の如し。岸を拍つ波聲客眠を驚かす。默して數ふ浮沈十年の事。平公塔下に雨に船を繋ぐ。

中秋無月侍母　　賴山陽

不同此夜十三回。重得秋風奉一卮。不恨尊前無月色。免看兒子鬢邊絲。

中秋無月母に侍す　此の夜同うせざる十三回。重ねて得たり秋風一卮を奉ずるを。恨みず尊前月色なきを。看るを免る兒子鬢邊の絲。

草廬三顧圖　　朝川善庵

梁父吟成年廿八。風雲他日豈無期。誰知天下三分業。已在悠然抱膝時。

〔屬毉〕滿足。屬は足る。毉はあく。
〔好〕引出物。
〔暗門〕音戶の瀨戶清盛嚴島への航路を便にせん爲開く
〔家君〕父春水。
〔平公塔〕清盛の塔海邊に在り。
〔中秋無月〕八月十五夜月なきをいふ
〔一卮〕卮は杯。
〔鬢邊絲〕びんの邊の白髮をいふ。
〔朝川善庵〕名は鼎儒者。嘉永二年二月歿。年六十九。
〔草廬三顧〕孔明南

「草廬三顧の圖」梁父吟成る年廿八、風雲他日豈期無からんや。誰か知らん天下三分の業。已に悠然膝を抱く時に在り。

歸家　朝川善庵

百苦千辛行路難。敝廬歸去始開顏。一宵穩臥牀頭夢。又在水村山驛間。

「家に歸る」百苦千辛行路の難。敝廬歸去始めて顏を開く。一宵穩臥す牀頭の夢。又水村山驛の間に在り。

桂林莊雜詠示諸生　廣瀨淡窓

休道他鄉多苦辛。同袍有友自相親。柴扉曉出霜如雪。君汲川流我拾薪。

「桂林莊雜詠諸生に示す」道ふを休めよ他鄉苦辛多しと。同袍友あり自ら相親む。柴扉曉に出づれば霜雪の如し。君は川流を汲め我は薪を拾はん。

彥山　廣瀨淡窓

彥山高處望氤氳。木末樓臺晴始分。日暮天壇人去盡。香煙散作數峰雲。

陽の草廬に居し頃蜀漢の劉備三度之を訪ね、乞ひて已を助けしむ。
〔梁父吟〕孔明未だ仕へず野に在りて膝を抱くの頃作りし詩篇。
〔三分〕魏・吳・蜀。
〔開顏〕愁を去り喜の顏を開く。
〔廣瀨淡窓〕名健。豐後日田の人。安政二年歿。年七十四。
〔桂林莊〕淡窓塾名
〔同袍〕親友。袍は下著。詩經に「豈曰無衣與子同袍」
〔彥山〕豐前にあり九州の靈山の一。
〔氤氳〕氣の盛な狀
〔天壇〕天神を祭る壇場。

〔彥山〕彥山高き處望氣氤氳、木末の樓臺晴始めて分る。日暮天壇人去り盡くし、香煙は散じて數峰の雲と作る。

隈川雜詠四首 錄レ二　　廣瀨淡窓

龜山宛在二水中央一。傳是毛侯古戰場。畫戟彩旌空一夢。蘆花亂發月蒼蒼。

〔隈川雜詠〕龜山は宛として水の中央に在り。傳ふ是れ毛侯の古戰場。畫戟彩旌空しく一夢。蘆花亂れ發いて月蒼蒼。

其二　　廣瀨淡窓

觀音閣上晚雲歸。忽有二鐘聲出二翠微一。沙際爭レ舟人未レ渡。雙々白鷺映レ江飛。

〔其二〕觀音閣上晚雲歸る。忽ち鐘聲の翠微を出づるあり。沙際舟を爭うて人未だ渡らず。雙々の白鷺江に映じて飛ぶ。

筑前城下作　　廣瀨淡窓

伏敵門頭浪拍レ天。當時築石自依然。元兵沒レ海蹤猶在。神后征レ韓事久傳。城郭影浮春浦月。絃歌聲隱暮洲煙。

〔隈川〕豐後日田郡
〔龜山〕龜翁山。
〔毛侯〕毛利高政日隈城に居りき。
〔畫戟〕畫きたるほこ
〔彩旌〕彩れる軍旗
〔翠微〕山の八合目の邊をいふ。
〔伏敵門〕筑前筥崎八幡宮の樓門。龜山上皇の宸筆紺紙金泥の「敵國降伏」卅七枚を寶藏に藏せるを大字に拓臨す。

昇平有象昔看取、處處垂楊繫賈船。

「筑前城下の作」伏敵門頭浪天を拍つ、當時の築石自ら依然たり。元兵海に没する遺跡今に在り、神后韓を征する事久しく傳ふ。城郭の影は浮ぶ春浦の月、絃歌の聲は臨る暮潮の煙。昇平象あり昔看取せよ。處處の垂楊に賈船を繫ぐ。

八月十八日夜夢攻諳厄利亞　　藤田東湖

絶海連檣十萬兵、雄心落落壓湖城。三更夢覺幽窗下、

唯有秋聲似雨聲。

「八月十八日夜夢に諳厄利亞を攻む」海を絶る連檣十萬の兵、雄心落落湖城を壓す。三更夢は覺む幽窗の下、唯秋聲の雨聲に似たるあり。

述懷　　藤田東湖

白髮蒼顏萬死餘、平生豪氣未全除。寶刀難染洋夷血、

却憶常陽舊草廬。

「述懷」白髮蒼顏萬死の餘、平生豪氣未だ全く除かず。寶刀染め難し洋夷の血、却つて憶ふ常陽の舊草廬。

次韻家生梅郞卽事（錄一）　　藤田東湖

〔築石〕水城の石壁。
〔昇平有象〕唐書牛僧孺傳に「太平無象、今雖未及至治、亦足爲治矣」
〔藤田東湖〕名は彪。水戸の齊昭の臣。勤王家。安政二年十二月二日江戸の地震に死す、年五十。明治二十四年追贈從四位。
〔諳厄利亞〕英國。
〔落々〕細事に介心せざる貌。
〔湖城〕えびす城。
〔萬死餘〕幾度も死ぬ程の運命になりし其後。
〔常陽〕常陸の南方即ち水戸。
〔梅郞〕東湖の幽せ

幽囚不レ許レ賦二歸歟一。衣帶日寬鬢日疎。何物尤爲二一身累一

蒲膝盡是古人書

一家生の營爲即事に失敗す。幽囚許されず歸歟を賦するを。衣帶日に寬く鬢日に疎なり。何物か尤も一身の累を爲す。蒲膝盡く是れ古人の書。

過二吾妻橋畔一有レ感　　藤田東湖

青年此地嘗遨遊　花下銀鞍月下舟。白首孤囚何所レ見

蒲川風雨伴二羈愁一

吾妻橋畔を過ぎて感あり　青年此の地嘗て遨遊す。花下の銀鞍月下の舟。白首孤囚何の見る所ぞ。蒲川の風雨羈愁に伴ふ。

述懷　　藤田東湖

三決レ死矣而不レ死　二十五回渡二刀水一　五乞二閑地一不レ得レ閑

三十九年七處徙　邦家隆替非二偶然一　人生得失豈徒爾。

自驚塵垢盈二皮膚一　猶餘二忠義塡二骨髓一　嫖姚定遠不レ可レ期

丘明馬遷空自企　苟明二大義一正二人心一　皇道奚患レ不二興起一

られし小梅の水戸邸。

〔歸歟〕歟は與に同。孔子陳にあり、歸らん歟歸らん歟吾黨の小子と嘆ぜし語あり。

〔何物尤云云〕蘇東坡の「人生識字憂患始」の句より得來る。

〔青年〕春を青陽といふ。少年は四時の春の如きより云ふ。

〔遨遊〕遨は遊也。

〔三決死〕文政七年常陸海岸に來りし英人を父の命にて殺さんとす。同十二年會澤未定の時同志と江戸に出で盡力す。天保十五年齊昭擁護の爲出府。

〔刀水〕利根川。

〔隆替〕盛衰。

〔塡髓〕[illegible]は然と同。

〔猶餘云云〕東坡の語に「道是貫心肝[illegible]

忠義塡骨髓」とあり。〔嫖姚〕漢の霍去病票姚校尉となる。票姚は勁疾の貌、票一に嫖につくる。〔定遠〕後漢の班超西域を平定し定遠侯に封ぜらる。〔丘明〕魯の左丘明左氏傳を作る。〔馬遷〕前漢の司馬遷、史記を作る。〔粹然〕粹は不雜也まじり氣ない貌。〔神州〕日本。〔不二〕富士の宛字。〔巍々〕高く大なる様。〔大瀛〕大海。〔洋々〕水の盛な貌。〔八州〕日本の古名大倭豐秋津島、伊豫二名島、淡路島筑紫、壹岐、對馬隱岐、佐渡をいふ。〔萬朶〕朶は枝也。

斯心奮發誓二神明一。古人有レ云斃而已」

「述懷」三たび死を決して而して死せず、二十五回刀水を渡る。五たび閑地を乞うて閑を得ず。三十九年七處に徙る。邦家の隆替偶然に非ず。人生の得失豈徒爾ならんや。自ら驚く塵垢の皮膚に盈つるを。猶ほ忠義を餘して骨髓に塡む。嫖姚定遠期す可からず。丘明馬遷空しく自ら企つ。苟くも大義を明かにして人心を正さば、皇道奚ぞ興起せざるを患へん。斯の心奮發神明に誓ふ。古人言ふあり斃れて已むと。

和二文天祥正氣歌一並序　　藤田東湖

彪年八九歲。受二文天祥正氣歌於先君子一。先君子每レ誦レ之。引レ盃擊レ節。慷慨飜發。談二說正氣之所以塞乎天地一。必推二本之於忠孝大節一。然後止。距レ今三十餘年。凡古人詩文。少時所レ誦。十忘二七八一。至二於天祥歌一。則歷歷諳記。不レ遺二一字一。而先君子言容。宛然猶在二心目一。彪性善病。去歲從二公駕一而來也。方患二疝冒一。力レ疾上レ途。及二公獲一レ罪。彪亦就二禁錮一。風窗雨室。濕邪交侵。菲衣疏食。飢寒迸至。其辛楚艱苦。常人所レ難レ堪。而宿痾頓瘉。體氣頗佳。睥二睨宇宙一。叩與二古人一相期者。蓋資二於天祥歌一爲レ多。夫天祥値二宋社之傾覆一。身囚二於胡

〔與儔〕比肩する。
〔桀〕兇。
〔藎臣〕藎は進なり忠愛の篤きこと。
〔熊羆〕猛獸の名をかりて勇猛の士に譬ふ。
〔好仇〕仇は逑也。匹也。好き相手。
〔皇風〕天皇の教。
〔六合〕天地四方。茲では日本全國。
〔汚隆〕衰盛。
〔大連〕オホムラジ上古の官名。物部守屋をさす。
〔侃々〕剛直にして屈せざる貌。
〔瞿曇〕釋迦の姓。佛教をさす。
〔明主〕欽明天皇をさす。
〔伽藍〕梵語、精舍と譯す。寺。
〔中郎〕中臣鎌足。
〔宗社〕宗廟社稷。
〔清丸〕和氣清麿。
〔妖僧〕弓削道鏡。

膺賛臣子之至變、若彪被幽、則特一時之奇禍、其事與跡、皆大不同。然古人有云、死生亦大矣。今彪之因阨、既已若此、而人猶或不以慊於意曰、何不遂賜死。曰、何不早自裁。彪之所以出入於死生間、亦復若此、而竟乎不變、自信愈厚者、未始不與天祥同也。嗚呼、彪之生死、固不足道。至於公之進退、則正氣之屈伸、神州之汚隆繫焉、豈特一時奇禍之云乎哉。天祥曰、浩然者、天地之正氣也。余廣其說曰、正氣者、道義之所積、忠孝之所發。然彼所謂正氣者、秦漢唐宋、變易不一、我所謂正氣者、亙萬世而不變者也、極天地而不易者也。因和天祥歌、又和之以自歌。歌曰

〔文天祥の正氣の歌に和す〕彪年八九歳、文天祥の正氣の歌を先君子に受く、先君子之を誦する毎に、[illegible]を引き節を撃ち、慷慨自ら禁ぜず、正氣の天地に塞がる所以を講説し、常に之を忠孝大節に歸本し、然る後に止む。今を距る廿餘年なり、凡そ古人の詩文少時誦する所、十に七八を忘る、大率の歌に至つては、則ち歷歷として諳記し。一字を遺さず。而して先君子の言容。宛然として猶ほ心目に在り。[illegible]く[illegible]む、[illegible]公の[illegible]に[illegible]て[illegible]來[illegible]、方に[illegible]を[illegible]、[illegible]を月[illegible]て途に上る、公の罪

を獲るに及ばず、彪も亦繫圄に就く。風窓雨室濕邪交も侵す、菲衣疏食、飢寒並び至る、其辛楚艱苦常人の堪へ難き所なり。而るに宿痾頓に癒え、體氣頗る佳なり。宇宙を睥睨して、妄に古人と相期する者は、蓋し天祥の歌に養ふ所多しと爲す。夫れ天祥宋社の傾覆に値ひ、身は胡虜に囚せらる。實に臣子の至變なり。彪の幽せられしが若きは則ち特に一時の奇禍にして、其事と跡とは皆大に同じからず。然れども古人云へあり、死生も亦大なりと。今彪の困厄は既に已に此の若し。而るに人情或は因て遽に慊らずして曰く、何ぞ速に死を賜はざると。曰く何ぞ早く自裁せざると。彪の死生の間に出入する所以も亦復此の若し。而るに頑乎として動ぜず。自信愈厚き者は、未だ縮より天祥と同じからずんばあらざるなり。嗚呼彪の生死は固より道ふに足らず。公の進退に至りては、則ち正氣の屈伸、神州の汚隆繫がる、豈特に一時の奇禍とこれ云はんや。天祥曰く、浩然たるものは、天地の正氣なりと。余其説を演めて曰く正氣とは道義の積む所、忠孝の發する所なり。然れども彼の所謂正氣とは和漢[illegible]一ならず。我が所謂正氣とは萬世に亙りて變ぜざるものなり。天地を極めて易らざる者なり。因りて天祥の歌を和し、又之に和し以て自ら歌ふ。歌に曰く、

天地正大氣、粹然鍾神州、秀爲不二嶽、巍巍聳千秋、注爲大瀛水。
洋洋環八洲、發爲萬朶櫻、衆芳難與儔、凝爲百錬鐵、鋭利可斷鍪。
藎臣皆熊羆、武夫盡好仇、神州孰君臨、萬古仰天皇、皇風洽六合。

〔龍口〕鎌倉の西一里餘、當時の刑場。時宗蒙古の使者を斬りし處。
〔胡虜〕胡は支那北方の蠻夷、蒙古をさす。虜は[illegible]。
〔志賀〕近江大津地方。藤原師賢帝命により後醍醐帝と偽りて叡山に赴きしをいふ。
〔吉野〕[illegible]村上彥四郎義光護良親王の身代りとなり討死せるをいふ。
〔鎌倉宮〕護良親王を幽する土牢。
〔悄々〕憂貌。
〔天目山〕甲斐にあり、武田勝頼戰死の地。臣小宮山友晴之に殉ず。
〔伏見城〕京都の南約一里、鳥居元忠家康の爲に守兵となり石田三成の大軍

を防ぎ陣沒す。
〔承平〕泰平。太平のあとをつぎ太平をつゞく。
〔鬱屈〕おさへられかゞまる、
〔四十七人〕赤穗の遺臣大石良雄等四十七人の復讐をいふ。
〔英靈〕英にして靈氣
〔彝倫〕彝は常也。倫は理也。倫理道德。
〔胡塵〕夷狄の塵。外人の變。
〔天步艱〕天步は天運。時の艱難なるをいふ。
〔邦君〕己の藩主、烈公德川齊昭。
〔孤臣〕東湖自身。
〔葛藟〕くづとかづら、連坐される、易の困卦「困于葛藟」の注に「葛藟は引蔓纏繞の草」とあり。

明德侔二太陽一　世不レ無二汚隆一　正氣時放レ光　乃參二大連議一　侃侃排二瞿曇一
乃助明主斷　焰焰焚二伽藍一　中郎嘗用レ之　宗社磐石安　清丸嘗用レ之
妖僧肝膽寒　忽揮二龍口劍一　虜使頭足分　忽起二西海颶一　怪濤殲二胡氛一
志賀月明夜　陽爲二鳳輦巡一　芳野戰酣日　又代二帝子屯一　或投二鎌倉窟一
憂憤正悁悁　或伴二櫻井驛一　遺訓何殷勤　或殉二天目山一　幽囚不レ忘レ君
或守二伏見城一　一身當二萬軍一　承平二百歳　斯氣常獲レ伸　然當二其鬱屈一
生二四十七人一　乃知人雖レ亡　英靈未二嘗泯一　長在二天地間一　隱然敍二彝倫一
孰能扶二持之一　卓立東海濱　忠誠尊二皇室一　孝敬事二天神一　修レ文與レ奮レ武
誓欲レ清二胡塵一　一朝天步艱　邦君身先淪　頑鈍不レ知レ機　罪戾及二孤臣一
孤臣困二葛藟一　君冤向レ誰陳　孤子遠二墳墓一　何以謝二先親一　荏苒二周星
獨有二斯氣隨一　嗟予雖二萬死一　豈忍與レ汝離　屈伸付二天地一　生死復奚疑
生當レ雪二君冤一　復見レ張二綱維一　死爲二忠義鬼一　極天護二皇基一

「文天祥の正氣の歌に和す」天地正大の氣、粹然として神州に鍾まる。秀でては不二の嶽となり。巍巍千秋に聳ゆ。注いでは大瀛の水となり。洋洋八洲を環る、發しては萬朶の櫻と爲り、衆芳與に儔し難し。

回也一簞食一瓢飲」
〔美祿〕酒。
〔天壽〕夭は若死、壽は永生き。回卅二歳にて死せしを意味す。
〔驥尾〕千里の名馬の尾につく。驥を回に譬ふ。
〔勍敵〕强敵。
〔叱咤〕叱る事、揮は號令をいふ。
〔亞聖〕亞は次ぐ也。顏回をいふ。
〔獨醒澤畔〕楚の屈原の事、屈原傳に「擧世混濁我獨清、衆人皆醉我獨醒」
〔謫仙〕官位を下げて流されし仙人、李白をさす。
〔消息盈虛〕盛衰。
〔危坐〕危は正也。
〔窮通〕不如意と成功。

盍以美祿延天年。天壽有命非汝力。性命猶付驥尾傳
瓢兮瓢兮吾愛汝　汝又嘗受豐公憐　金裝燦爛從軍日
一勝加一百且千。千瓢向處無勍敵　叱咤忽揮四海權
瓢兮瓢兮吾愛汝　悠悠時運幾遷還　亞聖至樂誰復顧
豐公雄圖何忽焉　不用獨醒吟澤畔　只合長醉伴謫仙
瓢兮瓢兮我愛汝　汝能愛酒不使夭　消息盈虛與時行
有酒危坐無酒顚　汝危坐時我未醉　汝欲顚時我欲眠
一醉一眠吾事足　世上窮通何處邊

「瓢兮の歌」瓢兮瓢兮吾汝を愛す。汝嘗て熟知せん顏子の賢、陋巷道に樂を改めず。盍ぞ美祿を以て天年を延ばさざる。天壽命あり汝の力にあらず。性命猶驥尾に附して傳ふ。瓢兮瓢兮吾汝を愛す。汝又嘗て豐公の憐を受く。金裝燦爛軍に從ふ日、一勝一を加へ百且千。千瓢向ふ處勍敵なし。叱咤忽ち揮ふ四海の權。瓢兮瓢兮吾汝を愛す。悠悠たる時運幾變遷。亞聖の至樂誰か復顧みん。豐公の雄圖何ぞ忽焉たる。用ひず獨醒澤畔に吟ずるを。只合に長醉謫仙に伴ふべし。瓢兮瓢兮我汝を愛す。汝能く酒を愛して夭に使はず。消息盈虛時と行ふ。酒あれば危坐し酒無ければ顚す。汝危坐する時我未だ醉はず。汝顚せんとする時我眠らんと欲す。一醉一眠吾事足る。世上の窮通何處の邊。

〔濟庵〕宋の胡詮。高宗に封事を上り秦檜・王倫の徒を斬るべきを論ず。
〔文山〕文天祥、賊の爲め幽囚の身となり正氣歌等自ら志を述ぶ。
〔家母云々〕母わが泣くに驚きし故一層の悲しみを增すといふ也。
〔梅田雲濱〕名定明、通稱源次郎。若狹小濱藩の士、京に住す。儒者勤王家。安政六年九月獄死。年四十四。
〔擬〕欲する義。
〔皇天后土〕天神地祇。

一擲を出づる作、當年の意氣雲を凌がんと欲す。快馬奔馳山を見ず。今日危途春雨冷やかに、轞車夢を揺かして函關を渡る。

聽梅田雲濱就囚慨然作　　賴　鴨　厓

臨レ禍慨然賦ニ節詩一　此詩將ニ萬泣ニ男兒一　報レ天大義何驚レ死
爲レ國深仁豈顧レ危　濟庵曾封誅レ賊表　文山空詠ニ憂囚詞一
竹窓一夜慘垂涕　家母驚爲泣血悲

梅田雲濱囚に就くと聽き慨然として作す。禍に臨んで慨然節詩を賦す。此の詩將に萬男兒を泣かしむ。天に報ずるの大義何ぞ死を驚かん。國の爲めにするの深仁豈に危きを顧みん。濟庵曾て封ず賊を誅する表、文山空しく詠ず憂囚の詞。竹窓一夜慘として涕を垂る、家母驚いて爲めに泣血の悲を添ふ。

訣　別　　梅　田　雲　濱

妻臥病牀兒泣レ飢　此心直欲擲ニ戎夷一　今朝死別兼ニ生別一
唯有皇天后土知

「決別」妻は病牀に臥し兒は飢に泣く。此心直ちに戎夷を擲はんと欲す。今朝死別は生別を兼ぬ。皇天后土の知るあり。

遺　墨　　梅　田　雲　濱

一木豈能大廈支。此時不道世情非。賤臣有向南山去。獨向北方拜帝闈。

〔通釋〕一木豈能く大廈を支へんや。此の時言はず世情の非なるを。賤臣南山に向つて去る有らば。獨り北方に向つて帝闈を拜せむ。

獄中作　　橋本景岳

欹枕囚人愁夜永。陰風刺骨過三更。昊天憶應憐幽寂。一點星華照牖明。

〔通釋〕獄中の作。枕を欹てて囚人夜の永きを愁ふ。陰風骨を刺して三更を過ぐ。昊天憶ふ應に幽寂を憐むなるべし。一點の星華牖を照して明かなり。

夜歸　　橋本景岳

殘月滴露濕人袂。陸風吹髮覺秋冷。忽驚大蛇當路橫。拔劍欲斫老松影。

〔通釋〕夜歸。殘月滴露人の袂を濕ほす。陸風鬢を吹いて秋冷を覺ゆ。忽ち驚く大蛇の路に當つて橫はるを。劍を拔いて斫らんと欲すれば老松の影。

失題　　橋本景岳

〔大廈〕「大廈將顛、非一木所支也」
〔賤臣〕自己をさす
〔南山〕終南山、晉の清士陶淵明南山のほとりに隱棲す
〔帝闈〕闈は宮城の大門の傍の小門也。皇居をいふ。
〔橋本景岳〕名は綱紀、通稱左内。越前藩士、勤王家。安政六年十月七日江戸に刑死廿六。明治廿四年追贈正四位
〔陰風〕陰慘たる風
〔三更〕夜半十二時
〔昊天〕夏の天。玆は單に天をさす。
〔星華〕星の光

飛雨蕭々孤雁鳴。壯心凜々久堪驚。忽聞城裏一聲笛。既見門前數十兵。

〔失題〕飛雨蕭々孤雁鳴く。壯心凜々驚くに堪へたり。忽ち聞く城裏一聲の笛。既に見る門前數十の兵。

獄中作　橋本景岳

二十六年如夢過。顧思平昔感滋多。天祥大節嘗心折。土室猶吟正氣歌。

〔獄中の作〕二十六年夢の如く過ぐ。平昔を顧思すれば感滋多し。天祥の大節嘗て心折す。土室猶ほ吟ず正氣の歌。

獄中作　橋本景岳

苦寃難洗恨難禁。俯則悲傷仰則吟。昨夜城中霜始隕。誰知松柏後凋心。

〔獄中の作〕苦寃洗ひ難し恨禁じ難し、俯すれば則ち悲傷し仰げば則ち吟ず。昨夜城中霜始めて隕つ、誰れか知らん松柏後凋の心。

寓感　橋本景岳

不須健筆喚詩豪。豈學精研剖兎毫。十歲鍜成忠一字。

〔凜々〕勢のりゝしきさま。

〔天祥大節〕文天祥の大なる節義也。〔心折〕心を碎く。苦心經營勤王に盡瘁せるをいふ。〔土室〕牢獄。「南冠倘且つ天祥の正氣歌を愛吟すとなり

〔松柏後凋〕堅き節義をいふ。世亂れて忠臣の操を知るに喩ふ。「歲寒然後知松柏之後凋」

〔健筆喚詩豪〕筆縱橫才思煥發、詩文の豪傑と呼ばるゝ也。

〔精研剖兎毫〕兎の

叱咤三軍是此聲。

「田氏の女玉葆の畫ける常磐、孤を抱ける圖」雪は笠檐に灑いで風袂を捲く。呱呱乳を覓むるは若為の情ぞ。他年の鐵枴峰頭の險。三軍を叱咤するは是れ此聲。

失題　梁川星巖

當年乃祖氣憑陵。叱咤風雲捲地興。今日不能除外釁。征夷二字是虛稱。

「失題」當年乃祖氣憑陵。風雲を叱咤して地を捲いて興る。今日外釁を除くこと能はずんば、征夷の二字は是れ虛稱。

芙蓉　梁川星巖

自從混沌死。世界孰其雄。一嶽排元氣。群山盡下風。羲車驚欲墜。天勢失穹窿。帝亦鑱不得。留之鎮大東。

「芙蓉」混沌の死せしより。世界孰か其れ雄なる。一嶽元氣を排し、群山下風に盡る。羲車驚いて墜ちんと欲し、天勢穹窿を失す。帝も亦鑱り得ず。之を留めて大東を鎮せしむ。

聞賴子成訃音詩以哭寄三首錄一　梁川星巖

萬事悠悠付逝波。哲人無命欲如何。憂懷暗似長沙哭。

〔灑〕一本灑に作る
〔笠檐〕かぶり笠のヒサシ。
〔呱々〕乳兒の啼聲
〔鐵枴峰〕攝津六甲山脈の一峯。鵯越の險あり。
〔三軍〕大軍なり。
〔乃祖〕家康をさす
〔憑陵〕元氣盛に强きをいふ。
〔外釁〕釁は罪也。外國の我邊海を窺ふをいふ。
〔征夷〕征夷大將軍
〔混沌〕莊子に出づ中央の帝混沌七竅なし。南海北海の帝等憐みて一日一竅をほりやりしに七日にして死せりといふ。混沌死とは天地形成さるゝをいふ。
〔羲車〕太陽。
〔穹窿〕中高の半圓

樂府如レ聞敕勒歌。　生硬骨將レ同北地一。　瑰奇才殆亞二東坡一。

子成著有二外史・通議・政記等一、但政記一書、最後所レ作者、其在二病牀一、尚不レ輟レ筆、且草且呻、迨二病革之日一方脱レ稿、自言政語百有餘言一擱レ筆而逝矣。

一編政記盡二心血一。　灑到二民痍一痕更多。

「頼子成の訃音を聞き、詩以て哭寄す三首」往事悠悠逝波に付す。哲人命なく如何せんと欲す。憂懐略ぼ似たり長沙の哭。樂府聞くが如し敕勒の歌。生硬骨は將に北地に同じからんとし。瑰奇才は殆ど東坡に亞ぐ。一編の政記心血を盡くし。灑いで民痍に到れば痕更に多し。

神風行。有レ引。　　梁川星巖

今茲丙午夏六月。余在二伊勢一。聞二西洋夷舶至二琉球一。爲作二神風行一。

天靈怒　神風作。卷起玄濤如二山岳一。十萬舳艫同時覆。休休休。莫莫莫。驕主遂止再擧議。蠻舶聞者膽皆落。爾來靖寧五百年　無復一艇伺二邊隴一。何者英夷足二奇異一。威貫皇張壓二群貪一。城皆有レ闢日千里。北伐南侵得二自由一。意氣似レ欲レ并二呑五大洲一。已掠二支那一略二天竺一。偏師到處前無レ敵。或云餘波及二琉球一。得レ非三借レ路窺二皇國一。汝不レ聞白日出處金

形。
〔帝〕天帝。
〔子成〕山陽の字。
〔哲人〕かしこき人
〔長沙哭〕漢の賈誼上疏して方今の事務を哭せり。
〔敕勒歌〕敕勒は匈奴の地名。斛律金の敕勒歌「敕勒川、陰山下、天似穹廬籠蓋四野。天蒼々野茫々、風吹草低見牛羊」。山陽日本樂府の跋言に「漢魏の歌謡、無節効音、敕勒歌に至って響を絶つ」と。
〔北地〕明の李東陽。
〔瑰奇〕勝れて美。
〔東坡〕宋の蘇軾。
〔民痍云々〕民を憂へて心血を灑ぎしをいふ。
〔玄濤〕玄海の濤。
〔驕主〕忽必烈。

一舟由良港に至る、首を回らせば蒼茫たり浪速城。篷窗又聽く杜鵑の聲。丹心一片人知るや否や。家郷を夢みず帝郷を夢む。

磯原客舍　　吉田松陰

海樓把酒對長風　顏紅耳熱醉眼濃　忽見雲濤萬里外
巨鼇蔽海來艨艟　我甚吾軍來陣此　貔貅百萬髮上衝
夢斷酒解燈亦滅　濤聲撼地夜鼕々

磯原客舍海樓酒を把つて長風に對す。顏紅に耳熱して醉眼濃なり。忽ち見る雲濤萬里の外、巨鼇海を蔽うて艨艟來るを。我吾が軍を提げて來つて此に陣す。貔貅百萬髮上に衝く。夢斷え酒解けて燈も亦滅す。濤聲地を撼かして夜鼕々。

癸丑十月朔拜鳳闕　肅然作之　時余將西走入海

吉田松陰

山河襟帶自然城　形勝依然舊神京　今朝盥漱拜鳳闕
野人悲泣不能行。上林黃落秋寂寞　空有山河無變更
聞說今皇聖明德　敬神愛民發至誠　鷄鳴乃起親齋戒。
祈掃妖氛致太平　安得天詔勅六師　直使皇威被八紘。

士濟々。安政六年十月廿七日刑死。年廿九。
〔蒼茫〕茫漠として遙か也。
〔磯原〕常陸の地名
〔巨鼇〕鼇は龜。軍艦に比す。
〔貔貅〕猛獸の名、勇敢なる兵卒。
〔鼕鼕〕鼓の音。玆は濤聲の形容。
〔癸丑十月〕松陰長崎に至り露艦に乘込まんとて京都を過ぎし時也。
〔盥漱〕口すゝぎ身を清める也。
〔野人悲泣〕暗に幕府の跋扈を憤す。
〔上林〕宮城の上林苑。

從來英皇不世出　悠悠失機今公卿。人生如萍無定住

何日重拜天日明

癸丑十月鳳闕を拜し慨然として之を作る。時に余將に西に走つて海に入らんとす。「山河襟帶自然に城し、聖跡依然たり舊神京。今朝盥漱して鳳闕を拜す。野人悲泣して行く能はず。上林黄落して秋寂寞、空しく山河の襟帶無きを有るのみ。聞説く今皇聖明の德、神を敬し民を愛したまふこと至誠に發す。鷄鳴いて乃ち起き親ら齋戒し。妖氛を拂つて太平を致さんことを祈りたまふと。安んぞ天詔を得て六師に勅し、直に皇威をして八紘に被らしめん。從來英皇世々に出でたまはず。悠悠機を失するは今の公卿。人生萍の如く定住なし。何れの日か重ねて拜せん天日の明かなるを。

〔六師〕天子の軍。〔八紘〕八方の遠地〔不世出〕めつたに世に出でざる義にて極めて稀に有るに云ふ。〔人生如萍〕己が海に入らんの志より云ふ。王政復古を祈れる、その間に看取するを得べし

楠公墓下作　吉田松陰

爲道爲義豈計名。誓與斯賊不共生。嗚呼忠臣楠子墓

吾且躊躇不忍行。湊川一死魚失水。長城已壞事去矣

人間生死何足言　廉頑立懦公不死　如今朝野悅奮同

僅有圭角乃不容　眞書已無衞道者　臨事寧有取義功

君不見滿淸全盛甲宇內　乃爲幺麼所破碎　江南十萬竟何爲

陳公之外狗鼠輩　安得如楠公其人　洗盡弊習令一新。

〔不共生〕七生滅賊を期せしをさす。〔魚失水〕劉備孔明を得て、魚の水を得たる如しと云ひしを意味す。〔長城云々〕壇道濟殺さるゝ時、吾を殺すは汝萬里長城を壞るが如しと罵りたり。〔公不死〕公の精忠

を聞けば頑情の人間も衿を正さざるを得ず。故に公死なずといふ也。
〔雷同〕附和。一定の識見もなく他の說に盲同する。
〔幺麽〕小細。つまらぬ者。世界第一と稱せし清朝つまらぬ英國等に苦しめられし事實をいふ。
〔輪囷〕屈曲盤戻の貌、まがりくねりたる貌。
〔靡爛〕腐りたゞれる。腐敗する。
〔旋可覩〕この事件によつても世事云ふに堪へざる事を知ると也。
〔東林〕明の東林黨
〔大學〕漢の大學衰亡に瀕せる漢の天下を維持せるを云
〔松下〕松下村。

獨跪碑前三歎息　滿腔義膽空輪囷

「楠公墓下の作」道の爲め義の爲めにして豈に名を計らんや。誓つて斯の賊と共に生きず。嗚呼忠臣楠子の墓。吾れ且つ躑躅して行くに忍びず。湊川一死魚水を失ひ。長城已に壞れて事去りぬ。人間の生死は何ぞいふに足らん。頑を廉に懦を立つ公死なず。如今朝野雷同を悦び。僅に圭角有れば乃ち容れず。書を讀んで已に道を衞るの志無し、事に臨んで寧ぞ義を取るの功有らんや。君見ずや滿清全盛宇内に甲たり。乃ち幺麽に破碎せらる。江南十萬竟に何をか爲す。陳公の外狗鼠の輩のみ。安んぞ楠公其の人の如きを得。弊習を洗盡して一新せしめん。獨り碑前に跪いて三たび歎息す。滿腔の義膽空しく輪囷。

將レ赴レ獄。留題村塾壁。　吉田松陰

寶祚隆天壤、千秋同其貫、何如今世運。大道屬靡爛、今我岸獄投、
諸友半及レ難。世事不レ可レ言。此擧旋可レ覩、東林振季明、大學持衰漢、
松下雖陋村、誓爲神國幹。

「將に獄に赴かんとす。題して村塾の壁に留む」寶祚天壤と隆え、千秋其の貫を同うす。如何ぞ今の世の運、大道靡爛に屬す。今我岸獄に投ぜられ、諸友半は難に及ぶ。世事云ふべからず。此の擧旋た覩るべし。東林は季明を振はし。大學は衰漢を持す。松下陋村なりと雖も、誓つて神國の幹とならむ。

狂愚　吉田松陰

〔機變士〕臨機のはかりごとに富む人。

〔鄕原徒〕鄕中にて謹愿の人と褒めらるゝもの。實は鄕里の俗人の氣に合ふ樣にする僞善者

〔聯〕詩文の對句也。對にして二つ並べしもの。

〔千秋人〕永遠に朽ちざる令名を殘す者。

〔兆民〕億兆の世民

〔季世〕澆季末世。

〔將門〕武家をいふ

徳川幕府外人の侮辱を受けて屈せんとするの時、始めて天子の尊きを知りしと也。これ實に維新興國の第一聲と云ひつべし。

〔明哲保身〕詩經に

狂愚誠可愛　才良誠可虞　狂常鋭進取　愚常疎避趨　才多機變士　良多鄕原徒　流俗多顚倒　目入古今殊　才良非才良　狂愚豈狂愚

狂愚誠に愛すべし、才良誠に虞るべし。狂は常に進取に鋭く、愚は常に避趨に疎し。才は機變の士多く、良は鄕原の徒多し。流俗多く顚倒し、人の目するに古今殊なり。才良は才良に非ず、狂愚豈狂愚たらんや。

松下村塾聯　　吉田松陰

自非讀萬卷書　寧得爲千秋人　自非輕一己勞　寧得致兆民安

〔松下村塾の聯〕萬卷の書を讀むに非るよりは、寧んぞ千秋の人たることを得ん。一己の勞を輕んずるに非るよりは、寧んぞ兆民の安きを致すを得ん。

偶作　　吉田松陰

季世威權歸將門　將門受侮屈夷蕃　九重勅發萬邦震　今日始知天子尊

〔偶作〕季世の威權將門に歸す。將門侮りを受けて夷蕃に屈す。九重の勅發して萬邦震ふ。今日始めて知る天子の尊きを。

自警詩　　吉田松陰

〔既明且哲、以保其身〕この言往々卑怯者の口實となるを惡みし也。

〔見幾而作〕易經に「見幾而作不俟終身」之れ智者の事也。

〔殺身成仁〕論語にあり。勇士の節也。

〔死不背君親〕忠孝は人倫の大本、皇國の大道。生きては天命に安じ死しては神明に訴ふ。松陰逝くと雖も遺書千歳の響あり。

〔安積艮齋〕名祐助、昌平黌教授者。萬延元年十一月歿、年七十六。

〔詠史〕北條早雲を詠ず。

〔仗義云々〕茶々丸が父堀河公方足利政知を弑せるを亡す。

士苟得レ正而斃。何必明哲保レ身。不レ能レ見レ幾而作一。猶當レ殺レ身成レ仁

道並行而不レ悖。百世以俟二聖人一。

（自警の詩）士苟くも正を得て斃れなば、何ぞ必ずしも明哲身を保たん。幾を見て作す能はずんば、猶ほ當に身を殺して仁を成すべし、道並び行はれて悖らず、百世以て聖人を俟たん。

辭世　　吉田松陰

今我爲レ國死　死不レ背二君親一　悠悠天地事　鑑賞在二明神一

（辭世）今我れ國の爲めに死す、死すとも君親に負かず。悠悠たる天地の事、鑑賞明神に在り。

詠史　　安積艮齋

窮途立レ志是英雄　仗レ義殪レ兇功最隆　飢鼠一朝爲二猛虎一

八州草木偃二威風一。

（詠史）窮途志を立つ是れ英雄、義に仗つて兇を殪す功最も隆し。飢鼠一朝にして猛虎と爲り、八州の草木威風に偃す。

登筑波山絶頂　　安積艮齋

突兀奇峰雲外浮　天風吹上絶巓秋　山河歷歷連二鞋下一

但恐一呼驚二八州一

〔筑波山の絶頂に登る〕突兀たる奇峰雲外に浮ぶ。天風吹き上ぐ絶巓の秋、山河歷歷たり雙鞋の下、但恐る一呼八州を驚かさんことを。

春初書感　安積艮齋

野梅溪柳與心違。强把朝衣換布衣。銀燭影微春宴散。蒲城風雪夜深歸。

〔春初書感〕野梅溪柳心と違ふ。强ひて朝衣を把つて布衣に換ふ。銀燭影微にして春宴散ず、蒲城の風雪夜深くして歸る、

富士山　安積艮齋

秦皇採藥竟難逢。東海仙山是此峰。萬古天風吹不折。青空一朶玉芙蓉。

〔富士山〕秦皇藥を採りて竟に逢ひ難し、東海の仙山は是れ此の峰、萬古天風吹けども折れず、青空一朶の玉芙蓉。

墨水秋夕　安積艮齋

雨落滄江秋水清。醉餘扶杖寄吟情。黃蘆半老風無力。白雁高飛月有聲。松下燈光孤廟靜。煙中人語一船行。

〔突兀〕突は出。兀は高。
〔歷々〕明白なる貌。
〔朝衣〕官吏の制服　〔布衣〕無官の平民の衣服。
〔銀燭〕明き燈火。
〔秦皇〕秦の始皇帝
〔東海〕日本をいふ
〔仙山〕仙人の居る山。
〔玉芙蓉〕富士山嶺の八峰を八葉蓮華に比して芙蓉といふ。玉は雪あるよりの形容、
〔滄江〕青く廣き河　隅田川をさす。
〔吟情〕詩を思ふ心
〔纓〕纓は冠の紐

雲山未遂平生志　此處聊應濯我纓

（畧）墨水秋夕　霜落ちて滄江秋水清し、病餘杖に扶けられて吟情を寄す、黄蘆半老いて風に力無く、白雁高く飛んで月に聲あり。松下の燈光孤閣静かに。煙中の人語一船行く。雲山未だ遂げず平生の志。此の處聊か應に我が纓を濯ふべし。

櫻　　安積艮齋

仙人綽約在蓬瀛　霧縠雲綃絶世清　海外信風無此種

長教豎子浪成名

（櫻）仙人綽約として蓬瀛に在り、霧縠雲綃絶世清し、海外の信風此の種なし、長く豎子をして濫に名を成さしむ。

題翁媼對食圖　　佐藤一齋

錦綺膏粱易損身　竟來富貴不如貧　千金難買雙眉壽

多在鶉衣藿食人

翁媼對食の圖に題す　錦綺膏粱身を損じ易し。竟來富貴は貧に如かず、千金買ひ難し雙眉の壽、多くは鶉衣藿食の人に在り。

太公望垂釣圖　　佐藤一齋

孟子に「滄浪之水清兮、可以濯我纓、滄浪之水濁兮、可以濯我足」

〔綽約〕容姿の美しき

〔霧縠雲綃〕霧の如き又雲の如き文樣ある輕羅。

〔信風〕花信風、春風廿四番。花の便りを報ずる風。

〔豎子〕他を賤めていふ語。玆は支那の國花牡丹をさす

〔佐藤一齋〕名は坦、江戸の儒者。安政六年八月廿四日病歿。年八十八。

〔錦綺〕錦や美しい織物。

〔膏粱〕肥肉と美穀

〔竟來〕畢竟、

〔雙眉壽〕眉壽は長壽。夫婦揃ひて長壽なる事。

〔鶉衣〕鶉は羽短し短き粗服をいふ。

誤被文王載得歸　一竿風月與心違　想君牧野鷹揚後　夢在磻溪舊釣磯

「太公望垂釣の圖」誤つて文王に載せ得て歸へ被る、一竿の風月心と違ふ。想ふ君が牧野鷹揚の後。夢は在らん磻溪の舊釣磯。

謾言　錄二　　佐藤一齋

落落乾坤人亦無　誰歟自古是眞儒　唯名與利多爲累　一過此關纔丈夫

「謾言」落落たる乾坤人も亦無し。誰ぞ歟古より是れ眞儒。唯名と利と多くは累を爲す、此の關を一過すれば纔に丈夫。

聞下田開港　　釋月性

七里江山付犬羊　震餘春色定荒凉　櫻花不帶羶腥氣　獨映朝陽薰國香

「下田の開港を聞く」七里の江山犬羊に付す。震餘の春色定めて荒凉たらん。櫻花は帶びず羶腥の氣。獨り朝陽に映じて國香を薰ず。

將東游題壁　　釋月性

〔[illegible]〕[illegible]、祖先をいふ。〔太公望〕呂尚、渭濱に釣せし時、周文に用ひられ帝者の師となる。武王を輔け天下を一統せしめ齊に封ぜらる。

〔一竿風月〕一本の釣竿に風月をたのしむ、陸游感舊詩「回首壯遊眞昨夢、一竿風月老南湖」

〔牧野〕周武王殷紂王を討ちし所。

〔鷹揚〕意氣揚々。

〔磻溪〕太公釣せし地。

〔落々〕廓大なる貌。

〔月性〕清狂。奇僧周防の人、海防に心を盡す。安政五年五月十一日歿。年四十二。正四位。

〔七里江山〕下田の地。

〔犬羊〕外國人、當

二十七年雲水身　又尋師友向三津　兒烏反哺應無日
忍別北堂垂白親

將に東遊せんとして壁に題す。二十七年雲水の身、又師友を尋ねて三津に向ふ。兒烏の反哺應に日なかるべし。忍び別る北堂垂白の親。

逸題　　日下部伊三次

星斗闌干月滿天　書窓深坐不就眠　欲知世運隆興兆
神武東征戊午年

逸題　星斗闌干月天に滿つ。書窓に深坐して眠を就かず。世運隆興の兆を知らんと欲せば。神武東征戊午の年。

時外人を蠻夷・禽し畜類と同視す。
〔震餘〕安政二年江戸大震の後也。
〔猩腥〕なまぐさし
〔三津〕大阪。
〔反哺〕烏の子成長して親烏に養育の恩を反す。
〔北堂〕母、
〔日下部伊三次〕薩藩の士。安政五年八月密勅を奉じて東下、捕へられ十二月獄死。
〔闌干〕星のきらめく狀、
〔戊午年〕神武東征の年、故に世運隆興は今年に意得としなり。
〔茅根寒綠〕名は泰、字伯陽、通稱伊豫之介、水戸藩士。學術深遠詩文をよくす、安政六年八月廿七日幕府罪を

安政己未四月二十六日以幕府之命與安島大夫及大竹儀兵同抵評定所受審此行禍殆不測將出得詩二篇乃把筆一揮留以與兒熊太郎他日成立則可有以知余之志時屬天明曉雲慘憺杜鵑悲鳴如訴冤者然

茅根寒綠

長鯨横海驕　妖氣蔽日昏　奈何春秋義　舉世付空論　簧言入左腹

身後誰能賓

（吉田義卿を送る）之子靈骨有り、久しく厭ふ蹩躠の群。衣を振ふ萬里の道、心事未だ人に語らず。則ち人に語らずと雖も、忖度すれば或は因有り。行を送りて郭門に出づ。孤鶴秋旻に横たはる。環海何ぞ茫茫たる、五洲自ら隣を爲す。周流して形勢を究めなば、一見百聞に超えん。智者は機に投ずるを貴ぶ、歸來須らく辰に及ぶべし。非常の功を立てずんば、身後誰か能く賓せん。

漫述　佐久間象山

謗者任汝謗　嗤者任汝嗤　天公本知我　不覓他人知

（漫述）謗る者は汝の謗るに任せ、嗤ふ者は汝の嗤ふに任す。天公本我を知る、他人の知るを覓めず。

詠史　佐久間象山

東邊拓地三千里　曾效荷蘭設學科　我邦空負英雄跡　百載無人似泊多

（詠史）東邊地を拓く三千里、曾て荷蘭に效ひて學科を設く。我が邦空しく英雄の跡を負ひ、百載人の泊多に似たるなし。

題那波利翁像　佐久間象山

何國何代無英雄　平生欽慕波利翁　邇來杜門讀遺傳

の先學者、元治元年七月十一日京都に刺さる、年五十四、明治廿二年贈正四位。
〔之子〕松陰をさす
〔蹩躠〕躠は跛。躠は字書に「人不能行也」と。凡人局促して四方の志なき意。
〔忖度〕忖も度也。推測する義。
〔秋旻〕秋の天。
〔須及辰〕有爲の時に及ぶべし。
〔身後誰能賓〕非常の功なくんば死後誰もその名を稱するものなしと也。
〔荷蘭〕和蘭也。
〔泊多〕露國のピーター大帝也。

〔邇來〕近來。
〔如今〕現今。
〔孩童〕孩は咳に同じ、小兒初めて笑ふを解する意。
〔守株〕舊習を墨守して時勢の變通を知らざる者を嘲りていふ。昔宋に一農夫あり、偶兔の株にふれて死せしを見、耕作をやめて專ら株を守り、又兔を得んと欲し世の笑草となりし故事韓非子に出づ。
〔翻手〕雪片の大なるをいふ。
〔朔北風〕奈翁のモスコー遠征の敗をさす。
〔齷齪〕短く狹き貌。字彙に「急促局陿貌」とあり。
〔廓清〕はらひ清む。
〔九原〕墓地。もと晉國時代の晉の卿大夫の墓のある地。

忽忽不レ知年歳窮　撫レ劍仰レ天空慨憤　世人那得レ察二吾衷一
如今邊警日復月　戰船來去海西東　外蕃學藝老且巧
我獨遊戲等二孩童一　守レ株未レ知レ師二他長一　矮舟誰能操二元戎一
嗟君原是一書生　苦學遂能長二明聰一　一朝照破當時蔽
革レ蔽除レ害民情從　旌旗所レ向如レ靡レ草　威信普加歐羅中
元主西征不レ足レ道　豐公北伐何得レ同　人生得レ意多失レ意
大雪翻レ手朔北風　帝王事業雖レ未レ終　收爲二我將一靡レ有レ嘗
世人心竅小二於豆一　齷齪寧知英雄膽　自古能成遠大計
自屈難レ樹廓清功　安得レ起二君九原下一　同謀戮レ力驅二奸兒一
終卷二五洲一歸二皇朝一　皇朝永爲二五洲宗一

〔譯〕波利翁の像に題す　何れの國何れの代か英雄無からん、平生欽慕す波利翁、邇來門を杜ぢて遺傳を讀み、忽忽知らず年歳の窮まるを。劍を撫し天を仰いで空しく慨憤す、世人那んぞ吾が衷を察するを得ん。如今の邊警日復た月、戰船來去す海の西東。外蕃學藝老且つ巧、我れ獨り遊戲すること孩童に等し、株を守つて未だ他の長を師とするを知らず、矮舟誰れか能く元戎を操らん。嗟君原是れ一書生、苦學遂に能く明聰を長ず、一朝照破す當時の蔽、蔽を革め害を除き民情に從ふ、旌旗向ふ所■

す。奈何ぞ肉食の人、頽然傀儡の若し、苟安歳月を愒り、縱樂度且つ怠る、當初來らざらんことを恃み、待つ有るを恃むことを知らず。復た其の謀を伐たず。卒然欺く所と爲る。地を假して金甌を缺き、膝を屈して無禮に甘んず。反つて彼れを知るの計を卻け。束縛直ちに自ら累す。吁余何爲る者ぞ。忠を致して怨み速に遭ふ。幽囚犴獄に在り。甘心其の罰を待つ。松柏本性有り、歳寒うして節改めず。忠義君國に許す。百折何ぞ嘗て悔いん。圖を回ふるには人を得るに在り、得るを全ふするには彼を知るに在り。是非倖すべからず。公論千秋を期す。

有感　　　　佐久間象山

慨然發憤冒艱險。擬爲皇州紓大患。豈料數奇不開志。

九年寂寞臥家山。

感有り　慨然憤を發して艱險を冒す、皇州の爲めに大患を紓べんと擬す。豈に料らんや、數奇志を開いず。九年寂寞家山に臥す。

題伯顏像　　　　佐久間象山

善斷善謀無失計。萬千將士仰如神。卽今天下遭多難。

苦憶當年雄略人。

伯顏の像に題す　善斷善謀失計無し、萬千の將士仰ぐこと神の如し。卽今天下多難に遭ふ、苦憶す當年雄略の人。

〔敖〕遊と同じ。遊ぶ也。
〔有待云々〕以逸待勞、計略十分成りて敵を待つ也、
〔犴獄〕犴も獄也。
〔間〕間者。
〔金甌〕金甌無缺、外侮を受けしことなき國家也。
〔數奇〕不運なり、
〔寂寞臥家山〕象山報國の大志を抱いて不幸幽囚の身となり寂寞として家山に臥す。遺憾思ふべし。然して自ら憐みて人を尤めず、詩人忠厚の旨を得といひつべし。
〔伯顏〕元の世祖に仕へ中書左丞相に拜す。裁決流るゝ如し、省中咸服して曰く、眞の宰相なりと。忠武と諡せらる。

後赤壁圖　齋藤拙堂

横槊英雄已劫灰。江山更得老坡才。千秋一隻南飛鵲。月下長鳴化レ鶴來。

〔後赤壁の圖〕槊を横たふる英雄已に劫灰。江山更に得たり老坡の才。千秋一隻南飛の鵲。月下長鳴鶴に化して來る。

二喬讀兵書圖　齋藤拙堂

東窓對坐兩嬋娟。日誦鈐經篇香閒。背使銅臺鎖春色。爲郎拈出火攻篇。

〔二喬兵書を讀むの圖〕東窓對坐す兩嬋娟。日に鈐經を誦して篇香閒かなり。背て銅臺をして春色に鎖さしめむや。郎が爲に拈出す火攻の篇。

詠四十七士　坂井虎山

若使レ無二茲事一。臣節何由立。若常有二此事一。終時無二王法一。王法不レ可レ廢。臣節不レ可レ已。茫茫天地古今間。茲事獨許赤城士。

〔四十七士を詠ず〕若し茲の事無からしめば、臣節何に由りてか立たん。若し常に此事あらば、終に時に王法なからんとす。王法は廢す可らず。臣節は已むべからず。茫々たる天地古今の間、茲の事獨り

〔齋藤拙堂〕名正謙。儒者。慶應元年七月十五日歿。年六十九。
〔横槊〕横槊賦詩。魏の曹操をさす。
〔劫灰〕世の中の灰と消え亡ぶ。
〔南飛鵲〕鵲はかさゝぎ。曹操の短歌行に「月明星稀、烏鵲南飛」とあり。
〔化鶴來〕鶴と化りて來る。東坡後赤壁賦に「適有孤鶴横江東來」とあり。
〔二喬〕有名なる美人。曹操は二喬を得んと欲せしかど、姉は孫策に嫁し妹は其將周瑜に嫁す。
〔銅雀臺〕赤壁の戰に負けなば曹操の爲銅雀臺に姉妹は封ぜられしならむ。
〔郎〕夫。
〔坂井虎山〕名は華。儒者詩人。安藝の人。嘉永三年歿。

許す赤城の士。

泉岳寺　阪井虎山

山嶽可レ崩海可レ燬。不レ消四十七臣魂。墳前滿地草苔濕。
盡是行人流涕痕。

〔泉岳寺〕山嶽崩すべく、海燬すべし、消せず四十七臣の魂。墳前滿地草苔濕ふ、盡く是れ行人流涕の痕。

河内路上　菊池溪琴

南朝古木鎖二寒霏一。六百春秋一夢非。幾度問レ天天不レ答。
金剛山下暮雲歸。

〔河内の路上〕南朝の古木寒霏に鎖す。六百の春秋一夢非なり。幾度か天に問へども天答へず。金剛山下暮雲歸る。

丙午仲秋同二五自沙釋冶雲植輪所一賞二月于由良港上一三首錄二一一　菊池溪琴

坡公赤壁千秋賦。字挾二風霜一筆有レ神。若看金蓮銀燭外。
蒲江月露屬二高人一。

年五十三。
〔臣節〕臣たる忠節
〔王法〕仇討等を許さざ國家の法律立ち難し。
〔泉岳寺〕東京芝區高輪にあり。赤穗義士の墳墓あり。
〔菊池溪琴〕名、保定、紀伊の人。詩人。明治十四年歿年八十三。
〔寒霏〕寒げなもや
〔春秋〕年。
〔非〕利あらず。
〔仲秋〕陰暦八月。
〔坡公〕宋の蘇東坡
〔千秋賦〕千秋を經てもわすれざる絶唱赤壁賦をさす。
〔挾風霜〕文字極り精采あるをいふ。
〔金蓮銀燭〕宮中御前の燭。東坡嘗て便殿に召され金蓮燭を撤して見送られしをいふ。
〔高人〕高尚なる人

「丙午仲秋垣白沙、釋冷雲、植徹所と月を由良港に賞す。坡公の赤壁千秋の賦、字は風霜を挾み筆に神あり。君看よ金蓮泉燭の外、滿江の月露高人に屬するを。

三樹酒亭與摩島子毅同賦　　菊池溪琴

樹濃山淡映晴沙。日落春樓細雨斜。朦朧三十六峰寺。箇箇鐘聲綴出花。

「三樹の酒亭摩島子毅と同じく賦す」樹濃かに山淡くして晴沙に映ず。日落ちて春樓細雨斜なり。朦朧たり三十六峰の寺、箇箇の鐘聲綴りて花を出す。

題兒島高德書櫻樹圖　　齋藤監物

蹈破千山萬嶽煙。鸞輿今日到何邊。單蓑直入虎狼窟。一匕深探鮫鰐淵。報國丹心嗟獨力。回天事業奈空拳。數行紅涙雨行字。付與櫻花奏九天。

「兒島高德櫻樹に書する圖に題す」蹈み破る千山萬嶽の煙。鸞輿今日何れの邊にか到る。單蓑直に入る虎狼の窟。一匕深く探る鮫鰐の淵。報國の丹心獨力を嗟き、回天の事業空拳を奈んせん。數行の紅涙兩行の字。櫻花に付與して九天に奏す。

大森會飲同諸友賦　　齋藤監物

〔三樹酒亭〕京都三本木の酒亭。
〔摩島子毅〕摩島松南。攝津の詩人。
〔三十六峯〕京都の東山をいふ。三十六は多きを意味す。
〔齋藤監物〕常陸國靜神社の祠官。嫉惡家。櫻田門外井伊公の刺客。自ら重傷し六日傷の爲に死す。年四十。明治卅五年追贈從四位。
〔踏破〕破は助辭。
〔單蓑〕蓑を着て只一人。
〔虎狼窟〕後醍醐天皇を隱岐に流し奉る北條方の警護の武士をさす。
〔一匕〕匕はあひくち也。短刀。
〔回天〕天をめぐらす。皇運を復す。
〔空拳〕素手の拳。助けなきをいふ。
〔九天〕九重の天。

胡馬南來久不レ歸　山河跋渉一身危　功名豈我等閑過
歳月驚レ人似レ夢飛。每事恐貽二千載笑一。此身甘與二草萊一逢
只今唯有君親在。血涙紛々點客衣。

（大森の會飲に妻女と同じく賦す。）こは胡馬南來久しく歸らず。山河跋渉して一身危し。功名我を忘めて雲の過ぐるに等しく、歳月人を驚かして夢の飛ぶに似たり。每事恐る千載の人を笑はすを。此身甘んじて草萊人と逢へり。只今唯君親の在る有り。血涙紛々として客衣に點ず。

出レ郷作　佐野竹之助

決然去レ國向二天涯一　生別又兼死別時　弟妹不レ知阿兄志
慇懃牽レ袖問二歸期一

（郷を出づる作）決然國を去つて天涯に向ふ。生別又兼ぬ死別の時。弟妹は知らず阿兄の志。慇懃袖を牽いて歸期を問ふ。

走レ筆作レ詩　黑澤忠三郎

呼レ狂呼レ賊任二他評一。幾歳妖雲一旦晴　正是櫻花好時節
櫻田門外血如レ櫻

（筆を走らして詩を作る）狂と呼び賊と呼ぶ他の評するに任す。幾歳の妖雲一旦晴る。正に是れ櫻花の

〔胡馬〕支那北方の馬、古詩に「胡馬依北風、越鳥巣南枝」

〔功名云々〕功遂げ難く、歳月空しく過ぎて遂に遂きを嘆ず。

〔客衣〕旅の衣。

〔佐野竹之助〕櫻田門外井伊公刺客の一人。水戸藩士。明治卅一年追贈正五位。

〔阿兄〕阿は親稱。阿兄とは自らの事なれど心安く自稱するなり。

〔黑澤忠三郎〕櫻田門外井伊公の刺客。文久元年獄死。年卅二。正五位追贈。

好詩句、櫻田門外血櫻の如し。

逸題　　高橋多一郎

貝錦織成世路難　憶昔不耐涙潸潸　躊躇邸外月明夜　偏照行人膓裏寒

〔通釋〕貝錦織り成し世路難し、昔を憶うて耐へず涙潸潸たり、躊躇す邸外月明の夜、偏に行人の膓裏を照らして寒し。

安政庚申二月初七日片岡下野二兒見訪　談論達旦　慨然而作。　　高橋多一郎

事業未成日易過　世途殆似渡風波　誰知今夜剔燈語　便作乾坤正大歌

〔通釋〕安政庚申二月初七日片岡下野の二兒訪はる、談論して旦に達す、慨然として作る。事業未だ成らず日過ぎ易し、世途殆んど風波を渡るに似たり。誰か知らん今夜燈を剔るの語、便ち乾坤正大の歌と作るを。

示兒　　高橋多一郎

一身委付一毛輕　不奈邦君困棘荊　兒子他年成立後

〔高橋多一郎〕名は愛諸、[illegible]と號す。水戸の士。[illegible]自ら大阪に下り畫策する所あり。萬延元年三月廿三日捕吏に圍まれ從容自刄す年四十九。明治廿四年追贈正四位。〔逸題〕此の詩一書に、子庄左衛門の作とす。〔貝錦〕讒人他人の罪を構成するに譬ふ。詩經に「萋兮斐兮成是貝錦、彼譖人者、亦已大甚」。〔似渡風波〕世途艱難なるを暴風大浪の難に譬ふ。〔剔燈〕深夜に及び剔りたる燈火を燃き立てゝするなり。

須知阿爺報公誠。

（兒に示す。一身笑つて一死の輕きに付す。奈んともせず邦君棘荊に困しむを。兒子他年成立の後、須らく知るべし阿爺報公の誠を。）

原環翠來訪。對酌賦呈二首節錄　高橋多一郎

獲罪十年老草堂。有人向我問行藏。感慨猶吟諸葛表。微忠何日報君王。

（原環翠來り訪ふ。對酌賦して呈す。罪を獲て十年草堂に老ゆ、人有り我に向つて行藏を問ふ。感慨猶ほ吟ず諸葛の表、微忠何れの日か君王に報ぜん。）

正月十四日夜。夢茅伯陽。覺後得二十八字　高橋多一郎

處々落魄十年々。不需此身爲瓦全。親友憂國多死別。夢迷夜々塚原邊。

（正月十四日の夜、茅伯陽を夢む、覺めて後二十八字を得たり。處々落魄十年々、需めず此の身瓦と爲りて全きを、親友國を憂へて多く死別す、夢は迷ふ夜々塚原の邊。）

就縛將歸鄕國。即得一絕。錄一　關鐵之介

〔原環翠〕原熊之介、水戶藩士にして憂國の士。甲子の變後自刃を命ぜらる。

〔行藏〕進みて道を行ふと、退きて隱るゝとなり。〔論語述而篇〕用之則行、舍之則藏。

〔諸葛表〕諸葛孔明の出師表なり。孔明の精忠、讀みて泣かざるは人に非ずと云はる。

〔茅伯陽〕茅根伊豫之介也、水戶藩の志士。

〔落魄〕不遇にして、おちぶれて、

〔瓦全〕北齊書に「寧可玉碎、不能瓦全」。徒らに身を全うするをいふ。

〔塚原〕小塚原、江戶の刑場。

〔華夷〕中華外夷。
〔腸斷〕斷腸の思也。悲しみ極まる貌。
〔淋漓〕したゝる貌。
〔一片精氣云々〕楊椒山の「浩氣還大虛、丹心照萬古」の意。
〔貫肝〕肝はまごゝろなり、心衷なり。
〔從容〕ゆつたりとして[illegible]てゐる貌。
〔夙夜〕朝早く起き夜おそく寐ぬ。
〔護皇宮〕死して忠義の鬼となり皇居を護らんの意。
〔遨〕遊と同じ。
〔河野鐵兜〕名は羆、通稱[illegible]夫、詩人、星巖に學ぶ、家塾を江戸に開く。

名共に得難く。業空しうして忠孝兩ながら相虧く。一念此に至れば腸斷えんとす。淋漓只有る血涙の垂るゝを。二十八年夢、乍ち覺め、一片の精氣大空に歸す。

無題　　蓮田市五郎

道理貫肝義塡胸　從容笑處死生中　安知一片忠魂鬼
夙夜儼然護皇宮

（無題）道理肝を貫き義胸を塡む。從容笑つて處す死生の中。安んぞ知らん一片忠魂の鬼。夙夜儼然皇宮を護る。

聞隅田川花盛開　　蓮田市五郎

春滿墨江桐景新　櫻花爛漫鬪紅塵　可憐昔日遨遊子
翻作從容就死人

（墨田川花盛んに開くを聞く）春墨江に滿ちて桐景新たなり。櫻花爛漫紅塵を鬪はす。憐むべし昔日遨遊の子。翻つて從容死に就くの人とならんとは。

芳野　　河野鐵兜

山禽叫斷夜寥々。無限春風恨未銷。露臥延元陵下月
滿身花影夢南朝

〔芳野〕山禽叫び斷えて夜寥々。限り無き春風恨未だ銷えず。露臥す延元陵下の月、滿身の花影南朝を夢む。

詠史　河野鐵兜

西都風月付長嗟。回首浮雲是帝家。一去騎龍仙跡杳。空留正氣在梅花。

〔詠史〕西都の風月長嗟に付す。首を回らせば浮雲是れ帝家。一去龍に騎して仙跡杳かなり。空しく正氣を留めて梅花に在り。

芳野懷古　藤井竹外

古陵松柏吼天飆。山寺尋春春寂寥。眉雪老僧時輟帚。落花深處說南朝。

〔芳野懷古〕古陵の松柏天飆に吼ゆ。山寺春を尋ぬれば春寂寥。眉雪の老僧時に帚くことを輟め、落花深き處に南朝を說く。

花朝下澱江　藤井竹外

桃花水暖送輕舟。背指孤鴻欲沒頭。雪白比良山一角。春風猶未到江州。

〔寥々〕寂しき狀。
〔恨未銷〕南朝の悲しみ尙去り難し。
〔露臥〕野宿。
〔延元陵〕後醍醐帝の御陵。
〔西都〕九州太宰府
〔長嗟〕長歎息。
〔浮雲云々〕浮雲帝家を隔てゝ寃を訴ふるに由なし。
〔騎龍云々〕登仙せられしをいふ。
〔正氣〕至公至大の氣。浩然の氣に同じ。
〔藤井竹外〕攝津の人、詩人。名は啓。慶應二年七月廿一日歿。年六十。
〔天飆〕天から吹く旋風。
〔眉雪〕眉毛の雪の如き老僧。
〔花朝〕陰曆二月二十五日。
〔澱江〕淀川。

〔奇相〕奇妙な人相
〔龍顏〕龍の樣に長い顏、漢の高祖、
〔日角〕額の中央の角が高くなつてる後漢の光武帝。
〔朝三暮四〕智者巧みに愚者を籠絡する事、莊子、列子、宋の狙公猿を愛す芧を與へんとし朝三暮四とせしに猿怒る朝四暮三とせしに喜べりと。
〔魚莊蟹舍〕漁夫や海士の小屋。
〔帝魂〕帝は安德帝をさす。
〔御裳川〕壇の浦に注ぐ小河、「今ぞ知る御裳河の流には浪の底にも都ありとは」一二位禪尼—
〔伏兵〕水戶浪士をさす。
〔大臣〕井伊掃部頭
〔佳期〕開花のよき時期。

〔詠史〕奇相嘲けるを休めよ沐猴に類すと。龍顏日角是れ同儔。朝三暮四賢に溺れず、一日に併呑す六十州。

過壇浦　　村上佛山

魚莊蟹舍雨爲煙　蓑笠獨過壇浦邊　千載帝魂呼不返　春風腸斷御裳川

〔壇の浦を過ぐ〕魚莊蟹舍雨煙と爲る、蓑笠獨り過ぐ壇浦の邊。千載帝魂呼べども返らず、春風腸は斷つ御裳川。

無題　　村上佛山

落花紛紛雪紛紛　踏雪蹴花伏兵起　白晝斬取大臣頭
噫嘻時事可知耳　落花紛紛雪紛紛　或恐天下多事兆於此

〔無題〕落花紛紛雪紛紛、雪を踏み花を蹴つて伏兵起こり、白晝斬取す大臣の頭。噫嘻時事知る可きのみ。落花紛紛雪紛紛、或は恐る天下の多事此に兆するを。

席上賦得春寒花較遲二首（錄一）　　村上佛山

人憂桃李負佳期　我愛春寒花較遲　畢竟待花如待客
多情却在未看時

啼上春寒し、花轉遲しを嘆し得たり一首。人は愛ふ桃李佳期に負くをも、我は愛す春寒花較遲きを。早き花を待つは寄を待つが如し。多情却つて未だ有ざるの時に在り。

秋月客中作　　村上佛山

酒薄難レ令二客恨消一　故園回首路迢迢　落花芳草清明雨　獨上姑蘇百里橋

秋月客中の作。酒薄うして客恨をして消さしめ難し。故園首を回らせば路迢迢。落花芳草清明の雨。獨り上る姑蘇の百里橋。

劍舞歌　　安積五郎

日出國分有二名寶一　百煉精鐵所二鍛造一　光芒電閃夏猶寒　風蕭蕭分髮衝冠　請見日出男兒膽　踏白刃分犯二彈丸一　犯彈丸分陷二堅陣一　縱橫搏擊山岳震　有二死之榮一無二生辱一　不レ須二將臺受二約束一

劍舞の歌。日出づる國名寶有り。百煉の精鐵鍛造する所。光芒電閃夏猶寒く、風は蕭々髮冠を衝く。請ふ看よ日出男兒の膽。白刃を踏んで彈丸を犯す。彈丸を犯して堅陣を陷る。縱橫搏擊山岳震ふ。死の榮有れども生の辱なし。須たず將臺の約束を受くるを。

〔多情〕情意多きをいふ。
〔秋月〕筑前に在り。
〔迢迢〕遠く、路遙かなり。未だ歸るを得ざるをいふ。
〔清明〕二十四氣の一、春分の次の季。熙朝樂事、清明前兩日、謂寒食」
〔姑蘇〕秋月に古處山あり、音假りて姑蘇字を用ひし也。
〔安積五郎〕名武貞、號東海、江戸の人、勤王家。元治元年二月叢南に斬らる年卅七。
〔光芒〕芒は光の尾を引くもの。
〔風蕭々〕風寂しく吹く、荊軻の易水歌「風蕭々兮易水寒」
〔髮衝冠〕元氣よき樣、駱賓王の易水送別の詩、此地別

燕丹、壯士髪衝冠。
〔將軍〕將軍の役所
〔約束〕エウシユ。軍令。
〔天定云々〕人多ければ天に勝。天定つて人に勝つ。死して皇城を守らんとするの意氣也。

〔松村大成〕名古文。肥後の人。慶應三年正月歿。年六十。明治卅一年七月追贈正四位。
〔苦楚〕くるしみ。

〔澁川榮承〕榮作坊と稱す、[illegible]山の[illegible]徒。
〔朝聞道云々〕論語に「子曰朝聞道夕死可矣」註に「道とは事物當然の理、苟くも之を聞くを得る時は生きては

逸題　　安積五郎

捨レ生取レ義是男兒　四海紛紛何所レ期　好向二京城一埋二俠骨一　待二他天定勝レ人時一。

「逸題」生を捨て義を取る是れ男兒。四海紛紛何の期する所、好し京城に向つて俠骨を埋め。他の天定まつて人に勝つの時を待たむ。

病中述志　　松村大成

一繫二罪網一三歷レ秋　二逢二疾患一更堪レ愁　病腦苦楚雖レ成レ夢　寃怨悲憤易レ結レ憂　尊王虛名雖二稍達一　攘夷功業立無レ由　縱令命分不レ加レ齡。七世生魂何以休

「病中志を述ぶ」一たび罪網に繫がれて三たび秋を歷、二たび疾患に逢ひて更に愁ふるに堪へたり。病腦苦楚夢を成し難し。寃怨悲憤憂を結び易し。尊王の虛名稍達すと雖も。攘夷の功業立つるに由無し。縱令命分齡を加へざるも。七世の生魂何を以て休せむ。

獄中作　　澁川榮承

忠臣必出孝子門　忠孝以報天地恩　朝聞レ道夕死不レ悔　況以忠義傳二子孫一　欲レ向二中原一唱二勤王一　顚沛誤陷樊籠裏

「幾番」古人春花を二十四番花信風に分ちて花譜を作る。「沖融」長閑に暖。「香雲」香よき櫻花を雲に喩ふ。「暖雪」櫻花の白きを雪に喩ふ。暖は春暖の義。

「大槻磐溪」名清崇、仙臺の人、儒者。明治二年病歿、年七十四。「成敗」成功と失敗「順逆」理に從ふて正しきと正しからざると。

「春日山」越後中頸城郡春日村、上杉[illegible]城。[illegible]爲景越後[illegible]して此に城く、謙信も亦此に城く。「驊騮」黒栗毛の駿馬、周穆王が八駿の一。前漢書[illegible]に「[illegible]」

吹到幾番花信風。東台春色日沖融。今朝殊覺鐘聲緩。來自香雲暖雪中。

東台吹き到る幾番花信の風。東台の春色日に沖融。今朝殊に覺ゆ鐘聲の緩なるを、香雲暖雪の中より來る。

楠公湊川戰死圖　大槻磐溪

王事寧將成敗論。唯知順逆是忠臣。斯公一死兒孫在。護得南朝五十春。

楠公湊川戰死の圖　王事寧ぞ成敗を以て論ぜん、唯順逆を知る是れ忠臣。斯の公一死兒孫あり。護り得たり南朝五十春。

春日山懷古　大槻磐溪

春日山頭鎖暮霞。驊騮嘶罷有鳴鴉。憐君獨賦能州月。不詠平安城外花。

春日山懷古　春日山頭暮霞を鎖す、驊騮嘶き罷んで鳴鴉あり。憐む君獨り能州の月を賦して、平安城外の花を詠ぜざりしを。

武田信玄　大槻磐溪

「驚倒」倒は助辭。「野田城」三河國設樂郡。信玄天正元年菅沼定盈を攻む。城中信玄の音樂好を知り村松芳休笛を吹き鳥居三左衞門狙射す。信玄此傷の爲に五十三歲にて死す。「七十二疑塚」曹操歿に臨み、[illegible]疑塚を七十二作りしといふ。「湖底安」信玄遺言して死骸を石棺に入れて諏訪湖に沈めしむ。「平泉」岩手縣平泉に遺跡あり。藤原清衡。基衡。秀衡三代此に據り奥羽を領す。「金色堂」平泉驛の西半里、中尊寺の佛閣、一名光堂。「五月雨の降りのこしてや光堂」芭蕉

驚倒晴中跳銃丸。野田城上笛聲寒。誰知七十二疑塚。不似一棺湖底安。

（武田信玄）驚倒す晴中銃丸を跳らすを、野田城上笛聲寒し。誰か知らん七十二の疑塚。似ず一棺湖底の安きに。

西部歸路望嶽時立冬前五日也　　大槻磐溪

蒼然暮色淡歸濃。松外一聲遠寺鐘。輪大夕陽摩嶽落。餘紅映出碧芙蓉。

（西部より歸路嶽を望む、時に立冬前五日なり）蒼然たる暮色淡濃に歸す。松外一聲遠寺の鐘。輪大の夕陽嶽を摩して落ち、餘紅映出す碧芙蓉。

平泉懷古　　大槻磐溪

三世豪華擬帝京。朱樓碧殿接雲長。只今唯有東山月。來照當年金色堂。

（平泉懷古）三世の豪華帝京に擬す、朱樓碧殿雲に接して長し。只今唯東山の月のみありて、來り照らす當年の金色堂。

太田道灌借蓑圖　　大槻磐溪

孤鞍衝レ雨叩二茅茨一、少女爲遺花一枝。少女不レ言花不レ語。
英雄心緒亂如レ絲。

「太田道灌蓑を借るの圖」孤鞍雨を衝いて茅茨を叩く、少女爲めに遺る花一枝。少女は言はず花語らず。英雄の心緒亂れて絲の如し。

銚港雜詠　大槻磐溪

港口人烟萬戸稠　危橋林外海悠悠　紅輪輾上金鼇背
先照扶桑第一州

銚港雜詠「港口、人烟萬戸稠し、危橋林外海悠々たり、紅輪輾りたる金鼇の背、先づ照らす扶桑の第一州。

佛郎王詞　大槻磐溪

半生威武逼二西洋一　靑史長留赫赫名　一自功名歸二太帝一
無二人艷說歷山王一

「佛郎王の詞」半生の威武西洋に逼し。靑史長く留む赫赫の名。一たび功名の太帝に歸してより。人の歷山王を艷說する無し。

楠公訣レ子圖　大沼枕山

〔茅茨〕茅を以て葺きし田家。
〔花一枝〕八重の山吹の一枝なり。
〔心緒〕心中の情緒
〔銚口〕銚子港口。
〔人烟〕人家の烟。
〔稠〕人家稠密櫛比せるをさす。
〔危橋〕高い帆柱
〔紅輪〕朝暾。
〔輾〕ぎり〳〵きしる。紅輪と云ひし故輾るとせし也。
〔金鼇〕金色の海亀。
〔扶桑第一州〕日本第一東に位する總州をいふ。
〔靑史〕歷史。古昔紙なく靑竹に油をぬきてそれに書せり。故に靑といふ
〔太帝〕ナポレオン
〔歷山〕アレキサンダー大王。
〔艷說〕美み說く。
〔大沼枕山〕名は厚詩人。江戸の人。

〔王孫〕日本武尊。〔山東〕東國也。支那函谷關以東を山東と云ふ。箱根を函谷關に比す。

〔大橋訥庵〕名、正順。上野の人。佐藤一齋に學ぶ。義烈の士。文久二年獄中に健康を害ひし、許されて數日歿す。年四十七。明治廿四年追贈從四位。

〔諂媚〕こびへつらふ。

〔淬〕刃を鍛へる時火に焼きて水につけるをいふ。

〔蓋棺云々〕死して後已むの謂也。

〔危言〕正言、直言。

〔長尾秋水〕名景翰、越後の人。文久三年沒。

王孫提劔向山東　赫々神威草伏風　似護皇州神武德
瑞雲長繞熱田宮

王孫劔を提(ひつさ)げて山東に向ふ。赫々(かくく)たる神威草風に伏す。皇州神武の德を護るに似たり。瑞雲(ずゐうん)長くめぐる熱田の宮。

題檜　大橋訥庵

諂媚成風士氣衰　果見蕃虜擾神州　赤心報國豈無日
新淬光芒七尺鋒

檜に題す。諂媚(てんび)風を成して士氣(しき)衰へ、果して見る蕃虜(はんりよ)の神州を擾(みだ)すを。赤心報國豈に日無からんや、新に淬ぐ光芒七尺の鋒。

獄中作　大橋訥庵

尊王攘夷豈無時　何計危言却被誣　今直蓋棺吾已矣
秋津洲裏一男兒

獄中の作。尊王攘夷豈に時無からんや、何ぞ計らん危言(きげん)却つて誣はれんとは。今直ちに棺を蓋(おほ)はゞ吾れ已んぬ矣、秋津洲(あきつしま)の裏の一男兒。

松前城下作　長尾秋水

海城寒柝月生潮　波際連檣影動搖
從此五千三百里　北辰直下建銅標

（松前城下の作）海城の寒柝月潮に生ず、波際の連檣影動搖す。此れより五千三百里、北辰の直下に銅標を建てん。

癸丑除夕　藤森恭助

世事多難兩鬢絲　衡門誰說可棲遲
明廷方講懷柔策　狂虜猶持桀黠辭
諸葛千年空有表　杜陵當日豈無詩
剪燈半夜吟搔膝　兒女錯爲添歲悲

（癸丑の除夕）世事多難兩鬢の絲、衡門誰か說く棲遲すべしと。明廷方に懷柔の策を講ず、狂虜猶ほ桀黠の辭を持す。諸葛千年空しく表有り。杜陵當日豈詩無からんや。燈を剪りて半夜吟じて膝を搔す。兒女錯りて歲を添ふるの悲みとなす。

楠廷尉訣子圖　藤森恭助

男兒許國身偏重　斡地旋天心所銘
莫怪湊川輕一死　此心附託有寧馨

（楠廷尉子に訣るゝの圖）男兒國に許す身偏に重し、地を斡し天を旋す心に銘する所、怪む莫れ湊川に

〔海城〕海邊の城、松前（福山）をさす
〔寒柝〕冬夜を警むる拍子木の音。
〔北辰〕北極星、
〔銅標〕後漢の馬援交趾に至り銅標を建て漢の極界とす
〔藤森恭助〕弘菴、江戸の儒者。文久二年十月歿。明治卄四年追贈從四位
〔除夕〕大晦日の夜
〔衡門〕かぶき門。隱者等の家の門。
〔明廷〕朝廷をさす
〔桀黠〕惡賢き事。
〔狂虜〕外人をさす
〔諸葛云々〕孔明の忠義出師の表となりて世に[illegible]傳るを云ふ。
〔杜陵〕杜甫少陵と號す。唐の詩人。其詩雄渾沈痛にして忠厚の情を見る
〔廷尉〕檢非違使の佐の唐名。

攘夷大策仰皇猷。常苦奸臣誤遠謀。三十三年懷志操。
七旬五日難浮囚。英雄心事生來定。男子功名死不休。
今日試提世間見。茫々雲霧奪神州。

〔獄中の述懷〕攘夷の大策皇猷を仰ぐ。常に苦しむ奸臣の遠謀を誤るを。三十三年志操を懷き、七旬五日浮囚に難む。英雄の心事生來定まる、男子の功名死すとも休せず。今日試に提す世間の見。茫々たる雲霧神州を奪ぐ。

平野國臣追悼　　村井正禮

都人感泣紫人心。夜渡大洋船欲沈。忠義一蓬薩摩海。
霜風刺骨緊于針。

〔平野國臣追悼〕都人感泣す紫人の心。夜大洋を渡りて船沈まんと欲す。忠義の一篷薩摩の海。霜風骨を刺して針よりも緊なり。

嘉永壬子。遊佐渡奉拜順德天皇山陵。廼賦詩。　　宮部鼎藏

陪臣執命奈無益。大日喪光沈北陬。遺恨千年又何極。
一刀不斷賊人頭。

文久三年投獄、慶應三年斬せらる。年卅七。明治廿四年追贈正五位。

〔皇猷〕帝王のはかりごと。

〔世間見云々〕世論を見れば日本の前途は雲霧に閉されし如く不安なるを慨せるなり。

〔紫人〕國臣をさす。國臣は福岡の藩士なり。次郎と稱す。藩の銃隊教師。又國學に通ず。憂國の志厚く同志と謀り畫策、遂に元治元年獄中に斬らる。

〔一篷〕篷はトマ、小舟の義。

〔宮部鼎藏〕名增實、熊本藩士。元治元年池田屋變に屠腹す。年四十五。明治廿四年追贈正四位。

〔綱常〕三綱五常、人の人たる道也。
〔鞠育〕養ひ育つ。
〔多田海庵〕通稱彌太郎。但馬出石藩士。元治元年藩吏に刺殺さる。明治卅四年追贈從四位。
〔義公〕水戸黄門光圀、大日本史を編集し、湊川の碑はその筆を振ひし所
〔春秋〕孔子の作りし魯の歴史。大義明分を正す。
〔一句〕「嗚呼忠臣楠氏之墓」
〔亂臣〕君に背く臣
〔七生人間〕正成湊川に戰死する時、七度人間に生れて國賊を亡さんと誓ひしをいふ。
〔如有怒〕今尚忠臣の怒を傳ふが如くに松風の聞えるをいふ。

「獄中の作」英雄古より辛苦多し、笑つて獄中に坐す鐵石の腸、二十六年三たび死を決す、挺身直ちに綱常を維がんと欲す。

無題　　兒島强介

廿年鞠育未ㇾ酬ㇾ恩、世事多難頻走奔、紅涙數行燈下別
默而再拜大乾坤

「無題」廿年鞠育未だ恩に酬いず。世事多難頻りに走奔す。紅涙數行燈下に別る。默して再拜す大乾坤、

謁湊川楠公廟　　多田海庵

嗚呼忠臣楠氏墓　義公筆力之所ㇾ注　不ㇾ用辛苦作春秋
一句斷處亂臣懼　神州如ㇾ不ㇾ生楠公　皇祚當年有ㇾ誰護
楠公亦不ㇾ由義公　朽骨徒當ㇾ埋道路　七生人間恨未ㇾ消
忠臣志撑一何苦　湊川水落悽無ㇾ聲　廟外松風如ㇾ有ㇾ怒
從來人事多可ㇾ悲　又見天意有ㇾ所ㇾ寓　千載此地表孤墳
神州士欲ㇾ護皇祚

「湊川楠公の廟に謁す」嗚呼忠臣楠氏の墓。義公筆力之注ぐ所、用ひず辛苦春秋を作するを、一句斷ずる處亂臣懼る。神州如し楠公を生ぜずば、皇祚當年誰有りてか護らん。楠公も亦義公に由らずば、朽骨

〔如林〕林はおほし林立、物の多く叢り集る義也。
〔心事〕心中に思ふ事がら。謝靈運詩序「徐幹少無宦情有箕潁之心事」
〔好男子〕すぐれたる男子。
〔萬物靈〕人間也。
〔志趣〕心ばせ、志向。
〔拘泥〕物事にかゝづらふ。
〔達人〕ひろく道理に通達せる人。賈誼鵩鳥賦「達人大觀兮、物亡不可」
〔草茸〕亂れたる貌。

古今殉國士如林。心事茫茫不可尋。昔自天成好男子。奚曾一點愛名心。

「楠公の圖に題す」古今殉國の士林の如し。心事茫々尋ぬべからず。昔は自ら天成の好男子。奚ぞ曾て一點の名を愛する心あらん。

偶作二首　　横井小楠

帝生萬物靈。使之亮天功。所以志趣大。神飛六合中。

「偶作二首」帝萬物の靈を生じ、之れをして天功を亮けしむ。志趣大にして、六合の中に神飛する所以なり。

道既無形體。心何有拘泥。達人能明了。渾順天地勢。

道既に形體なし。心何ぞ拘泥あらん。達人は能く明了す。渾べて天地の勢に順ふ。

偶成　　横井小楠

群巒亂山總草茸。奇觀何處立新筇。愛來大丈夫心事。寄在芙蓉第一峯。

「偶成」群巒亂山總て草茸。奇觀何の處に新筇を立てん。愛し來る大丈夫の心事。寄せて芙蓉第一の峯に在り。

九月二十三日（時寓伏見）　　久坂義助

世海濁流急　桃花相逐流　危哉吾一葦　離レ岸中央浮　柱レ楫不二屢盪一。
安復知二止休一　伯夷不レ可レ詣　難哉柳下惠

〔偶作〕世海濁流急にして、桃花相逐うて流る。危い哉吾が一葦、岸を離れて中央に浮ぶ。楫を柱へて屢々盪かさず。安んぞ復止休を知らん。伯夷詣るべからず。難い哉柳下惠。

揚屋幽居中作二月十八日下レ獄　入江九一

天勅親書墜レ地空　胡塵忽地起二腥風一　八洲路塞居無レ所
恩意保レ身岸獄中

〔揚屋幽居中の作二月十八日獄に下る〕天勅親書地に墜ちて空し。胡塵忽ち地に腥風起る。八洲路塞りて居るに所無し。恩意身を保つ岸獄の中。

棄兒行　雲井龍雄

斯身飢斯兒不レ育　斯兒不レ棄斯身飢　捨是邪不レ捨非邪
人間恩愛斯心迷　哀愛不レ禁無情涙　復弄二兒顏一多苦思
兒兮無レ命待二黃泉一　兒兮有レ命斯心知　焦心頻屬良家救
欲レ去不レ忍別離悲　橋畔忽驚行人語　殘月一聲杜鵑啼。

〔棄兒行〕吾の身飢うれば、斯の兒育たず。斯の兒棄てざれば斯の身飢う。捨つるは是か捨てざるが非

長州藩士、元治の變に自刃す。

〔伯夷〕叔齊の兄、殷の遺臣、天下周を宗とするや首陽山に隱る―登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣。神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸矣、于嗟徂兮、命之衰矣―遂に餓ゑて死す。

〔柳下惠〕周の世の賢人。

〔揚屋〕徳川幕府の牢屋なり。

〔胡塵〕外人の災。

〔雲井龍雄〕羽前の勤王家、明治三年十二月小塚原に刑死年廿七。

〔斯身〕此の身自身。

〔無情涙〕棄兒するなどは無情なりとの涙。

〔無命〕此儘命なく

〔綱常〕三綱（君臣、父子夫婦）五常（仁義禮智信）。
〔九重〕皇居。
〔兀〕高くして上平の貌、つき出て聳えたるをいふ。
〔回天〕君主の心をひきかへす、轉じて國勢を挽回するをいふ。
〔亡人〕逃亡してゐる人間。
〔燈下云々〕深更の燈下筆を振つて天下の治安策を草すとなり。
〔小原鐵心〕名忠寛、大垣藩の執政、維新の際功多し、明

「楠公を祭る」千窟(ちはや)の山は何を以て高き、是れ楠公(なんこう)の因つて起りし所。兵庫の海は何を以て深き。是れ楠公の戰死せし所。全功當年成らずと雖も、忠義千歳綱常(さいかうじやう)を掲ぐ。君見ずや千窟の北兵庫(きたひやうご)の東。紫雲(しうんうご)動かず九重(ちようたい)崇し、再造の功直ちに歸する所、嗚呼石兀(いしこつ)たり青松の中。

無題　　眞木紫灘

回天術盡壯心殘　被世亡人一般看　賈生心事誰能識　燈下揮毫策治安

「無題」回天の術盡きて壯心殘(ざん)す。世に亡人と一般に看らる、賈生(かせい)の心事誰か能く識らん。燈下毫(がう)を揮(ふる)つて治安を策す。

有感　　眞木紫灘

四十將登第二春　蒲頭霜雪白如銀　暗燈忽驚中宵夢　枕上執刀斬姦臣

「感有り」四十將に登(のぼ)らんとす第二の春。蒲頭(ほとう)の霜雪白きこと銀の如し。暗燈忽ち驚く中宵(ちゆうせう)の夢。枕上刀を執つて姦臣(かんしん)を斬る。

偶述　　小原鐵心

宦海波瀾雲又翻　興亡自古是循環　誰知今日微臣涙

〔守江戸灣〕嘉永六年ペリー來航せる時なり。
〔戍迹〕戍は守る也

〔臣節〕臣たる節義
〔熊羆〕熊羆の如き勇敢なる兵。
〔麾下〕旗本の士也

〔村松文三〕香雲。廿回狂士と號す。青井韓三郎、變遷は皆其變名、伊勢山田に生。志士、明治七年一月病歿。追贈正五位。
〔感懷〕この詩月性の作と誤傳せらる文三月性親交ありし故なるべし。

受藩命守江戸灣時作　　小原鐵心

孤客鞍頭感慨催　海門落日晩潮回　誰知一片武夫恨
戍迹秋寒本牧臺

「藩命を受けて江戸灣を守る時の作」孤客鞍頭感慨催す、海門の落日晩潮回る。誰か知らん一片武夫の恨、戍迹秋寒し本牧臺。

守衞京師　　小原鐵心

臣節胸間一片存　仰觀天日照乾坤　熊羆麾下士三百
守護皇宮第一門。

「京師を守衞す」臣節胸間一片存す。仰ぎ觀る天日の乾坤を照すを。熊羆麾下の士三百、守護す皇宮の第一門。

感懷　　村松文三

男兒立志出鄕關　業若不成死不還　埋骨何期墳墓地
人間到處有青山

「感懷」男兒志を立てて鄕關を出づ、業若し成らずんば死すとも還らず。骨を埋むる何ぞ期せん墳墓の地。人間到る處青山有り。

〔層臺〕數層の高き建物。
〔飛鴻〕飛ぶ鴻也。
〔經略〕經營の才略。
〔草萊〕草の繁茂せるなり。未開なるを意味す。
〔二頃〕二百畝。頃は田百畝の稱、後漢書「叔度汪汪若千頃陂」
〔企脚〕脚をあげて望む也。
〔蝸廬〕蝸牛殻の如き茅屋の義。
〔後藤松陰〕名は機、美濃の人。山陽の高弟、小竹の女婿。元治元年十一月歿。
〔秦家云々〕秦法網を嚴にせしが、漢の高祖を漏らして爲に亡ぼされしを云。

遣題　　鍋島閑叟

秋風一陣動層臺　天外飛鴻木葉摧　五尺小身心膽濶
三分經略氣宇雄　東都諸官悉軟弱　西海群兒多俊才
自古英雄豈空老　洋西萬重闢草萊

〔遣題〕秋風一陣層臺に動く、天外の飛鴻木葉摧く、五尺の小身心膽濶にて三分の經略氣宇雄なり。東都の諸官悉く軟弱、西海の群兒多く俊才、古より英雄豈空しく老いんや、洋西萬重草萊を闢く。

遣題　　鍋島閑叟

二頃田園久廢鋤　未遑企脚臥蝸廬　笑吾遇事難沈默
爲有胸中萬卷書

〔遣題〕二頃の田園久しく鋤を廢し、未だ企脚蝸廬に臥する遑あらず。笑ふ吾が事に遇ひて沈默し難きを、胸中萬卷の書有るが爲なり。

詠史　　後藤松陰

天下紛々何日定　衆心畢竟屬寛仁　秦家結網誰者密
漏出龍顏隆準人

〔詠史〕天下紛々何の日か定まらん。衆心畢竟寛仁に屬す。秦家網を結ぶ誰か密なりと言ふ。漏出

〔隆準〕は隆準の人。

從軍作　藤田小四郎

憂時慨世負無用　嘯月吟花却有情　營外今朝人若問
將軍醉臥未全醒

〔從軍の作〕時を憂へ世を慨くは負に無用、月に嘯き花に吟ずる却つて情あり。營外今朝人若し問はば、將軍醉臥して未だ全く醒めずと。

偶成　藤田小四郎

何憂醜虜迫日東　三軍已會幾英雄　翻飜旌旗連營外
燦爛甲光帷幕中　破洋要伸弘安蹟　欲續文祿年間風
不關世俗呼狂賊　晃嶺神靈鑑寸忠

〔偶成〕何ぞ憂へん醜虜日東に迫るを、三軍已に會す幾英雄、翻飜たる旌旗營外に連り、燦爛たる甲光帷幕の中、洋を破りて伸べんと要す弘安の蹟、續かんと欲す文祿年間の風、關せず世俗の狂賊と呼ぶに。晃嶺の神靈寸忠を鑑す。

述懷　藤田小四郎

從來世事去悠悠　空使英豪存素謀　紅艷辭枝風裏散

〔衆心云々〕民心は畢竟するに寬仁の德ある人の下に歸すとなり。
〔隆準〕高き鼻柱。史、高祖紀「高祖爲人、隆準而龍顏」
〔藤田小四郎〕名は信、東湖の四男。慶應元年二月四日斬罪。年廿四。明治卅四年追贈從四位。
〔將軍〕自己をさす
〔翻飜〕ひるがへる
〔帷幕〕陣屋の義、
〔弘安文祿〕元寇と朝鮮征代。
〔素謀〕平素よりのはかりごと。
〔紅艷〕美しき花。

翠烟繞樹雨餘浮　忽醒京洛三春夢　更添爐邊萬里愁
今日何人護天子　攘夷鳳詔涙難收

〔述懐〕從來世事去って悠悠、空しく英豪をして素志を空しくせしむ。紅蕊枝を辭して風裏に散じ、翠烟樹を繞りて雨餘に浮ぶ。忽ち醒む京洛三春の夢、更に添ふ爐邊萬里の愁。今日何人か天子を護らん、攘夷の鳳詔涙收め難し、

自題文稿　　松林飯山

紛紛毀譽亂如絲　不是諛辭即妬辭　磨得一團方寸鏡
自家妍醜自家知

〔自ら文稿に題す〕紛紛たる毀譽亂れて絲の如し、是れ諛辭にあらずんば即ち妬辭、磨き得たり一團方寸の鏡、自家の妍醜自家知る、

漫吟　　小松帶刀

聞說中原虎狼橫　誰先慷慨唱勤王　腰間頻動蛟龍氣
欲向東天吐彩光

〔漫吟〕聞説く、中原虎狼横はる、誰か先づ慷慨勤王を唱ふる、腰間頻りに動く蛟龍の氣、東天に向つて彩光を吐かんと欲す。

〔翠烟〕霞靄。
〔雨餘〕雨あがり。
〔三春〕孟・仲・季の春の三月、又三度の春をも云ふ、
〔松林飯山〕名は漸、大村藩士詩人。慶應三年正月三日賊手に死す。年廿九。明治廿四年追贈從四位、
〔毀譽〕毀はそしる、譽はほむる也、褒貶。
〔諛辭〕おもねりへつらふ辭也、
〔妬辭〕そねみ嫉む辭也。
〔方寸鏡〕一寸四方の鏡。真心の義。
〔小松帶刀〕名清廉、鹿兒藩士。明治三年六月廿七日薨ず。
〔蛟龍〕腰間の二本の刀。豐城の劍に紫氣あり龍氣天に昇れりとの故事。

逸題　　江藤新平

欲掃胡塵盛本邦　一朝蹉跌臥幽窓　可憐半夜蕭々雨　殘夢猶迷鴨綠江

「逸題」胡塵を掃つて本邦を盛ならしめんと欲す。一朝蹉跌して幽窓に臥す。憐む可し半夜蕭々の雨。殘夢猶ほ迷ふ鴨綠江。

雜詠　　江藤新平

悠々天下是　何者與于余　百歳豈空逡　寸心猶未舒　臥思今世務　起讀古人書　慕彼楠中將　殺身護帝居

「雜詠」悠々天下是なり。何者か余に與かる。百歳豈空しく逡らんや。寸心猶ほ未だ舒のべず。臥して思ふ今世の務。起ちて讀む古人の書。慕ふ彼の楠中將。身を殺して帝居を護る。

萬延庚申五月五日　　江藤新平

亭々孤生樹　鬱々爲誰蓄　淙々幽溪水　何日到海門　老驥久伏櫪　雄志千里存　烈士吞老至　悲歌慷慨頻　孔丘拭面歎　楠公別兒言　今古如合符　寥寥哲人魂　浮雲覆白日　可憐楚屈原　屈原此日死　欲弔轉憂煩

〔江藤新平〕肥前佐賀の人。佐賀亂の

〔胡塵〕夷國の無禮をいふ。江藤新平西郷隆盛と共に征韓論を唱へて用ひられざりき。

〔蹉跌〕事志と違ふをいふ。

〔幽窓〕牢屋の義。

〔寸心〕心をいふ。

〔亭々〕樹木の高く聳ゆる貌。

〔淙々〕流水の貌。

〔驥〕驥馬、一日に千里を走るといふ。

〔櫪〕馬屋のねだ板。伏櫪馬空しく櫪に縛されて志を延べ得ぬ嘆也、轉じて烈士志を得ず世にあはずして空しく草莽に老ゆる悲しみをいふ。

〔符〕割符也。

「萬延庚申五月五日」亭々たる孤生の柏。鬱々として誰が爲にか茁る。淙々たり幽溪の水。何の日か海門に到らん、老驥久しく櫪に伏し。雄志千里に存す。烈士老の至るを看、悲歌慷慨頻りなり。孔丘面を拭ひて歎ず。楠公兒に別れて言ふ。今古符を合するが如し、寥々たり哲人の魂、浮雲白日を覆ふ、憐むべし楚の屈原。屈原此の日に死す。弔はんと欲して轉た憂煩す。

逸題　　勝　安　芳

芙蓉聳碧旻　對此須養眞　援援遂何事　時危思偉人

「逸題」芙蓉碧旻に聳ゆ。此に對して須らく眞を養ふべし、援援何事をか遂げん。時危くして偉人を思ふ、

偶成　　勝　安　芳

天地育生無偏私　日月照物自至公　千山花香長春節
萬木葉染高秋風　四明循環豈徒爾　世人誰解造化工
爭小利兮失大利　誇微功兮誤全功　嗚呼千歳一時實此際
興廢尤思全始終　微力難奈報今日　半生空濛主恩洪
辱知師友皆半朽　接面交朋意難通　癡迷獨倚大道迂
蹉跌常恐孤愚忠　酸辛知了世味美　眞味却在無味中

〔寥々〕しき狀。
〔哲人〕道理に明かなる人。
〔此日〕屈原五月五日汨羅に投じて死す、濁世に獨り澄みし屈平大道を說いて常に不遇なりし孔丘、古今哲人の寥々たる魂を明かにして餘りありといふべし。
〔勝安芳〕海舟と號す。德川幕府最後の政治家。西鄕隆盛と江戶城受授の事尤も世に傳ふ。明治卅二年一月薨ず、年七十七。
〔芙蓉〕富士山、
〔碧旻〕碧空、秋天をいふ、
〔偏私〕片よりて公平ならず、
〔徒爾〕いたづら事
〔造花〕自然。
〔尤思〕とりわけ甚

「偶成」天地生を育するに偏私無く、日月物を照す自ら至公、千山の花香長春の節、萬木葉は染む高秋の風。四時の循環豈往徊ならんや、世人誰か解す造化の工、小利を爭つて大利を失ひ、微功に誇つて全功を誤る。嗚呼千歳の一時實に此の際、興廢尤も思ふ始終を全うするを。微力奈んともし難し今日に報ゆるを、半生仕宦主恩洪し。辱知の師友皆半は何ん、面を接するの交肝意通じ難し、寰逢獨り憐む大道の逆。蹉跌常に逝る孤暴の中、艱辛して知る不世味の美なるを、眞味却つて無味の中に在り。

謁岳武穆之廟　　　副島種臣

嗚呼岳公何早死　若不早死國之祉　中原可復敵可殲
王室何嘗救如燬　小人誤國古來同　忠而得死不獨公
唯公之死尤慘憺　唯公之志尤大忠　帝鑑孔章靈在天
暮木南向非偶然　鼓勵天下忠義氣　後賢宜須則前賢
千載之下欽公名　自東海來敢告誠　維時十月天如拭
江山向我轉清明。

岳武穆之廟に謁す　嗚呼岳公何ぞ早く死する。若し早く死せざれば國の祉。中原復す可く敵殲すべし、王室何ぞ嘗に燬くが如きを救ふのみならんや。小人國を誤る古來同じ。忠にして死を得るは獨り公のみならず。唯公の死は尤も慘憺、唯公の志尤も大忠、帝鑑孔だ章なり靈は天に在り。

しく心に懸ける。
〔辱知〕知るを辱うすの意、知人に對し交際ある事にいふ謙辭。
〔副島種臣〕號蒼海、舊佐賀藩士、明治の功臣、伯爵、明治卅八年一月薨ず、年七十八。
〔兵武穆〕南宋の名將岳飛、高宗の忠臣、字は鵬擧湯陰の人、少くして氣節を負ひ、春秋傳、孫吳の兵法を好む。嘗て背に盡忠報國を以てす。秦檜の和議の犠牲とされ殺さる、年三十九。
〔祉〕幸ひ、岳飛は金軍を破る程成功しつゝありしが秦檜の弱腰にて屈辱的和議を結びし也
〔暮木南向〕抗州の

墓木南向するは偶然に非ず。鼓勵す天下忠義の氣。後賢宜しく須く前賢に則るべし。千載の下公の名を欽し、東海より來りて敢て哀を告ぐ、維時十月天は哭ふが如く、江山我に向って轉た清明なり。

有レ感　　副島種臣

金華松島奥東頭。自レ古風雲向レ北愁。日本中央碑字在。如今韎鞨屬二何州一。

「感有り」金華松島は奥の東頭、古より風雲北に向って愁ふ、日本の中央に碑字在り、如今韎鞨は何れの州にか屬す。

讀史　　中村正直

歷山壯歲赴二黃泉一。三十武尊飛二白鳥一。身後功名無二一存一。百齡亦不レ値二分秒一。

「史を讀む」歷山は壯歲にして黃泉に赴き。三十の武尊は白鳥飛ぶ。身後の功名一も存するなくんば。百齡亦分秒に値せず。

遣題　　前原一誠

汗馬鐵衣過二一春一。歸來欲レ脱二卸風塵一。一場殘夢曲肱睡。

飛の墓の木西南臨安に向く。
〔欽〕敬慕す。
〔維時〕明治九年作者支那を漫遊す。
〔金華〕陸前金華山
〔碑字在〕多賀城の碑、北宮城郡多賀城村にあり。
〔韎鞨〕北狄の名。古林の地、一說に黑龍江邊の地。
〔中村正直〕號敬宇江戸に生る、同人社を開き明六雜誌を出す。明治廿四年六月歿。年六十
〔武尊〕日本武尊、共に壯歲にして逝かれしかど事蹟永く史上に輝くを云ふ。
〔前原一誠〕長州藩士。兵部大輔となる。明治九年熊本

不レ夢二周公一夢二美人一

〔通解〕汗馬鐵衣一春を過ぐ、歸來風塵を脱却せんと欲す。一場の殘酔肱を曲げて睡れば。周公を夢みず美人を夢む。

亡友月照十七回忌作　西郷隆盛

相約投レ淵無二後先一　豈圖波上再生縁
回レ頭十有餘年夢　空隔二幽明一哭二墓前一

〔通解〕亡友月照十七回忌の作　相約して淵に投ず後先なし。豈圖らんや波上再生の縁。頭を回せば十有餘年の夢。空しく、幽明を隔てて墓前に哭す。

逸題　西郷隆盛

不レ養レ虎兮不レ養レ豺　亦是九州西一涯　七百年來舊知處
百二都城皆我儕　壓二倒海南三尺劍一　蹂二躪天下七寸鞋一
人若欲レ識二吾居處一　長住麑城千石街

〔通解〕虎を養はず豺を養はず。亦是れ九州西の一涯。七百年來舊知の處。百二の都城皆我が儕。海南を壓倒す三尺の劍。天下を蹂躪す七寸の鞋。人若し吾が居處を識らんと欲せば。長く住す麑城の千石街。

の神風連と叛を計り斬らる。

「周公」周の武王の弟。聖人。論語「甚しい哉吾が衰へたるや久し。吾復夢に周公を見ず」

「西郷隆盛」號南州、維新の功臣。西南役を起し明治十年九月廿四日城山に敗死。年五十一。廿二年特に賊名を除き追贈正三位。

「月照」名忍向、京都清水寺成就院の住僧、慷慨尊王家、幕吏に追はれ遁れ難くして南洲と海に投じて死す。安政五年也。南洲は救はれて蘇生せり。

「鹿兒城」鹿兒島城

「千石街」鹿兒島市中の町名。

丈夫畢竟豈計レ名。世難多年萬骨枯。廟堂風色幾變更。
年如二流水一去不レ返。人似二草木一爭二春榮一。邦家前路不レ容レ易。
三千餘萬奈二蒼生一。山堂夜半夢難レ結。千岳萬峰風雨聲。

「偶成」一穗の寒燈眼を照らして明かなり。沈思默坐限なき情。頭を回らせば知己人已に遠し。丈夫畢竟豈名を計らんや。世難多年萬骨枯れ、廟堂の風色幾變更。年は流水の如く去つて返らず、人は草木に似て春榮を爭ふ。邦家の前路容易ならず。三千餘萬蒼生を奈んせん。山堂夜半夢結び難し、千岳萬峰風雨の聲。

戊辰作　　木戸孝允

去歲千軍逼二我疆一。今朝孤劍入二他鄉一。浮生萬事變如レ夢。
一片依然男子腸。

「戊辰の作」去歲千軍我が疆に逼る。今朝孤劍他鄉に入る。浮生萬事變ずる事夢の如し。一片依然たり男兒の腸。

失題　　木戸孝允

才子不レ才愚不レ愚。少年才子不レ如レ愚。請見他日成功後。
才子不レ才愚不レ愚。

業に功あり。明治十年病歿。年四十四。
〔世難〕時世の艱難。
〔萬骨枯〕唐の曹松の詩「澤國江山入戰圖、生民何計樂樵蘇、憑君莫話封侯事、一將功成萬骨枯」
〔廟堂〕朝廷。
〔風色〕形勢。
〔春榮〕春季草木の欣然と榮ゆる。
〔蒼生〕人民。晉書「安石不出如天下蒼生何」
〔我疆〕長州藩軍に攻められしを云ふ
〔孤劍云々〕長州討幕軍となりしを云ふ。
〔浮生〕定りなき人生、萬事定めなき人生に於て、只男兒鐵石の心腸のみ固しとなり。

〔大意〕才子も才ならず愚も愚ならず。少年の才子は愚に如かず。請ふ見よ他日成功の後。才子も才ならず愚も愚ならず。

丙寅早春到浪華　木戸孝允

天道未知是邪非。陰雲四塞日光微。我君邸閣看難見。春雨和煙滿故衣。

〔丙寅早春浪華に到る〕天道未だ知らず是か非か。陰雲四塞日光微なり。我が君の邸閣看れども見え難し。春雨煙に和して故衣に滿つ。

潛行過天王山下　木戸孝允

勤王唱義已多歲。欲向何人說杞憂。此夜孤蓬無限恨。滿川風雨不勝秋。

〔潛行して天王山下を過ぐ〕勤王唱義已に多歲。何人に向つて杞憂を說かんと欲する。此の夜孤蓬無限の恨。滿川の風雨秋に勝へず。

下通州偶成　大久保利通

奉勅單航向北京。黑煙堆裏蹴波行。和成忽下通州水。閑臥蓬窓夢自平。

〔才子〕氣才ある人に如才なき人間をいふ。輕薄なる才子輩事を過つもの多しとなり。

〔天道〕天の道。幕府長州征伐の擧あるや大阪の毛利邸沒收せらる。

〔杞憂〕取越苦勞。無用の心配をいふ。杞國に人あり天の崩墜して身寄する所なきを憂へ寢食を廢する者ありきとの故事也。列子に出づ。

〔孤篷〕孤舟。篷は舟を蔽ふ苫也。

〔大久保利通〕號甲東。鹿兒島藩士。維新三傑の一實行的力量ある大政治家。明治十一年五

「通州に下り偶成」勅を奉じて單航北京に向ふ、黒煙堆裏波を蹴て行く、和成つて忽ち下る通州の水、閑に篷窓に臥して夢自ら平なり。

過厦門偶題　大久保利通

秋色長天望裏清　一灣緑遶厦門城　樹蟠石秀多風趣　造化奇工畫不成。

「厦門を過ぎて偶々題す」秋色長天望裏清し、一灣緑は遶る厦門城。樹蟠り石秀で、風趣多し、造化の奇工畫も成らず。

宿龜山陣營　大久保利通

大海波鳴月照營　誰知萬里遠征情　孤眠未結還家夢　遙聽中宵喇叭聲。

「龜山の陣營に宿す」大海波鳴つて月營を照す、誰か知らん萬里遠征の情。孤眠未だ還家の夢を結ばず、遙に聽く中宵喇叭の聲。

偶成　大久保利通

迂生未有尺寸功　叨辱朝恩禁闕中　早晩尋賢成夙志　深山何處訪英傑

月刺客に殺さる。年四十九。
〔通州〕都會、北京天津間に在り。
〔奉敕〕明治七年臺灣事件の葛藤生ぜし時利通敕命を奉じて支那に至り、敕命を全うして歸れり、この詩は歸途通州にて作る。
〔夢自平〕大任を果したる身なれば也。
〔厦門〕支那南方の港名。
〔龜山〕臺灣の地名。
〔迂生〕自己の謙辱
〔叨〕みだりに。無暗に、徒らに。
〔夙志〕かねてより懷ける大志なり。

意に滿ち涙は袂に滿つ、風は淅瀝たり雲は慘憺たり、何れの地にか君を置き又君を置かん。

石川丈山　　　　　長　三　洲

功名場裏早抽レ身。一臥二東山一經二幾年一。照レ影寵レ臨鴨川水。英雄回レ首即神仙。

「石川丈山　功名場裏早く身を抽く、一たび東山に臥して幾年を經、影を照して臨むを寵す鴨川の水。英雄首を回らせば即ち神仙。」

元日望二富山雪色一　　　　　長　三　洲

芙蓉天半雪。旭日從レ下照。紅光與二白雲一。雲表相晃耀。洒然霄壤間。此外一物無。我心正縹緲。恍遊太古初。

「元日富山の雪色を望む　芙蓉天半の雪。旭日下より照す。紅光白雲を與へ、雲表相晃耀す。洒然たり霄壤の間。此外に一物無し。我が心正に縹緲。恍として遊ぶ太古の初。

詠二日本刀一　　　　　大　鳥　圭　介

鍛冶研磨幾百回。精降三尺玉無レ埃。不レ疑日本刀鋭利。嘗試二盤根錯節一來。

「日本刀を詠ず　鍛冶研磨すること幾百回、精降三尺玉に埃無し、疑はず日本刀の鋭利なるを。嘗て盤根錯

〔長三洲〕儒者にして書家。南宗畫を善くす。維新の際功あり、木戸孝允に信任せらる。明治廿八年正五位に陞叙、三月十三日卒す。年六十三。

〔石川丈山〕家康の麾下大將の陣に際し軍令を犯し拔がけの功を表はし退けらる。洛東に隱棲す詩歌をよくし傍茶道に通ず。

〔照レ影云々〕「渡らいな鍋の小川は淺くとも老の波立つ影は見えけり」（丈山）以て鴨水に見立つ。お微しをも辭す。

〔英雄云々〕英雄たるもの神仙と違ふものに非ず一たび頭を回らせば既に神仙の境にあり也。

〔大鳥圭介〕幕臣にて、日清役の時

節を全うし來る。

芳山　　長岡護美

延元陵上草蕭々　萬木深山宮路遙
風輦不來春欲暮　落花滿地弔南朝

〔芳山〕延元陵上草蕭々、萬木深山宮路遙なり。風輦來らず春暮れんと欲す。落花地に滿ち南朝を弔ふ。

櫻花吟　　長岡護美

憶昔芳山濺碧血　賊軍勢强官軍屈
陪臣潢池敢弄兵　勤王將士多死節
星移物換五百年　春山巍然存古刹
我來瞻拜延元陵　悲憤數拭腰間鐵
喬木蓊鬱行宮荒　徧見櫻花依舊發
迷濛一片曖似雲　高低萬樹艷於雪
忠魂爭與花流芳　千載一時共高潔

〔櫻花吟〕憶ふ昔芳山碧血を濺ぐ、賊軍勢强くして官軍屈す。陪臣潢池敢て兵を弄ぶ、勤王の將士多く節に死す。星移り物換りて五百年、春山巍然として古刹を存す、我來つて瞻拜す延元陵、悲憤數拭ふ腰間の鐵。喬木蓊鬱として行宮荒る。徧見る櫻花舊に依つて發くを、迷濛一片雲よりも曖に。高

清國・朝鮮へ公使、男爵、明治四十四年六月薨ず。年七十九。

〔長岡護美〕勤王家子爵、公使。近衞公と東亞同文會を起し支那開發に盡力す。明治卅九年四月八日薨ず。年六十六。

〔欲〕將と同意。「[illegible]してゐる」の意。

〔潢池〕水の溜りし池、狭き地に喩ふ。

〔星移物換〕星霜流轉す。

〔古刹〕古き寺院。

〔瞻拜〕仰ぎ見て拜す。

〔蓊鬱〕草木の茂る貌。

〔行宮〕天子のかり宮。アンは宋音也。

〔迷濛〕模糊たる花のさだかならずぼんやり見える貌。

其薫樹雪よりも鮮かなり、忠魂香つて花と芳を流し、千載一時共に高潔。

飲某樓　　伊藤博文

豪氣堂々橫大空。日東誰使帝位隆。高樓傾盡三杯酒。天下英雄在眼中。

〔某樓に飲す〕豪氣堂々大空に橫たはる、日東誰か帝位をして隆ならしむる、高樓傾け盡す三杯の酒、天下の英雄眼中に在り。

新年作　　伊藤博文

日出扶桑東海隈。長風忽拂岳雲來。凌霄一萬三千尺。八朵芙蓉當面開。

〔新年の作〕日出の扶桑東海の隈、長風忽ち岳雲を拂つて來る、凌霄一萬三千尺、八朵の芙蓉當面して開く。

松下村塾　　伊藤博文

道德文章敍彝倫。精忠大節感明神。如今廊廟棟梁器。多是松門受教人。

〔松下村塾〕道德文章彝倫を敍す、精忠大節明神に感ず、如今廊廟棟梁の器は、多く是れ松門教を受

〔伊藤博文〕周防の人。明治の元勳。公爵。明治四十二年十月廿六日午前九時廿分哈爾賓にて鮮人安重根に刺殺せらる。年六十九。
〔在眼中〕眼の中に在る即ち我よく知るの意。作者の意氣見るべし。
〔扶桑〕東海にありといふ神木。轉じてその神木のある國。支那人、日本をさして扶桑といふ。日出づる國も亦日本の謂也。
〔凌霄〕中空高く聳ゆる貌。
〔松下村塾〕吉田松陰の私塾也。
〔彝倫〕人間常に守るべき道。
〔廊廟〕廊ある表御殿、政治を執る所、朝廷の意。

〔棟梁〕むなぎうつはり、重任を負ふ人に喩ふ。

〔客次〕旅は主日以上宿る事。

〔蹇蹇匪躬〕易「王臣蹇蹇匪躬之故」。蹇々は艱苦に堪へる忠節の貌、匪は非。

〔征衣〕旅の衣。

〔黑龍江〕滿洲シベリアの境界を流る。作者の意氣遠かに稜威を黑龍江の邊まで廣めんと欲せしと也。

〔馬齒〕自己の齡の謙稱。

〔火技〕鐵砲の技。

〔孜々〕勤むる貌。

〔鑒〕かゞみ。照らす。鑑と同じ。

〔山縣有朋〕山口藩士。明治の大政治家。兵制々定に尤功あり。大正十一年二月歿。年八十

……ふの人。

石狩客次　　伊藤博文

蹇蹇匪躬豈思歸。滿天風露濕征衣。秋宵石狩山頭夢。尙向黑龍江上飛。

「石狩の客次」蹇蹇匪躬豈に歸るを思はんや。滿天の風露征衣を濕す。秋宵石狩山頭の夢。尙黑龍江上に向つて飛ぶ。

長崎客中作　　伊藤博文

馬齒三十又加一。欲擲微軀效寸忠。火技海航功未就。練兵場裏已春風。

「長崎客中の作」馬齒三十又一を加ふ。微軀を擲つて寸忠を效さんと欲す。火技海航功未だ就らず。練兵場裏已に春風。

特謁伊勢大廟有作　　伊藤博文

臣是忠狂世勿嗤。奉君孜々豈知疲。虛心惟願神明鑒。披瀝丹誠不自欺。

「特に伊勢大廟に謁せんとして作有り」臣は是れ忠狂世嗤ふ勿れ。君に奉じ孜々豈に疲を知らんや。虛心惟

だ願ふ神明の鑒、丹誠を披瀝して自ら欺かず。

奉レ勅將レ發二滿洲一示二兩師團長一　山縣有朋

馬革裹レ屍元所レ期、出師未レ半豈容レ歸、如何天子召還急、臨レ別陣頭涙滿レ衣。

「勅を奉じて將に滿洲を發せんとし、兩師團長に示す」馬革屍を裹む元より期する所、出師未だ半ならず豈に歸を容れんや。如何ぞ天子の召還急なる、別に臨んで陣頭涙衣に滿つ。

三月次二葉氏韵一時奉天攻擊正酣　山縣有朋

對峙兩軍今若何、戰聲恰似二迅雷過一、奉天城外三更雪、百萬精兵渡二大河一。

「三月葉氏の韵に次す、時に奉天の攻擊正に酣なり」對峙の兩軍今若何ならん、戰聲恰も迅雷の過ぐるに似たり。奉天城外三更の雪、百萬の精兵大河を渡る。

中庸　元田永孚

勇力男兒斃二勇力一、文明才子醉二文明一、勸レ君須レ擇二中庸一去、天下萬機歸二一誠一。

「中庸」勇力の男兒は勇力に斃る。文明の才子は文明に醉ふ。君に勸む中庸を擇んで去れ。天下の萬

た。

〔馬革裹屍〕烈士戰場に死するをいふ。後漢書馬援傳「男兒要當死於邊野以馬革裹屍還葬耳」

〔對峙〕對立、峙は高くそばだつ。

〔迅雷〕激しき雷鳴。

〔三更〕深夜十二時。夜を五分し午後八時を初更とし二時間毎を以て數ふ。

〔元田永孚〕號東野、熊本の人。儒者。明治天皇の恩遇をうけ誠意啓沃渝らず、侍講、皇后宮御用係、明治二十三年一月廿二日薨。從二位男爵を賜ふ。年七十四。

〔中庸〕不偏を中、不易を庸といふ。物事過不及なき也。中庸「君子中庸小人反中庸」

［魄褫］魄はたましひ、褫ははぶなり。魂奪はれて戰慄する也。
［無色］常の顏色なきをいふ、怖るゝ狀。
［風伯］風の神。
［海若］海の神。
［盪］波浪荒れ狂ふの義。
［三人頭］元軍慘敗生きて還りし者僅かに三人也といふ。
［蒙塵］塵ありて天子外に逃るゝをいふ。茲は侮辱を受くるの義。
［妖氛］惡氣
［神不死］繪畫精神を寫して勝れたるをいふ。
［寸兵］小なる武器
［九皐］幾重にもなりし深きさは。小雅「鶴鳴九皐、聲聞于天」

驅二風伯一盪二海若一。　十萬僅餘三人頭　千艫粉飛無二一隻一。
萬古帝國塵豈蒙。　神功威武再光隆。　西邊不三復見二妖氛一
日月赫々海之東　古昔摸來神不レ死　披レ之腥風坐上起
寸兵不レ持高堂上　笑磨二文力一戮二古鬼一

蒙古來寇の圖、大日本弘安之四。維れ歳之夏辛巳の次。何物の猲狗ぞ敢て無禮なる。大國に向つて異志を逞しうせんと欲す。文永之役一たび鴟張。何ぞ螳螂覆轍に懲りず復た跳梁す。軍艦山の如く海畢に似たり。此の賊目中我國無し。天子の震怒火よりも熾く、將軍の一心鐵石の如し。書を斥け和を斥けて又使を斬る。其の來るや喜んで所何ぞ敢て懼れん。義を以て勞を伐ち逸勞を待つ、將軍定策胸臆に在り。知るや否や男兒の日本魂、豈宋儒の氣力無きに如けんや。馬を躍らし陣を衝きて敵披靡す。檣を倒し船を奪ひ進んで賊を斬る。蒙軍雷呼一日に除す。虜軍魄褫して背色無し。天威叱咤我が武を助く。風伯を驅使して海若を盪す。十萬僅かに餘す三人の頭。千艫粉飛して一隻無し。萬古の帝國塵を豈蒙らんや。神功威武再び光隆す。西邊復た妖氛を見ず。日月赫々たり海之東。古昔摸し來つて神死せず。之を披けば腥風坐上に起る。寸兵持せず高堂の上。笑つて文力を磨いて古鬼を戮せん。

誠　實十二德之一首　元田永孚

九皐鶴唳聞二于天一　陽氣發生深雪中　天下曾無レ不レ成理
至誠只在レ反二吾躬一

「春初陣中の作」春は違部に入りて未だ城に入らず。砲烟日々四邊に橫はる。假令狂浪定め難しと雖も、唯だ與す孤臣一片の誠に。

守城中偶作　　谷　干　城

久在圍城身已臞　相看相笑撫髭鬢　花開花落不關得　唯愛盆花一兩株

「守城中の偶作」久しく圍城に在りて身已に臞す。相看て相笑ひて髭鬢を撫す。花開き花落ちて關し得ず、唯だ愛す盆花一兩株を。

拔刀隊七回忌應需作　　谷　干　城

兩陣輸贏猶未分　千砲萬銃日紛々　刀光一隊勢如電　擊破田原坂上雲

「拔刀隊の七回忌に需に應じて作る」兩陣の輸贏猶ほ未だ分れず、千砲萬銃日に紛々。刀光一隊勢電の如し、擊破す田原坂上の雲。

惜西郷翁　　谷　干　城

枉抗王師不顧身　多年功績委灰塵　憐君末路違初志　秋雨秋風恨更新

「圍城」包圍せられし城。熊本城西郷軍に圍まれしをいふ。
「臞」痩す。
「髭鬢」ひげ。髭は口ひげ。鬢は顎ひげ也。
「關」關心する也。戰時小閑なく自然の變遷にも目をとむる遑なし、只城中一二の盆栽を眺め、せめて風流の情を遣るとなり。
「輸贏」勝負。輸はまける。贏はかつ。
「刀光一隊」拔刀隊の勇士をいふ。
「田原坂」熊本に在り、西南役の激戰地。
「枉」降盛意志に非ず奨められて止むなく賊軍となりしを意味す。

興亡今古不可期　取快一時是男兒　結髪起身奴隷伍
隻手折盡扶桑枝　餘波直及鴨綠水　決潰八道東海歸
飛花撲杯芳山宴　想見戰血紅陸離　豈圖一旦將星落
北風吹送班軍旗　群喙嘖々放譏議　或曰黷武或兒嬉
或曰漫被豎兒賺　末勢不振國本衰　嗚呼燕雀何知鴻鵠志
有似蠡殼測天池　英雄襟懷元落落　不因得喪爲喜悲
偶歷舊墟弔鬼雄　寧將涕淚落殘碑　啞然大笑臨渤海
水天一碧鵬雲飛

〔譯〕懷古　興亡は今古期すべからず、快を一時に取る是れ男兒。結髪身を奴隷の伍より起して、隻手折り盡す扶桑の枝。餘波直に及ぶ鴨綠の水、八道を決潰して東海に歸せしむ。飛花杯を撲つ芳山の宴、想ひ見る戰血の紅陸離たるを。豈圖らむや一旦將星落ち、北風吹き送る班軍の旗、群喙嘖々として譏を放つ、或は黷武と曰ひ或は兒嬉と、或は曰ふ漫に豎兒に賺されと、末勢振はず國本衰ふと。嗚呼燕雀何ぞ知らん鴻鵠の志を。蠡殼の天池を測るに似たる有り。英雄の襟懷は元落落。得喪に因つて喜悲を爲さず。偶舊墟を歷て鬼雄を弔ふ。寧ぞ涕淚を將つて殘碑を霑さんや。啞然大笑して渤海に臨めば。水天一碧鵬雲飛ぶ。

秀吉本陣を置けり。
〔結髪〕元服。男廿女十五を一人前とし、幼年の髪をやめ頂上に結ぶ。
〔伍〕五人一組の制仲間の義。
〔扶桑〕支那にて東海にある神木をいふ。日本の一名。
〔八道〕朝鮮。現在は十三道あり。
〔芳山宴〕文祿三年二月芳野に於ける秀吉の花見。
〔陸離〕輝き亂るゝ
〔將星落〕大將軍の死。孔明の故事。
〔班軍〕還る軍隊。
〔黷武〕武德を汚す
〔豎兒〕[illegible]。沈惟敬等をさす。
〔末勢不振〕漢書「彊弩之末力不能入魯縞」終の兵威振はざる事。
〔蠡殼〕蛤の殼、漢書「以蠡測海」と。
〔落々〕廣大なる貌

寄家兄言志　　廣瀬武夫

勤王大義太分明　報國丹心期七生　傳家一賦遺風在　誓擧名聲弟與兄

「家兄に寄せて志を言ふ」勤王の大義太だ分明、報國の丹心七生を期す。傳家一賦遺風在り、誓つて名聲を擧げ、弟と兄と。

指揮報國丸上旅順口閉塞途　　廣瀬武夫

丹心報國　一死何辭　與船瘞骨　旅順之隈

「報國丸を指揮し旅順口閉塞の途に上る」丹心國に報ゆ。一死何ぞ辭せん。船と骨を瘞む、旅順の隈。

指揮福井丸再上旅順口閉塞途　　廣瀬武夫

七生報國　一死心堅　再期成功　含笑上船

「福井丸を指揮して再び旅順口閉塞の途に上る」七生國に報ゆ、一死心堅し。再び成功を期し、笑を含んで船に上る。

金州城作　　乃木希典

山川草木轉荒涼。十里風腥新戰場　征馬不前人不語。金州城外立斜陽

〔廣瀬武夫〕廣瀬氏もと菅沼氏に出で世々岡藩に仕ふ、海軍兵學校に入り、中佐に累進。征清の役功あり。後命をうけ露都に駐劄す。明治卅七年二月、わが水師旅順を攻むるや拔古未曾有の壯擧旅順口閉塞を再度決行し、戰沒す。年卅七。天下英風を傳へて軍神と稱す。

〔乃木希典〕山口藩士、日露役旅順を陷落す。後學習院長となる。大正元年九月明治天皇に

「金州城の作」山川草木轉た荒涼。十里風腥し新戰場。征馬前まず人語らず。金州城外斜陽に立つ。

殉ず。擧國嘆稱軍神となす。年六十四。
〔轉〕そゞろに、何となく。
〔斜陽〕夕づく日。

逸題　乃木希典

崚嶒富岳聳千秋。赫灼朝暉照八洲。休説區區風物美。地靈人傑是神州。

「逸題」崚嶒たる富岳千秋に聳え、赫灼たる朝暉八洲を照らす。説くを休めよ區々たる風物の美、地靈人傑是れ神州。

〔崚嶒〕山の高く險しき也。
〔朝暉〕暉は日光也。
〔區々〕つまらぬ小さきもの丶義。

逸題　乃木希典

爾靈山險豈難攀。男子功名在克艱。鐵血覆山山形改。萬人齊仰爾靈山。

「逸題」爾靈山險なりとも豈に攀ぢ難からんや。男子の功名は艱に克つに在り。鐵血山を覆うて山形改まる、萬人齊しく仰ぐ爾靈山。

〔爾靈山〕二百三高地の別名。
〔鐵血〕兵器と血潮

逸題　乃木希典

皇師百萬征強虜。野戰攻城屍作山。愧我何顔看父老。凱歌今日幾人還。

「逸題」皇師百萬強虜を征す、野戰攻城屍山を作す。愧づ我何の顔あつて父老を看ん、凱歌今日幾人か還る。

〔皇師〕天皇の軍也
〔強虜〕強勇なるえびす、露國の義。
〔何顔云々〕散兵の父老は子弟の戰死を悲むならんを、

かり得る。

逸題　　乃木希典

東西南北幾山河　春夏秋冬月又花　征戰歲餘人馬老　壯心尚是不思家

〔逸題〕東西南北幾山河、春夏秋冬月又花。征戰歲餘人馬老い、壯心尚是れ家を思はず。

西伯利亞鐵道詠之。　　乃木希典

千里平原無障碍　大兵可用可行軍　英雄曾是功名地　唯見綿羊野馬群

西伯利亞を詠ず　千里の平原障碍無し　大兵用ふ可し軍を行るべし、英雄曾て是れ功名の地。唯見る綿羊野馬の群。

逸題　　乃木希典

肥馬大刀尚未酬　皇恩空浴幾春秋　斗甑傾盡醉餘夢　踏破支那四百州

〔逸題〕肥馬大刀未だ酬いず、皇恩空しく浴す幾春秋、斗甑傾け盡す醉餘の夢、踏破す支那四百州。

磯濱望洋樓　　三島中洲

言凱旋將軍として何の顏ありて父老に會ふを得んやと也。

〔千里平原〕云々、滿洲の平原見はるかす平茫々大軍を用ふべきの地。古來幾多の英雄茲に功を建てしが、今は只寶衣の馬車の影を見るのみと。

〔斗甑〕一斗入のひさご也、陣餘四百州を蹂躪する夢を見しと也。

勤王諸家詩歌集　卷下

歌集の部

〔神日本磐余彦尊〕人皇第一代、神武天皇の御名なり。
〔密旨を奉じ云々〕日本書紀に、先撃ニ八十梟帥於國見丘一云々、既而餘黨猶繁、其情難測、乃顧勅ニ道臣命一、汝宜帥ニ大來目部一、作ニ大室於忍坂邑一、盛設ニ宴饗一、誘レ虜而取之、とあり。
〔忍坂〕大和國城上郡忍坂村なり。
〔道臣命〕大伴氏の遠祖なり。
〔みつみつし〕久米の枕詞也、久米は皇軍衆を云ふ。
〔頭椎石椎〕上代の劍名なり。
〔弟橘媛〕日本武尊の后、穗積氏忍山宿禰の女也。

神日本磐余彦尊の密旨を奉じ、室を忍坂に掘り、我が猛卒を選びて虜と雑居ゑ、陰かに期りて曰く、酒酣なる後に吾れ則ち起ちて歌はむ、汝等吾が歌の聲を聞きて、則ち一時に虜を刺せとて、已にして坐定りて酒行る。虜、我が陰謀ある事を知らず、情の任に酔ひぬ。即ち起ちて歌ひける歌、　道　臣　命

忍坂の大室屋に、人多に入り居りとも、人多に來入り居りとも、みつみつし久米の子等が、頭椎い石椎い持ち、撃ちてし止まむ。

日本武尊に代りて海に入りなむとて詠める　弟　橘　媛

さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも

忍熊王、逃れて入る所無し、則ち五十狹茅宿禰と共に瀬田の濟に沈みて死せむる時に詠める　武内宿禰

淡海の海瀬田の濟に潛く鳥目にし見えねば息滯ろしも

壬申の亂平定の後よめる　大伴御行

大君は神にし坐せばあか駒の匍匐ふ田井を都となしつ

渚の院にて櫻を見て詠める　在原業平朝臣

世の中に絶えて櫻のなかりせば春のこゝろは長閑けからまし

讀人知らず

思ふこと言はで唯にぞ已みぬべき我れと等しき人し無ければ

やま吹も思ふ心のあればこそ言はぬ色には咲きはじめけめ

中納言行平の家に人々きうで來て遊びけるに、藤の花のしなひ三尺餘なるを瓶にさして、其れを題にて歌よみけるに、藤氏の榮華の盛りなる事を思ひて詠み侍りける

咲く花の陰に隱るゝ人を多み有りしに增さる藤の色かも

淡海の海云々〔近江の海の瀬田の渡に息が詰りしに忍熊王は水鳥の如く水中に潜入せり目に見えなば生捕にせむ物を、目に見えぬ故に傷ふ術なし、口惜しき事かなとの意也。

大伴御行〔右大臣大[illegible]長德の子、壬申の亂の功臣也。

大君は云々〔天皇は神に坐す故に、駒も足を没する程の水田を、人家の備比せる都と化せられたりと也。

在原業平朝臣〔阿保親王の第五子なり。當時藤原氏の専横を慨し、惟喬親王を奉じて皇統を挽回せむとせりしも志を得ず、元慶四年卒す、年五十六

〔菅原道眞〕參議是善の子也。昌泰二年右大臣に任じ藤氏の專橫を抑壓する故を以て讒に遇ひ太宰權帥に貶せられ、三年二月貶所に薨ず、年五十九。
〔源頼政〕平相國清盛の兇暴を惡み、之を亡さむとして兵を起し、敗れて宇治平等院に自殺す。
〔文貞公〕贈太政大臣藤原師賢卿なり後醍醐天皇、高時を誅せむと圖る、師賢首として之に預れり、遂に捕へられて下總に流され、元弘二年薨ず年三十二。
〔宗良親王〕後醍醐天皇の皇子也。長慶帝の御代に新葉集を撰び、勅撰に準せらる。

筑紫に流されける時都を出づとて　　菅原道眞

君が住む宿の梢を往く〳〵と隱るゝまでにかへり見しはや

寄月述懷　　源頼政

天の原朝ゆく月のいたづらによにあまさるゝ心地こそすれ

祝のこゝろを人々よみ侍りしに

君が代を何に譬へむと思へども果なき物の有らばこそ有らめ

下總國にて病重くなりける時　　文貞公

死出の山越えむも知らで都人なほさりともと我れや待つらむ

後醍醐天皇かくれさせ給ひし頃　　宗良親王

おくれじと思ひし道も甲斐なきは此の世の外のみ芳野の山

富士を詠める　　源光圀

立ち竝ぶ山こそなけれ秋津洲わが日の本の富士の高嶺に

不二の嶺を詠める　　阿闍梨契沖

ひさ方の天の御柱神代より立てるやいづこ不二の芝やま

五十鈴宮　　　　荷田春滿

大昔をさきくと祝ふさく鈴の五十鈴の宮を誰か仰がぬ

住吉神

よろづ代に松の千とせの色添へて昔をぞ守るすみよしの神

聖代

龜の尾の山のいはねもさながらに眞砂と見なす御代は此の御代

折にふれて

ますらをも學の古道あととめむ攻ぶ心の駒をしるべに

衣

紫もあけの衣もはえはあれど清き神路の山藍の袖

弓

あづさゆみ眞弓もあれどつき弓のいさをしき名の神世しぞ思ふ

述懷

汲み干さば千尋も淺しとことはに澄むを心の山の井の水

〔荷田春滿〕本姓は羽倉氏、世々洛南稻荷山の祠官たり、從三位信詮信[illegible]の子、齋と稱し、また東[illegible]居と云ふ。夙に社務を弟信名に讓り、大に皇學を唱へ、復古を以て自ら任とす。將軍吉宗、其名を聞きて之を召す。固辭して受けず。尋で國學校を京都に建てむと欲し、其地を東山に卜するに及び病に罹り、果さずして歿す、時に元文元年七月二日なり、享年六十九。明治十六年二月正四位を贈らる。春滿嗣なく、姪在滿をして家學を繼がしむ。

花の歌よみける中に　　賀茂眞淵

うらうらと長閑けき春の心より匂ひ出でたる山ざくら花

もろこしの人に見せばや三芳野の吉野の山のやまざくらばな

富士

駿河なる不二の高根はいかづちの音する雲の上にこそ見れ

ふじの嶺の麓を出でて行く雲は足柄山のみねにかゝれり

詠箱根山歌並短歌

あしがりの箱根の山は。大名もち其の大神の。八尺瓊を藏め給ふと。日本なす少彦名の。御神やも造りたまひし。千早ぶる神のみさかの。しら雲を別けて登れば。雲の上に秀でたる嶺こそ。玉くしげ箱形なせれ。立ち竝ぶ二つの峯は。蓋とすら懸子とすらも。とりよろひ開き立ち竝み。

反歌

萬代に名にし負ひくる箱根山ふたごの山ぞ。神さびにける。

ひさかたの天津御寶をさむとか宮ねの山は作らせりけむ

賀茂眞淵　通稱岡部衛士、初め三四郎と稱す、眞淵は其の號、遠州加茂社の祠官、定信縣主の子なり。京師に上りて荷田春滿の門に遊び、學成りて江都に教授す、已にして名聲籍甚、皇學是に於て海内に振興し、京王の學士、多く其の門に輻湊せり。眞淵曰く、契沖は皇學を究開せしも未だ蘊奥を終へずして死し、我師春滿は蘊蓄せしも、未だ刈穫せずして逝けりと、蓋し刈穫の力自ら任ずる也。明和六年十月三十日歿す、年七十三。明治十六年二月、正四位を贈られ、卅八年贈從三位に叙せらる。

「本居宣長」姓は平氏、本居縣判官武秀十世の孫也。享保十五年六月伊勢國松阪に生る、始め武川法眼の門に學びて醫術を修め、また賀茂眞淵に皇學を受け、古事記傳四十卷を著して學風一世を風靡し其名海内に震ふ。享和元年九月廿九日歿す、年七十二。明治十六年二月、正四位を贈られ、四十二年更に贈正三位に敍せらる。
「高光る」日の御子、「やすみしゝ」安らかに統治し給ふ意の詞なり。「とこし國」長久なる國を云ふ。「くなたふれ」曲狂の義、奸賊と云ふ程の意に云へるなり。

大御世ほがひの歌　　　　　　本居宣長

高ひかる日の御子の、やすみしゝ我が大君、よろづの世にいやとこしくに、おく山の薬廣くま檜。しが葉の茂りいまし。しが枝の榮えいませと、をろがみてあやに畏こみ、ことほぎまつる。

皇大神宮にまうでける時

神からや斯くし宜しき。さく〳〵しろ五十鈴の宮は。山川のさやけき宮に、木(こ)だちの麗はしき宮、黄金(こがね)のかゞやく宮の、玉垣の八重にもとほれる瑞宮(みつみや)の此の大宮し。あやによろしも。

題知らず

日の神の本つ御國と皇國は百八十國の秀國おや國
さし出づる此の日の本の光より高麗唐土(こまもろこし)も春を知るらむ

折々よみける歌の中に

大君の御言おそれぬくなたふれ醜の泰時しこの尊氏
思ほさぬ隱岐のいでまし聞く時は賤の男われも髮逆立つを

〔高山彥九郎〕名は正之、字を仲繩と云ふ。上野國新田郡細谷村の人也。諸國を歷遊して勤王の思想を鼓舞せしが、意を當世に得ず、寛政五年六月廿七日屠腹して死す、時に年四十七。明治十一年正四位を贈らる。〔綠毛龜云々〕正之嘗て京に在り鴨河の畔を過ぎ、綠毛龜を見る。即ち之を兒童に購ひて伏原正二位に謁す。正二位祥瑞と爲し天覽に供ふ。叡覽これを嘉賞し給ひしと云ふ。

高山彥九郎

題知らず

我れをわれと知しらすかやすめらぎの玉の御聲のかかる嬉しさ

東山に登りて

東山のぼりて見れば哀れなりたなひら程の大宮處

綠毛龜を詠める

君が代の榮ゆく色や綠なる龜の尾長き春ぞうれしき

天が下文にをさまる君が代と龜も綠の長き毛衣

苫屋の透間より雪の洩れ入りて讀居たりける書籍に降りかかりたりけるに

降る雪に古き昔の跡とめて洩れ入る喪屋に居るぞ悲しき

三月五日の夜去年の春を思うて

咲く花を見るに心も思えで涙に曇る春の夜の雨

五月廿八日江戸へ遣はすとて

世の中を慨むにゝも荒野らの駒にたぐへて見るも恐ろし

自殺の時、寛政五年(癸丑)六月二十七日なり。○蒲生君平(名は秀實、修靜菴と號す。通稱は伊三郎、君平は其の字なり。下野國宇都宮の人本姓は福田氏、少き時、先世は蒲生氏郷の庶出なる事を傳へ聞き、自ら氏を蒲生と改む。尊王の志厚く、山陵志、職官志等を著せり。文化十年七月五日江戸に歿す、年四十六。明治十四年五月、天皇其の忠節を賞して正四位を賜へり。○皇學叢書第五卷山陵志解題參照)

同じ夜、祖父の君の夢に見えさせ給ひければ

今ぞ知る深き心は海原の底も及ばぬ惠みなりけり

題しらず

天足らし國たらしたる大御代に滿ちたらしたる月の影かも

里なれて啼くや鶯我れはもと深山の奥に住みて居るはや

すみて居る深き心を山の井の淺くや思ふ人の世の中

人の世の憂き事知れる神を思へ我も山路に入りぬべらなり

踏み分けて入りぬる山の奥までも照る日の本の御蔭なるらむ

自殺の時詠める

まつざきの櫻の長に開きて朝心すくしの嵐のあらまし

叡山に登りて詠める　　　　蒲生君平

比叡の山見おろす方ぞあはれなる今日こゝの重の數し足らねば

那須野を過ぎて

世の中に我は何をか那須の原なすわざもなく年や經ぬらむ

〔武藏あぶみ〕武藏國にて造れる鐙なり。
〔遠つ祖〕蒲生氏郷を云ふ。
〔伴信友〕石州小濱藩の國學者なり。京都に祇役して善く其職を盡し、増俸百五十石に及べり。其の子弟を教ふるや頗る懇篤にして、尊王愛國を說きて諄々倦まず。皇室に關する著書には、長等山風、中外經緯傳、殘櫻記等あり。弘化三年十月歿す、年七十四。明治廿四年十二月、正四位を贈らる。

江戸へ行く人に贈る

いさましやいづこと問へば武藏あぶみ朝霧かけて乘出づるかも

菊川の驛にて

君が爲め昔も斯くと菊川の浪立つ風に袖ぞ濡れぬる

勸學

君の爲め國の爲めとし思はずは雪も螢もなにか集めむ

蒲生氏郷の墓に詣で、

遠つ祖の身によろひたる緋縅の面影うかぶ木々のもみぢ葉

白川の關にて

道奥はまたも越えなむ契りあらば限りを何時と白川の關

述懷　伴信友

事しあらば君が御楯と成りぬべき身を徒らに朽たし果てめや

辭世

いまはには何をか云はむ世の常に言ひし言葉ぞ我が心なる

幽居中に詠める　渡邊崋山

罪繩にかゝる身よりも子を思ふ親の心を解くよしもがな

題知らず

あづさゆみ矢たけ心の武夫も親にひかれて迷ふ死出かな

こり積みて世を黄蘆のけむたきは己が焚き添ふ薪なりけり

曇りなき御代の恵みは海山も限なく照らす秋の夜の月

題知らず　渡邊暢

はや咲けば早手折らるゝ梅の花きよき心を仇に知らせて

神威隊にて天地の神を朝毎に拜みて　渡邊貞菁

天つ日の御影を掩ふ八重むすみ吹き攘ふべき神風もがな

元治元年三月の十日餘り九日頃、二人の親を家に置きて軍の庭に出で立たむと思ひ決めつゝ、

垂乳根の二人の親に先立つは大君の爲め我が國の爲め

惜しめども散り行く花は敷島の大和心の人に見よとか

〔渡邊崋山〕名は定靜、字は子安、別に伯登と稱す。通稱は登、崋山は其の號なり。また寓繪堂、全樂堂、昨非居士等の號あり。田原侯に仕へて徵祿を食む。天保十年書を著して幕政を譏評するに坐して幽閉せられ、藩侯に累を及ぼさむを以て自殺す。年四十九。時に天保十二年十月十一日なり。

〔罪繩に云々〕かゝる身云々は、罪目に掛かる意より、罪かる身の意に云ひ懸ける也。

〔天つ日の云々〕天津日を大君に擬へ八重雲を江戸幕府に準へて詠めるなり。

をりにふれたる　　平田篤胤

〔平田篤胤〕通稱は大角、氣吹廼舍と號す。安永五年出羽國久保田の城下に生る。父は大和田清兵衞祚胤、佐竹家の藩士なり。享和元年、本居宣長の著書を讀みて奮然皇學に志し、其の歿後の門人となりて研鑽攻究し、遂に名を一世に轟すに至れり。天保十四年閏九月歿す。年六十八。教を受くる者海内に遍く、幕末に於ける諸國勤王の志士の主動者は、多く其の門より出でたり。明治十六年二月、正四位を贈らる。世に荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤の四者を讃へ、國學四大人と稱す。

人はよし漢に衝くとも我が杖は大和島根に立てむとぞ思ふ

雲となりあるは雨ともふりしきて神代の道に身をや盡さむ

青海原潮の八百重の八十國につぎて廣めよ此の正道を

生れ出でし身は低けれど學びには千萬人の上に立たなむ

芦原のひとりをのこの一人ごと曾富騰より外知る人もなし

四方やもの刺しくる風に色かへで高嶺に立てる一つ松あはれ

紙を食ふ獸が蠹の皮ごろも着たるは如何でつゝみ果つべき

江戸を逐はれける頃よめる

武藏野に捨てられぬとも久延彦のまた秋の田に立ち榮えまし

題知らず

われ乍ら轉ばしかねつ我が心神の据ゑてし千人引岩かも

病あつしかりける時

思ふこと一つも神につとめ終へず今日や罷るかあたら此の世を

折にふれて　　梁川孟緯

千早振る神の御國の礒嵐吹くとも知らで寄せる夷ら

述懷

手弱女も國のためをば思ふなりなど益荒雄のあたに過さむ

獄中にて日下部信政に答ふ

漕ぎ出づる船の行方はしら浪の何處の浦に春や來ぬらむ

題しらず　　柳瀨義好

たましひを此處に留めて日の本の猛き心を四方に示さむ

東禪寺の夷館へ討入る時胴卷に書付し歌　　山崎信義

世の中の憂きを忘れて明日からは死出の山路の花を眺めむ

題しらず　　山崎八峯

西の空東の雲と隔てても一つ袂の時雨なりけり

赤心報國　　山崎久繼

大君の御爲とならば命そは何ぞは惜しむ賤が身なれど

〔千早振る云々〕初句は、神の枕詞なり。我が皇國は古來外寇に汚されし事なし、乃ち外夷攻め來れば神風吹起りて忽ち之を全滅せしむる神國なるを。知らで寄せ來れる洋夷等の愚かさよとの意也。

〔山崎信義〕水戸藩の勤王家なり、洋夷の傲慢無禮を極むるを憤り、文久元年六月廿八日拂曉、同志有賀半彌、高畠房正、木鉉正治等と共に、江戸品川東禪寺の英館を襲撃す。歌は乃ち其時の作也。

〔大君の云々〕三四の句は生命をも何ぞ惜しまむやとの意なり。

〔藤田一正〕水藩の儒者なり。通稱次郎左衛門、字は子定、幽谷と號す。藤田東湖の父なり。文政九年歿、年五十三。明治廿四年贈正四位に叙す。

〔藤田彪〕藤田東湖なり。父一正の遺訓に遵ひて烈公を補佐し、頗る王事に盡せり。安政二年江戸大地震の際烈公を救助して自らは梁に壓せられて死す、享年五十。明治廿二年正四位を贈らる。

〔藤田信〕通稱小四郎、東湖の第四子なり。武田耕雲斎と共に兵を擧げ、尊攘に盡瘁す。慶應元年敦賀にして捕はれ斬に處せらる、年廿四。贈從四位に叙せらる。

題知らず　　藤田一正

あづさ弓すゑ振り起し君が爲め今を昔に引きかへさなむ

弘化元年五月五日の日、中納言の君の御供に仕へて、江戸の小石川なる館に着きしに、其翌日、君の駒込なる館に潜まり給ふべきの仰を蒙り給ひ、彪も戸田忠敬等と共に罪を被りて、乃ち小石川なる假の宿に籠りぬべき仰畏みて　　藤田彪

明らけき君に類へて徒らに世を思ひこし身ぞおほけなき

捨てばやと思ひし身さへ長らへて君を常磐に祈る世ぞ憂き

折にふれて

かきくらすあめりか人に天つ日の輝く國の手ぶり見せばや

八千矛の一すぢごとに許多の夷の國首を貫きてまし

上書を遺し奉りて詠める　　藤田信

かねてより思ひ染めにし赤心を今日大君に奏す嬉しさ

梅のはな風に果敢なく散りぬとも香は九重の小簾にとゞめむ

思ひを述ぶる歌　佐久間象山

日の本の大和の國は。掛けまくも奇に異こき。神漏岐の神の御代より。
高知らす天津日嗣を。あめつちと月日と共に。とほながく萬づ千秋に。
すめらぎの敷きます國と。立ち向ふ夷な徒を。掃き清めむけ平らげて。
青雲のたなびく極み。白雲のむかふす限り。國ばらは馬立てつらね。
海原は艪ふて續け。あめの下國つちからを。望月のたゝはしてむと。
玉の緒も身をも思はず。只管らに盡し來つるを。禍津日の神の仕業か。
往く道の繁手も有らで。道なかに躓きしつゝ。罪をさへ負でしあれど。
石こそは轉びもすめれ。草こそは靡きもすめれ。天皇の御門の爲めと。
益荒雄の振り起してし。眞ごゝろは命の限り。石のごとえやは轉ばむ。
草のごとえやは靡かむ。あめつちの大御神たち。信濃の。大國御靈。
時じくに天つ御空ゆ。天翔り見そなはしませ。あかき心を。

反歌

すめろきの御門かしこみいつくしと思ふこゝろは神ぞ知るらむ

〔佐久間象山〕通稱は啓之助、後に修理と改む。信濃松代なる象山の麓に生る、依て象山と號す。藩主眞田侯に仕ふ、後ち江戸に出で、米使の驕傲無禮なるを憤慨し、以て國防の事に盡瘁す。然れども開國論者にして攘夷説を非とせり。嘉永六年吉田松陰の事に坐して獄に投ぜられしも、後に宥されて松代に歸れり。元治元年京都に出で、山階親王に建白する所あらむとす。途中木屋坊を過ぐる時刺客の爲めに殺さる。時に年五十四。明治二十二年正四位を贈らる。

〔我が思ひ云々〕三句、そよとだにとは、其れよ其事也との意を、荻の葉の戦ぐ音に寄せて云ひ掛けたるにて、我が意を是也とし共鳴する者あらば嬉しからむとの意なり。
〔防人〕崎守の義にて海邊の要塞を守る兵を云ふ。
〔いたづき〕辛勞の意なり。
〔吉田寅次郎〕吉田松陰なり。象山の門下なり。
〔斯くとしも云々〕初二の句は、暗に君が謀を得て捕はるゝ決果を見むとは知らずして、との意也。
〔手力もがも〕力が欲しとの意なり。

感情歌百首の中に

我が思ひ荻の下葉のそよとだに言ふ人あらば嬉しからまし

みちのくの外なる蝦夷のそとを漕ぐ舟より遠く物をこそ思へ

嘉永元年元日に

蝦夷島や千島の外に舟浮けて告し許さば沖魚つりてむ

船よせし四方の夷も今日こそは我が日の本の春を祝はめ

「都人不識警人苦」といふ事を

東の間も守ゆるべぬ防人のいたづき知るや都歌人

吉田寅次郎へ寄す

斯くとしも知らでや去年の此頃は君を空ゆく田鶴に喩へし

題しらず

高知るや天の岩門のとざしをも開くばかりの手力もがも

辭世　　佐久間美清

今は早ことの葉草も夜の雪と消え行く身とは成りにけるかな

水戶前中納言（德川齊昭）より返書のはしに『今更に何をか言はむ武藏野の萱がなかのあさましの身は』とあるに答へける　　島津齊彬

武藏野に繁る萱の白露を借ならずして誰か拂はむ

題知らず

かち路ゆく供人いかに寒からむ輿の中さへ冴ゆる嵐に

折にふれて

武士と心あはせて秋津洲の國を動かず共にをさめむ

四海波靜

異國の船の便りも跡絶えて波しづかなる四方の海原

題知らず　　島津久光

天つ日の照らさむ限り八隅しゝ我が大君の御代は動かじ

述懷　　島村衞吉

亂れ合ふ千草が中に咲く花も時は違へず散らむとぞ思ふ

［島津齊彬］（一）薩摩守と稱す。大隅守兼宰相從三位齊興の男、島津氏廿八世の主也。安政五年七月歿す。年五十、明治廿四年贈一位に叙す。

［島津久光］齊彬公の弟也。齊彬歿前久光を招きて曰く余嚮に[illegible]公武合體の事を周旋し海防を嚴にし皇威を輝さん事を期せり、汝能く我が志を承繼せよと。久光乃ち其意を體し、王事に盡瘁する所あり、明治二年從三位參議に任じ、七年左大臣に昇り、十七年公爵を授けられ、廿年從一位大勳位に敍し同年十二月六日薨ず。

今様　頼襄

花よりあくる三吉野の。春のあけぼの見わたせば。もろこし人も高麗人も。やまと心になりぬべし。

題しらず　頼醇

浮雲の掩ふ姿は變れども萬代おなじ天つ日の影

捕はれて江戸に赴く途にて

かへりみる比枝の山影くもりけり我が行先は白雲の空

春寒し籠に起き臥すうぐひすも心にかかる梅の音づれ

鈴鹿山嶺にて

今朝は猶ひとやの中(うち)の心地して夢より夢にわたる山路

海邊述懐

海の底やぶるばかりに笛ふきてうまいの龍に聲聞かせてむ

辭世の歌とて詠める

罷る身は昔が代思ふ眞ごゝろの深からざりし徴(しるし)なりけり

〔頼襄〕京都の儒者なり。字は子成、通稱久太郎、山陽と號す。明治廿四年十二月、贈正四位に叙せらる。

〔頼醇〕通稱三樹三郎、字は子春、鴨厓また古狂生と號す。山陽の第三子なり。尊攘を謀りて獄に投ぜられ、江戸にして死刑に處せらる、年卅五。明治廿四年正四位を贈らる。

〔春寒し云々〕籠に起き臥す鶯とは、三樹自身の上を云へる也。

〔うまいの龍〕熟睡せる龍の意なり。

〔罷る身は云々〕初句は黄泉へ罷る身は、の意也。末句は一本に『しるしなるらむ』とあり。

思ふ事ありて　吉田松陰

啼かずあらば誰かは知らむ時鳥さみだれ暗く降り續く夜は

本國より檻車にて東へ下る時

今さらに言の葉艸もなかりけり五月雨はるゝ時をこそ待て

題しらず

住みなれし囚屋のうちも三百日はいか余りになりにけるかな

同囚に共にありける人に遣るとて

なれぬれば獄屋もさすがゆかしくて別れに忍ぶ五月雨の頃

きのふ三人の義士を誅したりと聞きて

晴れつゞく小春の空のしぐるゝは討たれし人のなげく涙か

つひに行く死出の旅路いで君はかからむことぞ世の鏡なる

國のため討たれし人の名は長く後の世までも語りつがまし

留魂錄をかき終りて

我がおふでにつくして留めぬれば父思ひ置く事なかりけり

〔吉田松陰〕初名は大次郎、後寅次郎と改む。名は矩方、字は義卿、松陰は其號、また二十一回猛士と號す。長門の藩士也。史書に通じ兵法に精し。夙に尊王攘夷を唱へ、入江弘毅、弟和作、久坂玄瑞、高杉晉作、品川彌次郎等を始め、有名の志士多く其門に出づ。既にして討幕の事洩れ、捕へられて江戸に斬に處せらる、時に安政六年十月、年二十九。明治廿二年正四位を贈らる。門人等、東京府豐多摩郡世田ケ谷村大字若林に松陰神社を建て、其の靈を祀る。

〔しもと打つ云々〕心に思ふ事は、悉く留魂録に記し畢へたれば、今日よりは笞打たるゝ場に呼出さるゝを待つ外、世に期待する事なくして心安らかになりぬとの意也。

〔君が御夢に云々〕藩侯が、松陰を思ひて夢に見たる趣きを聞きて言へるなり。

〔刑に臨む時〕時に安政六年十月二十七日なり。

〔親を思ふ云々〕我が身よりも、親を思ひ奉る心よりも、我身を思ひ給ふ心深き親が、今日我身が刑場の露と消えし事を知り玉はゞ、如何に悲しみ思し召す事ならむと也。

心なる事のくさ〴〵書き置きぬ思ひ殘せる事なかりけり

しもと打つ庭に出でよと呼ぶ聲の外に待つべき事なかりけり

呼び出しの聲まつ外に今日の世に待つ事もなき身こそ安けれ

述懐

賤が身は世に遇はずとも大空に曇なき日の照らさゞらめや

かしこくも君が御夢に見ゆと聞けば消えむ此身も何か厭はむ

あけ暮に憂き事のみを思ふ身は夢を樂しむばかりなりけり

五月雨の雲に此の身はうづむとも晴の光の月と晴れなば

獄中の作

かくすれば斯くなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂

七たびも生きかへりつつえみしらを攘はむ心われ忘れめや

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大和魂

刑に臨む時

親を思ふ心にまさる親ごころ今日の音づれ何と聞くらむ

折にふれて　月照法師

弓矢取る身には有らねど一すぢに立てし心の末は變らじ

追風に矢を射る如く行く船の早くも事を果たしてしがな

しら浪の寄せし昔を今も猶ほ忘れはせじな箱崎の神

薩摩に入りし時よめる

海士小舟人にはゆめな語りそよ薩摩の迫門(せと)に我れ渡りきと

うら安く今日は薩摩に着きにけり心つくしの人を賴みて

柳川湊を船出する時

年ふとも忘るべしやは知らぬ火のつくしに盡す君が情(なさけ)を

辭世

大君の爲めには何か惜しからむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも

曇なき心の月と諸共に沖の波間に今ぞ入りぬる

玄堂法師

梓弓今は取る身に有らねどもなど劣るべき武士のみち

〔月照法師〕名は忍向、洛東清水寺成就院の住僧なり。夙に勤王の志を懷き、嘉永七年職を弟信海に讓り、杖を諸國に曳きて世態人心を觀、西郷隆盛と兄弟の交を結び、諸公卿の門に出入して倒幕攘夷の論を唱へ、是に於て幕府月照を捕へむとす。隆盛即ち月照を護りて薩摩に適る。而も追捕烈しくして避け難きに至り、月照隆盛相共に海中に投ず、同船せる平野國臣驚きて之を援はしむ。隆盛は蘇生せしも月照は遂に絶せり、時に安政五年十一月十一日なり。享年四十六。明治廿四年正四位を贈らる

折にふれて　　　　徳川齊昭

敵(あた)あらばいで物見せむ武夫のやよひなかばの眠り覺ましに

雖身在邊地心奉皇室

大君につかへさゝぐる我がこゝろ都の空に行かぬ日ぞなき

眞弓山より大なる石を引出して弘道館に用ゐける時

ものゝふの道弘めむと引く石を眞弓の神のいかで惜しまむ

川路左衛門尉聖謨主に、自ら鍛し太刀を贈りし時。緣に尊王攘夷と記し、これに添へける歌

立田川ながれに浮ぶもみぢ葉も散らずばいかで人のめづべき

辛丑大晦日、自ら太刀の燒刃を渡して、去成信貞に遣したる時添へし歌

鬼さへもやらふ劒の太刀なればえみしもいかで立ちもあふべき

島津齊彬侯、海防の事を問ひ給ひければ

今さらに何をか言はむ武藏野の蓬にまじるあさましの身は

〔敵あらば云々〕此歌の初句、一本に「敵しあらば」とあり。又二句を「鋒先き見せむ」に作れるもあり。また端書に、「彌生の頃講武の事ありしとき」と記せり。

〔大君に云々〕身は邊地に在りと雖も心は皇室に奉ず、と題せるにて其の意明瞭なり。

〔眞弓の神〕眞弓山の山祇之靈を指して云へる也。

〔立田川云々〕散らずばとは、潔く命を捨てずば、との意を云ひ含めたるなり。

〔えみし〕洋夷を云ふ。

〔あさましの身〕蓬にまじる麻に、淺ましと云ひ掛けたる也。

寺々の鐘を廢して

今よりは心のどかに花を見む夕ぐれ告ぐる鐘を聞かねば

守屋大臣

日の本の道をもりやのおほむらじ神と齋きて仰がざらめや

題知らず

横ばしる蟹のよこ文字みてしより直なる道を行く人もなき

蟹文字を貴み書く人よ我が國の道よこさまに踏みなたがへそ

ものゝふの道しそなへてあるならば何恐るべき外つ國の船

今日もまた此の日暮れけり老らくの待つにかひなき入相の鐘

かぎりある命をしばし惜しむとて朽ちぬ我が名を何汚すべき

敷島の大和の人はおしなべて日本心のあらまし物を

函館の關のふせもり心せよ浪のみ寄する御代にあらねば

誰もみな斯くぞあり度き國の爲め君の御爲めと死する武夫

世の人は如何に言ふとも天地の神ぞ知るらむ赤きこゝろは

「鐘を廢す」齊昭海防を嚴にせむが爲めに大砲を鑄造せしむ、時に銅材に乏し、乃ち封内寺院の梵鐘を徵して之に充てむとす。人或は其不可を言ふ、齊昭曰く、昔松平信綱、佛像を毀て錢を鑄たり、聞く佛は元來衆生を濟度するを以て己が任とすと、梵鐘を以て巨砲を鑄る、何かあらむとて、乃ち之を徵して巨砲を鑄造せり。

「かぎりある云々」命を惜しみて全うしたりとも、限りある命なれば、五十歩百歩也、されば潔く死して汚名を殘さじ、との意なり。

暮ると明くとかけてぞ思ふ武藏鐙ふみはたがへじ物のふの道

さきかけて散りなんものは武士の道に匂へる花にぞありける

題しらず　　山内容堂

大君の御楯とならむ時待つと我が撫でて飼ふ甲斐の黒駒

述懐

賀茂川にあたら仇浪立たせじと思ひ定めて渡る月日か

仲秋　　山縣大貳

曇るとも何か恨みむ月今宵晴を待つべき身にしあらねば

辭世　　山本朝正

雨風に散るともよしや櫻花君が爲には何か厭はむ

題しらず　　山本利雄

ちりひぢのよしかかるとも武士の底の心は汲む人ぞ汲む

辭世

國の爲め世の爲め何か惜しからむ君に捧ぐる大和ごゝろは

〔山内容堂〕名は豊信、土佐國高知の藩主なり。慶應三年十月、幕府大政を奉還せしは、主として容堂の建言に出づ。明治元年議定に任じ、尋で從二位に叙し、中納言を拜す。五年六月薨ず、年四十六。朝廷詔して贈從一位に叙す。

〔山縣大貳〕甲斐國巨摩郡の郷士にして、兵學の泰斗也。寶曆六年江戸に住す、門弟數百人、諸侯賓師を以て之を遇す。常に尊王を唱へ、兵法を講ずるに江戸城攻略の策を說く、幕府乃ち捕へて斬に處す。時に明和四年八月廿二日、享年四十三。明治廿四年正四位を贈らる

題知らず　山口辰之介

吹く風に此の叢雲を攘はせて曇りなきよの月を眺めむ

述懷　山田清安

時雨する常磐の松の操かも世にふる甲斐もあらぬ我が身は

題知らず

賴むとも今は賴まじ世の中に變るは人のこゝろなりけり

武士の道さへ立たず禍津日の神の荒ぶる世を如何にせむ

題知らず　山田公章

散るもよし吉野の山の山ざくら花にたぐへし武夫の身は

京都出立の日に詠める　山田時章

今日出でて何日かは君に逢阪のせきとめあへぬ我が涙哉

題しらず

時し來ば人も見るらむ梅の花みゆきの下に時を待つ我れ

五月雨にしばし濁りて流るとも晴るれば清き松蔭の水

〔山口辰之介〕水戸の藩士にして祿二百石を食む、櫻田の義士也、井伊掃部頭要撃の時、一衞士あり、梟雄にして諸子を斬る、辰之介怒つて之に向ひ、奮鬪數合遂に之を斃し、身も亦重傷を負ひ、八重洲河岸に至りて自殺す、年廿九、明治卅五年從五位を贈らる。

〔山田清安〕薩摩の藩士にして京邸の留守居役に居り、尊攘を唱へし人也嘉永元年十一月歸國して自殺す。

〔山田公章〕通稱亦助、山口藩の士なり、元治元年赤間關の戰に功あり國內黨議分裂の際斬らる。明治廿四年正四位を贈らる。

〔子を思ふ云々〕家集に「氷雨降りける日、雀の子の、より〳〵飛び習へるが、親鳥に離れて園の前なる格子に雨宿りしけるを、いと哀れに我身の上など思ひ出でられて、御杖や何處に親の袖と云ふ歌に倣ひて詠める。」とあり。

〔山田顯義〕周防山口の藩士なり。維新の際、藩兵の長と爲りて東北の諸藩を征して功あり。歴進して陸軍中將に任じ、尋で司法大臣と爲り、正二位勳一等伯爵に叙せらる。明治二十五年十一月薨ず、享年四十九。

〔あらちごえ〕越前國なる愛發(アラチ)山を越云ふ。

子を思ふ心はおなじ村すゞめ何處に親の羽濡らすらむ

述懐

濁りなき心うつして吉水に見し月影は如何に澄むらむ

辭世

神無月あはれ時雨と散り行くは木々の紅葉と我となりけり

題しらず　山田虎之助

切らば斬れ殺さば殺せとても世に生きて甲斐なき我が身なりけり

題しらず　山田顯義

敷島の倭錦の光もて夷の闇を照らしてぞ見む

題しらず　由利公正

君のため國の爲には盡してむ臣の命のあらむ限りは

君が爲思ふばかりに數ならぬ我が身の上も惜まるるかな

丁卯の年召によりて京へ上りける時折しも雪深かりければ

君がため急ぐ旅路のあらちごえ雪を拂ふ間もなし

〔平野國臣〕姓は大中臣、福岡の藩士也。國學に長ず、夙に尊王倒幕の志あり、藩を脱して上洛し、頼三樹、梅田雲濱等と結びて計畫す、幕吏乃ち三樹を捕へ、國臣を商屋街の寄合に圍む、纔に遁れて故山に歸る、時に僧月照亦難を避けて福岡に在り、即ち共に薩州に抵り、再び京師に入りて同志を糾合し東奔西走し、薩藩に捕はれて鹿兒島に囚せらる、文久三年赦されて又上京し、兵を但馬に募りて中山忠光に應ず、遂に敗れて捕へられ、元治元年七月斬殺せらる。歳四十三。贈正四位に叙せらる。

平野國臣

題しらず

賤くばかり惱める君の御心を安めまつれや四方の國民

たまたまに人と生れて徒らに草木と共に朽ち果てぬべき

青雲の向伏す極み天皇の御旗輝く御代となしてむ

數ならぬ身にはあれども希はくは錦の旗のもとに死にてむ

はれ曇り暫し霞の掛るとも動かぬものは大和魂

山伏姿にて月照を伴ひ薩摩の國へ下りける時

野間の關ゆるさで今宵薩摩潟よるべをなみのうき枕かな

櫻田の義士の志遂げし事を思ひて

神風をなに疑はむ櫻田の花咲く春の雪を見るにも

さくら田の名も面白し打つ太刀の火花にまじる春の淡雪

筑紫の水田てふ所に眞木保臣おしこめられけるを窃に訪ひ渡りける時音樂に事寄せて

四つの緒の古き調べの音にめでて聞えまほしく兼ねて忍びつ

鹿兒島に入りて同志と語らひけるに事成らざりければ

我が胸の燃ゆる思ひに比ぶれば煙はうすし櫻島山

赤間關にて捕へられて本間に送られし時

宥されつ又からまれつ悩むかな風定まらぬ松が枝の蔦

上京を許されたれば

時も得て龍も雲井に上るなり何時まで斯くて世に潜むべき

生野に戰ひて遂に捕はれて囚屋にありける頃

潔く消え果てもせで露の命殘り生野の身こそ辛けれ

豐岡にて囚屋ながらに春を迎へて

白雪にふるとしながら閉ぢられて春とも分かぬ春は來にけり

囚となりて湊川を過ぐる時楠公の奥津城に詣でて

亡き魂も哀れと思へ湊川清き流れの末を汲む身は

辭世

見よや人あらしの庭のもみぢ葉は何れ一葉も散らずやはある

「我が胸の云々」二句燃ゆる思ひとは尊王討幕の志の熾烈なるを云ふ。

「宥されつ云々」一度捕へられて赦され、再び獄に送らるゝ事を憤慨せるにて、結句は自己の身を云へる也。

「上京を云々」文久三年、薩藩の獄より赦免せられし時の詠にて慷慨の士気一首の上に溢れたり。

「生野に云々」文久三年八月、澤主水正宣嘉と共に兵を但馬の生野銀山に擧げ、窃かに中山忠光の大和の義軍に應じて幕軍と戰ひ、敗れて潮來郡綱場村に至り、豐岡藩の爲めに捕へられたり。

〔さきかけて云々〕假令世の中に愚かなる男よなど評判せらるとも、櫻花の如く卒先して散る身こそ潔けれとの意也。

〔君が爲め云々〕君國のために竭す事なれば、命は死すとも何か思ひ殘す所あるべきと也。

〔御代を昔に云々〕王政復古の意也。

〔あづま路の云々〕我が身は東國に至りて空しく死すとも王政復古の世の中となし度き物よとの意也。

〔暇のなき云々〕此の歌の初句、一本に「いたづらに」とあり。

〔天の磐屋戸〕天照大御神の故事也。

辭世　林田貞賢

さきかけて散るや大和の櫻ばなよしやうき名の世に立ちぬとも

題知らず　萩原政興

よしや身は草むす野邊に埋むとも君がなき名を洗ひそゝがむ

述懷

君が爲め世の爲めよしや消えぬとも何かいとはむ露の玉の緒

八幡山を伏し拜みて　橋口壯輔

すめろぎの御代を昔にかへさむと祈るこゝろは神も受くらむ

題知らず　橋口兼備

あづま路の花と散るとも大御代の春の光を見るよしもがな

述懷　長谷川速水

暇のなき瓦となりて過ぎむより碎け散るとも玉とならばや

皇道述義に題せし三首の中に　長谷川昭道

かしこくも天の磐屋戸あけましゝ神の心にならふ此のふみ

題知らず

あし原の瑞穂の色もわかぬまで繁る醜草はらへ御民等

大和心を

天地のまことの御魂あつまりて日本(やまと)ごゝろと成りにけらしも

子ども等が栞に

皇神のなほき道行け外つ國のまがれる道に進ふなよゆめ

詠天照大神歌の反歌

大君の御代はとこしへ天照らす日の大神のまさむ限りは

題知らず　　　蓮田正實

武藏野のあなた此方に道はあれど我が行く道は益荒雄の道

世の爲めとおもひ盡しゝ眞心は天つ御神もみそなはすらむ

三月三日四日五日雪降る夜、細川侯の邸にありて、五日の夕べ空晴れて月影のさしけるを見て

降り積るおもひの雪の晴れて今あふぐも嬉し春の夜の月

〔蓮田正實〕通稱を市五郎と云ふ。幼にして父を失ひ、母に養はる。萬延元年三月三日、櫻田に井伊掃部頭を要撃し、本多修理亮邸に囚はる、正實性至孝、囚中より其の母姉に寄する書あり、情義紙に溢れ、讀む者涙を揮はざるなし、後諸士と共に斬に處せらる。明治三十五年從五位を追贈せらる。

〔降り積る云々〕思ひの雪の晴れてとは、井伊掃部頭を襲ひて、志をとげ得たると云ふ、

〔三月三日云々〕井伊掃部頭を要撃し細川侯に自首して其邸内に在りし時の詠なり。

寄落花述懐

いそがねどいつか嵐のさそひ來て心せはしく散るさくらかな

辭　世

色香をば吉野の奥にとめ置きて惜しまずに散る山櫻かな

題知らず　　蓮田藤藏

大君の御爲め思ひて數ならぬ身を人かずに入れてこそ居れ

大和國にて　　牛田成久

草のうへに鎧の袖をかたしきて寒き霜夜の月を見るかな

白川にて軍評議とり〴〵にて決し難き時

行く末はいさしら川の淵や瀬に浮び沈むも人のまにまに

長州より我が宿におくる

限なき親のめぐみを限ある我が身に受けていかで報いむ

幽閉中に詠める

年月は歸らぬものを悔しくも徒（あだ）に過ぐし、身こそつらけれ

〔色香をば云々〕吉野の奥に留め置きてとは、吉野は花の名所なれば、假りに斯く云へるにて、意は此世に其の名を殘し置きて從容として死に就く事を云へる也。〔大君の云々〕此の歌一本に、大君の名を汚さじと思ふ身を世の人數に入れてこそ居れ、とあり。〔行く末は云々〕いさ知らずの意を、いさ白川のと掛けて云へり。〔限りなき云々〕限り無く深き親の惠を、命に限りある今日の我が身に受けて、報い果たす事能はぬを嘆ける也。

〔久阪通武〕長州の藩士なり、初名は誠、後儀助と改む、弱年の頃より吉田松陰に學ぶ、松陰其才を愛し、女弟を以て之を配す、文久四年、高杉晋作、入江弘毅等と共に京師に上り、國事に奔走し、元治元年、弘毅と謀りて討幕の大義を貫徹せむと欲し、兵五百人を以て山崎より京に入り松平容保等を誅して親しく闕に入り、哀訴する所あらむとし、薩會彦根桑名等五藩の大兵と戰ひて重傷を負ひ割腹して死す。時に年二十六。明治廿四年四月、贈正四位に叙せらる。

感懷　　久阪通武

君が爲め何か惜しまむ武夫の有りなし雲に我れを見なせば

群雀むらがり居れど飛ぶ鷲の羽風に散るか哀れ世の中

小林民部、日下部裕之進などの流罪に定まりけると聞き

千里の海汐路をよしや隔つとも猶かりがねにつてだにもせむ

事に觸れて詠める

斯くまでに青人草をすべらぎの思す御心畏きろかも

幾度も繰り返しつつ我が大君の勅(みこと)し讀めば涙こぼるる

天地と共に久しく言ひ繼がむあやに畏き君がみことを

龍の馬を我得てしがも九重の都の春を行きて見むため

鷹司邸にて

千早振る人の醜草かかるかと思へば我れも髮逆立ちぬ

山崎の陣營にて

大内山のあかね刺す日に我が主(きみ)の濡衣(ぬれぎぬ)ときて照してぞ見む

〔國の爲に云々〕信月照をして、倒幕擴夷の事を不動明王に祈らしめしなり。月照傳に『近衞公、不動明王に祈り給ふ一首の返し、國の爲め君の爲めには露の命いまぞ此時ぞ捨て處なる』と云へる歌を載せたり。

〔匂ふとも云々〕三四の句は、絲の緣にて繰るに苦しを掛けて云へる也。

〔老女村岡云々〕村岡局（名は矩子）を云ふ。

〔島津齊彬〕島津氏二十八世の主なり

〔曇なき云々〕前頁月照の辭世及び其の頭註を參照すべし。

國の爲に不動明王に祈りし時　　近衞忠熙

動きなく明けき世を一すぢに今此の時ぞ猶祈りつる

折にふれて

匂ふとも咲くとも知らで絲櫻くるしき春を過す年かな

老女村岡が囚はれて江戸に下りける時詠める

凄まじく荒るる吾妻の空さして行く先如何にならむとすらむ

一すぢの道の誠を知る邊にて吾妻の山もやすく踰ゆらむ

打日さす都を出でて如何ばかり辛き旅路に日を送るらむ

島津齊彬久光の事を思ひいでて

老いぬれど猶忘れぬは同胞の世に盡したる誠なりけり

月照が國の爲心を盡して遂に海底の藻屑となりぬるを聞く人誰かは惜しみ歎かざらむ。己れは特に交り深かりければ

また更に我こそ忍べ薩摩潟波に入りにし月の光を

曇なき心の月はうき雲の掩へども尚ほ隱れざりけり

「霜枯れし云々」二句に、嵯峨野の原のと詠めるは、村岡局の老後を嵯峨に遁りしを以て斯く云へり。なほ山階宮晃親王の集にも「近衛家の老女村岡に贈位の宣下ありける時、枯れ果てし嵯峨野の草の露の上に照る日の影も匂ふ今日かな」とあり。

「その鎌倉も云々」蒙古の使者を斬に處せる鎌倉も、此所より遠くあらねに、時宗の昔に讓らぬ功を立てよとの意なり。

「武夫の云々」上の句は、羽根と云はむ爲めの序也。

平野國臣の歌をと小川一敏が乞へるに

國のため思ふ心のなかばをも盡さで失せし人ぞ悲しき

村岡に贈位ありしを畏み喜びて

霜枯れし嵯峨野の原の女郎花苔の下にて花咲きにけり

類なき恵の露の衣手にあまりて落つる我が涙かな

辭世　近藤岩五郎

武藏野の原に屍はさらすとも何撓むべき大和魂

題しらず　近藤爲美

君がため盡ししことの甲斐ぞなきあしたの原の露と消ゆる身

嘉永六年の夏浦賀港に異船の寄せたりし警固に、御屋形よりも大森の浦まで軍勢出されし時、村田ぬし先手の物頭にて、久しく彼處に留まられければ、陣營に詠みて贈る

音に聞くその鎌倉も遠からじ昔に恥ぢぬ功立てなむ

武夫の征矢に矧ぐてふ大鷲の羽根田の森に幾夜臥すらむ

〔安島帯刀〕水戸の藩士なり、名を信立と云ふ。安政五年、水藩降賜の密勅を奉還するの議起り、藩中紛擾し遂に讒を得て囚へられ、獄中に死せり。

〔矢野玄道〕愛媛縣の人なり。平田篤胤の門に入りて國學を修む。元治慶應の頃、玉松操、[illegible]下茂國等と共に尊攘を議し、新選組の巨魁近藤勇に捕へられしも、辛うじて事なきを得たり。明治二年大學中博士に任じ從六位に叙す。篤胤の没後古史傳の補正は皆玄道の手に成ると云ふ。二十年の春その郷里に歿す。年六十五。

題知らず　安島帯刀

振り捨てゝ出でにし後は緑子の如何なる色に露や置くらむ

今更に何をか言はむ言はずとも我が眞ごゝろは知る人ぞ知る

國を憂へ世を歎きての眞ごゝろは天に地にも豈恥ぢめやも

もみぢ葉も散りてぞ色は増りける亡からむ後の名こそ惜しけれ

獄中にて詠める　安岡正定

故郷を思ふ寐覺に降る雨は漏らぬ囚屋も濡るゝ袖かな

題しらず　安田勝從

憂き事の木の葉と積る我が宿は照らす月さへ忍び顔なる

題しらず　矢野玄道

益荒雄の心おこして橿原のひじりの御代に引きかへさばや

かむろぎの神の尊の道を置きて道ちふ物し世にあらめやは

我が魂は天つ御門にとゞめてむよしや憂世に身は沈むとも

われ乍ら我れも尊し皇神のわきてたまへる我が身と思へば

題しらず　田丸直諒

心にもあらで行く世を思ひきや筑波の嶺の月を見むとは

亡命して都に上りける時　田村直道

身は野邊の露と消えなば敷島のやまと草木の色を添へまし

題しらず　谷千城

古へに立ちかへりたる大御世は如何に嬉しとおぼすなるらむ

題しらず　谷森種松

言さへぐ夷の仇をまつろへて早く聞かせばや我が神の道

客中偶作　玉木正弘

雲かゝる君が御心おもほへば屠蘇の酒だにのどに通らず

題しらず　千葉嘉尙

天地と共に久しき君なれば八百萬代に神ぞ護らむ

題知らず　千葉監物

ますら雄の思ひ立ちにし旅なれば朝けの寒さなど厭ふべき

「田丸直諒」水戸藩士なり、稲之右衛門と稱す。武田耕雲齋の參謀たり。明治二十四年十二月、贈從四位に叙せらる。

「古へに云々」王政復古の大御代と爲りしにつけて、畏くも我が大君の御心には、如何に嬉しと思し召し給ふ事ならむと也。

「言さへぐ云々」初句は物云ふ狀の口早く物騷がしき意にて、海外人の上に冠する詞なり。まつろへてとは、降服せしむるを云ふ。

「千葉監物」伊東武明の同志なり。慶應三年十一月、新選組の近藤勇等の凶刃に罹りて死せり。

孝明天皇の崩御を悲しみて　　辻　長之助

日の本に立ち掩ふ霧も掃ひあへず御隱りませる御意思ほゆ

囚へられて

水の泡も世を經て石となるてふをはかなく消ゆる我身なりけり

題しらず　　筑紫道正

仕まつる筑紫の國の人は皆大和心になさむとぞ思ふ

題しらず　　津田愛之助

大君の御楯となりて捨つる身と思へば輕き我が命かな

述懷　　堤　忠明

遠つ祖の其の眞心を受繼ぎてすめ大君に仕へまつらむ

數ならぬ身とは歎かじ我も猶思へば君の御楯なりけり

今こそあれ深き淵には潛むとも思ひ立つべき時なからめや

洛東大日山にて身まからむとしける時、血潮もて書きつけける

堤　義次

「日の本に云々」日の本に立ち掩ふ霧も掃ひあへずとは、横暴なる幕府を倒さず、攘夷の實を擧げざる間に崩御ましまし事を悲しみて詠める也

「大君の御楯」大君を衞り奉る兵士を云ふ。

「數ならぬ云々」我が身は人の數に算へられざる、つまらぬ身也とは云はじ、思へば此の身は大君を衞り奉る大事の身也との意なり。

「今こそあれ」今こそ世に不遇の身なれども、といふ程の意なり。

君が爲め盡す心は久かたの天つ御空の神ぞ知るらむ

帝道唯一　　角田忠行

すめろぎの道にちまたは無かりけり人の誠を一すぢにして

辭世　　鶴田守道

戰ひの花を散らして今よりは黄泉路の月を見るべかりけり

松陰大人へ返歌　　寺島昌昭

武士の踏み行く道は一すぢに君に仕ふる大和だましひ

松陰先生の駕の、已に東へ行き着きなむ頃、五月雨の頻りに降るに、いよいよ慕はしく思ひ侍りて

いく年か君は吾妻に宿るらむ古郷さびし五月雨のころ

囚へられて

先立ちて我れは吾妻へ向ふなり何日か來にけむ君が車も

題しらず　　寺尾權平

身のはては如何になるとの汐ならで騒ぐ心を哀れとは見よ

〔寺島昌昭〕通稱忠三郎、長州藩士なり。年十四にして吉田松陰の門に入る。安政五年松陰京に入り鯖江侯を刺すの議あり、大に門下の同志を糾合して十七人を得昌昭その主たり。元治元年、久坂通武、入江弘毅等と共に尊攘の大義を貫徹せんとして兵を擧げ、通武と同じく鷹司邸に於て屠腹して死す。時に年二十三。明治廿四年四月、正四位を追贈せらる。

〔すめろぎの云々〕二句ちまたは無かりけりとは、岐れ路は無く、皇道は常に一以て之を貫く物ぞとの也。

〔伴林光平〕攝津の人、通稱を六郎と云ひ、蒿齋と號す。初め本願寺派の僧侶なりしが、皇典を講きて悟る所あり、即ち還俗して尊王攘夷を唱ふ。文久三年八月大和行幸夷狄親征の盛擧布告せらるゝや、光平[illegible]起し、河和[illegible]泉の壯士を募り以て鳳輦を迎へむと欲し、出でて大和に赴く。皆る事數日、松本謙三郎、吉村寅太郎等、侍從中山光忠を奉じて義兵を募れるを以て其の軍に參加せるも、遂に敗れて捕へられ、元治元年刑に死す。年五十四。明治廿四年從四位を贈らる。

京都誓願寺道場張札の中に記せる　　伴林光平

事しあらば誰れか命を惜しむべき君が惠みにしげる夏草

大君の醜の御楯と身をなさば水漬く屍もなにかいとはむ

櫻田の雪とけぬれどかぐはしき名は萬代に朽ちせざりけり

君が爲命しにける櫻田のますら丈夫のいとごころあはれ

天の川辻御陣いと寒かりければ

椎の實の瓦におつる音づれにまじるも寒し山おろしの聲

夜中の峠にて篝を焚きて大塔宮の古事など物語するを聞きて

そのかみをかかげて見べき人もなし夜中の里の夜半の灯火

十三日夕暮十津川長殿山を越ゆる時

長殿の木々の紅葉を今日見れば君の御旗をかざるなりけり

鋒とりて夕越えくれば秋山の紅葉の間より月ぞきらめく

十津川中原の里に宿りて

やぶれつる鎧の袖もつくろはん菊と紅葉の中原の里

姨峠にて地藏堂の中にしばしやすらひて

山風にたぐふ眞神のこゑ聞きて寐られんものか谷の茅原

鷲家村にして血戰の砌に

秋なれば濃き紅葉をも散らすなり我が討つ太刀の血煙を見よ

昨夜南都へ來りし路の程のいと暗かりければ

闇夜行く星の光よ己れだにせめては照らせもののふの道

武士（もののふ）の屍をさらす荒野良に咲きこそ匂へやまと撫子

捕はれて岩船山を過る時

梶をなみ乗りてのがれん世ならねば岩船山も甲斐なかりけり

囚中の作

つながるる囚の外の荒垣にむすび添へたる今朝の朝顔

辭世

君が代はいはほと共に動かねば碎けてかへれ沖の白波

〔山風に云々〕たぐふ眞神の聲とは、山風に入り交りて聞え來る狼の聲を云ふ。

〔武士の云々〕殉難士傳に、藤本鐵石以下壯士數輩軍に死す、光平乃ち和歌を詠じて之を弔す、曰く「武士の」云々とあり。

〔捕はれて云々〕文久三年十月、遁れて伊勢路より京都に潛行し、再擧を謀らむとす、途に奈良奉行の屬吏の爲めに捕縛せられ、京師の獄に投ぜられし時の作なり。

〔君が代は云々〕沖つ白波とは、賊軍を指して云へるなり。

春の始に詠める　戸澤正令

高光る日出つる國ゆ立つ春に西のえみしも今朝やあふらむ

千よろづのやつこが國も春や知る我が日の本の大御光に

道

皇神のつくり固めし道ならで世に榮ゆべき道はあらめや

曉述懷

世のことを思ひ續けて我ながら寢ぬにおどろく曉のかね

甲冑の辨に

君の爲め仇むけなむと鎧へるに如何なる征矢かうらはかくべき

詠史

朽ちぬ名を石に殘して楠の木のいくすしき功立てし昔はも

さくら木を削りて書きしから歌に大和心の花ぞ匂へる

孔子

時に遇はぬくしに見せばや治れる御代は常なる皇ら御國を

「高光る云々」高光るは、日の枕詞なり。我が日出國は萬國に先だちて春たつ事なれば、其の餘光を受けて今朝の春を知るならむと也。

「千萬の云々」前の歌意に全く同じ。

「皇神の云々」皇神の作り固めし道とは、神代より君臣の義明かなる我が皇道を云ふ。

「君の爲め云々」仇むけなむとは、敵を平定せむとの意なり。

「朽ちぬ名を云々」楠正成を詠めるなり。

「櫻木を云々」兒島高徳の事を詠めるなり。

「くしに見せばや」くしは孔子なり。

思ふことありて　　戸田忠敬

國の爲め世の爲めせちに思ひつゝ花に心もそまぬ春かな

吉野に至りける人の許に

心あらば花に問はまし木がくれて三つの寶のありしむかしを

蒲生君平の功をめでゝ　　戸田忠至

君の爲め心つくしゝいさをしは今ぞ雲井に高く聞ゆる

作次郎なるもの、帝陵を尊み敬ふ志厚し、こたび畝火山東北陵の守護となりけるに詠みて遣る

橿の尾の其の下かげの民草はかしこき君の風になびかむ

思ふことありて　　戸原繼明

つるぎ太刀さやにをさめて武夫の研がまほしきは心なりけり

題知らず

世の爲めと我が僞らぬ眞ごゝろは糺の森の神や知るらむ

冬の夜ははゝその杜や寒からむいたくな吹きそ峯の木がらし

〔國の爲め云々〕二句の「せちに」は、切にの義、痛切の意なり。

〔心あらば云々〕二の句の「花に問はまし」は、問はむの意なるべし。三つの寶云々は、後醍醐天皇、三種の神器を奉じて吉野に入らせ給ひし事を云へる也。

〔畝火山東北陵〕大和國高市郡に在り神武天皇の御陵なり。

〔橿の尾〕畝火山の異稱也。

〔糺の森〕山城國愛宕郡に在り。

〔はゝその杜〕山城國の名所なるを、母の意に掛けて詠める也。幽囚中、故郷なる母の恙なからむ事を祈れる心ばへ也。

述懷　豐原邦之助

かぞいろの育てし身をも君が爲め捨つるは世々の惠と思へば

題知らず

あはれ我れ世にある時よ何をして亡き後の世に名をや殘さむ

君が爲め矢竹心のあづさ弓はるに逢ふ瀨の玉づさもがな

題知らず　豐田美稻

あづま路の武藏の春は立ちにきと雲井につげよ芦田鶴の聲

大丈夫の心の太刀の直やき刃いよ〳〵硏がむ國の御爲めに

辭世　豐永斧馬

白露と消ゆる我が身は惜しからで惜しきは後の名のみなりけり

題知らず　豐島泰盛

君が見し昔の秋にかはらめや月すみ渡る文字の浦なみ

折にふれて　藤堂平助

益荒雄の七世を掛けて誓ひてし事は違はじ大君の爲

〔かぞいろの云々〕先祖累代に亘りて君の御惠みを蒙り來れる事なれば、父母の育て給ひし此の我身をも捨てゝ、其の御惠に報い奉る也となり。

〔あはれ我れ云々〕何をして亡き後の世に名をば殘さむ。下に、只君國の爲めに一命を捨つるにあるのみ、と云ふ程の意を言ひ殘せる也。

〔白露と云々〕惜しきは後の名のみとは、後世に汚名を殘さむ事は無念なりとの意也。

〔文字の浦〕福岡縣門司の港を云ふ。

〔藤堂平助〕伊東武明の同志なり。慶應三年十一月、新選組の爲めに斬殺せらる。

題知らず　　中山忠光

えみし等と共に東夷も討ち居り如何で御國の汚れ雪がむ

十津川にて

君が爲め赤き心をあらはして紅葉と散れや大丈夫の伴

月に掛かる雲は嵐に吹き散りて巣を出でゝ鳴くきり〴〵すかな

折にふれて

思ひきや山田の案山子竹の弓なす事も無く朽ち果てむとは

〔中山忠光〕従四位下に叙し侍従に任ず。夙に民間の勤王家と結び、吉村寅太郎、那須重民等と謀り、藤本眞金、松本謙三郎等と共に義兵を大和に擧げ、親征の先鋒たらむ事を期して京都を發す。時に文久三年八月なり。黨を天誅組と稱す。已にして佐幕の諸藩と戰ひて遂に利を失ひ、那須、藤本、松本等相繼いで之に死す。忠光卿も再擧を謀らむと欲し、航して長州に走り、元治元年十一月、長門にして刺客に刺さる。明治三年、正四位を贈らる。

述懐　　中井正勝

眞心のあるか無きかは白露の玉と消えての後にこそ見め

古里へ送る狀中に　　中岡道正

大君の大御心を休めんと思ふ心は神ぞ知るらむ

辭世　　中島重孝

武士の名は何時までも木の谷の其のかぐはしき楠の木のもと

題しらず　　中原兼清

臥して思ひ起きても思ふすめろぎの御旗靡かし夷攘(はら)はむ

有志の徒と脱去せし砌に　中村無二

一すぢに我が大君の御爲ぞと思ひ分け行く武士の道

題しらず　中村無可

かねてより仕ふる君の命ぞと思ひし我が身今ぞ捧ぐる

題しらず　中村哲藏

何事も厭ふ心は無かりけり國の御爲めと果てむ此の身は

題知らず　中村彌三郎

敷島の大和心を盡しても仇(あた)となる世を如何にしてまし

題しらず　生天目渉

過ぎがてに囚屋のいぶせきを慰めんとや鳴く時鳥

罪を得る我とは知らで群雀なれて囚屋の軒に棲むなり

九月十四日大津氏再び絶食の時詠める

我れもまた身に憂き事のあらざらむ二世の外といなむとぞ思ふ

〔中村無二〕筑前の藩士中村兵助の第三子なり。夙に尊攘を唱へ、脱藩して東西に奔走し、文久元年捕へられて小呂島に流され三年六月赦に遇ふや、再び脱藩して京都に上り王事に盡瘁す。已にして又捕へらる。元治元年同志相謀りて脱出せしむ。是に於て其の弟無可と共に三條實美公邸に潛居す。後無可は鷹司邸に戰死し無二は三度捕へられて博多報光寺に自刃す。時に慶應元年正月二十六日享年三十一。

〔中村無可〕前註無二の傳中にあり。

〔中村哲藏〕筑前の勤王家也。慶應元年獄中に殺さる。

刑に臨みて　　畑　彌平

鳴かざらばとらはれまじを鶯の身にもあだなる春の初こゑ

阪本龍馬ぬしを悼みて　　服部良章

たづぬべき人もあらしの烈しくて散る夜のみぞ驚かれぬる

梅雨　　服部豐次郎

五月雨の晴るゝ日はあれど世を思ふ我が衣手の乾く間もなし

辭世

死ぬる身は更に惜しまずえみし等を討たぬばかりぞ恨なりける

寄横濱戀　　塙　重義

我が戀に荒波わたる磯の船こがれこがれて身の沈むまで

題知らず

幾たびか鄙のわらやに寢覺して猶ほ思はるゝ君がうへかな

年ふれば月やどるべき山松の今日朽ち果つと人は知らずや

もろ人の深きなさけに死出の山いさましくこそ我は越えなめ

〔鳴かざらばと云々〕國事に盡瘁するに餘りに意氣豪放に過ぎて、前後を顧みざりし故を以て捕へられし事を悔しめる心也。

〔服部良章〕通稱三郎兵衛、伊東武明の同志なり、慶應三年十一月、新選組近藤勇等の毒刃に斃る。

〔たづぬべき云々〕二句、人も有らじに嵐を云ひ掛けたる也。

〔死ぬる身云々〕今日しも死刑に處せらるゝ身は惜しからねど攘夷の志を果さゞるのみが無念なりと也。

〔我が戀は云々〕横濱を襲ひて外夷を掃攘せむと欲する意を、戀に擬して詠める也。

〔此の春は云々〕都の花にあくがれむとは、京都に上りて國事に竭さむ、と云ふ程の意也。後れず咲けやとは我は人に後れず奮鬪すべければ、家に殘れる汝も後れを取る勿れとの意なり。
〔おほみため〕大御爲めの義、大君の御爲めの意也。
〔鳥がなく〕東の枕詞なり。
〔たゞすの杜〕山城國愛宕郡なる糺の宮なり。
〔めもはるばる〕芽も張るの意に、見る目も遙々にの意を掛けたり。
〔詠史〕君が其の、湊川の二首、楠公を詠める歌也。

家を出づる時庭の櫻に書きつく　原　盾雄

此の春はみやこの花にあくがれむ後れず咲けや庭の櫻木

辭世

かねてより捨てし身なれど今更に母のおもひぞ思ひやらるゝ

鷹司殿にて屠腹のをり

おほみため捨つる命は惜しまねど心にかゝる古郷のこと

題知らず　原　內藏介

鳥が鳴くあづまのさまを山城のたゞすの杜のたゞす由もが

雨晴れてめもはるばると青柳のいとも亂れて思ふ頃かな

太刀　林　忠五郎

葦原にむぐらしげらば劍太刀その根のこさず薙ぎつくしてよ

詠史

君がその忠(まめ)なる心なかりせば天つ日かげは今日あふがめや

湊川身をしづめしもよそならず語りあふべき人しなければ

題しらず　　廣岡政則

ともすれば月の影のみ戀しくて心は空になりまさるなり

題しらず　　廣岡正泰

玉垂れのひまもる影も薫るなり梅咲く宿の春の夜の月

辭世　　廣木有良

苔の下露と消ゆとも天地に魂を留めて君を守らむ

文久三年三月脫藩木曾路を經て京へ赴く　　廣田執中

君と親に別れきそ路の旅枕夢より外に逢ふ由もなし

高杉東行(晉作)へ送りし狀中に

昨日まで嵯峨の山路に見し月も今日は屍の上照らすらむ

述懷

武夫の鑑ともせよ山ざくら惜しまれて散る花の心を

折にふれて

世のさまを引き返さむと梓弓はりし心の何たゆむべき

〔廣岡政則〕通稱は子之次郎、水戸の藩士にして禄百石を食む。性强悍、一刀流の奥義を極む。夙に尊王攘夷を唱へ、返勅の非義を論じ、乃ち金子教孝の同志に加盟し、萬延元年三月三日、井伊掃部頭を櫻田門外に要撃し、奮闘猪突、直ちに駕に逼りて之を刺し、有村と共に龍の口に到る創重くして行くべからず、即ち自殺して死す。明治卅五年特旨正五位を追贈せらる。

〔廣木有良〕櫻田の義士なり。通稱を松之助と云ふ。一旦加州に逃れしも同志皆刑死すと聞きて自殺す。贈從五位に叙す。

江戸城の火災に罹りぬを聞きて　佐久良東雄

まつろはぬ奴ことごと束の間に燒き滅ぼさむ天の火もがも

題しらず

すめろぎに仕へまつれと我を生みし我が垂乳根は尊くありけり

命だに惜しからなくに惜しむべきものあらめやも皇の爲には

題しらず　佐藤市郎

よしあしを何かと言はむ世の中の人の言葉にかかる網目を

辭世　佐野重成

二張りの弓引くまじと武夫の唯一筋に思ひきるなり

櫻關出陣の前の夕に　佐野竹之助

諸共に思ひ射る矢の强ければ堅き岩をも透さざらめや

敷島の錦の御旗もち捧げ皇御軍のさきがけやせむ

君が爲つもる思ひも天つ日にとけて嬉しき今朝の淡雪

櫻田の花と屍をさらすとも何撓むべき大和魂

〔江戸城の火災〕慶應三年十二月廿三日江戸城西の丸焼亡す。幕府その犯人の薩邸に集合せる浪士なるを探知し之が引渡を交渉す。薩邸留守居役篠崎彦五郎、浪士總監相良總三等、之に應ぜず。幕府即ち同廿四日薩邸を燒討するに至れり。

〔まつろはぬ奴〕など、朝廷に服從せぬ奴原を、瞬間に燒滅すべき天爲の火が炎え起れよかしとの意也。

〔佐野竹之助〕名は光明、水戸の藩士也。有村、金子等と共に櫻田門外に井伊大老を誅せる隨一人也。後に正五位を贈らる。

甲子の年或公卿の御前にて　佐伯鞆彦

日の本の光にさはる雲のなど大内山の花と見ゆらむ

題しらず　相良總三

川の名のとくは流れで掻き濁り淀める水をいざ落さばや

題しらず　澤宣嘉

心のみ思ひ焦して文机の書を見るさへ物憂かりけれ

筑紫に赴く友に　澤島正喰

立ち別れよしや逢ふとも逢はずとも功は立てよ大君の爲め

都の獄屋にありて　澤田實之助

天の下思ひ比べて今ぞ知る濁るも澄むも定めなければ

題しらず　里見甕夫

昔が代をひきかへすべき梓弓引きつゝあだに撓むべしやは

題しらず　櫻田良佐

えみし攘ふ心盡しも成らずして空しく死する人ぞ悲しき

〔相良總三〕本名は小島四郎將満、相良總三は其の變名なり。明治廿四年正四位を贈らる。〔川の名の云々〕徳川と云へど、其の徳は毫も世に流れず、却て朝廷を蔑にして悪政を施し専横を極むるを、いざ速かに討伐せむとの意を、川水の速く流れずして濁水停滞しをる故排泄を計らむと綾なして云へる也。

〔澤島正喰〕慶應三年幕吏に捕はれ斬殺せらる。時に年二十九。

安政六年五月松陰先生の東行を送り參らせて　品川彌二郎

〔品川彌二郎〕長州の藩士なり。年十五歳吉田松陰の門に入る。松陰囚はれて獄に下るや、彌二郎前原一誠入江弘毅等と其の寃を訴ふ、詞氣激烈を極む。乃ち其家に幽屏せらる。已にして松蔭の刑に死するや、慨然江戸に赴き、久坂高杉等と共に尊攘を唱へ、尋で入京して薩長聯合を策し大に國事に奔走せり。戊辰の役に御楯隊を率ゐて東北に轉戰し、到る所功あり。明治廿四年内務大臣に任じ廿二年樞密顧問官と爲り、卅三年二月歿、享年五十八。是より先き子爵を授けられ、正二位に叙す。

逢ふ事は此れや限りの旅なるか世に限り無き恨なりけり

何となく聞けば涙の落つるなり何れの時か恥を雪がむ

元治甲子の七月京師變動の折に

我が君の爲には何か惜しからむ逆卷く浪に身を沈むとも

京都潛伏中に詠める

物思ふ人に見せじと照る月を隱すや雲の情なるらむ

伏見殉難九烈士を祭る時

鬼神も泣かざらめやは玉の緒を斷ちてつなぎし薩摩男子等

辭世　篠崎友明

武士の捨つる命は誰故に高き名を得て君に捧げむ

蓮田と共に事謀りて囚となれる時　信田義正

斯くまでに皇御國を思ふ身の心の底は神や知るらむ

題しらず　信田徽胤

〔信海法師〕僧月照の弟にして、勤王の志篤かりし人なり。

〔動きなき云々〕初句は不動明王の稱名を詠み入れしなり。四句は珠數の緣にて玉の緒と詠めり、命に懸けて祈禱せむとの意なり。

〔眞心を云々〕太平無事の世にて、身に憂き事などの無き時は、國の爲めに眞心を盡すべくもあらぬ不肖の身は、却つて憂ある世に生れて赤心を露はし得らるゝを嬉しと思ふと也。

〔大丈夫が云々〕我が尊攘の志は、七度世に生れ變るとも屈する事あらじと也。

幾度か今年ばかりと思ひしにまた新玉の春にあひけり

亞船入港するに方り内勅を受けて國家安護の祈禱を修する時詠める　　信海法師

動きなき誓ひと君が眞心を玉の緒にこそ繼りて祈らめ

獄に囚はれて

眞心を盡さむ時と思ふには憂きに逢ふ身ぞ嬉しかりける

題しらず　　滋谷寛行

大丈夫が思ひ籠めにし一筋は七代かゆとも何撓むべき

刑に臨みて　　清水房景

囚はれて死ぬる命は惜しからじ夷を攘ふ大和心に

霜月の頃熊毛にありて　　清水親知

人訪はぬ深山の庵は殊更に物思へとや木枯の吹く

題しらず　　下野正誠

身は苔の下に朽つとも五月雨の露とは消えじ大和魂

題しらず　　有村兼治

すめらぎの御爲めと祈る益荒雄の矢竹の心撤(たゆ)らざらめや

心に思ふ事ありて

世の中の憂きをば常に歎けども色に見せざる事ぞ苦しき

君の爲め盡す心は武藏野の野邊の草葉の露となるとも

櫻田の時詠める

岩が根も碎かざらめや武士の國の爲めにと思ひ切る太刀

國を出づる時詠める　　有村雄介

大君の憂き御心を休めずば再び國に立ちは歸らじ

題しらず

故鄕の花を見捨てゝ行く雁は都の春を思ふばかりぞ

折にふれて

霎あくた幾重が上に積れるを忍びしのぶは唯だ君の爲め

沼水の底に沈める蓮葉の淸き心を誰れか知るらむ

「有村兼治」通稱は治左衛門。薩州の士にして劍法の達人也。麻布十番に場を開き、烈公に知遇せらる。戊午の詔勅水戸に下るや、幕府の執政井伊直弼を誅するに非ずんば勅意を遵奉し難しとし、金子教孝等と結び、萬延元年三月三日直弼を櫻田門外に要し、輿中より曳出して其首を斬る。護あり背後より兼治の肩を撃つ、兼治怒つて之を斬り、首を提げ高吟して去る。和田倉に至り、重創歩し難きを以て自殺して死す。明治廿四年正五位を贈らる。

「有村雄介」治左衛門の弟、櫻田義士の隨一人なり。

〔有吉良明〕長州藩士なり。吉田松陰に學び、尊王攘夷を唱へて幽囚せらる。後ち高杉晋作久坂通武等と共に江戸に入り、高輪の英公使館を燒き文久三年京師に入りて大に國事に奔走す。此歳八月禁門の變あり七卿西下す、良明も亦諸子と與に歸國し八幡隊を建つ。其冬再び上京す。明年甲子六月五日の變あるや、良明重圍を脱し速かに國に歸りて報ず、尋で久坂等と馳走し天王山に拠り、七月十九日の戰に鷹司公邸に死す。

〔日下部氏〕贈正四位日下部信政、薩州の勤王家なり。

思ふ事ありける頃　有村蓮壽尼

弓張の月もしぐれて曇るかな思ひ放たば隈なからまし

雄々しくも君に仕ふる武夫の母てふものは哀れなりけり

幽因せられし時　有吉良明

淋しさは岩根の松やまさりけむ軒のしのぶは餘り見なれて

題しらず

憂き中の憂きに涙の絶えせぬは別れて後の別れなりけり

題しらず　有馬新七

外つ國もまつろひまつれ大君の御稜威の光徹る限りは

梓弓はる立つ風に大君の御代引きかへす時は來にけり

鳴る神のもてる斧我れ得てしがも醜のしこ臣討ちてし止まむ

安政五年八月廿九日日下部氏の家に宿りて志士の人々と天下の形勢を語りつつ寅の刻立ち出でむとて

鳥が鳴く東の空へ飛ぶ鷹の翼をがもよ翔りても往かも

題しらず　有川紀綱

うき曇る雲井の空を眺めても死なでは如何で攘はざらめや

題しらず　荒卷眞刀

諸共に君の御爲と勇み立ち心の駒をとゞめ兼ねつつ

吉田松蔭へ送る獄中に　鮎澤國維

世のために捨つる命の惜しからぬ君の眞心知る人ぞ知る

題しらず　相見則光

君にただに立つ矢はあるを如何にして我が眞心の通らざるべき

題しらず　安部健臣

君が爲め御國のために盡せとて神の授けし大和だましひ

述懷　安藤貞啓

我が太刀の折れぬ限りを命にて薙ぎ果てましを醜のしこ草

辭世　青木新三郎

いさぎよく血潮となりて枝々を我れ後れじと散る紅葉かな

〔荒卷眞刀〕通稱平三郎、筑後久留米の勤王家也。松本奎堂等に從て攘夷親征論を實行せむと謀り、幕兵の爲に敗られ虜となり元治元年二月、京都六角の獄舍に斬殺せらる。

〔鮎澤國維〕通稱伊太夫、長州の勤王家なり。

〔君が爲め云々〕我が國民の持てる日本魂は、君國の爲めに盡すべき料として神の授け給ひし物ぞと也。

〔醜のしこ草〕洋夷並びに佐幕黨の者を指して云へるなり。

〔いさぎよく云々〕結句は自己及び勤王の同志を喩へて云へる也。

天翔り國がけりして今日よりは夷を攘ふ神とならなむ

母へ贈る文の末に　　青柳部内

書き送る我が手ながらも懐かしや、戀しき人の見むと思へば

題しらず　　縣信緝

かねてより思ひ定めし事ながらさすがに憂きは別なりけり

建部楯雄、青柳高鞆に送る　　秋山長清

別れてもまた大君の國なれば何處の果ても忘れざらめや

折にふれて　　秋元安民

神風をそがひに負ひて戰はば世の憂き霧も拂はざらめや

絶え絶えの我が玉の緒をかけて思ふはれぬ夜頃の月や如何にと

題しらず　　朝倉彈正

武士の赤き心は、もみぢ葉の散りての後の錦なりけり

辭世

愚かなる身にも弓矢の幸を得て都の花と散るぞ嬉しき

〔書き送る云々〕自分自身にて書きたる書簡なれども、何となく懐かしき心地す、何となれば此の書簡は、我が親愛なる母の手に渡りて、母に見らるべき文なればなりとの意也。

〔別れても云々〕此處にて別れても、大君の御國の土を互ひに踏みをる事なれば、何處の果にさすらふとも君を忘るゝ事あらじと也。作者秋山長清は通稱を吉次郎と呼べり。

〔神風を云々〕二句そがひに負ひては脊中の方に負ふを云ふ。

〔弓矢の幸〕武士と生れし幸の意也。

獄延にて詠める　石川金四郎

正さずも糺の神もくみて知れ我が爲めならぬ心づくしを

題知らず　石黒簡齋

あな嬉し我が大君の御こゝろをやがてやすめむ年と思へば

獄中の作　飯泉喜内

かゝりきと知らぬ身にしも白雪の積れるうきは何時か消えなむ

獄に繋がれて東に下る途にて　飯田忠彦

うつゝとも夢とも我はしらずがに春來にけりと云ふはまことか

事なく都に歸りし時よめる

思ひきや消えなむとせし露の身を二たび草にかへすべしとは

獄をゆるされ東路より歸るとて宇津の山にて

此の春は夢に越えしか宇津の山うつゝに歸る蔦の細道

深草村へ隱遁しける時

憂きと云ふ浮世の中のうければやゝいざ深草に草がくれせむ

〔正さずも〕云々　糺の神は、山城國愛宕郡なる糺の宮を云ふ。

〔石黒簡齋〕本姓は福能氏、また人見湊卿と號かり、

〔飯田忠彦〕周防德山の藩士、望見茂十郎兼門の子にして、有名なる野史の著者也。京師に入りて有栖川宮の侍臣と爲る、嘗て時事を痛論して罪を幕府に得、江戸の獄に入る、後赦されて深草に隱遁せしが、萬延元年三月櫻田の變に連れるの故を以て、吏將に之を捕へむとす、忠彥憤懣自ら割腹して死す。年六十三。時に文久元年五月二十七日なり。

大和へ赴きける首途に同志の人と共に岩清水の八幡宮に奉りける歌　　安積武貞

賤が身も皇御國の太刀風に醜の夷の塵はらひてむ

大和の陣中にて中山侍從殿より陣羽織を戴きける時奉る歌

鳥が鳴く吾妻の鄙に生ひし身も花の都に戀ひ渡るなり

題しらず

誓ひてし心は同じ心にて後れし身こそ悲しかりけれ

つくしても猶盡してむ君がため露の命のあらむ限りは

獄中　　阿閉信足

明け暮に御國のことを思ふ身は醜の夷を憎まざらめや

世に晴れぬながめのみして果てむ身の跡だに照らせ秋の夜の月

題しらず　　姉小路公知

掻き鳴らす玉の緒琴のこと更に古ことぶみを讀めよ世の人

古へに吹返すべき神風を知らで蛭子ら何騷ぐらむ

〔安積武貞〕通稱を五郎と云ふ。松本謙三郎等に屬して攘夷親征の先鋒たらむとせし天誅組の隨一人なり。

〔中山侍從〕中山忠光卿なり。

〔姉小路公知〕右少將公知朝臣たり。維新前、幕府の勅命を奉ぜざるを惡み有志と謀りて討幕攘夷を決行せむと欲せしが、偶々勝安房と兵庫に會せしより、勤王の士の疑ふ所となり、文久三年五月二十日、從者一兩人を從へて猿が辻を過ぐるや、刺客の爲めに斬殺せらる。時に年三十。

題しらず　杉山彌一郎

鳥羽玉の夜はすがらに忍びつつ護るは君の爲めとこそ知れ

名にしおふ手筒の山のてつつきて知らぬ夷を打ち攘はばや

雪霜を厭はず來ぬる旅衣御言待つまぞいとど悶しき

題しらず　杉本義長

君の爲め御國の爲めに玉の緒を捨つる最期（いまは）の胸の涼しさ

題しらず　楢山佳義

濁るとも汲みて知らなむ測らなき底の心の深き思を

題しらず　須子吉次郎

今更に何を言はまし物部の矢種はつきてけさの一太刀

題しらず　須藤孝正

思ふ事うたで敦賀の越の雪とけていたけき春や待つらむ

題しらず　武押正利

逆賊らを斬りてはふりて益荒雄が打ちは流さじ夷黒船

「杉山彌一郎」水戸の藩士にして鐵砲の達人なり。舊主青門跡、江戸駒込の邸に閑せらるゝや、窃かに江戸に出でゝ毎夜駒込の館邊を警戒し、幕府が君公を害せむとするに備ふ。鳥羽玉の云々の歌は即ち當時の作也。萬延元年三月三日金子等と共に櫻田門外に井伊大老を刺し、遂に斬に處せらる。年卅八。明治卅五年、從五位を贈らる。

「楢山佳義」長州藩の勤王家也。元治元年六月五日、同志と京都池田屋に會す。時に新撰組の爲めに襲撃せられて死す、年廿七。明治廿四年贈從四位に敍す。

題しらず　　千屋孝成

夷らを斬りつくさむと思ふのみ我が武夫の願なりけり

題しらず　　千屋孝健

散る花に後れじものと勵みしもまた古里の秋を經にけり

武藏の六鄕の渡を過ぐる時　　仙石隆明

後の世の名をこそ惜しめ玉川の流れも淸き行末を見て

川崎驛にて父母を思ひ出て

歎くにもなほ餘りある父母にこれぞ別れの限りと思へば

題しらず　　成園法師

君がため囚はれぬとも厭はめや賴むは宿に殘る母人

題しらず　　赤城法師

假りの世にすみの衣は着つれども心は赤き大和だましひ

題知らず　　萬代常德

つゆ時雨いたくな降りそ神無月きし旅衣をいつか乾すべき

〔散る花に云々〕尊王攘夷の爲めに盡瘁して或は獄に投ぜられ、又は斬殺せられし同志の人人に、我も後れじと勵みつゝあれど其人々に先立つを得ず、今年も亦生存して故鄕に秋を送れりと也。

〔仙石隆明〕通稱は左太雄、松平伊勢守の家臣也。夙に尊攘を唱へ、文久三年二月京都に上り、同志石川眞幹、長尾武雄、高松信行等と洛北等持院に入りて足利尊氏義詮義滿等の木像の首を斬り、三條河原に梟首す。吏乃ち長尾の別墅を圍み、或は斬り或は縛す。隆明奮鬪して自殺す。時に年二十二、

大君の御言蒙りて都にまう上りける時　　　武田正生

あづま路の野邊の若草ふみわけて雲井に告げむ君の言の葉

籠居はべりしに郭公の聲を聞きて

いざさらば語りくらへむ郭公我れもうき世に泣かぬ日はなし

題しらず

しづたまき數ならねども大君のうきをはいかで晴さざらめや

君がため誠の道やつくさなむありて甲斐なき我が身ながらも

木がくれてつねには見えぬ紅葉ばも散りてうれしき赤き心は

薄もみぢ赤き心をとはれては散らでなかなか恥かしきかな

波ふる湊の濱を出でしより奈須野の原の矢さけびもなし

雨あられ矢玉の中はいとはねど進みかねたる駒が嶺の雪

咲く花の風にもまれて散りぬとも匂は君が袖にのこして

片敷きていぬる鎧の袖の上に思ひぞ積る越の白雪

信濃なる千曲の川の一すぢに限りなき身を後に知るらむ

一武田正生、[illegible]、また耕雲齋と號す。若くして驍勇武略あり、善く韜略に通ず。水戸景山侯に仕へて老臣となり、祿千五百石を食む。藩公薨去の後、其の遺志を奉じて尊王攘夷を唱へ、衆を率ゐて之を斷行せむとし、黨兵一千三百人を率ゐて京都を指し、輜重を具し、上野に高崎城主の防戰するを破り、信州に諏訪松本の軍を斥け、大垣より迂回して越前に入るや、兵凍餒戰ふ能はず、已にして遂に計に陷りて捕へられ、元治二年二月敦賀に處せらる、時に年六十三。明治廿四年十二月、正四位を贈らる。

文久三年獄中にありて大晦日に　　武市半平太

二度は返らぬ年をはかなくも今は惜しまぬ身となりにけり

元治元年元日に

歳月はあらたまれども世の中は改まらぬぞ悲しかりける

獄中より家におくる

思ふこと晴るるしるしか富士の根にかかる雲なき夢を見しかな

島本審次郎より「忌はしき獄屋の軒のひまよりも月はここを照らしこそけれ」の歌を示したる時

大空に照る月影はきよけれどおほへる雲を如何にせむ哉

鳥の跡を見るにつけつつ床しさのなほ彌まさる君が面影

人の目に見えぬ心の眞澄鏡清き光は神ぞ知るらむ

忌はしき獄屋の中のもの憂さを黄泉の國まで共に語らむ

世を思ふ心の足らで斯かる身はひま洩る月の影も恥かし

神ならで誰かは知らむ目に見えぬ心の底の清き光を

〔武市半平太〕土佐藩の勤王家なり。瑞山また若淵と號す。文久年中、同志吉村重郷、宮地正覺等と共に攘夷を畫策して國事に盡瘁し、遂に藩廳に捕へられて獄に下り、慶應元年五月、斬に處せらる。時に年三十七。明治二十四年四月、正四位を贈らる。

〔島本審次郎〕名は仲道、半平太と同藩の士にして、共に王事に鞅掌せし人なり。

〔大空に云々〕照る月影とは朝廷を云ひ、掩へる雲とは勅命を奉ぜざる江戸幕府を指して云へる也。

十津川にて討死しける時　　松本謙三郎

君が爲め命死にきと世の人に語りつぎてよ峯の松風

題しらず　　曲直瀬道策

いざ子ども暫しは忍べ今の代を千代に榮えむ御代となすまで

題しらず　　前田喬恭

うち攘ふ異國人の車やめて秋津島根に風騷ぐなり

十五夜晴　　前田慶寧

秋風に立つ雲霧も吹きはれてすみこそ昇れ望の夜の月

題しらず　　丸山作樂

しづたまき賤しき我れも天皇の大御寳ぞ竭さでやまめや

題しらず

増かゞみ研ぎし心は天にます月日の神ぞしろしめすらむ

題しらず

久方の天のみはしら動きなく造り固めし大八洲國

〔松本謙三郎〕名は衡、奎堂と號す。參州刈谷の藩士也。三河は徳川創業の地にして、士民之れを稱讃する事甚しきに拘らず、奎堂獨り皇室を尊崇し、日に徳川を稱するを恥づ。文久三年八月、朝廷攘夷親征の議を決するや、侍從中山忠光を奉じ、義兵を大和に擧げて親征の先鋒たらむと謀る。已にして朝議一變し遂に幕軍の爲めに敗れ割腹して死す。時に九月廿四日なり、享年卅四、明治卅四年、從四位を贈らる。

〔丸山作樂〕肥前島原藩の勤王家也。正四位貴族院議員と爲り、明治卅二年歿す、年六十。

〔福羽美靜〕尊王攘夷を唱へ、西川吉輔等と共に神拜家に出入して國事に盡し、殊に三條公を輔佐して功あり。正三位に敍し子爵を授けらる。明治四十年薨ず、年七十七。
〔國の爲め云々〕二三の句に、身を碎きて王事に盡さむと心に期せしとの意なり。
〔元治子の年〕元治元年なり。
〔大前に云々〕天皇の大御前に參るを聽さるゝ貴き人も、賤々の地下の人も、心の中は分け隔てなく、皆悉く天皇の御許に伺候すとの意也。

文久三年癸亥八月、大和行幸の設ことせよとの仰を蒙りける日詠める　　福羽美靜

國のため身をつくしてと願ひつるその事なれる今日の嬉しさ

三條卿たちに從ひて大佛より伏見の方に出で行きける時

昔よりありと聞きにし落人の姿を今はうつしけるかな

元治子の年長州の人と共に三條卿を推し立てて都に上らむとしける折、其事整はずして大阪に潛居しける頃

あな悲しそれと頼みし益荒夫が今日散り散りになりも行くらむ

思ふ事ありて詠みて奉りける

大前に召され召されぬ分ちなく心は君がもとにこそあれ

題知らず

事しあらば君が御楯となりかへら世に盡くべき業やなさまし

國の爲め思ひ固めし我が心玉と磨きて世を照らさばや

昔の代百首の中に

日の本の其の貴さを千代八千代ますます添へよ世の中の人

加茂の社に行幸ましましける時　藤本眞金

いでましを拜みまつりし人皆の涙の雨か降りしきるなり

大和國十津川に戰ひたる時、敵數多追ひ退けて

十津川の腸黑き鮎の子は落ちて何處の瀬にか立つらむ

九月十三日夕べ十津川長殿山を越ゆとて

霜を踏み巖さくらむ武士の鎧の袖に紅葉かつ散る

家村を千尋の谷の底に見て松の梢を行く旅路かな

題知らず　藤原愛親

葎生の茂りて道も分かぬ世に降るは涙のあめが下かな

獄中にて詠める　深瀬惟正

あだし野の露と消え行く武士の都に殘す大和たましひ

赤心報國　深見篤慶

事しあらば何か惜しまむ天皇の御國の爲めに盡す命を

〔藤本眞金〕鐵石と號す。備前の藩士なり。文久三年八月、朝廷既に大和行幸、親ら攘夷親征の議を決む。眞金乃ち同志松本謙三郎、吉村寅太郎と謀り、侍從中山忠光を奉じて義兵を大和に擧げ、鳳輦を迎へて親征の先鋒たらむとす。已にして佐幕の諸藩と戰ひて遂に利を失ひ、九月十五日天の辻の戰に長槍を揮て奮闘し、敵廿餘人を斃して死す、年四十七。明治廿四年從四位を贈らる。〔あだし野の云々〕山城國嵯峨の埋葬墓地なり。初二の句は、單に死して行く意を云へるなり。

〔福原元僴〕長州萩藩毛利侯の老臣也文久三年、毛利侯朝廷に攘夷親征を建白するや、三條公以下の七卿之を善とし、帝を勸めて之に從ふ。幕府驚愕、其議を覆すに至り、七卿長門に奔る。是に於て長藩の志士久坂通武等、攘夷親征を朝廷に哀訴せむとし、元僴を主領として兵四百を率ゐ兵艦を擁して上京し、山崎天王山に次し、遂に幕軍と劍戟を交ふ。已にして夷舶馬關を襲ふの報あり、元僴乃ち急遽故山に歸るや、脱藩の罪を以て幽囚せらる。元僴即ち責を負うて自裁す。後年贈正四位に叙す。

本山の邊に警固承はりし折　　福原元僴

守る人のやどるかりやのうら浪に寄らば碎かむ夷らが船

幽囚中の述懷

おしなべて曇り果てたる世の中に月影のみぞさやけかりける

辭世

苦しさは絶ゆる我身の夕煙空に立つ名は捨てがてにして

辭世　　福島政盛

進み出で賊に向ふ武士は今を限りの死出の山路

題しらず　　福田爲之助

國の爲さきがけせしは武夫の今や昔の人ぞ戀しき

題しらず　　福地道遠

君が爲つくす心の十寸鏡くもらぬ御代の光とやせむ

辭世　　福谷長好

國の爲岩秀も碎く心もて後へは引かぬ大和だましひ

〔眞木保臣〕和泉と稱す。筑後の人にして水田天神の祠官なり、頗る文武に長ず。夙に尊攘を唱へ、京師に入りて紳搢家に禮遇せらる。文久三年七卿の長門に奔るや、保臣之に從ひて專ら帷幄に參與せり。後、元治元年、姓名を變じて濱忠太郎と稱し、長藩の家老福原元僴に從て京に上り久坂通武等と天王山に據りて戰ひ、遂に敗れて自殺す。時に年五十三、明治廿四年四月、正四位を贈らる。

〔間崎則弘〕通稱哲馬、滄浪と號す。土佐藩の勤王家なり。藩廳に因れ死を賜ふ。後年贈從四位に叙す。

折にふれて　　眞木保臣

繩朽ちて引く人もなき小山田の山田の引板ぞ身の類ひなる

戊午の年三條贈右府公へ篙に封事を奉りたる其卷末に書付たる

都人如何にと見むは知らぬ火の心づくしに摘みし深芹

同公御落飾の後筍に送り奉りし

もとの身にあらで月見る秋の夜も昔ながらに袖や濡るらむ

囚中の作

斯かる子を育てしものと今更に悔ゆらむ母の心をぞ思ふ

題しらず　　植村正直

神國の尊き御代に生れ來て八千代壽く年の數かな

題しらず　　横島光顯

我が身には赤き心と一筋に思ひ違へし事ぞ悲しき

都を立出づべき仰を蒙りける時　　間崎則弘

古郷の土となるとも九重の都の春は戀しかりけり

出づる日の光輝く神國の入日の夷なにおそるべき

御國まもる劍佩く身の如何なれば夷に屈む腰やあるべき

題しらず　清岡成章

立ちかへる安藝の浦風波立てば又もや昔に逢はで果つべき

題知らず　清岡正道

蟹の行く横さの道に迷はじとしるしに立つる玉の御はしら

折にふれて

生ひ茂る國の醜草きり掃ひ道ひらきてむ太刀は此の太刀

題知らず　北代賢助

玉の緒は斷ゆなるものと打ち捨てゝ、留めまほしきは名のみ也けり

題知らず　岸信藏

よしや身は敦賀の霜と消えぬとも魂は殘りて御代を護らむ

題知らず　菊地民子

すめらぎの御國おもはゞ二つ無き命を徒に散らさずもがな

〔清岡成章〕土佐の藩士なり。通稱は道之助、翹青軒と號す。夙に尊攘の意見を藩廳に陳じて用ゐられず。遂に同志清岡正道、植原信吉、木下幸正、木下秀定、千屋芳樹等廿餘人と共に兵器を携へ、郡中野根山に屯集し、更に尊攘の建白書を提出す。藩廳乃ち衆を諭する者と偽し、吏卒數百人を遣して悉く之を囚へ、元治元年九月五日、郡中奈利磧に斬首す。成章時に年卅四、明治卅四年從四位を贈らる。

〔清岡正道〕前註の成章と同姓同郷同志たり。共に斬に處せらる、享年三十九。

〔高松保實〕季實卿の男なり。其の子實村卿は、慶應四年官軍先鋒に任じ甲信地方に勤王の志士を徵集し、大に國事に盡せり。
〔ぬかづきし云々〕南大門にて皇居に禮拜せしは、尊王の志篤き事知られたれば、國道ありと詠める也。
〔玉敷の御はし〕禁中の御階なり。
〔高山正之〕高山彦九郎なり。
〔高野長英〕蘭醫なり。夢物語の著あるを以て捕へられ終身禁固の刑に處せらる。天保十二年四月獄に火あり脱獄して諸國に潜居す。嘉永三年再び捕へられて自殺す。後年正四位を贈らる。

高松保實

ぬかづきし心を汲みてすめらぎに國道ありと我れや奏せむ

名古屋の前相公が九重の中を通らせ侍りしに車を捨て鑓をふられしを感じて詠みて贈り侍る

玉敷の御はしに近き大路とて車を厭ふ程も頼もし

高山正之昨年の今夜皇都にて管絃の御宴に陪せし事など語りて頻りに落涙しければ　　高木順

去年の今日雲井に聞きし琴の音を山松風のさぞしのぶらし

正之が綠毛龜の歌をこひければ

綠なる龜の毛衣うちはへて樂しかるべき君が御代かも

中津の儒者梁田正記が論語の崔子弑齊君一章を塗抹して武士の子弟を教へ導く由を聞きて贈りたる

孔子の文讀む人よりはくじの文消しけむ人ぞ我れはゆかしき

題しらず　　高野長英

歎かるゝ身よりも歎く老いの身を歎きこそすれ歎かるゝ身は

述懐　梅田雲濱

天の戸を押し明け方の雲間より出づる日影の曇らずもがな

獄中にて病みけるに、妻の事など人の言ひたりけるに

君が代を思ふ心の一筋に我が身ありとも思はざりけり

獄中に在りて伊丹重臣に答ふ

芦田鶴の芦間がくれに身を隠し空に思ひの音をのみぞ鳴く

題知らず　梅津正倫

竹の杖つくとも盡きじ老いて尚ほ憂き節繁き世を辿る身は

東武へ送られし時　鵜飼廣邦

あゆち潟友よびつぎの濱かけて鵆も心ありげにぞ鳴く

述懐　鵜飼知明

世にありて數ならぬ身も國の爲つくす心は人に變らじ

辭世　薄井爲和

君が爲め水にも火にも入らばやとかねて誓ひし命なりけり

〔梅田雲濱〕京都の儒者なり。通稱源次郎、名は定明、一に義質とよぶ。雲濱は其の號なり。風に尊攘の説を唱へ、藤田東湖、佐久間象山、高杉晋作、久坂義助等と交り、大に成す所あらむとす。安政五年、頼三樹等と共に捕へられて江戸に下り、六年九月十四日終に獄舎に死す。享年四十四。明治二十四年四月、正四位を追贈せらる。

〔鵜飼廣邦〕藩主齊昭の密旨を領して京に入り、其子知明と共に攘夷の密勅を奉じて藩主に傳ふ。遂に幕府に捕はれ小塚原に斬らる。知明と共に從四位を贈らる。

〔小河一敏〕通稱彌右衛門、豐後岡竹田の人也。藩主中川氏に仕へて祿五百石を食む。嘉永の末年、尊王攘夷を唱へ、兩肥二筑の間を歴遊し、眞木和泉守、平野國臣、宮部鼎藏、松村大成等の志士と交を結びて謀る所あり、後京師に上り、薩邸に寓して國事に竭せり。明治十九年、特旨を以て正五位に叙せらる、同年一月末日卒す、年七十四。著す所、王政復古義擧錄、義擧五事記、内覽秘錄、豐慈事錄等あり。〔辛未の年云々〕明治四年四月、横濱打拂事件に坐して幽閉せられし也。

平野國臣の訪ひたりし時　　小河一敏

皇國のくに風しらぬ醜人をやらはむ時の近づきぬかも

よしや身は碎けて瓦となるならばなれ皇國まもる魂をたのまむ

辛未の年の春島羽藩主の八代洲岸の家に閉籠められければ

なとて斯く疑はるらむ國の御爲もものもとに心も寄らぬに

述懷

冴えさえて吹く風よりも身にしむは人の心のあらしなり鳧

あらし吹く空の雲のさえざえに見る世中にも變るうつゝ世

折にふれて

片絲の彼方此方に亂れつゝ苦しき節のしげる世の中

かきくらし降る五月雨も晴るゝ日に晴れぬは己が思なりけり

古へを思ひつゞくる袖の上に秋の夜ふかき露ぞやどれる

めづる間も涙にくもる恨みあれや我主の露のみじか夜の月

三田尻より乘船して都に上る時　　南　八　郎

後れなば梅も櫻に劣るらむ先(さき)がけてこそ色も香もあれ

文久三年の冬、國を出でゝ但馬に赴く時よめる

泣く泣くも母に別れて出でゝ行くその床を何に喩へむ

川上の淀めるを受けて行く水の末に濁れる名をば流さじ

淀める世を濁る奴ばら斬り捨てゝ我が日の本の操守らむ

ひとすぢに思ひこめたる我が心など貫(つらぬ)かで止(や)みぬべしやは

栗田山にて絶命の時よめる　　南　木　義　次

櫻ばな散るを忘るな春山の嵐の誘ひ來ぬ間に

述懐　　三　島　三　郎

日の本を掩ふ雲霧をも拂ひ合ひ浦安の國となさばや

白髮の老を見捨てゝ國の爲め盡す眞ごゝろ神ぞ知るらむ

題知らず　　三　牧　秀　胤

あづさゆみ昔が御稜威を古へに引き返さばや益荒雄の伴

〔南八郎〕本名は河上彌一、變名して南八郎と稱す。長州の藩士なり。文久三年九月、平野國臣等と謀りて兵を但馬生野に擧げ、遙かに中山忠光の大和義軍に呼應す。幕府乃ち姫路、明石の各藩に命じて之を追討せしむ。時に彌一は農兵の一隊を率ゐ、山口村妙見堂に據りて奮闘す、然も衆寡敵せず、遂に同黨卯橋以下十二人、別盃を擧げて悉く屠腹す。彌一、一々介錯して其首を殞し、最後に自らの腹を割き、更に自ら刎て死す。明治廿四年十二月、贈從四位に叙せらる。

〔甲子の秋〕甲子は元治元年なり。
〔兒島草臣〕通稱は強介、下野宇都宮の勤王家也。少にして江戸に出で、平田鐵胤の門に學び、又水戸に遊びて藤田東湖に從ふ。後ち越智通植等其の徒數名と謀り、老中安藤信正を刺さむとするに及び家產を傾けて其資を給助し、豫め職者の爲めに後事を經紀し、石黑簡齋小山弘、横田呂綱等と相謀り、周旋甚だ力む。已にして事敗れ、通植之に死し、草臣亦た捕へられ、文久元年六月廿六日獄中に死す。年廿六。

題知らず　　國分信義

武夫が引きしぼりたる梓ゆみ放たでいかで絶えむ物かは

甲子の秋、家を出立ちける時　　兒玉忠栖

心あらば庭の草木に問ひてまし住まずなりての後の秋かぜ

水戸に忍び行く途上にて　　兒島草臣

大君の憂きを我が身に比ぶれば旅寢の袖の露は物かは

親々の受けし惠みを大君に報ふは親に仕ふなりけり

題知らず

古への世にも返らば仇波の逆巻く灘も何か厭はむ

高御座ちかく仕ふるたふれ等が枝折り捨てむ益荒雄もがな

草臣が志す道に出立つ別れに　　兒島草臣の母

劍太刀いよゝ研ぎつゝ武士の清き功を後に知られよ

草臣の囚にありし時

よしや身は露と消ゆとも草原の國にとゞめよ大和だましひ

陣志　　鈴木重胤

天皇の御楯となりて死なむ身の心は常に樂しくありけり

くろがねの楯にありとも向き立たば射て通さなむ益荒夫我れは

悼齋彬公逝去

天の下人の歎きも知らさずや雲がくるるも時にこそよれ

罪尊氏

横さまに行く足利のくなたぶれ筆に殺して飽き足らぬかな

伐外寇

負氣なく向ふ夷のいくさ船今も挫かむ伊勢の神風

文久三年内侍所に詣で奉りて

大君のまけのまにまに天地と仕へまつらむ彌とことはに

皇國

大空の掩ふ限りは皆ながらに吾が大君の御代にぞありける

大君の常世に生さむ玉垣の内つ御國は尊くありけり

〔鈴木重胤〕淡路國津名郡仁井村の人也。夙に國典に通じ、弱冠京阪の間に游學し、尋で江戸に遊ぶ。學風自から一派を爲し、平田篤胤と其名を齊うす。性忠孝の道に篤く、常に幕府の專横を惡み、尊王の大義を說く。文久三年八月十五日黃昏、本所小梅村の寓居にて刺客の爲めに斬らる。享年五十二。著す所、日本書紀傳、祝詞講義等數十種あり。後贈正五位を追賜せらる。〔常世に〕永久不變にの意なり。

「とつ國の云々」皇威を海外に輝かさむ事を詠める也。百敷の大内山とは禁中を云ふ。
〔世の爲めに云々〕常に善を施し正道を踏みて、天地神明に耻ぢざるを以て志と爲し度しとの意なり。
「朝夕に云々」四句は、長崎のさきくと累ねて綾なせる也、さきく云々は恙なく平安に在せと祈りし物を、其の甲斐なく身罷り玉ひし事の悲しさよとの意也。
「なかなかに云々」攘夷を實行せざれば、遂に洋夷の下風に立つに到らむさる憂き目を見んより、今の中に死ぬ方勝れりとの意なり。

折にふれて

とつ國の草木も靡け百敷の大内山の春の初かぜ

世の爲めに能き事なして天つちの神にし恥ぢぬ心ともがな

薩摩國より捕へられて周防國に歸る時長崎にて過ぐる頃母の身罷りける由を窃に守人の告げければ　　鈴木静雄

朝夕に母の命は長崎のさきく在ませと祈りしものを

おしこめられたりける頃

雫とくる囚屋の軒の滴垂りに日影見ぬ身も春をこそ知れ

生野懷古

國を憂ひ泣きし涙の玉ならむ哀れ生野の草の上の露

題知らず　　鈴木恒

さして行く死出の山路は迷ふとも如何で迷はむ武士の道

をりにふれて　　瀬口吉一

なかなかに死ぬこそ善けれ長らへて夷の國に膝折らむより

〔丙寅の彌生〕慶應二年三月なり、
〔小松帶刀〕鹿兒島藩士なり、名は清廉、通稱尚五郎、後ち帶刀と改む。慶應年中討幕の義を唱へ、岩倉具視公に從ひて盡す所あり、王政維新に及び、召されて參與と爲り、尋で外國事務局判事に任じ、明治三年從四位に叙せられ、同年六月卒す、
〔吉田矩方〕吉田松陰なり、
〔武藏野の云々〕一二の句は幕府の專横を極むるを謂ふ、四句大内山は禁中の稱なり。
〔隼人〕振舞の神速なる人の義にて、猛き士を云ふ。

丙寅の彌生十日餘り山里に籠りて　　小松帶刀

世の中の便りも聞かずなりしよりなかなか物は思はざりけり

題知らず　　小橋以義

國の爲め盡し盡しゝ眞心は百世の後も朽ちせざらまし

吉田矩方の死を聞きて　　小林良典

鷲鷹の猛き心は群雀むらがるとても如何で知るべき

獄中にて日下部信政に贈る

君が名は都の外の梢より仄かに聞くと知るや知らずや

述懷　　小室正德

武藏野の時雨に影は見えざりき大内山に月は澄めども

題知らず　　是枝貞室

隼人の薩摩の子等の劒太刀拔くと見るより血けぶりぞ立つ

一さかり有りての後の櫻花ことふの儘に散るいさぎよさ

題知らず　　吉東備

〔鯉淵要人〕常陸國茨城郡諏訪神社の祠官にして武技に達す。萬延元年三月三日、井伊閣老を櫻田門外に要撃して其首を獲、擔ひて辰口に至り重傷に堪へずして斃る、年五十一、明治卅五年、從五位を贈らる。

〔權田直助〕武藏國入間郡の人なり。平田篤胤の門に入りて皇學を修む。慶應三年、西郷隆盛等と謀り、飯田、落合等と共に國事に奔走し、維新後に監察司知事、大學中博士に任ず。明治四年横濱打拂事件に坐し幽囚せらる。廿年六月歿す、年七十九。

君の爲め盡しゝ事も水の上の泡と消え行く淡路島びと

題知らず　　鯉淵要人

ともすれば月の影のみ戀しくて心は雲に立ちまさりけり

山陽道の鎭撫使に屬きて、湊川に至れりけるに、水瀨絶えてありければ　　權田直助

皇軍の駒のひづめも濡らさじと湊川原の水や絶えけむ

同じ折、生田の森にて詠める

君が爲めいく田の森の下草も草むす屍いく世經ぬらむ

やむごとなき御邊りの公の、御尤を蒙らせ給ひつと承りて

仰ぎ見る八重の御垣に秋立ちて嵐さそふと聞くはまことか

老後に、飯田武郷、落合直亮の兩氏に會して

今さらに肝こそ冷ゆれ薄ごほり共に踏みにし昔おもへば

題知らず　　後醍院眞柱

古き太刀研ぎみ磨きみ仕へなむかへり見もせぬ大和だましひ

修學院に行幸し給ひける日詠みて奉りける　三條實萬

鶯の嬉しき音こそ聞えけれ君がやすらふ山松の影

祝言

政事は道直かれと天皇の治めます世は彌榮ゆべき

折にふれて　三條西季知

のどかなる昔の風に薫らせて雲井の櫻見む春もがな

山を拔き海をもせかば堰きつべし唯一筋の誠徹らば

ながめつゝ月日も數多移りけり心盡しの春秋の空

仕へつゝ身をふるもいと知らぬこそ臣の道とは言ふべかりけれ

君がため思ふ甲斐なき塵の身も心に塵はすゑぬなりけり

清からぬ名は流さじと思ひけり如何なる水のうき瀬なりとも

碎けても玉は光の殘るべし思へば人は名こそ惜しけれ

文久三年故ありて長門の國に下りける時月の明かりける夜

斯くて見る我を咎むな秋の月心は昔に猶仕へけり

〔三條實萬〕實美公の父なり。中宮大夫公修の子、母は關白輔長の女、享和二年生る。孝仁、孝明の二帝に歷任して正二位內大臣に至る。晩年幕府の讒を受け官を辭めて洛南に閑居す。安政六年五月三日落飾して澹空と號し、洛東一乘寺に移り、同年十月六日薨ず年五十八。明治二年忠成公と諡し、十八年祀りて別格官幣社に列し梨木神社と號す、同廿二年正一位を追贈せらる。

〔三條西季知〕錦小路賴德、三條實美等と共に尊攘に盡瘁す。所謂七卿の隨一人なり。

〔三枝眞洞〕和州群山淨專寺の住職たり。夙に尊王を唱へ、攘夷先鋒の志を懐きて中山忠光の南山義擧に加盟し各所に奮鬪す、敗軍の後諸國に潛居し、慶應三年再び入京して親兵に加はる、明治二年英使初めて入朝するや、慷慨の餘り同志林田衞太郎と謀りて之を要撃す然も衆寡敵せず林田は自殺し、眞洞は捕へられて粟田口に刑せらる。

〔齋藤監物〕常陸國那珂郡靜神社の社司也。萬延元年三月、金子、有村等と共に井伊直弼を刺し、細川邸に自訴して死す。贈從四位に叙す。

吹く風に我が身をなさば久方の月の邊に雲はあらせじ

これを世の姿ともがな秋の月向ふ空には雲なかりけり

成山先生を訪ひて　三枝眞洞

負氣なく御代の歎きも語りいでて相逢ふ今日の浮世とはなし

題しらず

芭蕉葉は聲たててさへ折れにしをなど崩折れて身を思ふらむ

題しらず　齋藤監物

いや猛き神に誓ひて武士の思ひいる矢は透らざらめや

事あらば告げよ隅田の都鳥おなじ浮寢の友と思へば

咲き出でて散るてふものは武夫の道に匂へる花にぞありける

志を遂げなむとする折しも雪降り出此や天の賜ならむといと悉くて

國のため積る思ひも天つ日に解けて嬉しき今朝の淡雪

獄中の作　齋藤強

風寒き囚屋のうちに臥しなれて寒しともなし木枯の音

　　辭世　　齋藤定廣

天地に恥づる心は消えてゆく露の命の露ほどもなし

　　題しらず　　佐佐眞武

我が佩ける太刀のたゞ反りいやすぐに斬る心は唯君のため

　　夷狄人の寇し來るも知らで諸人の武藏なる上野の花に浮かれたるを見て　　佐々木高行

吹く風にやがて散りなむ山櫻しばし浮かるゝ人心かな

　　櫻田の義擧を聞きて

益荒雄の打つ太刀風に櫻田のさかりの花は雪と消えつゝ

　　佐野竹之助の壯擧をめでて

よしや君花に風は嘆すとも千代まで消えじ倭魂

　　題しらず　　佐生義直

五月闇名乘りて通る時鳥昔しのぶは刈萱の關

「天地に云々」身は捕へられて死刑に處せらるとも、素より是れ皆上の誠心に出づるものにして、惡事を爲したるにあらねば、天地に恥づる所は毫も無しと也。作者齋藤定廣は通稱を[illegible]六郎と云へり。

「我が佩ける云々」二句太刀のたゞ反りとは直ぐの義にて曲りなき意に取り成して云へる也。

「夷狄人」洋夷を指して云ふ。

「櫻田の義擧」萬延元年三月三日、金子教孝以下十七人の義士、井伊掃部頭を櫻田門外に要撃して之を刺せしを云ふ。

「佐野竹之助」櫻田の義士也。

題しらず　　内山有馬四郎

賤が身を時雨と共にふり捨てて高天原の月ぞさやけき

題しらず　　内田萬之助

日に愛でし我が撫子を眺むれば益荒猛夫も涙こぼるる

辭世　　江藤新平

益荒雄の涙を袖にしぼりつつ迷ふ心はただ君の爲め

國を思ふ人こそ知らめ益荒雄が心つくしの袖の涙は

姫島に放たれける頃赤馬關にて攘夷の事を聞きて、大島の配所にありける藤茂視が許に送る　　江上武要

諸共に秋津島根に圓居して轡うちならす時は來にけり

辭世　　江幡廣光

劍太刀御國の爲めに盡さずば天照る神に向くる面あらじ

題知らず　　遠藤允信

今の身に獄中の月を見る事は唯だ此の秋や限りなるらむ

「內田萬之助」本名は河邊元善、水戸の藩士なり。文久二年、同志と共に老中安藤信睦を坂下門外に要撃し、翌日自刃す。明治卅五年、贈從五位に叙す。

「江藤新平」佐賀の人なり、鍋島侯に仕へて微臣たりしが、三條公以下七卿の太宰府に謫居せらるゝや新平脱藩して一卿に從ひ國事に盡す所あり明治五年司法卿と爲り六年參議に任ず。時に西郷隆盛等と征韓論を唱へ、議行はれざるを憤慨し、遂に兵を佐賀に舉げ、戰敗れて梟首せらる。時に明治七年四月十三日、年四十一。

庚午歲同詠鶯入新年語　大久保利通

君が世の千代をことほぐ鶯の初音のどけき朝ぼらけかな

子日

君が代の千代を手に取る心地して子の日の小松引くぞ嬉しき

夏日同詠曉子規

ほとゝぎす聲の響きに朝日山あけ渡り行く心地こそすれ

名所螢

風たゝぬ夕べのまにも涼しきは賀茂の川邊の螢なりけり

題知らず

君が名を玉と磨きし夏草の露のみめぐみ深くもあるかな

花散ればふたゝび訪はぬ世の人を心ありとも思ひけるかな

折にふれて

雨風におい[illegible]命をまかせつゝま[illegible]はぬ色に咲く櫻かな

雲に昇り海に潛むも時ありて龍の動きの安くもあるかな

〔大久保利通〕鹿兒島の藩士なり。始め城下に住し、後に甲突川の東に移る、因て甲東と號せり。西郷隆盛、木戸孝允、小松帶刀等と共に岩倉公を輔佐し、復古の功を奏して從三位參議に任ぜらる。明治十年西南の役起るや、利通西京に赴きて專ら征討の事務に參す。既にして事平ぎて歸京し、勳一等に叙せらる。翌年五月十四日參朝の途次、刺客島田一郎以下六名の爲めに麴町紀尾井町に刺されて薨ず。年四十七、翌日、右大臣正二位を追贈せられ、明治卅四年五月更に從一位に叙せらる。

山階宮の御殿に召され、有難き仰言かゝぶり、はた御志の程をも親しく伺ひ奉りて、感激の餘りに詠める

ひさかたの雲居に高く響くなり群れを離れし靑田鶴のこゑ

蟲だにも惠みの露に馴れ馴れて草葉わけ出でおのが音を鳴く

弔魂　大久保春野

學びをへて今日よりいざと出で立ちし心づくしの果てぞ悲しき

題知らず　大久保親春

あづさ弓矢たけごゝろを引きかけて引き返さばや武士の道

述懐　大山平次郎

芳野山はな咲く時におくれじと心せかれて行く旅路かな

東郷大將に贈る　大山巖

天地も動かむばかり聞ゆなり對島の沖の勝どきの聲

甲子の冬よめる　大神繁興

めでて見し萩も薄も冬枯れて野の邊さびしく成りにけるかも

〔ひさかたの〕日刺方の義にて、天また雲などに冠する枕詞なり。
〔群れを離れし〕拔群に勝れ給へる殿下の御志を、田鶴に準へて云へるなり。
〔蟲だにも〕利通自身を云ふ。
〔梓弓云々〕益荒雄の雄々しき心を奮ひ起して、廢れたる武士道を振興しその隆盛なりし古へに引返さむとの意なり。
〔天地云々〕四句對島の沖の勝鬨とは、露艦を撃滅せるを云ふ。
〔甲子の冬〕甲子は元治元年なり。

松陰先生の東行を送りて　入江弘毅

此の道のまことならずば大八洲月日は今に照らずなりなむ

松陰先師の墓下に梅下を挿むとて

年を經てかはらぬ梅の花の香を手向くるさへも心はづかし

辭世

後の世も今もむかしを照らすらむ物思ふ身は月をまばゆき

獄中にて詠める　乾嗣龍

いましめの繩は血しほに染みぬとも赤き心はなどかはるべき

述懷

おやおやの親より受けしすべらぎの厚き恵みは豈忘れめや

安政五年十一月都を出づる日　伊丹重臣

吹きおろす比良の根おろし風さきに粟津の原は雪ぞ打ち散る

鏡山を見やりて

曇らずばいざ立ち寄りて鏡山わが眞ごころをうつさむ物を

〔入江弘毅〕長州藩士也。尊攘の大義を貫徹せむと欲し諸隊士を率ゐて山崎天王山に屯集し建白歎訴せしも採用せられず、遂に禁闕に迫るに及び鷹司邸に於て薩會彦越桑名等五藩の大兵と奮闘す、一橋の銃隊亦敵に加はり苦戰云ふべからず。北の方穴門際に於て彈丸に中り、久坂義助、寺島忠三郎等と共に割腹す。時に元治元年七月十九日なり。

〔伊丹重臣〕梅田雲濱の歌に、獄中に在りて伊丹重臣に答ふ、芦田鶴の芦間隱れに身を隱し云々の作あり、參照すべし。

宇津の山にて

知らざりき宇津の山邊のうつゝにも夢にも斯かる旅に出でむとは

故郷を思ひ遣りて

我が袖の濡るゝにつけて故郷の母の袂も思ひやらるゝ

折にふれて

月さへもしづ心なく見ゆるかな豐葦原の風のさわぎに

題知らず　稻田重藏

時ありて咲き散るとても櫻花なにか惜しまむ日本（やまと）だましひ

獄中作　今中守直

おほ空の月の光はさやけきに風吹き掃へ八重のむら雲

辭世　今中守忠

たとひ身は露と消ゆとも武士の心の魂のくもり果つべき

春日同詠野梅　今村宗博

旅人の夢もかをりに結ぼほれ伏見の田居に梅の花散る

「知らざりき云々」業平朝臣の歌に、駿河なる宇津の山邊のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり、とある詞を取りて詠めり。

「しづ心」靜かなる心を云ふ。

「稻田重藏」櫻田の義士十七士の內の一人なり。重藏奮戰十餘創を蒙りて死す、時に年四十七、明治卅五年從五位を贈せらる。

「今中守直、守忠」筑前の藩士なり。勤王を唱へ、奸賊を除かむと謀り、却て同志十餘人と共に獄に投ぜられ斬に處せらる。時に慶應元年十月廿三日、兄守直卅一歲、弟守忠廿九歲なり。

題知らず　　僧　胤康

數ならぬ身にしあれども君が爲め盡す誠はたゆまじ物を
みじか夜の夢と思へどあぢきなく覺めし跡だに言の葉もなし

京都出陣の時、紫宸殿の大庭に召されて、恐多くも天顔拜し奉るに、尊さの涙止まり難し　　井田義貫

うきにこそさてしもあらめ嬉しさの涙は何を取りたがふらむ

題知らず　　井田好德

山川の雪の玉みづ解けそめて道あたらしき春のあけぼの

幽囚中妹婿來島鼎之進に贈る書の端に　　井上馨

おしなべて惜しまるゝ花惜しむ花きのふに變る今日の木がらし

辭世　　井上和彦

かげろふの有るか無きかの身をつみて人の痛さも悟りこそすれ

述懷　　井手孫太郎

捨小舟よる瀨の汐のさし引きは君が心にまかせはててむ

〔僧胤康〕武藏國豐島郡の人也。安政の初年勤王の大義を唱へて諸國を遊說し、日向延岡に至りて同藩の佐幕に與するの不可を說き、若し延岡藩主が彥根侯の戚たるを以て肯ぜずんば、當に藩主を責すべしと論ず。有司大に驚きて之を捕ふ。慶應二年遂に獄中に死す。
〔うきにこそ云々〕憂き時に涙の零るるは道理なれども斯く嬉しき時に臨みて、何を取違へて涙の零るゝ事ならむと也。
〔かげろふの云々〕身をつみてとは、身を抓（つめ）りての意なり。

〔久米幹文〕國學者なり。水戸烈公の知遇を受け、夙に尊王を唱ふ。公薨ずるに及び忌諱に觸れて幽閉せらる。明治十五年大學講師と爲り、尋で第一高等學校教授に任ず、廿七年十一月歿す、年六十七。

〔日柳政章〕讃岐國那珂郡の勤王家なり。西郷、木戸、高杉等と交りて尊攘を高唱し、高松藩に囚へらるゝ事四年、明治元年免されて京に入る、朝廷賞して御盃を賜ふ。尋で東征の役に史官を以て總督宮に隨ひて越後に入り、病を得て柏崎に歿す、享年五十二。

題知らず　　久米幹文

ますらをが戈横たへてうそぶきし面影うかぶ水の上の月

題しらず　　日下部裕之進

五月雨の限りありとは知りながら照る日を祈る心せはしき

獄中勝野輝卿に贈る

君が爲沈む囚屋は諸共に玉の臺の心地こそすれ

詠史　　日柳政章

久方の月より高く聞ゆなり越の山邊の雁の一聲

題しらず　　岡司視用

君が爲つくせや盡せ己が此の命一つを亡きものにして

室津の賀茂の社にて

ねぎかくる賀茂の社のよるべ水清きに運す事をしぞ思ふ

辭世

よしやよし世を去るとても我が心皇國の爲めに猶盡さばや

都の獄舍にて詠める　　大野四郎左衞門

研ぐ太刀にうつる此の身はやつれても撓まぬ物は日本魂
おもひきや檻のひま洩る月影を今年も袖に宿すべしとは

題知らず　　大庭恭平

なゐ荒き外の濱邊は潮涸れて秋さへ寒き月を見るかな

獄中にて

罪なくて見ばやと人の願ふらむひとやの中の月を知らずや

辭世　　大石良信

我もまた神の御國の種なればなほいさぎよき今日の思ひ出

折にふれて　　大和田外記

すべらぎの憂きを訪らふ甲斐もなく又來る春を如何に過ぐらむ

捕はれて敦賀にありける頃、心ならずもあら玉の春を迎ふれば月さへ空に朧なるを見て

いつしかもすみける物を春の月など中空にうちかすむらむ

（一）大庭恭平　會津の浪士なり。名は機、夙に尊王攘夷を唱へ、徳川幕府の專横を憤り、私に之を足利に比す。文久三年二月京都に上り、同志師岡正胤、西川吉輔、長尾郁三郎、三輪田元綱等と等持院に至り、足利尊氏、義詮、義滿の木像の首を刎ね、之を三條橋に梟す。後捕へられて信州上田藩に幽閉せらる。維新後、北海道開拓に赴きて病歿す。「罪なく」云々」徒然草に「顯基の中納言の言ひけむ、配所の月、罪なくて見むこと、さも覺えぬべし」とあり。

「冬枯れの云々」冬がれの木の葉とは紅葉を云へる也。もみぢ葉は紅きものなれば、赤き心のと續けたり。

「つひに行く云々」在原業平朝臣の歌に「遂ひに行く道とはかねて聞きしかど昨日とは思はざりしを」とあるに據りて詠めるなり。

「神は如何に」神とは現津神、即ち天皇を申して云へるなり。

「淀の川」山城國西乙訓郡なる淀川を云ふ。

辭　世　　大竹捨己

冬枯れの木の葉と共に散るものは赤き心のもの丶ふと知れ

兩親へ贈る

親と子の頼みも絶えて今は只たましひ殘る古郷の空

業平朝臣の辭世を思ひ出だして　　大谷重道

つひに行く道とは聞けど梓弓はるをも待たぬ身とぞなりぬる

山崎陣營にての今様　　大谷茂樹

月の桂の男山。都の方を眺むれば。雲霧深き九重の　神は如何か在すらむ。

辭　世

露の身を君に捧げし眞ごゝろは後にぞ人の思ひ知るらむ

都へ送らるゝ時　　大田雅義

身の果てを如何にと思ふ心よりいとゞ身にしむ淀の川かぜ

獄中の詠

大君のおほき御言の掛かればや斯かるひと屋の内もゆたけき

「賀茂の神社」京都府愛宕郡上賀茂村官幣大社、賀茂別雷神社なり。

「咲かで散る云々」我が命の絶えむ事は惜しくもあらずどうでも宜しけれど、尊王攘夷の功成らざるが口惜しとの意也。

「心あらば云々」其も憂世の風に堪へねば、やがて深く命を散らさむに、櫻花よ、心あらば今暫らく待ちて、我と共に散れよかしと也。

「やがて我れ云々」追ひしかめどもとは、追ひ付かむ事なれど、の意なり。

賀茂の神社に詣でて詠める　大田權右衛門

これや此のわきいかづちの神の宮わきて涼しき森のした風

述懷　大高祐武

咲かで散る花こそ惜しめ玉の緒の絶えなむ事はさもあらばあれ

住み馴れし人屋の内は何かあらむあはれ道なき世こそつらけれ

君が爲めあだし夷を攘はずばながらへぬべき心地こそせね

心あらば暫時またなむ櫻花我れも憂き世の風にたへねば

獄のほとりに草いたく茂るを見て

庭草のしげるが上に置く露は果敢なく消ゆる我が身なりけり

大津氏の再び絶食せし時うたひて聞えける

やがて我れ追ひしかめども死出の山しばし後るゝ事ぞ悲しき

題知らず　大津綱之

國の爲め契りし事も散りぢりにさそふ憂世の風はうらめし

こゝろなき童べだにも夷等をにくむ心のありと知らずや

獄中にて詠める

國の爲め斯かる憂き目も今さらに何いとふべき大和だましひ

「國の爲め云々」獄中に投ぜられて、斯かる憂き目を見るも、國を思ふ眞心より釀しゝ事ぞと思へば、我が日本魂は撓まずして憂き目も憂しとは思はずと也。

辭　世

思ひきや心のはしの一ことも成さで浮世を今捨てむとは

家を出でて都に上らむとする時　　大鳥居信臣

世の常の旅とは言へど筑紫の海ふかき心を抱きてぞ行く

憂き事の身に積りなば積れかし命の限り耐へてしも見む

「世の常の云々」此度立出づる旅は、常の旅と異なる所なき旅なれど、心は常の旅と異なりて、尊攘の大志を抱くもの也との意なり。

都に上る時　　大利正樹

君が爲め都の空に急がれて八重の山路は高しともなし

辭　世

もとよりの輕き身なれど大君に心ばかりは今日報ゆなり

「もとよりの云々」我が身は素より輕賤の身にて、世に有無を問はるべき身には非ざれど、心ばかりは今日大君の爲めに報い奉り得たりと也。

題しらず　　大腰正道

呉竹の世のうきふしはしげけれど立てし操はえこそ變らね

流上畔にて別盃の折に詠める

あかねさす朝日の岡に鳴く雲雀あまつ御空に聲やあげなむ

楠公を憶ひて　大里正樹

楠の木の匂ひ流しゝみなとがは水し無けれど袖は濡れつゝ

折にふれて　大橋卷子

世の人は音づれ絶えし我が宿を訪ふも嬉しき春のうぐひす

八百萬神もあはれと受けたまへ我が身にかへて祈るこゝろを

武藏野の露と消えゆく人よりもおくるゝ袖のやる方ぞなき

君の爲め世の爲め思ふ武夫の清きこゝろは神ぞ知るらむ

いつまでか曇り果つべき高光る天つ日つぎの大宮どころ

天がける魂の行方は九重の御階のもとを猶はや守らむ

題しらず　奥野常業

死ぬる身は更に惜しまず思ふこと遂げぬ事こそ恨みなりけれ

述懷

愚かなる身にも愚かは知られけりいとはしき世に迷ふ愚かさ

「楠の木の云々」楠公の戰死せし湊川は、涸れ果てゝ流るゝ水は無けれど其の世の事どもを思ひやれば、涙に袖を濡らすと也。「八百萬云々」我が身命に替へて皇國の幸を祈る心を、天神地祇よ受け入れ給へと也。「いつまでか云々」幕府の横暴を極めて天日を曇らせつゝありと雖も、何時までか世は曇りてあるべき、やがて復古の光ある御代とならむと也。「死ぬる身は云々」此の儘に死して逝く身は更に惜しとは思はざれど、討幕攘夷の事を遂げざるが口惜しと也

〔落合直亮〕武藏國多摩郡駒城野の士也。堀秀成の門に入りて皇學を修む。慶應三年、飯田武鄉、相良總三、權田直助等と結び、三田の薩邸に入りて國事に盡瘁す、後ち江戸城西丸を炎上せしめしは、豫て直亮の謀に出づと云ふ。明治二年伊那縣判事に任じ、尋で大參事に進みしが、四年横濱打拂事件に坐し幽囚せらるゝに至りて復た振はず。後年鹽竈の宮司となり、明治廿七年卒す、年六十八。

〔八重たなくも〕八重に棚引く雲、即ち闇雲を云ふ。

〔垂乳根〕父母を云ふ。

南朝懷古　落合直亮

そのかみは如何にありけむ今だにもなほ袖ぬらす露の言の葉

東北御巡幸に際し途上謁を賜ひたる時

海山にさらさむ屍ながらへて今日のみゆきに逢ひにけるかな

述懷　尾崎朝香

天つ風八重たなくもを吹きはらへ隈なき月の影見まくほし

垂乳根の教へも今は身にしみて昔を忍ぶ我が涙かな

題しらず　尾崎孝基

もののふの赤き心は紅葉の散りての後のにしきなりけり

題しらず　岡崎維影

身罷らば吾が邦に軻遇突智の御魂うけえてあらび出でなむ

思ひつる魄はとほさで梓弓ひとやのうちに入るぞ悔しき

思を述ぶる

鳴神のおたけびなして横濱にすだく夷をいつかはらはん

五月五日獄中にて詠める

今日と言へば宮も藁屋も軒に葺く菖蒲も分かぬ世にぞ有ける

世の事は絶えて聞えぬひとやにも音なふものは山郭公

題しらず　岡部忠吉

筑波根の山のこなたに宿もがな憂き世を忍ぶ隱家にせむ

題しらず　岡部兼知

我れ死なば四つの頭に八つのひぢ誠忠の鬼となりて參らむ

東禪寺へ討入の時　岡見留次郎

世の中に打つを忘れていざさらば死出の山路の花を眺めむ

もののふの大和心を人とはば國のあらしに散るぞうれしき

武藏野の原になびきし下草も夷とともに刈りはらふらむ

題しらず　岡本豐嗣

朝夕に見れば心もおのづから匂ふ軒端に花ざくらかな

辭世　岡本次郎

〔岡部忠吉〕通稱は三十郎、櫻田の義士也。井伊直弼襲撃後、京師に遁れて攘夷の義擧を促つ。已にして金子等縛に就くを聞き再び江戸に歸りて捕へられ、同志と共に斬らる、年四十三。明治卅五年從五位を贈らる。

〔我れ死なば云々〕予が死せし後は、四面八臂の猛き鬼神となりて、尙ほ君の爲めに誠忠を竭し奉らむと也。

〔東禪寺へ云々〕洋夷の傲慢無禮なるを憤慨し、文久元年六月廿八日拂曉同志高畠胤正、平山繁義等と共に、江戸品川東禪寺の英館を襲撃せしなり。

題しらず　　　　小川忠篤

敷島の我があきつすの武士は死ぬとも朽ちじやまとだましひ

述懷　　　　小川師人

臥して思ひおきて算ふる年月をはかなく送る我が命かな

題しらず　　　　小田朝儀

あづま路の武藏の春はたちにしと雲井にあげよ葦田鶴の聲

君を思ふ矢たけ心の梓弓春に逢ふ瀨の玉章もがな

元治元年十一月二十日、和田嶺樋橋戰地にて靑木宗保の鉢卷に書きつけける　　　　小澤正弘

武士の弓とる身こそ悲しけれ道ふむ人も仇となる世は

夢中に詠める

敷島の道ある御代に立ち歸る時こそ見えめ赤き心は

會友

萑おふる宿に住めども武士の赤き心を語るいとけき

〔小田朝儀〕通稱を彦三郎と云ふ。水戸の藩士也、攘夷の勅書水戸に下るや、先づ内奸安藤對馬守を斬除するに非れば勅意を遂行する能はずと、即ち平山繁義、高畠胤正等と謀り、文久二年正月十五日早朝、坂下門外に之を襲ひ、奮闘して斃る、享年三十。明治卅五年、從五位を贈らる。

〔小澤正弘〕信州高島藩の勤王家也、通稱は彌次左衛門松所と號す。明治元年、中山道官軍先鋒總督岩倉公、兵を帥ゐて下諏訪に來るや、正弘藩兵に將として官軍の嚮導をなせり。明治卅三年十一月歿す、年六十五。

〔金子教孝〕通稱は孫二郎、水戸の藩士也。林忠左衛門高橋多一郎等と攘夷の先驅たらむ者を長岡原に召集するや、藩の老臣鳥居瀬兵衛、兵を率ゐて之を攻む。同志二百餘人、邀撃して互に殺傷あり衆、終に敗れて解散す。教孝高橋と遁れて江戸に入り幕府の執政非伊直弼を制して攘夷の實を擧げんと謀り同志卅四人を糾合す。吉村當左衛門、同雄介、高橋多一郎、林忠左衛門、佐野竹之助、吉成恒二郎、野村彝之助、大關和七郎、黒澤忠三郎、廣岡子之次郎、山口辰之介、森五六郎、杉山彌一郎、蓮田市五郎

庚申の歳二月十八日、家を出で立ちし時、障子に書き記しける

金子教孝

ますかゞみきよき心は玉の緒の絶えにし後ぞ世に知らるべき

同二十日、笠間より日暮稻田に到りて

君の爲めひそみ行く身の旅ごろも濡るゝも嬉し春のあわ雪

三月朔日、山崎樓にて

ますら雄が涙に袖をしぼりつゝ迷ふ旅寢もたゞ國の爲め

三月五日、富士川にて

ものゝふの鏡なりけり駿河なるするどき河の清き流れは

同九日、四日市に到り、漫（そゞろ）なる事にて汲日氏の手に捕へられける

時よめる

潜み來し濡るゝが上の濡れ衣たへ忍ぶにも甚なむとぞ思ふ

安政三年五月中頃、君の御爲め切に思ひこめて

かへせとの君のみことは梓弓世をひき返す事にぞあるらむ

齋藤監物、[illegible]八、廣木松之助、森山繁之助、稻田重藏、岡部三十郎、關鐵之助、增子金八郎、海後嵯峨之助これ也。萬延元年三月三日未明、品川驛の虎屋に會して酒を汲み、共に愛宕山に登りて装を整へ、井伊直弼を櫻田門に要す。已にして直弼轎に駕して至るや、衆突進して之に逼る。時恰も大雪霏り、守衛の士兵戟を能くせず、直弼遂に刺さる。衆相別れて去り、教孝は遁れて京に走りしが、後に鳥羽に執へられ、文久元年七月獄に處せらる、年五十八。明治廿四年、正四位を贈らる。

安政三年長月の頃、小石川の屋形に召されて、國民のなやみの程問はせ給へりし時に

たゞならぬ恵の露は民草の末の葉までぞ置き添はるべき

吉野の宮の古へを忍びて

いく春か心ならずも三芳野の花のしづくに袖濡らしけむ

長岡驛に建てし大日本大小平忠招楠公魂表を記されたる杭の側面に書き付けゝる

なゝ度も生きかへり来て皇國を護りの魂とならむますらを

菊水の清き流れを長岡に汲みて皇國の[illegible]をすゝがむ

題知らず

葉ぶ雁にこと問ひてまし深雪ふる蝦夷が千島の波風の音

述懐

大君のおほ御心をやすめずば二たび郷に歸らざらまし

いひ捨てゝ言はぬ誠はことさらに我が心こそ思ひそふるれ

獄に下りける時　河合宗元

しひて吹く嵐のさそふ紅葉にも猶ほ紅ゐの色はかはらじ

〔しひて吹く云々〕獄中に幽閉せられて、さまざまの憂目に逢ふと雖も、君を思ふ赤き心は常に變ずる事あらじとの意。

幽囚中に詠める

いとゞしく物思ふ秋のいやましに月だに晴れぬ此の頃の空

辭世

いたづらに死ぬる物とや人は見む御國の爲めに捨てし我が身を

〔いたづらに云々〕此歌の末句、一本に「盡す我が身を」とあり。

辭世　河合宗貞

此のまゝに身は果てぬとも生きかはり居り盡さむ醜のやつばら

〔此のまゝに云々〕身は果てぬともの句、一本に、身は捨つるとも、とあり。

題知らず　河邊元善

思ひきや心しづかにすみだ川わたるも今日を限りなりとは

辭世　河村季興

なき魂を長門の國に殘し置きて世を思ふ君のかげに添はばや

〔なき魂を云々〕此の歌、一本に「なき魂を長門の浦にとらへて、世を思ふ君のかげに添はななむ」とあり。作者を河村能登守季興とあり。

同志の人々と阪下にて事遂げむとしける時　川本貫以

父母に受けし我が身を君の爲め世の爲めにとて今捨つるかな

〔阪下に云々〕安藤對馬守を阪下門外に要撃せんとせし也。

題知らず　　川崎孫四郎

形見とて殘す言の葉身に添へてかならず匂へ軒のたちばな

題しらず　　川上忠固

手筒山みね吹きおろす春風に益荒武男が髪さかだちぬ

月影をとく仰がまく思はへど尚ほ立ちかくす夜半のうき雲

白雪の消ゆる隙さへ待ち佗びて忍びねになく谷のうぐひす

しら雪のうづむ中にも色かへぬ松を心の友とこそ見め

題知らず　　春日仲襄

惜しからじ君と民との爲めならば身は武藏野の露と消ゆとも

人なみの心のかぎりつくしてはのちこそ吹かめ伊勢の神風

題知らず　　楠栖治郎左衛門

神無月木々のもみぢと諸共に散り行く物は我が身なりけり

題しらず　　掛橋和泉

しこえみし拜みても見よ秋津洲やまと島根のすめらみかどを

「川崎孫四郎」水戸の勤王家なり。名は健幹、初め健蔵と稱す。水藩の安藤帯刀に仕へ、竊に國事に周旋する所あり。後、京攝の間に潜居して大に爲す所あらむとす。幕吏之れを偵索し慶應三年三月廿三日黎明、捕手數名を率ゐて來り圍む。健幹その免れ難きを知りて自刃す、年三十四。明治卅五年十一月、正五位を贈らる。

「月影を云々」遠く王政復古の御代に爲さまほしく願へど、闇雲鎖しをりて心に任せぬを慨嘆する心ばへ也。

「しこえみし」醜の洋夷の意也。

「月照の墓に云々」平野國臣が、月照の墓の燈籠に、「ながらへばかにかく合ある物を、過ぎにし人の心短さ」と書き記し、歎を云ふ。

「短さと云々」信月照を弔ひに、心短くも世を辭せし君かなと追悼せし人に、矢張日比を[illegible]ゝ[illegible]ける事の[illegible]ましさよと也。

「鐘つきて云々」とおもひとは終結を告ぐること、しじまとは無言の業を云ふ。

「神無月」陰曆十月の異稱。此月八百萬の神々出雲の大社に集ひ給ふとの俗傳によるとも云ひ、雷無月の義とも云ふ。

平野國臣、京都の獄中に斬られたるを聞き、月照の墓に、過ぎにし人の心短さと書附けたるを思ひ出してよめる

吉田正實

みじかさと書きにし人も今は早おなじ草葉の露と消えつつ

辭世

もろともに盡しし人は昔いした殘る此の身の置き所なし

池田屋に赴く時髮結とてよめる　吉田秀實

結びても又むすびても黑髮の亂れそめにし世をいかにせむ

大和へ首途の時八幡宮へ奉る　吉田良秀

八幡神すめぐにあはれとおぼしなば内外いえみし攘へ給へや

待郭公　吉川忠行

鐘つきて待つは今宵にとおもひねとしじまに傚ふ時鳥かな

題しらず　吉見喜代八郎

名にし負ふ神無月こそ物うけれまだ罪はらす神だにもなし

壬戌初夏廿三日の朝淀川を溯りて　　吉村重卿

藤の花いまを盛りに咲きつれど船いそがして見かへりもせず

題知らず

曇り無き月を見るにも思ふかな明日は屍の上に照るやと

重卿に遣はしける　　吉村重卿の母

四方に名を揚げつゝ歸れ歸らずば後れざりきと母に知らせよ

辭世　　横田頼直

君が爲め思ひし事は水の泡かく消え行くと思はざりけり

題知らず　　横田新綱

大君の御心やすむ時や何時(いつ)えぶし寄せ來る浦安の國

阪下の塵を掃へと科戸邊の神のさきはふ太刀風もがな

いまさらに如何で歎かむ豫(かね)てより國に捧げし身とし思へば

題しらず　　横田吉綱

燒鎌の利鎌を胸に研ぎ置けば醜のたふれをきためざらめや

〔吉村重卿〕土州高岡郡梼原村里正太郎の長子也。文久三年勤王討幕の志士五百餘名を糾合して高取城を攻め、健闘衆目を驚かせり。軍敗れ、退て天の河辻の要害に據る、重卿殿して三在に到り、同志十三人を率ゐ、更に引返して城に火を放ち死を決せんと欲し、乾草を火を袖にして進發す途に敵軍に逢ひ、奮戰して其將を斬る、自らも亦重傷を負ひ、割腹して死す、年廿六。明治廿四年、正四位を贈らる。

〔醜のたふれ〕たふれは狂人の義、奸賊の意なり。

題しらず　　毛利廣篤

かくまでに思ひ暮せばはやり男の速る心と人やいふべき

雪の降りける朝大内に參るとて　　毛利元德

降る雪に人の往來は絶えぬれど君に仕ふる道はありけり

慶應の始め世の中騷しく國に潛み居たりし折月を見て

雲霧はよしや我が身を隔つともさやけき月を心とは見む

辭世　　毛利武

梓弓引きてかへらぬ武士の正しき道に入るぞ嬉しき

題しらず　　望月龜彌太

梓弓八阪の岡に圓居して猶思ひ入る故郷のそら

辭世　　森信度

古里にかくなることは露しらで我が歸るさを今日も待つらむ

題しらず　　森眞長

君が爲め我が里を出でて武藏野のむらさき匂ふ花と散らまし

〔梓弓引きて云々〕終初一貫して志を變せざる事、恰も射放てる矢の歸らぬ如くなるを以て武士の正道とす、今我れ其正道を踏みて、其矢の如く歸らぬ旅に入る嬉しさよと也。結句は、射るに入るを掛けたり。

〔森信度〕通稱は安平、筑前藩の勤王家なり。慶應元年禁固せられ、同十月廿六日自刃して死す。

〔森眞長〕櫻田の義士なり。通稱を五六郎と云ふ。井伊掃部頭を要撃せし時、先づ其前駕に向ひ短銃を發す、諸士並び起りて奮戰し望を達せり。享年廿二、後年從五位を贈らる。

いたづらに散る櫻とや思ふらむ花の心を人は知らずて

武藏野の原に生ひぬる醜草を今日を限りに刈り拂はずぞ

題しらず　　森川長吉郎

すらすらと雪や氷を踏み分けて何時しか解けむ賤が眞心

題しらず　　森下重正

人心くもり勝ちなる世の中に清き心の道ひらきせむ

題しらず　　森山政德

君が爲め思ひ殘さで武夫のなき人數に入るぞ嬉しき

絕命歌　　森山行宗

願ふぞよ月にかかれる村雲をはや吹き拂へ千代の神風

題しらず　　森山永治

うき雲を拂ひ淸めて秋津しま大和島根に澄める月見む

題しらず　　森山永賀

大君の御爲なりけり敷島の大和猛男の名をな汚しそ

「いたづらに云々」我等が井伊掃部頭を刺して命を捨てし事は尊攘の基礎を築き固めむが爲めの大義に出でし物とは知らで、世人は、あたら貴重なる命を、徒らに捨てし痴漢よなど思ふらむとの意也

「森山政德」通稱は繁之助。水戸の藩士也。攘夷の内勅水戸に下るや、幕府の大老井伊掃部を刺すに非ざれば勅意を遵奉し難しと爲し、即ち金子教孝等の同志と結束して江戸に潜行し、萬延元年三月三日、櫻田門外に之を要撃し、森、佐野等と細川邸に自訴す。享年廿六。後從五位に敍す。

都の獄屋にて　　　　横田仕之

五月雨は降りまさりけり故郷の我が垂乳根や如何にますらむ

醜草を薙ぎ掃はむと思ひしに果たさで果つる程ぞ悲しき

題知らず　　　　横山英吉

もろ人の惜しむ命も惜しからず世の爲め君の爲めと思へば

題知らず　　　　米川文藏

えみし討つ功も遂げずいたづらに過ぐる月日の數をしぞ思ふ

あら玉の年立ち歸る今年こそ我も歸らむ死出の闇路に

題知らず　　　　米橋誠之進

皇國の御爲めに心碎きぬるいきをは安くやすきとだえしひ

述懷　　　　米田是容

よしや身は斯くてこの世を去らばされ魂は還りて君に仕へむ

辭世　　　　佐田雄太郎

闇の夜に死出の山路を越ゆる身はまつの光をたよるばかりぞ

〔五月雨は云々〕梅雨の降り續く頃は、母は常に心配を重ね玉ふ事なるが、我が身は今獄舎に在りて、母の如何に坐すやをも問ひ參らせ得ざる不孝さよとの意也。〔醜草を云々〕醜草とは德川幕府を指して云へる也。〔もろ人の云々〕世上の人々は誰も皆命を惜しと思ふ事なれど、その最も惜しき命も、君の爲め世の爲めに代ふる故には惜しと思はずと也。〔えみし討つ〕攘夷の義なり、〔まつの光〕松明の光なり。後世を導く經文などの義に云へるなるべし。

〔坂本龍馬〕土佐藩士なり。世々その藩主山内侯に仕へ祿二百石を食む。少うして江戸に遊び、千葉周作の門に入りて劍道を學ぶ、數年にして技大に進む。安政元年藩主山内豐信、大老井伊直弼の爲めに惡まれ、國に錮せらる。龍馬乃ち、同志武市半平太と謀りて歸國し爾來東奔西走して尊攘を唱へ、後京師に上りて倒幕を策し、慶應三年十二月十二日、中岡愼太郎等と痛飮して國事を談ず、時に新撰組の劍手近藤勇、土方歲三等闖入し來りて龍馬中岡爲に害せらる明治二十四年正四位を贈らる。

題しらず　　阪本龍馬

世の中の人は何とも言はば言へ我がなす事は我れのみぞ知る

大政返上の議決したる時

心からのどけくもあるか野邊はなほ雪氣ながらの春風ぞ吹く

桂小五郎におくる

ゆく春も心やすげに見ゆるかな花なき里の夕暮の空

春暮れて五月まつ間の時鳥初音をしのべ深山邊の里

藤の花今を盛りに咲きつれど船いそがれて見返りもせず

短夜を飽かずも啼きて明しつる心語るな山霍公鳥

嵐山夕べ淋しく鳴る鐘にこぼれそめてし木々の紅葉ば

湊川に詣でて

月と日の昔を忍ぶ湊川流れて淸き菊の下水

明石の浦に逍遙して

憂きことを一人あかしの旅衣磯打つ波も哀れとぞ聞く

〔八田知紀〕歌人なり。鹿兒島藩士にして京都の留守居下役を命ぜらる。後、廣敷御用人として、近衞家に仕ふ。歌を香川景樹に學び、熊谷直好等と名を齊うせり明治六年九月歿、年七十五。

〔よしの山云々〕滿山これ花に埋もれたる芳山の實景を目睹するやう也。されて南朝の往事も追想せられて、此の種の詠中の白眉也。

寄水祝　　八田知紀

いくそたびかき濁してもすみかへる水や皇國の姿なるらむ

吉野山にて

よしの山かすみのおくは知らねども見ゆる限りは櫻なりけり

浦賀の津に夷の船ども見え來れる頃その守りの役にて江戸に難波に物しける人々を餞しける日

ふたつなき心のつるぎ朝夕に研ぐも磨くも君が爲めこそ

往事如夢

思ひ出もあらずこそあれ夢よりもはかなかりける我が昔かな

在原業平朝臣

眞ごころの跡は千世まで殘りけり雪踏み分けし小野の山ざと

忠

身ひとつを君にさゝげて仕へなば神の道にもたがはざらまし

おろかにも我がものとやは思ふべき君が御楯と生れでし身を

五くさの異國船此處彼處の浦々に來て世の中騒しげなる頃雨風痛く荒ければ

野村望東

襲ひ來む異國船を寄せじとて天の神風立ち騒ぐらし

水戶十七士大老を御代の爲に討ちしより世の中俄に騒しくなりける頃

さばかりは如何でと思ふ世の中の驚くばかり變り來にけり

武夫たちに小笹を折りて端に書き付く

一世に立たぬ籼の小笹は弱けれど矢竹心はありとだに見よ

國臣主の捕はれしを歎きて囚屋に送りける

たぐひなき聲に鳴くなる鶯も籠にすむ憂き目見る世なりけり

姬島の囚にて月毎に一日百詠を物したる中に

秋の夜の晴れたる空の月見ても心にかかる雲の上かな

捕はれ居ける頃同じ志の人々の空しく失せにし供養に血汐もて般若經を書きける奥に

「野村望東」福岡の藩士浦野重兵衞勝幸の三女なり、四十一歳の時夫を失ひ、剃髪して望東尼と號す。勤王の志士にして難を遁けて來る者あれば潜かに別墅に隱れしめ衣食を給す。慶應元年遂に捕へられて姬島に流さる。同二年九月同藩の浪士藤四郎親茂、高杉晋作と謀り、姬島に來りて獄を破り、望東を奪ひて馬關に勞養し、後三田尻に移す。翌三年十一月歿す、享年六十二。明治二十四年十二月十七日、正五位を贈らる。

「よみがへり」經文を讀む意より、蘇生する義に掛けて云へるなり。

後れ居て書くも甲斐なし法の文よみがへり來む傳ならなくに

赤心報國　　井手曙覽

益荒雄が朝廷おもひの忠實ごゝろ眼を血に染めて燒刄見澄ます

國の爲め念ひ痩せつるはらわたを筆に染むとて吾世ふかしつ

仇に向き臑たゝきけむふる人に習ひてこそは國に仕へめ

正宗の太刀の刄よりも國の爲め銳き筆の鋒ふるひみむ

國を思ひ寢ふれざる夜の霜の色月さす窓に見る劔かな

國汚すやつこあらばと太刀拔きて仇にもあらぬ壁に物言ふ

示人

大皇は神にしますぞ天皇の勅とし言はゞかしこみまつれ

太刀佩くは何の爲めぞも天皇の勅のさきを惶まむ爲め

天の下きよく拂ひてかみつ世の御まつりことに復る喜べ

物部のおもておこしと勇み立ち錦の旗をいたゞきて行け

芳賀眞咲が御軍人に召されて越後路に下れる馬の餞に

〔井手曙覽〕越前國福井の歌人にして姓は橘、初名を尙事と云へり。少にして京都に遊び兒玉旦保に學び、尋で飛驒國高山の國學者田中大秀の門に入りて和學を修む。曙覽常に尊王の志篤く、明治維新の際、福井藩兵羽を征討するや、意を盡して兵士を皷舞するに努力せり。明治元年八月廿八日病歿す、享年五十七。

〔劔たゝきけむ〕欽明天皇の御代に、調吉士伊企儺が新羅に捕はれし時、新羅王我が尻を啗へと叫びし故事を云ふ。

〔芳賀眞咲〕文學博士芳賀矢一氏の父翁なり。

大君いふことに背くやつこ等の首引き拔きて八つもて歸れ

旅の歌の中に　　　錦小路頼德

何かそい濡るゝを厭ふ草まくらかりにも君の爲めと思へば

故ありて長門國へ下りける時

世い人にと言へ斷く言へ君がため竭すまことは神そ知るへき

文久二年十二月二十日、水野丹後をして龜井茲監へ申し送る

茂りあふおどろが中も果して奥ある道を人に敎へむ

いは山も行けば行かれて世の中を治むる道いなどなかるらむ

題しらず

はかなくも三十の夢は覺めにけり赤間が關い夏の夜い空

靑まひの時のつゝみも此の頃はしめりがちなる五月雨のそら

辭世

君が爲め捨てむ命をいたづらに露と消え行くことをしそ思ふ

題知らず　　　丹羽正雄

〔錦小路頼德〕長州脱走七卿の一人なり。字は一貫、翠園と號す。嘉永六年從四位下右馬頭に補せらる。夙に三條實美卿と謀り皇綱を挽回せむ事を任となす。即ち幕府の忌む所となり、奸黨、隙に乘じ兵を發して其の參朝を停め、且つ長藩の禁衛を奪ふ。長藩の兵、乃ち頼德、實美、三條西季知、東久世通禧、四條隆謌、壬生基修、正澤宣嘉を奉じて難を長門に避く、時に文久三年八月なり。慶應元年四月二十四日病を以て馬關に薨ず。年三十。王政維新に及び、朝廷其の勳を錄して贈位を追賜す、

惜しまれて玉となりなばいさぎよし瓦と共に世にあらむより

君も臣も天つ月日に浮雲のかゝる憂き身と成りにけるかな

きのふまで露もいとひし君が袖雨と涙に打ち濡らしつゝ

　都を落ちて、長門國へ罷りける時、船がゝりして

おちて行く長門の浦の長き世を幾夜かり寢の侘び明すらむ

　九月十三夜、周防國にて

思ひきや汐の八百路を渡り來て後の今宵の月を見むとは

西山謙之助

　折にふれて

青雲のたなびく極み大君の知らさむきざしかねてしるしも

利鎌もて繁木がもとを拂ふごと掃ひて捨てむ醜のたぶれら

瓦百歳にとしは隔てど梓弓そのなき數に我もいらなむ

思ふこと成りもならずも武士の斷くて空しく已まむ物かは

　辭世

あながちに書かゝなむと思へども先立つ物は涙なりけり

〔君も臣も云々〕君とは長門に難を避けし七卿を指して云へる也。

〔きのふまで云々〕露も厭ひしとは、七卿の起居の安らかなりしを云ふ。

〔西山謙之助〕美濃國可兒郡の士也、平田鐵胤の門に遊び、夙に勤王の志を懷き、相良總三（小島四郎）、水原二郎（落合直亮）等と三田の薩邸に入りて謀る所あり、慶應三年十一月、野州方面の皇兵の將に撰ばれて江戶を出で、下野出流山に到り、時、幕府の兵に包圍せらる。謙之助刀を抽き、敵十三人を殺して死す、時に年二十三。

我が魂は兄の命に添ひまつりかくり世よりぞつかへまつらむ

折にふれて　　伊東祐之

垂乳根にさきだつ罪はおもくともいかではすべき天皇(すめらぎ)の爲め

獄中の作

身は捨てゝ身は無きものと思ふゆゑひとやの中の心やすさよ

辭世

事なきを祈るは人の常なれどやむにやまれぬ今の世のなか

雲　　一條忠香

やがてまた雨とぞならむ天つ空うきてたゞよへる雲のひとむら

思往事

惠み深き君を仰ぎて四十あまり仕へし業の愚かさをぞ思ふ

厚

世にひろき君が惠みの厚ければ道てふ道に人も迷はじ

述懷

〔垂乳根に云々〕親に先立つは不幸の極みにて、其の罪殊に重しとは思ひ知れども、是も大君の御爲めなれば如何ともし難しと也。

〔身は捨てゝ云々〕始めより我身は無き物と捨てをりし身なれば、獄舍の中に起臥するも物思ひなくして心やすしと也。

〔惠み深き云々〕御惠みの深き君に四十餘年奉仕し來りしが、其の御惠みの深きに引き比べて、我が成せる事業の淺薄なりし事を耻ぢ思ふと也。

〔おほけなき身〕無負氣の義、身の分に過ぎて堪へ難きを云ふ。

〔四條隆謌〕長州落ちせし七卿の一人なり。前頁を參照すべし。
〔玉の緒の云々〕二句は、玉の緒にて光清えなばと詠めるにて、我れ死なばとの意也。
〔宍戸眞澂〕通稱は九郎兵衞、また左馬介と稱す。長藩の勤王家なり、文久三年十二月、竹内正兵衞、中村九郎等と共に獄に下り、十二日命に依て自殺す。明治廿四年正四位を追贈せらる。
〔宍戸昌明〕文久三年大和十津川の義擧に屬し、九月廿四日天の川に敗戰し鷲家口に至りて彥根藩の兵と戰ひ縱橫奮擊して遂に斃る、享年卅一。

おほけなき身の程知らで仕ふるをこそ世の人のいかゞ見るらむ

題知らず　島　男也

ますら雄が物思ひつゝ眺めけむ其の有明の志賀の浦波

題知らず　四條隆謌

玉の緒の光清えなば人知れず君の守とならむとぞ思ふ

家を出で立ちける時　城島公茂

荒れ果てゝ葎が庭となりぬとも昔に匂へ我が家ざくら

題知らず　白石内藏進

さきかけて散れや大和の櫻花よしやうき名は世に殘るとも

丁巳の年の元日南門より禁中を拜して　宍戸眞澂

大君の内外のよそひ淸すがし春も此處より立ちや初むらむ

故鄕を立ち出でける時

朝夕に手なれし物と別るゝや憂き世の夢の見果てなるらむ

十津川にて討死しける時　宍戸昌明

【松尾多勢子】信濃國伊那郡伴野村の豪農、松尾佐次右衛門の妻なり。平田鐡胤の門に入り勤王の志士と交る。婦人たるを以て幕府の嫌疑を蒙る事なく、多く機密を探索するの任を全うせり。京都に在るの日、事露はれ幕吏の至らむとするに會ふ、多勢子、從容鏡に對して髪を理して曰く。婦女の身なるとも及ばざ、吏の來るを待ちて自殺せむ、唯死に臨みて蓬髪なるは女子の恥也と、品川彌次郎等促して長州邸へ伴ひ難を避けしむ。岩倉具視より賞を賜ふ。明治廿七年歿す。

今は唯だ何か思はむ敵あまた討ちて死にきと人の語らば

獄中にて詠める　松尾則信

厭はじな太刀の燒刃にかかるともかねて固めし大和魂

題しらず

久方の曇りなき世の秋なれば空にや澄まむ月讀の神

唐船の來りしと言ふを聞きて　松尾多勢子

沈みつるその神風も懲りずまに又も寄するか沖つ白波

正月初めて大内へまう上りける時宇郷の局はつゑの方より模樣付の襠を貸し給へる時

少女子が天の羽衣かりにきて雲井にのぼる今日の嬉しさ

三月十一日賀茂行幸に

君と臣の道をただすの神垣にいでましの世となるぞ嬉しき

辭世　松崎久誠

かねてより立てし心の撓むべきたとへ此の身は朽ち果つるとも

〔師岡正胤〕國學者なり。始め大國隆正に學び、後ち平田鐵胤の門に入れり。夙に尊王攘夷を唱へて東西に奔走し、國事に竭せり。文久三年二月廿二日夜、同志長尾武雄、西川吉輔、仙石隆明、石川貞幹、大庭恭平、高松信行、三輪田元綱等の同志八人と共に洛西等持院を襲ひ、足利尊氏、義詮、義滿三代の木像の首を刎ね、其の罪狀を高札に書して三條磧に梟し、以て幕府を諷す。乃ち幕吏に捕はれ、信州上田藩に幽囚せらる。維新後、皇學に竭す所少からず。明治卅一年歿、享年七十歳。

君が爲つくす心のすぐなるは空行く神やひとり知るらむ

題しらず　　師岡正胤

天皇を尊と思ふ心こそ夷を攘ふ弓矢なりけれ

すめらぎの御爲に死ねと教へこし父の言葉を何忘れめや

君の爲め家をも身をもかへり見ず盡す心ぞ大和だましひ

三月十一日加茂の神宮へ行幸ならせ給ふ由を洩れ承りて

聞きてだにいとも畏し見奉らば如何にか有らむ加茂の行幸(みゆき)

囚居の窓より月の影冥れにさし入りたるを

籠り居る囚屋の窓をもる影もあはれに霞む春の夜の月

六月晦日に詠める

皇國を汚す戎夷を攘はずば祓除のわざもしるしなからむ

長尾武雄が駁戎双六を物せしを見て

手すさびの果敢なき物も國の爲め戎夷(えびす)をうたむ事のみにして

をりにふれて　　杜下茂晴

〔松田範義〕肥後藩士也。通稱は重助、夙に尊攘を唱へ、脫藩して京師に在り。元治元年會藩、幕府の命を以て頻りに在京の志士を捕ふ、範義等これを憤り、同六月五日、佐伯鞆彦、相山律義、西川直純、宮部增實、吉田季實以下十數名と三條河原町の旅館池田屋惣兵衛の樓上に會し、會藩邸を襲うて囚中の同志を救はむ事を議す。新撰組これを諜知し、近藤勇等十餘名の徒夜に入りて來襲す。館主惣兵衛急を告ぐ、範義衆と共に拒ぎ鬪ひ重傷を負ひて歿す。明治廿四年、從四位を贈らる。

憂かりける思ひの雲の晴れいきて今宵すゞしき月を見るかな

題知らず　松崎佐敏

君の爲國のためには惜しからじあだにつひなむ命ならねば

題しらず　松田範義

一筋に思ひ籠めてし眞心は神も頼まず人も頼まず

實弟山田十郎國許にて刑死の由を聞きて

とても死ぬる汝が命は惜しまねど斯くては歎く國の行末

題しらず　松平直候

敷島の大和心を種として讀めや人々唐國の書(ふみ)

題しらず　松平慶德

玉の緒はよし絶えぬとも一すぢに我が大君の御言さゝげむ

言志

一つなき命を捨てゝ君が爲つくす心は知る人ぞ知る

思ふ由ありて

〔なき數に云々〕假令我が身は死歿すとも、魂魄は皇土を離れず、天翔りつゝも皇國の爲めに盡さむと也。
〔贈大納言の卿〕德川齊昭卿を云ふ。
〔此君の云々〕萬延元年八月十五日、贈大納言の君は薨去せられしが、此君の尙ほ存へて世に在さば、斯く許り洋夷等の爲めに我が國は侮辱せられじ物を、返す返すも惜しまるゝ哉と也。
〔梓弓云々〕彈撥の志を心の底に堅く持ちて盡瘁せば、必ず其の事を遂げ得べしとの意を云へる也。

難波江のよしとすべきは少くて芦のみ生ふる事ぞ悲しき

なき數によしや入るとも天翔り御代を守らむ皇國のため

國の内一方ならず爭ふ事出で來なむとするにつけつゝ贈大納言の卿の深くも年頃世の爲國の爲にと心を盡し給ひし事など思出でられてうれたき限なきに更らは慮を已にあえなる事の多くさまざまなりと聞きて

此君の今もいまさば天皇の神の御國は汚さじものを

辭世　松野頭

うき名をば難波の浦に流すとも君の御爲に惜しむべきかは

題しらず　松林漸

梓弓心の底に引きしめばなどか一矢の通らざらめや

題しらず　松前德廣

畏くも古き昔をしのぶかな後志(しりべし)山の雪の曙

辭世　松本柳榮

〔君の爲め云々〕四句に關の戶と云へるは、卽ち赤間關を云ふ。此處にて命を終ふとも、君國の爲めなれば惜しからじと也。

〔今更に云々〕四句思ひいる矢は、思ひ入るに、射る矢を掛けたり。一筋に思ひ立ちし心と云ふ程の義なり。

〔野津鎭雄〕明治元年鳥羽に戰ひて功あり。尋で東山道先鋒に屬し、宇都宮、白川等の諸城を攻め、皆悉を圍みて勇名を著す。明年大隊長となり五年陸軍少將に任じ、七年佐賀の亂を平定す。十一年中將に任ず、十三年七月歿、年四十四、詔して正三位を贈る。

蔦もみぢ折る憂き人の無かりせば赤き心も人に知られじ

赤間關屯中　乃木高知

君の爲め皇國の爲めに捧げたる身は關の戶に朽ち果てぬとも

題しらず　野口正安

今更に何をか言はむ大丈夫の思ひ射る矢の心立たねば

愚かなる我れにしあれば國の爲め盡しゝ事も仇とこそなれ

題しらず　野崎正盛

討つ人も討たるゝ人も心せよ同じ御國の御民なりせば

題しらず　野津鎭雄

新室に百萬代を今年より重ね初めたり今日の盃

題しらず　野村貞實

ともすれば月の影のみ戀しくて心は空になりまさりつゝ

辭世　野村定省

浮雲のまだ晴れやらぬ身なれども露も心を世には殘さじ

〔三好監物〕名は清房、閑齋と號す。監物は其の稱なり。世々藩主伊達侯に仕ふ。明治元年朝廷九條道孝に命じ使と爲りて海道より東下するや、監物藩兵を率ゐて之を迎へ、近隣の諸藩を督して會津を討伐に功あり、然も佐幕派の藩臣に讒せられ、采邑磐井郡黄海村に屏居して、八月十五日自刃して死す。明治廿四年十二月、正五位を贈らる。

〔三輪田元綱〕伊豫の人なり。平田銕胤の門に遊び夙に尊攘を唱へ、長尾武雄等と共に等持院に入り、尊氏の木像を梟首して捕へられ、後ち赦さる。

辭世　三好監物

かばねには草むすとても國を思ふ赤き心の色は變らじ

題知らず　三輪田元綱

賤が屋の蘆火の煙ひとすぢに心を碎く世にこそありけれ

辭世　水野主馬

夷らを攘ふ思ひは筑波山いざ先かけて散らむ此の身は

題知らず　水野丹後

國家の爲めを思へば惜しからぬ身さへ悲しき秋に逢ひけり

題しらず　水野哲太郎

草の葉に置く露よりも脆き身に代を千歳と祈る果敢なさ

題知らず　水部小隼人

すめろぎの御こゝろ安めまつらむと露の命も長らへにけり

をりにふれて　水部長雄

鬼神も恐れぬ我れも誠ある人の情けには袖濡らしけり

「中山忠能」明治天皇の外祖なり。權大納言忠頼卿の第二子、文政八年家を承く、時に正四位下權中將兼皇太后宮權亮たり。以来諸官に歷任し、弘化四年權大納言に任ず。明治元年二月輔弼を命ぜられ、議定に遷り從一位に叙し大臣に准ぜらる。同二年七月神祇伯に任ず。同九月、維新の勳勞を賞し、祿千五百石を賜はる旨御出さる。同四年、老年に付諸官を免され、麝香の間伺候を命ぜられ、十七年侯爵を授けられ、廿一年大勳位に叙す。同年六月十二日薨ず、享年八十。豐島岡護國寺に葬る。

題知らず　　中山忠能

ひすたらに皇國(みくに)の爲めを思ふ身の斷ばかりなどて疑はれけむ

如何なれば正しき道の斷くばかり邪(よこしま)に行く世とはなりきや

長伐を悼みて

諸人も神の御國と知り乍らなどては捨つる大和だましひ

皇國(みくに)の柱となりし武士の何ぞは斷くも朽ちや果つらむ

慶應元年の元旦に詠める

あらたまの年の初めを祝ひつゝ曇りなかれと世を祈るかな

年の暮に詠める

世の憂さに月日も知らず過し來(き)て年の暮ともなりにけるかな

鶯を聞きて詠める

鶯も夷なまりの聲すなり改めざらば鷹あはせてむ

孝明天皇崩御の御時

如何にせむ我が眞心をあらはして仕へむと思ふ君はいまさず

東に下る途にて　　村岡矩子

日々日々に變る旅路に變らぬは人のこゝろの誠なりけり

東にて嚴しく事とはれける折

五十三次關路の旅のつらさより白洲の上こそ心やすけれ

終身祿を賜はりし時よめる

思ひきや數ならぬ身の斯くまでに深き惠みの露かゝるとは

鳥羽の陣に向ふ時　　毛利元景

大君の御爲と思ふ一筋に敵ありとしも思はざりけり

題しらず　　毛利元純

玉の緒はよし絶えぬとも惜しからじ皇御國の御爲なりせば

弓　　毛利敬親

君が世の盡きぬためしと梓弓はるは八洲に波風もなし

題しらず　　毛利元周

呉竹の世はすぐなれと思ふ身のつるなき節の願ひなり鳬

〔村岡矩子〕姓は津崎、父を左京と云ふ。矩子、近衞卿に仕ふ。卿常に皇綱恢復の志あり、幕府の專政を憤り、水戸の臣鵜飼廣邦等を授けて密勅を齊昭に下す。矩子其間に居て頗る盡力す。文久三年幕府捕へて糺問して曰く、近衞公長門に走る、其謀め爲す所如何と。矩子敢て言はず、即ち江戸に押送し禁固卅日にして放さる。王家中興の後、終身祿廿石を賞賜せられ、嵯峨に退て餘命を終ふ。時に明治六年八月、享年八十八。二十四年十二月、從四位を贈らる。

〔村井政禮〕正六位に叙し、修理少進に任ず、嘉永年間尊王攘夷の議起るに及び、諸國の志士と交りて盡す所少からず。文久三年九月幕吏に捕へられて、獄に投ぜられ、慶應三年十二月十二日遂に斬殺せらる。年三十七、明治卅四年十二月、正五位を贈らる。

〔敷島の云々〕我が皇學の貴きに比すれば、漢學は顔色なしとの心ばへを云へる也。

〔村上忠順〕三河國碧海郡の勤王家なり。著書に新葉和歌集註解あり。

〔大丈夫が云々〕自重して輕擧盲動を慎む意を歌へるなり。

題知らず　　村井政禮

とらはれと身はなりぬれど天地に恥づる心は露なかりけり

わたくしの身の爲めにせぬ事ぞとは豫（かね）て知るらむ天地の神

奥山の谷の落ち椎ひろはれて世に出でむ事は人だのめなる

うづもれて月日ふる井にすむ水の底の心を汲む人もがな

御代まもる心は猶も後れねど盡きむ事は命なりけり

年を經て生ひ茂りぬるえみし草刈り拂ふべき時は來にけり

えみし等と著き夷の外にまた國のえみしも有る世なりけり

敷島の倭錦にくらぶれば唐（から）くれなゐは文（あや）なかりけり

見よや此の大和をのこの佩く太刀のはがね示さむ四方の夷に

題知らず　　村上忠順

千萬の軍（いくさ）ことむけ歸らせる今日のよごとは國もとゞろに

題知らず　　村松文三

大丈夫が勇む心を鎭めつゝ夷討つべき時を待つなり

京都にて井伊の上京を待ちて　西郷隆盛

東風吹かば花や散るらむ橘の香をば袂につつみしものを

萬延元年二月大島より大久保利通に贈れる書狀の奧に

思ひ立つ君が引手の鏑矢は一すぢにのみ射るぞ畏き

一筋に射るてふ弦のひびきにて消えぬる身をも呼さましつつ

操おしの重き公事の使に選まれて船出するを送るとて

君が爲深き海原ゆく船をあらくな吹きそ科戸邊の神

諸人のまことの積る船なれば行くも歸るも神や守らむ

島中にありて

亂れたる絲の筋すら繰返し何日しか解くる御代となり鳬

題しらず

古里の谷間を出でし郭公都の空を月の夜にせむ

上衣はさもあらばあれ敷島の倭錦を心にぞ着る

むすぼれし心の氷解けやらで春ならぬ春に春は來にけり

西郷（隆盛）通稱は吉之助、南洲と號す。鹿兒島の藩士にして、大久保利通、木戸孝允等と共に維新の元勳なり。明治四年正三位に敍し、參議と爲り、六年陸軍大將に任ず。同年十月征韓論起るに及び、在廷の諸公と議協はず、職を辭して鹿兒島に歸る。十年二月、桐野利秋、篠原國幹等、隆盛に勸めて強て兵を擧げしむ。遂に自ら兵一萬五千を率ゐて官軍と戰ひ、九月廿四日城山に戰死す。後年朝廷、隆盛の誠意を諒決し、曩に褫奪せし官位を復し其子に侯爵を賜ひ、華族に列す。

「大國隆正」和學者にして尊王攘夷を唱へし人、天柱山人、また佐紀之屋と號す。津和野の藩士なり。始め姓を野々口と云ひ、後に大國主命の名を取りて大國と改稱す。明治四年八月十三日沒す、年八十。

「兒の手柏」萬葉集に、奈良坂の兒の手柏のふたおもてとにも角にもねじけ人の友、とあり。故に表裏ある佞人の意に云へる也。

「かばねをば云々」海行かば水づく屍山行かば草むす屍とある古歌に因れる也。

「色に出でゝ云々」初句は木の葉の紅葉するを云ふ。

尊王　　大國隆正

攘夷

さしのぼる日影に松も榮えなむ兒の手柏は根さへ枯れつゝ

述懐

神風の吹くをな待ちそ吹かぬ間に猛き國ぶり知らせてしがな

國の爲め我がつく息の甲斐なくて世の雲霧を拂はざりけり

かばねをば草むせ水づけ國の爲め心の瓊矛とほらざらめや

題知らず

諏訪の海こほりを踏みて思ひ知れ忘りなせそ沖の守りを

七月十九日、都の騷がしかけるに

高根にはさはらざりけり大内の山の下かぜ立ち騷げども

辭世　　大野木克敵

身し死なば風となりても我が君の梅のよき香を四方に廣めむ

色に出でて木の葉は散れど果つる身の赤き心は現れもせず

甲子五月、京都潜伏中に詠める　木戸孝允

さつき闇あやめわかたぬ世の中に忍び音に鳴く山ほとゝぎす

新年山

起き出でゝ日毎に向ふ山ながら年立つ今朝は異(こと)にしありけり

題知らず　木下秀定

死ぬる身も何か恨みむかばね蒸す草に花咲く時もあるべし

題しらず　木下犖正

數ならぬ身のなる果ては惜しからず世の爲君の爲と思へば

題しらず　木村重道

橋立の礎の埋木時を得てやゝて都の人に知られむ

題しらず　木村聿

玉櫛笥ふたに隠るゝ十寸(ます)鏡あけてぞ見せむ清き光を

題しらず　清川正明

古への御世にせむとて今の世に心盡しの人ぞたのもし

〔木戸孝允〕長州藩士なり。始め桂氏に養はれ、桂小五郎と稱す。江戸に出でて劍道を齋藤彌九郎に學び塾長となり、傍ら水藩の諸名士と交りて尊王の志を固め、大久保利通、西郷隆盛等と共に謀りて復古の大業に盡瘁す。明治二年參與に任じ、賞千八百石を賜ひ、從三位に叙し、尋で參議を爲り、内閣顧問に補せらる。十年五月病を獲るや車駕其の寓に臨む。廿六日遂に薨ず、年四十四。同廿八日、正二位を追贈せらる。

〔木村聿〕通稱權之右衛門、横田の藩士也。明治卅五年從五位を贈らる。

〔西川吉輔〕近江國蒲生郡の豪商也。通稱を善六と云ふ。平田鐵胤の門に遊び、倉澤清也と共に白川公に召されて帶刀を聽さる。夙に尊攘を唱へ、巨萬の費を勤王の士に資せり。明治四十年、從四位を贈らる。

〔君臣の云々〕引き戻す、いかで等の詞は梓弓の緣語なり。

〔西川直純〕通稱重助、京都聖護院の勤王家也。

〔野末の草〕自身を草に譬へて云へるなり。

〔風に散る露〕死刑に處せらるゝ事を譬へ云へる也。

題しらず　　西川吉輔

君臣の道ある御代にあづさ弓ひき戻さずはいかで已むべき

甲子元旦、讀張子西銘　　西川直純

天は父地は母なる其が中に立つ身にしあれば勤めざらめや

折にふれて　　西田直五郎

大君の御代かはるべき時を得てやがて雲井に名をやとゞめむ

幕府の横暴を憤りて

しこ草のまにまにしげる野邊なれば秋の錦の面影もなし

題しらず　　西村敬藏

數ならぬ野ずゑの草も天つ日の光に漏れぬ事ぞうれしき

辭世

ありとある御代の佛にさそはれて無爲の都に入るぞ嬉しき

題しらず　　西村左平次

風に散る露となる身は厭はねど心に掛る國の行くすゑ

嘉永元年正月試筆のついでに。黒船の事を思ひて

岩倉具視

えみし等にからきめ見せむ潮風の氷吹き解く春は來にけり

文久二年八月二十日、今日は如何なるぞや、はからざるに重き勅勘を蒙り、籠居落飾すべき旨仰せ下されぬ。恐懼中條なく、悲歎血涙無念比するに物なし

いかさまに思ひわきてもかこちても涙のみこそ降りまさりけれ
今はとは思ひ切れとも黒髪の亂れてすぢもわかれざりけり
勅なれば髪は斬りもし剃りもせむ清き心は神ぞ知るらむ

物思ひに沈みて寢ぬ夜がちなりければ

さまざまの夢こそ見ゆれ寢る間さへ人に縫れる我が身なるらむ

あまた詠める歌の中に

國に報い君に盡せる眞ごゝろの却りて禍となる世なりけり
いつまでか斯くて歎きの隙にいみ身のなる果を思ひつゞけむ

岩倉具視　權中納言康親の第二子にして、王政復古の主動者也。文久二年、公武合體論者たるの故を以て勅勘を蒙り、洛外岩倉村に逼塞せしも、密かに諸藩勤王の志士を鼓舞して維新の大業に貢獻せり。明治十六年六月病を獲るや、天皇親ら其第に臨ませらるゝ事二回に及べり。七月廿日薨、年五十九。勅して太政大臣を贈り、朝を廢すること三日、葬るに國費を以てす。十八年七月、贈正一位に叙せらる。

亂れてすぢも　思ひ亂れて物の條理も分別し難くなれる意を言ひ含めたるなり。

「人をのりても」人を誹謗してもの意なり。船の縁語にて、乗るを罵るに掛けて言へる也。
「思ひわくれど」條理を分別して心を冷靜に趣けむとすれど、と云ふ程の意なり。
「何時も聞く云々」軒の松風、庭の蟲の音など、常の秋には心を慰むる種ともなる物なれど、斯く物思ひに籠る身には、たゞ憂へを增さしむるのみなりと也。
「なき名」無實の評判、汚名。
「ともすれば云々」二句は遙かに仰ぎ見る意なり。久方の雲居とは、朝廷の御事を云ふ。

恐ろしき世にこそ有りけれ捨小舟人をのりても身を立てむとか

花散ると風をなげきの枝の上に又ふりかゝるうたて村雨

さまざまに思ひわくれど日に添へて憂きは身にしむ物にぞありける

述懐

何時も聞く秋の物ともなかりけり軒の松かせ庭の蟲の音

ひさかたの空の心と降る雨を横ぎる風も吹けば吹くかな

西賀茂、靈源寺の祖先の御墓に詣でて

たてまつるあかの清水の清きにもなき名は濯げ代々の親たち

靈源寺に籠りて住みけるほど詠める

山寺の鐘はひまなく響けども憂世の夢は覺むべくもなし

ともすればふりさけ見つゝ久方の雲居ばかりぞながめられける

岩倉村に籠りて住ひける頃、早春に詠める

しかすがに霞むを見れば山里の垣根も春はへだてざりけり

里人の遊ぶさまさへ目なれねばいよいよ春の心ともなし

大久保利通の宿りに鶴かに音づれて

賤が屋に身は垢づきて住めれども猶すゝけぬは心なりけり

折にふれて

長門なる豐浦の宮を始めにて我が神かぜは吹かむとすらむ
あしはらや人もあしまの蟹に似てたゞ横濱の横に行くらむ
みかは水そゝ水上もよどむまでしがらみ掛けて誰かせくらむ
われ獨すめりと思ふに音づれて雨もふる屋は洩りにこそ洩れ
武士のこゝろの眞弓ひきつれて放たれたるはあなうらやまし
何時までか斷くてふるやの板びさし久しと賴む命ならぬを
あつまれば小魚も友を力にて瀨のぼる物を淵にしづみぬ

明治七年一月十四日の夜、喰違にて難にあひける時に詠める

燒太刀のとき劍刄の霜の上を踏み渡りてものがれけるかな
しら波のうちたるあとは殘れども岩が根のみは動かざりけり
霜がれの其のくずかづら一すぢにかゝる命は神やまもれる

〔豐浦の宮〕長門國豐浦郡なる住吉神社を云ふ。表筒男、中筒男、底筒男の三神の荒魂を奉祀せり。

〔喰違にて云々〕高知縣の士武市熊吉同喜久馬、山崎則雄、島崎直方、下村義明の五人、征韓論の行はれざりしを以て具視の專擅に出でたりと爲し、七年一月十四日具視の退朝を赤坂喰違に要して刺さむとせしが、車馬騒を致し、具視濠中に墜ちて難を免るゝを得たり。時に具視微傷を蒙りしも、二月廿三日平癒して參朝せり。

〔しら波〕兇賊を云ふ。

〔玉鉾の云々〕初句は道の枕詞なり。作者黒澤重清は通稱を與一郎と云へり。

〔黒田清綱〕鹿兒島藩士にして維新の功臣なり。和歌を八田知紀に學び、高崎正風と其名を齊うす。樞密顧問官、御歌所長等に任じ、子爵に叙せらる。

〔仇波の云々〕征長の戰終決し、平和に復せる筑紫の海上に、長閑に春の初風の立渡る趣きを詠めり。

〔水莖の跡〕隆盛が書ける手跡を云へる也。

〔鳥羽の夜嵐云々〕戊辰の役、鳥羽伏見の戰を云ふ

〔心盡し〕盡しを筑紫に掛けたる也。

獄中の作　　黒澤重清

もとよりも君に捧げし此の身なれば今更惜しむ事なかりけり

玉鉾の道ある國の益良雄の夷を攘ふ魁の旅

慶應の初年睦月一日の朝、征長の事平らぎて解兵の令傳はりける時筑前葦屋陣中にて詠める　　黒田清綱

仇波のなぎたる上に立ちにけり筑紫の海の春の初風

莫逆の友西郷隆盛の書卷の奥に

水莖の跡にも深く見ゆるかな國を思ひし君が誠は

肥田景正が春雨日記の奥に一言をと言ふに、己も戊辰の春都にありて其折の事親しく目撃し居れば、よそならず覺えて

我れもまた思ひぞ出づる身にしめし鳥羽の夜嵐淀の春雨

三條相國公が舊友會催し給ひける折、公が昔筑前太宰府にさすらへ在し、時の事ども語り出でて

あひ見れば思ひぞ出づる國の爲め心つくしにありしむかしを

題知らず　宮部増資

いざ子ども馬に鞍置け九重の御階の櫻散らぬ其の間に

題知らず　宮部増雄

春雨の軒に淋しき玉垂れの降り盡さるゝ我が思ひかな

獄中にて詠める　宮藤韜彦

膚はだな太刀の燒刃に掛るともかねて鍊ひし大和だましひ

紫宸殿を拜み奉りて　宮本池臣

橘は雲居の庭にありながら右のつかさい離れぬるかな

題知らず　武藤善吉

世の憂きを我が大君に申さむと今急がるゝ死出の山路

青年の昔吉原驛にて富士を見て詠める　村田清風

來て見ればさ程にもなし不盡の山釋迦も孔子も斯くぞあるらむ

辭世　村上椒

月も日も皆とこ闇になれる世に我が身一つは物の數かな

〔宮部増實〕熊本藩の勤王家也。元治元年六月五日、同志と京都池田家に會するや、新撰組に襲はれ奮闘して死す。贈正四位に叙せらる。

〔村田清風〕通稱四郎左衛門、後ち織部と改む。長門藩士なり。僧月照等と交り、國事に盡す所ありしが、安政二年病に罹りて没せり。

〔村山椒〕越後三條驛の勤王家なり。字は其馨、荷汀また半牧と號す。尊攘を唱へて京阪に上り、藤本鐵石、伴林光平等と交りて國事に奔走す。明治元年歸郷し、長岡藩に捕へられむとするに先ちて自殺す。

世を歎く事ありて　與謝野禮嚴

人ごゝろ嗔りへつらひ物事を掠め偸むぞ世の常のさま

維新前後二十とせ計り、御國の爲めに甲斐なき身も、聊か報いまつらむと思ひ立ちて、薩摩を初め諸藩の間に立ち交り、心を碎く事多かりしかば、家を思ふに暇なくて、我が岡崎の寺は屋根より雨漏り、疊皆がら朽ち果てゝ、白く黴びたる床板の落ちたる裂目よりは、竹萱草などさへ生ひ出でぬ。もとより檀徒など云ふもの、ふつと無き寺なり。[illegible]とせ旅より歸り來て、此の荒れたる中に家守る妻子の哀れなりければ詠める

ひた土に藁解き敷きて寢ぬることと常と思へば悲しき物を

荒寺の柱を傳ふ雨のおと板たゝくにも心碎けぬ

題しらず

をのこはも國を歎けど若草の妻は歎くは家の爲め子の爲め

〔人ごゝろ云々〕近き頃は佛の謂ゆる末世の有様となりて、人々の心は無下に荒びもて行きて、或者は恐喝を事とし、或者は阿諛して利を得るを事とし、然らざる者は掠奪、偸盗を事とする世となれることそ慨はしけれと也。

〔ひたつちに云々〕初句は直土の義なり。年頃我が四方に流離ひをりし間に妻子等は地上に藁を敷きて寢ね、辛苦を極めたりし事を思へば、佛に仕ふる身も斷腸の涙に袖を濡らすと也〔をのこはも〕はもの二字は助辭、大丈夫は、の意也。

過義徒墳墓弔賊死歌　　飯田武郷

ことさへぐ四方の夷が、神國を窺ふ見つゝ、そやらはずてえしもあらねば。明暮に
そこをうれたみ。益荒雄の心をもちて。たまあへるそれの人ども。たらちねの親
をも別れ。わか草の妻をも置きて。大君のみこと受けむと。みつぐりの中の山道。
はろばろに分け越えくれて。時の間も急ぐ旅路を。こゝつるぎ和田の手向に。千
引石(ちびきいは)さやれるなして。梓弓いむかふいくさ。夫(それ)をだに拂ひもあへず。痛矢串(いたやぐし)いた
く負はして。たまきはる命捨てけむ。其のきみらはも。

小島四郎將満が歌をこひけるに

苔むしてかはらぬよりはたま〱に人となる身は碎くるもよし

石城東山が志す道ありて出立つ別に詠みて送る

から人が別れし水の心さへ汲みて知らるゝ此の夕べかな

如何なる折にか

韓國の城の上(へ)に立ちてわな張らば鴨も鯨もかゝらざらめや

翁當益堅

わびぬとて心の刀鍊へずば世にみだれ乃となり果てぬべし

〔飯田武郷〕信濃國高島の藩士也。平田篤胤の門に遊びて皇學を修む。後帝國大學講師となり、明治三十三年八月歿、享年七十四。著す所、日本書紀通釋七十卷あり。
〔義徒云々〕元治元年武田耕雲齋の兵が和田峠に戰ひし時の戰死者を弔ひし歌也。
〔苔むして云々〕變らぬは、瓦を全め、個々に玉を毀め、以て玉碎の意を詠める也。
〔から人が云々〕風蕭々兮易水寒の意を言へる也。

皇統連綿

笠井光謙

千早ぶる神代ながらに五十鈴河常世の波の澄み渡りつゝ

題知らず

住み捨てし人の昔ぞ偲ばるゝ荒れても殘る黄菊しらぎく

秋湖

秋ふかみ水底すみて富士の根をさやかに見する川口の湖

冬山

めなれたる富士の高嶺も雪ふれば又新しく眺められつゝ

折にふれて

置き處なき身をなにゝ喩へまし露は草にも倘は宿りけり

尊王の心を詠める　龜井茲監

さしのぼる朝日の御子の曇なき光を誰か仰がざるべき

草も木もなべて仕ふる大君の千とせを誰か祈らざるらむ

數ならぬ我が身ながらも御世の爲め君に心をうち捧げつゝ

〔笠井光謙〕甲州谷村の勤王家なり。服部南亭の高足にして詩文を善くす。夙に江戸に出でゝ歐洲の醫術を攻究し、名醫として其名を知らる。明治四年、岩倉公特命全權大使として歐米に赴くに當り、其の隨行の選に預りしも、時に病を獲て之に參與せず。爾來郷里に歸りて業を開き、郡内の仁醫と稱せらる。大正六年九月歿す、年七十七。

〔さしのぼる云々〕下句、一本に「光を誰も仰ぎこそすれ」とあり。倘ほ錦小路頼徳卿の歌に、龜井茲監へ申送るの一首あり、參照すべし。

題知らず　　柏原信卿

隅田川にごれる人の心をば賀茂の川瀬に今か洗はむ

折にふれて　　勝賀稠迅

かけまくも君の御爲めとひとすぢに思ひ迷はぬ敷島の道

題知らず　　勝間田稔

うぐひすも變らぬ御代にあひてこそ花に契りし甲斐はありけれ

逸題　　加藤德成

秋暮れてまだ脱ぎ捨てぬ濡れぎぬの身はかしこくも神のまにまに

籠鳥吟　　加屋英太

國の爲めかゝる縲目の恥よりも誠とほらぬ身をなげくかな

題知らず　　楫取素彥

民もみな醉ひてかざすと見ゆるかな大内山の峯のもみぢ葉

辭世　　茅根泰

ふり捨てゝ出でにしあとの撫子は如何なる色に露の置くらむ

「隅田川云々」上の句は、江戸幕府に心を寄する奸賊等を云ひ、下の句は尊王の心を懐く忠臣に準へて云へるなり。

「かけまくも云々」初五文字の下に、賢こき、の語を省略して詠める也。敷島の道とは、此處にては皇道の義に云へる也。

「秋暮れて云々」濡衣とは、無實の罪の謂、下の句は神の御心の儘に我が身を任せむ、との意なり。

「國の爲め云々」二三の句は、縲目に掛かる意と、斷る耻辱との意とに云ひ懸けし也。

「撫子」家に殘し置ける子等の行末を案じ云へる也。

思ふ事ありて　海江田信義

吹かば吹け積らば積れ風雪にみさをたがへぬ峯の老松

民草を養ふ人のなかりせば花咲く時にいつか遭ふべき

題知らず　海賀直求

夏の夜の短かき床の夢だにも國やすかれと結びこそすれ

壬戌八月廿七日故ありて江戸邸を亡命せし日　高杉晋作

今宵我れいづこの里を宿とせむ筑波の嶺にかかる白雲

癸亥三月十五日髮を剃りて東行といふ。西行を慕ひて壁に書きつく

西へ行く人を慕ひて東ゆく心の底ぞ神や知るらむ

白石資興尊攘の爲に忠死せし御魂を祭る

後れても後れてもまた君達に誓ひし事を我れ忘れめや

辭世

死んだなら釋迦や孔子に追付きて道の奥義を尋ねむとこそ思へ

「吹かば吹け云々」如何なる困難辛苦に遭ふとも、大丈夫の立てし志は貫き徹さでは止まじとの意を風雪の松に吹き荒ぶに擬へて云へる也。

「高杉晋作」名は春風、字は暢夫、東行と號す。山口藩の士也。吉田松陰の門に遊び、久坂通武と其の名聲を齊うす。夙に尊王攘夷を唱へ、藩中の佐幕黨を征服し征長の幕軍と戰ひて偉勳を擧ぐ。慶應三年四月、病を以て馬關に歿す、享年二十九。

「西へ行く云々」西へ行くは西行の名を云へるにて、東ゆくは自己の號を現はせる也。

〔三條實美〕内大臣實萬卿の嗣子也。天保八年京都に生れ、從五位侍從より進んで從四位昇殿を聽され、文久二年中納言に任ず。公、常に幕府の專橫を憂ひ、薩長の志士と謀りて攘夷の實行を成さむと欲す、適々朝議一變し、攘夷派の公卿朝に在るを得ず乃ち長州に奔り又福岡に移り、謫居具に困苦を經、慶應三年宥されて京に歸り、以來明治天皇に奉仕し、岩倉公と共に國家の柱石たり。内大臣從一位大勳位公爵と爲り、廿四年二月十九日正一位に叙し、同日薨ず。輟朝三日、國葬を以て式を行ふ。

正月九日山口にて　　三條實美

大君は如何にいますと仰ぎ見れば高天の原ぞ霞こめたる

大君の大御心をそよとだにこち吹く風よ我れに傳へよ

大宰府にありける程森寺大和守を山口に遣はし久坂義助の墓に手向けしめける

九重の御階の塵を拂はむと心も身をも打ち碎きたる

父君の物し給ひし赤心報國といふ御筆蹟を見て

めぐり來て旅路に見るぞ懷かしき歸らぬ昔の水莖のあと

述懷

呉竹のみを食む鳥の一人のみ朝日に鳴くも哀れ此世や

梓弓本末たゞふ世の中を神代の道に引きかへしても

大君のまけのまにまに一筋に仕へまつらむ命しぬまで

くわし矛千足るの御稜威末遂に仰がざらめや國の八十國

出づる日の方を仰ぎて打むせび涙ながらに世を祈るかな

〔うき雲の云々〕初句は浮雲に憂き意を掛けたり。我が身邊に暗雲の掩ひ掛らば、飽く迄も掩ひ掛れかし、頓て清き天つ風吹き起りて、必ず之を一掃すべき時あらむと也。

〔世の人言は云々〕我身に對する世人の謗評の如きは齒牙に掛くるに足らずとの意也。

〔悲しきや云々〕三句、月の輪の御影云々とは、孝明天皇の崩御ましましゝを云ふ。

〔大船の〕思ひ頼むと云はむ爲めの序なり。

〔月と日の御旗〕日輪、月輪の徽章を織り出せる旗、即ち錦旗を云ふ。

うき雲の掛らば掛れ天つ風吹き起るべき時なからめや

如何にして筑紫の海に寄る波の千重の一重も君に報いむ

萬代の名こそ惜しけれ空蟬の世の人言はさもあらばあれ

畏くも復位の勅命をかうぶりて都へ上るとて

身に餘る恵にあひて思川うれしき瀬にも立返るかな

東に歸りつきて

悲しきや歸りて見れば月の輪の御影は早く雲隱れたる

御陵に詣でて

悲しくも雲隱れにし月の輪の御墓拜むは夢か現か

慶應四年〔夏大監察となりて江戸に着きし時

大船の思ひ頼みし甲斐もなく雲隱れにし月の悲しさ

月と日の御旗の風に武藏野の青人草もうち靡くらむ

帝國議會の開院式に侍りて

謹みて勉めざらめや國民の心を君に申す人たち

〔小倉山云々〕慶應三年、天皇大和に幸して神武天皇の御陵を拜し、春日に赴き給ひて攘夷親征の令を下し給ふべき事に朝議定まりしを、幕府之を阻止し、三條公以下七卿長門へ奔り、攘夷の事頓挫せしかば、紅葉の色は變らねど御幸は絶えてと詠めるなり。

〔壬生基修〕慶應三年、難を長門に避けし七卿中の隨一人なり。

〔君が代を云々〕天皇の御國を、我が私の國の如く思ひ振舞はゞ、今の幕府は素より、此の東照宮の社も久しからじとの意也。

題知らず

うれたさいやるかたなくて花鳥の色香をさへもかこちぬる哉

題知らず

玉の緒よ光たえなば人しれず君がまもりとならましものを

題知らず　　美玉三年

小倉山もみぢの色は變らねど御幸は絶えて年をこそ積め

辭世　　壬生基修

玉の緒は憂世の塵に消えぬとも君に知られば嬉しからまし

題知らず　　宮永良藏

大君に仕へまつれる其の日より我が身ありとは思はざりけり

日光山にて詠める　　宮城御楯

君が代を我が世と思ふ人しあらば此の神垣も程はあらじな

辭世

とにかくに死に後れぬぞ武夫の誠を盡す道にぞありける

「落合直文」仙臺藩士鮎貝盛房の次子文久元年十一月生る。後落合直亮の養子となる。第一高等學校、國學院國語傳習所に教鞭を執る。明治三十六年十二月十六日逝去、行年四十三最も歌文に長じ、和歌革新の急先鋒なりき。其の門弟中より多くの歌人を出せり。

「東久世通禧」長州脱走七卿の一人なり。元治慶應の頃三條實美公等と謀り、攘夷の實行を成さむとせしより幕府の忌む所となり、遂に朝に在る事を得ず、乃ち實美、錦小路頼徳、三條西季知、四條隆謌、壬生基修、正澤宣嘉等の六卿

故三條公をしのびて「春露」といふ事を　落合直文

明日まだで散らむとすなる花の上に宿るもあはれ春の夕露

畝火の山陵に詣でゝ

かしこくも額づく袖に散りにけり畝火の山の松の下露

日清戰役の頃豫備軍の召集を受けて

朝夕に手をば放たぬ筆すてゝ太刀を執るべき時は來にけり

大宰府に在りける頃折にふれて　東久世通禧

樫の實の一つの事も成らずして心つくしに三とせ經にけり

天つ日の照らす限りの國と云ふ國に照らさむ神の御稜威を

あまつ空仰げば高き日の御影いや明かになれよとぞ思ふ

此の秋も亦旅にしてかざしけり假居の宿の白菊の花

山口に在りける時、龜井茲監へ贈る

君が爲め堅き心は石見のや動かざらなむ萬代までに

眞木和泉以下の十七回忌に、初秋蟲

身にしみて聞えぬるかな桐の葉のかつ散る庭の蟲の聲ごゑ

辭世　水井精一

數ならば猶ほいつまでと思ふにも果敢なく消ゆる野邊の朝露

題しらず　源知新

露の身は太刀の刃風に散りぬとも志こそ後に知るらめ

明治二年の年の始に　山縣有朋

みなかみも遠き五十鈴の河波の神代ながらにかへる春かな

筑紫にて月を見て詠める　伊東武明

かしこくも浮世の月は大君の御袖にも猶ほ影やどすらむ

題しらず　伊東健藏

おもふ事うたて敦賀の越の雪とけてのどけき春や待つらむ

陣中日記の奥に　伊藤榮太郎

たまちはふ神の御國の道すぐにまもる人こそまことなりけれ

常陸帶をよみて　伊藤博文

おもひかね入りにし山を立ち出でて迷ふうき世も大君の爲め

と共に難を長門に避く。慶應三年召還の勅を拜し、爾來明治大帝に奉仕し、上書する所あり、正二位に叙し伯爵を授けらる。

〔伊東武明〕始め新撰組の巨魁たりしが、後ち其非を悟りて脱隊し、勤王の志士に投ず。慶應三年十一月、近藤勇等計りを備へ招きて武明を誘ひ酒宴を設けて泥醉せしめ、之を歸路に刺殺す。

〔おもひかね云々〕世の中の憂きを厭ひて、山里に遁れ住みし身を起し、再び世の中に出でて奮闘するも一重に大君の御爲めに盡さむと思へば也との心なり。

「すだの川」武藏國隅田川を云ふ。
「とはに變らじ」永久に變る事あらじとの意也。
「岩下方平」鹿兒島藩士なり。維新の功績に依り、明治二年賞典千石を賜ひ、廿年子爵に叙せられ、卅三年八月薨ず。年七十四。
「詠史」楠正行朝臣を讃へし歌なり。
「岩波美蔭」通稱廉之助。信州高島藩の勤王家なり。脫藩して江戸の薩邸に在り、慶應三年十二月、幕軍薩邸を燒討するや、美蔭奮戰して重傷を負ひ、故山に歸る。
「燒討に云々」日本武尊の燒津の原の故事を思ひて詠めるなり。
「甲子」元治元年な

常陸帶讀めば涙の玉ぞ散る人を動かすひとの眞ごゝろ

題知らず

よしあしの繁れる中を流れつゝ澄みこそまされすだの川なみ

春秋と花はかはれどしろたへの富士の高根はとはに變らじ

巖島に詣で侍りて

明らけき神の御前に告げまをす赤き心に知ろし召すらむ

詠史　　岩下方平

君が爲め散りし若木の花の香は其の親木にも後れざりけり

薩邸の燒討せられける時　　岩波美蔭

燒討に寄せし夷等いかでかは燒き滅ぼさで神は置くべき

獄中にて詠める　　伊藤勝鑑

縲紲のうちに此の身は朽ちぬともいかで撓まむ日本だましひ

甲子の春の夜、月を見て　　伊藤和義

雲の上に物おもひつゝ月見れば影にもうかぶ我がなみだかな

着用の陣羽織の裏に書きつけ侍りし

君が爲めかばねを山に曝すとも名はよろづ代の後も朽ちせじ

都に在りける時

おほけなく雲井の上を思ふより數ならぬ身もうち忘れつゝ

中納言に附添ひまつりて、長門に下りける時

故鄕はあなたの空と見つゝ行く世のうき船ぞあはれなりける

慶應三年の春俄かに故鄕に下るべき事出來て、仁和寺宮に暇申しに參りける折しも、御庭の垂枝櫻盛なりしかば思ふ由ありて

高崎正風

思ふ事大內山のいと櫻ただ此のたびのほだしなりけり

千代田の新宮に遷りましける又の年正殿にて朝拜受けさせ給ひければ

浮橋の上に立たしし二神の御影をろがむ心地こそすれ

行幸を思ひやり奉りて詠めりし中に

梅雨の雨こもりしていでましの空は如何にと言はぬ日ぞなき

射術衛といふことを聞きて

り。和義は通稱を甲之助と云へり。七卿に從ひて長門に赴ける勤王の志士なり。

〔高崎正風〕薩藩の勤王家なり。八田知紀の門に遊びて和歌を善くす。後年宮內省和歌所長に任じ、樞密顧問官、貴族院議員等を奉じ、男爵に叙せらる。

〔思ふ事云々〕大內山とは禁裡を云ふ。四句は此度の意に此の旅を掛けて云へり。ほだしは羈絆なり。

〔浮橋の云々〕伊弉諾、伊弉冉尊、天之浮橋の上に立たし給ひし事、神代紀に見えたり。

〔いでまし〕行幸を云ふ。

〔三枝の云々〕初句

小山田の案山子の物となり果てむ弓ひきかへせ大丈夫の伴

吹上御苑にて射術天覽ありける折、東郷重持、久保之昌おのれの
三人は仰言によりて鐵的仕うまつりて

大君の勅かしこみ放つ矢に如何なる楯かとほらざるべき

寶

三枝の三つの寶に次ぐものは御國を守る大和魂

春日偶成　　乃木希典

世の中に憂きてふことの無りせば花の色香もめでたからまし

明治三十七年十月九日廣島大本營にて

かずならぬ身にも心の急がれて夢やすからぬ廣島の宿

明治三十七年一月日露の風雲急なる頃

埋木の花咲く身にはあらねども高麗唐土の春ぞまたるゝ

題知らず

大君の御楯とならむ身にしあればきたへざらめやみがゝざらめや

は三つの枕詞にて、皇國の寶物は、三種の神器に次ぎては忠君愛國の大和魂なりとの意なり。

〔乃木希典〕嘉永二年十一月、江戸麻布長府藩邸に生る。累進して陸軍大將に昇る。大正元年九月十三日自刄して、明治天皇の御あとを慕ふ。

〔埋木の花咲く云々〕身の不遇を歎じたるにて、二月五日留守近衞師團長、次いで五月二日第三軍司令官に轉補さる。

〔禍津日〕伊弉諾尊の日向橘檍原にて身潔し給へる時、黄泉の穢に化れる禍ひの神也。

〔神あがり云々〕大正二年九月、明治天皇御大葬の日、

乃木將軍殉死せし折の辭世の歌也。

劒

禍津日の荒びは有らじ武夫の劒のひかり曇らざりせば

くはしぼこ千足の國の益荒雄のあらみ魂こそ劒なりけれ

辭世

神あがりあがりましぬる大君の御あと遙かにをろがみまつる

うつし世を神去りまし大君の御あと慕ひて我れは行くなり

〔芳賀矢一〕芳賀眞咲の長男、慶應三年越前福井に生る。明治二十五年帝大國文科卒業、東大教授。國學院大學長、帝國學士院會員、東宮職御用掛たり。昭和二年二月六日逝去、行年六十一。

富士山の自畫贊　芳賀矢一

世の中に二つなき山をいにしへは國の中の山と思ひけるかな

歐米出張を命ぜられし時

西東めぐりめぐりて外國のことなる姿見てかへり來む

折にふれて

國つ文國の言葉をきためてぞ國の心は知るべかりけり

勤王諸家詩歌集　卷下終

索引

明治天皇御集

昭憲皇太后御集

明倫歌集

勤王諸家詩歌集

池のこゝろも　二九
心のおくに　一四一
所えたりと　三四
しづかにも
開きさだめよと　六一
そゝぎし雨は　三五
眠さめたる　二三六
世のをさまりに　八九
世は治まりて　一六七
しづがやの　一八三
しづのめを　一九四
しづのをが
かへす山田も　四五
聲をまぢかく　八四
一人ひきゆく　一五六
しづのをも　三〇
しづはけふ　一二六
しづむかと　一八九
しながはの　九〇
しなのなる　一五
しのびても　一三〇
しばがきに　一七
しばかりに　一二九
しばらくの　一四一
しほどきに　九九
しまく／＼も　一五四
しまといふ　一三
しみづわく　一七一
しめやかに　一九四
しもがれの　五四
しものうへに　三三
しもふみて　一七
しもふりて　五五
しもをふむ　一八六
しらかはの　一四
しらぎくの　四〇
しらくもの
軒端にまよふ　二九
はれま稀なる　二〇〇
よそに求むな　九一
しらたまを　二〇三
しらつゆの　一五〇
しらなみの
よせてあらひし　一〇六
よせてはかへる長濱の　一〇
よせてはかへるまさごぢに　一二五
しらぬまに　四五
しる人の　一三三
しるべする
人を嬉しく　一六七
人をたよりに　一三
しろたへの
うめもかゞりに　二
花も雪の　四六

す

すがのねの　三八
すぎがきを　六三
すさまじと　一四五
すゝみゆく
世に生れたる　一六五
世におくれたれ　七〇
すゝむあり　一二七
すゝむには　三八
すゝむべき　九六
すゝむよを　一六五
すゝめてふ　六三
すなどりは　一六六
すなほなる
人のこゝろに　一二八
をさな心を　一七〇
すなほにも　六〇
すみしよに　一三五
すみしよの　二六
すみぞめの　一六
すみなれし　三
すみなれて　一五
すむうをも　四七
すめがみに　七八
すめかみの　二五
すめろぎの　一一
すゑつひに　一八
すゑとほく　八九
すゑまでは　一九八
すゑまでも　一六三

せ

せばしとも　一八七

そ

そでのうへに　四一
そののうちに　七七
そののうちを　一三四
そのもりに　一二四
そのもりや　七五
そらはれて　五五

た

たえたりと　一五八
たかがやの　一七一
たかゝらぬ　一三四
たかきびの　一二
たかどのに
のぼりて見れば　一九
のぼればすゞし　三八
身はありながら　四九
たかどのの
内もあつさに　五一
うへまで松の　三三
すだれまかせて　三九
軒にさしいる　一三
まどおしひらけ　一五七
窓てふまどを　二六
をすまきあげて　三五
たかまやま　七
たからとも　二〇一
たけがりの　五九
たけのこの　一二八
たゝかひし　一三九
たゝかひに
かちてかへりしいくさ聯　三三
かちてかへりしつはものゝ　一三三
身をすつる人　九七

手綱かいくり　四
のるひとの　五三
のるひとは　一五七
のわきだつ
雲のひまより　一五三
ゆふべの空に　四三

は

はからずも　七七
はぎのとの　五五
はしゐして
風をまてども　三三
水無きかむと　六八
はしゐせぬ　一五〇
はたゝがみ　一三九
はたつもの　二一
はちすばの　二
はてもなき　一四七
はながめに　二二七
はなぐはし　二二四
はなざかり　四七
はなちたる　五五
はなどきの　一〇一
はなとりの
いろれは常に　七〇
上も思はで　七〇
はなのいろも
およばぬものは　三六
まだみえそめぬ　六八
はなのかげ　一四七
はなみつゝ　一〇七
はなもみぢ
うゐわたしたる　八七
なほうゐをへよ　八一
はゝがてに　一四六
はまどのの
入江のあしま　四三
入江の橋は　七七
宴のまうけ　一二六
園にさくらを　一六九
庭のいけ水　一七
庭の眞砂路　七一
庭のものとも　四九
花のうたげを　一〇二
はやくより　一七三
はらふべき　三三
はりがねの　九九
はりまがた
舞子の濱に　七八
舞子のはまの　六一
はるあきの　一六〇
はるがすみ
たちなかくしそ　二九
たなびく山は　一六
はるかぜに　二九
はるかすみの
吹かぬあしたに　一七〇
ふきのまに／＼　八
はるかすみ
ふくこゝちして　二七
よきてふくかと　一六
はるかなる　一三六
はるかにも　一五五
はるごとに
うたげのにはに　六九
うれしきものは　四六
はるさむき　四七
はるさむみ　一六九
はるさめに
ぬれたる花を　六八
みどりはそひて　三四
はるさめの
なごりの風に　三七
なごりの露を　一〇三
はれまになり　七
ふりいでざらば　六九
ふるにつけても　六八
ふる日しづけき　三七
はるのたつ　一〇四
はるののに　一四七
はるのひの　一七
はるのよの
おぼろ月夜の　二
月はまことに　一四
はる／＼と
風のゆくへの　一五一
見わたす沖の　一七八
はるふかき　七
はるもやゝ　一八一
はれてのち　一八四
はれまなき　五五
はれまなく　一一
はれわたる　四八

ひ

ひがしやま　五七
ひがひとる　一九六
ひさかたの
あまつ空にも　七九
あめにのぼれる　一三
雲居のにはに　四六
空にありながら　一四
空はへだても　一三三
空吹く風よ　一七四
空ゆく月も　七
むなしき空に　六〇
ひさしくも
いくさのにはに　九七
わが飼ふ馬の　一六七
ひとあまた　六〇
ひとえだは
もみぢしにけり　六
なりにかへらむ　一五五
ひとえだを　一九四
ひときにて　一〇六
ひとごとに　二六
ひとしきり　一七
ひとしげき　一一八
ひとしめり　一九五
ひとすぢを　一〇六
ひとたびは
花もさくべく　一四六
見むよしもがな　一七〇
ひとならば　一六三
ひとのよの　二一八

ひとはみな　三〇
ひとひらの
かたをしるべに　二六
地圖ひらきみて　八七
ひとみなの
えらびしらへに　二〇一
おどろきがほに　一一〇
月まつ夜なり　七九
花をかざして　四〇
惜む心は　一四八
ひとむらと　三八
ひともわれも　七
ひとりして
いくらの小田を　一五五
うちゑまるゝは　三四
靜かにきけば　一八七
早瀬をくだす　一六四
ひとりたつ　九三
ひとりつむ　一二五
ひとりみを　六四
ひとをして　五七
ひなづるは　八五
ひなをさへ　一二〇
ひにそひて　一
ひにやけし　四九
ひのもとの　一四三
ひむかしの
海よりいでゝ　三六
みそらしらむと　一五八
都の空も　一〇四
ひもとかむ　三一
ひらかずば　一五八
ひらくべき　二三三
ひらくれば
開くるまゝにいにしへに　一九〇
開くるまゝに思ふかな　八一
ひらけゆく
ときにいよいよ　一六九
世のさま見れば　二四
ひろき世に
たつべき人は　一九〇
まじはりながら　二〇四
ひろくなり　二三四

ふ

ふかからぬ
あきだに物の　七五
庭の草にも　一〇
ふきあけの
園生の梅や　六八
そのふの花を　七〇
瀧にてる日の　五七
まつのあらしも　一一〇
ふきおろす
嶺のあらしにさまざまの　一五五
嶺のあらしに山里は　四四
ふきさそふ　一八四
ふきまよふ　一三九
ふくかぜの
おともきこえぬ　六〇
音をきくにも　二二五
ふくかぜも
たえず通ひて　七三
のどかなる世の　七九
ふくかぜを　一〇三
ふけゆけば
いよいよ寒し　二
きえこそまされ　一三三
ふじのねに
匂ふ朝日も　一〇〇
初雪みえて　七五
ふじのねも
はるかに見えて　一六
見えずなりにけり　二一
ふたこゑと　一二七
ふたゝびの　一三一
ふづくゑに　一九七
ふづくゑの
ふみはちれども　五七
もとにかゝぐる　一五一
ふでとりて　八六
ふなづくり　一二
ふねうけて
昔あそびし　一七二
をさなあそびを　一三
ふねならで　一五六
ふねにして　一八七
ふみみれば　六五
ふみわくる　一三三
ふむことの　一五〇
ふゆがれの
芝生の庭　五三
にはのしばふは　二〇
ふゆのよの
寒さをしのぐ　一四
はれたるそらの　四六
ふゆふかき　一六
ふりつゞく　五五
ふりつもる
梢の雪を　一八
雪のあしたも　七九
雪のひろ野に　一三三
雪をしのぎて　三〇
雪わけがたく　五九
ふりにきと　一八七
ふるあめは　七八
ふるさとと　七
ふるさとの
老木の松は　八五
かきねに今も　一六
かきねのすゝき　七〇
春日の野邊に　七九
木々の落葉の　四
高雄の紅葉　一五七
にはの池水　四九
庭の老松　八三
軒端のさくら　五〇
花橘を　五一
花のさかりを　三三
ふるき柱に　一五五
ふるさとを
とひてし人に　六一
遠くはなれていくさ人　一四

波のそこなる　一三四
波のよそにも　一一九
ほかまでにほへ　三三
わたどのの
下ゆく水の　二三
窓に枯木の　一五六
わたなかに　八六
わたのはら　五四
わたのみも
露にしめりて　七六
やゝゐみそめて　一六四
わらはべが
つくりあげたる　一八五
まなびの道の　六五
われもまた　一七六

ゐ

ゐをまきて　二七七

を

をぐるまの
あとさき守る　六三
うちよりきけば　一〇
すぐるまに〳〵　一七〇
めぐるまに〳〵　一四一

をすき巻きあげて　一
をさなくて
住みし昔の　八三
見し世の春を　一四八
をさなくも
選びけるかた　一三八
またぬ春なし　七〇
をさなごが
手にもあまれる　一八九
ものかく跡を　一八九
をさなごに
うたはれてこそ　一七六
つませまほしと　一四六
ひとしくなれる　二二三
をさなごの　一六五
をさなごを　一二三
をさまれる　一四八
をさめしる　二〇三
をしねほす　一九六
をしへある　四五
をしへぐさ　二四
をすのとに　二七
をちかたに　一四七
をちこちに
わかれすみても　二〇三

尾花なみよる　一七三
をちこちの
賤守るひと　九九
野山のむしも　三九
をやまだの
昨のほそ道　一三四
ときのけぶりも　四四
をしねかるべく　五五
をやまだに　二〇九
をやみなく　二二六
をり〳〵に
おもひぞいづる　六三
庭の草木は　二一八
をゝしくも　一三

明治天皇御集索引終

道しる人に　二七八
　道のたかねを　三六六
ことわざに　三五八
こにまごに　三三七
このあした　三八五
こ[illegible]　[illegible]六
このうちを　二六三
このけしき　三六四
このはみな　三一八
このはるも
　うたげすぎぬと　二八〇
　みゆきにあはぬ　三三五
このまにも　三〇六
このやどの　四一八
こむとしの　二九八
こむとしも　二七四
こやちかく　三七八
こよひまた　三五〇

さ

さえわたる　三三〇
さかえゆく
　いがきの松に　三七四
　老木のまつは　四一七
　御苑の松に　三四一
さ[illegible]　[illegible]
さかりぞと　三七六
さきつゞく　二六四
さきにほふ　二八三
さきみてる　三一六
さ[illegible]　[illegible]
さくはなの　三五九
さくらぎに　三五三
さくらさく　三一七
さくらちる　三五五
さくらゐの　二八六
さゞえとる　三三三
さゝげたる　三〇八
さゝげむと　三三四
さゝげもつ　三一七
さゝのはに　二六三
さしのぼる
　朝日のどけき　三一三
　月の光は　二〇八
さつまがた　二四一
さとかぐら　三三一
さとがはの　二九一
さとのこが
　拾ひのこしゝ　二七八
　椋の實ひろふ　二八三
　小笹おむなる　[illegible]
さとのこに　二六九
さとゐせし　三三四
さはるかと　三四〇
さびしさも　二四七
さま〳〵の　[illegible]
さみだれの　二八一
さむきよに　二五一
さむしろに　三六〇
さやかなる
　雲居の月に　二四八
　聲こそのこれ　四一九
　光をつゝむ　三七一
さやかにも　三七一
さやけさに　三三五
さよふけて　二八三
さらにまた　四一九

し

しきしまの
　大和心を　三六五
　やまとことばの　三四三
　やまと詞を　三三九
しきわたす　二七〇
しぐれする　二五一
し[illegible]　[illegible]
しげりたる　二九四
しじみとる　二六七
したかげに　二五三
したしくも　三三三
し[illegible]　[illegible]七八
しづかなる
　心にも似ず　三三三
　春の海原　二五四
　やどにすめども　二四一
　世のとしなみは　三六三
しづけさに　三四七
しづのめが
　米とぐ桶に　三六八
　手にまかせぬる　三三九
しばしとて　三三五
しひしばの　二九〇
しまかげに　三一七
しもさゆる　三一六
しもふかき　二七四
しもふりて　二八三
しもむすぶ　三五七
しもをへて　四一六
しらかはの　三一三
しらぎくの　二六六
し[illegible]　二五三
しるしらぬ　三三六
しるひとの　二八四
しろしめす
　大御國内に　二六三
　國[illegible]　二七四
　國やすかれと　三四九
　み國のうちと　三八一
しろたへの
　麻のふすまの　三〇九
　衣のちりは　三三〇
しろぬのを　三一五
しろのかげ　三四八

す

すきかへし　三五五
すぎたるは　三三〇
すぎぬれば　三二八
すぎむらの　二九〇
すゞなさく　三一〇
すゞみせし　三八七
すゝみゆく　二四四
すだくかの　二四七
すみしよに　三四七
すみしよの　三三五

うけもちの　五六一
うごきなく　五六四
うしとても
君につかふる　四四一
身をば何處に　六〇四
うたゝれの　四七三
うたたちの　五八九
うちひさす　五〇七
うちむれに　五五〇
うちもねず　四九二
うつくしき　五〇四
うつしおきて　五七六
うつそみの　五三三
うつゝにと　五〇四
うづみびの　五一五
うづもれぬ　五九四
うづらなき　五一六
うなばらに　四九九
うなばらや　五七二
うみならず　五九二
うゝきまを　五一九
うめのはな　五三三
うもれぎに　五一六
うらおもて　五九七
うらめしな　四六九
うれしさに　四八八
うれしくも　四八九
うれしさを　四六〇
うゑおきし　五四七
うゑたけの　四九七

お

おい臥れば　四九五
おいらくの
いのちのあまり　四五一
親の見る世と　四七四
白髪までに　四四〇
おきつとり　五一四
おきつなみ　五五五
おきていかば
妹戀むかも　四九五
妹はまがなし　五一五
おきゐつゝ　四一五
おくまへて　五五三
おくやまの
いはかげに生ふる　五五一
おどろが下を　四三一
八つをの椿　五五三
おくらゝは　四六一
おくれじと
思ひし道も　四八一
常のみゆきは　四五一
おくれても　五三五
おくれゐて
思ひやるこそ　四五一
こひはくるしも　五一五
われやはこひむ　五四二
おこたらず　四三四
おしてるや　五〇二
おなじくば
衰へざりし　四四二
共に見し世の　五四八
おのがみの　六一一
おのづまを　四九七
おふしたてし　四七三
おほうみの　四四四
おほかたの　六〇四
おほかたは　五六三
おほきみの
みかさの山も　五六五
みことかしこみあの雲の　四三八
みことかしこみいそにふり　四三六
みことかしこみ出でくれば　四九六
みことかしこゝかなし妹が　四九六
みことにされば　四三八
おほきみは
千年にまさむ　四四四
ときはにまさむ　四四四
おほきみを　五六一
おほぞらに　四四八
おほぞらの　六〇一
おほともの
みつのはまなる　四九六
みつのまつばら　五四三
おほなむち
ゝ少彦名のつくらし　五七一
少彦名のよろしくも　五七〇
おほのうらの　四五七
おほふねに
妹乗るものに　五一五
まかぢしじぬき　四四六
おほふねの　五〇八
おほふねを　五一六
おほやまと　五九一
おほゐがは　四八三
おみのわざ　五五五
おもかげを　四八四
おもひいづや　五四九
おもひかね
入りにし山を　四三八
たばかりごとを　五五八
おもひきや
秋の夜風の　五〇四
[illegible]衣を　五五四
手もふれざりし　五八七
見るかひなしと　四六九
三代につかへこ　四四〇
虫の音しげき　四五二
六十ぢのあまり　四六九
山路の雪　四五三
おもひしる　六〇二
おもひやる　五三七
おもひやれ
心の水の　五八四
子を思ふ鶴の　四六三
雲のゐつゝも　五一八
ふるさとさへも　五三〇
まだ雪の手の　四六二
むなしきとこそ　五〇四
おもふこと
今はなきかな　四五九

黒髪ぬれて　五一四
この黒髪を　四七一
夜わたる月に　五〇〇

ね

ねがはくは　五八七

の

のがれても　四三六
のきちかき　五二〇
のこしおきて　四七三
のどかなる　五六三
のべにおふる　六〇二
のべまでに　五〇三
のぼりえぬ　四八六

は

はかなきは　五三三
はかなしや　五九九
はかなくて　四五一
はかなしと　四六八
はぐゝみし　五二八
はぐゝむも　四六四
はしきやし　四五〇
はちすばの　五九九
はなみむと　五三四
はまちどり　五七五
はやきせの　六〇〇
はるあきの　四三一
はるくさは　四七三
はるしらぬ　五二四
はるといへば　五三七
はるのはな　五四九
はるのよの　五三四
はるはなの　五〇〇
はるははな　四七〇
はるはもえ　五八二
はる／＼と　五四四
はる／＼に　五一七
はるひさす　五三五
はるふかき　四七〇

ひ

ひさかたの
　天の羽々矢の　五八八
　あめ見る如く　四五一
　天よりおろす　五六九
　つきの桂も　四六五
ひさにへて　五六七
ひたちさし　五一・
ひとおほき　五九三
ひとこゑも　五一三
ひとしれず
　身はいそけども　四九・
　物思ふ折も　四七一
ひとすがに
　思ひさだむる　六〇二
　ひとをも身をも　六〇二
ひとゝせに　四五五
ひとゝせも　四七一
ひとのおやの
　心はやみに　四六一
　心をやみに　四七一
ひとのこの　四七四
ひとのよの　四五一
ひとのよは　四六六
ひとばかり　五九三
ひとはよし　五一一
ひとひだに　五四四
ひとふしに　五三八
ひとへなる　六〇五
ひともをし　四三〇
ひとりねに　五〇四
ひのもとは　五六三
ひむがしの
　國ことむけて　五六五
　たきのみかどに　四五〇
ひろはたの　五八二

ふ

ふきかへす　五二八
ふしておもひ　四五〇
ふすまぢを　五〇三
ふたつなき
　こゝろをきみに　五四四
　理しらば　五九〇
ふたとせの　四五四
ふたばより　四六〇
ふたよとは　四六七
ふたりゆけど　五三一
ふでのあとに　五八三
ふなをかの　五四八
ふみよまで
　あそびわたるは　五七八
　なにゝつれ／＼　五七八
ふみよめば
　又たぐひなき　五七八
　昔の人は　五七七
　大和唐土　五七七
ふみわけよ　五七九
ふるごとを　五八三
ふるさとゝ　五二九
ふるさとに
　立帰るとも　五五二
　今宵ばかりの　五〇二
ふるさとの　四九・
ふるづかの　四七〇
ふるほども　五〇六
ふるゆきの　四四一
ふるゆきも　四四五

ほ

ほとゝぎす　五四七
ほど／＼に　六〇二
ほりえこえ　五四五
ほりえには　四五五

ま

まきばしら　四七三
まくらたち　五一〇
まこもぐさ　五九九
まさきくて　五一六
ますらをの
　心思ほゆ　五八六
　[illegible]のおとすなり　五・六

いくそふ道ぞ　六〇九
弓末振起し　五八八
ますらをは
しか待つことの　六一七
名をしたつべし　五九三
ますらをや　六〇七
まそかゞみ　五〇二
またれつる　五二六
まちえつる　四五九
まつがねの　五三六
まつにふく　四九〇
まつぶさに　五七六
まれびとを　五三五

み

みおろせば　五七七
みがゝれし　四五三
みかはの　五一五
みことのり　五七三
みさきわの　五三九
みしほどの　五五一
みずやいかに　五九八
みせばやと　五三四
みたみわれ　四四三
みちかはる　四五二
みちしあれば　五五五
みちのくの
安達の眞弓とりそめし　五八七
あだちの眞弓引く
やとて　五四〇
みちをしり　四五〇
みづかきの
そとものの宮居　五六二
久しかるべき　四四五
みづぐきの　四六五
みづとりの　四七七
みづのもに　四五三
みつるぎを　五六五
みてもなほ　五一三
みとらしの　五八七
みどりこの　四五一
みどりこを　五一六
みながみの　五九四
みなしごの　四八〇
みなひとの
祈る心も　五五六
こゝろもみだれ　五五七
みなひとは　四五三
みにかへて
思ふとだにも　四五二
花も惜まじ　四四九
みにつもる　四四八
みにはまだ　四八一
みのあとは　五七九
みのゝくに　四三九
みのはてよ　六〇七
みまくほり　五二三
みゝにきゝ　五八三
みやこなる　四八〇
みやこには
きみをみみこそ　五一七
誰をか君は　五四〇
みやまぎの　五九八
みやまには　六〇〇
みるからに　四八三
みるたびに
老いのなみたを　五八三
なみだぞおつる　五八五
みるふみに　五七九
みるまゝに　四七〇
みれどあかず　四四七
みをまもる　六一七
みをわくる　五四三

む

むかしいまの　四八三
むかしこそ　五〇二
むかしだに　四八八
むかしにも　四八八
むかしみし　五四九
むかしより　四五六
むぐらはふ　四五五
むこのうらの　五一五
むさしのゝ　五三〇
むすびても　五八二
むらきもの
朱をうばひて　五三五
いろに出でゝは　五二八

め

めぐりあはむ
たのみあるべき　五三一
頼みぞしらぬ　五五一
めぐりあふ　五一九
めぐるひの　四四五
めにみえぬ　五五九
めのまへに　五五五

も

もがみがは　六〇五
もとつひと　五四六
ものおもふ　四八七
ものごとに　四八七
もののふの
上矢のかぶら　五八八
おみのをのこは　四三七
これや限りの　五八二
手毎にもたる　五八九
とり傳へたる　五八九
八十氏文は　五七七
矢並つくろふ　五八八
矢ばせの母は　六〇三
弓矢とる名の　五八八
ものみなは　四四四
もみぢばの　五三六
もゝしきや　五八八
もゝたらず　五四七
もゝちたび　四四四
もゝちどの　五七〇
もゝちどり　五五四
もろがみの　四三四
もろこしの
楯もさかし　四七九
虎ふす野べに　六〇六

代々はうつれど　五七一
もろこしも　四六七
もろこしも　六〇八
もろともに
老にけるかな　五四五
君ぞ住むべき　四四九
きみと來ぬまの　三五六
越えましものを　四九三
苔の下には　四七一
ゆかぬみかはの　四六七
もろびとの　五六七

や

やきたちの　三三九
やくもたつ
出雲八重垣けふまでも　五八〇
出雲八重垣つまごみに　四九四
やすからぬ　五六三
やすかれと　四七四
やすみしゝ　五五三
やちとせの　四七三
やほよろづ
神もさこそは　五六七
[illegible]　四四五
やまかはの　六〇四
やまかひに　五三三
やまごしの　四四五
やまざとを　六〇五
やましろの　五三一
やまはさけ　四三八
やまぶきの
花とりもちて　五三九
花のさかりに　三五五
やまぶきは　五五五
やみのよの　四九六
やゝつもる　四七五

ゆ

ゆきふりて　六〇〇
ゆきめぐり　五五五
ゆくすゑに　四八八
ゆくすゑの
ためしとけふを　五二七
名をこそ思へ　五八五
ゆくすゑを　五五七
ゆくへなき　五〇五
ゆたかなる　五七三
ゆふかけて　四三六
ゆめ[illegible]　四五八
ゆめならで　五四八
ゆめにだに　四八二

よ

よくゆきて　五四五
よしあしに　六〇一
よしさらば　四八〇
よそにのみ　四四五
よそにみて　五一一
よそ[illegible]ゝ　四七四
よつのふね　四三三
よつのをの　四九一
よにふるく　五八一
よのうさも　六〇六
よのためも　四五七
よのなかに
うれしきものは　五三四
思ひあれども　四六一
さらぬ別れの　四九三
[illegible]　六〇六
ふるかひもなき　四九〇
よのなかは　五九五
よのひとに　五九一
よのまもり　五五八
よはこゝに　四八七
よ[illegible]　四一二
よもやまの　五八八
よゝたえず　四三三
よゝのおやの　五九四
よるのたづ
みやこの内に　四六三
やみになくねを　四七一
よろづよの　五三三
よろづよを　四三三
よをいのる　四四一
よをうしと　六〇一
よをまもり　四三七
よをさむみ　四三九
よをすくふ　四三〇
よをすてゝ　六〇五
よをはかる　五八七
よを[illegible]　五七三
よをわたる　六〇一
よををさめ　四三三

わ

わがあとを　五〇六
わがいのち　五〇八
わがおほきみ　五三六
わかきみが　四二六
わがきみの　五一[illegible]
わがきみは　四四八
わがきみを　四三三
わがくには　五六九
わかければ　四六七
わがこゝろ　四三三
わがせこが
國へましなば　五四二
來べき[illegible]也　五一七
[illegible]の山吹　五五五
わがせこと　五〇七
わがせこは
いづく行くらん　五一一
玉にもがもな　五四一
物な思ひそ　五〇七
わがせこを
都へやりて　五一[illegible]
大和へやると　五三一
わがせなを　五一七
わが[illegible]に　四六八
わがつまは　五〇〇
わがつまも　四九五
わかのうらに
子を思ふとて　四五六
ひとり老いゆる　四五六

勤王諸家詩歌集索引

詩集の部

あ

秋月胤永
戰後述懷　七三八
安積艮齋
詠史　六五五
登筑波山絶頂　六五五
春初書感　六五六
富士山　六五六
墨水秋夕　六五六
瀑　六五七
朝川善庵
草廬三顧圖　六三三
歸家　六三三
安積五郎
劍舞歌　六八一
逸題　六七九
新井白石
自題肖像　六二四
紀司馬溫公上和宮詞
讀　六二四

い

伊藤博文
飲菜樓　七三一
新年作　七三二
松下村塾　七三一
石狩客次　七三三
長崎客中作　七三二
將謁伊勢大廟有作　七三三
入江九一
偶作　七〇二
揚屋幽居中作　七〇五

う

梅田雲濱
訣別　六四三
逸題　六四三

え

江藤新平
逸題　七一六
雜詠　七一六
萬延庚申五月五日　七一六

お（を）

荻生徂徠
寄題豐公舊宅　六二四
小原鐵心
偶述　七〇九
戊辰作　七一〇
際會伏見之變　七一〇
受藩命守江戸灣時作　七一一
守衛京師　七一一
大久保利通
下道州偶成　七三六
過履門偶題　七三七
宿龜山陣營　七三七
偶成　七三七
大鹽平八郎
四十七士　六三三
大槻磐溪
楠公湊川戰死圖　六八一
春日山懷古　六八一
武田信玄　六八一
西郊歸路望嶽　六八三
平泉懷古　六八三
太田道灌借簑圖　六八三
大槻磐溪
銚港雜詠　六八三
佛郎王詞　六八三
大島圭介
詠日本刀　七一七
大沼枕山
楠公訣子圖　六八三
癸丑元旦口占　六八四
東台春興　六八四
大橋訥庵
題槍　六八六
獄中作　六八六

か

勝安芳
逸題　七一七
偶成　七一七
河野鐵兜
芳野　六六四
詠史　六七九
蒲生君平
逸書　六二五
無題　六二五
無題　六二五
龜井南溟
鹿兒島客中作　六一七
賀陽豐年
高士吟　六二一

き

菊池溪琴
河内路上　六六七
丙午仲秋賞月子由　六六七
良港　六六七
三樹酒亭與藤島子
鼓岡城　六八六
木戸孝允
偶成　七二四
戊辰作　七二五
失題　七二五
丙寅早春到浪華　七二六
潛行過天王山下　七二六

く

日柳燕石
春曉　六九五
長谷川人間本邦　六九六
楠公　六九六
不盡庵主人山圖　六九七

製封册　六二五
蒙古來　六三五
謁楠河州墳有作　六三六
過櫻井驛址　六三七
下筑後河　六三八
前兵兒論　六三〇
舟宿暗門　六三二
中秋無月侍母　六三一
賴春水
贈高山彥九郎　六一七
擬送人從軍　六一八
牡丹　六一八

歌集の部（其の一）

あ

青海原　七五五
青雲の
　たなびく極み　八五四
　—向伏す極み　七七〇
あかねさす　八三六
秋風に　八〇六
秋暮れて　八七八
秋なれば　七六五
秋の夜の　八五一
秋ふかみ　八七七
明らけき
　—神の御前に　八八五
　君に類へて　七三七
あけ暮に
　憂き事のみを　七六二
　—御國の事を　八〇一
麻縄に　七五四
朝夕に
　手をば放たぬ　八八二
　—手なれし物と　八五六
　—母の命は　八一九
　—見れば心も　八三八
あしかりの　七四九
芦田鶴の　八一四
葦原に　七九〇
芦原の
　—ひとりをのこの　七五五
　瑞穗の色も　七七三
あしはらや　八七三
明日またで　八六三
敵（あだ）あらば　七六五
あだし野の　八〇八
仇波の　八七三
仇に向き　八五三
仇まもる　七一八
梓弓
　—今は取る身に　七六四
　君が御稜威を　八六六
　—心の底に　八六〇
　—[illegible]振り起し　七四七
　—はる立つ風に　七九七
　—引きてかへらぬ　八四六
　眞弓もあれど　七四八
　本末たゆ[illegible]　八八一
　八重の圍に　八四六
　—矢たけ心の　七五四
　—矢たけごゝろを　八二七
あづま路の
　野邊の若草　八〇四
　—花と散るとも　七七二
　—武藏の春は立ち
　にしと　八三九
あつまれば　八七二
あな嬉し　八〇〇
あなかたに　八五四
あな悲し　八〇七
淡海の海　七四六
あはれ我れ　七八六
あな見れば　八七三
逢ふ事は　七〇四
仰ぎ見る　八二一
海士小舟　七六四
天翔り　七九九
天がける　八三六
天飛らし　七五三
天つ風　八三七
あまつ空　八八三
天の戸を　八一四
天つ日の
　照らさむ限り　七六〇
　—照らす限りの　八六三
　—御影を掩ふ　七五四
天の原　七四七
雨あられ　八〇四
天が下　七五一
雨風に
　—散るともよしや　七六七
　おのが命を　八二六
天地と
　—共に久しき　七七九
　—共に久しく　七七五
天地に　八二四
天地の　七七五
天地も　八一七
天の下
　思ひ比べて　七九三
　—きよく拂ひて　八三三
　—人の數きも　八一八
天は父　八六九
雨晴れて　七九〇
あゆち潟　八一四
あらし吹く　八一五
嵐山　八四九
あら玉の
　年立ち歸る　八四八
　年の初めを　八六三
嵐ふけ　八〇四

ありとある　八六九
生れ出でし　七五五
荒寺の　八七五
荒れ果てゝ　八五六

い

いかさまに　八七〇
如何なれば　八六三
如何にして　八八一
如何にせむ　八六三
いくそたび　八五〇
幾度か
―今年ばかりと　七九五
―都のわらべに　七六九
幾度も　七七五
いく年か　七八一
いく春か　八四一
潔く
―消え果てもせで　七七一
―血潮となりて　七九八
いざ子ども
―暫しは忍べ　八〇六
―馬に鞍置け　八七四
いざさらば　八〇四
いさましや　七五三
石の上　八一〇
いそがねど　七七四
五十三次　八六四
いたづらに
―死ぬるものとや　八四三
―散る櫻とや　八四七
いつしかも　八三三
いつまでか
―斯くて歎きの　八七〇
―斯くてふるやの　八七二
―曇り果つべき　八三六
何時も出で　八七一
出づる日の
―方を仰ぎて　八六〇
―光輝く　八一三
いでましを　八一八
いとゞしく　八四三
厭はじな　八五七
古へを　八一五
古へに
―立ちかへりたる　七七九
―吹き返すべき　八〇一
古への
―御世にせむとて　八六八
―世にも返らじ　八一七
命だに　七九二
岩が根も　七九六
岩にだに　七九八
いは山も　八五三
いひ捨てゝ　八四一
家村を　八〇八
五百歳に　八五四
今こそあれ　七八〇
いまさらに
―如何で歎かむ　八四五
―肝こそ冷ゆれ　八三一
言の葉も　七六[illegible]
何を言にし　[illegible]
何をか言はむ言はずとも　七七八
何をか言はむ大丈夫の　七六一
―何をか言はむ武藏野の　七六五
[illegible]の
―うちに此の身は　八八五
―纏は血潮に　八二八
今ぞ知る　七五二
今の身に　八二五
忌はしき　八〇五
今は唯だ　八五七
今はとは　八七〇
いまはには　七五三
今は早　七五九
いや猛き　八三三
今よりは　七六六
色香をば　七七四
色に出でゝ　八〇七

う

憂かりける　八五九
うき雲を　[illegible]
浮雲の
―[illegible]　七六一
―掛らば掛れ　八八一
―[illegible]　八二一
うき[illegible]　七七八
憂きことを　八四九
憂き事の
―木の葉と積る　七七八
―身に積りなば　八三五
憂きと云ふ　八〇〇
うき[illegible]　八六〇
憂き中の　七九七
憂きにこそ　八三〇
浮橋の　八八六
鶯の　八一二
鶯も
―爽なまりの　八六三
―君の御爲めと　八七八
動きなき　七九五
動きなく　七七六
薄もみぢ　八〇四
うち攘ふ　八〇六
打日さす　七七六
うつし世を　八六八
うつゝとも　八〇〇
討つ人も　七六一
うづもれて　七九五
上衣は　八六六
烏羽玉の　八〇三
海の底　七六一
海山に　八五七
梅のはな　七五七
埋木の　八八七
うらうらと　七四九
うら安く　七六四
う[illegible]　八六七

え

蝦夷島や　七五九
えみし討つ　八四八
えみし攘ふ　七九三
夷らを
―斬りつくさむと　八〇三
えみし等と
―攘ふ思ひの　八六三
・著き夷の　八六五
―共に東夷も　七八七
えみし等に　八七〇

お

老いぬれど　七七六
雄々しくも　七九七
惜しからじ　八四三
忍坂の　七四五
起き出でゝ　八六八
置き處　八七七
奥山の　八六五
小倉山　八八三
後れ居て　八五三
おくれじと　七四七
後れても　八七九
後れなば　八一六
おしなべて
―惜しまるゝとも　八三〇
・曇り果てたる　八〇九
惜しまれて　八五四
惜しけども　七五四
慣ひ來む　八五一
恐ろしき　八七一
おちて行く　八五四
香に聞く　七七七
少女子が　八五七
鬼神も
・恐れ[illegible]我れも　八六二
―泣かざらめやは　七九四
鬼さへも　七六五
をのこはも　八五五
追風に　七六四
生ひ茂る　八一三
負氣なく
―御代の歎きも　八三三
―向ふ夷の　八一八
大内山　八一〇
大内山の　七七五
大君を　七四八
大君に
・―つかへさゝぐる　七六五
―仕へまつれる　八八三
大君の
―内外のよそひ　八五六
・おほき御言の　八三三
大御心をそよと
だに　八八〇
・おほ御心をやす
めずば　八四一
大御心を休めん
と　七八七
―憂きを我が身に　八一七
―憂き御心を　七九六
―魂の御楯と　七八二
ためには何か　七六四
―常世に坐さむ　八一八
―まけのまにまに
天地と　八一八
―まけのまにまに
一筋に　八八〇
―御心やすむ時は
いつ　八四五
御言おそれに　七五四
―勅かしこみ　八八七
―みことに背く　八七五
―御楯とならむ時
待つと　七六七
―御楯とならむ身
にしあれば　八八七
―御楯となりて　七八〇
―御爲思ひて　七七四
御爲と思ふ　八六四
―御爲とならば　七五六
―御爲なりけり　八四七
―御代かはるべき　八六九
―御代はとこしへ　七七三
大君は
―如何にいますと　八八〇
神に座せば　七四六
おほけなき　八五六
おほけなく　八八六
大空に　八〇五
おほ空の
月の光は　八二九
―掩ふ限りは　八一八
大前に　八〇七
おほみため　七九〇
大船の　八八一
おもひかね　八八五
おもひきや
―檻のひま洩る　八三三
―数ならぬ身の　八六四
消えなむとせし　八〇〇
―心しづかに　八四二
―心のはしの　八三五
―汐の八百路を　八五四
―山田の案山子　七八七
思ひ立つ　八六六
思ひつる　八七七
思ひ出も　八五〇
思ふこと
言にて唯にぞ　七四六
―うたで敦賀の　八〇三
―大内山の　八八六
―成りもならずも　八五四
―晴るゝしるしか　八〇五
一つも神に　七五五
思ふさへ　七五一
親を思ふ　七六三
親々の
―受けし恵を　八一七
―親より受けし　八一八
親と子の　八五五
小山田の　八八七
愚かなる
身にも[illegible]　八三六
身にも[illegible]　七九九

―我れにしあれば　八六一
おろかにも　八五一

か

斯かる子を　八一一
かゝりきと　八〇〇
書を遣る　七九一
かきくらし　八一五
かきくらす　七五七
掻き鳴らす　八〇一
かぎりある　七六六
限りなき　七七四
かくすれば　七六二
斯くて見る　八二三
斯くとしも　七五九
斯くばかり　七七〇
斯くまでに
―青人草を　七七五
―思ひ暮せば　八四六
―皇御國を　七九四
かけまくも　八七八
かげろふの　八三〇
かしこくも
―天の磐屋戸　七七二
―浮世の月は　八八四
―昔の御夢に　七六三
―賤つくしに　八八三
―古き昔を　八六〇
龜の尾の　七八五
樫の實の　八八三
數あらば　八八四
數ならぬ
―野ずゑの草も　八六九
―身とは歎かじ　七八〇
―身にしあれども　八三〇
―身にはあれども　七七〇
―身にも心の　八八七
―身のなる果ては　八六八
―我身ながらも　八七七
風寒き　八三四
風たゝぬ　八三六
風に散る　八六九
かぞいろの　七八六
片絲の　八一五
片敷きて　八〇四
形見とて　八四三
梶をなみ　七八三
かち踏ゆく　七六〇
悲しくも　八八一
悲しきや　八八一
鐘の行く　八一一
眞文字を　七六六
鐘つきて　八四四
かねてより
―思ひ定めし　七七九
―思ひ染めにし　七五七
―捨てし身なれど　七七二
―立てし心の　八五七
―仕ふる君の　七八八
川上の　八二六
かばねをば　八六七
かばねには　八二三
川の名の　七九三
かへせとの　八四一
かへりみる　七六一
神あがり　八八八
紙を食ふ　七五五
神風を
―そがひに負ひて　七九九
―なに疑はむ　七七〇
神風の　八六七
神から　七五〇
神國の　八一一
神無月
―あはれ時雨と　七六九
―木々のもみぢと　八四三
神ならで　八〇五
かむろぎの　七七八
龜の尾の　七四八
賀茂川に　七六七
樫の實の　七八三
繪圖の　八七六
かく人か　八七六
假りの世に　八〇三

き

聞きてだに　八五八
清水の　八四一
瑕のなき　七七二
來て見れば　八七四
昨日まで
―嵯峨の山路に　七九一
―露もいとひし　八五四
君を思ふ　八六九
君臣の　八六九
君が住む　七七七
君がその　七九〇
君が爲め
―赤き心を　七八七
―あだし夢を　八一四
―いく田の森の　八一一
―急ぐ旅路の　七六七
―命死にきと　八〇六
―命しにける　七八三
―家をも身をも　八五八
―思ひし事は　八四五
―思ひ殘さで　八四七
―思ふ甲斐なき　八二三
―思ふばかりに　七六九
―堅き心は　八八三
―かばねを山に　八八六
―沈む閨屋は　八三一
―捨てむ命を　八五三
―散りし若木の　八八五
―盡しゝことの　七七七
―つくす心のすぐなるは　八五八
―つくす心の十寸鏡　八〇九
―盡す心は　七八一
―つくせや盡せ　八三一
―つもる思ひの　七九一
―囚はれぬとも　八〇三
―深き海原　八六六
―何か惜しまむ　七七五

―誠の道や　八一四
―御國の爲に盡す
とて　七九八
―水にも火にも　八一四
―都の空に　八三五
―昔も斯くと　七五三
―矢竹心の　七八六
―世の爲よしや　七七二
―我が里を出でゝ　八四六
君が名を　八三六
君が名は　八二〇
君が見し　七八六
君が代を
―思ふ心の　八一四
―ひきかへすべき　七九三
―何に譬へむと　七〇七
―我が世と思ふ　八八二
君が代の
―榮ゆく色や　七五一
―千代をことほぐ　八二六
―千代を手にとる　八二六
―盡きぬためしと　八六四
君が代は　七八三
君と臣の　八五七
君と親に　七九一
―君の爲め
挑むけたむと　七七七
―國の爲めとし　七三三
―國の爲には惜し
からじ　八五九
―國の爲には盡し
てむ　七七七
―心つくしゝ　七八五
皇國の爲めに　八六一
―盡しゝ事も　八二一
―盡す心は　七九六
―ひそみ行く身の　八四〇
―御國の爲めに玉
の緒を　八〇二
―世の爲め思ふ　八三六
君も臣も　八五四
道義なき　八一五
清からぬ　八三三
切にぞ晴れ　七七〇

く

草のうへに　七七四
草の葉に　八六二
草も木も　八七七
孔子の文　八一三
樹の木の　八五六
砕けても　八三三
口に愛でし　八三五
朽ちぬ名を　七八四
國家の　八六三
國を護へ　八一七
國を寂し　七七八
國を思ひ　八五二
國を思ふ　八三五
國汚す　八五三
國つ文　八八八
國に報い　八七〇
國の爲
―岩秀も砕く　八〇九
―討たれし人の　七六三
―思ひ國めし　八一七
―念ずることつる　八五二
―思ふ心の　七七七
―靖かる憂き目に　八五五
―かゝる縫目の　八七八
―さきがけせしは　八〇九
―契りし事も　八三四
―盡し難しい　八一〇
―積る思ひも　八二三
―身をつくしてと　八〇七
―世の爲めせちに　七八五
―世の爲め何か　七六七
―我がつく息の　八六七
くはし戈
―千足の國の　八八八
千足るの御衣に　八六一
濯ぎ干さば　七六八
雲を踏み　八〇八
雲かゝる　七七九
雲霧は　八四六
雲となり　七五五
雲に昇り　八二六
曇らずば　八二六
雲の上に　八六五
曇りなき
―月を見るにも　八一五
心の月と　七六四
―心の月は　七七六
―御代の恵みは　七六〇
曇るとも　七六七
苦しきは　八〇九
暮るゝと明くと　七六七
呉竹の
―みを食む鳥の　八八〇
―世のうきふしは　八三五
―世にすぐなれと　八六四
―ろかねの　八一八

け

今朝は猶　七六二
今日出でゝ　七六八
今日と言へば　八六八
今日もまた　七六六

こ

子を思ふ　七六九
木がくれて　八〇四
漕ぎ出づる　七五六
苔の下　七九一
苔むして　八七六
九重の　八八〇
心あらば
―暫時またなむ　八三四
―庭の草木に　八一七
―花に問はまし　七八五
心から　八四九
こゝろなき　八一四
心なる　七六三
心にも　七七九
心のみ　七九三

凄まじく　七七六
進み出で　八〇九
捨小舟　八二〇
捨てばやと　七五七
諏訪の海　八六七
すべらぎの　八三三
住み捨てし　八七七
隅田川　八七八
すみて居る　七五三
住み馴れし
ー人屋の内は　八三四
ー内屋のうちも　七六三
皇神の
ーつくり固めし　七八四
ーなほき道行け　七七二
皇國を　八三
皇國の
ーくに風知らぬ　八一五
ー柱となりし　八六三
ー御爲めに心　八四八
天皇を　八五八
すめらぎの
ー御國おもはゞ　八一三
ー御楯となりて　八一八
ー御爲め祈ると　七九六
すめみくに　七九三
すめろぎの
ー御門かしこみ　七五八
ー御心やすめ　八六三
ー御爲に死ねと　八五八
ー道にちまたは　七八一
ー御代を昔に　七七三
天皇は　八五三
澄める世を　八一六
すらすらと　八四七
駿河なる　七四九

そ

そのかみは　八三七
そのかみを　七八二

た

絶え絶えの　七九九
手弱女も　七五六
高知るや　七五九
高根には　八六七
高光る
ー日出づる國ゆ　七八四
ー日の御子　七五〇
高御座　八一七
たぐひなき
ー辟に鳴くなる　八五一
ー惠の露の　七七七
竹の杖　八一四
戰の　七八一
正さずも　八〇〇
たゞならぬ　八四一
立ちかへる　八一三
立ち竝ぶ　七四七
太刀佩くは　八五三
橋は　八七四
立ち別れ　七九三
立田川　七六五
手筒山　八四三
たづぬべき　七八九
龍の馬を　七七五
たてまつる　八七一
たとひ身は　八二九
賴むとも　七六八
旅人の　八二九
玉櫛笥　八六八
玉敷の　八一三
たましひを　七五六
たまたまに　七七〇
玉垂れの　七九一
たまちはふ　八六四
玉の緒の　八五六
玉の緒は
ー憂世の塵に　八六二
ー斯くなるものと　八一三
ーよし絶えぬとも
惜しからじ　八六四
ーよし絶えぬとも
一すぢに　八五九
玉の緒よ　八六二
玉鉾の　八七三
民草を　八七九
民もみな　八七八
垂乳根に　八五五
垂乳根の
ー數へも今は　八三七
ー二人の親に　七五四
誰もみな　七六六

ち

誓ひてし　八〇一
千里の海　七七五
父母に　八四二
千早振る
ー神の御國の　七五六
ー神代ながらに　八七七
ー人の醜草　七七五
勅なれば　八七〇
千萬の
ー軍ことむけ　八六五
ーやつこが國も　七八四
塵あくた　七九六
ちりひぢの　七六七
散る花に　八〇三
散るもよし　七六八

つ

東の間も　七五九
仕へつゝ　八三三
月影を　八四三
月さへも　八[illegible]九
月と日の
ー御旗の風に　八八一
ー昔を忍ぶ　八四九
月に掛かる　七八七
月の桂の　八三三
月も日も　八七四
つくしても　八〇一
筑波根の　八三八
蔦もみぢ　八六一

昭和三年一月二十五日印刷
昭和三年一月二十八日發行

（新註皇學叢書 第九卷）

不許複製
（全二十冊非賣品）

著作者 物集高見

發行者 川俣馨一
東京市小石川區竹早町三十二番地

印刷者 井上源之丞
東京市本所區番場町四番地

發行所 廣文庫刊行會
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
振替東京二八七九〇番
電話小石川(85)一〇五四番
三二六九番

凸版印刷株式會社本所分工場印刷